

福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻考古学専修
令和元年(2019)度 博士学位申請論文〔文学〕

古墳時代の武装と境界領域

2020

齊藤大輔

例 言

1. 本論は、2019年9月30日に福岡大学大学院人文科学研究科へ提出した博士論文である。学位規則（昭和28年文部省令第9号）の一部改正にともなう公開にあたり、2020年2月1日におこなわれた口頭試問および公聴会を受けた修正をほどこしたが、論旨に変更はない。
2. 各章を構成する論文の初出は、次のとおりである。いずれもその後の研究成果をふまえたうえで加筆、補訂したが、論旨に変更はない。

序 章 新稿

第1章 「古墳時代武器研究史のなかの刀剣研究」『古代武器研究』14 古代武器研究会（2018年）

第2章 「古墳時代中期刀剣の編年」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ』中国四国前方後円墳研究会（2017年）

第3章 『古墳時代中・後期鉄刀の基礎的研究』福岡大学人文学部平成20年度卒業論文（2008年）

第4章 新稿

第5章 『古代東アジアにおける鉄銚の系譜』福岡大学大学院人文科学研究科平成22年度修士論文（2011年）

「セスドノ古墳出土鉄製武器・武具の再検討」『九州考古学』86 九州考古学会（2011年）

「皇南大塚南墳副塚出土鉄銚の系譜」『福岡大学考古学論集2』福岡大学考古学研究室（2013年）

「古代東アジアにおける特殊鉄銚の系譜」『古代武器研究』11 古代武器研究会（2015年）

第6章 新稿

第7章 「岩戸山古墳出土の振り環頭大刀形石製表飾」『古文化談叢』81 九州古文化研究会（2018年）

第8章 「武装からみた善一田古墳群と6世紀の西北九州」『乙金遺跡群』23 大野城市教育委員会（2017年）

「元岡G-6号墳と鉄の武装」『元岡・桑原遺跡群30』福岡市教育委員会（2018年）

第9章 「鶏冠頭大刀考」『土曜考古』35 土曜考古学研究会（2013年）

「鶏冠頭大刀」『金鈴塚古墳研究』4 木更津市郷土博物館金のすず（2016年）

「金鈴塚古墳と銀の弓飾り」『金鈴塚古墳研究』5 木更津市郷土博物館金のすず（2017年）

「金鈴塚古墳と銀の銚」『金鈴塚古墳研究』6 木更津市郷土博物館金のすず（2018年）

終 章 「北部九州における装飾武器出土古墳の特質とその背景」

『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会（2014年）

「古墳時代後・終末期における武装具保有の実態 ― 境界領域としての北部九州 ―」

『九州考古学』94 九州考古学会（2019年）

3. 実測図の出典は各図版内に記した。機関名の後ろに蔵と記すものは、各機関で筆者が実測、撮影したものである。表やモデル図、分布図は原則として筆者が作成したものであるが、引用したばあいは出典を併記している。
4. 参考文献のうち刀剣にかかわる論文については、巻末の「古墳時代刀剣研究文献一覧」にまとめた。
5. 本論には、下記研究助成の成果をふくむ。
2010年度 財団法人高梨学術奨励基金調査研究助成（300,000円）
2017年度 山口大学科研TRY（若手研究者支援）プロジェクト（350,000円）
2018年度 山口大学基金 教員・研究者による研究プロジェクトに対する助成事業（180,000円）

目 次

■ 例 言

序 章 本論の目的と課題, 構成 1

第 I 部 武器の系譜とデザイン

第 1 章 古墳時代刀剣研究の課題 13

第 2 章 古墳時代刀剣の様式編年 43

第 3 章 鰐本孔鉄刀の性格と展開 65

第 4 章 外来系鉄刀の認識と儀礼 75

第 5 章 東アジアにおける特殊鉄鋒の系譜 85

第 II 部 境界領域の武器と武装

第 6 章 磐井の乱前夜の新羅系文物 121

第 7 章 振り環頭大刀の展開と王権 135

第 8 章 武装からみた西の境界領域 153

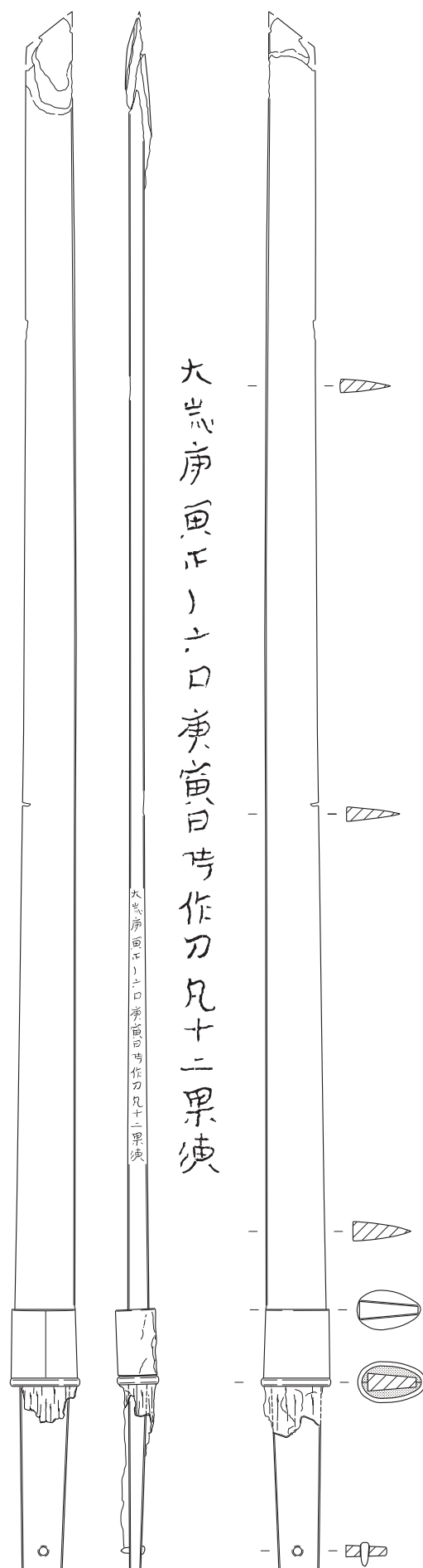
第 9 章 武装からみた東の境界領域 183

終 章 北部九州における武器保有の実態 213

■ 参考文献 (刀剣論以外) 236

■ 古墳時代刀剣研究文献一覧 242

■ あとがき 281



序 章 本論の目的と課題，構成

第1節 目 的

本論では、これまで近畿地方を中心に描かれてきた古墳時代の武器や武具，馬具の流通論にたいして，倭の軍事的な境界領域にあたる北部九州のありかたを検討する。これにより，①武器の流通には一定の地域性ないし地理勾配があること，②「武装とは何か」という根本的な命題にたいし，具体的かつ緻密な歴史像を提示すること，③さらにその構図を抽象的かつ普遍的なモデルに昇華させることによって，地域史を描くうえで汎用性のある理論を抽出することの3点を目的とする。

さて，歴史的にみて，地域と地域の境，すなわち「境界領域」が軍事の要であることは言を俟たない〔石母田1971，ブルース・バートン2000など〕。21世紀を迎えて早くも20年が経とうとするこんにちでさえ，東アジアにかぎってみても，日本，中華人民共和国，大韓民国，ロシア連邦をとりまく領土問題が最優先での解決が望まれる課題の一つとして残っている。日本国内における米軍基地をめぐる諸問題も，つまるところはこうした問題から派生するものである。

古墳時代研究においても，近畿中央とそのほかの地方（畿内中心主義史観），近畿中央と朝鮮半島，あるいは北部九州と朝鮮半島という二項的な交流史が各地で繰り返されてきた。しかし考古学的にみれば，こんにちの国境を越えた複雑な交流の存在はあきらかであり，各地の考古資料の冷静な観察と比較をつうじてその実態に迫ることができるし，近畿中央を介さない地方と地方どうしの交流があったことも石室や土器，生産用具の研究をつうじて鮮明となりつつある。

このような議論は一見，地域性やその折衷様式がつよく発現する考古資料だからこそ可能であるかのように見える。それでは地域型式がみえにくい武器や馬具は，こうした議論に何も寄与できないのだろうか。否，「可能」と考える。その細部は本論で再三論じることとして，以下に筆者の仮説を示しておこう。

日本列島の古墳時代に並行する3～7世紀の東アジア諸王権は，各々の資源と最先端の技術を活かし，王権を導く王や，対外交渉を担う役人の表象となる独自の武装様式を創出した。かつて西嶋定生が汎列島の前方後円墳築造の背景に想定した「擬制的同祖同族関係」〔西嶋1961〕を拡大解釈するならば，刀剣をはじめとする独自様式の武装は，中国王朝 対 東アジア諸王権という二項対立的な関係にとどまらず，倭王権中枢部と地方をむすぶ力学，すなわち「府官制的秩序」¹⁾や「ミヤケ制」²⁾，「部民制」などを担保する装置としても機能していた可能性がある。とくに本論のおもな対象時期とする古墳時代中・後期は，倭独自様式の武器や甲冑，馬具，鏡，装身具などが段階的に長大化，加飾化，多様化し，舶載品の刀剣や鏡に頼っていた地方首長の権威づけの体系が解体してゆく時期にあたる。筆者は，このような倭独自の武装体系ならびに「前方後円墳体制」〔都出1991〕を組み合わせた地方の統治機構の成長過程こそが，日本列島における初期国家形成期の内実と考える。すなわち，そのような統治機構がおおよそ範囲が「倭」の版図ということになる。そのばあい，現在の東北南部から九州南部までがその版図のほとんどを占めることになる。

ただし，むろんすべての地域がまったく同じ原理で管理，運営されたとも考えない。たとえば，本論に引きつけると，装飾大刀や馬具の諸形式の分布図を作成したとき，王権の中枢がある近畿地方のほか，北部九州や北関東に分布の核が認められるいっぽう，近畿とそれらの地域を結ぶ地域，すなわち東海や瀬戸内では錯綜したありかたを示すばあいが多いことも理由の一つである。

以上のような仮説に立ち本論では，北部九州，すなわち倭王権と東アジア諸王権との「境界領域」の特質

を、刀剣を中心とした武器に注目して論じる。とくに九州では、熊本県江田船山古墳の銀象嵌銘鉄刀や福岡県元岡G-6号墳の庚寅銘大刀、福岡県宮地嶽古墳の日本一巨大な金銅装頭椎大刀など国宝クラスの刀剣の出土、あるいは三累環頭大刀、三葉環頭大刀といった外来系環頭大刀の集中が知られる。これらは、倭の内的発展や、王権中枢と九州勢力の交流という枠組みのみで理解できるものではなく、朝鮮半島との境界領域という複雑な立地条件のなかで成立し得た産物である。古墳時代と同時期の東アジア諸国は、それぞれの資源と最先端の技術を活かし、みずからの抛りどころとなる独自の刀剣を創出した。それは、国を先導する王や、対外交渉人の象徴であった。とくに倭国の最前線である北部九州では、その性格がつよく発現したであろうと想像する。このような問題意識にもとづいて国境を越えた古代人の姿をあきらかにすれば、国際社会における日本の位相を考えるヒントが得られるだろう。

第2節 近年の古墳時代武器研究と、本論の立ち位置

第1項 近年の動向

近年の古墳時代武器研究の進展速度や、情報量の多さには目を見張るものがある。それは単なる個人研究の枠を越え、学史的な重要遺跡出土品の再整理事業をつうじて醸成されることが多い。その成果は、大部の報告書に掲載される高精度な実測図や写真、充実した付編考察として公開され、重要な知見や年代論が提示されるとともに、既存の学説や理論は容赦なく再検証、あるいは淘汰されてゆく。むろん、こうした循環は考古学が存在するかぎり無限につづくだろうし、考古学が学問でありつづけるために不可欠な営みである。

試みに、西暦2000年以降にすすめられたおもな再整理事業をふりかえると、前・中期では、熊本県マロ塚古墳、熊本県江田船山古墳、福岡県稲童古墳群、大阪府紫金山古墳、大阪府七観古墳、奈良県東大寺山古墳、奈良県五條猫塚古墳、愛知県志段味大塚古墳、茨城県三味塚古墳、後期では、長崎県鬼の窟古墳、福岡県山の神古墳、鳥根県上塩冶築山古墳、鳥根県かわらけ谷横穴、鳥根県古天神古墳、静岡県賤機山古墳、千葉県金鈴塚古墳、茨城県風返稲荷山古墳、栃木県益子天王塚古墳など、各地域を代表する古墳の名前がならぶ。必然的にそうした研究は、古墳時代史全体はもちろんのこと、当該地域の歴史を描く作業にも帰着するであろうし、帰着させなければならない。筆者も2010年代、金鈴塚古墳、賤機山古墳、元岡G-6号墳ほか、重要古墳出土武器・馬具の報告にたずさわるなかで、いわゆる「畿内中心主義史観」の限界を体感した。

第2項 「世代論」から読み解く古墳時代武器研究史〔表1〕

本項では、古墳時代武器研究史上における筆者の具体的な立ち位置を「世代論」のなかで表明する。これこそが本論全体の着想につながっているため、書き留めておく責任があると考えからである。ただし、古墳時代の武器・武具・馬具にかんする論考は総3,000編を超えているため、ここでは第Ⅰ～Ⅶ世代に分け、各世代の流行を整理するに留める。刀剣にかんする細かな研究史については第1章で述べる。

第Ⅰ世代 若林勝邦(1862-1904)、黒川眞道(1865?-1925)、高橋健自(1871-1929)、濱田耕作(1881-1938)、梅原末治(1893-1983)、後藤守一(1888-1960)、末永雅雄(1897-1991)、神林淳雄(1911-1945)に代表される第Ⅰ世代の武器研究は、明治・大正期の帝国博物館(1889-1900)・東京帝室博物館(1900-1947)(いずれも、現・東京国立博物館)や、東京帝国大学(1897-1947、現・東京大学)人類学教室、京都帝国大学(1897-1947、現・京都大学)考古学教室を中心に展開した、近代的な日本考古学の黎明に重なる。パーソナルコンピュータなど存在しなかった当時になされた東アジアレベルでの集成や有職故実をふまえた部分名称の設定、工学分析への配慮は、こんにち以上の学際性を秘めていた。

表1 古墳時代武器研究の世代区分

世代	活動期	主な研究者	キーワード
I	戦前	高橋健自 後藤守一 末永雅雄 神林淳雄	東アジアレベルでの集成 有職故実
II	1940年代～	江上波夫 小林行雄 小野山節 原田大六 瀧口 宏 大塚初重	皇国史観への反省 騎馬民族征服王朝説 馬具系統論 図化・編年方法の模索
III	1960年代～	増田精一 穴沢味光 町田 章 千賀 久 北野耕平 小林謙一 野上丈助 田中新史	東アジアのなかの刀剣論 馬装復元 甲冑製作にもちいられる技法
IV	1980年代～	福島雅儀 田中晋作 柳本照男 藤田和尊 尼子奈美枝 松木武彦 古谷 毅 滝沢 誠 岡安光彦 新納 泉 臼杵 勲 斎藤 弘 関 義則 瀧瀬芳之 杉山秀宏 宮代栄一	武器・甲冑出土古墳かみた軍事組織論 階層構造論 「帯金式甲冑」の認識 武器・甲冑・馬具の即物的な分類と編年 PHALANX — 古墳文化研究会 — の活動
V	1990年代～	清水和明 高橋 工 大谷晃二 菊地芳朗 内山敏行 水野敏典 桃崎祐輔 栗林誠治 重藤輝行 高久健二 鈴木一有 橋本達也	前方後円墳体制 網羅的な集成 三燕 東アジアレベルでの編年 実年代論 威信財 資料のフィードバック機構の確立
VI	2000年代～	阪口英毅 横須賀倫達 松尾充品 豊島直博 大谷宏治 高田貴太 高松雅文 橋本英将 野垣好史 深谷 淳 古川 匠 持田大輔	刀剣・甲冑・馬具の組立工程の解明 既存資料の再検討 専門化への兆し 器物を横断した技術論の分析
VII	2010年代～	諫早直人 田中由理 西嶋剛広 川畑 純 金 宇大 片山健太郎 初村武寛 田中佑樹 土屋隆史 平林大樹 齊藤大輔 松崎友理 ライオン・ジョセフ 神 啓崇 吉松優希	金銅製品研究の深化 専門化の細分 畿内中心主義への抵抗 地域史の再構築 さまざまな器財を網羅 研究の総合化にもとづく既存学説の検証

また日本統治時代（1910–1945）に，東京・京都両帝国大学の関係者，すなわち浜田，梅原ほか，関野貞（1868–1935），今西龍（1875–1932），藤田亮策（1892–1960），黒板勝美（1874–1946），原田淑人（1885–1974），谷井濟一（1880–1959），野守健（1887–1970），小泉顯夫（1897–1993）らが中心となって朝鮮総督府の下に実施した朝鮮半島の遺跡発掘調査の成果も，朝鮮半島と日本列島をむすぶ文化系統論への布石となっている。本論でも触れる慶州金冠塚や大邱達西面古墳群の報告書などはその典型である。

第II世代 小林行雄（1911–1989），原田大六（1917–1985），小野山節らに代表される第II世代は，おおきくは皇国史観にもとづく戦前の歴史研究への反省，あるいは江上波夫（1906–2002）による「騎馬民族征服王朝説」への批判精神に満ちた世代である。増田精一（1922–2010）による馬具系統論も，こうした潮流が萌芽させたものだろう。

第II世代最大の特色は，小林，小野山ら京都大学学派と，原田のような在野の急先鋒（先史研究の在野代表・相沢忠洋（1926–1989）も同世代）という，一見対立する雰囲気が出たなかで，馬具や甲冑の図化技法がたかい水準で確立されたことにある。とくに，建築学を修めた小林による遺物実測への真弧の導入や鉄器実測スタイルの確立，研磨工の経験に裏打ちされた原田による鑄造品の観察は，遺物の「似ている／似ていない」論からの脱却につながった。福岡県沖ノ島祭祀遺跡や寿命王塚（桂川王塚）古墳の報告書は，この世代の精華といってもよい。近代的な日本考古学の方法論（おもに遺物の資料化）が練磨された段階といえる。

第III世代 第II世代の方法論を発展させ，とくに甲冑の製作技術論や保有意義論について矢継ぎ早に展開したのが，北野耕平（1932–2010），小林謙一，野上丈助ら第III世代である。その最大の契機は，大阪府黒姫山古墳や野中古墳といった甲冑大量出土古墳の調査報告に求められるが，彼らの研究をつうじて，甲冑は古墳時代資料全体のなかでも，とくにたかい精度の変遷観をもち，当時の生産技術，社会構造，政治関係といったさまざまな側面をあきらかにしうることが認識された。関西をおもなフィールドとする三氏の研究は，倭王権こそが甲冑の生産と流通の中心にいたというこんにち的理解の直接の起源にあたるが，関東においても，甲冑からみた畿内と地方の関係に言及した田中新史の研究が注目される。

刀剣研究では，町田章（1939–2011），穴沢味光らによって，中国王朝を中心とした環頭大刀文化拡散の構図が描かれた。これによって刀剣は，古墳時代研究のなかの特定遺物の分析に終始すべきものではなく，

東アジア古代史の構造を紐解くうえできわめて有効な資料であることが明示されたのである。

いずれも、高度経済成長期（1960–1970年代）の爆発的な遺跡発掘調査の増加が可能にした、列島レベルでの遺物の構造比較研究の先駆けと評価できる。

第IV世代 この世代で注目されるのは、田中晋作をはじめとする関西大学系の甲冑研究と、岡安光彦が主宰した、明治大学系の^{ファランクス}PHALANX — 古墳文化研究会 — による武器・馬具研究であろう。また、田中、藤田和尊（1959–2018）、松木武彦、新納泉、尼子奈美枝らによって、軍事組織論や階層構造論、そして戦争の考古学的研究が萌芽した世代でもある。

末永雅雄にはじまる関西大学考古学研究室からは、良質な武器・武具を多く出土した盾塚・鞍塚・珠金塚古墳の報告にあたった田中、藤田、豊中大塚古墳の報告にあたった柳本照男、高橋工らが輩出され、1990年代以降の甲冑や軍事組織の研究、および2000年以降の古代武器研究会の活動を牽引していった。田中や藤田の武器・甲冑研究は、資料そのものというよりもむしろ、副葬・埋納形態からみた武器・武具所有形態の意義、軍事組織といった武器を生み出す社会構造の分析が重視された。そうした機運はとくに1990年代までつづき、個別細分化する武器研究を理論的な枠組みで総括するとともに、階層構造論を超越した軍事組織の復元や武器供給の実態、威信財論、そして戦争そのものを考古学的に考察する試みが盛行した。

そうした潮流のなかで、都出比呂志率いる大阪大学考古学研究室が牽引する国家形成期の考古学的研究が果たした役割はおおきく、単一器物としての武器や甲冑、鏡にとどまらず、鉄生産や灌漑水利、軍事、戦争の研究など、21世紀における古墳時代研究の基盤を形成した。そこでは、特定の遺構・遺物の精細な観察と同時に、カール・マルクス（Karl Heinrich Marx, 1818–1883）やフリードリヒ・エンゲルス（Friedrich Engels, 1820–1895）らの社会発展論、スタンレー・タンバイア（Stanley Jeyaraja Tambiah, 1929–2014）の銀河政体論などをふまえた理論研究も重視される。ただ、このような研究の源も、阪大考古研の前身ともいえる国史研究室助手・北野耕平による甲冑研究をはじめ、都出による『日本農耕社会の成立過程』『古墳時代の王と民衆』の上梓（いずれも1989年）、およびその先にある「前方後円墳体制」の提唱〔都出1991〕〔図1〕、滋賀県雪野山古墳をはじめとする地域に根ざした良質の実証研究にある。

関東でも、利根川章彦や水野敏典が鏃の供給実態からみた軍事組織論を展開したが、一口に軍事組織といっても、その実態については研究者によって評価が異なる。それだけでも相当の紙幅を費やすため詳述はしないが、1994年から1995年にかけて『考古学研究』誌上で松木、田中、藤田、滝沢誠らの立場が表明され、いずれも2000年代以降、一斉に博士論文を基にした大部の単著として結実した〔田中晋2001、滝沢2015、

藤田2006、松木2007〕。

いっぽう、古墳文化研究会の研究戦略は、主宰した岡安光彦が明治大学で考古学を専攻する以前は医学生だったこともあり、コンピュータやクラスター解析をもちいた生物学的分類をめざした点において、同世代の関西系の武器研究とはまったく異質のものであった。のちの岡安による回顧を引用すると、会の目的は「共通の方法で古墳出土遺物を分析し、個々の結果をやはり共通の尺度で統合して、古墳出土遺物の編年体系と分類体系を、第三者的に認知できる明晰な基準の下に整理する」ことによって「古墳時代の武装システムの変化を体系的に明らかにすること」だったという〔岡安2010：p.2〕。

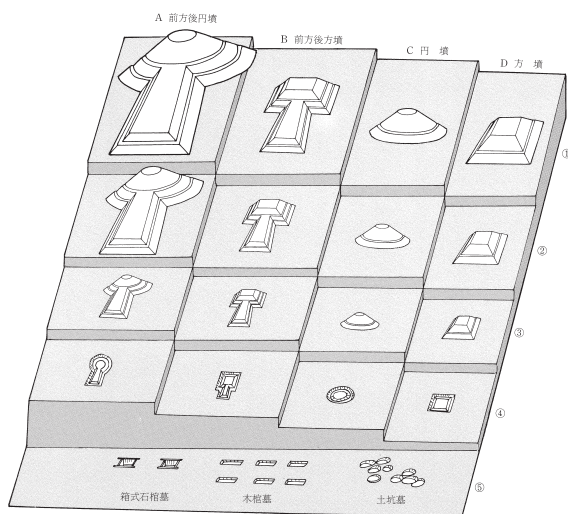


図1 古墳の階層性〔都出編1989〕

1984年から1986年にかけて刊行された古墳文化研究会の会誌『日本古代文化研究』（創刊号～第3号）に掲載された論考の多くは、提出後まもない学生の卒業論文や修士論文を基礎としているが、岡安による素環轡、臼杵勲による鉄刀・銚、齋藤弘による鍔・鈴杏葉、関義則による鉄鍔、瀧瀬芳之による装飾大刀、宮代栄一による雲珠・辻金具の分類と編年は、岡安の戦略と問題意識に違わぬ研究の新展開をもたらした。掲載媒体は異なるが、杉山秀宏による鉄鍔様式の把握も、こうした活動の余波を受けたものだろう。くわえて、この会誌名は明治大学考古学研究室の開設者・後藤守一の同名書にたいするオマージュ（homage）であること、3冊の会誌は2010年に満を持して合本復刻版が刊行されたこと、および高崎市教育委員会が1992年に刊行した群馬県八幡観音塚古墳出土品再整理報告書の考察は本研究会活動の成果であることの3点を、一連の活動へたいする、より適切な評価のためにも付記しておこう。そして、このような研究会の戦略のちにほぼ単独で収斂・継承・発展させ、21世紀前半の武器研究にたいして最もおおきな影響力を獲得する一人となるのは、会誌刊行当時まだ学部生だった第Ⅴ世代の内山敏行である。

第Ⅴ世代 この世代の功績は、第Ⅳ世代がうちたてた各器物の編年の枠を活かしながらも、汎東アジアレベルでの網羅的な集成を志向し、新出資料をふまえた広域編年への柔軟なフィードバック機構を確立させたことに尽きる。古墳時代研究全体でいえば、まさに都出比呂志が「前方後円墳体制」論をうちたてていたところに学生時代を過ごした世代である。

とりわけ、大谷晃二、内山敏行、桃崎祐輔、鈴木一有、橋本達也の研究は、どのようなテーマであれ無名の事例にいたるまでの徹底的な集成にもとづく総論を志向しており、各テーマの「世論形成者」としてこんにちにいたる。この五氏だけでもこれまでに、装飾大刀、銘文大刀、特殊な鉄鍔、帯金式甲冑、小札式甲冑、装飾馬具、殺牛殺馬儀礼痕跡、鍛冶具、銅鍔の集成が、文字どおり東アジアレベルでおこなわれてきた。

その動力源の一つには、1970年代以降申敬澈が推しすすめた釜山福泉洞古墳群や金海大成洞古墳群の調査によって加耶の通時的様相が鮮明になるとともに、朴天秀の研究によって、古墳時代中期における新旧二相は、高句麗南下をふくめた加耶の政治的変動と連動していることがあきらかとなってきたこと、そして何より、1990年代以降注目されるようになった中国東北部三燕³⁾の発掘調査成果が挙がるだろう。遼寧省西部の北票にある喇嘛洞墓地群は北方民族鮮卑の墓地であるが、その副葬品目の一翼を占める武器・武具・馬具などの金属製品には、それまで不鮮明だった日本出土渡来系文物の源流にかかわる資料が多くふくまれており、倭の一国史的、発展段階的な歴史理解に自ずと限界があるという危機感が、実際の資料とともに白日の下にさらされたのである。とくに桃崎は、奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所の国際共同研究に先立つ1990年代から、こうした三燕文物がもつ系譜論的重要性を日本に周知してきた旗手といつてよい。

帯金式短甲の消長をもって古墳時代中期を定義する橋本の一連の武器・武具論や、日韓の馬具・甲冑編年と埼玉稲荷山古墳の獲加多支鹵銘金象嵌鉄剣の年代論をめぐる諸問題を整理した白井克也による日韓交差編年なども、第Ⅴ世代を代表する研究といえるだろう。こうした機運のなかで鈴木は、埋もれてしまった過去の出土資料の再検討を先導しながら、精細な図面や編年はもちろんのこと、武器がもつ象徴性にかんする考察を残してきた。また、2003年中に発表された一連の鉄鍔編年が近年、古墳副葬品の複合分析にもとづいた段階設定につながるなど、1990年代以降の武器研究におおきの道筋を立てている。

武器や甲冑、馬具がもつ象徴性について、柔軟な解釈と豊かな表現でつづる鈴木を「柔」とするならば、事実をありのままに記しながら隙きのないモデルを造り出す「剛」は内山にほかならない。

内山は、世間的にはようやくAdobe Illustratorが登場した1980年代半ばから後半にかけての学部生時代、すでに古墳時代甲冑の整然とした編年図や日本列島中の最終末前方後円墳の集成を公開しており、その後も日中韓の新出資料にも敏感に察知、更新しながら武器・武具・馬具の総合編年や保有意義を論じてきた。はやくも1992年にはその実践編として、岡山大学大学院時代をともに過ごした大谷との連名で岡山県美作地

域の横穴式石室編年をおこなっていることは注目できる。1996年には、現在でも引用されつづけている鏡板・杏葉の総合編年を示し衝撃をあたえたが、それは基礎研究というよりもむしろ、すでに総論の域に達していた。2012年に大谷が日韓装飾大刀の総合編年を提示するよりも、はるか16年も前のことであった。また、武器・武具・馬具の各系譜論を最大限に応用した「舶載品ラッシュ」論や「gateway」論は、冷徹なまでの事実整理に立脚したモデルであり、理論研究に距離をおく第Ⅶ世代にも支持されている。

いずれにしても、総じてこの世代の研究スタイルは、まずおおきな枠組みや仮説を提示したのちに各地の重要遺跡の報告をつうじて個別論を展開、修正するという、いわば「演繹型」と形容できる。おそらく、古墳時代武器研究史上、最大のパラダイム転換を体現した世代といえるだろう。また、現役の学生・大学院生が主体となって古墳の発掘調査をおこなったり、出土品の図化や事実記載、そして考察までまとめる報告書のスタイルを定着させたのも、古墳時代研究全体にたいしてこの世代がもつ影響力や求心力の源であると筆者は考えている。その金字塔こそが、1993年に刊行された九州大学の『番塚古墳』であり、また、1996年に発掘調査報告書としては初めて雄山閣考古学特別賞に輝いた大阪大学の『雪野山古墳の研究』である。とくに雪野山古墳の調査・報告を担った、あるいは支えた研究者たちによって、こんにちの古墳時代研究の根幹が支えられているといっても過言ではない。

ちなみに、第Ⅴ世代の橋本、鈴木、桃崎らによって、2002年の『考古学ジャーナル』No.496で特集「九州における古墳時代武器と馬具」が組まれ、帶金式甲冑、鉄鏃、馬具、弓金具、鈴の個別論が提示された。九州の武器についてまとめられたこれまで唯一の試みだが、それらの総合化にはいたっていない。

第Ⅵ世代 たほう、方法論の面ではかならずしも抜本的な新機軸をもたない第Ⅵ世代のトレンドは、実測図や写真、遺物の事実記載といった、研究の根幹をなす技術の「均質化」といえるかもしれない。それは、大阪府紫金山古墳や七観古墳、奈良県五條猫塚古墳、兵庫県文堂古墳、島根県上塩冶築山古墳といった、過去に発掘調査された学史的な重要資料について高精度かつ均質的な水準で再検討し、新たな報告書としてまとめなおす気運のなかで醸成されたものと思われる。その過程では畿内中心主義的な意識も薄らいでおり、「古墳時代とは何か」という根本的な問いに立ちかえっているかのようにもみえる。

そうした作業の先導者としては、阪口英毅や松尾充晶、豊島直博、橋本英将、持田大輔、ちかしい分野でいえば、鏡や装身具を主とした上野祥史、辻田淳一郎、岩本崇らの名が挙がる。彼らの研究をつうじて古墳時代金属製品の構造理解は長足の進歩を遂げた。とくに豊島、岩本らの研究スタイルは、自身が対象とする資料は網羅的に実見したうえで盤石な考察を提示する「帰納型」といえるが、それと同時に研究の専門化が指向された感もある。ただ、全体としてそうした潮流にあるからこそ、大谷宏治や古川匠らのような、学史の間隙を縫う細かな、それでいて器物横断的な観察視点も光彩を放っている。

そのほか、この世代のなかで最も独自色のつよい研究をおこなっているのは高田貫太であろうか。高田は、従来倭王権と朝鮮半島諸王権との交流を描いてきたマクロな対外交渉論にたいして、おもに装飾大刀や鉾、装身具、埋葬主体部などの系譜論を援用しながら、ミクロレベルでの地域間交流を描く試みをつづけている。

第Ⅶ世代 筆者も属する最新の第Ⅶ世代は、師匠筋にあたる第Ⅴ世代以降の網羅的な集成志向、第Ⅵ世代が確立した既存資料の再整理報告といった路線を補佐、継承する過程で、畿内中心主義史観と個別の地域史、それぞれの批判的かつ発展的な再構築をめざしている。ただ、こうしたうごきは研究者個人のこころがけのみによって成り立つものではなく、X線CTや三次元計測をはじめとする資料化技術の発展という機運に支えられている一面もある。そうした意味において、おそらく将来的には、20世紀型武器研究の最終到達点、あるいは次世代型武器研究への接続世代として評価されるかもしれない。

なおこのような世代色は、筆者が福岡大学に入学した2005年、すでに桃崎祐輔によって「心ある20代の若手研究者は、かぎられた資料から構築した歴史像を、文献史学の成果に引きつけ、補正につぐ補正を繰り返す」と

返してきた過去の考古学研究にも、厳しい目を注いでいるように思える。コトの前提が、モノの分析を歪めてきた経緯を冷静に見据え、コト志向の有効性を疑問視しているのであろう」と予言、展望されていた[桃崎2005a：p.20]。とりもなおさず、その「若手研究者」こそが第Ⅶ世代そのものであり、この10数年のあいだに「疑問視」は合計200編ちかい数の論文として世に問われたのである。

とりわけ、京都大学や元興寺文化財研究所、工芸文化研究所における金工品研究や韓国留学を修め、日韓の金属製品を同一水準で比較検討する方法論を完成させた諫早直人、金字大、土屋隆史、列島中の武器出土古墳にかんする情報を渉猟した川畑純らの研究をつうじて、馬具や装飾大刀、盛矢具、鉄鏃、帯金式甲冑、装身具の編年は、ついに個体レベルでの新古関係にまで追求可能な段階を向かえた[諫早2012、川畑2015、金2017、土屋2018]。いずれも膨大な数の資料集成と実地の検討によって裏打ちされた立論が、盤石な考察にむすびついている。単著のあとがきで川畑は、こうした研究の土壌が、先に挙げた紫金山古墳や七観古墳、五條猫塚古墳といった、重要古墳出土品の再整理事業にあったと述懐する。

たほう、畿内中心主義観克服への志向は、田中祐樹（福島大学・新潟大学大学院）、平林大樹（静岡大学・大学院）、神啓崇（東京学芸大学・福岡大学大学院）、吉松優希（東京学芸大学・大学院）、筆者（福岡大学・大学院）らのように、関西以外の大学で考古学の基礎を学び、地域に根ざした研究を志す者につよく認められる。その背景の一つには、以上の5人はいずれも、菊地芳朗、滝沢誠、桃崎祐輔、日高慎ら、東北大学や筑波大学出身のⅣ・Ⅴ世代相当の研究者に指導を受け、師弟ともに畿内中心主義とは一定の距離をおいた環境で問題意識を培ったことも挙げられるだろう。すなわち、そうした意味において平林、神、吉松、筆者らは、東京教育大学、のちの筑波大学を拠点として関東甲信をおもなフィールドとしながら、古墳時代の斉一性が畿内からひろがっていった点ばかりを強調するのではなく、地域的特色を内包しながら日本の国家が形成されたことを見逃さなかった岩崎卓也（1929-2018）の直系の孫弟子世代ともいえるのである。

そのほか、初村武寛や平林、筆者らのように、単一の論文のなかでさまざまな武器・武具・馬具を同時にあつかう武装総論、あるいは、こんにちの視点から黎明期の学史を評価し直すうごきも流行している。また、第Ⅴ・Ⅵ世代では精細なモノの観察にもとづく分類と編年が志向され、軍事組織の研究は影を潜めていたが、近年、藤原哲による一連の研究によって、考古学からみた戦争や軍事組織の研究が復調の兆しにある[藤原2018]。2014年12月に山口大学で開催された第11回古代武器研究会、2017年12月の第14回古代武器研究会「若手研究者がみる武器・軍事研究の現状と展望」、およびそれぞれ翌年に論文化された『古代武器研究』Vol.11・Vol.14は、以上に挙げた第Ⅶ世代の研究を凝縮した一冊となっている。

このように第Ⅶ世代は、研究の多様化、差別化、そして総合化という走攻守の均衡が求められていると自覚するが、いっぽうでは情報社会の宿命として「知らない資料が1点でも存在すれば即減点」につながる、きわめて熾烈な競争環境にさらされている。それと同時に、いかにして自身の立ち位置を確立するかが課題として突きつけられ、むしろ研究の個別細分化（棲み分け）が加速するという陥穽に陥っている。

それでもなお、この世代の研究で評価されたいのは、歴史理論の安易な援用にはしらず、資料の実態に忠実に向き合う姿勢を貫徹していることである。戦後武器研究の生き証人であり、欧米の人類学にも造詣の深い穴沢味光でさえ、否、むしろ汎ユーラシア的なまなざしをもつ穴沢であるからこそ、人類社会の発展と複雑化の過程は、従来考えられていた以上に多発的で複雑、かつ多様なルートやパターンを経たものであり、また直進進化ではなく多くの曲折や停滞、挫折、退行があったと明言し、プロセス考古学やマルクス主義による、西欧社会の発展段階パターンをそのまま全世界にあてはめて捉えようとする歴史観に疑問を抱く。そして、日本考古学の精密な研究成果を利用した列島独自の社会発展論の必要性を喚起する[穴沢2014]。

ただし、このような理念の提唱はいまにはじまったことではなく、古代史研究においては、はやくに石母田正の名著『日本の古代国家』のはしがきで「国家についてのどのような理論も、歴史的に存在した個々の

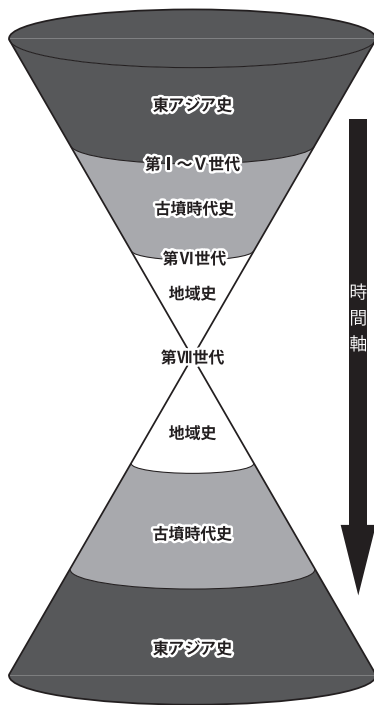


図2 武器研究のこれまでとこれから

国家について厳密に検証されなければならない」と[石母田1971：p. iv]，端的に述べられていたことへの反省はうながしておくべきであろうか。世代を挙げて，しかも枝葉末節をゆく遺物研究の立場からこうした問題意識を具現化にするようになるのは，まさに第VII世代を待たなければならなかったからである。

そうした研究の実践は，とくに軍事的な境界領域の分析において真価が問われる。たとえば北部九州では，小田富士雄が半世紀以上にわたって筑紫君磐井の墓とされる福岡県岩戸山古墳から出土した石人石馬の資料化をすすめてきたが，近年ではその学統に連なる後続研究も相まって，王権中枢へたいする磐井の乱は単なる地元の英雄譚にとどまるようなものではなく，むしろ乱以前の継体朝と政治的紐帯をむすびながら中国大陆や朝鮮半島の勢力と交流した人物の姿が実際の考古資料から鮮明となりつつある。くわえて，高田貫太が古墳のハードとソフトの分析を総動員しながら実践しているような，各地の主体性をふまえた地域史の樹立と糾合が，いま，求められている[図2]。

第3節 検討対象・地域・時期

本論が対象とする考古資料は，おもとして古墳時代中・後期の鉄製刀剣，装飾大刀，鉾だが，そのほかの武装具，すなわち，弓具，甲冑，馬具の分析や先行研究の成果を加味することによって，刀剣を受容した社会がもつ特質の解明をめざす。近年，これら各器物の分類と編年にかんして細分がすすむなかで，とくに後期の武装体系について総合的に描く点に本論の特色がある。

古墳時代の地域経営にかかわる考古学的な痕跡は多く存在するが，中央と地方の関係を論じる際には，できるだけ地域型式のバイアスがすくない資料を選ばなければならない。もちろん，各地の首長を支えた民衆の生活様式（集落や土器）なども，地域経営の実態を知るうえで欠くことはできないが，土器の多くは在地生産，在地消費を基本とするから，列島全体を見渡した広域的な比較検討には限界がある。

たほう，武器や馬具は地域形式・型式がすくなく，その質的格差や量的格差のバランスに注目することによって，地域経営の実態をあぶりだせると考える。とくに本論の主題である「境界領域」という軍事的色彩のつよい分野にあたっても，（実際に戦争があったか否かは別として）武器や馬具が恰好の分析資料となることはいうまでもないだろう。

対象時期として中・後期を設定する理由は，外来系の威信財体系から脱し，倭独自の武装をもって汎列島の統治機構を確立していく時期に焦点をあて，どのように「中央」が「地方」を掌握したのか，あるいは「地方」がどれほどの独自性をもちえたのかを解明するためである。

これは決して，古墳時代前期には倭製の武器や武具が存在しなかったと主張するものではない。しかしそれでもやはり，前期の北部九州や畿内の有力墳（福岡県一貴山銚子塚古墳，滋賀県雪野山古墳，奈良県黒塚古墳など）においては，中国大陆由来の環頭大刀や甲冑が鏡とともに重視された事実はどうもかかない。

これにたいして，ほぼ確実に倭製品をふくむとみられる中期以降の鉄刀の編年によって期待される成果として，古墳築造地域全体を網羅した編年軸の樹立が挙げられる。第2章で述べるように，古墳時代中期の鉄

刀は長身化や幅広化という方向性で円滑な変化を遂げ、鉄鏃のような地域差もすくなく、かつ、装飾馬具や甲冑よりも多くの資料が確保できるといった利点や特質がある。

たいして、装飾大刀や鉄鉾、飾り弓、馬具は上位階層の身分表象（タテの関係）として捉えられることが多いが、実際には本論で述べるように、特定の地域に特定の武器が集中することは珍しいことではなく、これまで考えられてきた以上に「地域性」の語がもつ意味には重みがあると考ええる。さらに近年は、特定形式の装飾大刀や馬具の生産・配布・保有主体について、特定の氏族や職掌（ヨコの関係）とむすびつける試みもすすめられているように、武器や馬具がどのように流通し、保有され、そして古墳への副葬にいたるのか、その複雑な動態の解明は武器研究のおおきな課題として横たわっている。

そこで第Ⅱ部では、磐井の乱を前後する時期の北部九州諸勢力の武装を整理するとともに、東の境界領域である関東の武装のありかたと比較することによって、「中央」による武装整備の地理勾配をあきらかにする。対象地域を限定することに満足しているわけではないが、日本考古学のなかでも異常なまでに早く深化する武器研究においては、報告書に立脚した研究は資料分析に制約が多く、個人による列島レベルでの認識の深化は困難である。そのため本論では、個人の力で観察・資料化・分析が可能な資料と地域を事例としながら、地域史研究の雛形となる方法論と、一貫した歴史哲学の構築を図りたい。

本論でもちいる時期区分は、おおむね次のとおりとし、極力、実年代ではなく「中期後半」「後期末」のように表記する。これは、将来的に流動するさだめにある古墳実年代論に柔軟に対処するための事前措置である。なお、本論でいう中期とは、橋本達也が描く「中期的武装具様式」の消長、すなわち帯金式短甲の成立から終焉までとする〔橋本達2005〕。

〔中期初頭〕TG232型式期≒4世紀末頃

〔中期前半〕TK73型式期≒400～420年代

〔中期中葉〕TK216型式期≒430～440年代

〔中期後半古段階〕ON46-TK208型式期≒450年代～460年代

〔中期後半新段階〕TK23型式期≒470年代

〔中期末〕TK47型式期≒480年頃～490年代

〔後期前半〕MT15型式期≒490年代末～530年頃

〔後期中葉古段階〕TK10型式期≒530～550年代

〔後期中葉新段階〕MT85型式期≒550～570年代

〔後期後半〕TK43型式期≒570～590年代

〔後期末〕TK209型式期≒590～610年代

〔終末期〕TK217型式期≒7世紀前半

第4節 本論の構成

本論は、序章以下、第Ⅰ部1～5章、第Ⅱ部6～9章に終章をくわえた構成をとる。

第Ⅰ部は、古墳時代の刀剣や鉾にかんする総論であり、本論が依って立つ年代観や哲学の基礎を示す。

第1章では、古墳時代刀剣研究全体の現状と課題をまとめる。そこでは、刀剣研究が内包する構造的な特質をあきらかにするために、馬具や甲冑研究のあゆみと照らしあわせながら論じたい。

第2章では、確実に倭製品として認識しうる刀剣が出現する中期の様式の推移をまとめ、その画期にあらわれるさまざまな付随要素を整理する。そしてそれらは、中期における一過的な現象にとどまらず、後期に

おける振り環頭大刀成立の前史として理解すべきことを述べる。

第3章、第4章では、刀身本体の系譜の認識と、外装との対応関係について述べる。これによって、外装が腐朽してしまった刀身本体からだけでも、ある程度被葬者像へ接近することを可能とする。

第5章では、武器の多様性が何を表象するのかという第II部への予察として、東アジア各地の特殊鉄鉾の系譜を論じる。これによって、古墳時代後期の倭を代表する三角穂式鉄鉾成立の動態をあきらかにする。

第II部では、武装からみた日本列島の軍事的境界領域、すなわち、北部九州の特質を描く。具体的には以下のような議論をつうじて、日本考古学における「畿内中心主義」と、九州考古学における「玄界灘沿岸中心主義」の相対化をめざす。そこでは倭王権中枢によるすくなくない介入ももちろん認めるが、それはあくまでも一つの側面に過ぎず、地域の歴史は、地域の独自発展と外的な影響が接触することによって醸成されることを論じることが目的である。

第6～8章では、福岡県セストノ古墳や岩戸山古墳、宗像地域の有力な古墳、善一田古墳群、桑原・元岡古墳群などから出土した武器・武具・馬具、およびその関連資料を再検討し、磐井の乱やミヤケ設置、筑紫火君の成長との関連をふまえながら、5・6世紀の北部九州史を描く。

第9章では、分析の視点を東の境界領域である東国に移す。論議の主題は、千葉県金鈴塚古墳を中心として、東国の有力首長間ネットワークの特質を描くことである。とくに東国の首長墳に副葬されることの多い武装具が、果たして単に倭王権の地方経営という概念のみによって説明しうるのか検討したい。

終章では、第II部の成果をまとめ、古墳時代後期の北部九州における武装具保有の実態をあきらかにする。そしてその構図を抽象的なモデルへと昇華させ、汎列島の武装編成モデル構築への布石としたい。

なお、一連の過程で逐一言及するものではないが、たとえば、北野耕平〔1969〕以来の、近畿地方を中心とした武器の生産・流通モデル、川西宏幸による「畿内政権論」三部作〔川西1981・1983・1986〕、新納泉による群集墳の階層モデル〔新納1983〕、穴沢咏光による「威信財システム」論〔穴沢1985ab〕、都出比呂志による「前方後円墳体制」論〔都出1991〕といった、古墳時代研究全体の基層にある理解をふまつつも、資料の純増に即した地域史の再構築を本論全体の命題とする。いわゆる「畿内」以外でも武器や武具、馬具を生産していた可能性や、地域独自の秩序が存在する可能性を一点でもよいから指摘し、武器研究全体に漂う閉塞感を突破することが真の狙いである。

これにかかわる注意点としては、本論でいう「倭王権」「倭王権中枢部」とは、かならずしも特定の地域や行政区域を指すものではないことである。むしろ、その実態が大阪平野や奈良盆地に存在したのであろうことは否定できないし、おそらくはその可能性が最もたかいのだろうが、事実を理論に優先させる経験科学は根拠なき言説や付度、迎合に陥ってはならない。したがって本論では、「倭王権」の語にたいして、古墳時代当時の政体の中心、という以上の意味を示さないことにする。

註

- 1) 【府官制的秩序】「王が中国王朝から將軍号ならびに国王号を授与されたのにともない、臣僚が中国にならって官爵を仮授・仮行され、除正の推薦を受けることによって、その権力内部の政治的秩序のなかに位置づけられる」システムのことであり、国内統治の政治組織整備のはしりとなった〔森2010：p.47〕。
- 2) 【ミヤケ】文献史料では「官家」「屯倉」「屯家」「御宅」等と記される。その性格についてはさまざまな見解があるが、おおむね、ヤケ（家、宅）やクラ（倉）、水田などが付属する、倭王権の直轄地（地域経営基盤）を意味するものとみられている。
- 3) 【三燕】龍城（中国遼寧省朝陽市）に都をおいた、五胡十六国時代の王朝である前燕（337-370）・後燕（384-407）・北燕（407-436）の総称。

第 I 部 武器の系譜と デザイン

第1章 古墳時代刀剣研究の課題

第1節 本論の羅針盤

第1項 権力の象徴としての刀剣

クリスチャン・トムセン (Christian Jürgensen Thomsen, 1788–1865) は、コペンハーゲン王立博物館収蔵の利器について、その材質にもとづいて石・銅・鉄製に分類することによって「三時代区分法」を提唱した。いま、あらためてこの古典学説を引くまでもなく、利器が人類の生活に欠かせない道具であることを私たちは経験的に知っている。そして、利器のなかでもとくに長大化した刀剣は、火器出現以前の洋の東西を問わず軍事や王権、王位継承行事の象徴として捉えられてきた。現代につづく日本の皇位継承儀礼における三種の神器（草薙剣・八咫の鏡・八咫瓊勾玉）や、三重県伊勢神宮の式年遷宮に際して調進される玉纒太刀、あるいは日本の国宝のおよそ半数が刀剣で占められることについても巨大な歴史的脈絡のなかで捉えうるならば、その系譜の源を知ることによって一定の意味を見いだせよう。とりわけ本論のおもな検討対象である古墳時代の刀剣は、そのきらびやかな、あるいは質実剛健な姿から見る人を魅了するとともに、銘文刀剣に刻まれた文字の一つ一つは、古代社会の一端を物語る資料として文献史学にも貢献してきた。

そのような東アジアにおける権力の象徴としての刀剣文化は、司馬遷 (B.C.145/135年?–B.C.87/86年?) の『史記』「秦本紀第五」によれば、中国秦の簡公（第21代公、在位：B.C.414–B.C.400）が紀元前409年に令を下し、官吏の身分表象として剣を佩用させた風習に発するという。

つづく漢王朝は、古代中国における国家モデルの諸制度を発展させることによって、統一的な中央集権国家の機構を確立した。前漢 (B.C.206–A.D.8) には「皇帝より百官にいたるまで、剣を佩びざるなし」といわれ、後漢 (25–220) には武器としての刀剣の主力が刀に転換し、その儀礼制度のなかに百官の身分等級を示す佩刀の規則が細かく規定された。

ただ、遺跡の発掘調査をつうじて古代中国の刀剣が発見されることは稀であることから、その実態についてはほとんどわかっていないのが実状である。そうしたなかにあつて、河北省満城県陵山満城漢墓1号墓〔前漢の皇族・中山靖王劉勝（生年不詳–B.C.113）の墓〕から金縷玉衣や甲冑とともに出土した、環頭部に金の帯を隙間なく巻きつけた刀、および0.1mm前後の繊細な金糸で雲雷文を象嵌した環頭削刀は、まさにこうした機構に組みこまれたものとして注目できる。『三国志』蜀の初代皇帝・劉備（161–223）は、皇帝の座に就く際、自身は劉勝に連なる家柄であることを顕示したという。劉備の出自について検証することはできないものの、漢代における帝室・劉氏の社会的地位のたかさを物語る挿話といえるだろう。

唐 (618–907) の648年に編纂された『晋書』「赫連勃勃伝」には、五胡十六国の夏 (407–431) を建国し、一時は北魏に対抗しうる唯一の勢力を誇った遊牧民族匈奴の族長・赫連勃勃 (381–425) が「大夏龍雀刀」を製作させた記事がある。大夏龍雀刀は現存しないが、百煉鋼と呼ばれる高度な技術で作られた長大（三尺九寸）な環頭大刀とみられ、春秋時代 (B.C.770–B.C.450頃) の宝剣・湛盧¹⁾ に比肩する名刀であると刻まれていたという。

南朝梁の科学者である陶弘景 (452–536) が著した『古今刀剣録』は、三国時代の武勇の象徴が刀剣にあったことを雄弁に物語るし、唐の738年にまとめられた『唐六典』「積名曰、刀末曰鋒 其本曰環 今儀刀、蓋古班劍之類、宋晋已来、謂之御刀、後魏曰長刀皆施龍鳳環至隋曰之儀刀裝以金銀」の記述からも、南北朝

(439-589) から隋 (581-618) にかけて、龍や鳳をデザインし金銀で装飾した環頭大刀が重要視されていたことがわかる。

このように、エリートが共通して刀剣を佩用する社会において、各々の所属を誰もが知覚できるためには、刀剣の外装を差別化することが最も利便であろう。『隋書』「卷12礼儀志」にみえる、北周代 (556-581) の皇宮警衛者が佩用した「龍環」「鳳環」「麟環」「犀環」「獅子環」「象環」「罷環」「熊環」「豹環」などの刀はこうした状況を彷彿とさせる。

考古資料では、6世紀の単龍・双龍環柄頭や獅嘯環柄頭の意匠の祖形となるような彫刻が5世紀後半の中国山西省雲崗石窟第12洞にみられるほか、中国河南省鄧州市彩画磚墓に描かれた三累環頭大刀をもつ男性の画像も著名であり、列島の環頭大刀の系譜が中国大陆にまでさかのぼることは確実である [図3]。

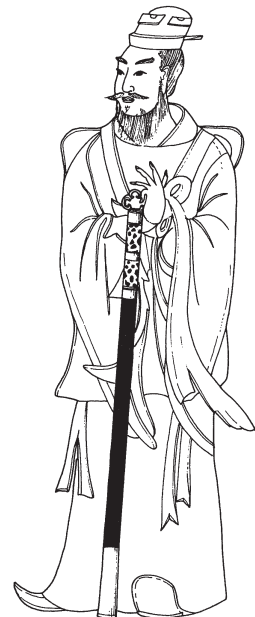
環頭大刀の現物では、三燕の遼寧省北票県喇嘛洞 I M5墓で最古とみられる三累環頭、高句麗の集安麻線溝1号墓や禹山下3560号墓で三葉環頭が出土している。こうした中国東北部系の環頭大刀は、4・5世紀に高句麗が新羅を従属させてゆく過程で新羅王権の威信財と化した。

弥生時代後期から古墳時代全体をつうじて、極東に位置する倭の王や海外の最新の流行を察知した各地の有力者は、こうした中国王朝や朝鮮半島諸国と交流するなかで先進的な国際文化を摂取するとともに、独自デザインの武器をガラパゴス的に確立させた [図4]。長崎県対馬島のトウトゴ山遺跡で出土した列島最古級の三葉環頭大刀をはじめとする装飾的な刀剣、あるいは甲冑や馬具、装身具をふくむ武装具のいずれもが、倭の内的発展、外的影響を問わず、中国周縁地域における国家形成の動態を紐解く鍵となりうる [諫早2012, 上野2014, 菊地2010, 金宇大2017, 豊島2010, 橋本達2012]。

以上は、本論の着地点を超越する仮説とはいえ、古墳時代の刀剣を論じるにあたっても、その根底にこのような羅針盤がなければ、分析戦略と結論がおおきく左右されることを念頭においておきたい。

第2項 古墳時代刀剣研究の意義

古墳時代の武器・武具・馬具にかんする研究は、近代的な日本考古学の確立以降、発掘資料の純増とともに、



図出典 左:雲崗石窟12洞[水野・長廣1953] 右:中国河南省鄧州市彩画磚墓[穴沢・馬目1983]

図3 中国大陆における環頭大刀の関連画像資料

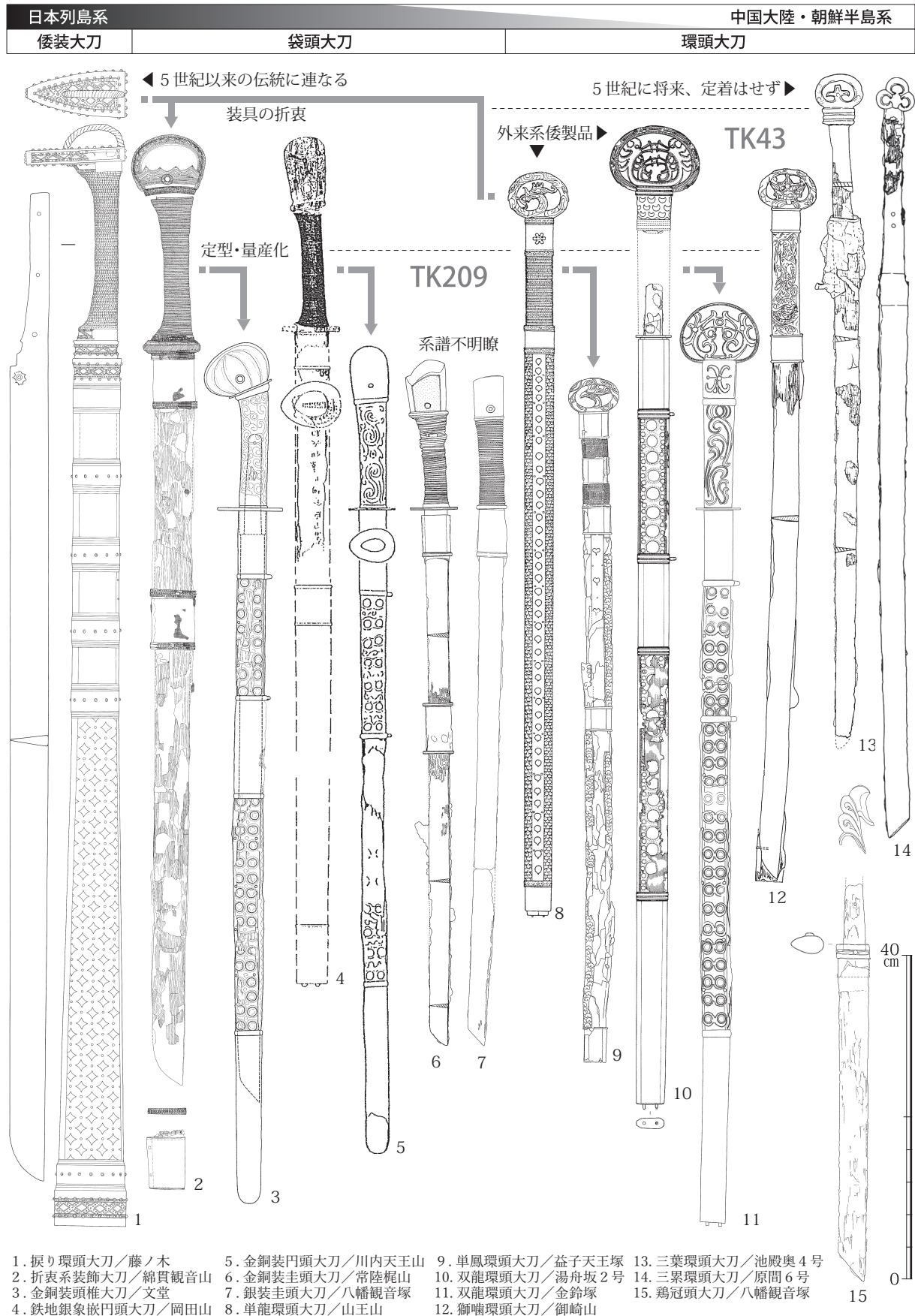


図4 装飾大刀の諸形式 (S=1/7)

図4の出典

- 1 藤ノ木（奈良県立橿原考古学研究所 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』）
- 2 綿貫観音山（群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』）
- 3 文 堂（大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 2014『文堂古墳 本文編』）
- 4 岡田山・5 川内天王山（大谷晃二 1999『上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜』『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター）
- 6 梶 山（大洋村教育委員会 1981『常陸梶山古墳』）
- 7 八幡観音塚（高崎市教育委員会 1992『観音塚古墳調査報告書』）
- 8 山王山（新納 泉 1982『単竜・単鳳環頭大刀の編年』『史林』65-4）
- 9 益子天王塚（持田大輔・中條英樹 2009『環頭大刀・馬具』『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』10）
- 10 湯舟坂2号（久美浜町教育委員会 1983『湯舟坂2号墳』）
- 11 金鈴塚（酒巻忠史 2007『金鈴塚古墳出土遺物の再整理2 ―大刀の実測―』木更津市教育委員会）
- 12 御崎山（島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996『御崎山古墳の研究』）
- 13 池殿奥4号（奈良県立橿原考古学研究所 1988『野山遺跡群Ⅰ』）
- 14 原間6号（香川県教育委員会ほか 2002『原間遺跡Ⅱ』）
- 15 八幡観音塚（高崎市教育委員会 1992『観音塚古墳調査報告書』）

絶え間ない資料化技術の向上と理論の構築が繰り返されてきた。論文の数でいえば、刀剣は1,100編以上、馬具1,000編前後、甲冑や弓具はそれぞれ500編前後が知られ、武器を中心とした階層構造論や軍事組織論、地域史研究もふくめると総3,000編を優に超える。

ただ、このうち刀剣についていえば、2000年代以降の大谷晃二や豊島直博を代表とする研究によって特定形式の編年の精度が飛躍的に向上したものの、新資料をふまえた先行研究の批判的検討や雑誌の特集号などでの全国的な議論が少なく、鉄製刀剣本体の研究と外装の研究を総合する視点や、刀剣全体の多配列的な系統の認識、ヤリ・鉾をふくめた様式把握など、論考の数とは裏腹に多くの課題が残されている。膨大な資料や論考の咀嚼に追われ、「刀剣とは何か」といった本質的議論、すなわち刀剣史にたいする方向性を共有できていない現状を認識しなければならない。

たしかに、倭における主要な装飾大刀集中地域の様相については古代氏族研究の成果をふまえた議論があるが〔島根県教育庁古代文化センターほか2005〕、個別具体的なモノ研究と突き合わせたものではない。かたや甲冑や馬具については、1970年代までに分類の基礎が示されてからも、幾度となく組織的な集成、文献目録の提示、討論、研究史の整理、形式を横断した編年などが試みられ、近年では日韓交渉や交差編年、軍事組織といった古墳時代研究上の重要課題にまで貢献している状況とまったく異なる。

とはいえ刀剣は、甲冑や馬具と異なり古墳時代前・中・後期をつうじて広域に分布し、鉄鏃よりも地域型式が少ないため、時空間的な普遍性がたかい。つまり、的確に峻別した系列ごとに編年を示すことさえできれば、古墳の広域編年や倭の王権論に際して有効な材料となりうる。「刀剣は型式変化に乏しく、古墳の編年に適さない」と、まことしやかに囁かれるが、こんなにち密的な資料の増加や研究の進展をふまえても、そのような認識は変わらないのだろうか。以下、学史が孕む刀剣研究の構造的特質と、刀剣そのものの系統の理解をめざしながら、武器研究全体のなかでの刀剣研究の位相を論じる。

第2節 刀剣研究、これまでの100年〔表2〕

第1項 研究史1期 ―「神林資料」のメッセージ―

古墳時代の刀剣を考古学的な関心にもとづいて観察・集成・分類する試みは、明治後半にさかのぼり、関東では帝国博物館・東京帝室博物館を中心に活動した黒川真道、若林勝邦、高橋健自、後藤守一、神林淳雄、関西では京都帝国大学考古学教室の黎明期を担った濱田耕作、梅原末治、末永雅雄らが先鞭をつけた。

当時の刀剣研究がこんなにちとは異なる視点でたかい水準に達していたことは、高橋の『鏡と劔と玉』をはじめ、有職故実の泰斗・関保之助（1868-1945）の学統に連なる後藤の「原史時代の武器と武装」や『日本古代文化研究』、末永の『日本上代の武器』『日本武器概説』、濱田・梅原らの『近江國高島郡水尾村の古墳』（滋賀県鴨稻荷山古墳の報告書）をつうじて知られる〔後藤1928・1942、末永1941・1943、高橋1911、

表2 古墳時代刀剣研究の推移

1期 1890～1940年代 鉄刀の造作への着眼と、装飾大刀の分類			主要報告書・基礎資料	特記
▼刀身に注目した研究			1923 鴨稲荷山	
黒川1894 鋤本孔への言及 若林1899・1903 江田船山古墳象嵌大刀への注目			1951 金鈴塚	装飾大刀最多20振
▼把頭形式に注目した基礎的な分類			1952 一貴山銚子塚(環)	
高橋1911, 浜田・梅原1923, 後藤1928・1932, 末永1941・1943 頭椎・圭頭・円頭・方頭・蕨手刀・獅嚙・単龍(鳳)・双龍・三葉・三累環の名称が出揃う			1971 宇洞ヶ谷横穴(円・龍)	形式を超えた編年
▼刀装具全体に目配りした分類			1974 七廻り鏡塚(装)	刀身・把・鞘良好
神林1936・1938abc・1939・1940ab・1943「神林資料」 把頭以外の刀装具を含めた大刀の分類, 精緻な実測図の作成			1976 法皇塚(振・龍?)	
2期 1950～1990年代 個別形式の分類・編年と、刀剣を材料とした研究			1978 城山1号(頭・円・龍・鳳)	単龍鳳5振
2a期: 1950～1960年代前後 個別論と“刀剣を材料とした研究”の萌芽			1979 大ノ越(鳳・嵌)	
▼個別論 ▼刀剣を材料とした研究			1980 埼玉稲荷山(銘)	辛亥年, X線の普及
瀧口1952 鶏冠頭大刀の系譜 小田1966 三累環頭大刀の分類			上総山王山(龍)	
大塚1959, 西川1966, 甘粕1969, 桐原1969, 向坂1971 戦前の武器研究の総括, 古墳社会での刀剣の位相, 軍事組織論の萌芽			1981 常陸龍山(円・圭・獅)	
2b期: 1970年代 武寧王陵の発掘と東アジア刀剣史へのまなざし			1983 湯舟坂2号(双)	双龍=蘇我氏? 茎と把の変化による編年
▼世界史のなかの“装飾大刀”の評価			七軒横穴群(後)	中期編年の基準
町田1976 環頭大刀を東アジア刀剣史のなかで理解 穴沢・馬目1976・1979a・1980・1983・1985等 各把頭・刀装具の系譜論, “威信財システム”の導入			1987 豊中大塚(中)	象嵌研究の画期
2c期: 1980年代 型式学的研究の個別細分化			岡田山(円・銘・葉)	箕谷2号(銘)
▼新納泉の装飾大刀研究 ▼象嵌大刀の研究			1988 稲荷台1号(銘)	王賜銘
1982・1983 単・双龍鳳環頭大刀の分類と編年 1984 装飾大刀を頂点とした階層構造論 1986 単竜・双竜・頭椎の並行関係を整理 1987 戊辰年銘大刀を軸とした実年代論			井田川茶白山(振)	
橋本1980・西山1986 象嵌大刀の分類と編年 東野1993 江田船山鉄刀の銘文釈読			1992 別処山(円)	把頭内に鈴
▼古墳文化研究会の研究 ▼刀装具構造の解明			八幡観音塚(鶏・圭)	最古の鶏冠頭?
瀧瀬1984 圭頭・円頭・方頭の分類と編年 白杵1984・1986 鉄刀本体の分類と編年			1993 番塚(倭)	倭装大刀の構造解明
置田1985・1987・1989 福島1983 横田1982・1986			藤ノ木(倭・振・円)	倭装大刀の構造解明
2d期: 1980年代後半～1990年代 藤ノ木・峯ヶ塚の発掘, 倭装大刀の認識			江田船山(保)	象嵌検出
▼系譜論			1995 布留遺跡(装)	装具多量出土, 頭椎=物部?
町田1988 倭装大刀=倭国内の身分表象, 外来系大刀=国際関係時の身分表象 白石1993 振り環頭大刀=伊勢神宮に伝わる玉纏大刀の源流, 大王家に連なる者が佩用する大刀			1996 雪野山(前)	ヤリの構造
▼実年代論			御崎山(獅)	最古の獅嚙環頭?
白石1985・1997 白井2003 新納2009 福島2001・2005・2008・2010			1997 和田山古墳群(中)	
3期 2000年～ 古代武器研究会発足, 個別論を古墳時代研究に還元する段階			埼玉將軍山(振・葉)	
▼刀剣総論・研究史			1998 磯辺王塚(後)	
池淵2003 大谷寛2012 菊地2004・2010a・2014abcd 齊藤2015・2017a 鈴木—2012 瀧瀬2011 津野・内山2017 豊島2010・2013 近つ飛鳥博物館1996 橋本2013 古谷2001・2011 松尾2003ab			1999 大成(環)	把の改造?
▼刀剣身本体・有機質装具の研究			野毛大塚(中)	中期編年の基準
有機質装具: 岩本2006・2010, 豊島2010 鋤本孔鉄刀: 齊藤2009 隅扶尻茎鉄刀: 長友2013 前期刀剣: 池淵2014, 517・ジ・5172017 中期刀剣: 齊藤2017b 後期鉄剣: 大谷宏2016			上塩辻築山(振・円)	組立工程図
▼装飾大刀の個別研究			綿貫観音山(振・頭・累)	
倭装大刀: 深谷2008 振り環頭大刀: 高松2006 素環頭大刀: 加藤2002 単龍鳳環頭大刀: 金宇大2017 双龍環頭大刀: 豊島2017 獅嚙環頭大刀: 小谷地2000 三累環頭大刀: 野垣2002 三葉環頭大刀: 金宇大2017 円頭大刀: 鈴木2009 圭頭大刀: 菊地2010 頭椎大刀: 豊島2019 鶏冠頭大刀: 齊藤2016 方頭大刀: 豊島2015 象嵌大刀: 大谷宏2011 鹿角装刀剣: 長友2011			2000 風返稲荷山(頭・円)	佩用装置による編年
▼武器の理論的研究の総括			黍田14号(双)	
内山2012 「舶載品ラッシュ」 = “6世紀後半における各地の首長墳で半島系の武器・武具・馬具がまとまって副葬される現象” “定型化した倭製品として定着し、身分標識の機能を想定できる、中央に多い遺物群” (例) 単龍環頭大刀 “倭製品としての定型化または模倣量産がされないもので定型的身分標識の機能が希薄と考えられる、地方に多い一群。奢侈品か、対外的な身分標識” (例) 三累環頭大刀, 獅嚙環頭大刀			2001 堤蓮町1号(累)	列島最古の三累環頭
▼武器・武具・馬具・軍事にかんする学位論文級の単著			かわらけ谷横穴(双)	組み立て工程図
諫早2012 川畑2015 菊地2010 金2017 阪口2019 滝沢2015 田中2001 土屋2018 寺前2010 豊島2010 福島2019 藤田2006 藤原2018 古川2019 松木2007			2002 鋤崎(中)	把構造の復元図
【主要報告書・基準資料の凡例】 (前・中・後) = 前・中・後期の鉄製刀剣のうち資料数が充実しているもの (装) = 刀装具 (保) = 保存修理報告 その他=上の「装飾大刀の個別研究」の太字 特記=その後の研究に与えた影響等			峯ヶ塚(後)	倭装大刀15振以上
			龍角寺浅間山(振)	最終末の振り環頭
			松面(振・双)	最終末の振り環頭
			鶴巻塚(円・圭・獅)	
			2003 昼飯大塚(装)	鞘の構造解明
			後出古墳群(中)	
			石ヶ元古墳群(鳳)	群集墳と古代戸籍
			2004 箕田丸山(振・鳳)	
			2005 心合寺山(葉)	把の改造=倭装化?
			2006 小野王塚(中)	最古?の三輪玉
			木虎谷11号(後)	福島編年の実証
			双六(振・鶏・圭・嵌)	
			2007 江田船山(銘)	初葬=TK23?
			金鈴塚	全点再報告, 写真トレース
			2008 東大寺山(保)	
			原分(嵌)	
			2009 鳥居松遺跡(円)	装飾大刀の補修痕
			益子天王塚(鳳)	
			2010 東大寺山(前)	
			茶すり山(中)	外装復元
			経僧塚(圭)	火焔文装飾
			2011 河合寄安遺跡(装)	装具の地方生産?
			キコロジ遺跡(装)	漆塗の圭頭把頭
			2012 恵解山(中)	刀剣・ヤリ200本以上埋納
			伝左山(環)	素環頭5振以上
			中村(後)	金銅装飾の編年
			2013 津堂城山(中)	中期の画期
			2014 七観(中)	中期編年の基準
			文堂(頭・双)	頭椎大刀の復元
			西堂古賀崎(龍)	スライス合成図
			芝山(振)	振り環頭6振以上
			2015 金鈴塚(龍)	合成図+組立工程図
			東条1号(振)	有機質部の復元図
			2016 宮山(中)	
			金鈴塚(鳳・獅・鶏・圭)	初の刀剣共同研究
			中原4号(嵌・剣)	後期鉄剣の集成
			2017 善一田18号(累)	X線CTの活用
			2018 元岡G-6号(銘)	庚寅銘
			金鈴塚(圭)	
			古天神(嵌)	
			東平1号(嵌)	
			黒塚(前)	

濱田・梅原1923]。

高橋、後藤、末永、濱田らの刀剣研究は、古代の武装論全体のなかで文献史学や工学分析の成果をも博搜した体系的叙述だった点、刀剣本体と外装を総合的に俯瞰した点、古典を引用しながら用途や名称を考証した点、また、類例の乏しい一点モノにも光をあてた点に特徴がある。分野の細分化や用語の錯綜がみられ、型式学的配列に適さない資料を捨象する昨今の研究とは、方向性や方法論そのものが異なっていた。ただそうしたなかにあっても、後藤による鉄鍔の基礎研究〔後藤1939〕が、多種多様な鉄鍔を階層的に分類するという整然とした体裁をもっていたことは、後藤がモノのもつ特性を熟知していたことを示すものであり、半世紀後のPHALANX-古墳文化研究会-の活動方針にも受け継がれた。

たいして、濱田・梅原らの研究には、日本統治時代の朝鮮半島における調査をつうじて得た見識や問題意識が根づいている。とくに、羅州新村里9号墳や昌寧校洞古墳群、梁山夫婦塚、慶州金冠塚などから出土した環頭大刀と日本出土の類例を対比することによって、列島古墳時代との並行関係にたいする展望を立てた功績は、情報が洪水するこんにちの筆者らが想像するよりも遥かにおおきいはずである。

いっぽう、末永が大著『日本上代の武器』を綴っていたであろう1930年代末から40年代初頭にかけて、神林淳雄という、もう一人の若き刀剣研究者が流星のごとく走り抜けたことはあまり知られていない。

神林は、装飾大刀の柄頭の分類を軸としつつも、鐔や足金物といった装具全体の整然とした分類案を『考古学雑誌』を中心に展開した〔神林1936・1938abc・1939・1940ab・1943〕。神林は、かならずしもこんにちに影響をあたえるような考察をなしたわけではないが、「神林資料」と呼ばれる、刀剣を中心とした古墳副葬品の精緻な実測図と拓本を多く遺した〔図5、神林淳雄資料研究委員会2005〕。この「神林資料」は、工学的な設計図と呼べるものであり、刀剣型式学の基礎が装具の構造や文様をたかい精度で記録すべき点にあることを教える。

ただ惜しむらくも、こうした高度な方法論の旗手が太平洋戦争に巻きこまれ、享年34というあまりにも早い理不尽な死を遂げたことは、こんにちなお一部の研究者間で学史上の損失として嘆かれている。すなわち、同時期を生きた末永の教養主義的な研究と神林の精緻な基礎研究が結合していれば、穴沢味光を中心とした2b期以降の刀剣研究とは異なる学史が形成されたのではないかと。しかし「神林資料」は、穴沢味光や瀧瀬芳之による先鋭的な刀剣の型式学的研究で活用される2c期以降にいたるまでひろく認知されることはなかったし、いまでもまた、若手研究者のあいだでその名は確実に忘れ去られつつある。

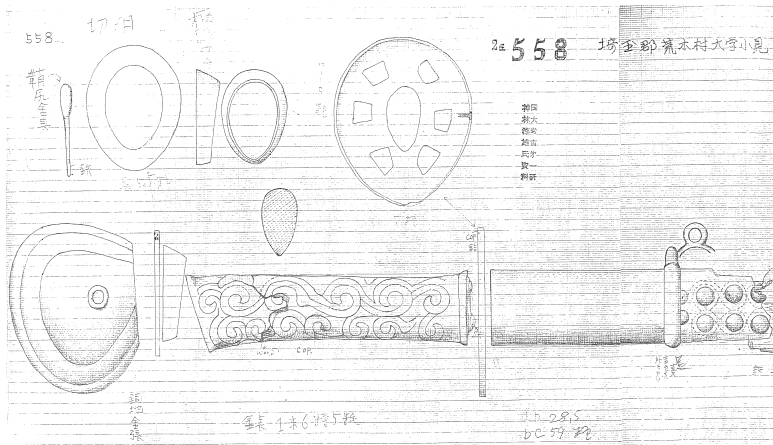
第2項 研究史2a期 — 「刀剣を材料とした研究」と、甲冑・馬具研究との温度差 —

1945年3月に群馬県八幡観音塚古墳、1950年4月に千葉県金鈴塚古墳が発掘調査され、従来知られていなかった鶏冠頭大刀がそれぞれ出土した。鶏冠頭大刀は当時「鳥首大刀」と呼ばれていたが、1959年に金鈴塚古墳出土品が重要文化財に指定される際、室町時代の刀にも「鳥首太刀」と呼ばれるものがあるために、混同を避けて「鶏冠頭大刀」として登録された経緯がある。これによって、現在認識されている主要な装飾大刀形式が出揃ったのである。

金鈴塚古墳の調査を担った早稲田大学の瀧口宏は、鶏冠頭柄頭のデザインはそのほかの大刀とまったく異なるが、左右非対称なつくりは上代日本人が創出した頭椎大刀に通低すると述べ、仏教伝来前後に渡来した大陸系の忍冬文を刀に表現したものと理解した〔瀧口1952〕。また、観音塚例が古く、金鈴塚例が新しいとみたが、その根拠については明示されていない。

ここまで関東、関西で発展した刀剣研究だが、九州でも、1960年代に九州大学助手であった小田富士雄による三累環頭大刀の型式分類が、個別形式にかんする分類の端緒として注目できる〔小田1966〕。

ただ当時の研究の潮流全体を一言であらわすならば、古墳社会における刀剣やその佩用者の性格を考える



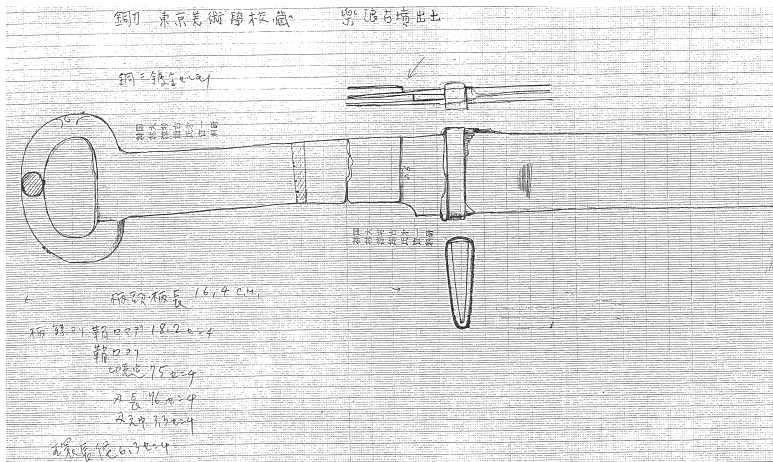
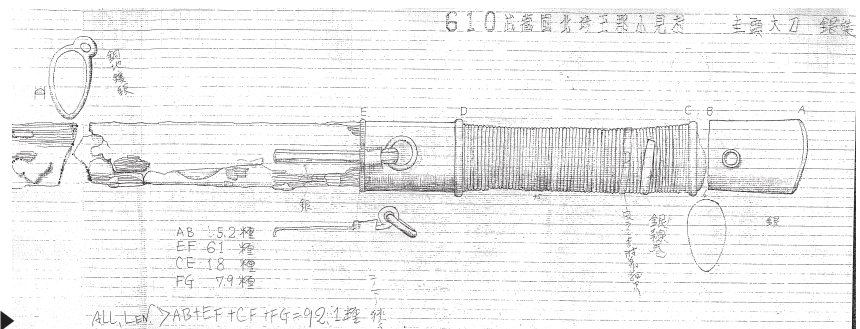
金銅装鐔の断面や、鞘飾金具の烈点文への着眼は、こんにちの研究にも通用する。

しかし、把の断面をベタ塗りしている点に、内部構造の理解が十分ではなかったことがあらわれている。

◀小見真観寺古墳出土の頭椎大刀

環付足金具の先端が屈曲する構造は、豊島直博による最新の研究でも重要視されるものである。
単脚足金具が銅地鍍銀であることが注記されている点にも、観察の細やかさや卓見性がうかがえる。

小見真観寺古墳出土の圭頭大刀▶



環部の断面図や、鉄刀の茎と環頭の茎の関係がわかる側面図、鞘口金具(?)の断面図が示されており、朝鮮半島の環頭大刀の構造をうかがうことができる。

◀楽浪古墳出土の素環頭大刀

○20985 神奈川県立歴史博物館蔵

◀院内2号墳出土の双龍環頭

橋本英将による双龍環頭大刀院内系列の基準資料である。



直弧文の立体的表現や、各部品を結合するためのほぞ穴の断面図などは、こんにちの資料との直接対比に耐えうる。

各地出土の鹿角製装具▶

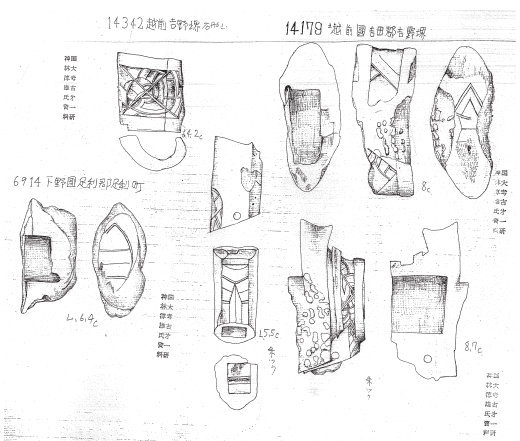


図5 神林資料の一部〔國學院大學博物館提供〕

「刀剣を材料とした研究」が醸成された段階、と評価できる。たとえば、大塚初重が大和王権の形成過程を武器の発展と照らし合わせながら説明したことをはじめ〔大塚1959〕、古墳時代の武装整備の変遷と社会の進展との比較〔西川1966〕、副葬された武器・武具の組みあわせに注目した群集墳の軍事編成（≒階層性）の検討〔甘粕1969〕、装飾大刀佩用者の性格への言及〔桐原1969、向坂1971〕などが目立つ。

しかしながら、このうち大塚や西川宏、甘粕健らの研究においては、刀剣は「あるなし論」の域を出ておらず、1960年代末以降に盛行する甲冑の保有意義論、軍事組織論の萌芽的側面がつよかった。馬具、騎馬文化関連では、1949年に発表された江上波夫の「騎馬民族征服王朝説」が、皇国史観から解放された戦後復興期の大衆にひろく受け入れられるとともに、1990年代以降の騎馬文化研究を牽引する桃崎祐輔や諫早直人の研究の基層に影響をあたえた。さらに、小林行雄によって、甲冑が古墳時代中期の特質を語るうえで鍵となる資料、あるいは列島における馬具の漸次的な変化そのものが「騎馬民族征服王朝説」へたいするアンチテーゼとなることが認識され〔小林1950ab・1951a〕、その命題や仮説を検証する過程で各々の型式学的研究が分岐、進展し、その後の古墳時代研究全体の底上げに貢献したのにたいし、刀剣の研究は、戦後に出土した重要資料の一点豪華主義的な系譜論へと狭隘化していった。

このように刀剣研究はその黎明期にすぐれた分析視点が芽生えていたにもかかわらず、個別の型式学的分析を古墳時代研究に昇華するうごきは馬具や甲冑よりも遅れ、重要資料の報告や埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣の金象嵌銘文発見を受けてX線分析が普及する2c期以降を待たなければならなかった。その最大の理由は、馬具や甲冑は金属部品の結合関係が比較的良好に観察できる「開いた構造」であるため、1960年代以前の後藤守一、小林行雄、小野山節、原田大六、北野耕平らによる研究の黎明期から精緻な断面図や展開模式図が作成されていたのにたいし、刀剣は腐朽しやすい有機質製装具を多くともない、都合よく破損していないかぎり断面を肉眼で観察できない「閉じた構造」であるため、平面的な記録にとどまっていたからである。

技術的な制約によって神林淳雄でさえ乗り越えることができなかったこの「構造の壁」こそが、刀剣の型式学的研究が停滞した1960年代を前後して、分類と編年の大枠が示された馬具や甲冑研究との決定的ともいえる違いなのである。ここにちなみ、埼玉県稲荷山古墳の辛亥年銘鉄剣や兵庫県箕谷2号墳の戊辰年銘鉄刀をもちいた古墳実年代論争にたいして刀剣研究の立場から決着をつけられていないなか、実年代資料をもたない甲冑や馬具、鉄鏃が古墳の編年や日韓交差編年にまで貢献している状況は〔白井2003、鈴木一2014a・2017〕、まったくの皮肉といわざるをえない。

第3項 研究史2b期 ― 重要資料の蓄積と系譜の認識、装飾大刀は威信財か？ ―

1. 古代東アジア史のなかの環頭大刀

ただし、個別の資料にもとづいた型式学的研究こそ馬具や甲冑に遅れをとった反面、刀剣をめぐる理論研究や系譜論は、町田章、穴沢味光・馬目順一らによって比較的早い段階に高度化されたことに触れておかなければならない。

その最大の立役者は、1971年に韓国公州市武寧王陵から出土した一振の単龍環頭大刀だろう。この大刀の細部には豪華な装飾が緻密にほどこされており金属工芸史的にも注目されるが、それ以上に重要なのは、共伴した墓誌に「寧東大將軍百濟斯麻王、年六十二歳、癸卯年（523年）五月丙戌朔七日壬辰崩」と記され、王の生没年や大刀の製作下限年代を示す定点資料となっていることである。そのため、日本の古墳から出土する単龍鳳環頭大刀の祖形として注目を集めたが、それ以上にこの大刀がもつ文化史的重要性をいち早く察知し、奇しくも同じ1976年に古代東アジアの刀剣体系を描こうとしたのが町田と穴沢らであった。

町田は、日本列島の古墳から出土する環頭大刀の系譜を求めるなかで、『晋書』『輿服志・佩劍条』や『大唐六典』『卷16武庫令条』にみられる佩刀の制度を引用しながら、武寧王陵の単龍環頭大刀もふくめ、列島

で出土する装飾大刀の起源を中国南北朝における武官の刀制に求めた。そして、環頭大刀は中国王朝が藩国に賜与した將軍号の象徴であると捉えるとともに、汎列島的に分布するその類似品は、倭国が地方豪族を掌握する過程で賜与したものと評価した〔町田1976〕。また従来の研究では、朝鮮半島の装飾大刀は列島出土品との類似資料として引き合いにだされるに過ぎなかったのにたいし、半島出土の環頭大刀を外観のみならず、構造の違いにもとづいて分類した点も重要である。

穴沢・馬目も、朝鮮半島で出土した龍鳳文環頭大刀についてデザインの退化にもとづく変遷観を示した。そして、町田と同じくその系譜を中国南北朝に求め、冊封体制下における朝鮮三国の政治体制の再編にともなう普及した儀刀であると評価した〔穴沢・馬目1976〕。

なお、町田はこれらの研究に先立って、中国西晋（265-316）の透彫帯金具を中心としながら東アジア諸国における帯金具様式を類型化し、金工服飾品の差異による王権の権威づけモデルを構築している〔町田1970〕。さらにさかのばれば、東洋史学の西嶋定生が、中国の冊封体制という東アジア広域を包む巨大なイデオロギーのなかで、日本列島各地における古墳の築造が政権中枢と地方豪族の「擬制的同祖同族関係」にもとづく身分表現であると評価していることや〔西嶋1961〕、朝鮮半島支配を推しすすめる倭の五王が、中国南朝の権威を借りるべく宋に官爵叙正の要請を繰り返したという坂元義種の見解が〔坂元1967・1968〕、町田や穴沢による刀剣文化拡散モデル着想の背景にあったのではないだろうか。

穴沢は刀剣研究の最年長者となったこんにちなお、日本統治時代の朝鮮半島出土品を記録した「梅原末治考古資料」をはじめ海外の重要資料を率先して後進に紹介しているが、その研究戦略からまず学びとりたいのは、私掘にともなう出土品や三等資料、個人の蒐集資料もふくめた網羅的な集成を志向していることである。穴沢のたかい知的関心は豊かな語学力と相まって装飾大刀以外の武器や金工品全般におよび、そのユーラシア全体を射程にのこした文化系統論は、いずれも学史的に避けて通れない論点を示している〔穴沢・馬目1973・1984ab・1988ab・1991ほか多数〕。これらの研究をつうじて、3世紀から4世紀にかけて生じた東アジア騎馬文化の複合期と、ヨーロッパの民族大移動期から初期中世にかけての文物がよく似ていること、すなわち、その背景にある中央アジアや西アジア、東ヨーロッパの文化接触が自明のものとなった。また、このような遠大な研究戦略のなかで蓄積された学識もさることながら、30編以上もの連名論文に示された馬目順一による精緻な図面の数々が、穴沢の筆致に息吹をあたえてきたことも忘れずに記しておきたい。

2. 穴沢による「威信財システム」の導入とその余波

穴沢による研究のうち、古墳副葬品研究全体にあたえた影響のおおきさで忘れることができないものとして、短報「三角縁神獣鏡と威信財システム（上）（下）」で、欧米の人類学研究におけるマーシャル・サーリンズ（Marshall David Sahlins）やカール・ポランニー（Karl Polanyi, 1886-1964）らの学説を紹介しながら「威信財システム」の語を日本考古学に導入し、その概念を定義したことも挙げられる〔穴沢1985ab〕。

穴沢は「威信財システム」について「支配者がめったに手に入らない遠来のめずらしい威信財の入手ルートににぎり、威信財を配下の小首長に分与することにより支配権を維持するようなくみ」と説明し、その具体例として古墳時代前期の三角縁神獣鏡をとりあげ、魏からもたらされた三角縁神獣鏡が邪馬台国によって各地の首長に「再分配」されたこと、それを下賜された各地域においてもさらに下位の小首長にたいして「再分配」されたこと、4世紀後半には倭製鏡が製作され、それが東日本の首長にたいして配布されたことなどは、いずれも「威信財システム」の概念で説明できるとした。

「威信財システム」の提起をきっかけとして、1990年代以降、古墳副葬品の分配・流通システムから有力首長間関係を描く試みが流行したが、ここで問題なのは、すでに下垣仁志による辛辣な批判があるように〔下垣2010〕、穴沢の「威信財システム」の定義が変容されるかたちでこんにちにいたり、鏡をはじめ、甲冑や

馬具、刀剣、装身具といった金属製品全般が威信財として説明されることが少なくないことである。

これは先の穴沢論文が稀覯本であることに因ると想像するが、穴沢は当初より、装飾大刀についていえば「極めて出土例数が多く、群集墳からも出ており、威信財的性格よりもむしろ、ある種の官人的地位の表章であった可能性が強く、ことによると一部はヤマトの大王からの直接的賜与というよりも、ある一定の「官位」をえた地方小首長が大王に付属する工房に発注入手したことも考え」ていることは〔穴沢1985b：p.3〕、学史を重視する立場から強調しておく。

たとえば、畿内中枢および地方最高首長墳に副葬されることの多い振り環頭大刀と、地方の群集墳から多く出土し、列島出土品の3分の1が北部九州に集中する三累環頭大刀を同様の定義で理解できるだろうか。むしろ、福岡県一貴山銚子塚古墳や京都府椿井大塚山古墳、奈良県黒塚古墳のように、三角縁神獣鏡との共伴事例が目立つ外来系譜の素環頭大刀のほうが、穴沢による威信財の定義にそっていないだろうか〔図6〕。その実証はむずかしいが、一口に「装飾大刀」といっても、時期や系譜によってその性格が異なる可能性はじゅうぶんに考えられる。後年、鈴木一有も古墳副葬品がもつ性格と流通についてまとめるなかで、財の性格について次の5種類を挙げている。

威信財 物神的な性格をもつ財。所有することで、社会的格差が生ずる。

表徴財 物神的な性格が薄く、政治的・階層的格差を表現するもの。

奢侈品 貴重であるが、所有することに社会的関係が表現されないもの。

日常財 日常生活における実用品。

儀礼財 儀礼用に特別にあつらえたもの。非日常財。

このうち古墳時代後期の装飾大刀は威信財的性格を色濃く残しながら表徴財的な性格も混在していたと考えている。また、新しい威信財体系が創出されると、古い様式の威信財はその性格を失い、奢侈財や日常財に転化するという指摘は、財の多様性が顕著になる後期社会を分析するうえで有意である〔鈴木1999〕。

時を同じくして内山敏行も、「ものよりも身分が重視されるようになると、貴重な財の性格も変化する……（中略）……威信を量的に誇示する大量副葬も後期には衰退してゆく。威信は多量の刀で表象するが、身分は1本の刀でも表象できる」と述べている〔内山2000：p.160〕。刀剣研究者がようやく刀剣の基本構造をあきらかにしつつあった20世紀末において、こんにちの馬具・甲冑研究を牽引する鈴木と内山が刀剣を例に挙げながらこうしたモデルを示していたことは、学史の一コマとして記憶しておきたい。

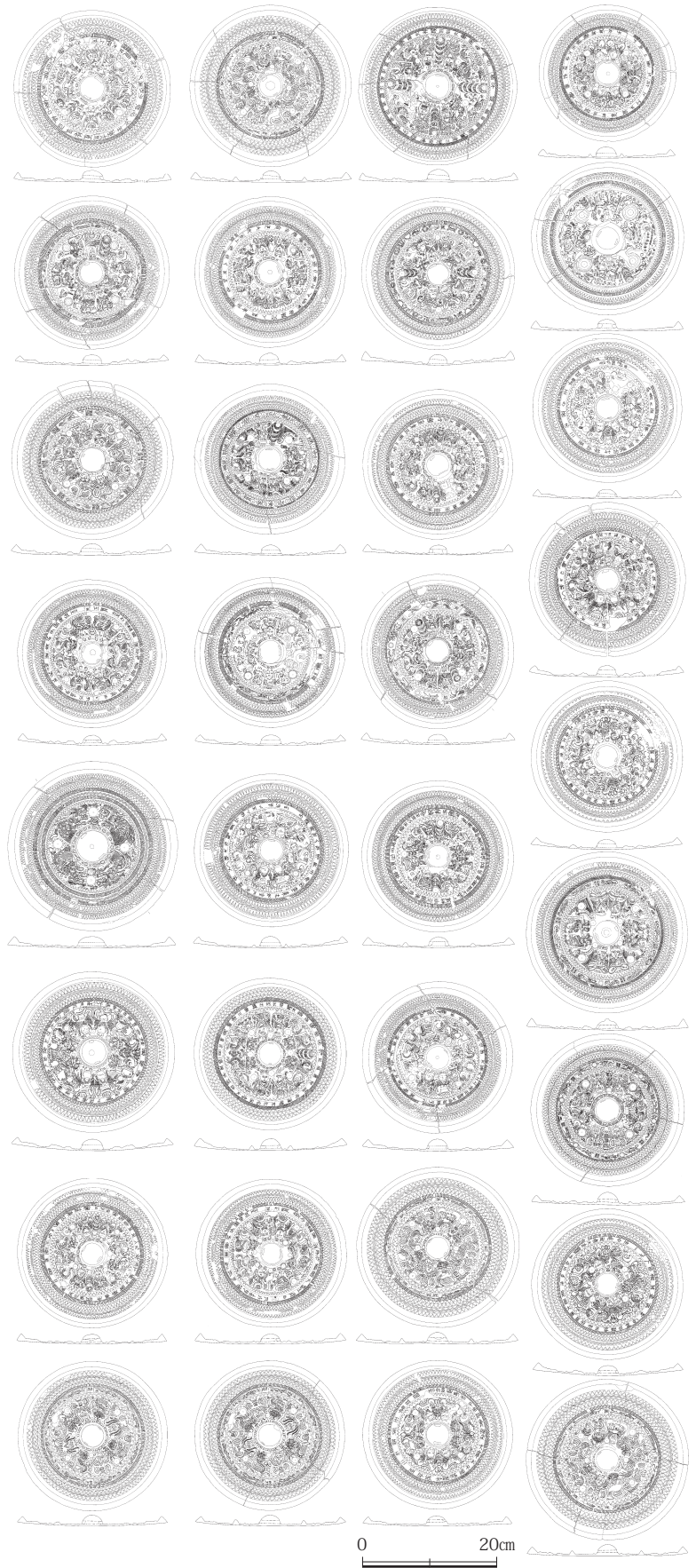
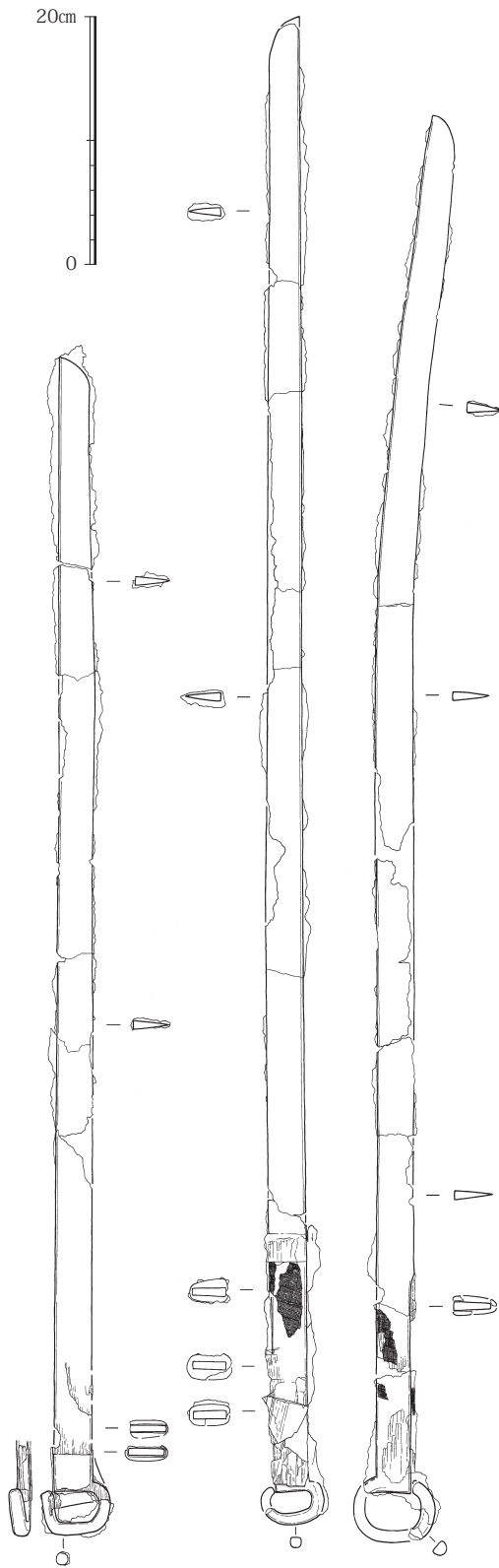
刀剣研究の立場からは、大谷晃二によって、倭における装飾大刀の流通構造については特定の職掌や氏族、首長権を反映するというモデルが提示されているが〔大谷晃1999〕、そのおおきな枠組みは後述する、倭系大刀＝国内の身分表象、半島系大刀＝国際関係時の身分表象、という町田の図式から抜け出すものではない。つまるところ、町田、穴沢らの研究をつうじて、装飾大刀は一国史的に理解できるものではなく、東アジア全体の刀剣史や政治体制に波及する問題を孕むことが喚起されたのである。

第4項 研究史2c・d期 — 研究の既定路線化、モノからコトへ —

1. 倭装大刀研究の進展

2c・d期には、奈良県藤ノ木古墳や大阪府峯ヶ塚古墳などで、外装がよく残る振り環頭大刀（狭義の倭装大刀）の出土があいついだ。

木や鹿角などの有機質材を多用する振り環頭大刀の装具は腐りやすいから、振り環と刀身は遊離して出土することが多い。そのため、長らく振り環が刀装具であるとの認識は不十分だったが、1980年代後半以降、静岡県団子塚9号墳、三重県井田川茶白山古墳出土品の報告や、奈良県布留遺跡における装具の出土も重なり、倭装大刀の認識がひろまった。くわえて1993年には、熊本県江田船山古墳出土銀象嵌銘鉄刀の修理報



図出典
奈良県立橿原考古学研究所編 2018『黒塚古墳の研究』八木書店

図6 黒塚古墳の素環頭大刀と三角縁神獣鏡

告がなされるとともに、福岡県番塚古墳の報告書も刊行され、振り環を有さないものの、江田船山古墳例に連なるような象嵌文様を刻む倭装大刀の詳細な観察がなされている。

このように、日韓双方における最重要資料の出土や報告があいつぐなかで町田は、6世紀の有力墳では倭装大刀と外来系大刀の二者が組みあわさって副葬されることを見だし、前者を倭国内の身分表象、後者を国際関係時における身分の表象であると理解した[町田1988]。そして、多様な装飾大刀の存在は、地方の中小豪族を倭王権の一員として組みこむ過程の複雑な身分関係を反映していると想定した。白石太一郎も、振り環頭大刀を三重県伊勢神宮に伝わる玉纏太刀の源流と捉え、大王家に連なる者が佩用する大刀であると評価した[白石1993]。

ところが、町田が描いた図式は、のちに内山敏行による後期武装論に影響をあたえたといっばうで、「刀剣史」にたいするまなざしは衰微していった。ただしこれは、1970年代までは大刀の構造理解が物理的な制約を受けており、列島で出土した個別の資料を歴史叙述にまで昇華できる段階に達していなかったことに因ることを強調しておきたい。

このような型式学的研究の停滞を経て、刀剣も古墳の編年や古墳群の階層構造、古代の技術を検討するうえで重要な資料になりうると認識されるようになるのは、1980年代から1990年代のことであり、各々の研究者みずからが目的的に観察した資料にもとづく「モノ」研究路線が派生した。その代表が、PHALANX — 古墳文化研究会 — による編年研究、新納泉、福島雅儀らの古墳実年代論、西山要一、橋本博文による象嵌大刀研究、あるいは横田義章、置田雅昭、鈴木勉らによる古代の技術復元論である。

このような、古墳時代の刀にたいする認識の深まりは、装飾大刀を主題とした博物館展覧会の活発化にもつながった。とりわけ、1996年秋にほぼ並行して開催された大阪府立近つ飛鳥博物館『金の大刀と銀の大刀 — 古墳・飛鳥の貴人と階層 —』展および島根県立八雲立つ風土記の丘資料館『黄金に魅せられた倭人たち』展の図録は、当該時期までの成果をまとめた充実した内容となっている。

2. 新納泉の装飾大刀研究 [図7・8]

新納泉は「単竜・単鳳環頭大刀の編年」[1982]、「双竜・双鳳環頭大刀」[1983a]で龍鳳文環頭大刀をI～VI期区分、「関東地方における前方後円墳の終末年代」[1984]で単龍環頭・双龍環頭・頭椎大刀の形式を横断した10段階編年、「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」[1983b]で群集墳の階層構造論、「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」[1987]で実年代論など、こんにち的な装飾大刀研究の柱を構築し、群集墳の構造分析にも影響をあたえた。

このうち実年代にかんしては装飾大刀の単系列的な変化を前提としたうえで、①武寧王陵刀（I式）に後続する単龍II～VI式の多くが陶邑TK43型式の須恵器をとまうことをもってTK43型式期の開始時期が西暦520年頃をあまり下らないと評価するとともに、②兵庫県箕谷2号墳の戊辰年銘大刀の実年代を608年と

推定し、520年からそのあいだの時間幅を先の10段階編年にもとづいて機械的に輪切る、という論法をとった。

しかし、TK43型式は6世紀後半に比定されるものだから、新納の年代観は古墳時代研究全体のなかでもとりわけ古い。石室や須恵器、そのほかの副葬品複合によって構築されるべき古墳の年代観を、数少ない装飾大刀をもって引きあげることはむずかしい。

新納による単龍・単鳳環頭大刀の単系列的な理解にたいして穴沢・馬目は、単龍鳳環頭のうち祖型とそのコピーともいえる類似した製品群を11の「系列」で括

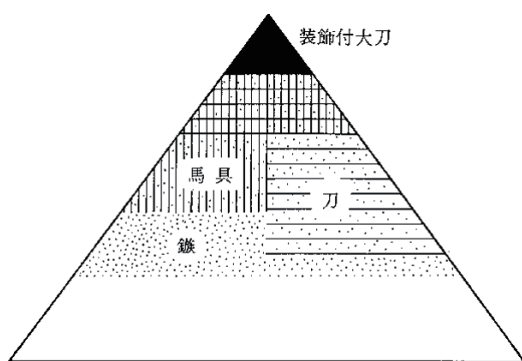


図7 新納泉による群集墳の階層モデル [新納1983]

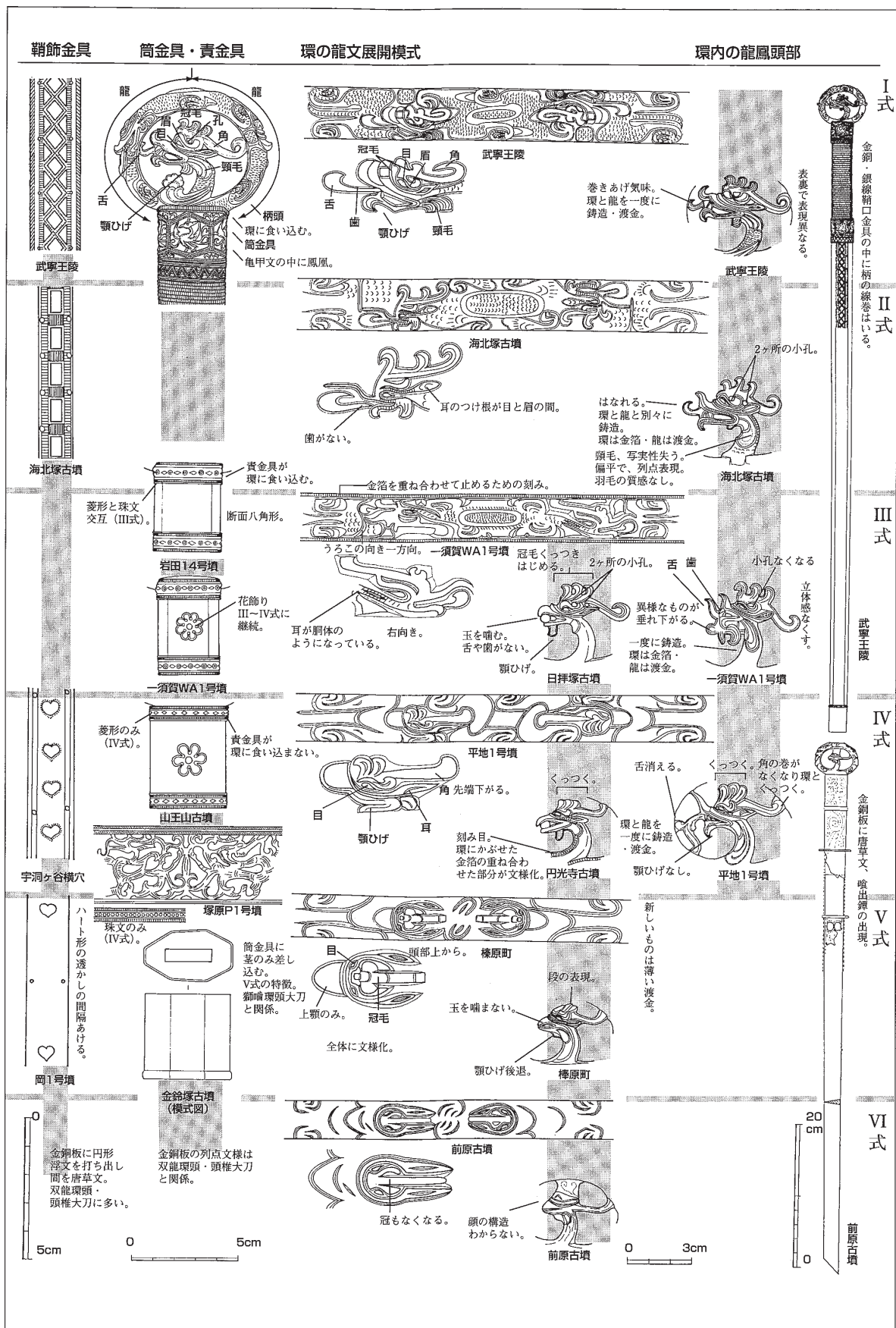
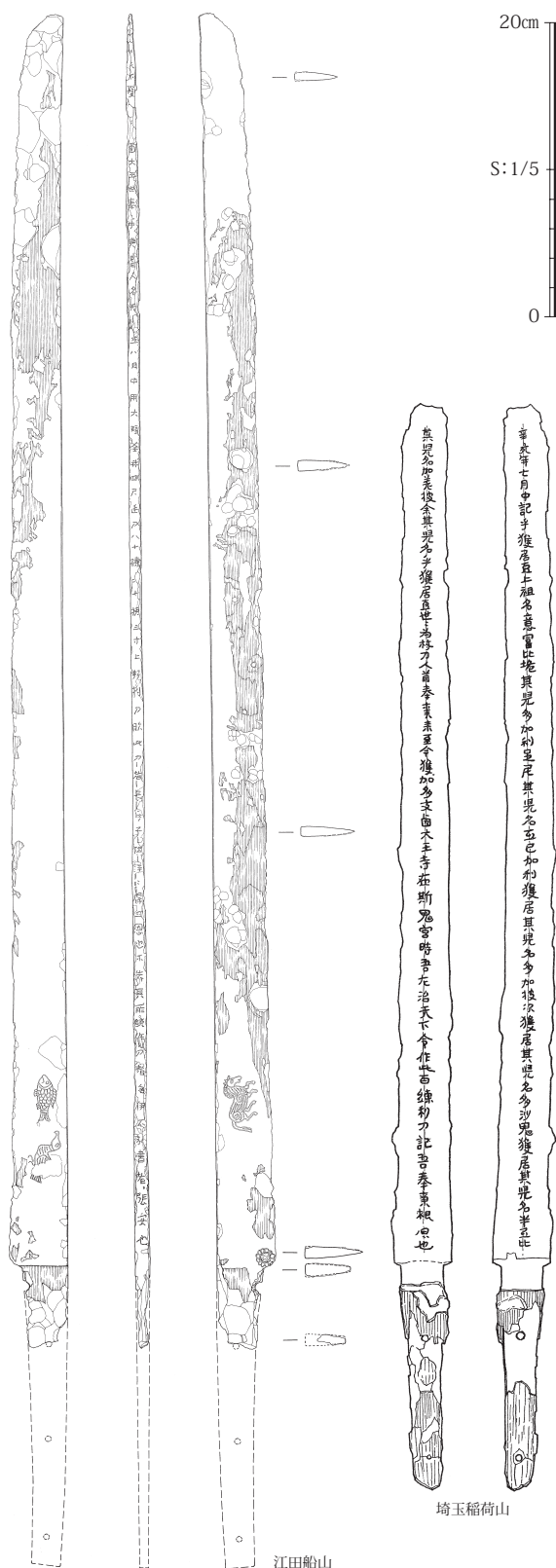


図8 新納泉による単龍環頭大刀の編年〔図は一瀬1996で整理されたもの〕



図出典
江田船山 (東京国立博物館 1993 『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』)
埼玉稲荷山 (埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稲荷山古墳』)

図9 獲加多支鹵銘刀剣

り、多配列的な4段階編年を示した〔穴沢・馬目1986〕。この系列の視点や概念はのちに、小谷地肇の獅嚙環頭大刀論、野垣好史の三累環頭大刀論、橋本英将の双龍環頭大刀論、持田大輔の単鳳環頭大刀論〔小谷地2000、野垣2002、橋本英2003、持田2010〕、そして大谷晃二や金字大の研究全般に影響をあたえ、装飾大刀分類の有効な方法として定着をみる。

3. 「獲加多支鹵」銘刀剣の発見、

古墳実年代論への展望〔図9〕

象嵌刀剣とは鑿で鉄製の装具や刀剣身に溝を彫って、そこに金・銀・銅の線をはめこみ、表面を磨くことによって、文様や文字をあしらう刀剣群の総称である。とりわけ、文字をあしらうものを銘文大刀とも呼ぶ。鉄錆によって覆われると、その存在に気づくことができないため、理化学分析や保存処理技術の発展にともなって注目されるようになった。

その最大の契機の一つは、1978年に埼玉稲荷山古墳の鉄剣がX線撮影され、「辛亥年」からはじまる115文字の象嵌銘文が発見されたことだろう。この銘文には、獲加多支鹵大王（雄略）の名、干支年号、オワケー族の系譜、カバネ的な名称、そして「杖刀人」という役職が具体的に記され、文字資料の少ない古墳時代研究に衝撃をあたえた。とりわけ、鉄剣が出土した礫礮をTK47型式期とみるならば辛亥年は西暦471年、という論理が古墳時代研究全体にあたえた影響はおおきい。

この銘文の発見によって、明治期に出土しその解釈をめぐる議論があった江田船山古墳鉄刀の「獲□□□鹵」銘にかんしても、「獲加多支鹵」説が定説化するとともに、文献史学の東野治之による釈読の結果、489年の雄略没後に製作された可能性がたかいことが指摘されるにいたった〔東野1993〕。

1987年は銘文刀剣研究の画期である。この年に正式報告された島根県岡田山古墳の額田部銘銀象嵌大刀は部民制の存在を示す最古の考古資料であるし、兵庫県箕谷2号墳の戊辰年銘銅象嵌大刀は後期古墳実年代論の火種となった。奇しくも同年に金象嵌銘文が発見された千葉県稲荷台1号墳の王賜銘金象嵌鉄剣は、共伴した須恵器が5世紀中葉の

TK208型式であることから、倭国で書かれたことが確実な最古段階の文字資料として注目される。

こうした背景もあり、鉄製品分析におけるX線の利用と象嵌大刀の研究がすすんだ。その代表が、橋本博文と西山要一の研究である。橋本は、茨城県梶山古墳発掘調査報告を皮切りとして、鉄地銀象嵌円頭大刀の変遷観を示した〔橋本博1981・1985・1986ab・1993〕。西山は、古墳時代刀剣の象嵌文様の種類と出現時期を整理して以来、こんにちにいたるまで象嵌大刀研究を牽引している〔西山1986・1999など〕。

しかしながら、こうした流れを組みこんだ純粋な刀剣総論が成立する気配がないなか、なぜか馬具を中心とする研究者によって注目され江田船山古墳出土品の時期分離論や古墳実年代論へつながったことも、刀剣研究史がもつ皮肉な側面の一つといえるだろう〔岡安ほか1986, 白井2003, 白石1997, 桃崎2008など〕。

4. PHALANX — 古墳文化研究会 — の研究

古墳文化研究会の活動のなかで瀧瀬芳之は、それまで環頭大刀中心だった装飾大刀研究にたいして、円頭大刀や圭頭大刀といった、袋状の柄頭をもつ大刀についてはじめて体系的な分類と編年をおこなった〔瀧瀬1984・1992〕。瀧瀬の研究の特色は、「神林資料」を活用しながら、柄頭のみならず全体の装具のセリエーション (seriation) にも目配りしたうえで、円頭大刀、圭頭大刀、方頭大刀、および鶏冠頭大刀の並行関係を整理した点にある。これらの個別形式については近年ようやく、円頭大刀を鈴木一有、圭頭大刀を菊地芳朗、方頭大刀を豊島直博、鶏冠頭大刀を筆者が体系的に論じている〔菊地2010, 鈴木2009, 豊島2014, 第9章〕。また、佩用装置について体系的な分類をおこなったことも〔瀧瀬1991〕、近年活況を呈する各種装飾大刀を横断した編年の先駆けとなった。

白杵勲は、関や茎尻の変化の組みあわせに注目して鉄刀本体を分類・編年し、多変量解析によってこれを追検証している〔図10, 白杵1984a・1986〕。池淵俊一による鉄剣の分類と編年は、白杵の方法論を鉄剣に応用したものであり〔池淵1993〕、いずれも発表以来30年ちかく引用されつづけている。しかしながら、茎

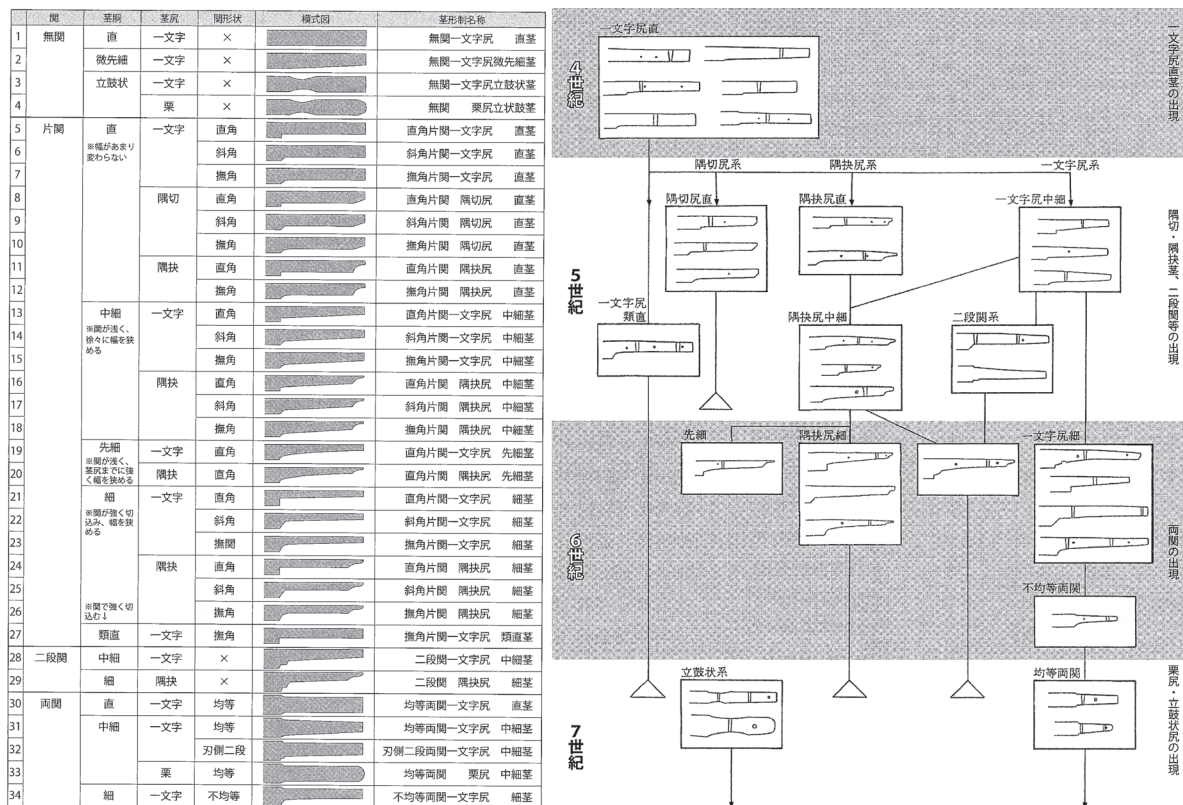


図10 白杵勲による鉄刀の分類と編年〔図は長友2013で整理されたもの〕

のわずかな幅の狭小化などに注目したこれらの編年観は第三者による追検証がむずかしく、その方法論の改善と新たな枠組みの提示が渴望される。

5. 外装研究と刀身本体の関係にかんする研究

以上の研究をつうじて、鉄刀本体と刀装具の編年についてそれぞれ一定の成果が得られた。しかし、刀剣は本来、内蔵する鉄本体をはじめ、柄や鞘にもちいる木や鹿角、繊維などの有機質、ときにそれを飾る金銅や銀板、あるいはガラスなどが緻密な設計にもとづいて組みあう工芸品である。そのため、外装の研究と本体の研究を統合する視点がなければ、古墳時代当時の姿は復元できないし、歴史叙述への貢献度も半減する。

そうしたなか、横田義章や置田雅昭、福島雅儀による、刀身と外装の関係をあきらかにしようとする試みは、膠着しつつあった資料状況を打開しうる鋭いまなざしをもっていた〔横田1982・1984・1986、置田1985ab・1987・1989・1991・1996、福島1983・1991〕。とりわけ横田、置田の研究によって、落とし込み式柄の紐通し孔が隅切尻・隅扶尻茎鉄刀に柄を装着するための工夫であることが解明された意義はおおきい。豊島直博や岩本崇、長友信による最新の研究を参照するにあたって、まずはこうした先行研究に目配りする必要があるだろう。

福岡県内で出土した重要な武器・武具類の保存処理を牽引した横田は、圭頭大刀や頭椎大刀柄頭の製作手順や、象嵌大刀の研究にも着手し、全国的な資料状況をふまえながらそれらの位置づけに臨んだ。原資料の観察に肉薄した横田の叙述から学ぶことは多く、現在の視点からみても遜色ない水準にある。

福島の研究は、刀身本体の茎の変化と柄の形態変化が連動することを重視したものであり、その変遷観は円滑に理解できる〔図11〕。その後、この変遷観を傍証する資料が兵庫県木虎谷11号墳の石室床面の下層（扁

茎板鐔付鉄刀）と上層（直茎両区鉄刀）で確認された。ただしこれは、片関係と両関係の鉄刀を系譜差とみる菊地芳朗の理解を否定するものではない。また福島は、刀装の構造変化の背景として、佩用方法や操刀法の変化を想定するが、箕谷2号墳から出土した戊辰年銘大刀の年代を西暦668年とみる論理をめぐっては意見が分かれるように、刀剣からみた古墳実年代論争の火種ともなった。

6. 金工品としての刀剣研究

鈴木勉は、金工品の観察に工具の痕跡を重視するとともに「基準精度」の概念を導入した。その最大の成果の一つは、峯ヶ塚古墳（6世紀前半）と藤ノ木古墳（6世紀後半）から出土した振り環頭大刀にほどこされた装飾技法の細かさが酷似することから、技術の根幹ともいえる工具・作業姿勢・基準精度が閉鎖的な集団内で継承されてきたこと、すなわち倭装大刀生産における強固な伝統性を看破したことだろう〔勝部・鈴木1998〕。

鈴木はこれまでに藤ノ木古墳の振り環頭大刀や石上神宮の七支刀、福岡県宮地嶽古墳の巨大頭椎大刀などを復原しているが、その観察眼に裏づけられた金工品の復元製作はミリメートル水準での観察や分

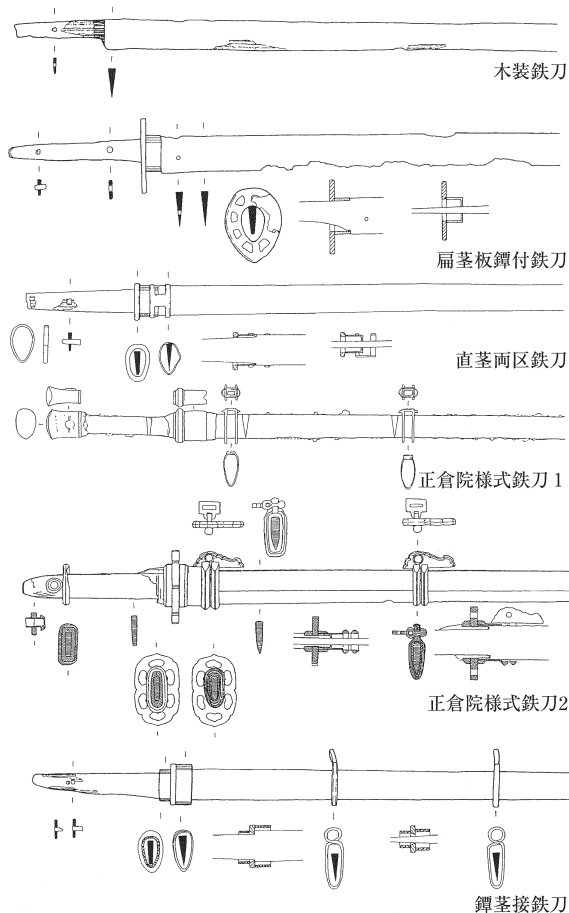


図11 福島雅儀による鉄刀の分類と編年〔福島2005〕

析を喚起し、近年における大谷晃二や金宇大の装飾大刀研究をはじめ、諫早直人や土屋隆史らによる各種金工品研究に影響をあたえた。

第5項 研究史3期 — 既存資料の再検討が研究の深化をうながす —

1. 研究環境

2c・d期の新納泉、瀧瀬芳之、白杵勲らの研究によって、環頭大刀、袋頭大刀、刀身の分類が既定路線化され、以後の研究の直接的な系譜は多かれ少なかれこのいずれかに連なる。しかし同時に、その後の研究の多くはこれらの成果を無批判に継承してきたことも否めない。その背景の一つとして、1990年代以降に出土した資料のうち型式学的に重要なものは、中期では兵庫県茶すり山古墳の刀剣、後期では長崎県双六古墳出土装飾大刀群や兵庫県黍田15号墳の双龍環頭大刀をのぞくと、あまり見当たらないことが挙げられる。

このように、飽和する資料環境のなかで次に求められるのは、埋もれてしまった既存の資料について、その真価を引き出す新たな視点で再検討することだろう。実際に、熊本県江田船山古墳や福岡県番塚古墳、島根県上塩冶築山古墳、かわらけ谷横穴墓、兵庫県文堂古墳、群馬県綿貫観音山古墳、茨城県風返稲荷山古墳などの重要資料の多くは昭和以前に出土したものであり、1990年代以降、第V・VI世代の研究者に再報告されることによって、質のたかい情報が共有された。また、個別具体的な型式学的研究の進展は、武器や武具の生産体制にかんする研究へつながった。

また、刀剣からみた後・終末期の実年代論として、新納泉と福島雅義のあいだに、箕谷2号墳の戊辰年銘鉄刀を軸とした論争がある[新納1987・2009, 福島2005・2008・2010]。すなわち、戊辰年を西暦608年とみるか668年とみるかによって生じる最大60年の年代的懸隔は、古墳全体の年代観にも影響するが、どこまでも平行線でありかならずしも新たな見解を生むものではなかった。鉄刀と装具の型式学的研究を精緻化させるとともに、あらためて石室や共伴品の型式を整理してゆくことでしか突破口はみえないだろう。

そうしたなか2000年には、よりひろい武器研究の理解の共有をめざし、菅谷文則、田中晋作らが中心となって古代武器研究会が発足した。この研究会が議論の対象とする地域は東北アジア全体にわたり、刀剣を軸とした古代の武器生産体系や武装整備の解釈なども展開され、こんにちにいたる。この研究会では毎年、韓国や中国の研究者を招聘して、当該地における武装体系の概略が紹介されていることも意義深い。この研究会を牽引した菅谷が2008年に編んだ論集『王権と武器と信仰』でも、多くの論者が刀剣に言及している。

古代武器研究会とならび、鉄器文化研究会の活動も2000年代前半に盛んであった。2000年の『表象としての鉄器副葬』では鉄製品のもつ象徴性について、2003年の『鉄器研究の方向性を探る — 刀剣研究をケーススタディとして —』では鉄製品の製作技法などについて議論され、伝統的な方法論からの脱却を図る機会となったが、刀剣研究そのものの総括や展望の提示にはいたらなかった。2005年の古代武器研究会・鉄器文化研究会連合研究集会『馬具研究のまなざし — 研究史と方法論 —』では日韓の馬具研究文献約800編が集成され、それまでの研究の到達点が示されていることと対照的である。ただ、こうしたなかにあつて、装飾大刀総論を志向する松尾充晶や橋本英将らのような研究が萌芽したことには触れておくべきだろう。

まず、2003年には小学館より『考古資料大観7 — 鉄・金銅製品 —』が刊行され、型式学的に重要な金属製の武器・武具・馬具の写真が多数掲載されるとともに、各項目の到達点が示された。

2002年度から2004年度にかけて島根県古代文化研究センターが実施した古代文化活用推進事業『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』では、倭における主要な装飾大刀集中地域の様相が整理された[島根県教育庁古代文化センターほか2005]。その目的は、時期や地域、大刀形式によって多様な出土状況の背景を検討することにあつた[松尾2005a]。その結果、特定形式の遍在が認められる東西出雲、多形式が混在する上野、単龍鳳環頭大刀が集中する東遠江・東駿河の様相が浮き彫りにされ、各地域

の首長権構造とのすり合わせが示された [図12, 松尾2005b]。

これらのうごきと並行して、学史の整理や各地の装飾大刀集成もすすんでいる。研究の現状をまとめたものとして、豊島直博、橋本英将、菊地芳朗の仕事がある [豊島2013, 橋本英2013, 菊地2004・2014]。なかでも菊地は、鉄製刀剣と装飾大刀を複合的にあつかい、最も体系的に諸論点を整理している。長友信も、多岐にわたる柄装具の分類や白杵勲による複雑な鉄刀分類を、それぞれB5判一枚に再整理している [長友2011・2013]。『別冊・季刊考古学』(15・16・17・19号)では列島各地の古墳時代像が特集されるなかで、刀剣論も柱の一つとなっている。

さらに、2019年度から4か年計画ではじまった古代歴史文化協議会の共同調査研究事業「古墳時代の刀剣類」では、古代歴史文化にゆかりの深い全国14県(埼玉・三重・奈良・和歌山・兵庫・石川・福井・鳥取・島根・岡山・広島・福岡・佐賀・宮崎)における刀・剣・ヤリ・鉾の集成がすすめられている。

そして、こうした3期の刀剣研究全体を牽引するのが大谷晃二、金宇大、豊島直博の三氏である。彼らの研究によって、かつて甲冑研究や馬具研究が歩んだ国家形成論や日韓交渉論の光明が差してきた。検討対象とする資料は可能な限り図化・撮影し、その観察所見に依りながら立論する彼らの研究姿勢は、すべての考古学研究者が見習うべきであるし、もはやそれ以外にこれらの研究を超える術は存在しない。彼らの研究は、高度な理化学分析をもちいずとも肉眼観察で抽出しうる情報を最大限総合したものであり、現状で至高の刀剣観察マニュアルとしての性格ももつ。以下、「装飾大刀の流通に関わる問題については、個別の大刀に限定して議論される傾向があるが(……中略……), 装飾大刀の全体のあり方に配慮した上で総合的に検討する必要がある」という批判も認識しながら [鈴木一2012d : p.122], 三氏の方法論を概観しよう。

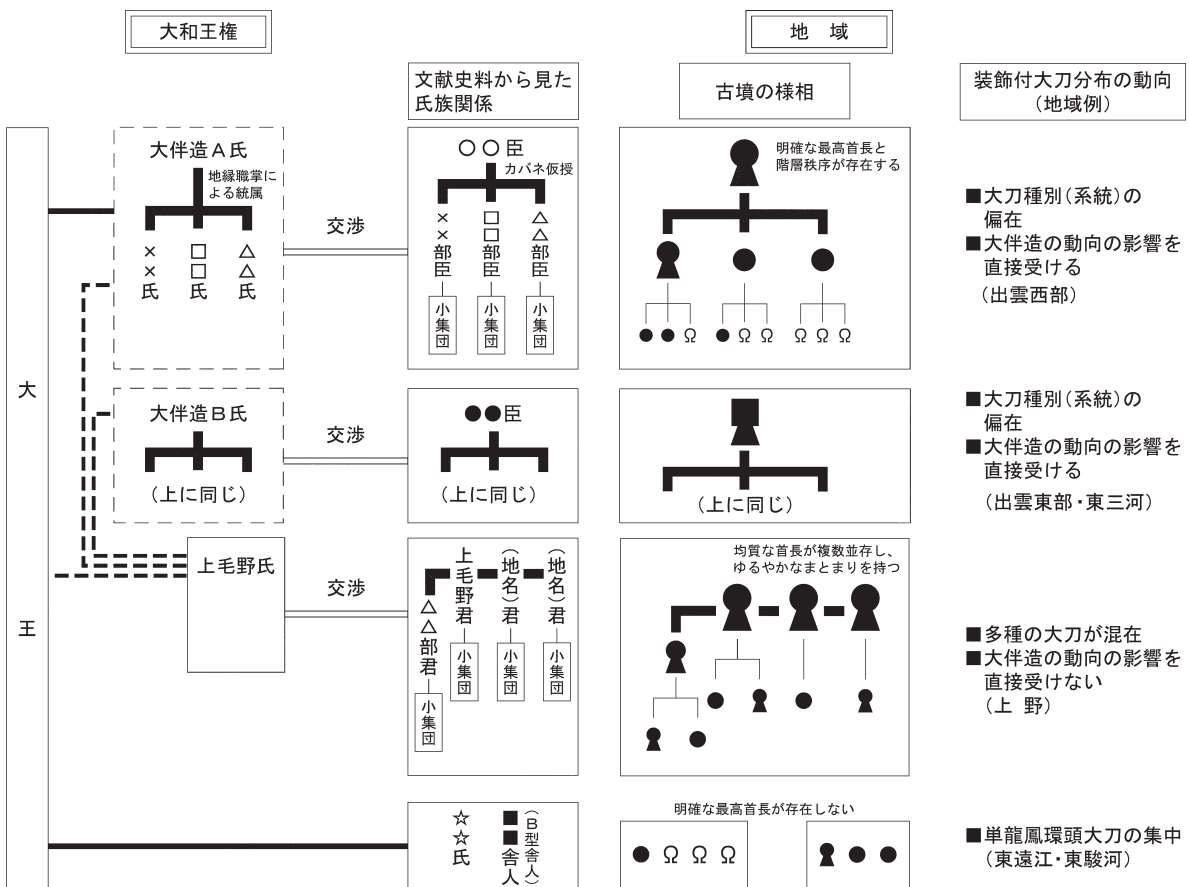


図12 地域の首長権構造と氏族・装飾大刀 [松尾2005b]

2. 大谷晃二の研究 — 刀剣の第2の実測図 — [図13・14]

大谷の装飾大刀研究は、出雲と陶邑の須恵器編年の並行関係をさぐるなかで、地域性のバイアスがちなさい資料として装飾大刀と馬具をとりあげたことにはじまる [大谷晃1994]。装飾大刀の個別具体的な型式学的研究は、1996年の島根県立八雲立つ風土記の丘資料館『黄金に魅せられた倭人たち』展、および島根県上塩冶築山古墳出土装飾大刀の報告 [大谷晃1999a] に端を発し、穴沢や新納、瀧瀬による研究の大枠を活かしながら既存資料の再検討を蓄積するなかで、従来の実測図と大刀を平面にスライスした状態の構造模式図を併記し、装飾大刀の組立工程をあきらかにしてきた。

このような模式図の起源は、藤ノ木古墳出土刀剣類の報告で示された、外装と内蔵される刀剣本体の輪郭それぞれを合成した表現にあるが、大谷の研究以降、綿貫観音山古墳や風返稲荷山古墳出土大刀などの報告でも応用されている。くわえて、刀剣の組立工程をプラスチックモデルの説明書のように立体的に表現する試みもまた、上塩冶築山古墳出土円頭大刀や、かわらけ谷横穴出土双龍環頭大刀の報告以来多くの研究者が練磨し、現状では千葉県金鈴塚古墳の単龍環頭大刀や獅嚙環頭大刀、兵庫県文堂古墳の頭椎大刀の報告がその到達点を示している。これらは刀剣研究の深化に欠かせない第2の実測図といえ、刀身本体と外装の研究を総合するうえで基礎的かつ重要な要素となっている。

いっぽう、このような大胆な作業と同時に穴沢啄光が提唱した「系列」の概念を発展させながら、環頭部周囲の文様や金属製柄巻の刻み目の施工方法など、ミリメートル水準での観察を複合することによって装飾大刀の群のまとまりを抽出していることも、大谷の特色の一つである。大谷はこうした研究を積み重ねるなかで、単龍鳳環頭大刀の特定の資料群には同範品や同型品がふくまれることに注目して工人の技術交流があったことを看破し、舶載品と倭製品の峻別に一定の見通しを立てた [大谷晃2006]。

また、上塩冶築山古墳出土装飾大刀の評価をめぐるなかで、出雲東部から出土する装飾大刀の系譜が外来系の環頭大刀に集中するのにたいして、西部には後期後半以前に伝統的な倭装大刀が集中することをあきらかにし、それぞれ渡来系氏族である蘇我氏と、倭の軍事面での職能を負っていた物部氏とのむすびつきを想定した [大谷晃1999b]。大谷自身、それを短絡的な解釈であると述べているものの、個別具体的な型式学的研究と古代史研究の総合化をはかるうえでの良質のモデルといえる。

さまざまな装飾大刀の系列化をすすめる大谷の一連の研究は、日本最多の装飾大刀出土数を誇る金鈴塚古墳の共同研究に収斂され、日韓の金銀装大刀編年をⅠ～Ⅳ段階、倭製装飾大刀の製作工房をA～Dに区分し、工房ごとに王権との政治的距離が異なることを見だした [大谷晃2012]。自身の型式学的研究と鈴木勉のような金工品観察の水準を巧みに融合した成果である。

3. 金宇大による朝鮮半島系装飾大刀の研究 [図15]

これまでは朝鮮半島で出土した装飾大刀の重要性が叫ばれながらも、その時空間的位置づけが日本人研究者には不明瞭であるために、列島出土品の位置づけが揺れうごいていた。そうしたなか2010年代以降金宇大は、外来系環頭大刀の装具の構造的特徴を「群」の概念でまとめる作業をすすめ、新羅、百濟、大加耶、そして倭における装飾大刀の時空間的位置づけに迫っている [金宇大2017など]。

しかし、総じて韓国の装飾大刀研究は、武器というよりもむしろ服飾金工品としての研究の延長線上にあり、内部構造と系譜関係の解明を急ぐ日本の研究と方向性を違える。たとえば、玉田M3号墳の単鳳環頭大刀は、倭系と半島系の要素が混在するものとして注目され、その構造の解明が俟たれる資料の一つである。2015年の国立公州博物館『韓国の古代象嵌』展では象嵌大刀のX線写真が30点あまり公開されたが、こうした作業が今後も重ねられることを期待したい。

4. 豊島直博による装具の研究 [図16]

豊島は2000年代以降、有機質製装具が良好に残る弥生・古墳時代の鉄製刀剣、ヤリの多面展開図を大量

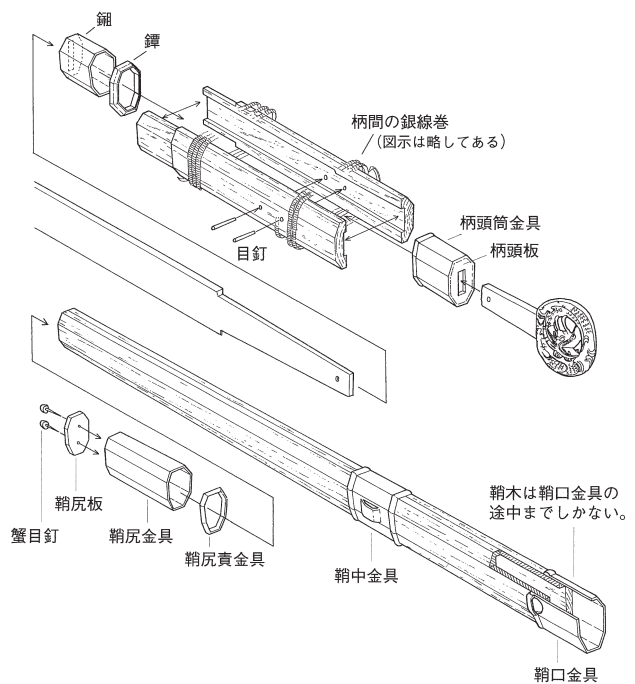
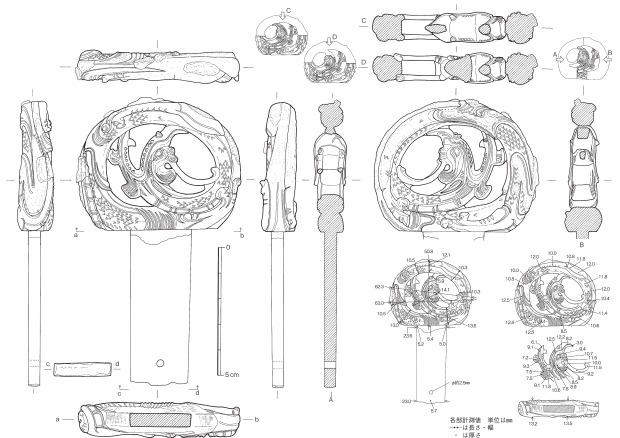
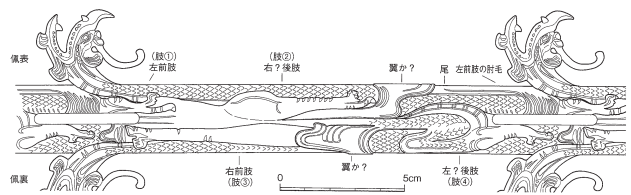
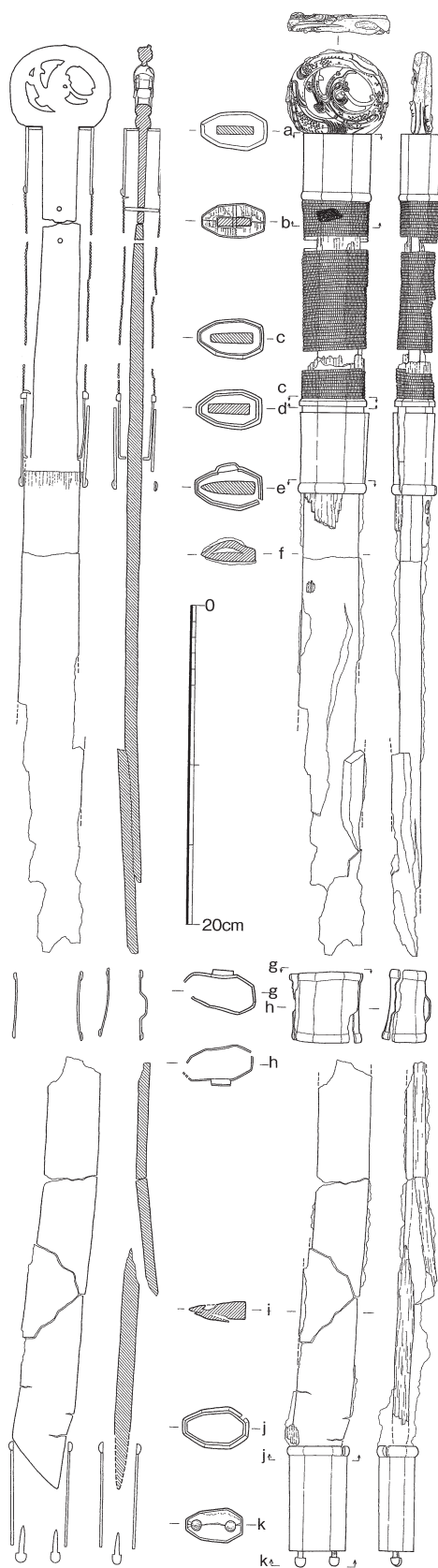


図13 大谷晃二による金鈴塚古墳出土単龍頭大刀の実測図と構造模式図 [大谷晃2015を再構成]

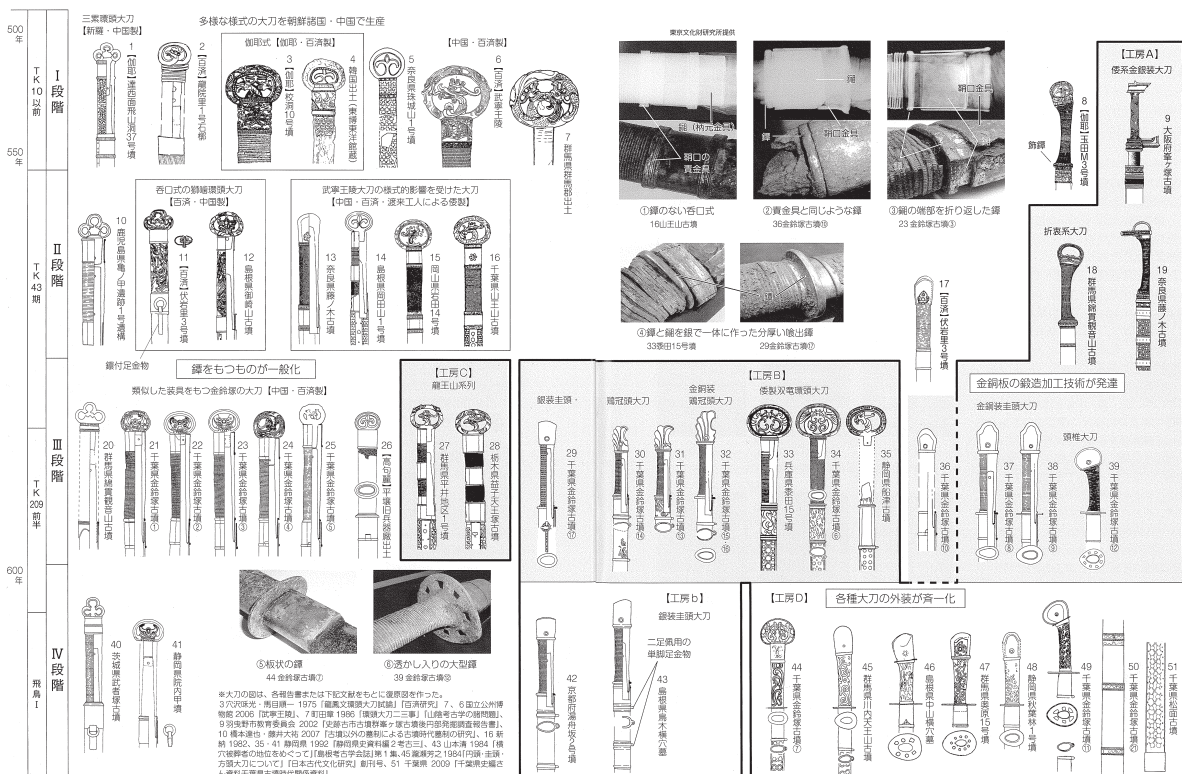


図14 古墳時代後期の金銀装大刀の展開と倭の工房区分 [大谷晃2012]

に作成し、装具の材質、部品の組みあわせかた、鉄本体への装着方法、装具の穿孔方向などに細かな年代差や地域性があらわれることをあきらかにしてきた。また、これらの研究に先駆けて刀剣からみた軍事組織論にも着手しており、京都府由良川中流域を事例としながら、軍事組織の形成には甲冑を副葬しない階層の動向や地域史にも目配りする重要性を説いている [豊島1999]。

弥生・古墳時代の鉄製刀剣にかんする初の単著となった『鉄製武器の流通と初期国家形成』の考察では、古代史学における国家形成論の諸問題を整理しながら、自身の精細な武器の型式学的研究をもとに批判的に検証している。そして、威信財である鉄製武器の流通を掌握した初期畿内政権は、その配布をつうじて列島各地の有力者間の連携を築き、さらに朝鮮半島から鉄素材や鍛冶技術を導入して武器生産の拡大や軍事組織の拡充をはかることによって初期国家が成立すると結論づけた [豊島2010]。

近年では、方頭大刀や双龍環頭大刀をはじめとする装飾大刀の研究もすすめており、豊島一人の資料調査にもとづく古墳時代刀剣総論が紡ぎだされつつある。そのなかで、装飾大刀からみた国家形成論を展開しはじめているが、本論第Ⅱ部でも論じるように、特定形式の大刀と特定氏族との対応にかんする議論については再考の余地があろう [豊島2014a・2017・2018d・2019など]。

第6項 個別論の到達点

3期には、個別形式の研究の細分化が著しい。以下、主要形式ごとに最新の研究を紹介する。ここであらためて図4をみると、次の6点に気づく。

- ①左端が純倭風の大刀で、右側にいくに連れて大陸・半島からの外来系要素が濃くなる
- ②中央付近に配列しているものは、外来系倭製品や、その出自が揺らいでいるもの、あるいはその折衷様式のものである。両端にいけばいくほど、技術の共有は薄らぐ

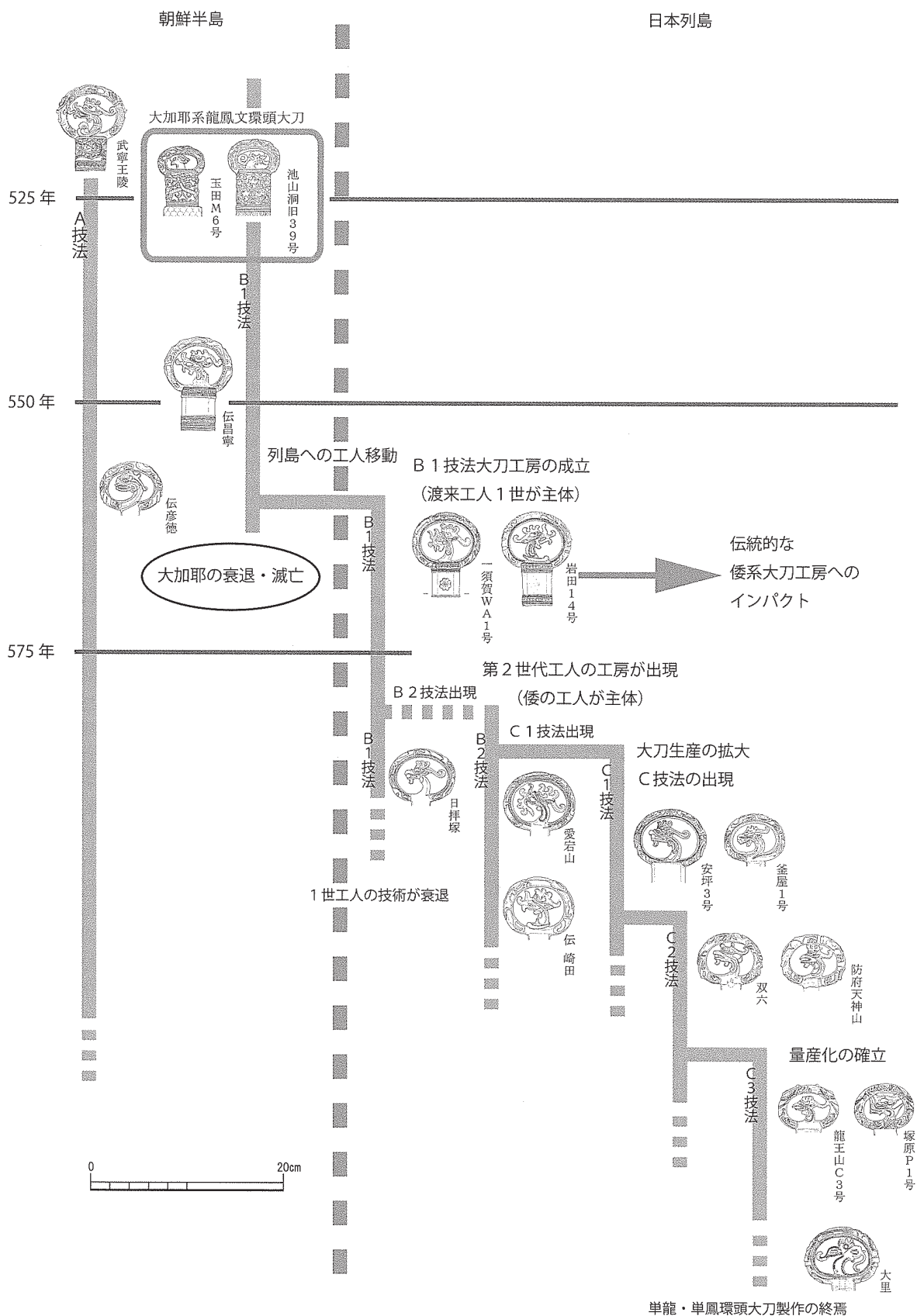


図15 単龍・単鳳環頭大刀製作の展開 [金字大2015]

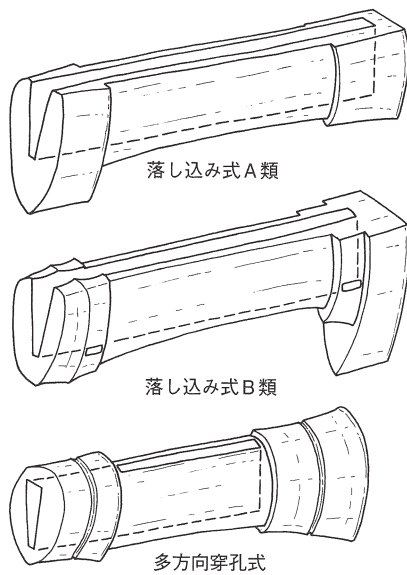


図16 鉄刀の柄木の種類 [豊島2007]

③図中における柄頭の位置の高低は、おおまかな新古関係を示す
 ④倭系大刀は幅広で長大、鋒は斜辺が丸みを帯びるフクラ鋒の鉄刀を内蔵する。外来系大刀は華奢で短小、鋒は斜辺が直線的なカマス鋒の鉄刀を内蔵する

⑤倭系大刀は柄が内湾するのにたいして、外来系大刀の柄は直線的である

⑥倭系大刀の柄頭は左右非対称のデザインであるのにたいして、外来系大刀の柄頭は左右対称志向である

これらこそが大刀の系譜差であり、こうした微細な変化に着眼することによって、大刀出土古墳の史的意義に迫ることができよう。なお、菊地芳朗は、「倭系」＝「日本列島に定着したうえで継続的に生産がおこなわれ、独自に発展・変化してきた刀剣類およびその要素」、「外来系」＝「各時期に新たに列島にもたらされ、一定数生産されつつも主要な系譜として列島に定着することのない刀剣類およびその要素」と定義している [菊地2010]。

刀剣本体 2期の白杵勲や池淵俊一による研究以来蓄積された資料は多く、再検討が求められている。また、鑑本孔や隅扶尻茎などの特殊な造作にかんして、白杵勲、豊島直博、長友信、池上悟、筆者らの検討がある [白杵1984b, 豊島2000, 長友2013, 池上2011ab]。装飾大刀の形式と、内蔵される鉄刀本体の形式の対応関係をさぐる筆者は、振り環頭大刀に代表される倭系大刀の多くは、全長100cm以上、茎長20cm前後、目釘孔が三つある鉄刀を内蔵することに注目し、その背景に組織的かつ安定した大刀の生産体制の確立をみる [第3章]。

剣はいっぱんに、中期末に衰退し、後期には大刀が主流となると説明されるが、大谷宏治が後期古墳出土鉄剣を集成し、後期の開始とともに一斉に消滅したわけではないことが明示された [大谷宏2016]。

剣身が蛇のように曲がった蛇行剣について、集中地域である南九州をはじめ、各地で集成されている。まとまった研究としては、2003年の『考古学ジャーナル』No.498（特集 蛇行剣）があり、このうち北山峰生による分布と編年論が一つの指標である。

茎や付属する鐔の形態差を重視した、鉄製刀剣の地域性も議論されている [折原1997, 大谷宏2010c, 豊島2016, 西澤2002, 橋本英2014, 和田2009・2015]。くわえて、愛知県惣作遺跡や福井県河合寄安遺跡、島根県キコロジ遺跡などで柄木が出土するなど、刀剣の地方生産がうかがえる資料が増えている。

そのほか、柄巻にもちいた有機質にかんして沢田むつ代による精細な観察がある [沢田2008]。

鹿角装刀剣 体系的かつ基礎的な研究として小林行雄1976がある。置田雅昭は、奈良県布留遺跡から出土した木製刀剣装具を分類し、そのうち柄A・B類は、小林による鹿角装柄一・二類と形状が同じであること、また、刀剣本体と柄の結合方法に「落とし込み技法」と「差し込み技法」の二者があることを見だした [置田1985]。こんにちの柄構造研究の直接の祖形となる重要な研究である。最近では、長友信が、柄を構成する部材の結合パターンによって分類・編年するとともに、先行研究の複雑な分類案を整理したうえで、実際に鹿角のどの部位がどのように加工されたのかまで検討している [長友2011]。

山田俊輔は、鹿角の素材取得方法にもとづいて三つの系列に分け、それぞれの出土遺跡の性格を考察することによって鹿角装刀剣の史的意義に迫った。その結果、元来は王権の周縁にいた海にかかわる広域移動民が製作・使用していたものを直弧文で加飾・生産することによって、徐々に王権や豪族との関係性を構築するための装置と化してゆく過程を論じた [山田2016]。

鹿角製装具にほどこされる直弧文の研究は近年、井上一樹がすすめており、2010年現在で292遺跡が集成されている [井上一2010など]。

振り環頭大刀 倭の伝統的な楔形柄頭の上に、半円形の振り環を装着するものである。日韓あわせて80例以上出土しているが、朝鮮半島では新徳1号墳例のみが知られる。後期前半の峯ヶ塚古墳例を最古の事例とし、奈良県藤ノ木古墳や群馬県綿貫観音山古墳、島根県上塩冶築山古墳例に代表されるように、後期後半が装飾の華美さ、分布のひろがりともに最盛期である。後期末には副葬が下火となり、千葉県龍角寺浅間山古墳などを最後に衰退する。倭の装飾大刀のなかで最高位に位置づけられる。

高松雅文は、6世紀前半の振り環頭大刀の出土地の多くが、三葉文楕円形杏葉・広帯二山式冠とともに継体勢力の分布域に属するため、継体の進出に連動して出現したと評価する [高松2006]。持田大輔は、鞘の装飾技法をふまえた振り環頭大刀の分類案を示した [持田2006]。

深谷淳は、5世紀に銅板打出の金銅製三輪玉などの勾革飾金具が創出され、それが倭系大刀に装着されることで金銀装倭装大刀の製作がはじまり、6世紀には三輪玉の大量生産・大型化・装着個数の増加と同時に、振り環頭の出現、大刀の装飾化があいつぎ、装具の種類・組合せからさまざまな大刀が存在し、そのなかでも金銀で装飾され振り環頭・金銅製三輪玉の組合せを頂点とする大刀の序列が形成されたとする。そして6世紀後半の藤ノ木古墳例を典型に最盛期を迎え、7世紀初頭にその生産は急速に停止するとみる [深谷2008]。

袋頭大刀（円頭・頭椎・圭頭・方頭・鶏冠頭大刀） 柄頭が環状ではなく、金属板によって包まれることから袋頭大刀と総称する。このうち円頭・圭頭・方頭については、柄頭形態の偶発的類似も想定され、専門としない者には区別がむずかしいものもある。

円頭大刀の専論としては、岡田山1号墳出土大刀の位置づけをはかる町田章の研究 [町田1987] が著名だが、全体の装具が良好に残っていない事例には適用がむずかしい。いっぽう、鈴木一有は柄頭の長幅比と製作技法による5分類案をおおきな基礎とし、そのなかで装具全体に目配りしながら編年した。その結果、長幅比1.2をおおきな境として、古いものほど短く、新しいものほど長いことをあきらかにした。これによって、柄頭のみが出土しても年代の推定が可能になった [鈴木2009]。

また、頭椎大刀、円頭大刀の成立過程を考えるうえで、「折衷系装飾大刀」の存在が注目される。上塩冶築山古墳、綿貫観音山古墳、別所山古墳から出土した定型化以前の円頭大刀は、①柄頭は表裏を金属板で挟み、带状の銀板でこれを留める、②柄間は連珠状の刻みをいれた銀線を蔓巻にする、③柄間の形状は刃側がおおきく内湾する、④大形の鐔をつける、⑤鞘口、鞘間は銀板を巻く。⑥刀身は茎落し込み技法によって柄をつける、などの点で共通する。このうち①⑤は半島系の要素だが、それ以外は倭装大刀を特徴づける構造である。

新納泉は、金銅装頭椎大刀の成立過程を考えるなかで、5世紀以来の木装頭椎柄頭に振り環が筋金として装着された後に柄頭全体が金銅装化し、筋金部分は畦目状になって残ったと推測した [新納1984]。穴沢啄光・馬目順一は、綿貫観音山古墳の頭椎大刀と韓国陝川玉田M3号墳出土単鳳環頭大刀の形態比較から、柄頭の柄寄りを覆った板金のありかたや、柄の刃側が湾曲する共通点を指摘し、綿貫観音山古墳の大刀は、環頭大刀と円頭大刀が組みあわさったものとみる [穴沢・馬目1993]。

町田章は、これらを倭式円頭大刀AIV型式と位置づけ、円頭大刀から頭椎大刀への過渡期の一群と評価した [町田1987]。勝部明生・鈴木勉も綿貫観音山古墳の頭椎大刀について、倭装大刀を製作した技術者と渡来系の技術者の両者が製作に参加した折衷的なものと評価する [勝部・鈴木1998]。大谷晃二は、柄頭の形態や、装具の製作技術の差から、装飾大刀には倭国在来の伝統的な技法による一群と、朝鮮半島からの舶載品および、その技術系譜を引く一群の二つの系譜があることを示し、先の3振の大刀を「倭風円頭大刀I系

列」として把握した〔大谷晃1999〕。

橋本英将は、倭系装飾大刀の構造を基礎としつつも、部分的に半島系装飾大刀の要素をふくむ一群を「折衷系装飾大刀」として把握した。そして、TK43型式期以前には、伝統系（倭系）装飾大刀と新興系（外来系）装飾大刀が互いに排他的な技術で製作されていたため、新興系装飾大刀の将来が伝統系装飾大刀の製作開始につよい影響をあたえたが、その影響は直接的なものではなく形状模倣型技術移転と呼べる状況にあったと考え、意図的に異なる技術・意匠の大刀が製作されたと評価した〔橋本英2006〕。

圭頭大刀 圭頭大刀の名は、柄頭の形が古代中国の玉器・圭に似ることに拠る。列島では170例以上が知られ、小円墳や横穴墓からの出土も目立ち、かならずしも上位階層のものとはいえない。おおきく金銅装と銀装に分かれ、鉄地銀象嵌のものもわずかにある。金銅装と銀装の両者は拵全体のデザインが異なり、容易に峻別できる。圭頭大刀全体の分類については菊地芳朗が5類型に整理しており、柄頭や鐔の形態と佩用装置の有無、刀身の構造などに規則性があるという〔菊地2010〕。

銀装圭頭大刀は、大谷晃二が、柄巻や佩用装置の組みあわせにもとづいた変遷案を示している〔大谷晃2014b〕。金銅装に比べて希少であり、そのなかには金鈴塚古墳や八幡観音塚、湯舟坂2号墳、埼玉県小見真観寺古墳など後期後半・末の有力墳がふくまれることから、後期古墳編年全体にも示唆をあたえる。ただ、金銅装とはデザインや出土古墳の様相が異なることから、本来は別系譜のもので、たまたま同じ考古学的名称によって一括りにしているのではないか、という憂いがある。

実際に、金鈴塚古墳の銀装圭頭大刀の柄頭は、銀板を筒状に回して佩裏で接着し頂部を板で塞ぐ技法だが〔瀧瀬2016〕、これは豊島直博が、方頭大刀特有の製作技法として認識するものである〔豊島2014〕。この、方頭大刀研究の到達点ともいえる豊島の研究においても、見た目の形態がよく似ている熊本県宮穴22号墓の大刀を圭頭、文堂古墳の大刀を方頭に分類している。これでは、製作技法の判明しない事例を第三者はもちろん、古墳時代当時の人々でさえも峻別することはむずかしいだろう。鈴木一有が円頭大刀の研究で試みたように、まずは柄頭の形態を上位タクソン（taxon）に据えた分類体系が必要である。

鶏冠頭大刀 鶏冠を思わせる柄頭のデザインからその名があるが、実際にはエジプトに起こり、ギリシャ・ローマ・ササン朝ペルシア・西域・中国南北朝・朝鮮半島、そして倭へと伝わったパルメット文である。

筆者は、柄頭と佩用装置の形態変化に着目して鶏冠頭大刀の分類・変遷・系譜・性格を考えた結果、最古段階の大陸起源のパルメット文や連珠文、新羅系の佩用装置を備えることから、589年の隋成立を前後する複雑な東アジア情勢の渦中で渡来した多国籍の刀工が倭で合同製作した奢侈品であり、その後、ほかの5例が国産された可能性を考える〔第9章〕。

素環頭大刀 柄の先端に環をあしらう大刀のうち、内部に飾りのないもので、後漢に系譜が求められる。日本では弥生中期末の北部九州で副葬がはじまり、後期に山陰、古墳初期までに北陸まで日本海沿岸ルートで展開する。古墳中期には熊本県伝佐山古墳で最多の5振がみられ、後葉にかけて衰退する。ただし、古墳後期にも福岡県正籠3号墳などで一部残る。小林行雄、杉原和雄、今尾文昭、禹在柄らの研究を経ても製作地の峻別方法や編年が定説をみないのは、環頭の形状や製作技法、長さ、幅、関の有無などの多様性に因る〔小林1952、杉原1968、今尾1982、禹1991〕。外装については、置田雅昭、加藤一郎らの研究がある〔置田1989、加藤2002〕。

古墳前期までの大刀は、中国や朝鮮半島から舶載された素環頭大刀の環頭部を切断して成立したと考えられている〔村上2001〕。奈良県東大寺山古墳から出土した後漢の中平年銘象嵌大刀は、舶載された後に倭で青銅製環頭をつける。島根県大成古墳や福岡県鋤崎古墳、京都府椿井大塚山古墳、大阪府久米田貝吹山古墳などの素環頭大刀や、大阪府津堂城山古墳、心合寺山古墳の三葉環頭大刀は、環頭部の中程まで柄木がおよぶもので、往時には環頭の半分しかみえておらず、そのシルエットは振り環頭大刀と似る。舶載された環頭

大刀の意義を理解していない倭人が柄をとりかえたのだろう。貝吹山古墳の大刀の柄付近から出土した5個のボタン状ガラス製品が有機質製護拳ベルトの装飾とみられる点とあわせ〔深谷2008〕、こうした改造が振り環頭大刀の成立につながった可能性がある〔橋本英2005〕。

龍鳳環頭大刀 環頭の中に、横を向く一匹の龍あるいは鳳凰を表現するものを単龍鳳環頭大刀、二匹の龍あるいは鳳凰を表現されるものを双龍鳳環頭大刀と呼ぶ。口が開くものを龍、嘴を閉じたり玉を嚙んだりするもの（含玉系）が鳳凰である。

単龍鳳環頭大刀は日本で150例ちかく出土しているが、元来は朝鮮半島や中国大陆に起源する。

大谷晃二は、穴沢啄光の提唱した「系列」の概念を発展させながら、環頭部周囲の走龍文のデザインを複合することによって資料群のまとまりを抽出した。さらに、特定の資料群には同范品や同型品がふくまれることに注目して工人の技術交流を描出し、舶載品および倭製品認定の見通しを立てた〔大谷晃2006〕。

金宇大は、日韓の単龍鳳環頭大刀の製作技術を同一水準で分析することによって、520年頃の武寧王陵例（新納Ⅰ式）とTK43型式期（575年頃）の海北塚例（Ⅱ式）以降は技術的に連続しないことを明示した。従来その方法論に疑問が抱かれながらも有効な代替案が示されずにいた新納実年代論を克服しつつあることは、近年の刀剣研究における最大の成果の一つである〔金宇大2017〕。

双龍鳳環頭大刀についても、新納による単系列的な編年を、橋本英将が中心飾り、大谷晃二が環部文様、豊島直博が装具との組みあわせにもとづいて多系列化している〔橋本英2003a, 大谷晃2014, 豊島2017〕。

獅嚙環頭大刀 環頭内に、正面を向いて牙をむき、環の下部を嚙む獣面を表現するもの。ただし、柄頭のモチーフをめぐるのは多くの課題が残る。日本では、後期後半から末にかけて30例以上が知られ、群馬、東海に集中域がある。朝鮮半島では三累環との折衷品が1例、中国でも7世紀の資料が1例知られるに過ぎないが、獅子文や類似した鬼面文様の考古資料は中国南北朝期に集中するため、獅嚙環頭大刀の源流も当該地に求められよう。

穴沢啄光・馬目順一による研究〔穴沢・馬目1985〕以来、茨城県常陸梶山古墳や島根県御崎山古墳出土例の報告にあたって詳細な観察があるが、柄頭の系統差にもとづく基本的な分類と編年を整理しているのは、小谷地肇の研究である〔小谷地2000〕。2016年には、持田大輔が千葉県金鈴塚古墳の3例について、および大谷晃二が御崎山古墳例の装具全体の構造をあきらかにしている。

三葉環頭大刀 環頭の中に三葉形の飾りを表現するもので、列島で約40例、半島で約30例が知られる。中国漢代に起源し、列島出土品の大半が舶載品と考えられている〔穴沢ほか1989〕。環部の形状から円形式と圭頭式に分類される〔末永1938〕。円形式は百済・加耶・倭でみられるが、圭頭式は新羅に多いことから、被葬者の出自や対外交流の実態を考えるうえで示唆に富む。

福岡県若八幡古墳の2振は厳密には三葉にはならず、素環の両端が環内に巻きこんで二つの突起をつくる。楽浪古墳9号墳の鉄芯金線巻複合刀子や、石巖里の金銅製三葉環頭大刀にちかい〔町田1976, 中山2008〕。環内に明確な3枚の葉をあしらうものとして列島最古段階の事例は、長崎県対馬島のトウトゴ山遺跡1号石棺例（弥生後期）だろう〔坂田1984〕。5世紀中葉～後半の福岡県久戸9号墳例は鉏をともない、環頭部に波状文を銀象嵌する。5世紀後半の奈良県池殿奥4号墳、百済漢城期（B.C.18-A.D.475）の忠清北道清州新鳳洞12号墓や忠清南道瑞山富長里5号墳丘墓などに類例がある。5世紀末～6世紀前半の福岡県徳永H26号墳例は理化学分析の結果、大陸産の鉄を使用していると考えられている〔大澤1995〕。いっぽうに、倭の鉄刀に鉄製鉏をつけるのは後期後半以降であるため、これらは舶載品である可能性がたかい。

いっぽう、環頭と刀身が別造りで環が真円にちかく、三葉文の中央の葉が膨らみをもって上端が環に接する事例が、5世紀の福岡県大森7号墳、宮崎県伝・本庄古墳群出土品にみられ、奈良県珠城山1号墳（TK43）の三葉文楕円形杏葉と似る。朝鮮半島での類例は知られず、島根県岡田山古墳（TK43）の三葉環頭大刀は、

倭製単龍鳳環頭大刀と共通する鞘金具をつけることとあわせ、6世紀の三葉環頭大刀には倭製品がふくまれる可能性がある。

圭頭式は、列島で7古墳から出土している。宮崎県山ノ神塚、愛媛県東宮山古墳では、大小二つの柄頭が出土しており、本来は大刀の鞘に小刀を付属する親子大刀だったとみられる。このうち山ノ神塚古墳例は新羅以外の地で修理されたものであるという意見[甲斐2012]、大加耶系の工人が新羅で作ったという意見[金宇大2011]がある。東宮山古墳例は、類例の分布から新羅製と考えられている[金2011、土屋2018]。

三累環頭大刀 三つのC字形環が、欠けた部分を内側に向けてクローバー状に接することで環頭をなすものである。日本では50例弱が知られるが、前方後円墳からの出土は2例と稀で、多くが小規模墳からの出土である。そのほかの装飾大刀との共伴や技術の共有は少ない。朝鮮半島では、5世紀前半の福泉洞古墳群を中心とする東萊に出現・集中し、新羅王権が洛東江以東の各地を統合してゆく過程で威信財として取り入れられた[高田2014・2017]。穴沢味光・馬目順一は、新羅の装飾大刀階層の最上位に位置づけるのにたいし、倭においては「家格の低い」大刀と評価する[穴沢・馬目1983a]。

野垣好史は、環頭部と柄の接続技法や環頭部の材質の組合せから、第1～第8型式に分類・編年した。そして、第1～第4型式は半島製品をふくむ可能性があるのにたいし、第5～第8型式は日本列島でのみ出土すること、倭製と単龍鳳環頭大刀に共通する製作技法がみられることを重視し、倭製品と評価する[野垣2002]。ただし、三累環頭大刀は倭の装飾大刀との技術共有がみられないため、すべて舶載品とみる大谷晃二の意見もある[大谷晃2012]。このように、装飾大刀の国内流通の発信源をめぐってはかならずしも定説をみておらず、より妥当性のたかい言説の絞りこみが急務といえるだろう。

象嵌大刀 象嵌は環頭大刀、袋頭大刀それぞれにみられるが、柄頭形態が判明するものとしては円頭大刀が最も多い。象嵌をほどこす装具や文様構成は多岐にわたるため総体として捉えにくい、瀧瀬芳之は2018年7月現在、象嵌のある刀剣・鉾・刀子を468遺跡600点以上集成している[瀧瀬2019]。

象嵌大刀の総合的な分類・編年としては、大谷宏治による3段階編年があり、Ⅰ段階に金銅装円頭大刀と伝統的な倭装大刀との融合ではじまった象嵌装円頭大刀生産は、Ⅱ段階に金銅装具をもちいない象嵌大刀として独立し、頭椎大刀・圭頭大刀に派生したという。これは、円頭・頭椎・圭頭大刀がちかい生産体制にあったことを象嵌の研究からも支持したものである。また、Ⅲ段階には仏教系要素も導入される点において、金銅装大刀との親縁性も指摘された[大谷宏2011]。

第7項 個別研究の収斂

ただし、こうした個別細分化する刀剣研究は、決して排他的にすすんでいるわけではない。一面では、柄頭の形式を横断した製作技術論や、生産・配布・佩用の主体をめぐる研究も活発化しているし[鉄器文化研究集会2003、島根県教育庁古代文化センター2005]、倭系と外来系の意匠と製作技法の両側面を整理した装飾大刀の総合編年や[図17、大谷晃1999・2012、鈴木2009、野垣2006、橋本英2006、松尾2001・2003、持田2011]、ヤリ・鉾をあわせた刀剣類の消長を整理した菊地芳朗や池淵俊一の研究は、現状における到達点である[菊地2010a、池淵2014]。

とりわけ重要なのは、松尾充晶や大谷晃二によって、後期後半の装飾大刀はおおきく2段階に分かれ、TK43-TK209型式期を挟んで装飾大刀の製作技術やデザインが斉一化することによって安定的な量産体制が確立したこと、量産された大刀は横穴墓まで副葬がひろがること、すなわち大刀のインフレーション現象が指摘されたことだろう。ここに、刀剣研究の立場から初期国家の様相の一端を垣間みることができる。

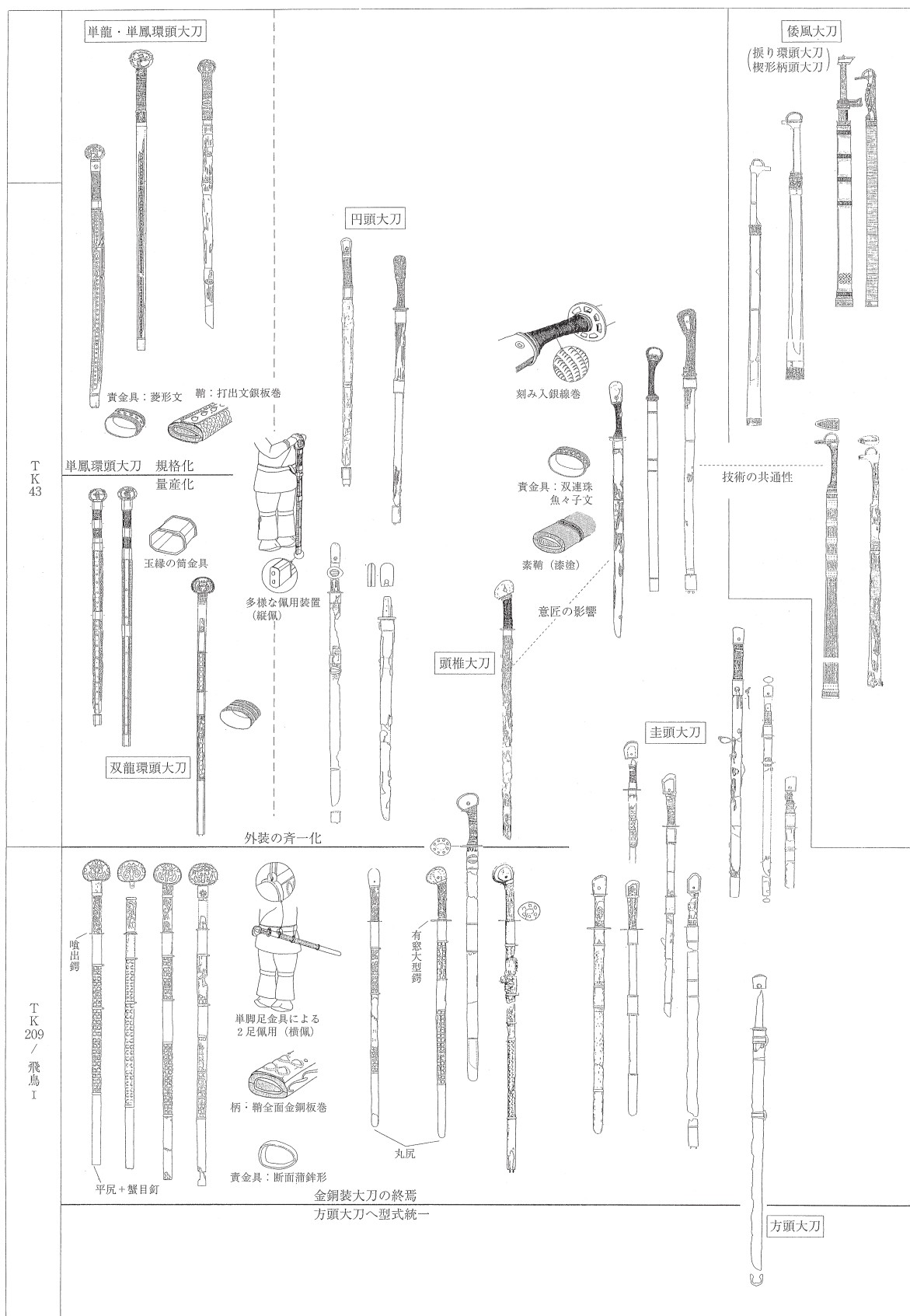


図17 装飾大刀の型式と画期 [松尾2003]

第8項 刀剣の国産・地方生産論 — 妄想から考古学へ —

近年、刀剣にもちいられた特定の技法の集中地域をもって、刀剣の国産・舶載品論がにわかに盛行している。ただそれでもなお、古墳時代の日本列島における武器流通の背景に近畿地方の勢力がつよい求心性をもっていたという想定は、いまだ根づよい。その背景には、北野耕平による百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団が中期甲冑の生産と流通の中心にいたという理解が〔北野1969〕、こんにちの武器研究全体の基層にあることに因ると思われる。しかし、そうした理解が、甲冑以上に多様性に富むほかの武器や馬具の流通論にまで敷衍できるのかについては、いま一度省察すべきだろう。

近年、モノ研究の立場から刀剣の地方生産を説く試みとして、宮崎県島内地下式横穴墓群出土品を代表とする南九州の独特な形状の武器の集中への注目は、当該地域における在地生産論を高揚させた〔橋本達2014、豊島2016〕。いっぽう、古墳時代後期における特定型式の鐔の地域偏在を手がかりとして、大刀の地方生産を想定する豊島直博や大谷宏治、和田伸哉の見解は一定の説得力をもつものの、鐔の平面形態は広域で共通する以上、倭王権中枢で一元的に製作され、特定型式の鐔付大刀が特定の地域に目的的に配布された可能性を否定する決定的な根拠とはならない。

このように、型式学的研究の立場から刀剣の畿内一元生産を否定する根拠を示せずにいるうちに、鍛冶や集落研究の立場から刀剣の地方生産を説く機運がたかまりつつある〔村上2007、真鍋2017など〕。2018年3月3日には、福岡市埋蔵文化財センターにおいて第6回AIC東アジア鉄器研究ワークショップ「博多遺跡群の鉄器生産」（主催：愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター 村上恭通）が開催され、福岡市博多遺跡群で出土した古墳時代前期の豊富な鍛冶関連遺物を手にとりながら、鉄器製作技術レベルでの検討が議論された。そこでは、博多遺跡群の鍛冶・精錬の技術や規模が当時の日本列島で最大規模を誇ることが再認識された。久住猛雄は、このような資料状況と自身の「博多湾貿易」論、および畿内の大型拠点集落である纏向のありかたを動員しながら、鉄鏃の一部はもちろん、前期刀剣の多くも博多で生産していた可能性を積極的に見出そうとする。そして、各地への供給にあたっては政権中枢による集積と再分配は挟む可能性に目配りしつつも、従来の「王権麾下の特定工房で製作され各地に「配布」していた」という論理とは異なる解釈を模索するなど、すべての武器研究者が聴くべき提言をおこなっている〔久住2018：p.472・p.490〕。

刀剣の型式学的分析を重視する筆者も、積極的に倭製品として認識できる資料に乏しい前期の国産に懐疑的な一人であった。しかし、博多遺跡群50次調査987号遺構で出土した全長50cmの超大型砥石を観察しながら、集落論の立場である久住、金属器製作技術論の立場である水野敏典、栗林誠治との議論をつうじて、一定数の刀剣が博多遺跡群で製作された可能性は否定できなくなった。こうした状況については水野による奈良県黒塚古墳出土武器の報告でも触れられているが〔水野2018〕、おそらく、装具研究を推しすすめる豊島直博ならば、むしろどこで装具を装着し（つまり、どこで刀剣を完成させ）、誰が刀剣の配布を差配していたのかを重視すると思われる。こうしたさまざまな立場からの議論が今後の課題となるだろう。

ただ、いずれのばあいにしても、「小型品なら地方でも製作できる」「大型品だから地方では製作できない」「精良品だから舶載品」「形骸化しているから倭製品」という説明が所詮は妄想に過ぎず、資料に即した考古学の原理原則から乖離したものであることを認識するところから出発しなければならない。すでに馬具研究においては、日韓の重要資料を渉猟した諫早直人によって日本列島における馬具の国産開始想定年代が従来の認識よりも古く更新され〔諫早2012〕、「祖形なき舶載品」論が克服されつつあることに焦燥を覚えるのは、筆者だけであろうか。

第3節 刀剣研究の現状と課題、本論の視座

以上、刀剣研究においてはすでに1,100編以上もの論考が林立していながら、①新資料をふまえた先行研究の批判的検討や建設的な論争、課題、展望の共有が希薄であり、論者の数だけ論点が細分化していること、②それはとりもなおさず、馬具や甲冑研究にみられるような体系的な学史を形成せず、総体としては馬具・甲冑研究に15年から20年ちかい遅れをとりつづけていること、③1970年代までに後藤守一、末永雅雄、町田章、穴沢味光らが見通した、刀剣そのものの歴史や武器をとりまく文化史へたいする展望が次第に衰微し、即物的な分類と編年のドグマに陥っていることの3点が、かえって浮き彫りとなった。

多くの論考の林立が高次の共通理解にむすびついているかのようにみえる刀剣研究も、実際にはその過程で蓄積された諸問題や矛盾点をきびしく吟味、批判する作業は皆無に等しい。飽和する資料環境を乗り越え、研究の新地平を切り拓くためにも、原資料に立ち返ってあらためて議論の根拠を固めなおす必要があるだろう。論すべき課題は多岐にわたるが、本論全体にかかわるものとして、次の5項目を挙げる。

課題1 | これまでの研究では、刀身と外装それぞれの型式学的研究が個別にすすめられ、一定の成果が挙げられているものの、それらを総合する視点や刀剣全体の様式的な把握はじゅうぶんでない

課題2 | 刀身については、1980年代の白杵勲による研究以来膨大な数の資料が蓄積されたにもかかわらず、あらためてそれらを同一の水準で資料化し、比較検討する試みが皆無である

課題3 | 装飾大刀の研究は個別細分化がすすんだものの、第三者による系列の認識や基礎的な資料化をより困難なものとし、「装飾大刀は倭王権が生産と流通の中心にある」とか「古墳時代後期の威信財である」といった、漠然とした言葉で説明される傾向にある。専門とする者としらない者のあいだにある理解の乖離が、とくに著しい分野ともいえるだろう。経験科学としての考古学研究に不可欠な反証可能性を担保した資料化と、資料の実態に即した新しい理論構築が必要である

課題4 | 多様化する古墳時代後期の武装においては、刀剣がその中心に位置づけられていたと考えるが、武装論全体のなかで刀剣を論じる視点に乏しい。新納泉が構築した環頭大刀副葬古墳を頂点とした階層構造モデルも群集墳の構造解析には有効とはいえ、倭全体の武装を東アジア諸国のなかで相対化するためには、1980年代後半以降に研究が進展した倭装大刀の位置づけが不可欠である

課題5 | 古墳時代武装全体のなかで装飾大刀の位相を論じるためには、古墳時代前期からつづく刀剣の変遷（時間軸）、古墳時代後期におけるそのほかの武器・武具・馬具のなかでの位置づけ（機能軸）、この二つの軸から相対的に描く必要がある

以下、第I部各論で課題1, 2を解決するための研究方法を提示するとともに、第II部でおもに北部九州をケーススタディとしながら、課題3, 4, 5へたいする理論と実践を展開する。

註

- 1) 【湛盧】後漢初期に編まれた『越絶書』「外伝記第13・宝剣」に記される、呉の6代王・闔閭こうりょ（在位：B.C.514–B.C.496）がもっていた宝剣。「湛」は、澄むや沈む、「盧」は、黒い色という意味。春秋時代の越の王が、名工・欧冶子おうやし（B.C.560?–B.C.510）に作らせた剣で、闔閭が最初にもっていたが、剣が見限って楚の昭王のものになったという不思議な説話がある。

第2章 古墳時代刀剣の様式編年

第1節 はじめに

さまざまな階層の武装の核をなす刀剣がどのような意義を有していたのかあきらかにすることは、列島レベルにせよ、地域レベルにせよ、古墳時代の社会編成を考えるうえで有効と考える。そして、刀剣がどのようにして古墳時代社会に適応したのかをさぐるためには、諸外国からの受容過程はもちろん、それらを段階的に改造、模倣した先に創出した倭独自形式の成立過程を把握しなければならない。

本章では、中期初頭に登場する、ほぼ確実に倭製品と認識しうる形式の鉄刀に注目し、刀剣編年の骨格をつくる。そこに、共伴する剣や鉾の情報を肉づけしながら、広範な様式編年を示す。また、前期的な様式、後期的な様式との異同を検討することによって、中期的な刀剣様式の特徴を考える。

第2節 鉄製刀剣類の系統分類と変遷

第1項 編年の方法

古墳から出土した刀剣類を編年する方法としては、おおきく次の三つの視点がある。

- ①鉄製刀剣本体の型式分類にもとづく編年〔白杵1984a, 池淵1993〕
- ②柄のデザインや装着方法にもとづく編年〔豊島2010, 岩本2010〕
- ③刀と剣の組成比率にもとづく編年〔鈴木一2014a, 高橋克2015〕

しかしながら、これらはかならずしも刀剣からみた古墳の時期区分論にはむすびついてはいない。その理由は、第一に、刀剣の他配列的な系譜の認識が不十分であること、第二に、刀剣本体の研究と外装の研究を総合する視点が醸成されていないこと、第三に、ヤリや鉾をふくめた様式の把握が不十分であることに因る。これら三つの課題を克服するためには、中期刀剣の軸となる素材を抽出する必要がある。

古墳時代の刀は「型式変化に乏しく、時期決定の指標とはなりにくい（ならない）」という意識が支配的である。しかし、筆者がこれまで数百点の刀剣を観察してきた経験からいえばむしろ、刀・剣・ヤリ・鉾のなかで最も資料の母体数が多く、装具によらない本体のみでの編年が期待できるのは刀である。

本章では、同一古墳の複数埋葬・埋納施設や、近在する古墳どうしの刀を比較することによって同類間の変化パターンを掴み、その変遷を軸としながら、共伴する剣と鉾の変遷観を得る。最終的に、それぞれが単独で出土した事例も盛りこみながら、より安定した編年網を構築する。

なお、本論では便宜的に、装具をはずした鉄製の刀身本体を「鉄刀」、装具をそなえた完成品を「大刀」と呼ぶ。

第2項 鉄刀の系統分類

たしかに、古墳時代前期の刀にかんしていえば特殊な造作をほどこすものが少なく、それ単体で編年することはむずかしい。しかし中期初頭に隅抉・隅切尻茎系列が出現すると、刀装具、刀身本体を問わずさまざまな特殊な造作や装飾が派生し、前期以来の一文字尻茎系列と並存しながら後期につながる。隅抉・隅切尻茎系列は、日本列島各地で数多くの出土が知られており、ほぼ確実に倭で生産された鉄刀と考える。出現初期の事例のうち、柄装具との良好な対応が知られる兵庫県茶すり山古墳例は、刃側におおきく突出した楔形

の柄頭をとまなう。これは新しいデザインの柄の登場、すなわち刀剣体系の刷新を示すものであり、中期刀剣編年の本質にかかわる要素である。

従来の、関が浅いか深いか、茎が太いか細いかといった分類は多分に主観や煩雑さをふくみ、報告書の事実記載などにも錯綜がある。むしろ、茎の幅は古墳時代中・後期をつうじておよそ2.5cm前後でほとんど変化しない。鉄刀の大小にかかわらず、柄装着時の握りやすさは変わらないからである。いっぽう、刃幅は2cm台前半から4cm、あるいはそれ以上の開きがあり、その広狭は破片であっても明瞭に認識できる。つまり、関が浅い、あるいは深いと説明されてきた鉄刀の変化は、実際には刃幅の広狭の変化を示している。

以上をふまえて本論では、茎尻の系列を上位分類、刃幅の広狭を下位分類に据えて、次のように分類する¹⁾。ただし実際には、一文字尻茎系列も、隅抉尻茎系列も同調した変化をたどるため、実際にはほとんど刃関の幅広化による編年が有効である。

なお、臼杵分類では、関が直角か丸みを帯びるかも重視されたが、筆者は、両者を時期差としてみなすうえで有意な印象は得ていないため、言及しない。

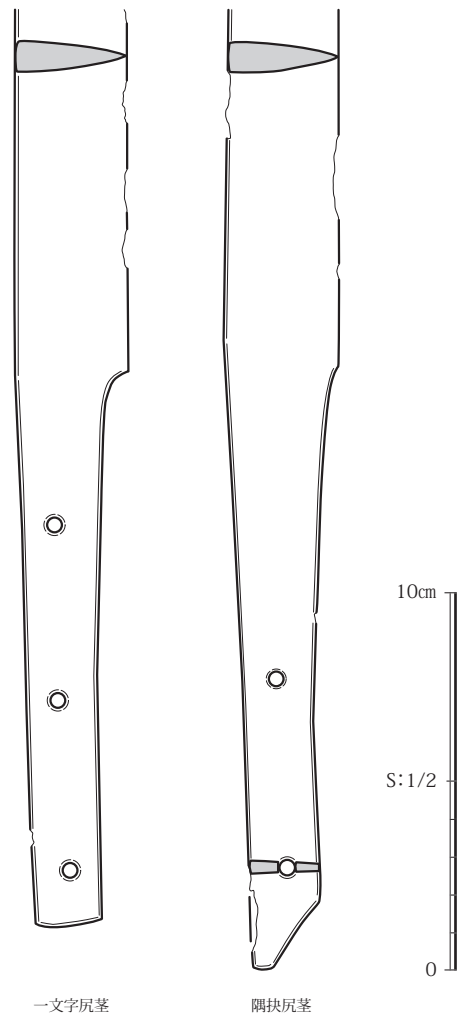
上位分類（茎尻の系列）〔図18〕

- ①一文字尻茎系列 ②隅抉尻茎系列

下位分類（刃関幅）〔図19〕

- a 類 | 3.1cm以下 b 類 | 3.2 ~ 3.4cm
c 類 | 3.5 ~ 3.9cm d 類 | 4.0cm以上

以上を組みあわせて、一文字 a 類、隅抉 b 類のように表す。



永浦 4 号墳出土品（古賀市立歴史資料館蔵）

図18 鉄刀の系統分類

第3項 中期鉄刀の変遷〔図20，表3〕

最小である a 類の多くはTK73型式期に属するが、逆に、TK73型式期の古墳からは a 類だけでなく b 類も多く出土する。

TK216型式期の基準資料は多くないが、a 類の出土が減り、b 類が主体となる。逆に、b 類が出土したからといってTK216型式期と即断はできない。b 類はTK73-TK216型式期を中心としながら、TK208型式期まで比較的多く出土する。中期前半から中葉にかけて漸次的に鉄刀が大型化する過程が読みとれる。

ON46型式期以降には a 類がほとんど副葬されない。TK208型式期には、b 類にくわえて c 類が主体となる。また、ON46型式期以前は c 類の単独出土がほとんどないため、この段階はおおきな画期である。

TK23・TK47型式期には刃関幅4.0cmの d 類が定型化する。d 類の多くは全長100cm以上の大型品である。以後、MT15・TK10型式期にはこれをさらに超える刃関幅の鉄刀がいくつかあるが、基本的には4.0cmで規格化され、おおむねTK209型式期までおおきな変化をみせずに副葬される。

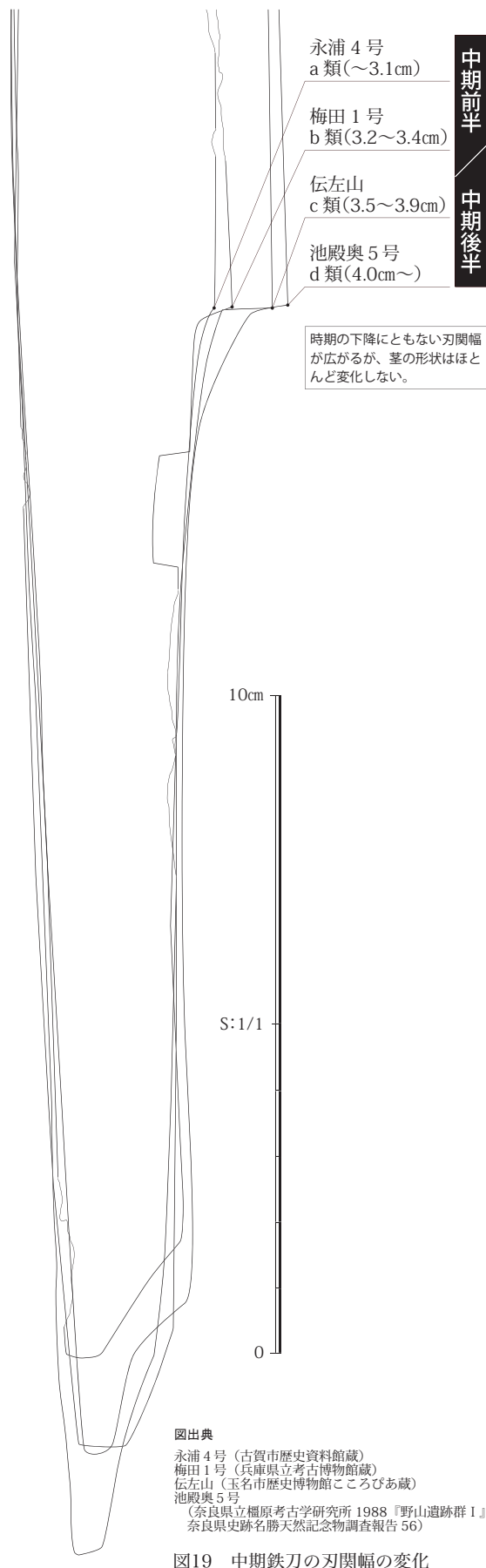


図19 中期鉄刀の刃関幅の変化

第3節 古墳時代刀剣の様式編年

弥生〜古墳前期

弥生時代から古墳時代前期にかけて有力な墳墓に副葬される素環頭刀・大刀については、体系的な編年による製作・副葬段階の設定がおこなわれておらず、個別資料の歴史的な位置づけが主流である。

この段階の資料は外来系の刀剣身に外来系の装具をつけるため、比較的峻別しやすい。類例は畿内に乏しく九州に多いため、北部九州の勢力が東アジア諸国との交流をつうじて直接入手したものも多いだろう。

福岡県藤崎遺跡1号周溝墓の箱式石棺では、素環頭大刀1振と三角縁波文帯盤龍鏡が、6号方形周溝墓では、三角縁神獸車馬鏡、鉄鏃・刀子・鉈とともに素環頭大刀1振が出土している。

出現期の大型前方後円墳である福岡県石塚山古墳では、素環頭大刀とともに、中国系の小札革綴冑や7面以上の三角縁神獸鏡が出土した。小札革綴冑は近畿に10例程あるが、そのほかの地域での出土は石塚山古墳のみである。近在の琵琶隈古墳でも素環頭大刀と小札革綴甲がともない、この地の首長層が倭王権と密な関係にあったと同時に、対外交渉の要を担っていたと考えられる。

糸島地域最大の前期古墳である福岡県一貴山銚子塚古墳では、竪穴式石室内の木棺から素環頭大刀3振とともに、中国製の鍍金方格規矩四神鏡、長宜子銘内行花文鏡、仿製三角縁三神三獸鏡、三角縁獸文帯三神三獸鏡など、豊富な副葬品が出土した。

大阪府崇禅寺遺跡では、古墳時代初頭に投棄されたとみられる素環頭が出土した。本来は素環頭大刀だったとみられるが、刀身を切断した柄のみが廃棄されたようである。崇禅寺遺跡では列島各地の土器が出土しており、古墳時代初頭の物流拠点だったとみられる。この素環頭大刀も、中国あるいは北部九州から持ちこまれ、柄が切断されたのだろう。

奈良県東大寺山古墳で出土した、中国漢代(2世紀)の年号「中平」銘が入った金象嵌花形飾環頭大刀は、4世紀に倭製の青銅製環頭を装着したものである。東大寺山古墳では同様の大刀がほか4振出土している。

第2段階(古)

中期第2段階(新) | TK73-TK216 併行

図出典

交野東車塚 [交野市立歴史民俗資料展示室蔵] 池の上6号 [甘木歴史資料館蔵] 茶すり山 [兵庫県教育委員会 2010『茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告383]
 永浦4号 [古賀市歴史資料館蔵] 野中 [大阪大学考古学研究室蔵] 年の神6号・梅田1号 [兵庫県立考古博物館蔵] 小野王塚 [小野市立好古館蔵]
 おじよか [志摩市教育委員会 2016『おじよか古墳(志島古墳群11号墳)発掘調査報告—金属製品編—』志摩市文化財調査報告4] 川上 [さぬき市歴史民俗資料館蔵]
 宇治二子山南 [宇治市教育委員会 1991『宇治二子山古墳』] 和田山5号 [能美市歴史民俗資料館蔵] 伝左山 [玉名市歴史博物館ころびあ蔵]
 扇森山 [竹田市文化財管理センター蔵] 池殿奥5号 [奈良県立橿原考古学研究所 1988『野山遺跡群1』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告56]
 小正西2号石室 [飯塚市歴史資料館蔵] 正籠3号 [宇美町歴史民俗資料館蔵] 朝日天神山 [別府大学考古学研究室蔵] ※蔵とあるものは筆者実測・製図



図20 中期鉄刀の編年 (S=1/5)

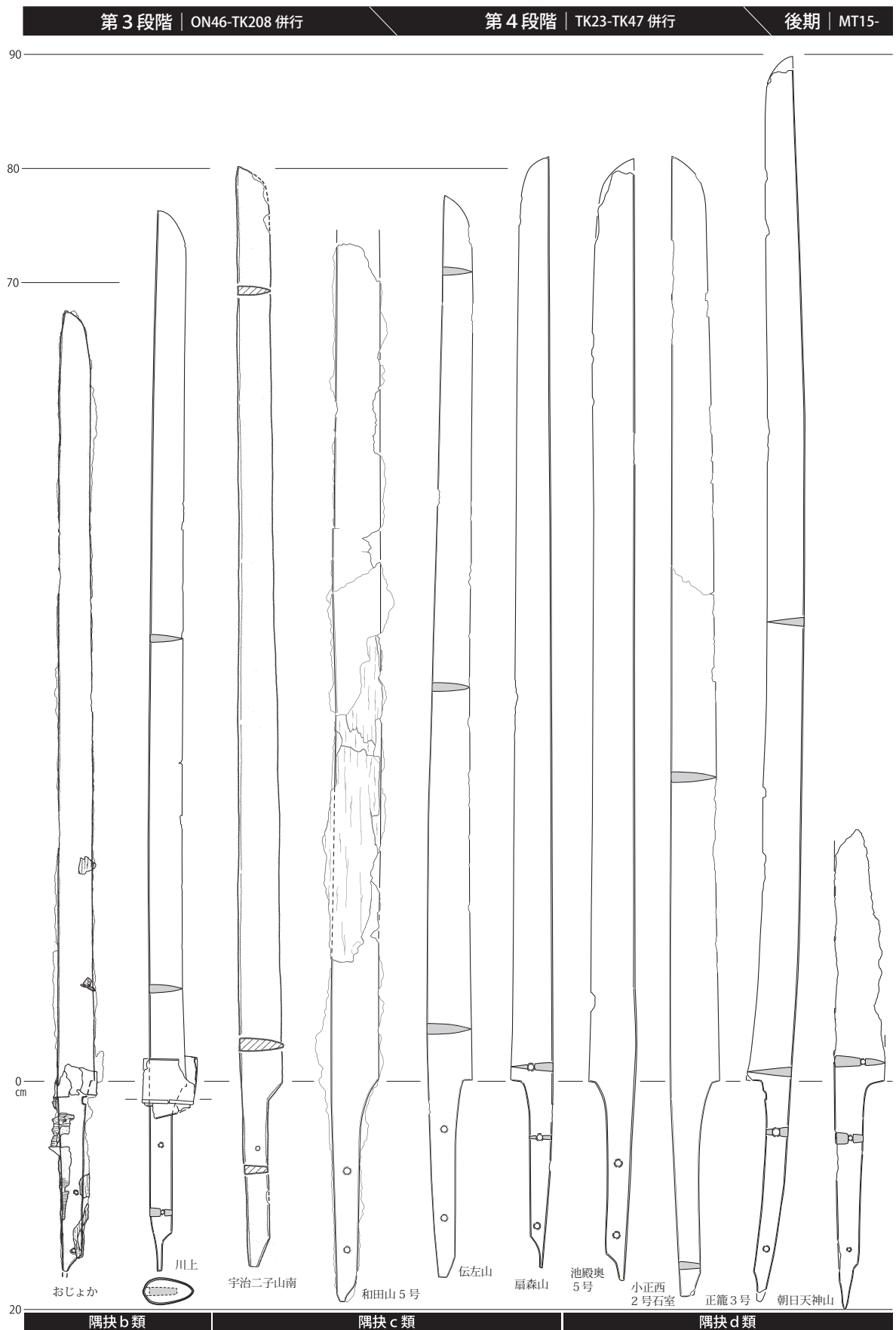


表3 隅抉茎尻鉄刀の刃関幅の推移

古墳名（「中○期」は鈴木編年）	型 式	刀剣編年		中2		中3		中4		後1	刀装具 ／属性
		鈴木編年		中1・2・3		4		5・6		7	
		集成編年		4・5	6	7		8		9	
		全長	茎長		TK73	TK216	ON46	TK208	TK23	TK47	
東京 野毛大塚・第3主体部/11（TK216）	隅 抉 a 類	81.5	17.3		刃関幅	2.0					
福岡 奴山正園/43（中期初頭）		46.5	9.2		2.1						
奈良 新沢千塚・109号前方部/109（中5期）		75.0	13.0					2.2			
福岡 奴山正園/37（中期初頭）		46.8	10.2		2.2						
大阪 野中/51号刀（TK216）		82.4	14.5			2.2					
東京 野毛大塚・第3主体部/11（TK216）		83.2	16.6			2.2					
福岡 奴山正園/59（中期初頭）		43.2	12.0		2.3						
福岡 奴山正園/8（中期初頭）		46.0	12.9		2.4						
大阪 野中/86（TK216）		34.8～	16.1			2.5					
兵庫 新宮東山2号墳・4号棺		79.7	16.4	2.5							
東京 野毛大塚・第3主体部/8（TK216）		89.7	16.8			2.5					
大阪 堂山1号/20-5（TK73）		72.0	12.4		2.7						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/10（中3期）		78.4	15.3		2.7						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/13（中3期）		84.7	16.4		2.7						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/19（中3期）		91.6	15.2		2.7						
大阪 七観・第3柳/刀10（中3期）		85.9	15.2		2.7						
東京 野毛大塚・第3主体部/12（TK216）		91.5	18.3			2.7					
大阪 交野東車塚（中1期）		72.5	12.5	2.8							
大阪 七観・第3柳/16（中3期）		75.1～	15.5～		2.8						
福岡 永浦4号/1（中3期）		80.1～	17.6		2.8						
東京 野毛大塚・第1主体部/8（TK73）		80.7	14.7		2.8						
大阪 堂山1号/19-6（TK73）		84.5	16.1		2.8						
東京 野毛大塚・第3主体部/9（TK216）		86.0	16.8			2.8					
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/18（中3期）		88.2	18.3		2.8						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/16（中3期）		89.8	15.6		2.8						
大阪 豊中大塚/96-6（中2期）		92.4	15.0	2.8							
東京 野毛大塚・第3主体部/12（TK216）		93.1	17.0			2.8					
東京 野毛大塚・第1主体部/10（TK73）		74.7	14.9		2.9						
福岡 池の上6号（TK73）		80.5	15.0		2.9						
大阪 七観第3柳/刀14（TK73）		80.3～	18.7		2.9						
静岡 八幡ヶ谷（中期初頭～前葉）		81.2	16.9		2.9						
大阪 七観・第3柳/11（TK73）		84.6～	20.3		2.9						
静岡 千人塚・第2主体（TK73？）		87.2	16.1		2.9						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/14（中3期）		89.3	16.1		2.9						
兵庫 茶すり山・第1主体部中央区画/7（中3期）		89.7	19.5		2.9						
兵庫 茶すり山・第1主体部中央区画/9（中3期）		94.9	20.5		2.9						
兵庫 小野王塚（中4期）		92.0	15.5			2.9					碧玉製三輪玉
大阪 七観・第3柳/12（中3期）		65.6～	13.9		3.0						
大阪 七観・第3柳/13（中3期）		64.2	16.0		3.0						
大阪 七観・第3柳/15（中3期）		77～	16.3～		3.0						
福岡 永浦4号/6（中3期）		78.8	16.0		3.0						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/9（中3期）		83.5	16.7		3.0						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/12（中3期）		84.1	17.5		3.0						銅本孔
兵庫 茶すり山・第1主体部中央区画/8（中3期）		94.6	19.2		3.0						
兵庫 茶すり山・第1主体部中央区画/6（中3期）		97.7	19.6		3.0						
大阪 野中/112号刀（TK216）		44.1～	18.5			3.0					
千葉 山小川1号（TK23）		94.8	17.6					3.0			
大阪 七観・第3柳/刀17（中3期）		70.7～	17.6～		3.1						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/7（中3期）		80.6	15.7		3.1						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/8（中3期）		83.1	16.3		3.1						
三重 近代（TK208）		84.0	16.0					3.1			
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/11（中3期）		84.7	17.0		3.1						
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/15（中3期）		89.3	17.1		3.1						
大阪 豊中大塚/96-4（中2期）		89.4	18.0	3.1							
千葉 北の内2号埋葬（TK216）		89.4	16.0			3.1					
兵庫 年の神6号（TK73-216）		93.8	19.0			3.1					

古墳名（「中〇期」は鈴木編年）	型 式	刀剣編年		中2			中3		中4		後1	刀装具 ／属性
		鈴木編年		中1・2・3		4	5・6		7	後1		
		集成編年		4・5	6	7		8		9		
		全長	茎長		TK73	TK216	ON46	TK208	TK23	TK47	MT15	
東京 野毛大塚・第1主体部/9（TK73）	隔 決 b 類	79.4	14.2		3.2			3.2				
奈良 新沢千塚・109号前方部/109-10（中5期）		82.0～	16.7～					3.2				
三重 おじょか（ON46）		84.2	16.8				3.2					茎元挟り
大分 十六山1号横穴（TK208）		84.8	14.8					3.2				
大阪 七観第3柳/9（TK73）		86.3	18.5		3.2							
福岡 きょう塚（TK216）		88～	17.2			3.2						
香川 川上（TK208）		93.0	15.5					3.2				縄
大阪 豊中大塚/96-5		93.0	21.0	3.2								
兵庫 年の神6号（TK73-216）		93.2	19.0		3.2							
静岡 文殊堂11号（TK73-216）		93.8	18.3		3.2							
兵庫 梅田1号（中期前半）		99.0	19.0		3.2							茎元挟り
栃木 磯岡北3号（TK208）		101.3	16.6					3.2				茎元挟り
福岡 向田Ⅲ-2号（TK208-TK23）		102.0	18.4～					3.2				
奈良 野山遺跡野山支群11号（TK208）		84.3						3.3				
大阪 土師の里8号		85.0	19.5			3.3						
大阪 豊中大塚/96-2（中2期）		95.2	18.4	3.3								
大阪 七観・第3柳/刀8（TK73）		98.4～	19.5～		3.3							
千葉 北の内1号・埋葬（ON46）		84.1	15.2				3.4					
京都 カヤガ谷8号		86.9	14.9					3.4				
兵庫 茶すり山・第1主体部西区画/17（TK73）		89.0	18.2		3.4							
長野 倉科將軍塚2号（鋌留技法導入期）		89.5～	18.4		3.4							
京都 岩倉幡枝2号・西棺（ON46）		92.7	16.7				3.4					
兵庫 茶すり山・第1主体部中央区画/10（TK73）		104.8	20.3		3.4							
長野 溝口の塚（中6期古）		107～	17.6					3.4				
熊本 長目塚（TK216）		108.0	17.0			3.4						
奈良 新沢千塚109号・前方部/109-9（中5期）	隔 決 c 類	86.5	16.0					3.5				
岡山 前内池4号（TK23）		90.1							3.5			
大阪 堂山1号/19-2（TK73）		90.7	19.5		3.5							
石川 下開発茶臼山20号（TK208-23）		99.6	15.4					3.5				
福岡 向山1号・埋納施設/9（ON46）		102.5	17.1				3.5					
京都 宇治二子山南（TK208）		96.5	16.0					3.6				
福岡 向山1号・石室/7（ON46）		99.4	18.1				3.6					
大分 上ノ原25号（TK23-TK47）		103.6	20.6						3.6			
島根 西1号（集成8期）		108.3	17.4						3.6			
千葉 八重原1号（TK208）		109.0	19.8					3.6				
三重 小谷13号（TK216）		111.1	22.5			3.6						茎元挟り
大分 扇森山（集成8期）		97.5	16.5						3.7			縄本孔
大分 檜野（TK208-TK23）		90.7	15.2					3.8				
熊本 伝左山・舟形石棺（TK23）		95.0	17.3						3.8			
千葉 持塚1号（TK23）		95.5	17.8						3.8			茎元挟り
静岡 林2号（TK23）		97.0	17.4						3.8			
東京 野毛大塚・第4主体（TK208）		104.9	16.6					3.9				
大分 大作33号（TK47-MT15）	隔 決 d 類	94.8	16.9						4.0			
島根 敷居谷3号（集成8期）		90.3～							4.0			
福岡 小正西・2号石室/1（TK47-MT15）		104.1～	17.0							4.0		
福岡 正龍3号（MT15）		107.3	18.6							4.0		茎元挟り
奈良 池殿奥5号（TK23）		98.6	18.8					4.1				
埼玉 稲荷山/第1主体部（TK47）		103.8	20.0						4.1			
大分 稲荷山3号横穴（MT15）		111.8	21.7							4.1		縄本孔？
静岡 志味堂1号（中期後葉）		95.5	17.9					4.2				2段間
奈良 新沢千塚109号・前方部/109-8（中5期）		100.0	18.2					4.2				
石川 和田山5号/B柳（TK208）	93.2～	19.6					4.2				三輪玉？	
福岡 小正西・2号石室/2（TK47-MT15）	100.5	18.9							4.3			

※刃開幅の白抜きは、全長100cm以上のもの

そのほか、環頭部のなかほどにまで柄木がおよぶ環頭大刀が、3世紀末の京都府椿井大塚山古墳、4世紀代の島根県大成古墳・神原神社古墳、岐阜県矢道長塚古墳東櫛、福岡県鋤崎古墳、5世紀初頭の大阪府心合寺山古墳、大阪府久米田風吹山古墳などで出土している。舶載された環頭大刀の意義を正確に理解していない倭人が柄を改造したと考えられる。また、こうした装具をつけた大刀を、6世紀に成立する振り環頭大刀の祖形とみる意見がある〔橋本英2005など〕。

このように、環頭部の改造は単なる破損の修復などではなく、大陸の刀制に起源する環頭大刀が舶載され、本体・外装ともに意図的に改造（倭装化）されたものと考えられる。三葉環頭大刀も6世紀以降の倭に定着しないため、柄頭意匠のもつ意義が変容したのだろう。

倭に素環頭大刀が舶載された弥生時代には、茎端を折り曲げて環頭部を形成するものが一般的だが（共造り）、古墳時代には、個別につくった環頭部と刀身本体を装着するもの（別造り）が現れる〔杉原1968〕。

豊島直博は、共造りの素環頭大刀は倭と五胡十六国慕容鮮卑三燕で本体の形に差がなく、特定の地域で製作され、ひろく東アジアに流通したものもあると想定する。また、天理参考館所蔵中国出土素環頭大刀1の背側には木質が見られず、柄全体に巻かれた革と赤い糸は茎の背に接するため、落とし込み技法は中国から学んだ技術と評価する〔豊島2010〕。

いっぽう、倭の落とし込み式柄は柄縁が鞘口に納まらない点、柄縁が一回り太い点、環頭部の一部まで柄木が達する点など、細部では中国の鉄刀の柄と異なり、素環頭大刀は抜身の状態で中国から舶載されたという意見もある〔今尾1982〕。

中期第1段階 — 素環頭大刀や剣が組成の中心 — 〔図21上段〕

鈴木一有による中期様式編年1期の岐阜県遊塚古墳では、平均30cmほどの短刀3本にたいして、剣は13本以上出土しており60cmを超えるもの2本をふくむ。遊塚古墳とほぼ同時期か、やや新しい岐阜県昼飯大塚古墳では刀15本、剣5本と刀優位だが、最長でも60cmに満たない。

最古段階の帯金式甲冑が出土した鳥取県古郡家1号墳の北棺では、剣が5本出土したが刀をふくまない。福岡県鋤崎古墳では、1号棺棺上突起と2号棺棺外の素環頭大刀が刀剣の中心である。

鋤崎古墳とならんで最古級の横穴式石室をもつ佐賀県谷口古墳では、西石室で剣5本、前方部石棺で剣2本が出土している。古市古墳群最初的大型前方後円墳である大阪府津堂城山古墳では、最古段階とみられる三角板革綴短甲片とともに、素環頭鉄剣と三葉環頭大刀がともなう〔橋本達2005〕。

この段階には、確実に倭で製作されたと認識できる刀剣本体は乏しいが、外来系譜の素環頭大刀や剣を主体とする前期的な様式から脱却し、倭装の刀を中心に据えた様式を模索する揺籃期と評価する。

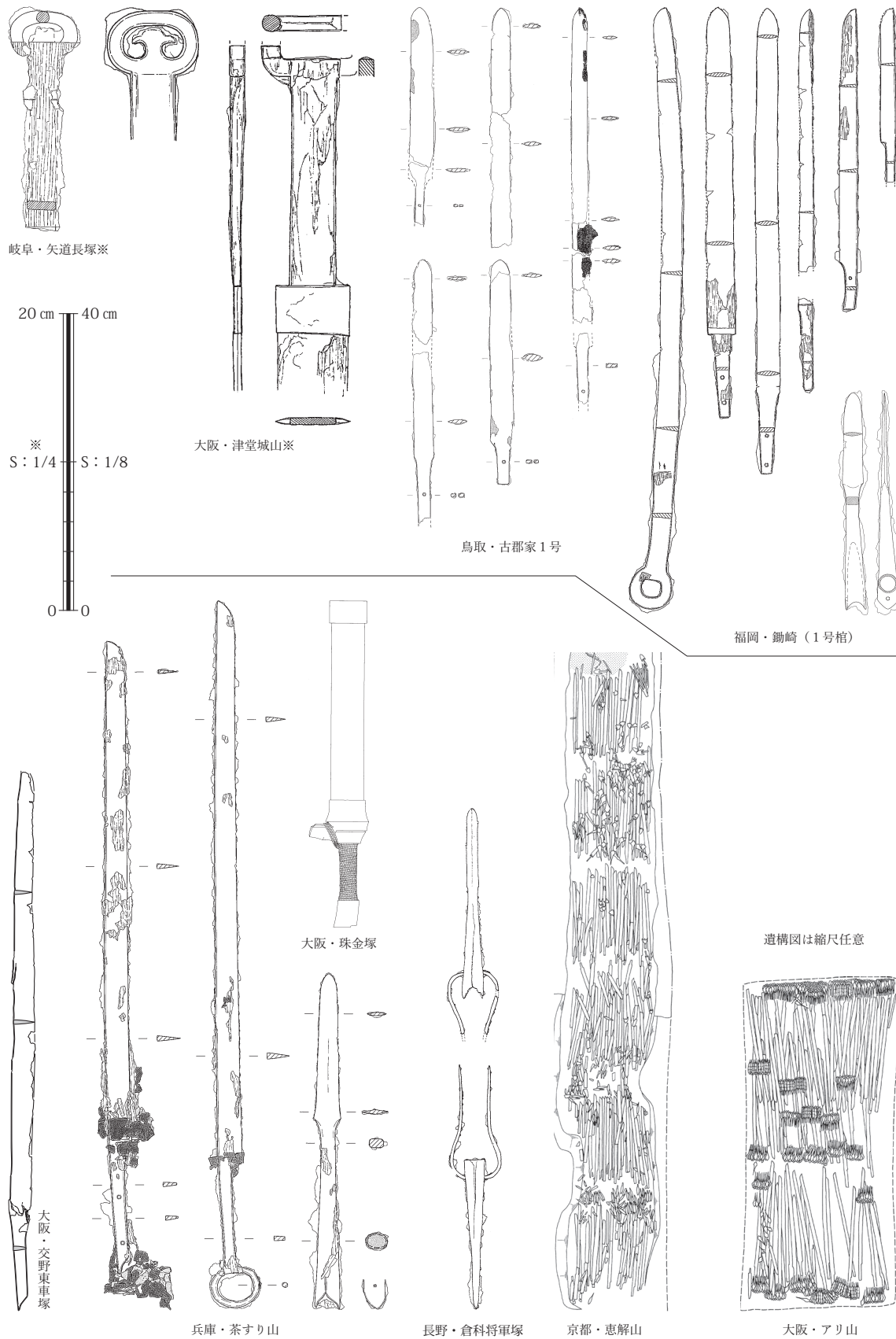
中期第2段階古相 — 隅抉尻茎系列の出現 — 〔図21下段〕

大阪府東車塚古墳では、隅抉尻茎鉄刀の最古例とみられるものが、やはり最古段階の三角板革綴襟付短甲をともない、鈴木の中1期に位置づけられる。刀剣比率は4：6とわずかに剣優位だが、共伴した刀剣のなかでは全長72.5cmの隅抉a類が最長である。ただし、第1段階とはほとんど実質的な時間差がない。

中期第2段階新相（TK73-TK216型式期並行） — 刀剣の多量副葬・埋納 — 〔図21下段〕

TK73-TK216型式期には、a・b類が主流である。熊本県長目塚古墳や三重県小谷13号墳例のように全長100cmを超える刀身がいくつかあるが、主流とはならない。大阪府堂山1号墳でも単発的に隅抉c類をとまなうが、数ではa類が圧倒する。

この段階には、畿内および周辺を中心として、刀剣の大量副葬・埋納がみられる。鉄器埋納施設への刀剣



図出典 矢道長塚(大垣市2011) 津堂城山(橋本2005) 古郡家1号(鳥取県2013) 鋤崎(福岡市教育委員会2002) 交野東車塚(交野市立歴史民俗資料展示室蔵) 茶すり山(兵庫県教育委員会2010) 珠金塚(細川2007) 倉科將軍塚(更埴市教育委員会2002) 恵解山・アリ山(豊島2000)

図21 中期第1段階(上段)・第2段階(下段)の刀剣様式

の多量埋納は、京都府恵解山古墳（147振）、大阪府七観古墳第3主体（132振）、アリ山古墳北施設（77振）、野中古墳第4列（145振）などを代表とする〔川畑2015〕。施設ごとに鉄刀の長短の規格性があり、戦闘用ではなく儀礼に際して特別に作られたものという理解がある〔豊島2000〕。

鉄器埋納施設の分布は畿内が圧倒的に優位であり、すぐれた質・量の甲冑の出土とあわせ、倭王権が武装具の生産と流通の中心にあったことを示す。鉄器埋納施設出土品については情報量が多すぎるため、かえって全体像を把握できる古墳がないが、最多の鉄刀出土数を誇る恵解山古墳出土鉄刀の刃関幅は2.1~3.2cm程度で、この段階の標準的なサイズを示している。

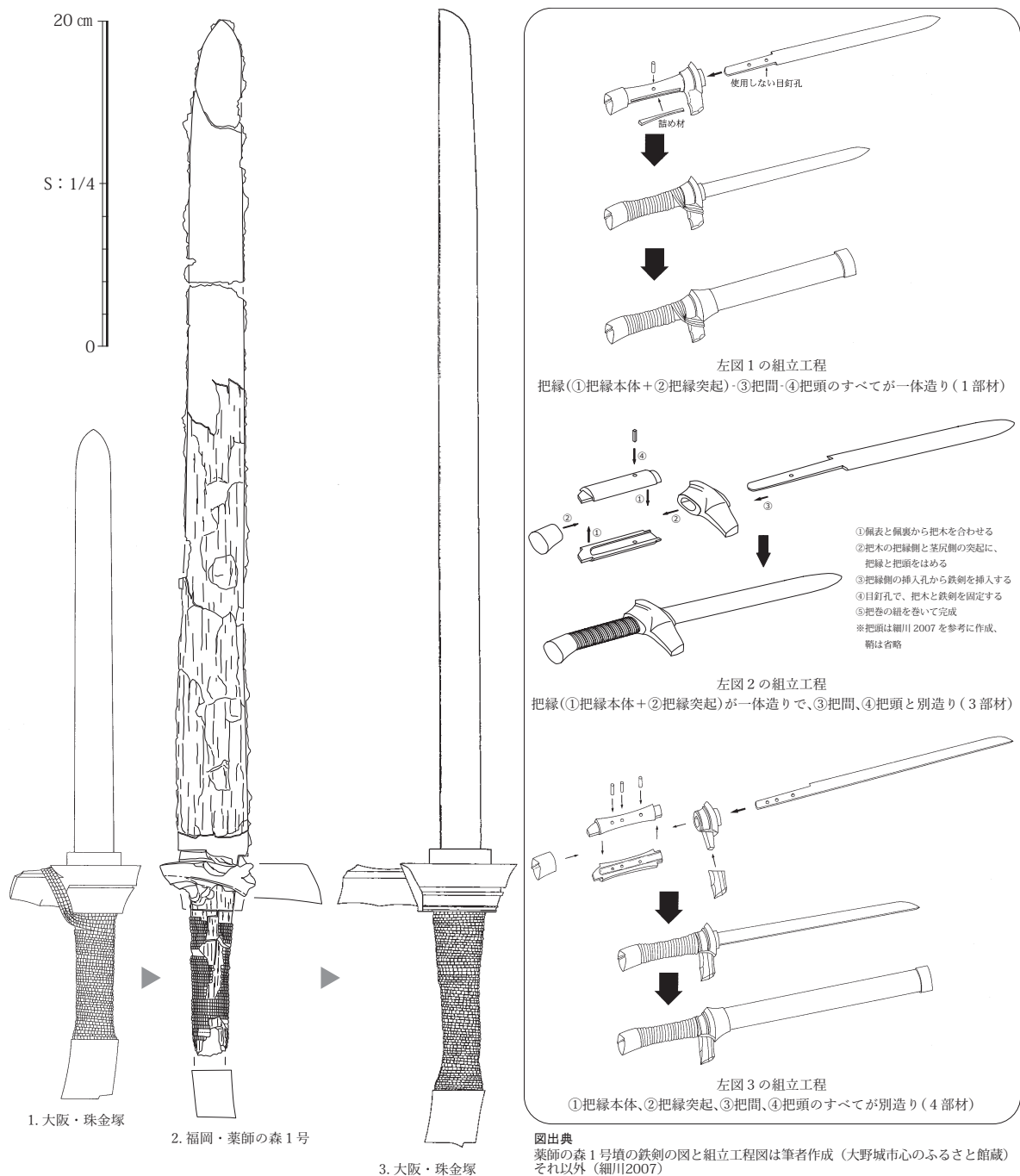


図22 中期第2段階における倭装刀剣の質的転換

福岡県永浦4号墳では一文字a類5振、隅抉a類2振が出土しており、茎尻の形式が違っていても、身部はおおむね同サイズを指向していたことがわかる良好な組成である。

兵庫県茶すり山古墳では、第1主体部から83点、第2主体部から2点、合計85点の刀剣類が出土した。それらの多くは、鞘尻や柄頭など末端部分までの外装が良好に残っており、岩本崇による精緻な報告と構造分析をつうじて、刀は刀、剣は剣で、基本的には共通した外装構造であることがあきらかとなった〔図23、岩本2010〕。すなわち、鉄刀の柄頭の形状をとどめるものはいずれも「楔形柄頭」であり、置田雅昭の柄装具B類にあたる。鉄剣は、一方に柄縁突起を造り出す一本造りである。

柄縁突起をもつ柄には鹿角製、木製の二者があり、組立構造には三通りがあるが〔図22〕、中期前半の大阪府珠金塚古墳鉄剣と鉄刀の両者をつなぐ段階の資料が福岡県薬師の森1号墳で出土しており、短期間のうちに急速に変化することがわかる。

そのほか、鉄刀の特殊な造作や付属具の最古事例として、茶すり山古墳第1主体部西1区画刀12に鉦本孔、兵庫県梅田1号墳の隅抉b類に茎元挟りがほどこされるほか、兵庫県小野王塚古墳で三輪玉が出土している。茎元挟りとは、茎の関際にある方形の挟りのことで、落とし込み式柄の柄縁の方形孔に紐を通して護拳帯をつけるための特殊な造作である。茎元挟りのある鉄刀は比較的優位な古墳から出土することが多く、比較的装飾性豊かな大刀を構成していたとみられる。

以上の古墳は、いずれも各地を代表する古墳であることから、隅抉尻茎鉄刀がこの段階における上位階層の武器として認識するが、現状では、これらの付随要素が混交する様相はみられない。

そのほかの特殊な事例として、福岡県小松原堤古墳（5世紀前半～中頃）から出土した鉄刀（一文字b類）を挙げる。この刀は鋒部のみ両刃に研ぎ出すものであり、剣主体から刀主体へと様式転換する過渡期の産物として理解する〔図24〕。

鉄鉦では、長野県倉科將軍塚古墳例のような屈曲形目釘をとまうものがこの段階までに出現するが、鉦本体の形状は朝鮮半島にもみられるものであることから、現状では倭製品かどうかは判断できない。ただ、屈曲形目釘をとまう鉄鉦は朝鮮半島に類例が乏しいため、列島社会のなかで流通した武器として、第一に評価すべきであろう。

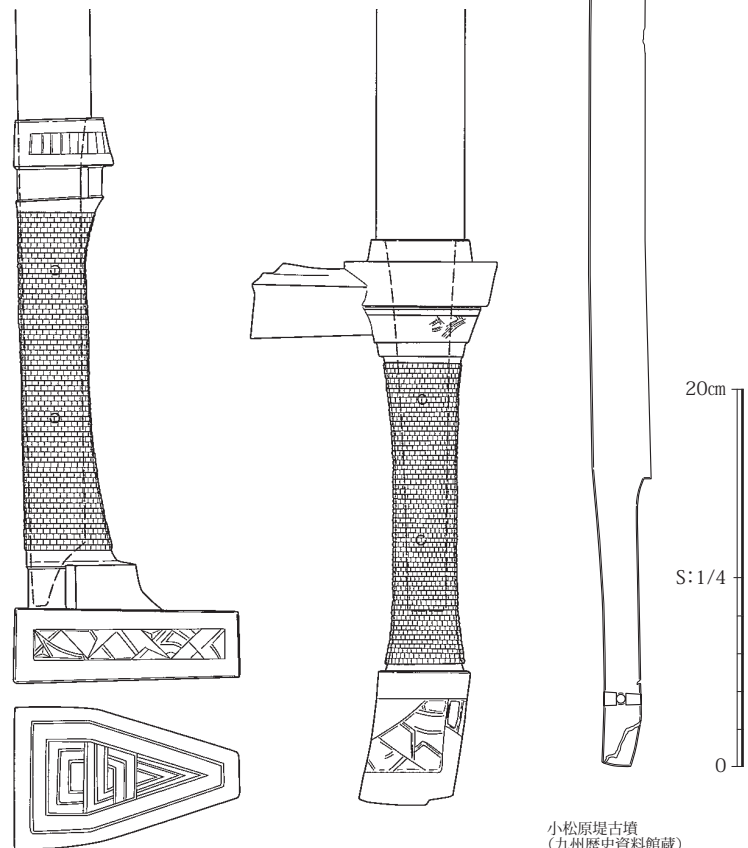
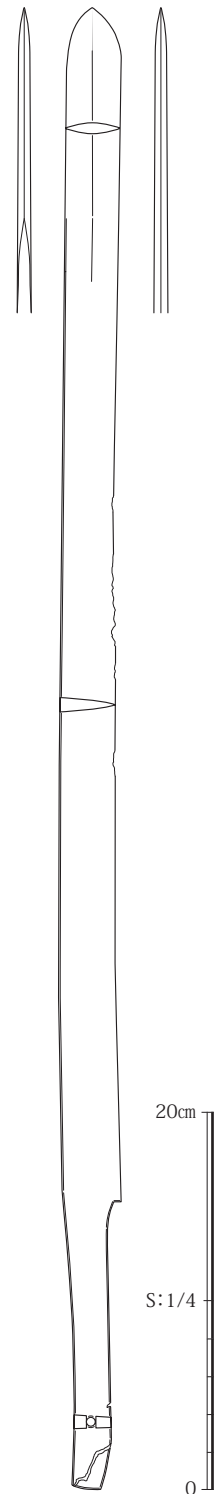


図23 茶すり山古墳出土刀剣の外装復元〔岩本2010〕



小松原堤古墳
(九州歴史資料館蔵)

図24 鋒両刃の鉄刀

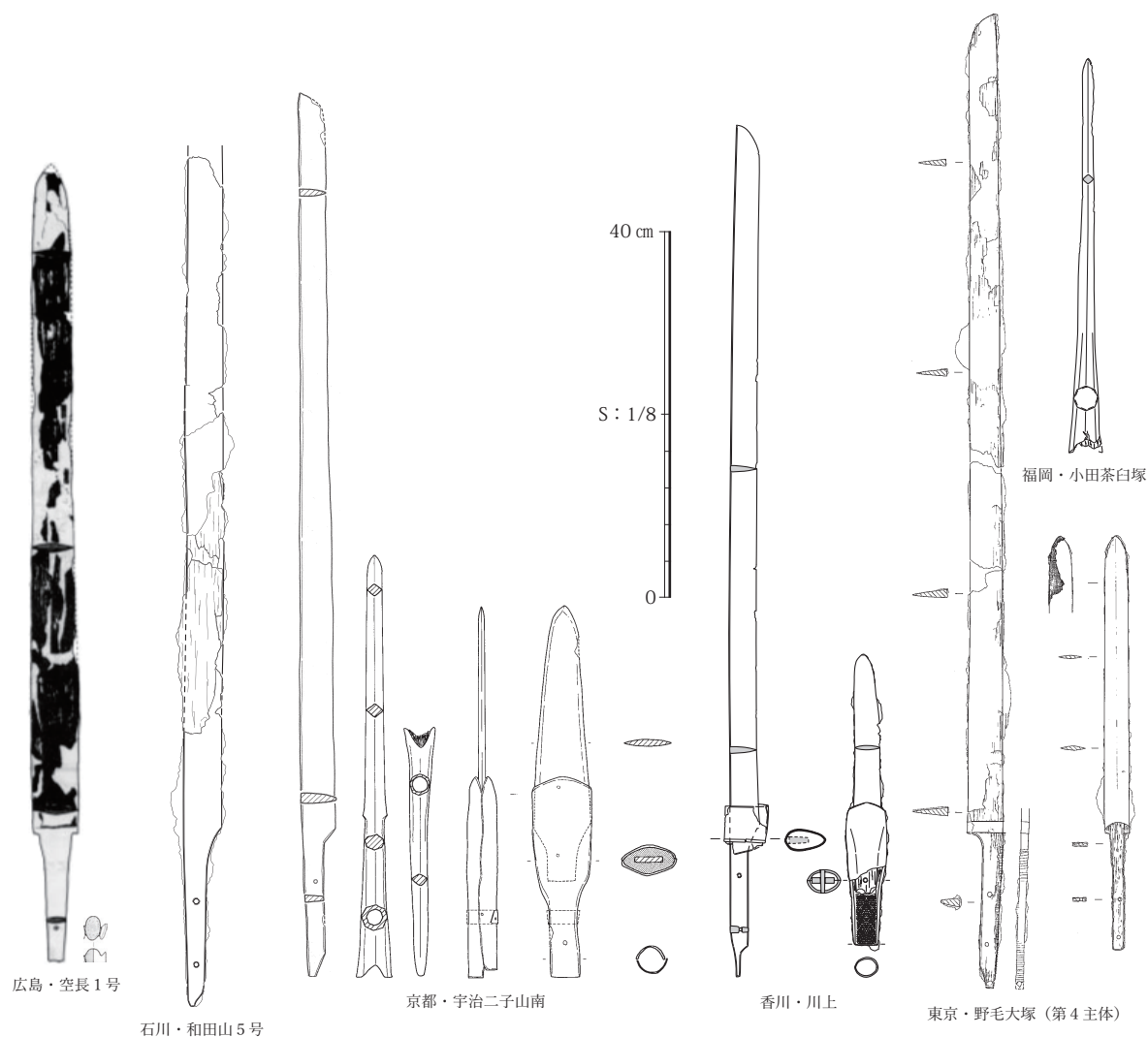
中期第3段階（ON46-TK208型式期並行）― 刀剣の量質転化 ― [図25]

第3段階には、第2段階にみられた刀剣の多量副葬・埋納、とくに同じ古墳に隅抉尻茎鉄刀を2振以上副葬する事例が少なくなるとともに、大型化する。刀剣の量質転化期として評価する。

ON46型式期には、a類はほぼ副葬されていないのにたいして、b類とc類が同数程度出土する点において、第2段階よりも鉄刀の大型化がすすんでいる。

石川県和田山5号墳ではA槨から2振、B槨から1振の隅抉d類が出土しており、その他の共伴刀剣とは比較にならないほど長大である。A槨の碧玉製三輪玉は、このいずれかにともなう可能性がたかい。野毛大塚古墳第4主体部では須恵器が出土していないが、先行する第3主体部がTK216型式期に位置づけられるため、この段階におさまる可能性がたかい。広島県空長1号墳の三輪玉は剣にともなうが、それ以外はいずれも隅抉茎系列の鉄刀にともなう。また、和田山5号墳、野毛大塚古墳第4主体部では最新段階とみられるヤリが出土している。

ここで注意すべきは、鈴木中5期の新沢千塚109号墳において隅抉a類が出土していることだが、c・d



図出典

空長1号（広島市教育委員会 1978『空長古墳群発掘調査報告書』） 和田山5号（能美市立歴史民俗資料館蔵）
宇治二子山南（宇治市教育委員会 1991『宇治二子山古墳』） 川上（さぬき市歴史民俗資料館蔵）
野毛大塚（世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会 1999『野毛大塚古墳』） 小田茶臼塚（日本歴史資料館蔵）

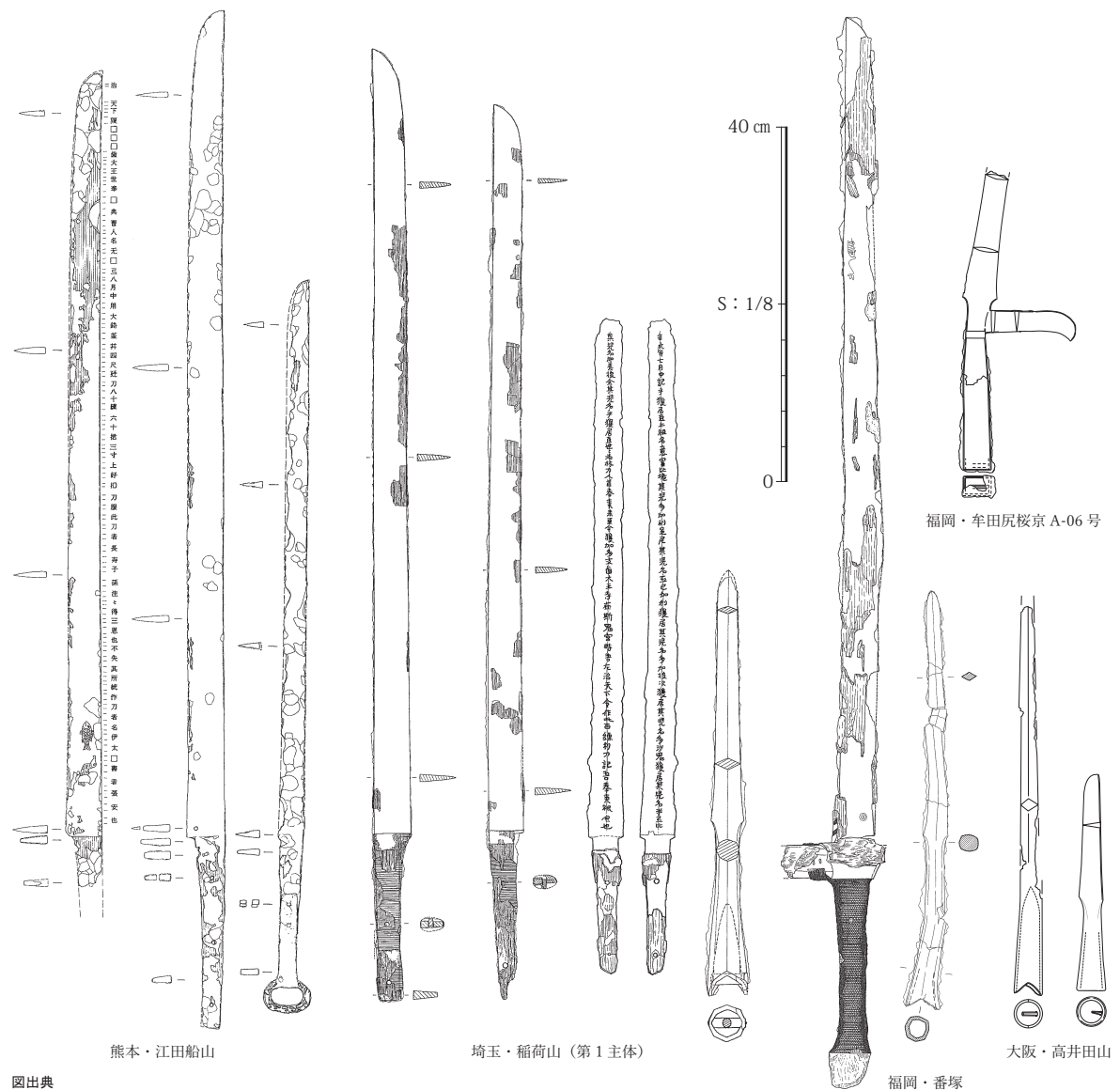
図25 中期第3段階の刀剣様式

類もともなうため、古い刀が伝世したか、従属的な階層の武器の共伴とみられる。さまざまな型式が混在する古墳においては、あくまでも数量やサイズにおいて組成の中心となる刀が最新相（≒副葬年代）を示す。古墳の築造年代よりもあきらかに古相を示す刀剣が1振だけ出土する事例がほとんどないことも、こうした想定の説左となろう。

香川県川上古墳では、隅抉b類に鉄製緇・鞘口金具をとまなう。この二つの装具の倭での安定的な生産開始はTK43型式期以降であり、中期の一般的な倭製鉄刀には装着しない。半島系鉄刀の影響を受けて単発的に製作されたとみなしておく。

岡山県正崎2号墳や京都府宇治二子山南墳、福岡県小田茶臼塚古墳などで、全長40cm内外の長身式鉄鉾が出現する。福岡県セスドノ古墳例も、共伴した鉄鏃の年代観からこの段階までさかのぼる〔第6章〕。

また、和歌山県陵山古墳、川上古墳や宇治二子山南墳、奈良県後出3号墳などで、ヤリの茎部分を鉄製の袋で包むことによってあたかも鉾であるかのように見せる「槍身鉾」が出土しているが、第4段階にはほとんどみられなくなる。



図出典

江田船山 (和水町 2007『菊水町史 江田船山古墳編』)
香塚 (九州大学文学部考古学研究室 1993『香塚古墳』)

稲荷山 (埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』)
牟田尻桜京 A-06号 (海の道むなかた館蔵) 高井田山 (柏原市立歴史資料館蔵)

図26 中期第4段階の刀剣様式

中期第4段階（TK23-TK47型式期並行）― 後期への胎動 ― [図26]

一文字系列、隅抉系列ともに、全長100cm超、刃闊幅約4cmの大型品が生産され、刀剣組成の中心となる。

一文字d類のなかでも、全長100～120cm、茎長20cm前後に規格化される大型品は、白杵1984以来「6世紀型鉄刀」として認識されてきたものだが、実際には、福岡県真浄寺2号墳、熊本県江田船山古墳、鳥取県倭文6号墳などで最新式の横矧板鋌留短甲をともなつて出土している。江田船山古墳の須恵器はTK208型式にちかいTK23型式だが、d類にあたる「獲□□□鹵」銘鉄刀は、489年の雄略没後間もない頃の製作と考えられているので[東野1993]、この段階まで下る。また、「獲加多支鹵」銘鉄剣の出土した埼玉稲荷山古墳第1主体部でも出土している。

この鉄刀群は振り環頭大刀を代表とする6世紀の倭系装飾大刀に採用され、古墳時代後期後半までたかい規格性を維持しながら安定的に生産される。その萌芽が中期後半・末、とくに東西の獲加多支鹵銘刀剣出土古墳にみられることは過小評価できない。TK23-TK47型式期の実年代を西暦470年代から480年代頃とみるかぎりにおいては、雄略朝との関連で検討すべき事象だろう。

また、熊本県伝左山古墳では素環頭大刀が計6振、江田船山古墳では、環頭部に銀板を被せた素環頭大刀と、環部に龍文を銀象嵌した素環頭大刀が出土している。中期後半・末においては最も素環頭大刀が集中する地域である。伝左山古墳、江田船山古墳の素環頭大刀は、いずれも柄を倭装化した痕跡が薄弱であるため、現状では舶載品である可能性がたかい。また、福岡県高堀古墳の素環頭大刀は、環頭部の表面から錫が検出され、往時には銀色を呈していたことが判明している[比佐ほか2005]。福岡県古武S-9号墳では、龍文素環頭大刀とともに、鑄造鉄斧や引手に振りをほどこす円環轡が出土している。

剣も同様に長大化がすすみ、江田船山古墳例などがこの段階としては最大クラスとみられる。埼玉稲荷山古墳の獲加多支鹵銘鉄剣もふくめ、刀剣のもつ象徴性が最大限に表れた段階、すなわち中期的な刀剣様式の集大成の段階として評価しうる。

銚では、高井田山古墳例や番塚古墳例などを最新の事例としてに長身式がみられる。刀身式も、百済系渡来人の墓とみられる大阪府高井田山古墳で国内最多の4本、韓国では竹幕洞祭祀遺跡でも出土事例があり、対外交流のなかで理解すべきだが、その系譜は詳らかでない。茨城県三昧塚古墳や福岡県牟田尻桜京A-06号墳では戟が出土しており、6世紀前半の千葉県禅昌寺山古墳例などにつながるが数は少ない。

後期第1段階（MT15型式期）― 倭装大刀の金属装化、量質転化 ―

MT15型式期の大阪府峯ヶ塚古墳で振り環頭大刀5振をふくむ15振以上の大型倭装大刀が出土している[図27]。当該期最多の装飾大刀出土数である。振り環頭大刀は倭王権が生産した最初の金属装大刀であり、峯ヶ塚古墳例がその最古段階でもある。峯ヶ塚古墳での出土数は、中期の武器型鉄器埋納施設での鉄刀出土数に比べると少ないが、規格性の整った刀を多く副葬する点で通底する。中期的な刀剣の多量埋納・副葬様式から、同一形式の大刀は一人一振の副葬を原則とする後期的な様式への転化期として位置づけうる。

こうしたありかたは、峯ヶ塚古墳における、古墳時代中期にはみられない武装体系の登場をもって古墳時代後期の開始と評価されるように[鈴木一2012]、新たな財体系創出段階の揺籃状況を示す。筆者も、峯ヶ塚古墳における倭装大刀多量副葬と、大阪府今城塚古墳における倭装大刀形埴輪多量樹立を重視し、MT15型式期を前後する時期を大刀の「量質転化期A段階（量から質へ）」と呼ぶ[図29]。

振り環頭大刀に内蔵される鉄刀のうち、型式がわかるもののほとんどは一文字d類であるほか、三輪玉や銅本孔、茎元抉り、象嵌など、中期第4段階までに出現していた要素をともなうものが多い。以後、一文字d類は定型化し、終焉段階のTK209型式期にかけておおきく変化しない。

表4 古墳時代中期刀剣の様式編年

分類		段階		2 (国産化、大量副葬・埋納)		3 (量質転化)		4 (d類の定型化)		後期1
		中期1	(TG232)	TK73	TK216	(ON46)	TK208	TK23	TK47	MT15
環頭大刀		津堂城山 鋤崎		茶すり山 七観・老司	宮山		大森7号	江田船山 伝左山		正龍3号
倭系鉄刀	刃 関 幅	a類	～3.1cm							
		b類	3.2～3.4cm							
		c類	3.5～3.9cm							
		d類	4.0cm～							
	付随要素の初現			楔形柄頭 隅状尻茎	鋤本孔	三輪玉 茎元挟り	銘文	連弧輪状文		振り環 魚佩
剣										
ヤリ										
鉾	長身鎬式						黒姫山・ヒドノ 正崎2号 小田茶臼塚 下北方5号	高井田山 中原5号	倭文6号	
	刀身式							高井田山	弦巻塚・金塚 小正西	
	槍身鉾					陵山	八重原1号 宇治二子山南 後出3号 川上	洗島1号		
	屈曲目釘			老司 井上1号 倉科將軍塚 2号	小野王塚			かんかん塚 塚堂	新沢千塚 281号 塚坊主	番塚
	戟				城の山		楸	桜京A06号	弦巻塚 三味塚	禪昌寺山
	三角穂式							風納土城	丁村	若田大塚
他 武 装 の 初 現	弓 具	短頭・長頸鎌	短頸鎌		長頸鎌					
		特殊造作	鳥舌・振り		独立片逆刺					
		付属具	銅製弓弭		胡蓀					
	甲 冑		帯金式成立	衝角付冑 襟付短甲	鋸留技法 小札甲	盾底付冑			帯金式短甲減	
	鏡板・杏葉・帯金具				龍文帯金具 葉文帯金具		f字・内湾 剣菱・鈴付			
主要古墳		津堂城山 古郡家1号 鋤崎	交野東車塚 盾塚 豊中大塚	堂山1号 鞍塚・七観 茶すり山	土師の里8号 珠金塚・野中 小野王塚	岩倉幡枝2号 向山1号 おじよか	野毛大塚(4) 和田山5号 川上・ヒドノ	池殿奥5号 江田船山 伝左山(石棺)	埼玉稲荷山 加納南9号 倭文6号	峯ヶ塚 古海原前1号 築瀬二子塚
鈴木編年 [鈴木2014・2017]		中1期	中2期	中3期	中4期	中5期	中6期	中7期	後1期	

※主要古墳として掲げたのは刀剣の様式編年に従うものであり、須恵器編年や鈴木編年とは厳密には対応しない(例：交野東車塚は鈴木編年の中1期)

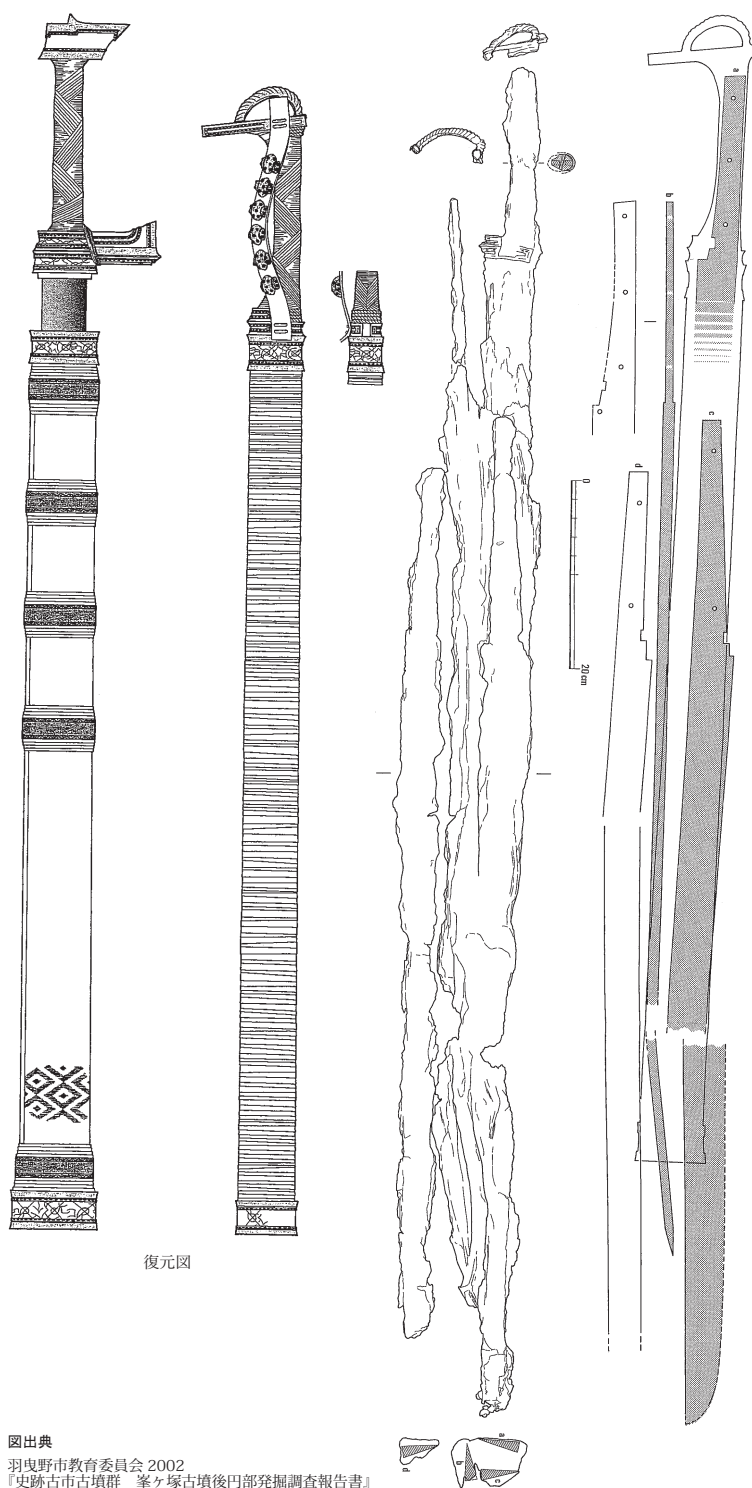
凡例 多 少

ここで、峯ヶ塚古墳や藤ノ木古墳出土例に代表される豪華な倭装大刀に共通してみられる、振り環頭・鋤本孔・連弧輪状文・茎元挟り・勾金飾金具などの要素がどのような過程を経て統合されるにいたったのかを考える [図28]。

振り環頭の系譜 振り環の祖形については、今尾文昭、新納泉、池淵俊一、橋本英将、深谷淳らの意見がある [今尾1982, 新納1991, 池淵2003, 橋本英2005, 深谷2008]。すなわち、4～5世紀の島根県大成古墳、神原神社古墳、奈良県椿井大塚山古墳の素環頭大刀や、大阪府心合寺山古墳の三葉環頭大刀は、柄木が環頭部の下部あるいは中央まで被さっており、柄を装着した状態では環頭部の上半部しか露出していなかったと考えられ、そこに半円形を呈する振り環頭との形態的類似性が指摘されている。

後に素環頭大刀が舶載された弥生時代には、茎端を折り曲げて環頭部を形成する共造りのものが盛行し、古墳時代には、環頭部分と刀身本体を別個に作った後に装着する別造りのものが盛行する [杉原1968]。

これは茎落とし込み式柄の出現とも抵触する。豊島は、奈良県天理参考館所蔵の中国出土素環頭大刀1は、背側に木質が確認されず、柄全体に巻かれた革と赤い糸は茎の背に接していることから、落とし込み技法は中国から学んだ技術と評価する [豊島2010]。しかし、日本の落とし込み式柄は柄縁が鞘口に納まらない点、柄縁が一回り太い点、素環頭部の一部まで柄木が達する点など、細部では中国の鉄刀の柄と異なり [町田1976, 置田1989, 菊地1996, 加藤2002]、素環頭大刀は抜き身の状態で中国から舶載されたと推定される [今尾1982]。



復元図

図出典
羽曳野市教育委員会 2002
『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』

図27 峯ヶ塚古墳の倭装大刀

たとえば、奈良県東大寺山古墳出土「中平」銘金象嵌花形飾環頭大刀は、中国漢代（2世紀）に製作された刀身本体に、4世紀に倭で製作された青銅製の環頭部を装着したものである。東大寺山古墳ではこのほかにも同様の改造がなされた鉄刀が4振出土している。

大阪府崇禅寺遺跡でも、古墳時代初頭に投棄されたとみられる素環頭大刀が出土している。本来は素環頭大刀だったと考えるが、刀身を切断した柄部分のみが廃棄されたようである。残存長16.5cm、環部の外径は約6cmを測る。崇禅寺遺跡では日本列島各地域の土器が出土しており、古墳時代初頭の物流拠点だったとみられる。この素環頭大刀も、中国あるいは北部九州から持ちこまれ、柄部分が切断されたものだろう。

よって、環頭部の改造は単なる破損の修復などではなく、中国大陸に起源する素環頭大刀が倭に舶載されるなかで、本体・外装ともに意図的に改造、すなわち倭装化されたものと考えられる。

鍬本孔 直接的な系譜がたどれるのかについては慎重を要するが、鍬本孔鉄刀と似たものに「刃関双孔剣」がある。刃関双孔は剣の両刃関に穿孔された、列島独特の形状の柄木との固定を目的とする「目釘孔」であり、それは弥生時代に朝鮮半島から舶載された鉄剣

を改造したものと考えられている [大庭1986, 池淵2003]。

刃関双孔剣の研究をすすめる杉山和徳によれば、弥生時代中期の福岡県吉武・高木遺跡出土例が最古段階の事例とみられ、その後弥生時代後期に盛行し、最新例は古墳時代中期前半の神奈川県吾妻坂古墳、石川県下開発茶臼山9号墳、静岡県間門松沢1号墳の3例とされる。杉山は、古墳時代前期の刃関双孔剣は、柄の痕跡から弥生時代の剣をヤリに転用したとみられるものが多いいっぽう、中期の3点はヤリの柄装具の痕跡

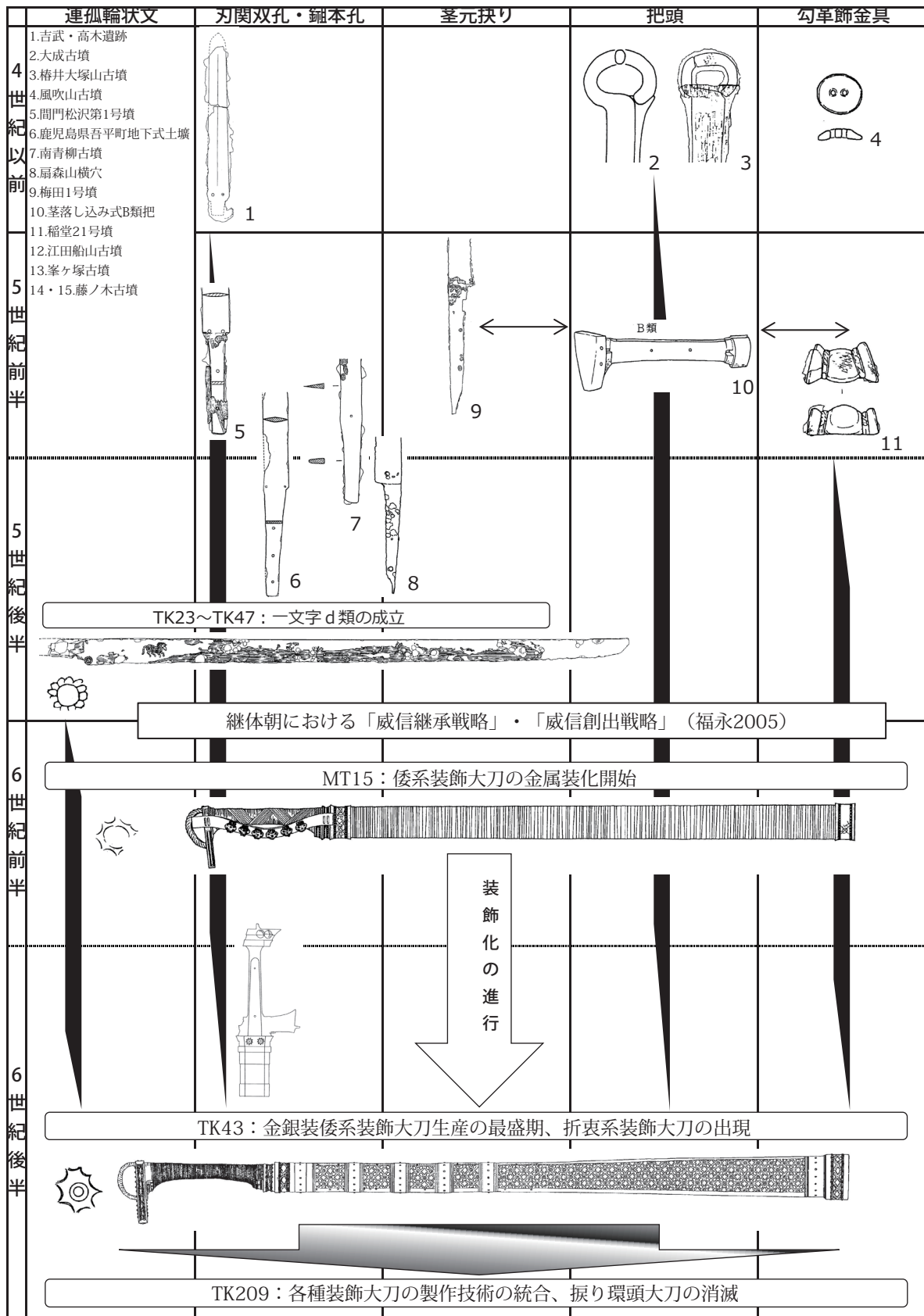
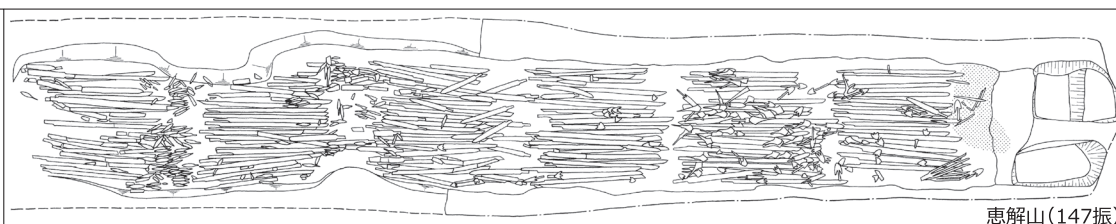
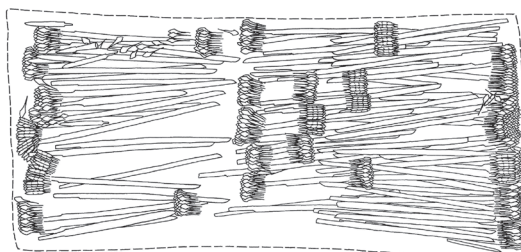


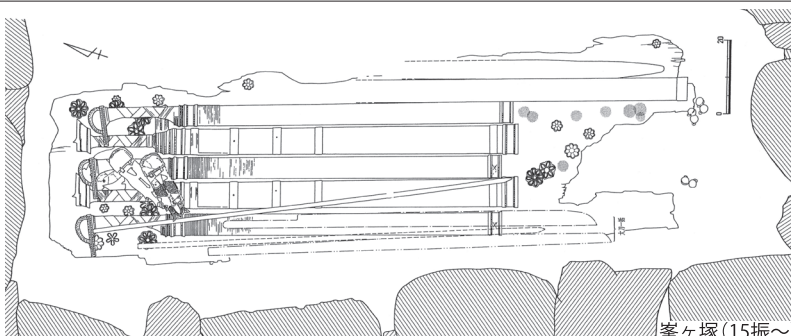
図28 倭装大刀の展開



- ▼武器型鉄器埋納施設の鉄刀は、古墳ごとに明確な規格性をもつ。実際の戦闘行為に用いるものではなく、儀礼に際して特別に製作された可能性(豊島2000)
- ▼畿内への集中が卓越(川畑2015)

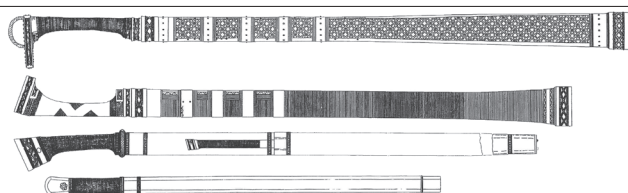


- ▼新たな財体系の創出
- ▼振り環頭大刀の出現
- 大刀の金銀装化
- 大型鉄刀の規格生産
- ▼峯ヶ塚では規格性の高い倭製大刀を多量副葬。鉄器埋納施設に通底
- ▼畿内の優位性の最終段階



主に TK43型式期

- ▼倭製装飾大刀生産の盛行、財の多様化
- ▼有力墳・国家祭祀における、二項的な大刀の様式
- 倭装大刀(+折衷系大刀) — 国内の身分表象
- 半島系大刀 — 対外的な身分表象



主に TK209型式期

- ▼伝統的な倭装大刀の衰退
- 装飾大刀生産体制の統合、定型品の量産
- ▼一埋葬施設における、同一形式の大刀多量副葬
- ▼東日本の優位性

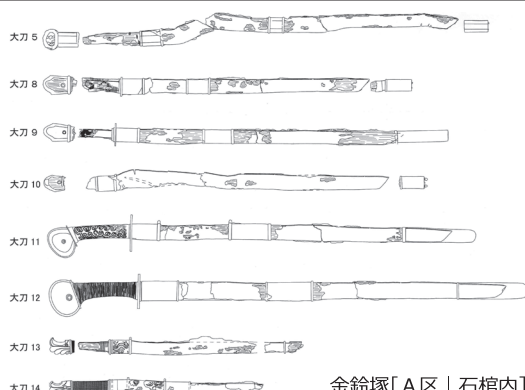
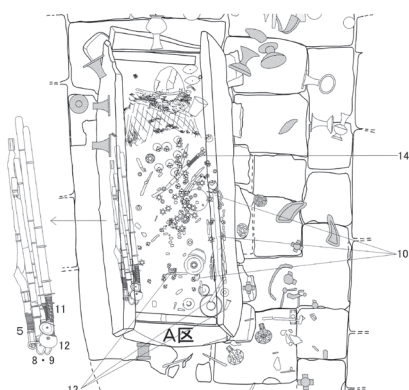
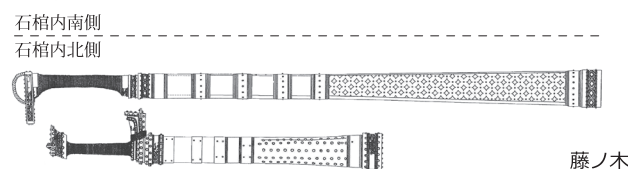


図29 中・後期における刀剣の量質転化

がみえず、茎部が長身化することから、刃関双孔が痕跡器官化し、剣としての性格が強まったとみる〔杉山和2010〕。

古墳への鉄剣副葬は、中期末に衰退し、以後刀剣の主体は鉄刀になる。鑑本孔鉄刀はその前段階に出現する。では、こうした刀剣組成の転換にあたり、刃関双孔鉄剣はどうなったのだろうか。

刃関双孔鉄剣の最新例と、鑑本孔鉄刀の最古例との時期の重複は慎重に検討しなければならない。ただ、6世紀後半の藤ノ木古墳でも刃関双孔のある装飾付剣が出土していることから、刃関双孔鉄剣の情報は長期に渡って存続したとみてよい。藤ノ木古墳の刃関双孔剣は、共伴した鑑本孔鉄刀内蔵装飾大刀と同様に連弧輪状文を象嵌する。現況では鑑本孔に物理的機能の痕跡がみられないことから、鑑本孔鉄刀の成立に刃関双孔剣の影響を想定する証左となろう。

このように刃関双孔鉄剣と鑑本孔鉄刀の接点を考えるうえで、興味深い資料が1点ある。1971年に発掘調査された鹿児島県吾平町の地下式土坑（5世紀後半）では、残存長55cm、茎長15.5cmの刃関双孔鉄剣が出土している〔上村・酒匂1972〕。片関の茎に目釘孔を三つ穿つ点や、残存長で55cmを測り、剣としては長い点などから、本来は鑑本孔鉄刀A群だったものを剣に改造したものである可能性がたかい。改造の理由はともかく、鑑本孔ではなく刃関双孔である点を積極的に評価し、穿孔は片刃に対して一つという原則を見いだしたい。

連弧輪状文 「獲□□□鹵」銘鉄刀の連弧輪状文は、12単位のU字状花卉文がひとつずつ丁寧に刻まれて各花卉文が接するが、峯ヶ塚古墳（TK47-MT15）以降は花卉文の上下が逆転して比較的粗雑になる。連弧輪状文を象嵌する鉄刀は、TK209型式期以降にはほとんどみられない。また、「獲□□□鹵」銘鉄刀の佩裏にほどこされた魚や鳥形の象嵌は、福岡県番塚古墳（TK47-MT15）、奈良県珠城山1号墳（MT15-TK10）、三重県石塚谷古墳（6世紀後半）に先行する〔西山ほか1996、内田2011〕。

5世紀前半の大阪府百舌鳥大塚山古墳では、関部に輪状文を象嵌した鉄鉾が出土しており、列島における輪状文の最古例とみられる〔西山ほか2009〕。

茎元挟り 茎元挟りのある鉄刀は、兵庫県梅田1号墳例（中期前半）を最古段階の事例として、TK208型式期以降、多くみられるようになる〔鈴木一2005〕。梅田1号墳例は隅挟尻茎でもあり、本来これらは一連の要素だった可能性がある。

勾革飾金具 5世紀前葉の大阪府久米田風吹山古墳では、象嵌がほどこされた素環頭大刀と、それにともなうとみられるガラス製円形飾りが出土している〔尾崎1997〕。

最古段階の三輪玉は、石川県和田山5号墳（TK208）で碧玉製、福岡県稲堂21号墳（TK216-TK208）、大阪府唐櫃山古墳（TK208-TK23）、広島県空長1号墳（5世紀後半）で金銅製のものが出土している。堤圭三郎によれば、時期が下ると金銅製三輪玉の勾革への装着個数が増加するという〔堤1968〕。最近では、深谷淳による詳論がある〔深谷2005・2008〕。

大澤元裕は、稲堂8号墳や岐阜県冬頭山崎2号墳、石川県和田山5号墳例などから、半球状金具は鉄剣にともなう可能性を指摘し、鉄刀にともなう三輪玉と対をなして、外装による刀と剣の判別を目的としていたと述べるが〔大澤2005〕、空長1号墳の三輪玉は鉄剣にともなう。

また、栃木県七廻り鏡塚古墳や奈良県藤ノ木古墳例のように、三輪玉が装着される鉄刀は茎元挟りをもつばあいがある。

小 結 このように、振り環頭大刀の環頭、鑑本孔、茎元挟り、連弧輪状文、勾金飾金具の要素は、当初から組みあわさって出現したのではなく、元来は別系統の存在であった。古墳時代当時には、現在認識されている以上の種類の大刀形式が存在した可能性がある。

その背景には雄略朝の専制志向や階層編成貫徹の不完全性が読みとれるが、ここで、福永伸哉が提唱し

た、継体朝における「威信継承戦略」「威信創出戦略」を想起する。福永は6世紀前半における威信財、あるいは威信的要素の変化に着目し、雄略朝の専制志向が伝統的な地方の首長権を動揺させたため、擁立された継体は先の両戦略で伝統・新興両勢力の糾合を図ったと理解する。このうち威信継承戦略は「5世紀からすでに列島内に存在していた要素を形や素材、規格などを変えながら再現し、普及増大させ……（中略）……各地の有力者の要望に応える」ものである〔福永2005：pp.521-522〕。さらに、振り環頭大刀の出現が継体朝の成立に連動するという高松雅文の意見〔高松2006〕にも目配りするならば、環頭・鉦本孔・象嵌・茎元挟り・三輪玉といった中期以来の伝統的な刀剣の付随要素にくわえ、高度な鉄器の振り技法〔鈴木一2002〕が「威信継承戦略」によって統合されたと考えられる。

なお、第5章で論じるように、三角穂式鉄鉦成立の動態も、振り環頭大刀のそれと同じ脈絡で理解しうる。

後期第2段階古相（TK10-MT85型式期並行）― 半島系装飾付環頭大刀の舶載最盛期 ―

外来系の装飾付環頭大刀が舶載され、一部模倣製作も想定される段階。福岡県箕田丸山古墳の単鳳環頭大刀などがその代表にあたる。いずれも基本的に一つの古墳から一振しか出土しない。また、それぞれの資料の個性がつよく、特定の身分標識としては機能しない。その佩用者は、倭王権と地方のつながりというよりはむしろ、対外交渉に長けた性格をもっていた可能性がある。

後期第2段階新相（TK43型式期並行）― 倭製装飾大刀生産・副葬の最盛期 ―

装飾大刀の舶載が継続するいっぽう、倭での模倣も最も盛んとなる段階。倭装大刀をベースとしながらも、外来系刀装具が混在した「折衷系大刀」もごく少数製作される。とくに、当該期屈指の有力墳である奈良県藤ノ木古墳、群馬県綿貫観音山古墳、島根県上塩冶築山古墳、埼玉県將軍山古墳では、大振りの振り環頭大刀を中心としながら、折衷系大刀と小振りの半島系大刀が共伴する。最高首長層の紐帯や階層的優位性、国際的な活動履歴を複合的に示す。そのほか、振り環頭大刀と単龍鳳環頭大刀がともなう古墳として、千葉県法皇塚古墳、大阪府海北塚古墳、三重県保古里車塚古墳、和歌山県鳴滝1号墳、長崎県双六古墳がある。福岡県沖ノ島祭祀遺跡においても、出土場所や時期が若干異なるものの、孤島の祭祀空間に振り環頭大刀と半島系大刀が並存している。王権中枢の要人に準ずる葬送儀礼、地域・対外交流、国家祭祀など、さまざまな場面に倭系と半島系の大刀による二項的な発想が存在したのであろう。このような理由から、終章でも述べるように、特定形式の装飾大刀佩用者に特定の氏族をあてはめる論調は首肯できない。

TK43型式期新相からTK209型式期にかけては、東日本を中心として、瞬時に型式（≒性格の違い）を区別できない類似した大刀を複数副葬する事例がある。TK43型式期の千葉県城山1号墳から出土した単龍鳳環頭大刀5振はその代表だが、大型のA群鉄刀+折衷系大刀+半島系大刀の組みあわせ規範に連なることにも注意したい。城山1号墳よりも新しいTK209型式期の千葉県金鈴塚古墳の石棺には、金銅装頭椎大刀2振、金銅装圭頭大刀3振、銀装鶏冠頭大刀2振が副葬された。こうしたありかたは、装飾大刀の装具が齊一化され画一的な生産体制に移行する段階と重なり〔大谷1999〕、群集墳や横穴墓への装飾大刀副葬の増加ともかかわる。すなわち、複数副葬される大刀が同じ人に帰属するか複数人に帰属するかを問わず、大刀のインフレーション（inflation）が起こったと考える。この段階を「量質転化期B段階（質から量へ）」と呼ぶ。

鉦本孔鉄刀が各地の有力首長墓、群集墳の盟主墓へ副葬されるのもこの時期が最も多い。隅抉d類にも鉦本孔を穿つ事例が多く、一文字d類と製作元がちかしかった可能性を示す。しかしながら、一文字d類と隅抉d類の共伴事例は少ない。鉦本孔を穿つ一文字d類出土古墳と隅抉d類出土古墳の規模や副葬品を比べると、両者にはあきらかな階層性があるから、これらはいずれも倭王権によって製作されたものであり、一定の規範に則って配布されたものと考えられる。ただし、後期の隅抉d類、とくに板鐔をとまなう刀の柄構造やデ

ザインは不明で、その解明が課題である。

銚では、三角穂式を上位、鎬式を下位とする階層構造が成立し、三角穂式鉄銚の副葬が盛んとなる[第5章]。

後期第3段階（TK209型式期）— 装飾大刀生産の統合段階 —

振り環頭大刀や単龍・単鳳環頭大刀の副葬はごく少数を除いて停止し、最上位層には金銅装の頭椎大刀や双龍環頭大刀が流通する。装飾大刀の生産体制が統合され、頭椎大刀と双龍環頭大刀の鞘のデザインに斉一性が認められるようになる。各種装飾大刀を生産していた工房を司る権力が一元化され、佩用者の身分や地位、職掌に応じて目的のかつ大量に装飾大刀が生産・配布されるようになったと考える。

具体的な時期については諸説あるが、おそくとも7世紀前半までのうちに、装飾大刀の主要形式はその副葬が停止した。それは佩用者の社会的立場を刀剣で表示する仕組みそのものの終焉を示す。振り環頭大刀を頂点とする序列の成立をもって刀剣からみた古墳時代後期のはじまりとみなすのならば、そうした仕組みが解体する瞬間に古墳時代後期の終焉を求めるべきだろう。千葉県庚申塚古墳例のような方頭大刀は、一基の古墳につき一振の副葬を原則とする。ここでもやはり刀剣の量質転化（量から質へ）が起こったと考える。

第4節 結 語 — 古墳時代刀剣様式の成立とその背景 —

本章では、確実に倭製品と認識できる刀の動態変化を整理することによって、古墳時代における刀剣の舶載・改造・模倣・創出・量質転化の流れを描いた。それを古墳時代史のなかで理解するならば、おおむね次のようになろう。

おもに弥生～古墳前期

朝鮮半島や中国大陸製の刀剣が北部九州に舶載される段階。

前期の倭においては、舶載された環頭大刀を刀剣様式の中心に据え、鏡とともに威信財化することによって国内外への威儀を示した。しかしその間にも、倭風外装への改造が模索されていた。

おもに古墳前期～中期

一部、倭王権中枢部に伝わったものが倭風に改造されるとともに、確実な倭製刀剣が成立する段階。倭製刀剣は、刀剣をもちいた身分秩序表示システムへの参入へ向けて、中期をつうじて段階的に長大化する。

中期にも引きつづき素環頭大刀や三葉環頭大刀が舶載され、初頭の津堂城山古墳や鋤崎古墳段階、すなわち帯金式甲冑が成立する段階においても、外来系の環頭大刀が刀剣様式の中心にある。ただし中期社会の幕開けからさほどの時間を空けず、交野東車塚古墳段階には倭独自様式の刀剣を完成させた。

このような様式の変革は、単なる富国強兵の一環というよりはむしろ、中国王朝を中心とした東アジア世界における一王権としての独立と発展への志向をうかがわせる。すなわち、倭の五王（讃・珍・済・興・武）は5世紀をつうじて、中国南朝の宋（420–479）および南斉（479–502）に朝貢した。421年に宋から冊封を受けた讃が中国との交渉権を独占して以降、珍・済・興は「倭国王」以外にも「使持節」「都督」の称号を求めることによって朝鮮半島における軍事行動の正当化を段階的に図ってゆく。著名な倭王武による宋の順帝への上表文には、倭王が日本列島と朝鮮半島のうち宋にしたがわぬ国々を滅ぼし、宋の皇帝による王道のおよぶ範囲を拡大してきたことが記される²⁾。479年に南斉が成立すると、初代皇帝である蕭道成（在位：479–482）によって、武はようやく「使持節 都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事 鎮東大將軍 倭王」に任じられ、中国の世界秩序下に編成される徳化のおよぶ国として認められた。

鉄製刀剣の安定的な国産体制を確立した倭は、中国大陸の周縁地域を秩序づける刀剣体系に参入するために、独自の装飾大刀の創出をめざした。刺す、あるいは斬るといった刀剣本来の機能とは異なる方向で発展段階的に長大化、加飾化してゆくことこそが中期的な刀剣様式の本質であり、また、東アジア世界の秩序に参入するための政治的パフォーマンスにほかならないのである。しかし、当時まだ金銀の国産資源やその加工技術をもちえなかった倭王権にとって、新羅や加耶に匹敵するような絢爛豪華な大刀の創出にはいたらなかった。倭装刀剣の保有にもとづく列島レベルでの秩序形成は、大型鉄製武器や甲冑の安定的な規格大量生産を可能にした5世紀代をつうじて発展段階的に醸成され、中期的な刀剣の諸属性を収斂した振り環頭大刀や三角穂式鉄鉾が成立する継体朝にいたるまで、一世紀もの時間を要した。

おもに古墳後期

中期の刀剣様式を集約し、さらに荘厳化した振り環頭大刀が倭の武装の頂点（主）に位置づけられ、こまかな仕様の差がさまざまな身分や出自、職掌などの所属を表示した段階。また、外来系の大刀を副に据えた複雑な秩序が形成される。このように考えると、外来系環頭大刀を中心に据えた刀剣様式から倭製品を中心とした刀剣様式への変化は、舶載品に依拠していた本義の「威信財システム」から脱却し、倭製品を中心に据えた財体系へと転換する巨大なイデオロギー（ideology）のなかで説明できる。すなわち、隅抉尻莖系列に代表される倭製鉄刀の出現は、中国後漢に発する刀剣をもちいた身分秩序表示システムへの参入に向けて、倭が主体的にうごき出した嚆矢といえ、たいする継体朝における振り環頭大刀の成立は、そうした中期的な刀剣体系の集大成として評価すべきなのである。

このうち後期第2段階から第3段階にかけて生じた、モノとしての装飾大刀の変化はすでに多くの先行研究で指摘されている〔図17、大谷晃1999a、松尾2003、持田2011など〕。ただ、古墳時代後期における刀剣様式の多様化、複雑化が何を示すのかについては、折に触れて議論されるテーマであるにもかかわらず、その生産地の想定から佩用者の性格、副葬の意義にいたるまで、刀剣以外の要素も含む根拠に裏づけられたライフサイクルが示されていない。まさに百家争鳴の状況にあるものの、逆にいえば、中国後漢に起源し東アジア広域を覆う巨大な刀剣文化の急先鋒へたいする過去一世紀間の研究の到達点としては、あまりにも小さく、さびしい。

以下の各章では、こうした命題を解決するための個別論を展開し、「刀剣とは何か」「武装とは何か」といった本質的議論への近似解を絞りこむことにしよう。

註

- 1) 本章の構成要素となった齊藤2017b論文では、莖尻形式をⅠ群（素環頭）、Ⅱ群（一文字尻莖）、Ⅲ群（隅抉・隅切尻莖）と分け、刃関幅の分類（a～d）とあわせて「Ⅱa式」「Ⅲb式」のように記していたが、本章の分類をもって正式な分類とする。
- 2) 【『宋書夷蛮伝』倭国条 昇明2年（478）5月】「封国は偏遠にして藩を外に作す。昔から祖彌躬ら甲冑を環き、山川を跋涉し、寧処に遑あらず。東は毛人を征すること、五十五国。西は衆夷を服すること六十六国。渡りて海北を平らぐること、九十五国。王道融泰にして、土を廓き畿を遐にす。累葉朝宗して歳に愆らず」

第3章 鰐本孔鉄刀の性格と展開

第1節 はじめに

第2章の副産物として、古墳時代の鉄刀の特殊な造作のうち鰐本孔は、まず倭に特有な隅抉尻茎鉄刀に穿たれることがわかった。鰐本孔鉄刀は、列島各地の中・後期古墳，とくに有力な墳墓から出土することが多く，また，孔の周囲に花形あるいは日輪形の象嵌（以下，連弧輪状文）をほどこす一群もあることから，倭全体の武装体系を考えるうえで一定の意義をもつと想定する。しかしながら，孔，象嵌ともにどのような機能を果たしたのかについては詳らかでない。本章では，外装や分布，消長，副葬品組成，装飾大刀との関係などを整理したうえで，鰐本孔鉄刀が古墳時代刀剣体系のなかでどのように位置づけられるのかを考える。

第2節 研究の現状・課題・方法

鰐本孔の性格については，明治・大正期にさかのぼる頃から，次の2説があった〔図30〕。

A説 | 平安時代の毛抜形太刀の茎尻は胴より張るため，鋒側から鰐を挿入し，鰐と鰐本孔を目釘のようなもので固定しなければならないことから，古墳時代の鰐本孔についても同様とする説。黒川真道，石井昌国らの研究に代表される〔黒川1897，石井1966・1995〕。

B説 | 古墳時代の鰐は茎尻から挿入して関で止まるため，鰐の装着とは関係がなく，目釘孔としての性格を否定するもの。その性格の究明にはいたっていないが，威儀具としての性格を前提とした論述につながっている。代表的な論者として，高橋健自，後藤守一，末永雅雄，白杵勲，橋本博文，池上悟らが挙げられ〔高橋1911，後藤1928，末永1941，白杵1984b，橋本博1993，池上2012〕，筆者もB説の立場をとる。

1980年代，白杵は古墳出土鉄刀の型式学的研究をすすめたうえで，鰐本孔鉄刀の多くは6世紀以降にみられることや，鰐本孔鉄刀が内蔵される装飾大刀は円頭大刀や頭椎大刀にかぎられ，半島系の環頭大刀には内蔵されないことを指摘した。また，装飾大刀や飾馬具との共伴が多いことから，鰐本孔鉄刀は威儀具としての機能をもつと推定した〔白杵1984ab〕。

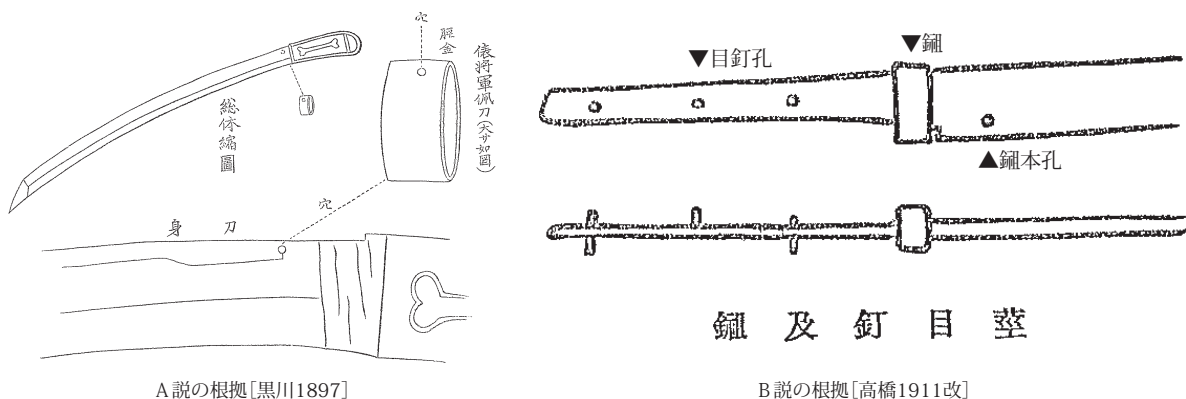


図30 鰐本孔の性格をめぐる2説の根拠

白杵の研究を受けて岡安光彦らは、熊本県江田船山古墳で出土した「治天下獲□□□鹵大王世」ではじまる銀象嵌銘鉄刀の製作年代を検討するなかで、共伴した鉄刀・鉄剣・鉄鉾・耳飾・轡について、古い共伴遺物群（TK47型式期頃）と新しい共伴遺物群（MT15-TK10型式期）に分離した。そのうち、銀象嵌銘鉄刀および同形の鉄刀2振を鰐本孔鉄刀の上限とみるも、その製作年代は5世紀後半の雄略朝まではさかのぼらず、6世紀前半の新しい共伴遺物群にふくまれるとし、銀象嵌銘鉄刀は継体の即位を認めない意図で520年頃に製作されたと理解した〔岡安ほか1986〕。

いっぽう日本古代史の東野治之は、「大王世」の表現は大王没後の状況を示すと解釈し、『古事記』記載の雄略崩御の己巳年（西暦489年）を参考にしながら、鉄刀の製作時期は雄略の治世が終わって間もない490年頃と想定した〔東野1993〕。

白石太一郎は、江田船山古墳の遺物相を古相・新相・最新相の3群に大別し、括れ部出土須恵器をTK23-TK47型式にあたるとした〔白石1997〕。

桃崎祐輔も江田船山古墳出土遺物群の時期分離を試みるなかで、白杵の研究以降の新出事例をふまえ、鰐本孔鉄刀は5世紀後半には出現していたとみる。そして、東野による銘文積読を度外視するならば銀象嵌鉄刀はTK23型式期の初葬にともなうという立場をとる〔桃崎2008〕。この桃崎論文の執筆から刊行にいたる時期と前後して、江田船山古墳出土品の組織的な再検討がおこなわれた。その結果、江田船山古墳から出土した須恵器はTK208型式にちかいTK23型式期のものであると結論づけられ〔木村2007、田中新2007〕、桃崎の時期区分論はその前提が危ぶまれたものの、いずれにしても銀象嵌銘鉄刀は筆者のd類にあたり、TK23型式期に製作されていた可能性はじゅうぶんに残っている。

白杵、桃崎が指摘した鰐本孔鉄刀をめぐる諸相の大枠に異論はないが、6世紀代に複雑化する刀剣系譜全体のなかでどのように位置づけられ、どのような性格をもつのかについては再検討の余地がある。

連弧輪状文にかんする論考は比較的多く、出土古墳の墳丘規模や、副葬品の組みあわせなどから、王権のシンボルであるとか、有力者層のものと推定されている〔町田1984、西山1986、橋本博1993〕。しかし、連弧輪状文をとまなわない鰐本孔は、目釘孔として捉えられることもある。これは、銹化した鉄刀の柄・鞘構造本来の姿の認識が不十分であることに起因しよう。

第3節 分 析

鰐本孔鉄刀は、筆者が集成しただけでも日本列島で300振以上が出土している。実際にはこの数倍の数になると予想され、その一振一振にまで言及することはできない。以下、茎の形態があきらかなものや、外装のおおよそがうかがえるものを中心に分析する。

第1項 分 類

本章では、一文字尻系のうち目釘孔を3つ穿つものをA群とし、さらに連弧輪状文を象嵌するものをA1群、象嵌しないものをA2群に細分する。そして、隅抉尻系をB群、一文字尻系で目釘孔が1～2箇所ものをC群とする。A群は実質的に一文字d類、B群は隅抉d類がほとんどである。C群は茎長7.4cmのものから20cmを超えるものまであり、規格性はうかがえない。

第2項 装具との関係

A群 装飾的な外装がわかるものを図31に示す。大阪府峯ヶ塚古墳出土振り環頭大刀（1a・b）、奈良県藤ノ木古墳出土振り環頭大刀（2a・b）・楔形柄頭大刀（3a・b）、栃木県別所山古墳出土円頭大刀（5a・b）、

群馬県綿貫観音山古墳出土頭椎大刀 (6a・b)、島根県上塩冶築山古墳出土円頭大刀 (7a・b)、栃木県トコチ山古墳出土円頭大刀 (8)、熊本県才園古墳出土円頭大刀 (9)、韓国咸平新徳古墳出土振り環頭大刀がある。このうち、2a, 3a, 5a, 6a, 7aの鞘口金具の鰐本孔と対応する個所には、目釘のようなものはない。つまり、鰐本孔は鞘が抜けるのを防ぐ装置であるという考えは成立しない。

さらに、福岡県箕田丸山古墳の振り環頭大刀 (4)、島根県岡田山1号墳出土「額田部臣」銘銀象嵌円頭大刀 (10a・b) も、鰐本孔こそないが、目釘孔が3つある点や、茎の形態・長さが類似する。そのほか、奈良県大谷今池2号墳2号木棺でも全長120cmの鰐本孔鉄刀を内蔵した振り環頭大刀が出土している。三重県井田川茶白山古墳の振り環頭大刀は目釘孔の数が不明だが、27.3cmの茎長はA群の様相につうじる。

B群 装飾的な外装がうかがえる資料はないが、茎尻の刃部側を扶る造作は、有機質製の落し込み式柄の紐通し孔をもちいて柄を装着するための工夫と考えられている〔横田1982、置田1987、豊島2007、長友2013〕。後期後半の静岡県瓦屋西B3号墳や、島根県高野2号横穴墓例などは鐔をつける。

C群 外装が不明のものが多く、装飾大刀に内蔵されるもの、連弧輪状文をほどこすものはない。栃木県文選11号墳や埼玉県広木大町9号墳、大分県ガランドヤ2号墳例は象嵌鐔をつける。

第3項 分布と消長

鰐本孔鉄刀の展開を中期・後期前半・後期後半・終末期以降に分けて、各段階の分布を概観する。

中 期 出現は近畿地方がやや先行し、兵庫県茶すり山古墳 (前半)、奈良県後出7号墳 (中期後半)、岐阜県南青柳古墳 (後半)、三重県落合2号墳 (末)、福岡県かつて塚古墳、大分県扇森山横穴例など、各地に点在するが、数は少ない。かつて塚古墳、扇森山横穴は最新層の横矧板鋌留短甲をとめない、中期後半・末に位置づけられる。

後期前半～中葉 前半の大阪府峯ヶ塚古墳を中心に、千葉県大作33号墳を東限、佐賀県島田塚古墳を西限、宮崎県島内地下式横穴ST114を南限として、全国的に分布する。韓国新徳古墳もこの時期に比定されるが、現状ではそれ以外の朝鮮半島出土例はない。

後期後半 出土事例が急激に増加する。中心は藤ノ木古墳や烏土塚古墳が立地する奈良県生駒郡平群地方とみられる。関東でも、とくに群馬県に分布の核がある。北部九州では、福岡県石ヶ元古墳群で6振出土しており、西日本一の密集地域である。また、上塩冶築山古墳や奥山B-II号横穴墓など、山陰での出土事例がくわわるのもこの段階である。

終末期以降 群馬県堀越古墳、静岡県下中林2号墳、愛知県赤ざれ4号墳、愛知県滝の平A1号墳、福井県大飯神社6号墳、岡山県奥田古墳例などがあるが、前段階までに比べて出土数は激減する。これらの多くがC群である。東海を中心にみられるが、出土数全体の少なさから政治的な配布を背景とした集中域を形成しているとはいえない。

聖武天皇 (701-756) ゆかりの宝物を奉納した正倉院には、27振の大刀が保管されている。そのうち鰐本孔があるのは、第10号 (C群)・27号 (A群) 大刀のみである〔宮内庁正倉院事務所1977〕。6世紀において、王族にちかい被葬者像が描かれる峯ヶ塚古墳や藤ノ木古墳出土大刀の大半に鰐本孔がある状況と対照をなす。

第4項 出土古墳の形態・規模、武器・武具・馬具の組合せ

鰐本孔鉄刀が出土した中期古墳のうち、茶すり山古墳、後出7号墳、南青柳古墳、かつて塚古墳、扇森山横穴墓、江田船山古墳では鋌留短甲をとまなう。鰐本孔鉄刀が帯金式甲冑と似たようなルートに則って流通したことがうかがえる。A・B各群の規格生産がはじまる後期には、各々共伴する副葬品目に相違がみられる。

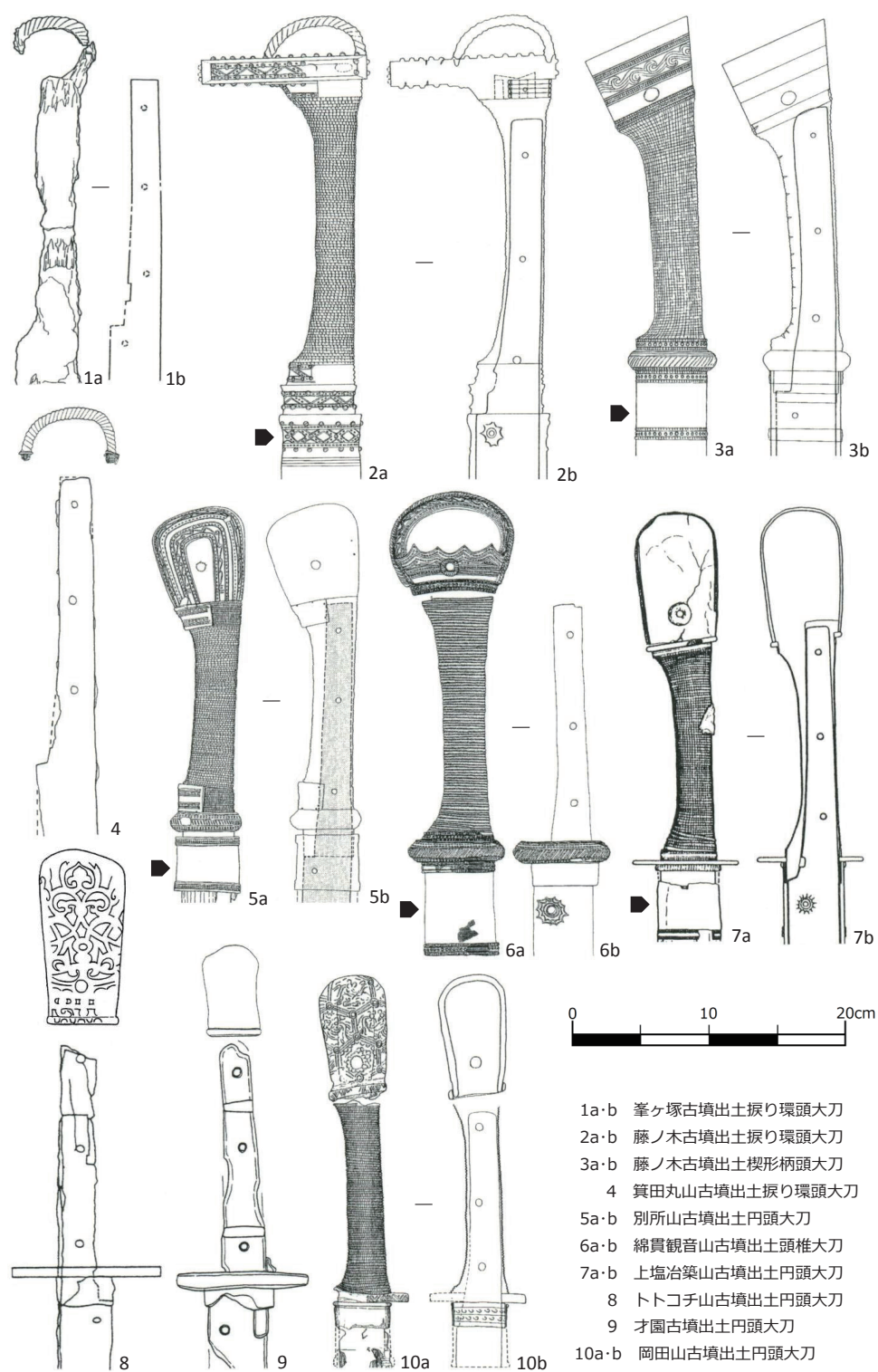


図31 一文字d類鉄刀を内蔵する装飾大刀

表5 鍬本孔鉄刀の階層性

	遺 跡	墳形・ 規模 (m)	時 期	鉄 刀	鉄 剣	振 り 環	単 竜 環	三 累 環	円 頭	頭 椎	方 頭	鉄 鉾	甲	冑	弓 具	馬 具	冠	耳 飾	帯 金 具	飾 履
A 群 (一 文 字 d 類)	江田船山(熊本)	前方後円(61)	5c後	☆/◎	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○
	峯ヶ塚(大阪)	前方後円(96)	MT15			☆/◎							○		○	○	○	○	○	
	烏土塚(奈良)	前方後円(68)	TK43	☆								○			○	○	○	○	○	
	藤ノ木(奈良)	円(48)	TK43	○	☆	☆							○	○	○	○	○	○	○	○
	上塩冶築山(島根)	円(43)	TK43	○		○			☆			○			○	○	○	○		
	トトコチ山(栃木)	円(34)	TK43						◎							○				
	いわき塚(愛知)	—	TK43	☆								○			○					
	綿貫観音山(群馬)	前方後円(97)	TK43	○		○		○		☆		○	○	○	○	○			○	
	城山1号(千葉)	前方後円(68)	TK43	◎			○		○	○						○				
	奥山B-II号横穴(島根)	横穴墓	TK209-TK217	☆																
	風返稲荷山(茨木)	前方後円(70)	TK209-TK217	◎					○	○		○				○	○		○	
B 群 (偶 挟 d 類)	前山(群馬)	前方後円(60)	TK209	◎					○	○	○				○	○				
	池殿奥5号(奈良)	前方後円(23)	TK23~TK47	◎									○							
	扇森山横穴(大分)	横穴墓	TK47	◎									○		○					
	大作33号(千葉)	円(25)	TK47~MT15	◎											○					
	瓦屋西B3号(静岡)	前方後円(28)	MT15	◎											○	○				
	稲荷山3号横穴(大分)	横穴墓	MT15	◎											○	○		○		
	朝日天神山1号(大分)	前方後円(54)	MT85~TK43	◎														○		
	高野2号横穴(島根)	横穴墓	MT85~TK43	◎											○	○				
	林5号(静岡)	円(15)	TK43	◎											○					
	法皇塚(千葉)	前方後円(58)	TK43	◎		○							○	○	○	○				
	石ヶ元8号(福岡)	円?	TK209	◎			○					○			○	○				

◎ = 鍬本孔、☆ = 連弧輪状文

A群 前方後円墳や大型円墳から出土した鍬本孔鉄刀のほとんどがA群であることは注目してよい。横穴墓、地下式横穴墓からも出土するが、島内地下式横穴墓群は南九州における中期甲冑の集中出土地域であり、政権中枢との政治的紐帯が看取される。

振り環頭大刀をはじめとする装飾大刀や、三角穂式鉄鉾、小札甲、棘葉形杏葉を中心とした金銅装馬具との共伴が多くみられる。いずれも列島各地の有力墳での出土が知られる副葬品である。綿貫観音山古墳では、装飾大刀・鉄鉾・甲冑・弓具・馬具を揃え、武装のフルセットをなす。

B群 中・小型前方後円墳、小型円墳に加え、横穴墓からの出土率がA群に比べてたかい。また、群集墳中における盟主墳での出土が多い。

甲冑をとまなうのは千葉県法皇塚古墳のみである。石ヶ元8号墳では単龍環頭大刀と鎬式鉄鉾、法皇塚古墳では振り環頭大刀をとまなうが、A群とは異なり、武装のフルセットをなす古墳はない。なお、A群とB群の共伴事例は少ない。

C群 埼玉県広木大町9号墳は、全長32mの前方後円墳で、C群出土古墳のなかでは最大だが、A群・B群に比べて小型円墳での出土が圧倒的に多い。

甲冑をとまなう例はない。武者塚古墳で三累環頭大刀や圭頭大刀、小迫墳墓群第4区第5横穴墓では歪な形態の鉄製内湾楕円形鏡板付轡をとまなうほかは、装飾大刀や馬具の共伴も乏しい。鉄鏃のみをとまなう事例が多い。

第4節 考 察

第1項 装飾大刀のなかの鰐本孔鉄刀

鰐本孔鉄刀本体の斉一性や汎列島的な分布、出土古墳の形態・規模・共伴品にみられる緩やかな階層性などをふまえ、鰐本孔鉄刀は中期後半以降、倭王権膝下の工房で製作・配布されたと考える。では、同じく中央からの配布が想定されている装飾大刀と、どのような関係にあるのだろうか。

本節では、そのモデル構築のための基礎作業として、鰐本孔鉄刀が内蔵される装飾大刀の外装が、どのような性格をもつものと理解されているのか整理する。

まずその前提として、白杵勲が指摘したように、単龍環頭大刀などの外来系装飾大刀に鰐本孔を穿つ例は現状では確認できていない。鰐本孔鉄刀を内蔵する装飾大刀は、振り環頭大刀や、楔形柄頭大刀などの倭装大刀、あるいは円頭大刀にかざられる。

倭装大刀 関川尚功は、藤ノ木古墳から出土した振り環頭大刀が代表するように、倭王権に連なる権力者は、倭装大刀によって伝統的権威を示したと考える〔関川1993〕。

福島雅儀は、供給源がともに畿内に求められるいっぽう、倭装大刀には外来系装飾大刀の技術・装飾の応用がみられないため、外来系の大半は舶載品であるとし、関川同様の見解を示す。また、倭装大刀は個体差がおおきいため、保持者が個々に装飾を加え、みずからの権威を示したと考えるとともに、装飾大刀によって倭王権が軍事・支配・外交権を保障するならば、それを示す「共通の装飾」が必要と述べ、さらに「階層的な秩序を付けなければならない」とする〔福島2008〕。

折衷系大刀 上塩冶築山古墳、綿貫観音山古墳、別所山古墳の鰐本孔鉄刀は、①柄頭は表裏を金属板で挟み、带状の銀板でこれを留めた円頭形のものである。②柄間は連珠状の刻みをいれた銀線を蔓巻にする。③柄間の形状は刃側がおおきく内湾する。④大形の鐔をつける。⑤鞘口、鞘間は銀板を巻く。⑥刀身は茎落し込み技法によって柄をつける、などの点で共通する。

町田章は、これらを倭式円頭大刀AⅣ型式とまとめ、円頭大刀から頭椎大刀への過渡期の一群と評価した。また、倭式円頭大刀BⅣ型式の烏土塚古墳出土金銅装大刀も同様に茎落し込み技法をもちい、連弧輪状文を象嵌することから、AⅠ（AⅣの間違いか）型式と同一工房での製作を想定する〔町田1987〕。穴沢啄光・馬目順一は、綿貫観音山古墳の頭椎大刀と、韓国陝川玉田M3号墳出土単鳳環頭大刀の形態比較から、柄頭の柄寄りを覆った板金のありかたや、柄の刃側が湾曲する共通点を指摘し、綿貫観音山古墳の大刀が、環頭大刀と円頭大刀が組みあわさったものとみる〔穴沢・馬目1986〕。勝部明生・鈴木勉もまた、綿貫観音山古墳の頭椎大刀を、倭装大刀を製作した技術者と渡来系の技術者の両者が製作に参加した折衷的なものと評価する〔勝部・鈴木1998〕。新納泉は、金銅装頭椎大刀の成立過程を考えるなかで、頭椎形柄頭の木装大刀に、振り環が筋金として装着され、柄頭全体が金銅装となった後は、筋金部分は畦目状になって残ったと推測した〔新納1984〕。大谷晃二は、柄頭の形態や、装具の製作技術の差から、装飾大刀には倭国在来の伝統的な技法による一群と、朝鮮半島からの舶載品およびその技術系譜を引く一群のふたつの系譜があることを示し、先の3振の大刀を「倭風円頭大刀Ⅰ系列」として把握した〔大谷晃1999〕。

橋本英将は、倭系装飾大刀の構造を基礎としつつも、部分的に半島系装飾大刀の要素をふくむ一群を「折衷系装飾大刀」として捉え、TK43型式期以前は、伝統系（倭系）装飾大刀と新興系（外来系）装飾大刀の二者が互いに排他的な技術で製作されたため、新興系装飾大刀の将来が伝統系装飾大刀の製作開始につよい影響をあたえたが、その影響は直接的なものではなく形状模倣型技術移転と呼ぶべき状況にあったと考え、意図的に異なる技術・意匠の大刀が製作された可能性を指摘した〔橋本英2006〕。

鰐本が折衷系装飾大刀として認定した資料は、①別所山古墳出土円頭大刀、②城山1号墳出土頭椎大刀、③綿貫観音山古墳出土頭椎大刀、④藤ノ木古墳出土楔形柄頭大刀（藤ノ木古墳大刀4）、⑤烏土塚古墳出土金銀装大刀、⑥上塩冶築山古墳出土円頭大刀の6振である。このうち、①は鰐本孔鉄刀A2群、③④⑥はA1群を内蔵し、⑤は茎の形態が不明なものの連弧輪状文をとまなうほか、②はA2群刀と共伴しており、折衷系装飾大刀と鰐本孔鉄刀の密なつながりを指摘できる。

鰐本孔鉄刀を内蔵する装飾大刀のうち、別所山古墳、綿貫観音山古墳、上塩冶築山古墳の円頭大刀が、倭装大刀と半島系大刀双方の製作技術の影響を受けて成立し、なおかつ定型化した金属装頭椎大刀の祖形にあたるという意見は参考になる。

結論をいえば、筆者は福島という「共通した装飾」こそ、鰐本孔の役割と考える。振り環頭大刀やその祖形にあたる倭装大刀に内蔵された鰐本孔鉄刀は、5世紀以降、半島系大刀の受容が活発化し複雑化する刀剣系譜のなかで、倭装大刀が倭社会のなかで果たした性格を担保したと考えるのである。折衷系大刀のほとんどに鰐本孔鉄刀が内蔵されることは偶然ではない。半島系要素が混在するこれらの大刀も、倭社会のなかで機能することを示す装置が必要だったのである。

以上はおもにA群の性格の説明だが、B群はどうか。紐通し孔がある有機質製柄は、5世紀後半の奈良県布留遺跡出土例が著名である〔埋蔵文化財天理教調査団1995〕。これは楔形柄頭大刀や頭椎大刀の祖形となるものだが、金属製板鐔の祖形はない。振り環頭大刀に代表される倭装大刀が板鐔を装着しない状況を、中期までの伝統的大刀外装を維持するためという考えや〔菊地2010〕、製作技術や施文方法の類似から、倭系装飾大刀製作の体制が中期の延長上にあるという理解〔橋本英2008〕が想起される。

いっぽう瀧瀬芳之は、6世紀末まで操業された埼玉県生田古墳輪窯跡出土の大刀形埴輪に板鐔を表現するものがあることから、板鐔付大刀が普及した後にも、楔形柄頭大刀に相当する拵えの大刀が存在したと考え、その有力候補として鐔付の鰐本孔鉄刀を挙げる〔瀧瀬2011〕。

このように、A・B各群本来の外装は、いずれも「倭装」というキーワードで結ばれる。各群の形態差は、外装が金属装か否かによるところがおおきいとする。大型の刀身と外装を組みたてるためには、多くの目釘孔を有する堅牢な茎を要したのである。

以上より、A・B各群の出自・系譜は一元的なものであり、なおかつこれらの生産・保有・副葬には政策的な差異があったと考えることができる。ここで、各群の外装の差異、出土古墳の形態・規模の差や、共伴品の様相を総合すると、A群を優位とした大刀の階層性を抽出できる。

第2項 鰐本孔鉄刀内蔵装飾大刀の分布からみた中央と地方

次に、鰐本孔鉄刀を内蔵した装飾大刀の分布からみた「中央」と「地方」を考える。柄頭形式と鉄刀本体の対応関係があきらかなものから読みとれる状況を、表6および、次の3点にまとめると、

- ①A1群を内蔵した振り環頭大刀の副葬は、峯ヶ塚古墳、藤ノ木古墳など、畿内の有力古墳にかざられる。
- ②地方の有力首長墓である上塩冶築山古墳・綿貫観音山古墳の振り環頭大刀には、鰐本孔や連弧輪状文をほどこさず、共伴する折衷系円頭大刀にA1群を内蔵する。
- ③別所山古墳の折衷系円頭大刀および才園古墳・トトコチ山古墳の鉄装円頭大刀はA2群を内蔵する。これら3古墳は、振り環頭大刀をとまなわない。

表6 鰐本孔鉄刀内蔵装飾大刀の地域差

柄頭	畿内	地方	畿内との距離
振り環頭	峯ヶ塚 (A1) 藤ノ木 (A1)		近い
円頭	折衷系	振り環頭共伴○ 上塩冶築山 (A1) 綿貫観音山 (A1)	↑ ↓ 遠い
	鉄装	別所山 (A2)	
		才園 (A2) トトコチ山 (A2)	

表7 振り環頭大刀持田分類と鍔本孔鉄刀

振り環頭大刀出土古墳	鍔本孔鉄刀との関連	持田分類
寿命王塚（方円・80）	不明	Aa類：木製ないしは鹿角製装具を装着
団子塚9号（円・20）	不明	
寺口忍海H-34号（円・15）	不明	
峯ヶ塚（方円・97）	A1群鉄刀を内蔵	Ab類：木製ないしは鹿角製装具を下地とし、金・銀・金銅等で加飾
藤ノ木（円・50）	A1群鉄刀を内蔵	
上塩冶築山（円・43）	A1群鉄刀と共伴	
新沢262号墳（円・22）	不明	
綿貫観音山（方円・97）	A1群鉄刀と共伴	B類：鉄地龍文銀象嵌装具を用いる
井田川茶臼山（不明）	なし	
市尾宮塚（方円・47）	不明	

端的に言えば、これらは装飾大刀の保有からみた中央と地方の差異を示す。つまり、畿内中枢に近いほど、振り環頭大刀に連弧輪状文や鍔本孔が組みあう。かたや、6世紀後半に新しく地方支配がすすむ出雲や毛野では、政権とのつながりを示す振り環頭大刀を配布するが、それと共伴する折衷系装飾大刀にA1群を内蔵することで、地方と中央の格差を示した。より遠方の、福岡県箕田丸山古墳や熊本県打越稲荷山古墳、福島県中田装飾横穴などでは、振り環頭大刀に鍔本孔鉄刀を内蔵しないことも、こうした考えを支持する。

また、峯ヶ塚古墳・藤ノ木古墳・上塩冶築山古墳の振り環頭大刀は、持田大輔の分類「木製ないしは鹿角製装具を下地とし、金・銀・金銅等で加飾する」Ab類にあたる。「木製ないしは鹿角製装具を装着する」Aa類とは、出土古墳の墳形・規模をみても階層的に優位である。綿貫観音山古墳の振り環頭大刀は「鉄地龍文銀象嵌装具を用いる」B類だが、峯ヶ塚古墳例と同じ銀装柄頭をもちいるため、Ab類と同程度の階層と考えられている〔持田2006〕。このうち、Ab・B類と鍔本孔鉄刀の関係が強固であることは表7の通りである。ほかにも、鉄装柄頭の円頭大刀は装飾性のたかい大刀とは副葬時のあつかいが異なることが指摘されており〔瀧瀬1984〕、ここに大刀自体の階層性を抽出できる可能性がある。

以上より、峯ヶ塚・藤ノ木・上塩冶築山・綿貫観音山古墳の大刀はほぼ同階層に位置し、連弧輪状文は、こうした列島内の有力首長間で共有された「共通の装飾」だったと考える。

第3項 鍔本孔鉄刀の終焉

鍔本孔鉄刀の終末時期を検討し、鍔本孔の性格が発揮した社会の時間幅を考える。

鍔本孔鉄刀を内蔵した装飾大刀のうち、峯ヶ塚、別所山、藤ノ木、綿貫観音山、上塩冶築山古墳例は、あらゆる分析においてもTK43型式期以前に位置づけられ〔日高2000c、新納2009〕、TK209型式期以降の様相はよくわからない。以下、A群のなかで最新の一群の様相を整理する。

TK43-TK217型式期の陣馬塚古墳例は、残存長115cmで、背側の関が浅く刃部側の関が深い白杵分類〔1984a〕の不均衡両関一文字尻細茎、菊地分類〔2010a〕のK2類にあたる。類例は群馬県二子山古墳（TK209）、千葉県城山1号墳（TK43-TK209）、福岡県竹並G-51-1号横穴墓（7世紀前半）などにある。

TK217型式の須恵器台付長頸壺、無蓋高坏、平瓶、台付甕をとまう風返稲荷山古墳後円部の横穴式石室前室出土例は、十窓鐔を装着する。TK43型式期に八窓鐔、TK209型式期に六窓鐔が現れるが、十窓鐔は類例に乏しく、明確な時期の位置づけはむずかしい。ただ、日高慎は風返稲荷山古墳の横穴式石室の構築年代をTK209型式期中段階に据え〔日高2000a〕、TK217型式の須恵器群は追葬にとまうとみる〔日高2000b〕。したがって、風返稲荷山古墳の鍔本孔鉄刀はTK209-TK217型式期以前に製作されたと考える。

トコチ山古墳の円頭大刀は、鉄刀本体が残存長101cmの片関で、八窓鐔をつけ、TK43型式期頃の様相を留める。しかし、柄頭の銀象嵌は瘤節をもつ火焰状の外形にはじまり、左右対称に蕨手文が派生し、ハー

ト形、菱形文様の透し彫りを縦に配置され、6世紀末に位置づけられる伝群馬県出土火焰文圭頭大刀〔菊地2010b〕や、TK217型式期の群馬県道上古墳出土毛彫杏葉の意匠に類似する点が新相を呈する。橋本博文は、トトコチ山古墳の円頭大刀はTK43型式期に製作され、TK209型式期に象嵌されたと考える〔橋本博1986〕。

島根県奥山B-II号横穴墓出土例（A1群）の共伴須恵器はTK217型式が主体だが、連弧輪状文がみられるのはおおむねTK43型式期までであることや、横穴墓の性格などを考慮すると、副葬年代については不確定要素が多い。

また、B群についても、後期後半から末の法皇塚古墳や石ヶ元8号墳例が最新例である。

このように、確実に後期末以降に位置づけられるA・B群は少ない。しかしC群は、7世紀後半の愛知県赤ざれ3号墳、福岡県石ヶ元11号墳などでもみられることから、TK209型式期を境として鰐本孔鉄刀全体の副葬が完全に停止したわけではない。また、下中林2号墳例は茎長7.4cmの短刀であり、全長100cmを超える鉄刀と同一原理での製作かどうかは詳らかでない。C群はおおむねにおいて装飾的な外装をともなわないことや、出土古墳の墳形・規模がA・B群に劣ることから、生産・流通・保有・副葬の意義はA・B群に比べて希薄だったと考える。装飾大刀に内蔵されるものや連弧輪状文をほどこすものを真性の鰐本孔鉄刀とみるならば、その実質的な製作は後期後半に終了していた可能性がたかい。

本章第2節で述べたように、古代にも鰐本孔は存在する。しかし資料の少なさから、古墳時代のものと同じ性格をもつとは考えにくい。近現代の刀に穿たれないのは、茎尻から鰐をはめこみ、関・鐔・柄の装着で固定する構造自体にはその必要がないからだろう。基本的には朝鮮半島に類例がないことから、鰐本孔本来の性格は古墳時代中・後期の倭のなかで発揮したとみてよい。

第4項 鰐本孔鉄刀の製作・配布主体はどこか？

1960年代末の桐原健の論考以降、特定形式の装飾大刀の集中分布域と、その地域に基盤をおく古代氏族との関係の模索がすすめられ、単龍鳳環頭大刀と大伴氏、双龍環頭大刀と蘇我氏、頭椎大刀と物部氏との関連が有力視されるようになった〔桐原1969、清水1983、豊島2018、新納2002〕。

近年では高松雅文が、後期前半における振り環頭大刀の出土地と継体勢力の基盤地域が一致することに注目し、継体が創出した威信財として積極的に評価している〔高松2006〕。同時に、奈良県の天理市域に振り環頭大刀が集中することや、布留遺跡では倭装大刀の未製品が出土していることをふまえ、物部氏と振り環頭大刀の密接なかかわりを考える〔高松2009〕。実際に、布留遺跡の東に位置し、物部氏が祭祀した倭政権の武器庫・石上神宮に鰐本孔鉄刀A群が一振伝わるほか〔石井・佐々木1995〕、同神宮の禁足地でも振り環頭大刀が出土している〔服部2008〕。

5・6世紀の主要な倭系大刀は、①振り環頭大刀、②折衷系円頭大刀、③金属装頭椎大刀の順に出現する。これらは、当代の最新技術を取り入れながらも茎落し込み技法などの伝統を堅持しつづけた。現状において、鰐本孔鉄刀が内蔵される装飾大刀が①②にかぎられることをふまえると、鰐本孔鉄刀の製作や配布には、物部氏が関与した可能性がたかい。

すると、MT85-TK43型式期における鰐本孔鉄刀生産の盛行と終焉には、それぞれ、572年の敏達即位による物部氏主導政権の確立と、587年の物部総本家滅亡がかかわったものと考えられる。591年、崇峻天皇は任那復興をくわだて、2万余の人員を筑紫に派遣した。このとき、物部打倒に際して蘇我氏に加担した大伴・葛城・巨勢・紀の各氏から大將軍が選ばれた。後期末における振り環頭大刀の終焉、ならびに鞘や柄間金具などの刀装具にみる製作技術・意匠の斉一化を経てもなお柄頭形式に区別があるのは、佩用時に体の前面で輝く柄頭に職掌や身分、帰属を示す機能があたえられていたからだろう〔松尾2003〕。後期末における大刀製作技術の統合によって倭系と半島系が区別されなくなった結果、鰐本孔の役割も消滅したと考える。

第5節 結 語

本章では、鰐本孔鉄刀本体と倭系装飾大刀の関係を整理し、その製作と配布に倭王権が積極的にかかわっていた可能性を論じた。最後に、鰐本孔鉄刀の展開をⅠ～Ⅳ期に整理し、本章のまとめにかえる。

Ⅰ期 | 中期 鰐本孔鉄刀の出現期

茶すり山古墳、かつて塚古墳、扇森山横穴墓、江田船山古墳例が基準資料となる。「獲□□□鹵」鉄刀がA群の最古資料とみられ、B群にやや後出する。

Ⅱ期 | 後期前半～中葉古段階 鰐本孔鉄刀の規格生産が本格化する段階

A群にはたかい規格性がうかがえ、峯ヶ塚古墳をはじめとする畿内近郊の有力古墳出土の振り環頭大刀に内蔵されることから、安定した大刀生産基盤の確立を想定する。また、B群と階層構造をなすことは、一連の大刀が倭政権主導によって生産・配布された蓋然性を支持する。

Ⅲ期 | 後期中葉新段階～末 鰐本孔鉄刀生産の最盛期

藤ノ木古墳の振り環頭大刀、綿貫観音山古墳、上塩冶築山古墳の円頭大刀などがA群の基準資料である。折衷系装飾大刀が出現し、その多くに鰐本孔鉄刀が内蔵される。政権中枢に近い首長は振り環頭大刀にA1群、地方首長は折衷系装飾大刀にA2群を内蔵することによって、中央と地方の差を示した。

Ⅳ期 | 終末期 鰐本孔鉄刀の残存期

TK209型式期における柄頭以外の外装の斉一化にともない、装飾大刀への内蔵がみられなくなる。TK46型式期頃まで一部、短刀に鰐本孔をほどこしたものが残るが、鰐本孔鉄刀の製作自体はすくなくともTK217型式期までには終了していたと考える。

第4章 外来系鉄刀の認識と儀礼

第1節 はじめに

第3章では、倭系装飾大刀に内蔵されることが多い刀身の特徴を析出し、倭系装飾大刀と連動した安定的な生産体制の存在を想定した。これにたいして本章では、外来系装飾大刀に内蔵される刀身に言及する。第3章と本章の成果を外装が腐朽した刀身の分析に還元すれば、より精緻な刀剣の系譜論につながりうる。

くわえて本章後半では、古墳以外の遺跡から出土した鉄刀に注目し、それが刀剣をもちいた儀礼の痕跡である可能性を説く。

第2節 外来系鉄刀の認定条件

第1項 刀身本体

倭系鉄刀と対比するかたちで外来系鉄刀の特徴を述べると、次の3点である。

第一に、小振りで刃幅も狭く、華奢な造りである。

いっぽんに、倭系大刀に内蔵する刀身は、全長が100cm超、茎長20cm前後、刃幅4cm前後の大型品であり、重厚で剛健な印象を受ける。そのほか、刃部の閑際に穿つ鑑本孔や、茎の閑際に方形の抉りを入れる茎元抉り、茎尻の刃側を抉る隅抉尻茎なども、倭系大刀と密接にかかわる特殊な造作である。

いっぽう、外来系大刀に内蔵する刀身の多くは、全長が70～90cm前後、刃幅3cm弱の小型品である。たとえば、群馬県綿貫観音山古墳で共伴した倭系の頭椎大刀と新羅系の三累環頭大刀を見比べても、その大きさの違いはあきらかである〔図32〕。

第二に、鋒は、斜辺が直線的なカマス鋒である。

倭系装飾大刀に内蔵される鉄刀は、斜辺に丸みを帯びるフクラ鋒を原則とするが、カマス鋒は、菊地芳朗が指摘するように中・後期の朝鮮半島系大刀にしばしばみられる要素である〔菊地2010〕。このコントラストは図32の2振の大刀にも表れている。ただし、中期前半の大阪府七観古墳1913年出土の素環頭大刀〔図33-1〕はカマス鋒であるのにたいし〔清水2012〕、中期後半新段階の熊本県伝左山古墳例のように素環頭大刀のなかにもフクラ鋒のものがある。フクラ鋒すなわち倭系とはいえ、微妙な混交も認められる。

第三に、均等両閑である。両閑には2種類ある。刃側の閑が深く、背側の閑が浅い不均等両閑と、両方の閑の深さが等しい均等両閑である。

不均等両閑は、刃側と背側に閑をもちながらも、茎が背側におおきく偏る。千葉県城山1号墳から出土した長大な鑑本孔鉄刀のように、片閑の倭系大刀の延長上に位置づけられるものである。

いっぽう均等両閑について菊地は、中国・朝鮮半島に起源するものが古墳時代後期に列島に将来したと理解し〔菊地1993〕、このような構造の差異を時期差ではなく系譜差としてとらえたうえで大刀を編年すべきと明言する〔菊地2010：p.58〕。ただ、たとえば伝左山古墳の素環頭大刀群には片閑と両閑が混在するように、半島系大刀にも複数の系統が存在したことには注意が必要である。

試みに、古墳時代中・後期の各装飾大刀形式のなかでも比較的古相の資料をみてみよう。

たとえば、三累環頭大刀（新羅系）の刀身が残る事例がかぎられるなか、TK216型式期の香川県東原間

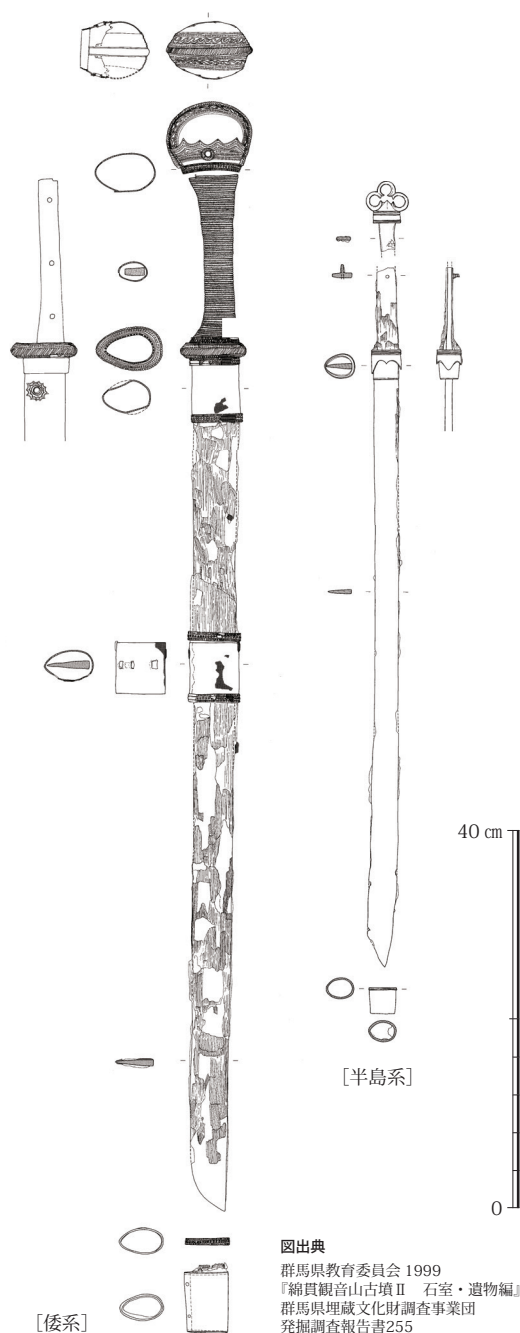


図32 倭系大刀と外来系大刀の比較

竹並H55-6号、梶山例の佩用装置の意匠がさらに形骸化したと思しきものが、福島県策内23号横穴の均等両関・カマス鋒鉄刀に装着されている。竹並H55-6号、梶山、策内23号例は、大きさや鐔の造りが類似し、ちかい時期（TK209か）の製作と考える。

第2項 鞘尻装具

いっぽんに、伝統的な倭の刀剣は、平面形が台形をなす有機質製の鞘尻をもちいる。

いっぽう、たとえば、先に挙げた伝左山古墳では、倭系の隅扶尻茎鉄刀1振と、半島系の素環頭大刀6振、円筒状の鞘尻金具が数個体出土している。筆者は、大きさや数から、この鞘尻金具は素環頭大刀の装具と判

6号墳から出土した列島最古級の事例は、カマス鋒である。列島出土品のなかでは比較的新しい、TK43型式期の綿貫観音山古墳例もカマス鋒である。TK43-TK209型式期の福岡県宇美町観音浦KS12号墳から出土した三累環頭柄頭と鉄刀も全長43.8cmの小型品で、両関・カマス鋒である。

静岡県鳥居松遺跡5次調査において伊場大溝から出土した金銀装円頭大刀は、MT15-TK10型式期頃に百済・加耶地域のどこかで製作されたものが、TK43型式期頃に倭王権膝下の工房で補修されたと評価されている〔鈴木2009〕。関の造りはわからないが、カマス鋒である。

TK10型式期の岡山県穴が辻古墳から出土した銀装円頭大刀も、片関ながら、カマス鋒である〔上埜2008〕。この大刀は、柄巻の銀線がひろい間隔をとりながら柄木に巻かれるもので、類例との比較から舶載品の可能性が指摘されている〔橋本英2006〕。

TK209型式期の群馬県八幡観音塚古墳から出土した鶏冠頭大刀は刃幅がややひろいが、両関、カマス鋒である。外装をみると、柄頭に表現された大陸風のパルメット文をはじめ、新羅系の凸状造出装置に高句麗・百済系の連珠文を透彫りするなど、デザインや造作に多様な系譜の混交が認められる。製作年代については、刀装具の意匠に仏教系意匠をあしらうことから、廃仏派・物部総本家滅亡後の西暦590年代と考える。

この鶏冠頭大刀は、倭の圭頭大刀製作技術とむすびついて千葉県金鈴塚古墳の鶏冠頭大刀へつながるいっぽうで、連珠文を透彫りした佩用装置は、福岡県竹並H55-6号横穴や、茨城県梶山古墳の鉄刀にも装着される。

八幡観音塚例の佩用装置の連珠文は、本体と深い切れこみによって明瞭に造り出すが、竹並H55-6号・梶山例は切れこみが浅い。造形の巧拙を重視すれば、八幡観音塚例が古相、竹並H55-6号・梶山例が新相を示す。また、

断する。このような、平尻で開口部が玉縁の鞘尻金具は、6世紀初頭の慶州天馬塚の単鳳環頭大刀や梁山夫婦塚の円頭大刀、公州武寧王陵の単龍環頭大刀などに系譜が求められ、6世紀後半に朝鮮半島の影響を受けて倭で製作された装飾大刀にも継承される。

先述した竹並H55-6号横穴や梶山古墳の鉄刀の鞘尻金具も、開口部の縁が玉縁である。いずれの鞘尻金具も、玉縁状の開口部は金具本体と別造りなのか造り出しによるものかはわからないが、同様の見栄えをする、一つの系統として認識できる。ちなみに、端を玉縁状にすることで鐔の役割を兼ねた鰭が、金鈴塚古墳の獅嘯環頭大刀などに装着されており〔大谷2012〕、先の鞘尻金具と同様の見栄えや技術で作られた、外来系の刀装具として理解できる。ただし、竹並H55-6号と梶山の2振は朝鮮半島に類例がなく、八幡観音塚の鶏冠頭大刀より長大化がすすむことから、半島系の認識が薄らいだ倭系品である可能性がたかい。

第3節 大刀の古代化

図33にならべたのは、以上で触れたカマス鋒の大刀だが、これはそれそのものの編年図ではない。原間6号墳の三累環頭大刀や、鳥居松遺跡、穴が辻古墳の円頭大刀、八幡観音塚の鶏冠頭大刀は、舶載品ないし半島系倭製品とみられるもので、それぞれが別の要因によって将来したか、または渡来系の刀工が倭で製作したものである。

むしろここでは、古墳時代中・後期をつうじてフクラ鋒の長大な倭製鉄刀が大量生産されたのと並行して、カマス鋒の外来系鉄刀が五月雨式に倭に将来していたことから、鋒がフクラであるかカマスであるかは、鉄刀編年の基準とはなりえない点を強調したい。つまり、6世紀のカマス鋒鉄刀には、時期の判断材料としてよりもむしろ、舶載品の可能性を視野にいれた検討が求められるのである。

すると、片関と両関を系統差でなく時期差とみる福島雅儀の理解〔福島2005〕とも齟齬が生じる。すなわち、福島が「木装鉄刀」「扁莖板鐔付鉄刀」と呼ぶ片関系の一群は倭系であり、フクラ鋒であることがほとんどであるのにたいし、福島編年でその次段階におかれる「直莖両関鉄刀」（基準資料に、箆内23号の鉄刀を挙げる）は、カマス鋒が大半であるからである。

筆者は、箆内23号横穴の鉄刀は半島系大刀が変化したものと考えるので、鉄刀の変化を単系列的に捉える福島の考えには頷きがたい。むしろ、片関と両関を系統差にとらえる菊地の意見を、別の視点から支えたい。それと同時に、不均等両関から均等両関への変化を認める白杵勲の編年も見直しが必要だろう。

7世紀に各種装飾大刀の生産が終焉を迎え、方頭大刀に統一されると〔松尾2003〕、カマス鋒が採用される。福島も、8世紀の正倉院様式大刀を構成する要素の一つにカマス鋒を挙げるが〔福島2003〕、筆者はその要素に、両関をくわえてもよいと考える。

瀧瀬芳之は、佩用方法の類似から、竹並H55-6号横穴や梶山古墳の佩用装置を、方頭大刀に装着される双脚足金具の祖形とみる〔瀧瀬1991〕。筆者は、箆内23号横穴の鉄刀の佩用装置もその形態的類似から、竹並H55-6号・梶山の佩用装置と、双脚足金具の過渡期に位置づけられると考える。さらにこの双脚足金具は、8世紀の正倉院様式大刀へ連なる。

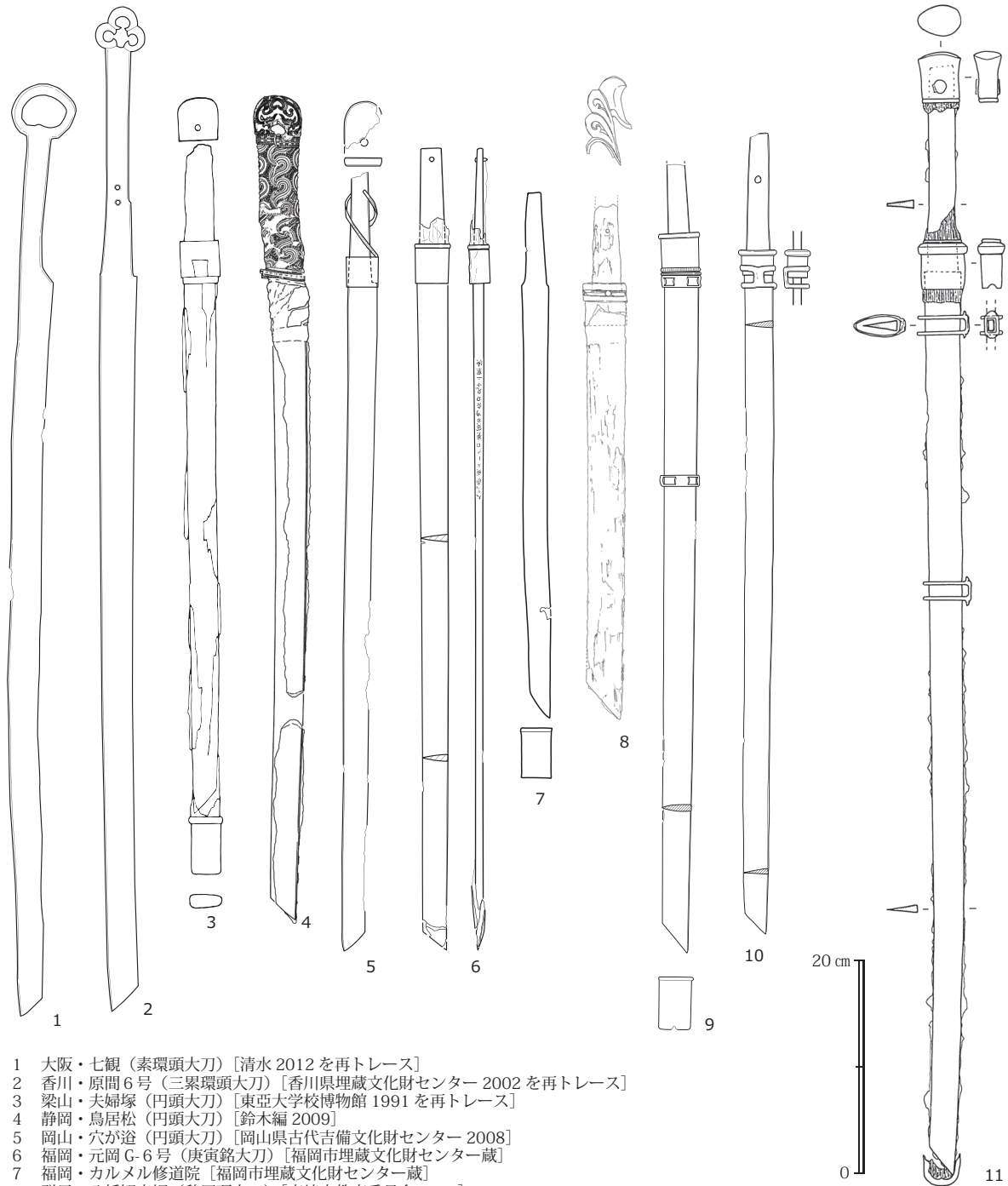
すなわち、福島や瀧瀬、筆者の視点を重ねると、八幡観音塚（TK209）→竹並H55-6号・梶山（TK209）→箆内23号（TK209-TK217？）→方頭大刀（7世紀中・後）→正倉院様式大刀（8世紀）という流れを描くことができる。

つまり、以上に挙げた資料のうち、原間6号墳の三累環頭大刀や、鳥居松遺跡、穴が辻古墳の円頭大刀、八幡観音塚古墳の鶏冠頭大刀は、いずれもカマス鋒でありながら、大きさや刀装具のデザインがバラバラで、型式学的連続性がうかがえないのにたいし、八幡観音塚、竹並H55-6号・梶山・箆内23号、方頭大刀は、

5世紀

6世紀

7世紀



- 1 大阪・七観（素環頭大刀）[清水 2012 を再トレース]
- 2 香川・原間 6 号（三累環頭大刀）[香川県埋蔵文化財センター 2002 を再トレース]
- 3 梁山・夫婦塚（円頭大刀）[東亜大学校博物館 1991 を再トレース]
- 4 静岡・鳥居松（円頭大刀）[鈴木編 2009]
- 5 岡山・穴が辻（円頭大刀）[岡山県古代吉備文化財センター 2008]
- 6 福岡・元岡 G-6 号（庚寅銘大刀）[福岡市埋蔵文化財センター蔵]
- 7 福岡・カルメル修道院 [福岡市埋蔵文化財センター蔵]
- 8 群馬・八幡観音塚（鶏冠頭大刀）[高崎市教育委員会 1992]
- 9 福岡・竹並 H55 - 6 号横穴 [行橋市歴史資料館蔵，鞘尻金具は瀧瀬 1991 を再トレース]
- 10 福島・筑内 23 号横穴 [福島県教育委員会・福島県文化センター 1979，再トレース]
- 11 埼玉・西原 1 号（方頭大刀）[菊地 2010]

図33 カマス鋒鉄刀の諸例

刀身の基本的な構造が類似し、長身化傾向にあるとともに、刀装具の変遷を追うことができる。筆者は、竹並H55-6号横穴、梶山古墳の段階から倭でカマス鋒鉄刀が本格的に製作されはじめたと考える。

それではなぜ、すくなくとも5世紀には倭に将来されていながら倭系大刀に影響をあたえなかったカマス鋒が、7世紀以降には採用されたのだろうか。

歴史上の事件と考古学的事象をむすびつけることはむずかしい。ただ、用明2年（587）の蘇我物部戦争における廃仏派・物部総本家の滅亡と、崇仏派・蘇我氏の一極体制化を顧みるならば、蘇我氏こそが、物部氏が製作してきた倭王権のレガリア（regalia）¹⁾である倭装大刀を排除するとともに、装飾大刀の製作技術を統合し、大刀の装飾に仏教意匠を採用したと考えるのが妥当だろう。現状では、その過程でカマス鋒も連動して採用されたと考えておきたい。

第4節 墳墓以外の遺構から出土した古墳時代鉄刀の性格

本節では、墳墓以外の遺構から鉄刀が出土した事例の検討をつうじて、本遺構の性格を考える。

静岡県鳥居松遺跡5次調査 [図34] 幅20m、深さ2.5mほどの自然河川である伊場大溝の底に、舶載品の円頭大刀と、完形にちかい大量の須恵器（後期後半）が沈められていた。大刀は水流の方向に平行した状態で出土した。鈴木一有は、河川の精霊にたいする供儀の痕跡と評価する [鈴木2009]。

大阪府小阪合遺跡第41次調査 長さ約25m、幅約11m、深さ約1mの河川跡の斜面上から、鹿角装鉄刀1、鹿角装鉄剣1、鉄鉾1、鉄斧1、内行花文鏡1、石製有孔円板1、勾玉・管玉・白玉、ミニチュア手捏土器、壺・甕・高杯を中心とする多量の土師器類が出土した。刀剣は、鋒を南東に向けていたという（『産経新聞』大阪総合版 2007年6月29日朝刊）。時期は古墳前期後半。

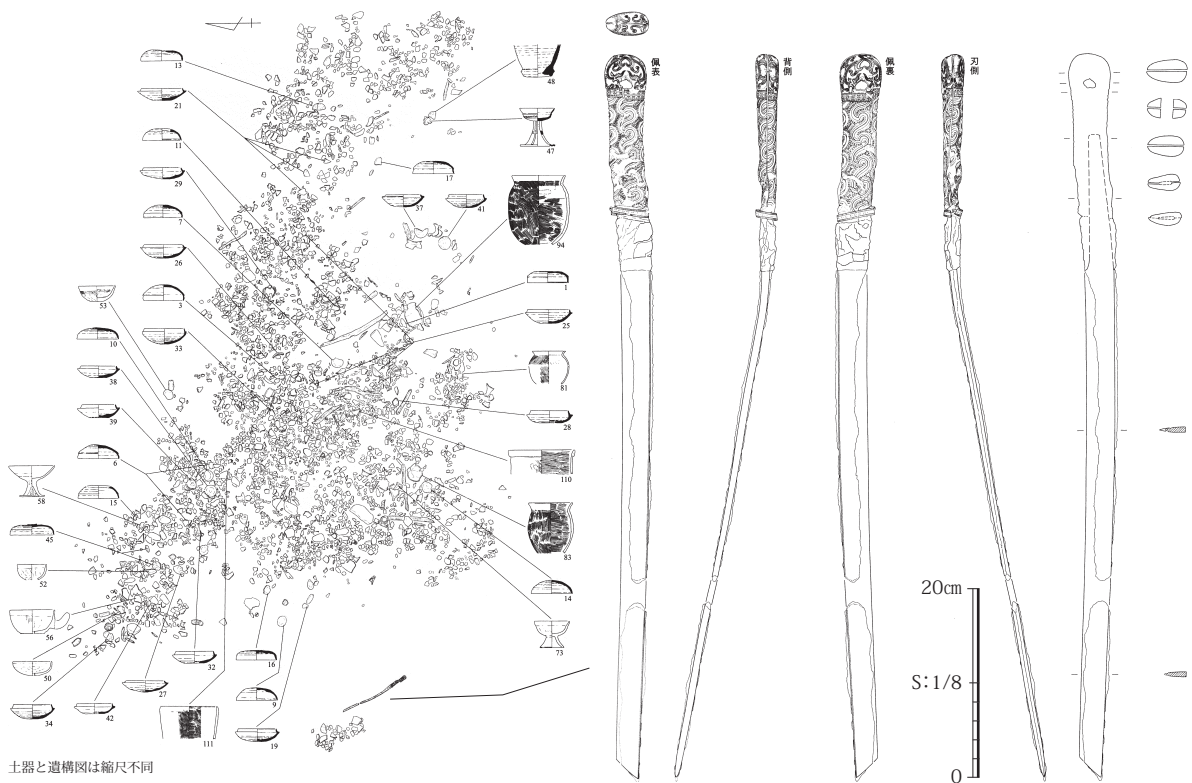


図34 鳥居松遺跡5次調査伊場大溝底の遺物出土状況

兵庫県三条岡山遺跡第4地点〔図35〕 六甲山麓の急斜面に位置する幅0.9m、長さ8mの土坑のなかに、大小の鉄刀2振と刀装具、鉄鏃、鉄鐸、子持勾玉、須恵器（高坏・平瓶・甕・大甕）、土師器がおさめられていた。鉄刀2振は、東西に長い遺構にたいして鋒を北に向けて、平行して出土した。時期は、7世紀中葉から後半。

島根県古志本郷遺跡 [図36]

こうした状況を供献祭祀の場として評価する松尾充晶は、神祇祭祀の面で特異な性格をもつ出雲における祭祀空間の立地構造や社殿成立の背景を、5世紀から律令期への連続と変化のなかで理解する[松尾2014]。そして、鳥居松遺跡の円頭大刀にみられるように、祭祀に供ぜられる大刀は、古墳に副葬される畿内の王権工房製の大刀とは別の原理で入手された可能性を想定するとともに、出雲の祭祀遺跡である前田遺跡やキコロジ遺跡から出土した漆塗の大刀は地方生産が考えられるものであることに注目しながら、供献する大刀の生産にいたるまで、神祭りに必要な一連の活動を完結的に管掌した首長の関与を想定する。

この松尾の考えは、和歌山県坂本1号墳から出土した金銅装頭椎大刀と、その南に位置する斎宮との関連を示唆する穂積裕昌の視点

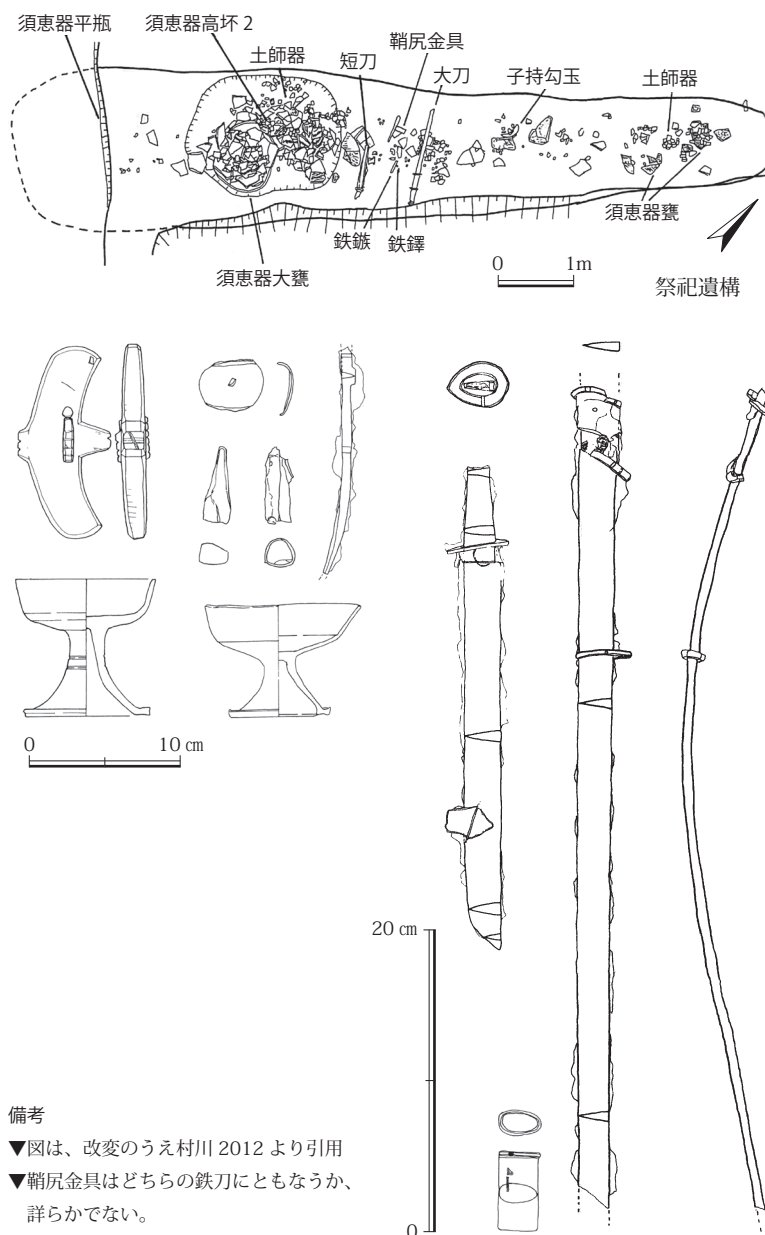


図35 三条岡山遺跡第4地点

〔穂積2012〕とも抵触する問題であり、刀剣からみた地域首長権の成長過程を考えるうえで示唆に富む。

福岡県カルメル修道院内遺跡第4次調査2号住居 〔図37〕 油山山塊から北にのびる低丘陵上南斜面の標高17～25mに立地し、南北220m、東西約180mのひろさをもつ、弥生時代前期末から後期にかけての墓地を中心とした遺跡である。

第4次調査で検出された2号住居は、弥生時代の土坑墓群南側の斜面を掘削して造られた。標高約18mに位置し、東西4.2m、南北2.7m以上のひろがりをもつ。鉄刀1振とともに、須恵器4点が出土した。このうち蓋3点は、内面をうえにした状態で、丘陵の等高線に沿ってならんでいた。鉄刀はそこから約1.5m南地点において、須恵器の蓋3点と平行した状態で出土した。須恵器はいずれも古墳時代後期末のものであり、鉄刀も同一の時空間のなかで理解できるだろう。2号住居の東に隣接する34号住居では、須恵器杯蓋1点、杯身5点、土師器小型甕2点が出土した。須恵器はTK209型式で、2号住居と同時期である。詳細はわからないが、古墳時代後期の集落遺跡がひろがっていた可能性がある。なお、カルメル修道院内遺跡の北東約350mには神松寺御陵古墳（前方後円墳・20m、TK10新-TK209）があり、その被葬者をとりまく人々の基盤集落である可能性も排除できない。

2号住居からは儀礼的要素のつよい遺物は出土していないものの、丘陵斜面を掘削してつくられ、等高線に沿うように完形品や完形にちかい須恵器がならび、それと鉄刀が平行しておかれていた状況は注目できる。完形品の須恵器2点は廃棄品とは考えにくい。2号住居のすぐ上には弥生時代の墓地が密集するため、これらにたいする墓前供養や祖先崇拜などの痕跡として理解することもできるだろう。

なお、刀と須恵器の組みあわせという点では鳥居松遺跡に類似する。事例がすくないために仮説の域を出ないが、供献品目の組みあわせによる祭祀形態の階層性も想定できるだろう。

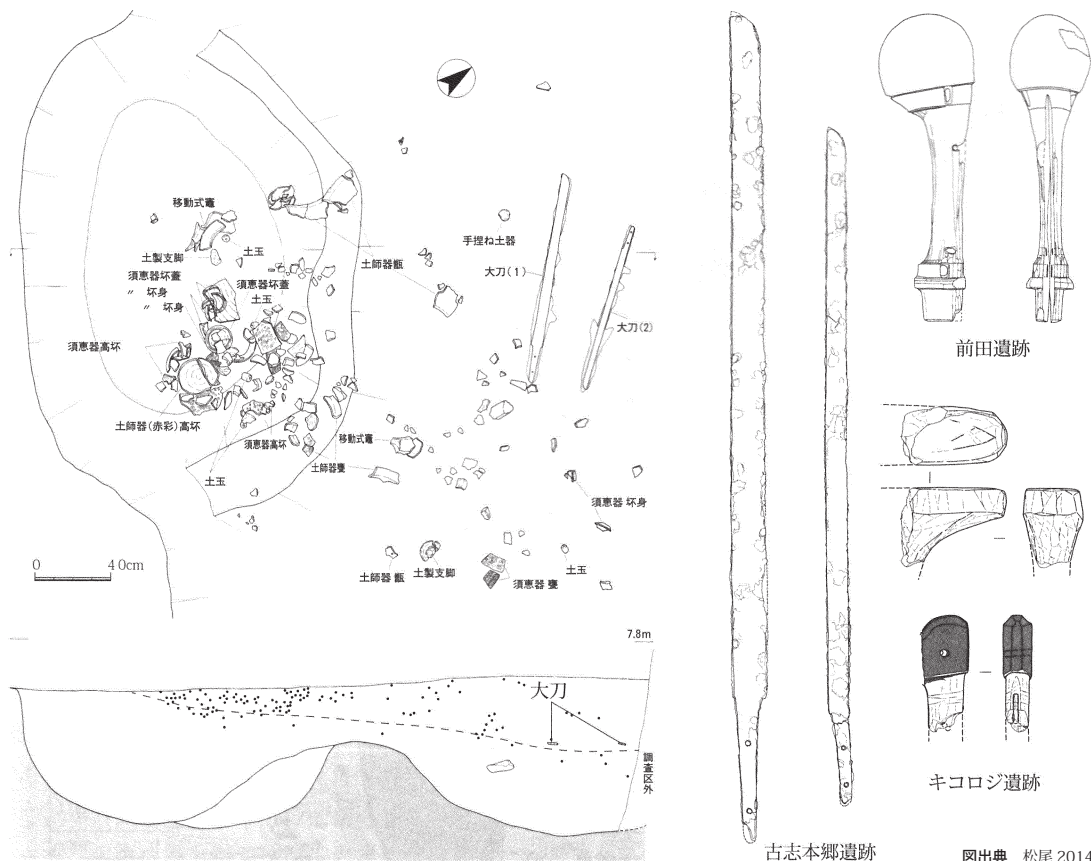
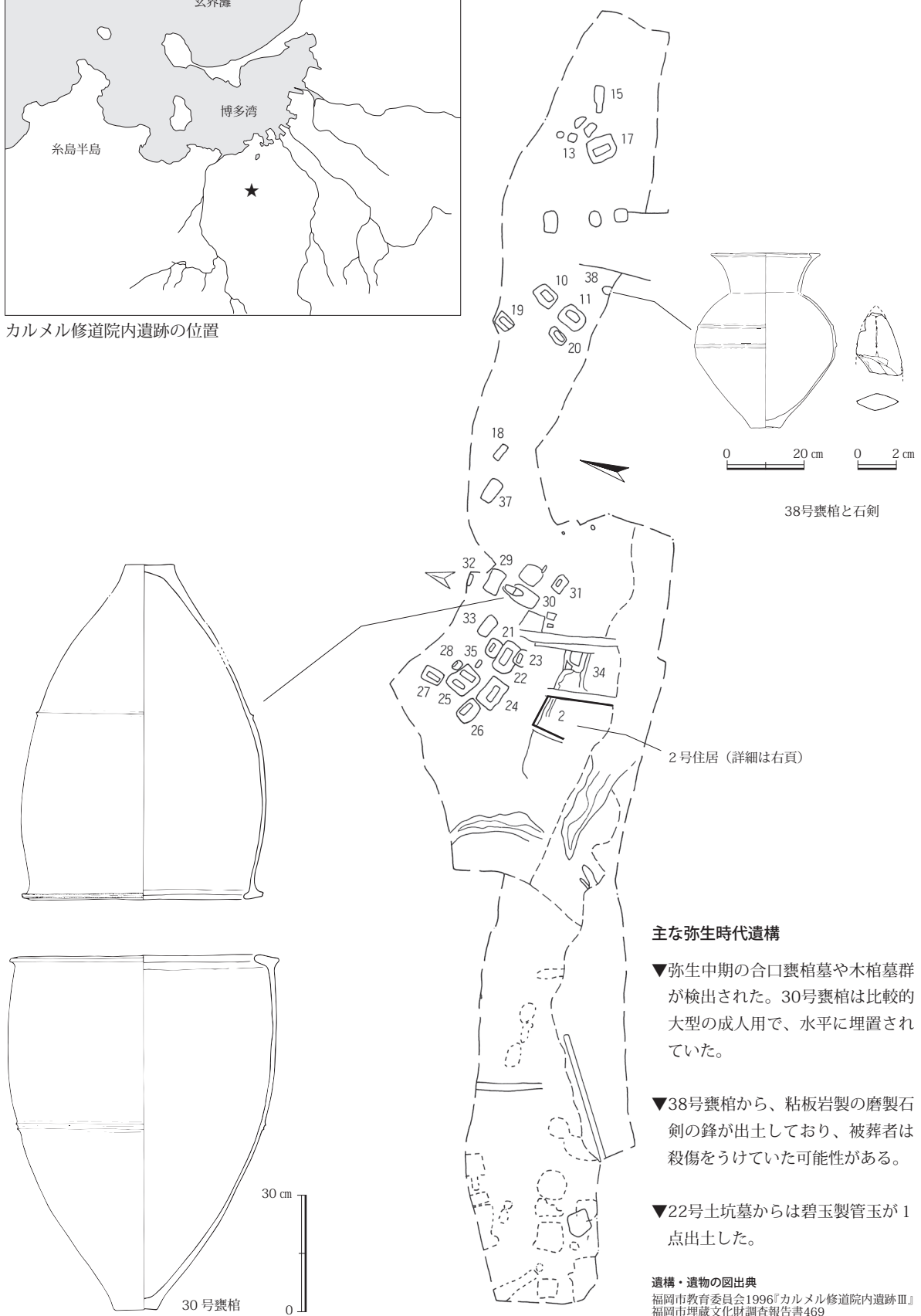


図36 古志本郷遺跡と関連資料



カルメル修道院内遺跡の位置



主な弥生時代遺構

▼弥生中期の合口甕棺墓や木棺墓群が検出された。30号甕棺は比較的大型の成人用で、水平に埋置されていた。

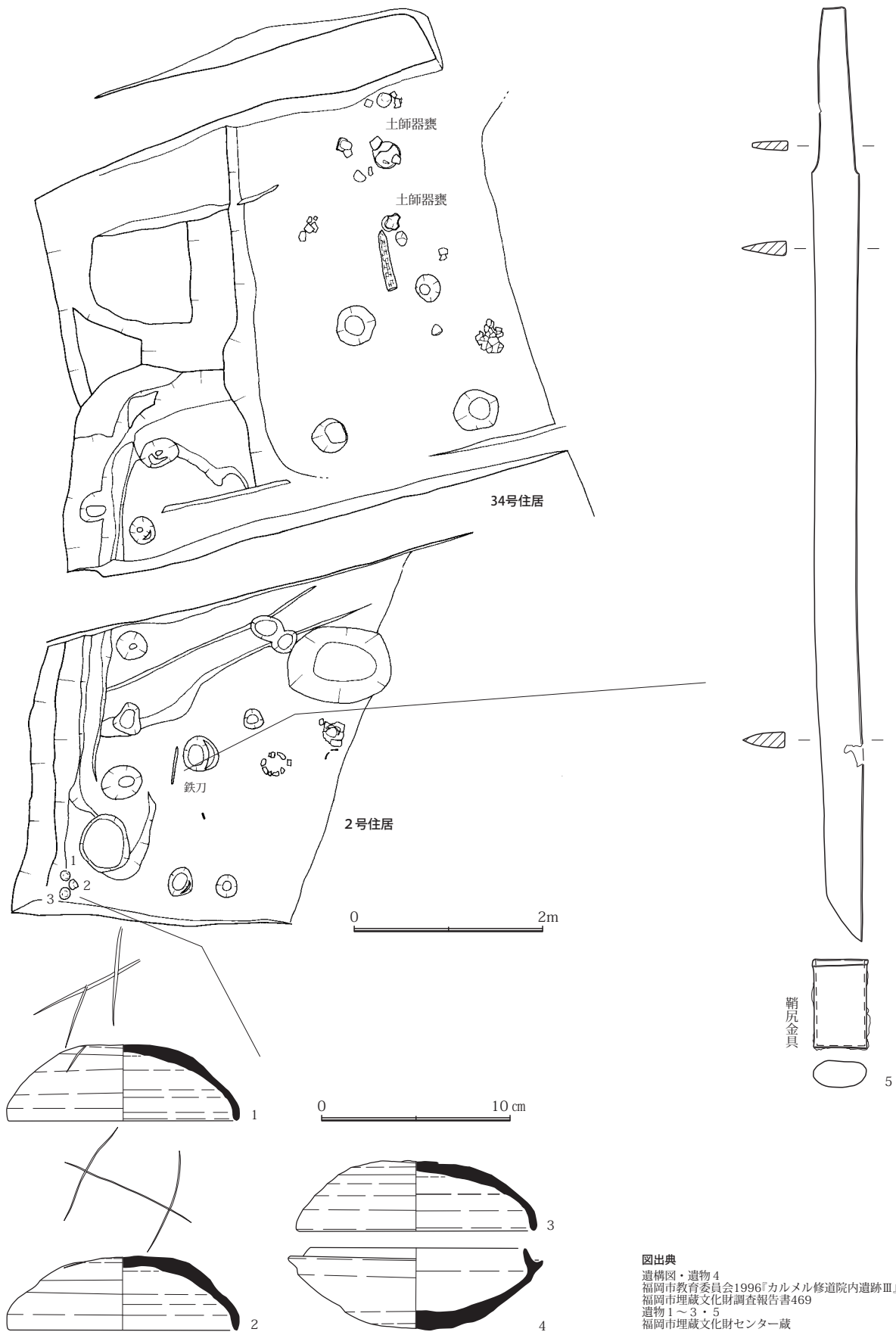
▼38号甕棺から、粘板岩製の磨製石剣の鋒が出土しており、被葬者は殺傷をうけていた可能性がある。

▼22号土坑墓からは碧玉製管玉が1点出土した。

遺構・遺物の図出典

福岡市教育委員会1996『カルメル修道院内遺跡Ⅲ』
福岡市埋蔵文化財調査報告書469

図37 カルメル修道院内遺跡



福岡県尾崎・天神遺跡4号祭祀跡 [図38]

鋒の方向を揃えて錆着した鉄刀3振と石製有孔円盤、須恵器提瓶がまとまって出土した。提瓶は立った状態で出土したらしい。鉄刀のうち1振は、大型板鐔をともなう倭製品である。時期は、後期後半・末頃である。

4号祭祀跡の約1m北では、完形あるいは略完形の大量の手捏土器のほか、子持勾玉の破片が出土しており、4号祭祀跡を中心としたややひろい範囲の祭祀空間を想定できる。

第5節 結 語

第4節で挙げた遺構は、斜面に位置する傾向にあるとともに、刀剣類は鋒の方向を揃える、川の流れに沿っておくといった整然としたありかたが読みとれる。また、鳥居松遺跡以外では勾玉をともなうなど、通底する部分がすくなくない。鏡・刀剣・玉からなる「三種の神器」をはじめ、石製品や土器をふくめた、敷居のたかい儀礼空間として評価できる。

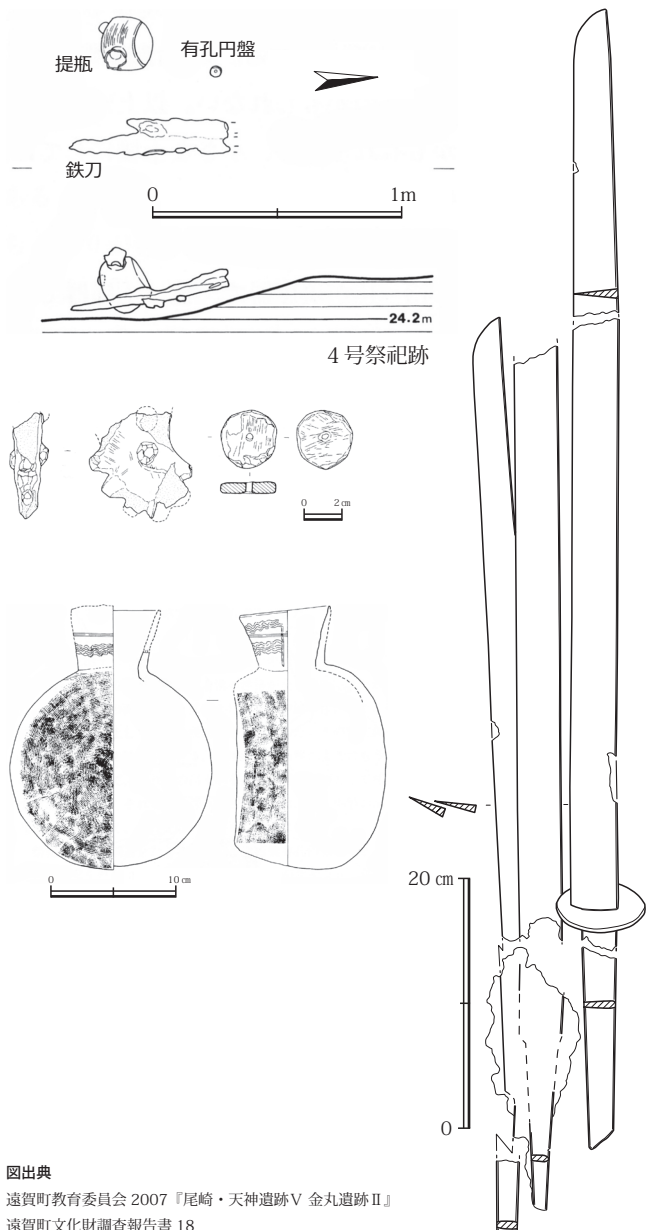
ただ、小阪合遺跡や尾崎・天神遺跡の刀は倭系、鳥居松遺跡やカルメル修道院遺跡の刀は外来系とみられるように、儀礼に供する刀剣にも倭系と外来系の双方がある。これを、両系統の区別が重んじられていなかったにすぎないと等閑に付すか、その選択が集団の性格に因るものと評価するかによって、地域史にすくなくならぬ影響をあたえる。その判断はむずかしいが、古墳副葬品としての性格が議論されてきた刀剣研究に新たな視点をくわえられたならば、本章の微意は果たされる。

ただ、属人性がたかく、古墳時代の武装や身分表示秩序の中心を担った刀剣のライフサイクルの模索はおおきな課題である。本章を古墳以外の遺構から出土する刀剣研究の〈基礎編〉とすれば、松尾充晶の研究は、それを具体的な祭祀論と、大刀の生産や流通とをむすびつけるための〈応用編〉といえるだろう。

今後でも微視的な型式学的研究をすすめるいっぽうで、巨視的な視点による「地域史のなかの刀剣」に目配りした研究姿勢が求められるであろうことを展望し、第Ⅱ部への布石としたい。

註

- 1) 【レガリア】 国家や王権を象徴し、それをもつことによって正統な王であると認めさせる物品。



図出典
遠賀町教育委員会 2007『尾崎・天神遺跡Ⅴ 金丸遺跡Ⅱ』
遠賀町文化財調査報告書 18

図38 尾崎・天神遺跡第4祭祀跡

第5章 東アジアにおける特殊鉄鉾の系譜

第1節 はじめに

東アジアの戦争で騎馬戦術が普及した4～7世紀において、突撃する騎馬兵のおもな武器は鉄鉾だった。当時の日本列島や朝鮮半島、中国東北部の鉄鉾は、基本形態は共有しつつも王権によって細部は多彩に変化する。それと同時に、倭の鉄鉾の動向は日本列島内におさまらず、当時の対外交流をも反映している[朴1995, 高田1998, 水野2013]。韓国の三国時代武器研究においても、袋部の形態に着眼した中国東北部から朝鮮半島南部への波及にかんする議論が盛んだが、鉄鉾を構成するもうひとつの属性である身部に注目した研究は少ない。鉄鉾の袋部と身部の系譜を複合的にさかのぼれば、武器からみた騎馬戦術の東漸や各王権論の叙述につながるものと期待できる。

さらに、袋部に円形鐔や円筒状の銀装具といった付属具を装着する鉄鉾が製作され、一部の有力な墳墓を中心に副葬された。いっぽうに、鐔付は新羅系、銀装は百済・加耶系の鉾と認識されているが、倭の後期古墳から出土する三角穂式鉄鉾にもこれらの造作をほどこすものがある。このような鉾は実用的な武器としても機能するが、それ以上に「魅せる」ことを重視した象徴性のたかい武器であり、本論では特殊鉄鉾と呼ぶ。

特殊鉄鉾は、装飾大刀や馬具、甲冑と共伴することが多いため、それらが組みあって各王権における有力首長層の象徴になったと想定する。また、新羅最大の王陵である皇南大塚南墳からは石突もふくめた、およそ550本の鉄鉾をはじめ、おびただしい数の武器や馬具が出土しているが、これほどの数の武器副葬は世界的にも類をみない。鉾を軸にして朝鮮半島の武装を素描した門田誠一は、高句麗古墳の出行図に描かれた重装騎兵は墓主を侍衛しつつ官秩に則った威儀を示す存在であるのにたいし、加耶においては高霊池山洞古墳群をモデルとして、石突をともなう鉾を構えた騎兵を上位とする階層性を指摘した[門田2006ab]。

つまり、特殊な造作や副葬形態の違いには、王権ごとの鉾の意義や軍事編成の違いが反映されている可能性がある。また、各造作や保有形態がほかの王権にもすくなくみられる状況、あるいは逆に排他的なありかたには、同盟や従属、敵対といった国際関係の一端を読みとれるのではないだろうか。

本章では、東アジア各地に局地的に集中する鉄鉾の様相と系譜を整理し、それが特定の王権と有機的な関連をもつこと、ひいては上位階層の武装には各地域・王権独自の形式やセットが重視されたことを論じる。

第2節 鉄鉾研究の現状と課題

第1項 日本列島

1. 黎明期の研究

日本列島の古墳から出土する鉄鉾の考古学的研究は、古谷清、高橋健自、後藤守一、末永雅雄らにはじまる[古谷1907, 高橋1912, 後藤1928, 末永1941]。彼らの研究は、身部（穂）や袋部の断面形態、関の有無といった属性の多様性や、中国大陸や朝鮮半島、あるいは正倉院伝世品をはじめとする日本の古代・中世の事例との対比、古典文学における鉾のありかたなどに言及するなど、系譜論の萌芽的側面をもっていた。

2. 型式学的研究の進展

茂木雅博は、鉄鉾の身部の形態と関の有無を組みあわせた分類案と、各々の年代を示した[茂木1980]。

身部の形態差を形式差として捉えた茂木の分類は参考になるが、袋部の断面に多角形のものと円形のものがあることに注意しつつ、茂木自身の分類案としては採用していない。

白杵勲は、各部位の形態差（身部断面・袋部断面・袋端部形態・関の有無・身部長・身部幅・飾り金具の有無）をもとに鉄鉾を分類し、各属性の消長からⅠ～Ⅴ期に時期区分した〔白杵1985〕。

この白杵の研究が単系列的なものであったのにたいし、高田貫太は、身部の4類型（鎬・両丸・刀身式・三角穂）を系譜差と捉え、関の有無、袋部2類型（円筒袋式・多角形袋式）、袋端部2類型（直基式・山形挟り式）に細分類しながら、Ⅰ～Ⅲ期に編年した。Ⅰ期とⅡ期の境が5世紀中葉、Ⅱ期とⅢ期の境が6世紀前半という。また、列島古墳出土鉄鉾の変遷は朝鮮半島のそれと連動するとともに、馬甲や馬冑、陶質土器、垂飾付耳飾などの半島系遺物との共伴事例が多いことから、鉄鉾は半島系の武器であると理解する反面、共伴する武器に占める鉄鉾の割合や、主体部の外郭に刃部を外側に向けて配置される例が多いことに注目し、半島とは異なって倭では祭器的・威信財的性格がつよいことを指摘した〔高田1998〕。

さらに高田は、刀身式鉄鉾や鐔付鉄鉾、三角穂式鉄鉾などの特定形式の性格にも迫り、三角穂式鉄鉾を倭製品として評価するなど、その論点は多岐にわたる〔高田2001・2002・2014〕。本論でも、鉄鉾本体の分類については高田に倣う。ただ高田は、6世紀前半代の短期間に鎬式から三角穂式へ転換したと説明するが、実際には鎬式も並存するため、それを「転換」と表現することは適当でない。それでも、6世紀前半を境として鎬式鉄鉾が減少すること自体は事実であり、鎬式鉄鉾出土古墳と三角穂式鉄鉾出土古墳の様相を比較しながら、相関関係を追う必要がある。

そのほか、袋部と目釘の形態に注目した藤井章徳の編年や〔藤井2007〕、関の角度などに注目した富山直人の編年などがある〔富山2017〕。

3. 鉄鉾導入の背景

橋本達也は、前期の鉄鉾は古墳の副葬品として一般化せず、安定的な生産体制は想定できないと論じた。また、畿内の大型古墳に副葬されないことなどから、朝鮮半島からの舶載品であると評価した。さらに、全国的には鉄鉾の出土数が少ない古墳時代前期においても、徳島県では比較的高い頻度で副葬されることを見だし、弥生時代終末期から古墳時代前期の一時期にかけて、徳島の首長達が朝鮮半島と独自の交流ルートをもっていたと想定した〔橋本達2002〕。

川畑純は、古墳への鉄器多量埋納の実相を論じるなかで、古墳時代前・中期における鉄刀・鉄剣・鉄鉾・鉄鏃・甲冑の全国分布図と、出土数の上位ランキングを計上した〔川畑2014・2015〕。その結果、鉄鉾以外は上位1位を畿内の古墳が占めたが、鉄鉾は、畿内を分布の核としながらも、前期では静岡県松林山古墳の12本、中期前半では兵庫県茶すり山古墳の19本、中期後半では福岡県新原・奴山古墳の11本が最多であり、かならずしも副葬数という点で近畿中枢の古墳が優位にあったわけではないことが示された。また、中期後半に複数本副葬する古墳は、近畿のほか福岡・熊本・宮崎にまとまる傾向にあるという。先に紹介した橋本の想定とあわせ、鉄鉾の導入や保有に、地域の性格が反映されている可能性を示す検討結果である。

第2項 朝鮮半島

朝鮮半島の鉄鉾の研究史については、高田貫太の総括〔高田2002〕に依りながら整理する。

1. 朝鮮半島への伝播過程

高久健二や金吉植は、中国大陸から朝鮮半島への鉄鉾の伝播過程を、袋端部が直線の「直基式」は燕→楽浪→半島南部（B.C. 1世紀頃）、袋端部を三角形状に挟む「山形挟り式」は漢→高句麗→半島南部（A.D. 3世紀中頃～後半）と考えた〔高久1992a、金吉植1994〕。

また金吉植は、袋部断面が多角形の鉄鉾は百済・大加耶を中心に分布する百済系文物、袋部に板状の鐔を

装着する鐔付鉄銚は洛東江以東の慶州を中心に分布する新羅系文物と捉え、鐔付鉄銚は中央（慶州）による地方支配を背景として地方へ下賜されたものと理解した〔金吉植1994〕。

2. 鉄銚の儀仗性

李殷昌は、古墳副葬鉄銚を高句麗古墳壁画の出行図にある長柄武器と関連づけ、儀仗的な性格を考えた〔李殷昌1991〕。

朴天秀は、倭の有力墳では大加耶系の銀装鉄銚がしばしば出土するのにたいし、新羅系の鐔付鉄銚は中堅層以下の古墳からも出土することから、日本では大加耶系の鉄銚が儀仗用銚の主流だったとみる〔朴天秀1995〕。

徐始男・李賢珠は、朝鮮半島の鉄銚のうち、①関部幅5cm以上のもの、②袋部が開いたもの、③全長24cm以上のもの、④全長に占める袋部の長さの割合が34%以下のものを、武器として機能しない儀仗性のつよいものと評価した〔徐始男・李賢珠1997〕。

3. 地域間交渉

朴天秀は、昌寧校洞89号墳例のように、鐔付鉄銚の袋部に銀装飾をつける折衷式存在を指摘し、他地域間の複雑な交渉を想定した〔朴天秀1999〕。

高田は、慶山林堂造永C1-1号墳主槨や慶州金冠塚、飾履塚、金鈴塚などで銀装鉄銚が出土したことを根拠として、新羅地域も銀装鉄銚の発祥地の候補に挙げた〔高田2002〕。しかし、造永C1-1号墳と同時期〔諫早2012〕の新羅最大の王陵である慶州皇南大塚南墳では500本以上の鉄銚が出土したにもかかわらず、銀装鉄銚は出土していないため、新羅が銀装鉄銚を創出したと考えるのはむずかしい。「銀装≡百濟」「鐔付≡新羅」という、特定の特殊鉄銚と王権をつなぐ構図は、すでに共通の認識として定着しているといっていよう〔金吉植1994、朴天秀1995〕。

第3項 中国東北部

1960年代以降、袁台子壁画墓（354or366年）、十二台88M1墓（4世紀後半）、北燕馮素弗墓（415年）、喇嘛洞墓地群をはじめとする三燕の墳墓がつつぎつつぎと発掘調査され、多量の武器・武具・馬具・装身具などが出土し、4・5世紀における中国東北部の武装の実態が次第にあきらかとなってきた。

これらには、列島古墳時代や朝鮮半島三国時代の遺物と類似するものがふくまれ、古墳時代研究者の間で脚光を浴びている。三燕とは、現在の内蒙古周辺に居住した鮮卑（遊牧民）を主体とした国家群であり、出土文物・葬送儀礼にも遊牧民としての習慣や伝統をうかがうことができる。このような地域の文物は、4世紀代の遼寧の歴史的な特色を知り、日本や朝鮮半島の文物の系譜を検討するうえで看過できない。

1990年代後半以降、奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所がその重要性を鑑み、喇嘛洞墓地群出土品を中心とした三燕文物にかんする国際共同研究をすすめた。その成果は2002年の『三燕文物精粹』、2006年の『東アジア考古学論叢 — 日中共同研究論文集 —』にまとめられ、2009年秋の飛鳥資料館『北方騎馬民族のかがやき — 三燕文化の考古新発見 —』展では、武器・武具・馬具・装身具・土器・陶器など、遼寧省朝陽市出土の三燕文物が一堂に会した。

この一連のうごきのなかで豊島直博が、銚をふくめた列島の古墳出土武器と喇嘛洞墓地群出土武器の形態的特徴の類似点と差異点を指摘したほか〔豊島2006・2009〕、諫早直人が北票市大板営子墓地群から出土した鉄銚を紹介している〔小池ほか2014〕。ただ、型式学的にみれば、喇嘛洞墓地群出土品のほうが基部の山形決りなどの新しい要素をもつとはいえ、遺構の多くが年代不明であることから具体的な新旧関係の検討が課題として残っている。

第4項 鉄鉾からみた武装論

古墳時代の武装や軍構成、階層編成にかんする検討の多くは、中期では鉄鉾・甲冑、後期では装飾大刀・馬具を中心に検討されており、鉄鉾に主眼をおくものは少ない。これまでの「武装」研究では、刀剣・槍鉾・弓具・甲冑・馬具などの「部品」が個別に研究されてきた。そのため、個々の型式学的研究は枚挙に暇がないが、武装を復元するうえで有効な方法論が練磨されているわけではない。小林行雄による鉄鉾と騎兵をむすびつける解釈も〔小林1951b〕、資料の純増によって再検討の余地がひろがるいっぽうである。

たとえば豊島直博は、奈良県新沢千塚古墳群や後出古墳群の武装を、Ⅰ群（刀剣・鉄鉾・甲冑をもつもの）、Ⅱ群（刀剣と鉄鉾をもつもの）、Ⅲ群（刀剣と鉄鉾のどちらかをもつもの）に分類し、甲冑をまとう指揮官と、刀剣・弓矢で武装する兵士像を素描した〔豊島2000〕。このうち槍・鉄鉾をもつものはⅠ・Ⅱ群にかぎられ、短甲を身につけて鉄鉾をもった指揮官と、直刀と弓矢で武装した兵士による階層構造が浮かびあがる。

松木武彦は、古墳時代の武装の変遷を12期区分し、そのうち10期（後期前半～中葉）には「挂甲・長刀および矛をもち、飾り馬具をつけた馬に騎乗する有力者」像を復元した〔松木2007〕。ただし、松木による騎兵の復元は前方後円墳集成編年を前提とした理念的なもの、すなわちその武装編年は、集成編年の各段階に出現・盛行する武器や武具、馬具の代表的な事例をならべたものであり、武装の類型化にもとづくものではないことに注意が必要である。同じ批判は、岡安光彦の論文「古墳時代中・後期の画期と武装システムの変化」〔岡安2005〕にもあてはまるものだろうが、武装の編年とその歴史的背景の解釈にあたっては、武装そのものの類型化が求められる。たとえば桃崎祐輔が追いつめる「究極の暴力」の象徴としての重装騎兵、あるいは重装騎馬戦術の復元は、馬具研究者のみならずすべての武器研究者共通の目標といえるものの、実際には純増する資料の飽和がそのようなモデル形成を日々困難にしている。

これにたいして仁木聡や橋本達也、鈴木一有は、個別具体的な資料に即しながら古墳時代中・後期の武装を類型化している。

仁木は、槍・鉾の柄もふくめた全長規格と、その武装の相関性を述べた〔仁木2004〕。仁木が示した、個別の古墳出土武装具に忠実な騎兵と歩兵の復元図は、古墳時代の武装を視覚的に把握するうえで有用である。

橋本は、帯金式甲冑を軸とする「中期的武装具様式」の消長をもって中期の特色と時間幅を規定したうえで〔橋本達2005〕、短甲は歩兵にともない、挂甲は騎兵にともなうという小林行雄以来の漠然とした認識にたいして倭の初期馬具と小札甲の共伴関係を検討し「必ずしも小札甲に馬具が伴うわけではなく、少なくともTK47型式段階以前では両者を一体のものとして扱った形跡は希薄である」と論駁した〔橋本達2010：p.484〕。また、三角穂式鉄鉾を「後期的武装具様式」の一環と理解した。

鈴木は、朝鮮半島で出土する帯金式甲冑は、倭系の鉄鉾や刀剣をとまなう事例が多いことに注目し、これを「倭系武装」と認識する。そのなかで、天安道林里3号石槨の槍身鉾を明確に倭系武装の一環と評価する点は注目される。また、朝鮮半島における倭系武装はとくに全羅南道に多いことを指摘し、その被葬者は倭に出自をもつ可能性を積極的に見出そうとしている〔鈴木一2014b〕。

第5項 本章の視点

以上の研究をつうじて、古墳時代鉄鉾の諸属性や変遷が把握されつつあるが、身部の形式間の関係について、じゅうぶんな議論が尽くされているわけではない。とくに、倭が創出した三角穂式鉄鉾の系譜をあきらかにするためには、前段階の鉄鉾の身部・袋部断面・袋端部、および装飾の特徴を同一水準で比較検討する必要がある。このうちのどれかを重視するのではなく、それぞれの組みあわせや各王権領域におけるありかたなどから総合的にその性格を解釈したい。

中国東北部や朝鮮半島の資料の充実は、地域を超えた類似形式・型式の存在と、東アジア世界の広域交流をあきらかにする。そのため、鉄銚の製作地については明確な意見がかえって打ち出しにくくなっている。鉄銚の国産品と舶載品、あるいは渡来系工人による国産品の峻別方法の模索が課題である。多角形袋式だから百済製、鐔付だから新羅製という直截的な説明は、複雑な鉄銚様相の実態を捉えたものではない。特殊鉄銚の諸画期を求め、各期における国際関係をふまえた系譜論を提示しなければならないだろう。

以上のような研究の現状と課題を受けて本章では、次の方法によって古代東アジアにおける特殊鉄銚の系譜とその背景を考える。

- ①日本列島と朝鮮半島の各地に点在する銀装鉄銚について、地域ごとの事例を検討する
- ②東アジア最多級の本数が出土した新羅・皇南大塚南墳副塚の鉄銚の系譜を整理する
- ③中・後期古墳から出土する特殊鉄銚の系譜を求め、同時期の新羅、百済、加耶の様相と比較する
- ④以上をもとに、各地の上位層における武装のありかたを考え、当時の地域間・王権間の政治的な距離が武装体系にも反映されていたことを示す

第3節 銀装鉄銚の系譜

第1項 加耶

TK216-TK208型式並行期の玉田M1号墳や、TK23型式並行期の池山洞44号墳などの有力墳から出土している。朴天秀は、大加耶における鉄銚の保有形態について、次の3ランクに分けた〔図39, 朴1999〕。

- a ランク | 石突をともない、袋端部を銀製覆輪金具で装飾するもの
- b ランク | 石突をともなうが、
銀製覆輪金具をつけないもの
- c ランク | 石突をともなわないもの

そして、a ランクは大加耶圏の中心地である高霊池山洞古墳群や陝川玉田古墳群の首長墓、b ランクは南原、咸陽、陝川礪溪堤などの高霊や玉田から離れた地方の首長墓、c ランクは中間層以下の成員墓から出土するという階層性を指摘した。ただし、鉄銚本体の形式との相関性はうかがえず、銀装であることが重視されている。

池山洞44号墳の銀装鉄銚は刃関双孔を有する（穿孔はせず、窪んでいる）。刃関双孔を穿つ刀剣は、朝鮮半島よりもむしろ、弥生時代以来の倭に伝統的な鉄剣に求められ、倭系武器の影響を看取できる。

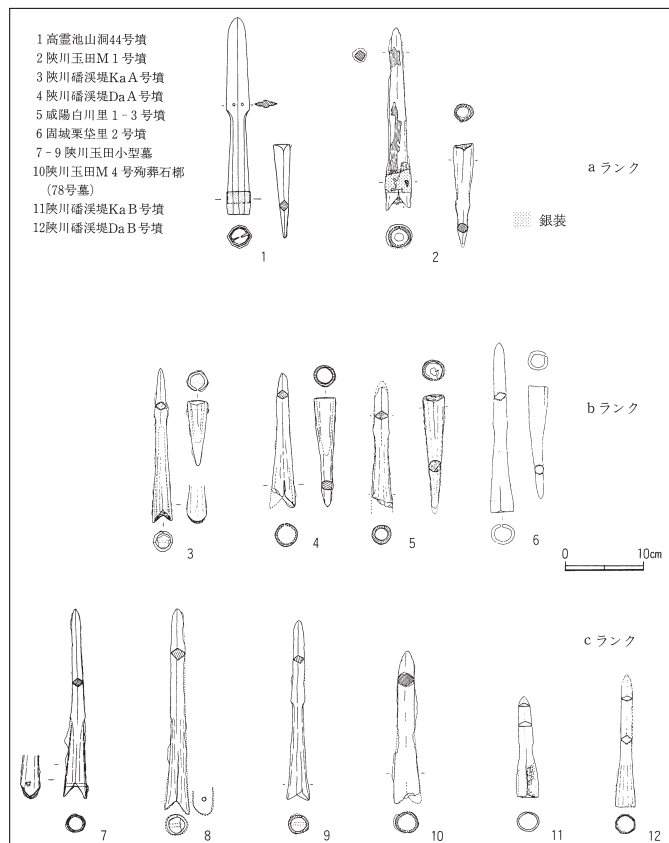


図39 大加耶圏の鉄銚のランクづけ [朴1999]

第2項 百 済

武寧王陵（王没年：523年）から出土しているが、大加耶の事例よりも時期が新しい。塼築や単龍環頭大刀には、中国南朝・梁の影響が想定されている。また、棺材のコウヤマキ（*Sciadopitys verticillata*）は、日本および韓国済州島に固有の常緑針葉樹である。このように、武寧王陵は国際色豊かなハードとソフトをそなえるため、そこからの出土をもって直截的に百済系と特定することはむずかしい。

むしろ、5世紀後半の百済新鳳洞古墳群被葬者集団の副葬品組成を類型化した鈴木一有は、新鳳洞古墳群の鉄鉾は長大化せず、装飾性も乏しい実用品と評価し、鉾は馬具保有層のなかでも上位の集団に採用される傾向を読みとる〔鈴木一2012ab〕。これは、緊迫した対高句麗政策の最前線に臨んだ集団の、実戦に適した武器であることを示す。

第3項 倭

和歌山県大谷古墳（TK47）、京都府物集女車塚古墳（TK10）、大阪府海北塚古墳（TK43）、千葉県金鈴塚古墳（TK209）、福島県中田装飾横穴（TK209）などで出土している。いずれも6世紀を中心とし、玉田M1号墳や池山洞44号墳よりも時期が新しい。したがって、銀装鉄鉾の系譜は現状では加耶に求める。ただし、海北塚古墳例は形態が武寧王陵例と類似することから、倭における銀装鉄鉾の展開にあたっては、加耶・百済双方の影響を念頭におきたい。また、このような武器の百済・加耶・倭での共有は、三地域が高句麗の南下政策に対抗した同盟関係にあったことを傍証する。ただし、6世紀後半以降の倭の銀装鉄鉾にまでこうした構図を敷衍化してよいのかは慎重を期したい。

第4項 新 羅

5世紀から6世紀初頭にかけての新羅王陵に副葬される鉄鉾は、鐔付が主体である。銀装品は5世紀後半の慶州飾履塚で出土しているが、金・金銅製の冠を副葬しないことから、被葬者は王に従属的な立場にあったとみられる。5世紀末から6世紀初頭頃に位置づけられる昌寧校洞89号墳例は鐔付と銀装の折衷品であり、本来の財体系から浮いた存在だろう。新羅の銀装鉄鉾はあくまでも客体である。

第4節 皇南大塚南墳副槨出土鉄鉾の系譜

韓国慶尚北道慶州皇南大塚南墳の副槨から出土した543本もの鉄鉾の性格を考える。このなかには、袋部の左右に蕨手状の刃が派生するものや、鐔を装着するもの、身部断面が三翼形のものがあり、倭の古墳副葬鉄鉾とは様相がことなる。はたして、このような形態（形式）の違いは何を意味するのだろうか。

皇南大塚出土品については、報告書や2004年の奈良国立博物館『黄金の国、新羅 — 王陵の至宝 —』展でその一部が公開されたものの、全容がわかる資料や機会は少なかった。そうしたなか筆者は、皇南大塚出土品が一堂に会した国立慶州博物館『皇南大塚』展（2010–2011年）において、実物を間近に観察することができた。本節は、各形式の系譜や儀仗性、階層性を検討し、この鉄鉾群の意義を考えるものである。

方法としては、第2項で副槨出土鉄鉾を形式分類し、展示観察をふまえた鉄鉾群全体の内訳を検討する。これを受けて第3項では、第一に、各形式の系譜をたどる。第二に、新羅国内における南墳副槨出土鉄鉾の性格をさぐるため、同時期の百済や加耶、倭の様相と比較する。第三に、鉄鉾の製作主体を検討し、543本もの膨大な数からなる鉄鉾群の成立背景を考える。それに先立ち、まずは皇南大塚の概要をまとめよう。

第1項 新羅王陵，皇南大塚

慶州を西流する南川と北川は，盆地の西を北流する兄山江に流れこみ，兄山江は迎日湾で日本海に注ぐ。これらの河川が形成する慶州盆地は，南北7km，東西5kmのひろさをもち，まわりは山々が囲む。

4世紀中葉から6世紀中葉には，当該地域の南半部，すなわち皇南洞，皇吾洞，路東洞，路西洞，仁旺洞，校洞に多くの積石木槨墓¹⁾が造られた。そのなかでも，金冠をはじめとする金属製品やガラス製品などの豪華な副葬品が出土した皇南大塚や金冠塚，瑞鳳塚，天馬塚，金鈴塚は，王陵と考えられている。

このうち最大規模を誇る皇南大塚は，東西80m，南北114m，南墳の高さ21.9m，北墳の高さ22.6mの双円墳である〔図40〕。1973年から1975年にかけておこなわれた韓国文化財研究所による発掘調査の結果，最初に築造された南墳からは500本以上の鉄銚や30振以上的大刀，8組の馬具を中心に約2万5千点，追築された北墳からは金冠などの装飾品を中心に約3万5千点の副葬品が出土した。

また，南墳から男性の歯，北墳から「夫人帶」銘の腰佩が出土したため，それぞれ王陵と王妃陵と考えられている。南墳の被葬者については，奈勿麻立干（在位：356-402）説と，訥祗麻立干（在位：417-458）説があり，そのどちらかによって，南墳のみならず新羅王陵全体の年代観にも半世紀の差が生じる〔表8〕。近年では桃崎祐輔や諫早直人が南墳の馬具を5世紀中葉に位置づけ，被葬者=訥祗説を論じている〔桃崎2005b，諫早2008〕。筆者も，鉄銚は騎兵の主要武器であるという立場から，この意見にしたがう。

皇南大塚南墳副槨から出土した鉄銚のうち，鐔が付くものについては，その系譜が高句麗に追え，新羅に定着した後は新羅王権の秩序を示す器財となったことが指摘されている。あわせて，山形快り式鉄銚も高句

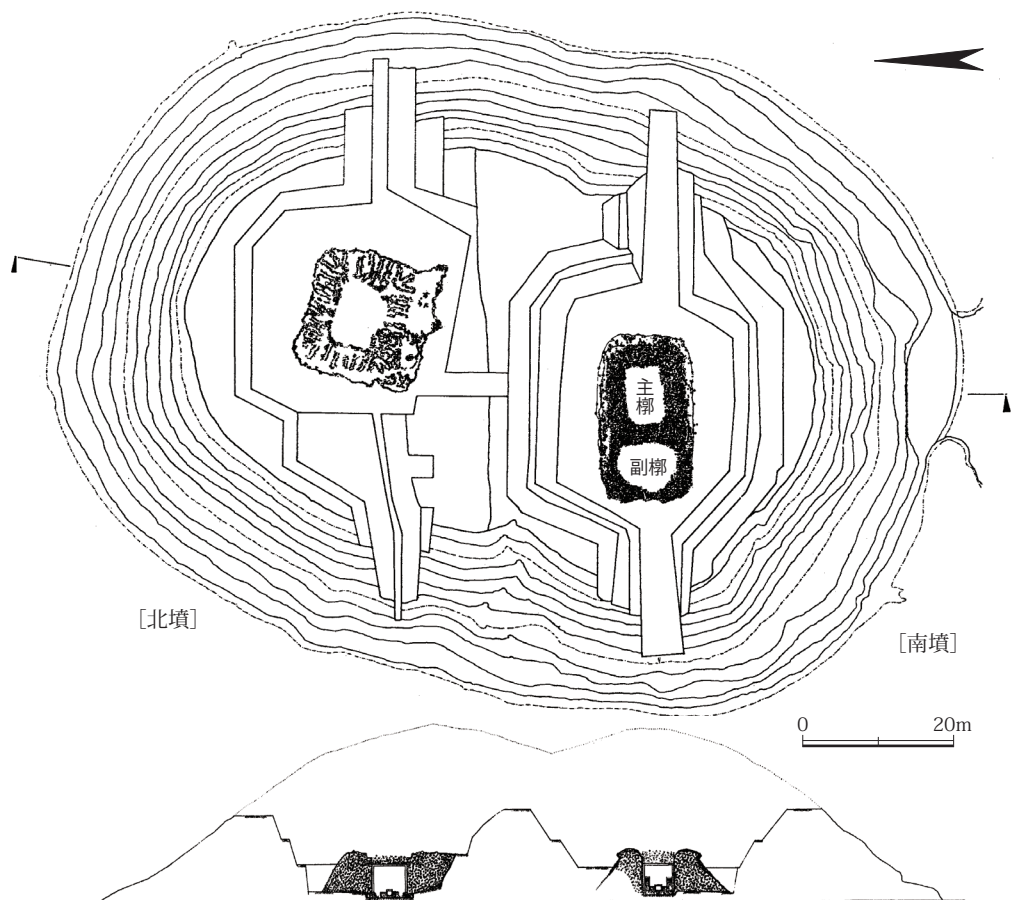


図40 皇南大塚南墳の墳丘測量図・横断面図

表8 新羅王陵の編年

西暦	古墳名	王名 (没年)
3 世紀		味鄒 (284)
4 世紀	九政洞古墳群	
	月城路古墳群	
5 世紀	皇南洞109号墳 3・4 槨 味鄒王陵第5地区1号墳 皇吾洞14号墳 皇南大塚南墳 [98号]、皇南洞110号墳 皇南大塚北墳、皇南洞82・83号墳 金尺里古墳群 金冠塚 [128号]、飾履塚 [126号]	奈勿 (402) 実聖 (417) 訥祗 (458) 慈悲 (479)
6 世紀	天馬塚 [155号]、金鈴塚 [127号]、瑞鳳塚 [129号] 〈cf.百濟・武寧王陵 (523年)〉 壺杆塚 [139号]、銀鈴塚 [138号]、路西里215番地古墳 普門里大婦塚、皇南洞151号墳 鶏林路14号墓 於宿知述干墓、順興壁面墳 東川洞瓦塚、東川洞古墳群	炤知 (500) 智証 (514) 法興 (540) 真興 (576) 真智 (579)
7 世紀	忠孝洞古墳群 西岳洞古墳群、双床塚 [137号]、馬塚 〈武烈王陵〉	真平 (632) 善徳 (647) 真徳 (654) 武烈 (661) 文武 (681) 神文 (692)
8 世紀	龍江洞古墳群 伝聖徳王陵 九政洞方形墳、金炭信墓 伝閔哀王陵 伝元聖王陵 (掛陵)	孝昭 (702) 聖徳 (737) 孝成 (742) 景德 (765) 惠恭 (780) 宣徳 (785) 元聖 (798)
9 世紀	〈興徳王陵〉	憲徳 (826) 興徳 (836) 信康 (838) 閔哀 (839)

1) 表は東1988を一部改変。古墳群は造営開始年代を示す。
2) [] は、日本統治時代につけられた通し番号。
3) 〈 〉 は、王陵比定に信憑性のあるもの。

麗から伝播したことが定説化している。しかし、南墳副槨から出土した各鉄鉾の分析から昇華した「鉄鉾群」の評価は、なお議論の余地がある。

第2項 皇南大塚南墳副槨出土鉄鉾の分類

副槨から出土した鉄鉾の大半は、袋部の断面が円形で、基部は山形快り式である。また、報告書では石突も鉄鉾と記されている点に注意しながら、以下、身部の断面や装飾の有無、全長規格にもとづいて、A～D類と石突に分類する [図41・45]。

A類 [図41- 1 ～ 5] 身部断面は、扁平な菱形あるいは薄い隅丸長方形である。闊部から左右一対の蕨手状の刃がのびる。鐔はつけない。完形品 (1) は約67cmの全長にたいして、袋部長はその約5分の1、袋端部径は約5cmである。出土数は6本で、鉄鉾総数の約1%である。

B類 [図41- 6 ～ 10] 身部断面は扁平な菱形である。多くは全長60～80cm前後、袋部長は全長の約3分の1である。身部幅は8～10cmで闊は深く、身部幅は袋部幅の2～3倍程である。袋端部径は4～5cmを前後する。基本的には周縁の3か所をU字状に決った円形鐔を袋部につけるが、つけないものもある。26本以上が出土した。

C類 [図41-11 ～ 17] 身部断面が三翼形のもの。全長50cm前後の大型、40cm前後の中型、25cm前後の小型がある。大型にはB類と同様の鐔をつけるが (11)、中型にはつけないものもある (13・14)。小型には鐔はつけない (15・16)。26本出土したが、全体の約5%にすぎない。

D類 [図41-18 ～ 30] 身部断面は菱形である。全長は20～25cm、袋端部径は2.5cmを前後する。基本的に鐔はつけないが、展示品には鐔付もわずかにあった。副槨から出土した全鉄鉾のうち、400本ちかく (70%前後) をD類が占める [金1994]。

研究史で挙げた徐始男・李賢珠の視点に照らせば、A類とB類、およびC類の大型品は儀杖用の鉾、D類は実用に適した鉾となる。ただし、C類の (16) とD類の (17) は銹着しており、副葬時のあつかいに差はない。
石突 [図41-31 ～ 37] 50本前後が展示された。全長は20～30cm前後、袋端部の径は2.5～5cm前後のものがあ、鉄鉾本体の形式を問わず組みあったようである。

第3項 皇南大塚南墳副槨出土の類例と系譜

A類 [図42] 全長70cmちかい鉄鉾は、同時期の百濟や加耶、倭には基本的に存在しない。

いっぽう、A類の特徴である蕨手状の飾りは、3～4世紀の洛東江東岸地域の蔚山下垵・中山里、慶州九政洞2号・九於里1号・隍城洞、東萊福泉洞60号などの鉄鉾に類例がある。これらには、九政洞2号墓例 (2) のように全長80cm台のものもあり、A類との親縁性はつよい。

このうち下垵46号と九政洞2号墓では、10本以上の鉄鉾を敷いて棺台とする。九於里1号墓でも被葬者の下に蕨手文鉄鉾を敷いていた。下垵18・24・45・46・65号では蕨手文鉄鉾と蕨手文有棘利器が出土したほ

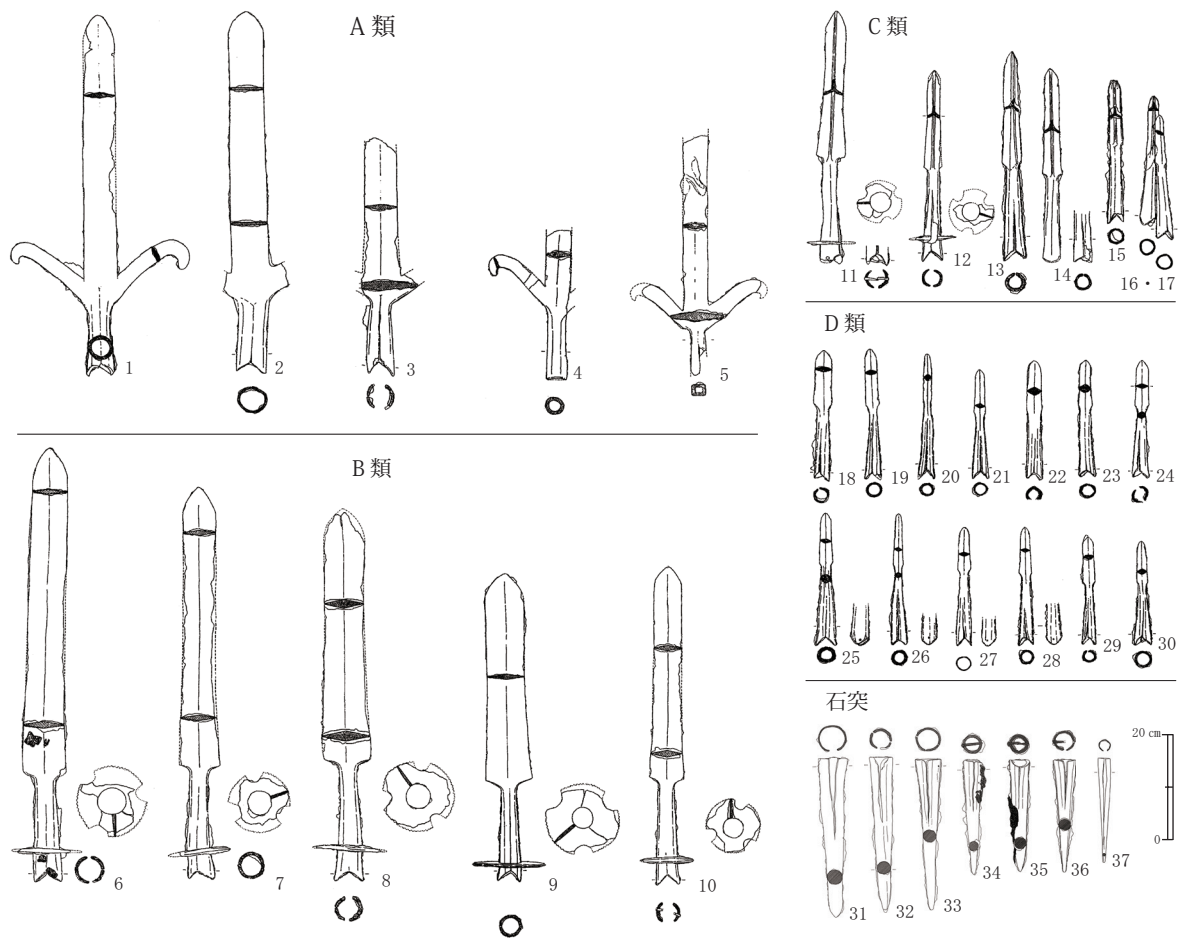


図41 皇南大塚南墳副塚出土鉄銚の分類

か、43号では蕨手文銚、44号では全長97.1cmの蕨手文鑿形利器（1）が出土しており、高慶秀はこれを儀器性のつよい鉄器の画期と評価する [高2002]。

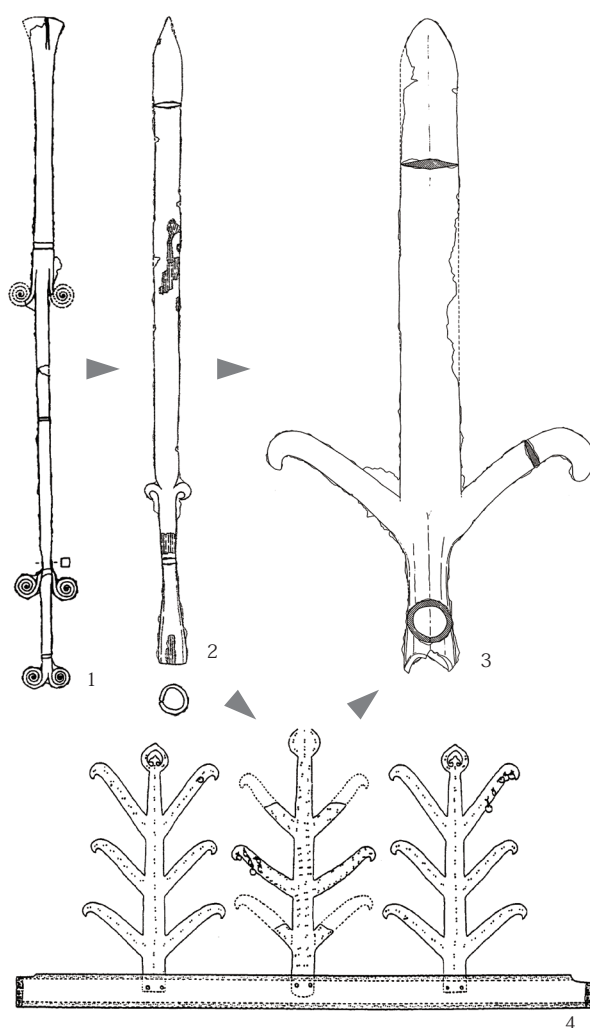
蕨手文は、時期が新しくなると渦文が簡略化した棘状の突起に変化する [鈴木一2002, 高2002, 李2012]。とくに、5世紀第2四半期の福泉洞11号墳から出土した有棘利器と、金銅製冠の立飾りの枝（4）は、A類の蕨手状飾りの直接の祖形といえる。この金銅製冠は、新羅王陵から出る出字形冠の祖形と考えられている [東1997]。

また、図41-2の身部断面は薄い隅丸長方形であり、本体も有棘利器のように鉄銚を加工して作った可能性がある。初期の有棘利器は、板状鉄斧形鉄銚に蕨手文を造りだしたものであり、武器や利器の用途をなすものではない。

以上をふまえてA類は、朝鮮半島東南部において有棘利器や板状形鉄銚、あるいは冠がもつ象徴的な意味を強調した儀器と理解する。

B類 末永雅雄は、鐔付鉄銚は倭に少なく朝鮮半島に多いと指摘した [末永1941]。大橋泰夫は、日本出土の鐔付鉄銚には、袋部に鐔を通して固定するものと、袋端部につけたものの二者があり、後者が時期の新しい古墳から出土すると述べた [大橋1986]。本論では、大橋分類の前者をa式、後者をb式と読み替える。

現在知られている中国大陆、朝鮮半島出土の鐔付鉄銚は、いずれもa式である。4世紀後半の集安禹山下古墳群出土品が最古の事例とみられ [耿1993, 王2004, 禹2008]、忠清南道天安龍院里9号墳、4世紀後半～5世紀初頭の慶尚北道慶州月城路カ10-2号・カ13号墳、義城塔里古墳、慶山漆谷仁洞1号墳、5世紀



1. 下埜 44号 2. 九政洞 2号 3. 皇南大塚南墳
4. 福泉洞 11号墳金銅製冠 *形態比較のため縮尺不同

図42 A類鉄鉾の系譜

後半の忠清南道瑞山富長里5号墳1号土坑墓，昌寧校洞89号墳，6世紀初頭の慶州天馬塚などに類例がある。

このうち禹山下古墳群や昌寧校洞古墳群は，各地域の最高支配者層の墓域と考えられている。そのなかでも鐔付鉄鉾が出土した古墳は，盟主級のものである。天安龍院里9号墳や富長里などでも出土しているものの基本的に百済圏には分布せず，5世紀代の新羅（現・慶州一帯）に分布の核がある。禹柄喆は，4世紀中葉から後半にかけての高句麗で盛行した鐔付鉄鉾が5世紀には新羅の上位墳墓に副葬された背景として，高句麗と新羅の従属関係を想定する〔禹2008〕。

倭の鐔付鉄鉾は，栃木県星の宮神社古墳，岡山県王墓山古墳，和歌山県箕島1号墳，兵庫県高羽古墳，奈良県岡峯古墳，京都府弁財1号墳，伝山梨県東八代郡豊富村（現・中央市）出土資料，佐賀県大日遺跡2区ST2001，大阪府七ノ坪古墳出土品が知られる。倭の鐔付鉄鉾出土古墳の時期は，大日遺跡2区ST2001の初葬が5世紀末にさかのぼるほかは，6世紀に位置づけられる。

鐔付鉄鉾の編年について，高田貫太による見通しを整理する〔高田2002〕。4世紀代の禹山下古墳群例や天安龍院里9号墳例は袋部の関際，4世紀後半～5世紀初頭の月城路カ13号墳例は袋部のほぼ中央，皇南大塚南墳例をふくむ5世紀中葉

から後半にかけての事例は袋部の中央から下，そして6世紀の倭の古墳出土品は袋端部に鐔を装着する。つまり，鐔が身部に寄るものが古相，袋端部に寄るものが新相を示す。

禹山下3296号墓例は狭鋒で袋部が長く，突撃時の衝撃を無駄なく伝えられる実戦的な形態である。しかし，新羅に伝播したのちは，時期が下るにつれて鐔が袋端部に近づき，鉄鉾本体の大きさに比して鐔が大型化する。5世紀中葉の皇南大塚南墳段階に至っては，鉄鉾本体の長大化や身部の扁平化が著しく，鐔の周縁3か所をU字状に抉るものが現れる。

月城路カ-13号墳例の本体は，禹山下古墳群や天安龍院里9号墳例と似る。月城路カ-13号墳の時期は諸説あるが，共伴した銅地金銅板張楯円形鏡板付轡は中国東北部や高句麗に系譜が追える点は意見が一致しており，鐔付鉄鉾と組みあわせた騎兵装備を受容したと考える。

こうした変化には，刺突武器としての実戦的な機能からの乖離をうかがうことができる。すなわち，鐔は本来，攻撃対象に刺突した鉄鉾が深く刺さりすぎることを防ぎ，次の攻撃姿勢に速やかに移るための実戦的な機能をもっていたが，4・5世紀に従属化した新羅を受容されると，装飾性が重視されて儀器化したと評価できる。5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる昌寧校洞89号墳例は鐔と銀装飾の両方をともない，このような想定の上で理解しうる。

日本列島で出土したa式の多くは、中期末から後期中葉に位置づけられる。大日遺跡2区ST2001は、5世紀末から6世紀初頭にかけての築造・初葬、7世紀初頭までの追葬が確認されている。鉄銚は、袋端部を山形に抉り、鐔は周縁の3か所をU字状に抉って袋部の中央よりも下に装着するなど、列島出土品のなかで、5世紀中葉から後半の新羅王陵出土品の様相を最もよく留めるものである。5世紀後半以前の倭の古墳からは出土していないことから列島最古級の事例に位置づけられる。新羅系渡来人そのものか、西北九州の勢力が新羅との独自の交渉をつうじて入手した舶載品とみてよいだろう。

b式の多くは後期後半・末に位置づけられる。星の宮神社古墳例は、歪な隅丸方形の鐔を袋部端につけるもので、鐔付鉄銚最終段階の倭製品だろう。

後期後半・末の塚田2号墳、稲荷塚1号墳、王墓山古墳（岡山）、箕島1号墳例は、三角穂式鉄銚に鐔をつけている。これらの意義については後述するが、鐔をつけているから新羅製（系）とみなすよりはむしろ、倭製の三角穂式鉄銚を軸としながらも鐔の要素が倭に導入されかけた状況を読みとりたい。ただし、倭の鐔付鉄銚は少数であることや、大型墳からの出土が乏しいことから、倭王権が主導する組織的な受容や安定した模倣生産、ましてやそれらを前提とした威信財システムで説明することはむずかしい。倭の鐔付鉄銚の多くは奢侈品であり、地方の有力者が独自に入手した珍品の情報が、倭王権中枢部に伝播変容したと考える。

高田貫太も「三角穂式鉄銚に見られる鐔装飾は、新羅地域出土の鐔付鉄銚とは、鐔の形態や取付け位置など異なる部分も多く、そのまま新羅地域との直接的な関係につながる属性とは考え難い。ただ、袋部に何らかの装飾を施すという造作自体を、渡来系の要素と捉えることは妥当」と考えている〔高田2001:p.338〕。

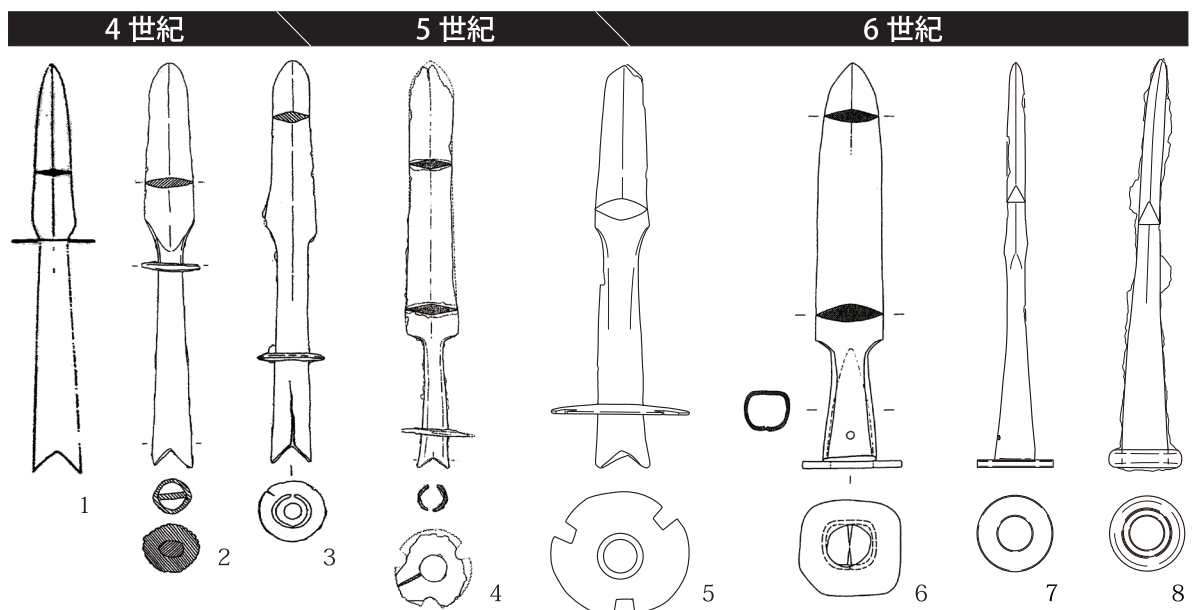
以上をふまえ、鐔付鉄銚の性格の変遷を次のように整理する³⁾。

第1段階（4世紀～5世紀前半頃） 高句麗周辺で創出され、鐔が実践的な機能をもつ

第2段階（5世紀中葉～後半頃） 高句麗に従属した新羅に導入され、威信財化する

第3a段階（5世紀末～6世紀中葉） 倭に散発的に輸入され少数の模倣生産品（奢侈品）が作られる

第3b段階（6世紀後半～7世紀初頭） 倭製品の三角穂式鉄銚に一部導入される



海外製

検討の余地あり

倭製品

1 集安・禹山下3296号 2 天安・龍院里9号 3 慶州・月城路カ13号 4 慶州・皇南大塚南墳
5 佐賀・大日遺跡2区ST2001 6 栃木・星の宮神社 7 神奈川・塚田2号 8 福島・中田装飾横穴 *形態比較のため縮尺不同

図43 鐔付鉄銚の編年

C類 [図44] 4世紀後半の集安禹山3296号墓から全長約46cmの大型品が出土しているが、鐔はつけない。

そのほかのC類の直接の類例はないものの、身部断面が三翼形の武器として、漢長安城武庫遺跡、東勝浦洞溝匈奴墓M4、吉林省榆樹老河深、額爾古納右旗拉布達林LBDLM:3(後漢)、三燕朝陽三合成、喇嘛洞IM209墓、北燕馮素弗墓(415年)、高句麗集安太王陵(412年)、禹山41号・2110号墓、山城下159号墳、新羅慶州皇吾洞14号墳(5世紀前半～中頃)、皇南洞110号墳(5世紀中頃)、梁山夫婦塚(6世紀前半)、伝昌寧校洞4号墳などの鉄鏃がある。

老河深遺跡中層の墳墓は、前漢末から後漢初頭にかけての鮮卑墓と報告されたが、この地域は鮮卑と扶余の領域の境でもあり、扶余族の遺跡の可能性もある。

喇嘛洞墓地群は420基以上からなり、三燕最大規模を誇る。とりわけ墓坑の規模や副葬品組成で優位なIM5墓からは、最古級の三累環頭大刀や[豊島2009]、縦長板鋌留冑[橋本達2012]が出土しており、極東の武装の系譜を考えるうえで重要である。

太王陵(禹山541号墓)は広開土王碑より南西200m、禹山南麓の丘陵上にある大型積石塚である。南側裾のSG01調査区から「辛卯年 好大王 口造 鈴 九十六」銘の銅鈴や金銅装馬具が出土しており、391年に即位、412年に没した広開土王(好太王)の墓と考えられている。

このように、身部断面が三翼形の武器の系譜の一端も中国東北部・高句麗の有力な墳墓に求められ、百済圏を回避した新羅への伝播を想定できる。

D類 山形抉り式の鉄鏃は喇嘛洞IM3号墓など中国東北部に系譜が連なり[豊島2009]、日韓で多く出土している。ただ、南墳副櫛の一群は規格性がたかく、各地からの集積品と評価する根拠はない。すくなくとも、南墳副櫛のD類は特定工房による一元的な生産品と考える。

第4項 階層性

南墳出土鉄鏃の正確な内訳は把握していないが、A、B、C、D類の順で裝飾性が乏しくなるとともに小型化し、数も多くなる傾向にある。

このうちA類とC類は、皇南大塚南墳例のみが知られ、石突と組みあった可能性がある。B類は新羅の上位階層で共有されたことが指摘されている。いっぽう、D類の類例は日中韓で出土しており、その多くには石突が組みあわない。このような状

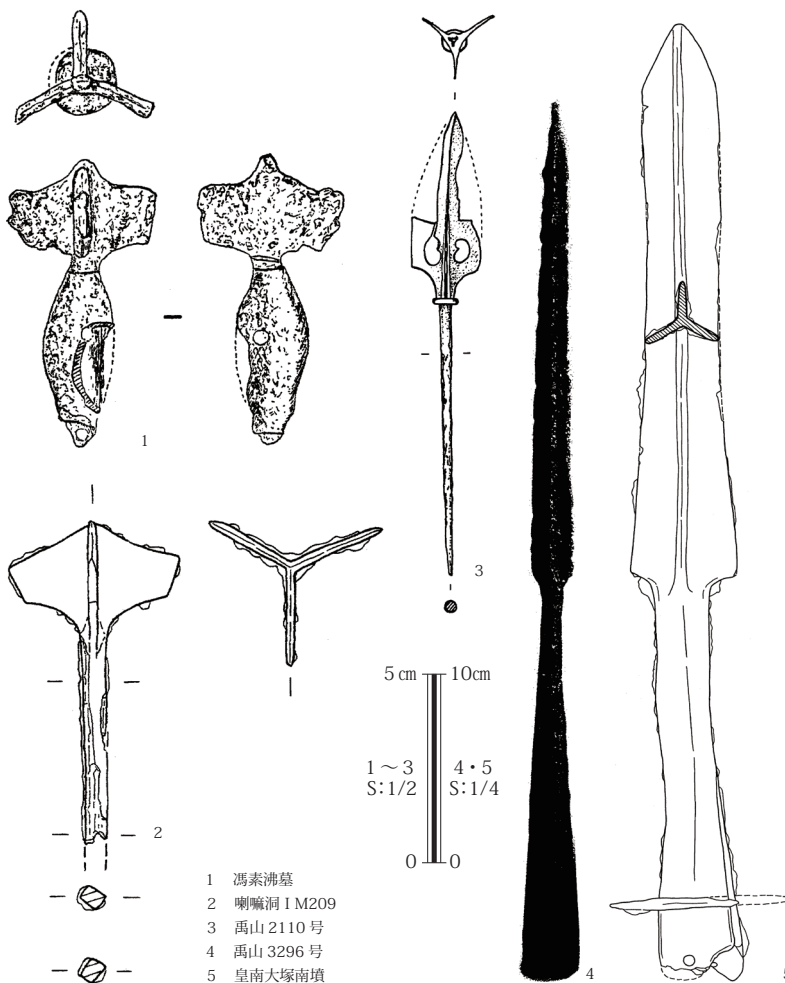


図44 身部断面三翼形の武器

況は、南墳、ひいては新羅全体の鉄銚の階層性を暗示する。

これにたいして百済や加耶，5世紀の倭では鎬式を主流とし，皇南大塚南墳のように莫大な量の鉄銚を一基の古墳に副葬することはない。甲冑をまとい，馬に跨った首長と従者数人の武器とみてよいだろう。

門田誠一は，高句麗古墳の出行図に描かれた重装騎兵は，墓主を侍衛しつつ官秩にのっとった威儀を保持する存在と評価するいっぽう，加耶では首長が鎧馬に乗ると述べる〔門田2006〕。

鈴木一有は，新鳳洞古墳群の鉄銚は長大化せず装飾性も乏しい実用品と評価する〔鈴木一2012ab〕。これ

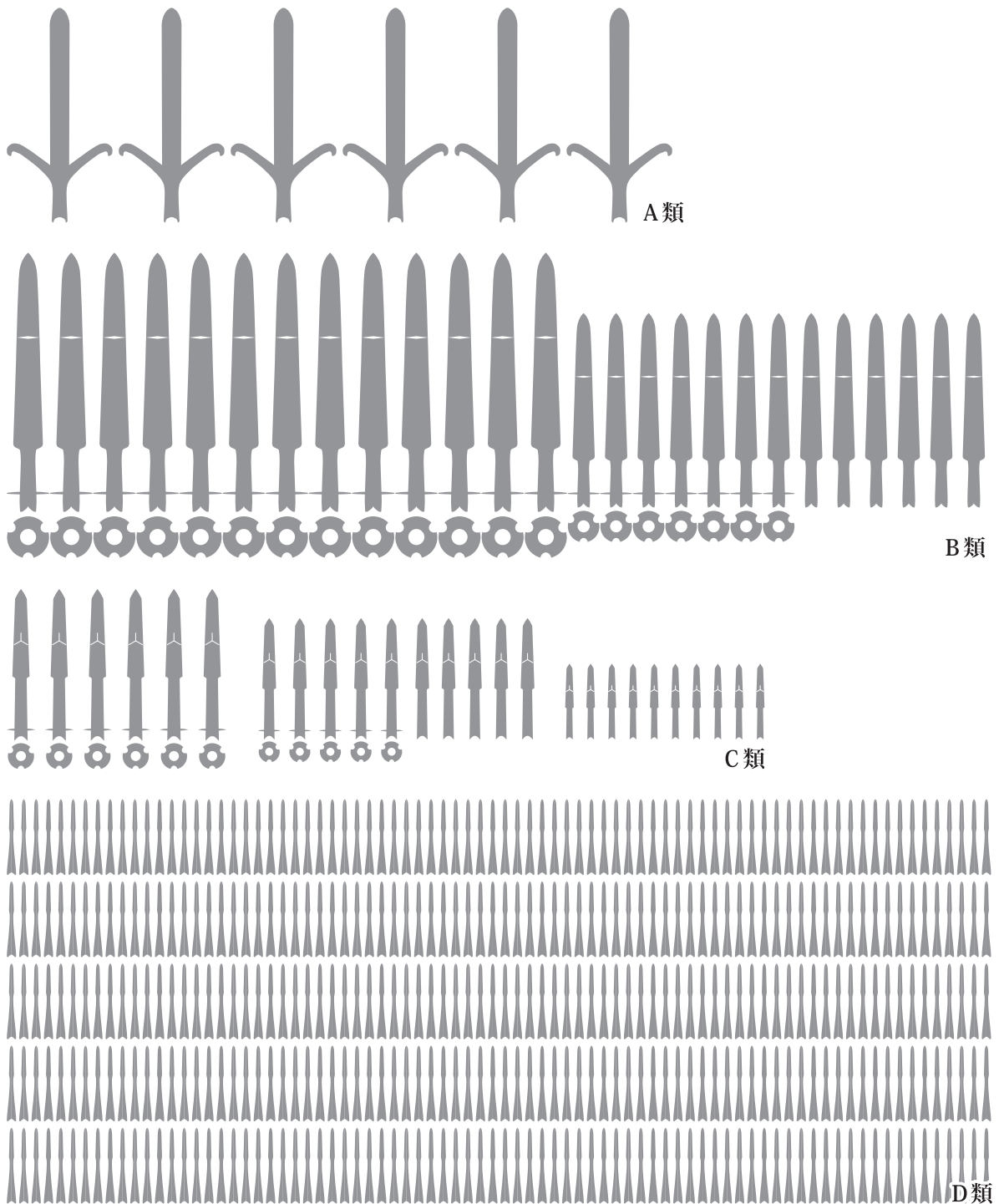


図45 皇南大塚南墳副葬出土鉄銚の組成概念図

は、緊迫した対高句麗政策の最前線に臨んだ集団の武器であることを示すが、このような武器の百済・加耶・倭での共有は、これらの地域が高句麗の南下政策をにらんだ同盟関係にあったことを傍証する。

以上の指摘は、王権ごとに鉄鉞本体の形態と軍構成に相関関係があったことを示す。そうしたなか倭では、長身鎬式鉄鉞や刀身式鉄鉞に帶金式甲冑や特定形式の馬具を組みあわせた武装を創出し、各地の有力者で共有したようである。いっぽう、5, 6世紀の新羅では、三累・三葉環頭大刀や冠、帶金具、金銅装透彫玉虫装の心葉形三葉文杏葉や扁円魚尾形杏葉などを組みあわせて、国内の身分や地位を示した〔穴沢・馬目1987, 李2002, 諫早2008〕。装飾大刀や馬具の身分表示にかんする研究〔白石1993, 内山2012〕もふまえ、各王権における上位の武装には、その王権独自の形式を採用したと考えてよい。したがって、A類を上位、D類を下位とする南墳出土鉄鉞の階層性はじゅうぶん頷けるだろう。

ただし、C類は皇南大塚南墳からしか出土していないものの、C類の小型品とD類の副葬時のあつかいに大差はない。B類とC類の出土数はほぼ同じであることから、B類とC類の階層差は厳密なものではなく、場面による役割の違いを想定する。

第5項 鉄鉞の象徴性

では、これらの鉄鉞を装備したのはどのような人物だったのだろうか。筆者は、王自身がこれらの鉄鉞を装備したとは考えない。500本ちかい鉄鉞というにおよばず、6本のA類鉄鉞や8組の馬具セットも個人で装備できる範疇をこえている。これらは被葬者の武器というよりもむしろ、従者の武器、あるいは王権の軍事力を反映する。そもそも副櫛に副葬されたこと自体が、王への属人性の低さを示している。

ここで、黄海南道安岳3号墳の出行図を想起する。安岳3号墳は、西側室壁面の墨書銘より、慕容部の政争に敗れて前燕から亡命してきた冬寿（288頃？-357）の墓と考えられている。壁面に描かれた出行図の牛車に乗った主人公の左右両端には、4騎ずつ計8騎の長柄武器を構えた鎧馬を配置し、前方に長柄武器や鉞をもった歩兵、後方に騎兵がならぶ〔図46上段〕。

たしかに、安岳3号墳は皇南大塚よりも時期がさかのぼるし、出行図が実際の軍構成を正確に反映している証拠はない。また、皇南大塚では馬甲冑が出土していない。しかし、南墳副櫛から出土した6本のA類鉄鉞と、金銅装や玉虫翅装をふくむ8組の馬具が示唆するものはおおきい。中原高句麗碑²⁾にみえる、中原に南下した高句麗軍が新羅の王に衣冠を下賜して新羅人300人を組織したという記事や、『三国史記』『新羅本記』訥祗麻立干22年（438）条にみえる「教民牛車之法」を思いおこせば、王を囲む騎兵隊がこれら新羅風の鉞や馬具で武装したと考えるのは、あながち荒唐無稽とはいえないだろう。

また、新羅の軍団長の職名には「軍師幢主」「歩騎幢主」「大匠尺幢主」などがみえる。幢^{とう}とは、高句麗の武冠制における軍団の先頭に掲げる旗、つまり軍団の象徴である〔田中俊2001〕。実際、高句麗壁画の騎兵がもつ旗をつけた鉞と鐔付鉄鉞のかかわりが指摘されるように〔徐・李1997〕、葉水里壁画古墳出行図の騎兵がもつ鉞には旗がたなびく〔図46下段〕。

中国五胡十六国時代の佚文資料を収集・整理した三崎良章は、冬寿のような前燕の亡命者は、高句麗への半独立的な立場を保ちつつ集団で移動したと考えるいっぽう、4世紀中葉における前燕の東方進出や崩壊、高句麗と後燕の攻防などが人々の移動をうながし、中国の諸制度や文化が半島にもたらされたと述べる〔三崎2002〕。

このように、中国東北部の武器や馬具をたずさえて高句麗に入ってきた者がいると考えれば、高句麗南下を経て、皇南大塚南墳に三燕文物の面影を残すものを副葬した脈絡を理解できよう。4世紀以来、高句麗で発達した武装や戦闘形態、戦略が、広開土王の南下という戦争をつうじて新羅や加耶に伝わったといわれるように〔東1997〕、B類やC類もまた、文物の形態のみならず、武装や軍構成の体系を高句麗から受け入れ、

従属の証として機能したことを示している。

しかし、独立王権としての内外的な威儀を示すためには、やはり新羅独自の武装を上位とする階層編成が必要だったことは想像に難くない。皇南大塚南墳副槨の鉄鉾群は、大国・高句麗への従属と、そこからの脱却をはかる王の二面性を物語っている。

第6項 鉄鉾の製作主体はどこか？

慶州は朝鮮半島一の鉄素材集中地域であり、皇南大塚南墳（1300枚以上）や金鈴塚（約400枚）、天馬塚（37枚）など、30基以上の墳墓で鉄鉾が出土している。南墳や金鈴塚の鉄鉾には、全長50cm前後の大型品をふくんでおり、A類の素材として利用した可能性がある〔図47〕。また南墳では、大量の鑄造鉄斧や棒状鉄素材も出土しており、質、量ともに新羅王陵の白眉である。

さらに、皇南大塚北墳では全長30cm以上の大型の鉄鉾が出土している。李東冠は、大型の鉄鉾は一人ではなく複人数による鍛冶にともなう道具であると述べ、国家が管理・統制する共同体的な専門集団の存在を想定する〔李2012〕。

皇南大塚出土鉄製品のうち、その製作に大型鉄鉾が必要なのは、鉄鉾や大刀、そして鉄鉾だろう。5世

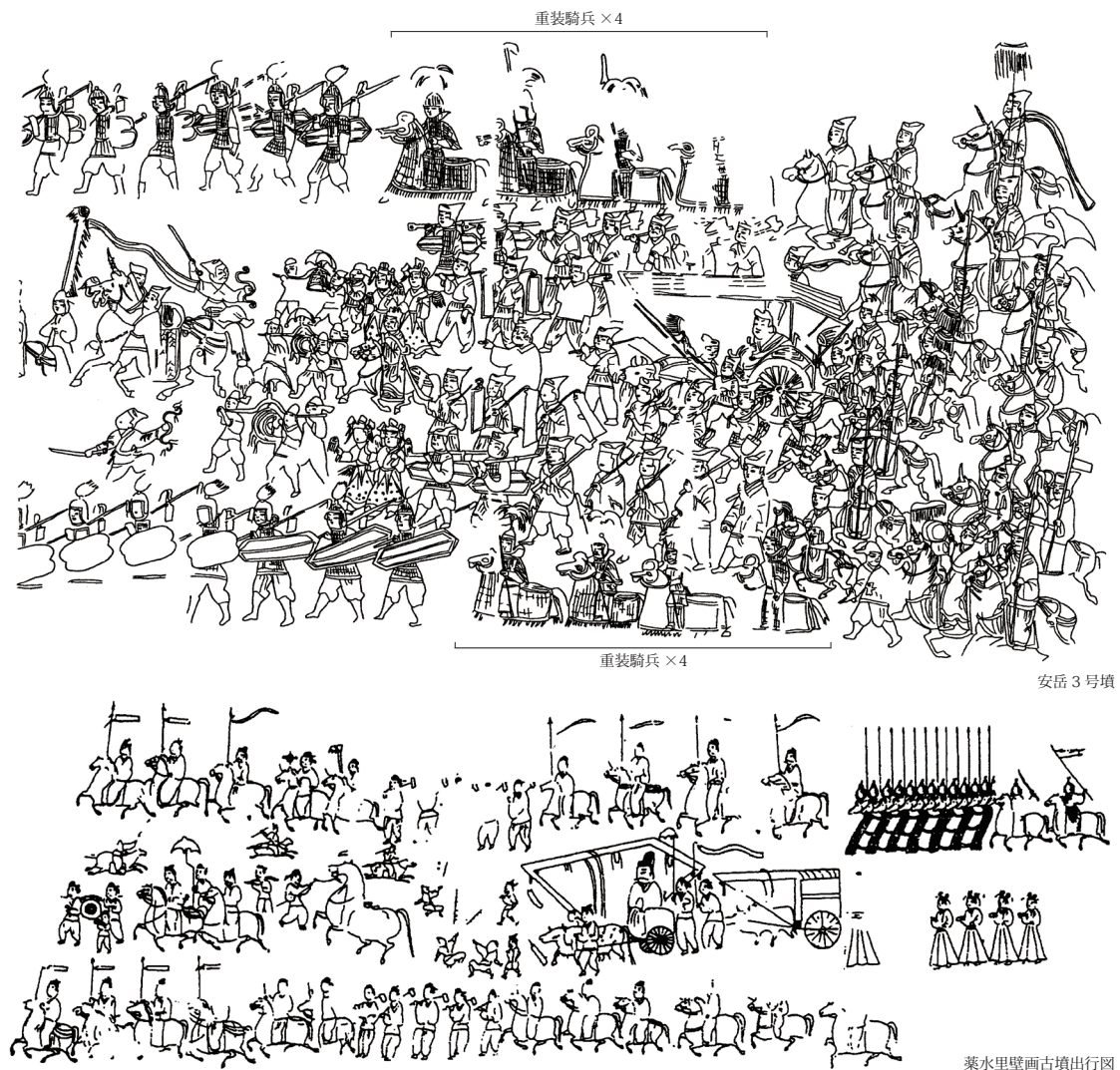


図46 高句麗古墳壁画の出行図

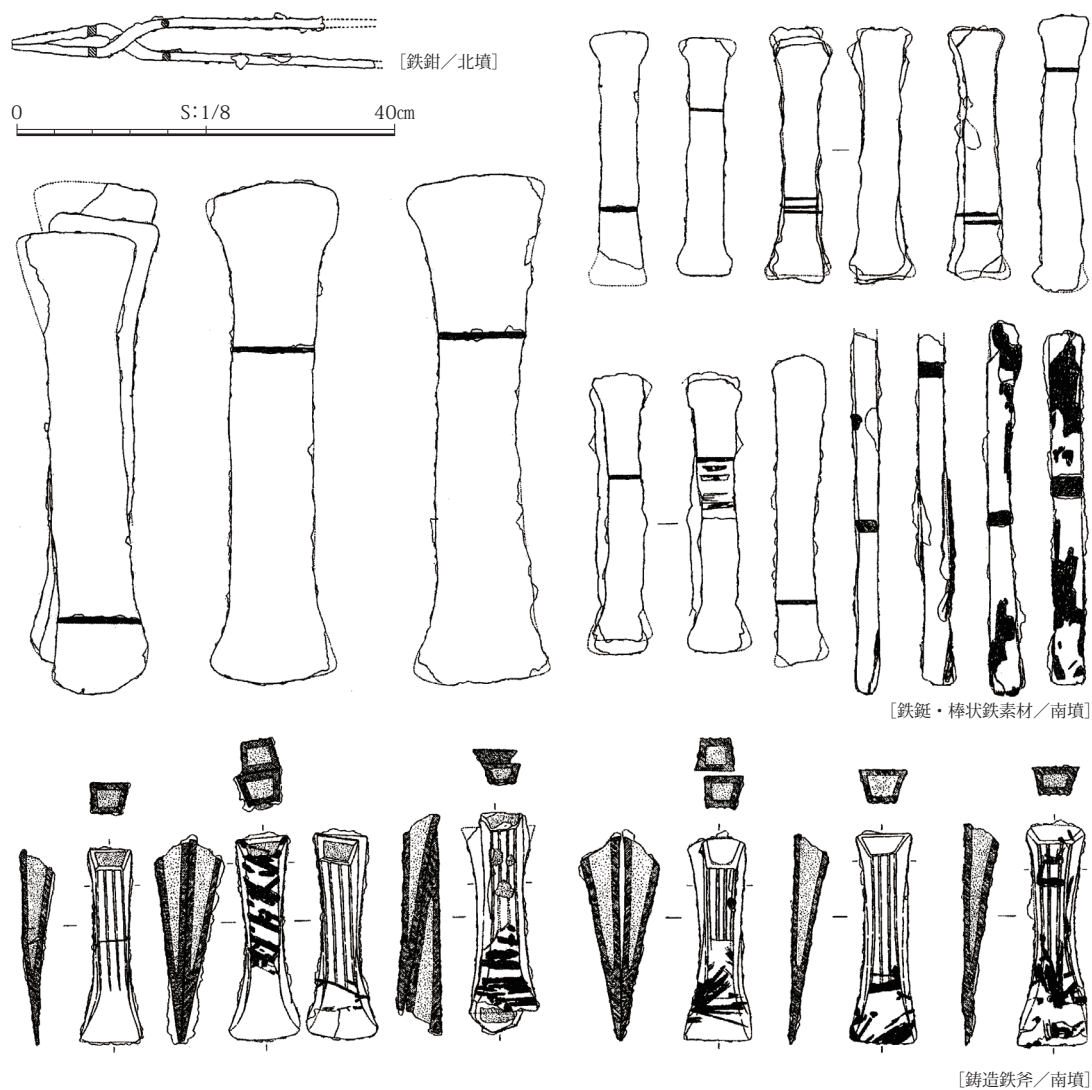


図47 皇南大塚南墳の鍛冶関連遺物

紀の朝鮮半島における鍛冶具副葬墳墓の大半が慶尚北道南部と慶尚南道に集中する状況とあわせ〔濱崎2008〕、新羅王権が主導する鉄器生産体制がうかがえる。

以上、半島南部に起源するA類が、中国東北部起源のB・C類よりも階層的に上位であること、鉄鉾が上位兵士である騎兵のおもな武器であること、新羅王権が大規模な鉄器生産体制を掌握していたことを受け、南墳副櫛から出土した鉄鉾の製作主体は新羅王権そのものとする。

第7項 小 結

皇南大塚南墳副櫛から出土した鉄鉾をA～D類に分け、それぞれの系譜を検討した。

このうちA類は、朝鮮半島東南部に起源する有棘利器や蕨手文鉄鉾を発展させた新羅王権中枢部の象徴であるいっぽう、中国東北部三燕・高句麗に起源するB・C類の保有は、4世紀中葉以降における高句麗への従属をあらわした。5世紀中葉以降に再生産・再分配され新羅の王陵級の墳墓に副葬された罌付鉄鉾は、新羅王権主導による威信財システムとして機能したと考える。たほう、400点ちかく出土した小型品のD類は装飾性も乏しく、下級兵士（おそらくは歩兵）の一般的な武器である。そして、このような鉄鉾群の保有は、単なるモノの移動のみならず、戦闘教義そのものを高句麗から受容した結果を反映している。

しかし、遅くとも5世紀中葉の新羅王権中枢部では人馬ともに甲冑を脱ぎ、半島東南部の器財の系譜をひくA類鉄鉾や、金銅装透彫玉虫装馬具、金冠を上位とする独自の武装を創出することで貴族化した。軍事大国・高句麗へ寄りつつも、王権の独立と発展をはかる属国の王の姿が浮かびあがってくる。

第5節 倭の特殊鉄鉾の系譜

第1項 中期型鉄鉾と後期型鉄鉾の認識

古墳時代中期の倭の鉄鉾は、並行する時期の東アジア各国と比べて多様性が豊かである。一見して通有の鉄鉾と峻別できる特徴的な鉄鉾として、長身鎬式鉄鉾、刀身式鉄鉾、支刃付鉄鉾（戟）、槍身鉾、屈曲形目釘鉄鉾、蛇行鉾がある〔図48〕。その多くが中期末までに姿を消すため、これらを含めて「中期型鉄鉾」と呼ぶ。これらは実用武器としても機能するが、その特殊かつ意図的な形態には、被葬者の階層や出自、職掌などを反映している可能性がある。中期型鉄鉾は、群馬県広瀬鶴巻塚古墳の刀身式戟や石川県二子塚狐山古墳の槍身式蛇行鉾のように、互いに属性を共有しあう事例があるほか、大阪府高井田山古墳では長身鎬式と刀身式が共伴する。将来的には、中期型鉄鉾の総合的な生産・配布論に踏みこむ必要があるが、次項では特徴的な身部形態の長身鎬式と刀身式について検討する。

たほう後期には、身部の断面が正三角形にちかい三角穂式鉄鉾が出現し、列島各地の有力墳を中心に展開する。中期型鉄鉾にたいして「後期型鉄鉾」と呼ぶ。

第2項 中期型鉄鉾

1. 長身鎬式鉄鉾

全長が40cmを前後し、身部断面は正方形にちかい菱形で、袋部の合せ目は丁寧に閉じ、関は不明瞭で袋端部から鉾にかけて直線的に伸びる、鋭いプロポーションの一群である。山形抉り式と直基式の両方があるため、袋端部の造作に規範はない。また、明確な全長規格もうかがえない。規格生産品というより、長身化への志向を認識するほうが妥当だろう。

古墳に副葬される時期はほぼ中期後半から末にかぎられる。朝鮮半島でも、陝川玉田M3号墳から出土した10本の鉄鉾のうち1本が長身鎬式だが、倭の古墳よりも相対的に時期が新しいため、長身鎬式鉄鉾の系譜を彼の地に求めることはむずかしい。ただ、マロ塚古墳例は袋部に錫装飾をとめない、往時には銀装と同様の見栄えを呈していたことが判明している〔鈴木一2012c〕。考古学的には装飾の材質の違いを指摘できるが、当時の人々はどのような見かけであるかを重視したはずであり、5世紀後半の倭と大加耶あるいは百済との双方向的な交流を物語る武器として評価できるだろう。

長身鎬式鉄鉾は短甲や馬具をとまなう事例が多い。石突と組みあうばあいは、冑もともなう傾向にあり、武装の充実度にもとづいたゆるやかな階層構造がうかがえる。京都府宇治二子山南墳と岡山県正崎2号墳、鳥取県倭文6号墳では、f字形鏡板付轡が出土している。前二者は鉄製、倭文6号墳例は鉄地金銅装という違いはあるが、倭文6号墳では鉄鉾3本（+石突2本）のほか、全長100cm以上の倭装大刀、独立片逆刺長頸鏃、帶金式甲冑、小札草摺、金銅装f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の馬具セットなど、中期後葉から末にかけての地方首長のなかでは屈指の武装を採用する。甲冑のセットや特定形式の馬具の組みあわせが示す軍事階層編成と、鉄鉾の形態差に緩やかな相関関係がうかがえる。

2. 刀身式鉄鉾

身部断面が鉄刀のように二等辺三角形をなす刀身式鉄鉾については、はやくも高橋健自、末永雅雄、後藤

守一らがその存在を指摘している〔高橋1912, 後藤1928, 末永1941〕。高田貫太は、韓国全羅北道竹幕洞祭祀遺跡や、百済系の片袖式穹窿状天井横穴式石室をもつ大阪府高井田山古墳から出土したことをもって、百済系の鉄鉾と認識する〔高田1998〕。韓国では、金吉植による編年のⅤ期（5世紀後葉）に位置づけられている〔金吉植1994〕。

しかし実際には、韓国の事例は竹幕洞祭祀遺跡例と咸陽白川里1号墳例が知られる程度であるのにたいして、日本では群馬県広瀬鶴巻塚古墳、千葉県金塚古墳、静岡県松林山古墳、大阪府高井田山古墳、兵庫県奥山大塚古墳、和歌山県椒古墳、香川県津頭西古墳、福岡県小正西古墳1号石室例があり、現状における出土遺跡数では日本のほうが多い。

また、金塚古墳、松林山古墳、高井田山古墳、奥山大塚古墳、津頭西古墳では、倭製の帯金式甲冑をともなう。小正西古墳1号石室からは、宇治二子山南墳と同じく鉄製f字形鏡板付轡が出土しており、武装にみる階層や職掌が長身鎬式鉄鉾副葬古墳と類似する可能性を示す。

ただし、長身鎬式鉄鉾や刀身式鉄鉾が出土した古墳のうち、セスドノ古墳では大邱市達城55号墳例に類似する竪穴系横口式石室から新羅系の垂飾付耳飾や扁円魚尾形杏葉、凸状造出佩用装置〔第6章〕、馬韓系の陶質両耳付壺、宇治二子山南墳や正崎2号墳、津頭西古墳、小田茶臼塚古墳、下北方5号地下式横穴では中国東北部前燕（337-370）に系譜をもつ環鈴が出土している。また、高井田山古墳の百済系初期横穴式石室からは神人龍虎画像鏡や武寧王陵例と対比される火熨斗、奥山大塚古墳では夔鳳鏡、椒古墳では襖襦式小札甲や蒙古鉢形冑が出土している。小正西古墳1号石室の木心鉄板張輪鏝も、昌寧校洞2号墳や玉田28号墳など新羅・加耶に類例があるが、列島では唯一の事例である。

先述のように長身鎬式鉄鉾は倭が創出したと理解するが、現状では刀身式鉄鉾の故地の特定はむずかしい。帯金式甲冑を中心とする倭系武装に身を包みながら、対外交渉も担った有力者像を想定するに留める。

3. 倭における鉄鉾のありかた

古墳時代中期の倭では、長身鎬式鉄鉾や刀身式鉄鉾に帯金式甲冑や加耶系の馬具を組みあわせた武装を創出し、各地の有力者が身にまとった。鉾に甲冑、馬具という基本的な組みあわせは共通させながらも、鉄鉾に形式差をあたえることによって、被葬者の出自や職掌、得意とする外交先などを示した可能性もある。椒古墳において大陸系の戟と甲冑がともなうことは、そのような想定を支持するものであろう。

また、上に挙げた古墳のうち、伝岡崎出土品やセスドノ古墳、下北方5号地下式横穴では、1, 2本の長大な鉄鉾に2～3本の短い鎬式鉄鉾をともなう組みあわせがみられる。このような鉾の保有類型は、中期中葉の大阪府百舌鳥古墳群の城ノ山古墳を初現として中期後半古段階を中心にひろがり、新段階の熊本県江田船山古墳や中期末の鳥取県倭文6号墳などを最新の事例に位置づけることができる。さらにいえば、江田船山古墳では「獲□□□□」銘銀象嵌大刀が出土していることから、雄略朝の官僚機構に組みこまれた人物の武装であることもわかる。倭王権中枢部を規範としながら、中期中葉から末にかけての上位階層で共有された鉄鉾の保有形態とみなせるだろう。

福岡県北東部、周防灘沿岸にひろがる京都平野では、稲童8号墳（中期後半新段階）と21号墳（中期中葉～後半）で1本の長い鉄鉾に2本の短い鉄鉾がともなう。8号墳では鉄剣と組みあうとみられる半球状金銅製品、横矧板鉾留短甲・衝角付冑、21号墳でも大刀に組みあう最古段階の金銅製三輪玉、三角板革綴短甲、横矧板鉾留短甲、金銅装眉庇付冑が出土しており、倭装の刀剣、帯金式甲冑と組みあわせた上級の倭系武装を復元できる。京都平野は、古墳時代をつうじて継続的に甲冑が配布された重要地域であるとともに、上述の鉄鉾の保有形態が同一の古墳群で複数確認される稀有な地域でもある。おそらくは瀬戸内ルートを介して、当該地域が数世代にわたって倭王権とのつよい政治的関係を結んでいたことをうかがわせる。

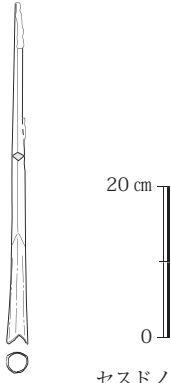


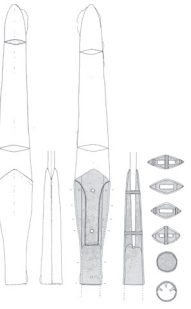
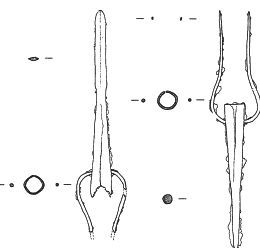
<p>長身鎬式鉄鉾</p>	 <p>セスドノ</p>	<p>特徴 身部の幅と厚さがほぼ同じくらいに狭まった鎬式鉄鉾のうち、全長が40cm前後にまで長身化するもの。無関で袋端部から鋒までまっすぐ伸びる、シャープなプロポーション。</p> <p>類例 長野県溝口の塚古墳、愛知県伝岡崎出土品、石川県二子塚孤山古墳、大阪府黒姫山古墳・高井田山古墳、京都府宇治二子山南墳、鳥取県倭文6号墳、岡山県正崎2号墳、広島県曲2号墳・三王原古墳、福岡県セスドノ古墳・小田茶臼塚古墳、佐賀県中原5号墳、熊本県マロ塚古墳、宮崎県下北方5号地下式横穴、陝川玉田 M10 号墳など</p>
<p>刀身式鉄鉾</p>	 <p>高井田山</p>	<p>特徴 身部の断面が二等辺三角形のもの</p> <p>類例 群馬県広瀬鶴巻塚古墳、栃木県明神山10号墳、静岡県松林山古墳、兵庫県奥山大塚古墳、香川県津頭西古墳、和歌山県椒古墳、大阪府高井田山古墳、千葉県金塚古墳、福岡県小正西古墳1号石室、福岡県勝浦水押SO-01古墳、扶安竹幕洞祭祀遺跡、咸陽白川里1号墳など</p>
<p>支刃付鉄鉾(戟)</p>	 <p>広瀬鶴巻塚</p>	<p>特徴 通有の身部とは別の刃が、関部付近から派生するもの</p> <p>類例 茨城県三味塚古墳、群馬県広瀬鶴巻塚古墳、千葉県禅昌寺山古墳、大阪府城ノ山古墳、奈良県市尾今田1号墳、奈良県上井足、和歌山県椒古墳、福岡県牟田尻桜京 A06号墳など</p> <p>文献 太田 2001</p>
<p>槍身鉾</p>	 <p>八重原1号</p>	<p>特徴 ヤリの茎に鉄製の袋部を巻きつけることで、あたかも鉾のような見栄えを呈するもの</p> <p>類例 埼玉県東耕地3号墳、千葉県谷重原1号墳、静岡県寺山14号墳、石川県二子塚孤山古墳、和歌山県陵山古墳、大阪府御獅子塚古墳、奈良県峰ノ阪古墳・後出3号墳、京都府宇治二子山南墳、香川県川上古墳、福岡県奴山10号墳、佐賀県船石2号墳、宮崎県島内65号地下式横穴、忠清南道天安道林里3号墳など</p> <p>文献 大谷 2004</p>
<p>屈曲形目釘鉄鉾</p>	 <p>倉科2号</p>	<p>特徴 貫通した目釘が袋部外側に飛び出し、柄側に曲がるもの</p> <p>類例 新潟県飯綱山65号墳、神奈川県吾妻坂古墳2号主体部、山梨県茶塚古墳(かんかん塚)、愛知県井上1号墳、長野県倉科2号墳、奈良県新沢千塚281号墳、兵庫県小野王塚古墳、大阪府御獅子塚古墳第2主体部、福岡県老司古墳第4石室・塚堂古墳・番塚古墳、佐賀県船石2号墳、長崎県チゴノハナ古墳、熊本県塚坊主古墳など</p> <p>文献 藤井 2007、森 2008</p>

図48 中期型鉄鉾の諸例

4. 倭を中心とした特殊鉄鉾の系譜 [図49]

池山洞44号墳で刃閉双孔を有する銀装鉄鉾、玉田M3号墳で長身鎬式鉄鉾、竹幕洞祭祀遺跡で刀身式鉄鉾がみられるのにたいし、倭では百済系渡来人の墓とみられる高井田山古墳で長身鎬式と刀身式がともなうほか、マロ塚古墳の長身鎬式鉄鉾に銀装を意識した錫装飾がみられるなど、倭、加耶、百済の有力者間での多方向的な交流がうかがえる。

いっぽう、この段階の倭と新羅の接触を示す鉄鉾としては大日遺跡2区ST2001の鐔付鉄鉾があるが、新羅では明確に倭系鉄鉾と認識できる事例はないし、6世紀の新羅圏では墳墓への武器副葬そのものが下火となるため、直接の対比資料に恵まれていない。もとより、当時の錯綜した国際関係を鉄鉾のみで論じることもしないが、すくなくとも、鉄鉾の様相に倭と新羅の双方向的な交流を読みとることもできない。

第3項 三角穂式鉄鉾の系譜、属性の多重継承 [図50]

身部の断面が正三角形にちかい、従来の鉄鉾と隔絶的なデザインの三角穂式鉄鉾は、どのように成立したのだろうか。その系譜を考えるために、前段階の中期型鉄鉾と比較検討する。なお、記述を簡略化するため、三角穂式鉄鉾副葬古墳の所在地については表9に記す。

まず、箕田丸山古墳例や経ヶ岡古墳例のような出現期の大型品には、長身鎬式鉄鉾の名残が読みとれる。身部断面の厚みにたいして幅が狭い点も、長身鎬式と通低する。

いっぽう、身部断面が三角形である点には刀身式鉄鉾との親縁性を認める。三角穂式鉄鉾は、袋部の上に三角錐状の鉄の塊を乗せただけの造りではない。袋部に接する部分の身部断面は、むしろ鋭角二等辺三角形にちかい。関も、袋部のつけ根から3点等しく突出しておらず、頂角の関がほか2点の関よりもつよく突出する。そのため、頂角の関を左、鋒を上になるようにおくと、身部は刀子のような形状を呈する。このようなデザインは刀身式鉄鉾と類似し、鋭利な刃部の有無以外に三角穂式と刀身式の明確な差異はない。また、広瀬鶴巻塚古墳で刀身式戟と三角穂式鉄鉾がともなうことは、両者が類似した原理のもとで製作から副葬にいたったことをうかがわせる。

ただ、身部断面が鋭角二等辺三角形をなす刀身式鉄鉾であれば、敵を切り払う攻撃も可能だが、かぎりなく正三角形にちかい三角穂式鉄鉾ではそれができない。さらに仁木聡によれば、柄をふくめた鉄鉾の全長規格は中期に比べて後期は短くなり、風返稲荷山古墳の三角穂式鉄鉾は、鉄鉾の鋒先端から石突の先端まで最長でも1.55mにすぎないという[仁木2004]。これでは、自身の前80cm～1m程度しか攻撃できず、鉾がもつ最大の利点であるアウトレンジ戦法が制限される。また、三角穂式鉄鉾の多くが片目釘であることは[藤井2007]、鉄鉾本体と柄を固定する力がほかの目釘形態に比べて弱い、つまり攻撃用武器としての堅牢性が弱いことを示唆する。倭の鉄鉾の攻撃力は、時期が新しくなるにつれて相対的に低下したとみえる。三角穂式鉄鉾の袋部合せ目は、肉眼ではなかなか確認できないことが多く、他形式の鉄鉾に比べて造りこみの入念度合いがたかいことも、装飾性が重視された結果と捉えられよう。

そして、このような中期型鉄鉾から後期型鉄鉾へのモノとしての展開は、松木武彦による「武器の進化と退化」の定義によって説明しうる。すなわち「武器の第一義的な機能が戦闘における殺傷能力にあるとすれば、それが向上する方向の変化を進化と捉えたい。たとえば、弓の場合は弓力（発射速度）の上昇、刀剣の場合は一定度までの刃の伸長や強刃化がそれに該当しよう。これに対して退化は、殺傷能力とは無関係の、ないしはむしろそれを阻害する方向での変化、すなわち刃の矮小化や強靱さの後退、または肥大や装飾性の増大を指す」[松木2002：p.67]。

筆者は、長身鎬式鉄鉾や刀身式鉄鉾から三角穂式鉄鉾への変化を、武器の儀器化にみる長身化や刃部の矮小化、装飾性の増大などの流れのなかで捉え、中期型鉄鉾がもつ属性の退化や多重継承によって成立した

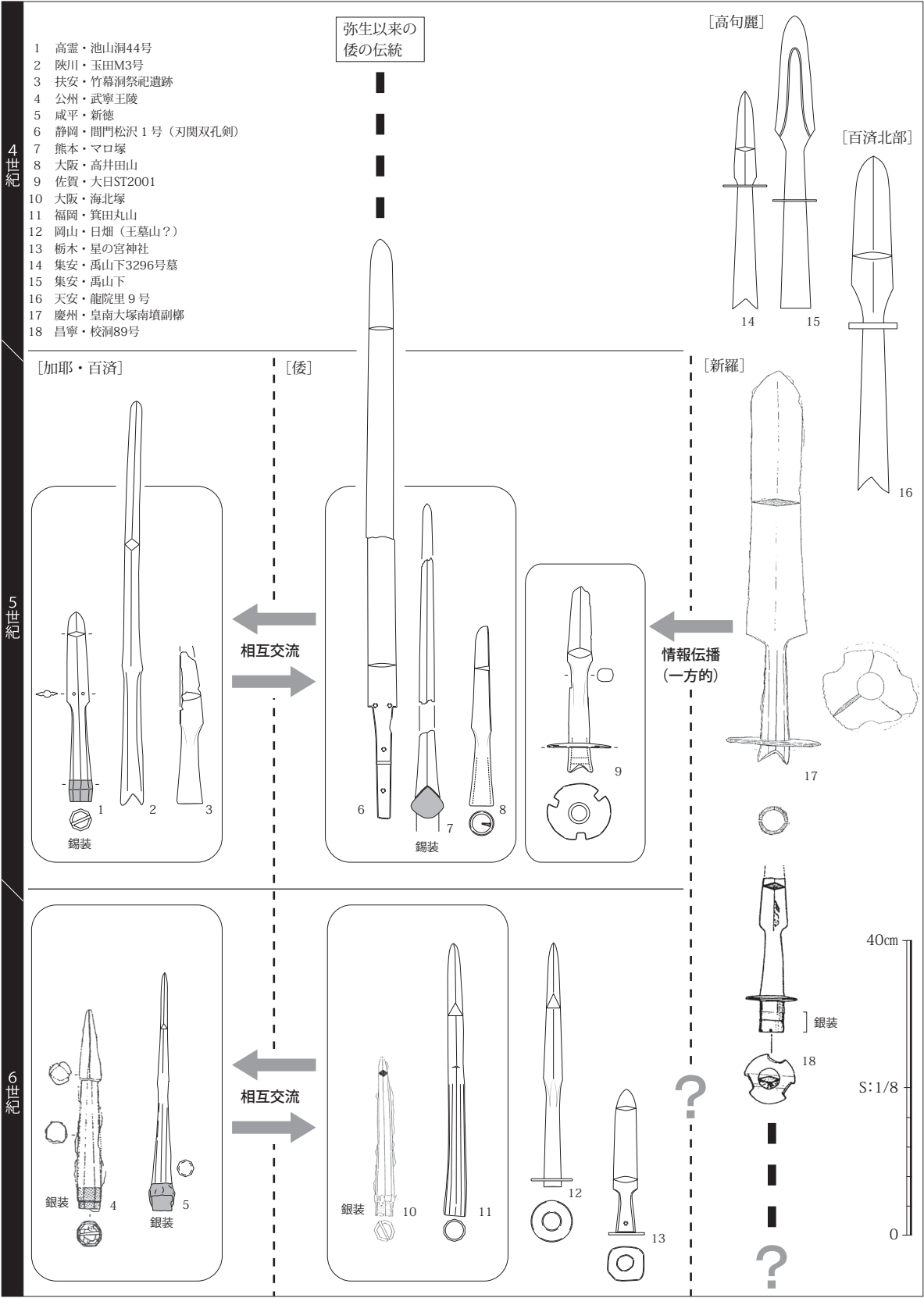


図49 倭を中心とした特殊鉄鋌の相関関係

表9 三角穂式鉄鉾出土古墳一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時 期	数	金 銀 装	鐔
1	中 田	福島県いわき市	装飾横穴	TK209	2	○	○
2	赤羽B-1号	茨城県ひたちなか市	横穴	TK43-TK209	2		
3	鳳返稲荷山	茨城県かすみがうら市	方円・78m	TK209-TK217	1	○	
4	寺田1号	茨城県筑西市	円・40m	TK43-TK209	2		
5	竹下浅間山	栃木県宇都宮市	方円・52.5m	TK209	1		
6	明神山10号	栃木県足利市	円・8m	TK43-TK209	2		
7	若田大塚	群馬県高崎市	円・29.5m	6c前	1	○	
8	綿貫観音山	群馬県高崎市	方円・97m	TK43	9		
9	八幡観音塚	群馬県高崎市	方円・97m	TK209	2		
10	鈴 塚	群馬県高崎市	円・20m	6c後	1		
11	壺 塚	群馬県前橋市	円・25m	6c中	1		
12	弦巻塚	群馬県前橋市	方円・86m	5c後～6c前	1		
13	赤堀4号	群馬県伊勢崎市	円・22.5m	6c末～7c初	1		
14	美九里中	群馬県藤岡市	不時発見	6c末～7c初	1		
15	房子塚	群馬県玉村町	方円・45m	6c末	1		
16	小泉大塚越3号	群馬県玉村町	方円・46m	6c後	2		
17	二ツ山1号	群馬県太田市	方円・74m	6c後	1		
18	金鈴塚	千葉県木更津市	方円・91m	TK209	2	○	
19	天王船塚4号	千葉県成田市	周満円・50m～	7c前	1		
20	塚田2号	神奈川県南足柄市	—	TK43-TK209	3		○
21	三ノ宮3号	神奈川県伊勢原町	—	7c前	1		
22	伝・福井県若狭町西塚出土	—	—	—	1		
23	稲荷塚1号	岐阜県可児市	円・21m	TK43-TK209	1		○
24	甌 塚	静岡県磐田市	円・26m	MT15	1		
25	上神増E16号	静岡県磐田市	周満円・11m	TK43	1		
26	梶ヶ谷1号	静岡県御前崎市	横穴	TK209	1		
27	瀬戸1号	静岡県藤枝市	円・12m	TK209-TK217	2		
28	賤機山	静岡県静岡市	円・32m	TK43-TK209	3		
29	白亀塚	愛知県大口町	円・19m	TK43	1		
30	根川1号	愛知県豊田市	円・17m	MT85-TK43	1		
31	寺西1号	愛知県豊橋市	円・25m	TK43-TK209	2		
32	馬越長火塚	愛知県豊橋市	方円・70m	TK209	1		
33	井田川茶臼山	三重県亀山市	—	MT15	1		
34	甲 山	滋賀県野洲市	円・8m	TK10	1	○	
35	畑の前7号	京都府精華町	周満円・18.6m	7c前	1		
36	小屋ヶ谷	京都府福知山市	円・13m	TK43	1		
37	河内愛宕塚	大阪府八尾市	円・22.5m	MT85-TK209	1		
38	山畑48号	大阪府東大阪市	—	TK209	1		
39	年の神2号	兵庫県三木市	円・14.7m	TK46	1		
40	見手山1号	兵庫県豊岡市	方円・35m	TK43	1		
41	東山1号	兵庫県多可町	円・30m	TK209	1		○
42	竜谷8号	奈良県桜井市	円・18.5m	6c後	1		
43	烏土塚	奈良県平群町	方円・60m	TK43	3		
44	牧 野	奈良県広陵町	円・50m	TK209	1		
45	平 林	奈良県葛城市	方円・55m	TK43	1		
46	伝・奈良県葛城市出土	—	—	—	1		
47	箕島1号（一本松）	和歌山県有田市	円・12m	6c中	1		○
48	上塩冶築山	島根県出雲市	周満円・77m	TK43-TK209	9		
49	定東塚	岡山県真庭市	方・17m	TK217	4	○	○
50	王墓山（岡山）	岡山県倉敷市	円・25m～	TK43-TK209	4		○
51	赤井西4号	岡山県倉敷市	—	TK209	1		
52	赤井南3号	岡山県倉敷市	円・17m	TK209	1		
53	二子塚	広島県福山市	方円・68m	TK43-TK209	4		
54	田 戸	広島県三次市	円・13m	TK209	1		
55	長砂古	香川県観音寺市	円・13m	TK43	1		
56	経ヶ岡	愛媛県四国中央市	方円・30m	TK10	1		
57	箕田丸山	福岡県みやこ町	方円・37m	TK10	1		
58	袂水1号	福岡県行橋市	—	TK209	1		
59	伊田狐塚D4号	福岡県田川市	横穴	TK209	1		
60	沖ノ島7号	福岡県宗像市	祭祀遺跡	TK43	2		
61	勝浦水押SO-01	福岡県福津市	円・14m	TK209	1		
62	原口1号	福岡県古賀市	円・23m	MT85-TK43	1		
63	観音浦KS3号	福岡県宇美町	円・14	TK209-TK217	1		
64	丸の口IV-2号	福岡県那珂川市	円・12.5m	TK209	1		
65	元岡G-6号	福岡県福岡市西区	多角形墳？	6c後～7c前	2		
66	双 六	長崎県杵岐市	方円・91m	MT85-TK209	1		
67	赤 坂	熊本県多良木町	円	TK209	1		
68	丁 村（1号石室）	羅 州	—	5c後	1		
69	新 徳	威 平	方円・51m	6c中	1	○	
70	風納土城	ソウル	—	5c後	1		

と理解する。第2章で予察したように、長身鎬式鉄鉾や刀身式鉄鉾から三角穂式鉄鉾への変化を、福永伸哉のいう、中期からすでに列島内に存在していた要素を形や素材、規格などを変えながら再現し、普及増大させていく「威信継承戦略」の一環と捉えれば、その変遷はより円滑に理解できる。たほう「威信創出戦略」についても、とくに百済勢力との対外関係を基盤とし、その表示にふさわしい威信財を創出して政治的系列関係を強化する戦略と理解されている。むろん、継体朝を前後する時期の器財すべてが両戦略の影響を受けたとは考えないが、先述のように、刀身式鉄鉾や三角穂式鉄鉾に百済圏とのすくなからぬ接点がみえること自体は間違いないだろう。

第4項 三角穂式鉄鉾の変遷

三角穂式鉄鉾の展開は、分布の拡大、全長規格や複数副葬の発生などの組みあわせから、おおきく3段階に分かれる〔図51〕。高田は、三角穂式鉄鉾に一定の全長規格がうかがえる一群があることに注目しているが、この規格性はある程度の時期差を反映するものである。

第1段階（後期前半） 三角穂式鉄鉾最古段階の事例は、IV期の埴輪を樹立する広瀬鶴巻塚古墳や、群馬県内最古級の横穴式石室を有する若田大塚古墳の出土品だが、数は少ない。

若田大塚古墳例の構造については杉山秀宏が次のように説明している。すなわち「三角穂式の鉾身で、関も明瞭に分かる斜め関である。重要なのは、袋部の金銅装具で、装具は厚み0.1～0.15mmで、長さ10.7

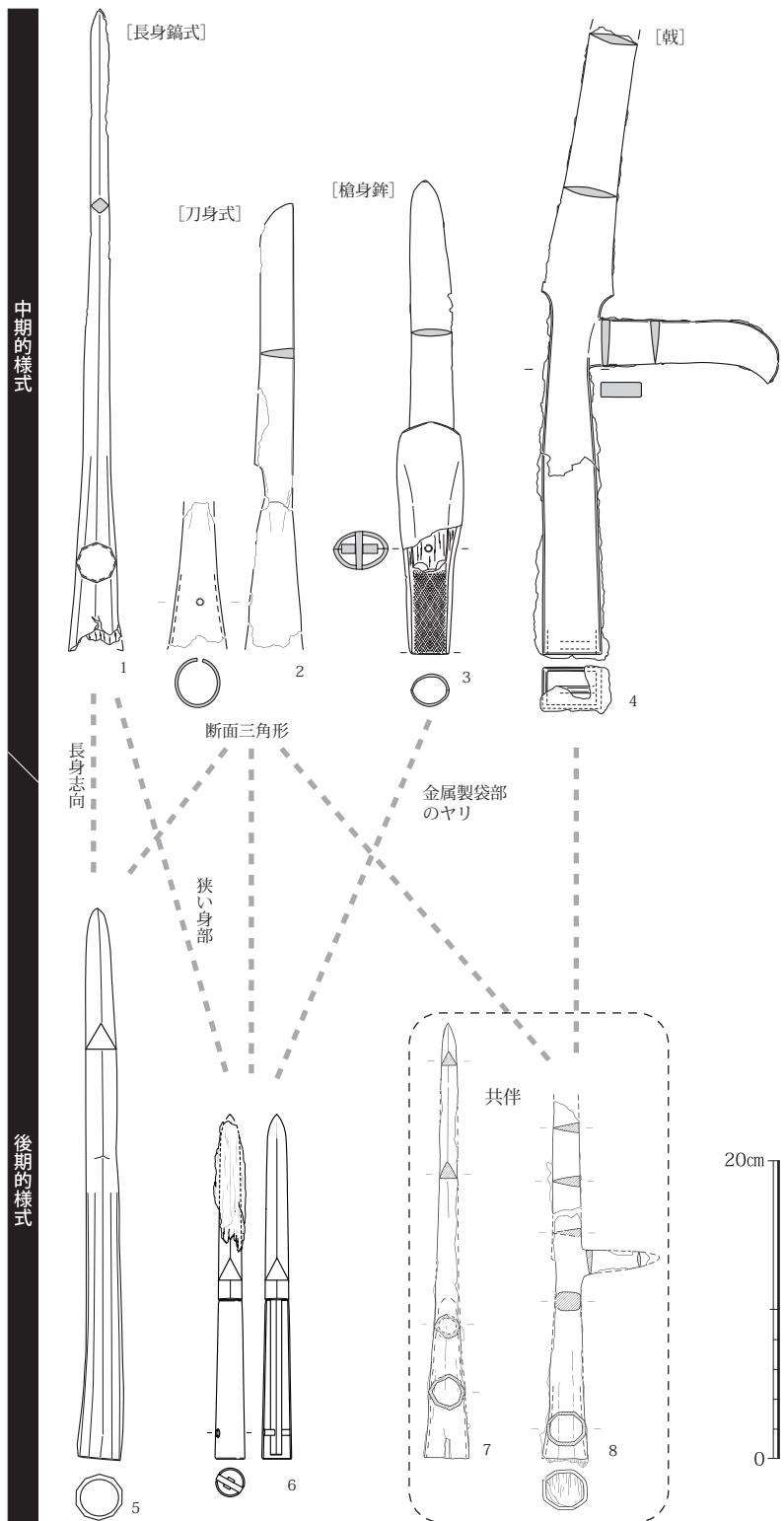
cmの円筒形別造りである。袋端部の下から見ると、周りが炭化状になった柄と思われる木質の中心に鉄かと想定される棒状のものがあり、銚身から延びる茎状のものである可能性がある。この棒状の周りを包むように円筒状の金銅装の装具を目釘で木柄に打ち付けて装着している」[杉山秀2016：p.27]。

こうした構造の三角穂式鉄銚は類例がなく、むしろ、槍身に鉄製の袋部を装着したいわゆる「槍身銚」と構造的に似る。

広瀬鶴巻塚古墳では、刀身式の戟と共伴している。IV期の埴輪をともなうが、群馬出土の鉄銚を網羅的に分析した杉山は、西暦500年前後に位置づけている[杉山秀2017]。

第2段階（後期中葉古段階）全国的に分布が展開する段階である。井田川茶臼山古墳、甲山古墳、経ヶ岡古墳、箕田丸山古墳、新徳古墳例などがある。

箕田丸山古墳例は37cmで、古墳出土鉄銚のなかでも大型の部類である。このような長身志向の銚についても、中期型鉄銚の一種であり全長が40cmを前後する「長身鎬式鉄銚」との共通性がうかがえる。「三角穂式」の所以たる、断面が三角形である点は「刀身式」と、身の幅と厚さがほぼ等しいほどに狭まっている点は「長身鎬式」と通底する。甲山古墳例は袋部の端に銀製円筒状の飾をつける。中期末の和歌山県大谷古墳から出土した銀装鉄銚に連なる要素だ



図出典

- 1 小田茶臼塚（甘木歴史資料館蔵） 2 小正西2号石室（飯塚市歴史資料館蔵）
 3 川上（さぬき市歴史民俗資料館蔵） 4 牟田尻桜京A-06号（海の道むなかた館蔵）
 5 箕田丸山（福岡大学考古学研究室 2004『長崎県・景華園遺跡の研究／福岡県京都郡における二古墳の調査／佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊 再トレース）
 6 若田大塚（高崎市観音塚考古資料館蔵） 7・8 広瀬鶴巻塚（杉山 2016）

図50 鉄銚にみる属性の多重継承

が、銀装鉄鉾の系譜は本来百済や加耶に求められる。

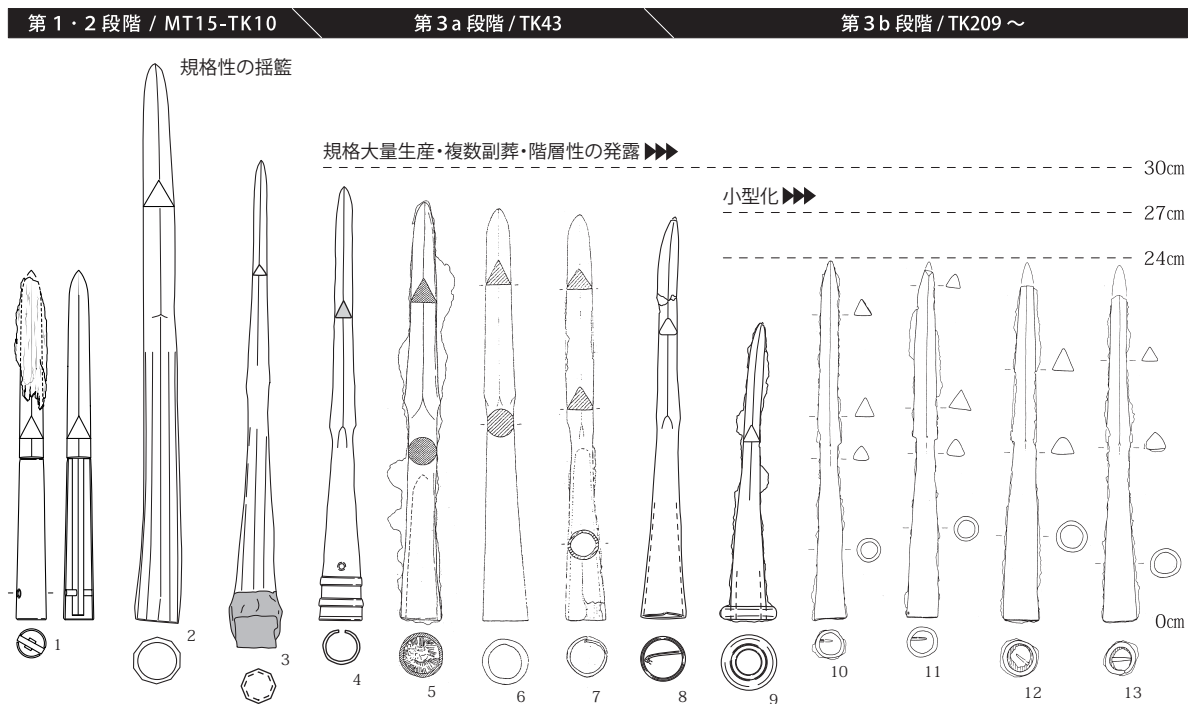
このように、第1・2段階の三角穂式鉄鉾は、中期までに出現していた鉄鉾のさまざまな要素との錯綜した共通点を認めうる。いっぽうで新羅系要素である基部の山形挟り式はみられず、その成立の背景には百済・加耶系の影響がうかがえる。高句麗・新羅系の要素である鐔が付くものも少数あるが、初期の製品には装着せず、大型古墳への副葬もみられないため、三角穂式鉄鉾の本質には直接かかわらない。いずれにしても、中期的な鉾の様式を解体したうえで後期的な様式を創出し、安定的な規格大量生産を模索する段階の揺籃状況にあることを評価したい。

第3段階（後期後半以降） 本体の全長に規格性がみられるようになるとともに、複数副葬がおこなわれる段階である。全長規格に応じてaとbの2小期に分ける。

3a段階（後期後半） 綿貫観音山古墳や上塩冶築山古墳、烏土塚古墳、賤機山古墳、原口A1号墳などで全長27cmを前後する資料が出土している。また、綿貫観音山古墳や上塩冶築山古墳を頂点として、一基の古墳に多量副葬する事例がみられるようになる。ただし、一つの古墳から出土した三角穂式鉄鉾すべてが27cm前後に統一されているわけではなく、あくまでも27cm前後の資料が最も多く出土する段階といったほうが資料の実態に即している。

3b段階（後期末） 牧野古墳例は16cmであり、福岡県内で出土した、観音浦KS3号墳、片縄山古墳群丸の口IV群2号墳、缺水1号墳例も24cm以下におさまる。TK217型式期の定東塚古墳からは4本出土しており、いずれも全長23.5cm程である。後期末から終末期にかけて、緩やかな短小化傾向が読みとれる。

綿貫観音山古墳例や金鈴塚古墳例は袋部の断面が九角形であり、複雑な製作工程が窺えるが、中田装飾横穴例は円筒袋式である。このように、三角穂式鉄鉾はその出現から終焉にいたるまで多角形袋式と円筒袋式



図出典

- 1 若田大塚(高崎市観音塚考古資料館蔵)
- 2 箕田丸山(福岡大学考古学研究室2004『長崎県・景華園遺跡の研究／福岡県京都郡における二古墳の調査／佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告3)
- 3 新徳(国立光州博物館1995『咸平 新徳古墳 調査概報』再トレース)
- 4 明神山10号(足利市歴史郷土展示室蔵)
- 5 綿貫観音山(高田1998)
- 6 烏土塚(高田1998)
- 7 賤機山(高田1998)
- 8 元岡 G-6号(福岡市埋蔵文化財センター蔵)
- 9 中田装飾横穴(いわき市考古資料館蔵)
- 10～13 定東塚(岡山大学考古学研究室2001『定東塚・西塚古墳』)

図51 三角穂式鉄鉾の変遷

が並存するため袋部の断面形態は編年に適さないが、断面九角形のものは第3段階に多い。同一時期におけるこのような形態差は、工人や配布原理の相違、あるいは保有者の性格を反映している可能性がある。

第5項 三角穂式鉄銚の装飾性

出現初期の甲山古墳例や新徳古墳例は多角形袋式であるとともに、袋端部に銀装飾をつける。銀装三角穂式鉄銚は、古墳への副葬が終了する直前の金鈴塚古墳や中田装飾横穴でも確認できる。三角穂式鉄銚の成立背景に加耶・百済系の影響を看取できるとともに、終焉にいたるまで一つの伝統として残ったようである。しかし、朝鮮半島の三角穂式鉄銚はわずか3例が知られる程度であり、朝鮮半島起源の武器とみるにはいまだ慎重な態度が求められよう。むしろ新徳古墳例は、ハードである前方後円形の墳丘や北部九州系横穴式石室にたいする評価と同様に、倭と百済の外交で活躍した人物にふさわしい武器とも評価できる。

くわえて、本来は新羅系の要素である円形の鐔がつくものが、後期後半の王墓山古墳や後期末の東山1号墳、稲荷塚1号墳、塚田2号墳で出土している。中田装飾横穴では、断面かまぼこ状の分厚い鐔をつけたものが出土しており、銀装三角穂式鉄銚と共伴する珍しい事例である。つづきTK217型式期の定東塚古墳では、中田装飾横穴例のような分厚い鐔の表面を銀板で覆うなど、装飾的要素の折衷が認められる。時期が下るにつれて、銀装と鐔付それぞれの規範が解体してゆく過程として捉えうる。とくに、定東塚古墳の三角穂式鉄銚は古墳出土品としては最新段階に位置づけられることから、古墳時代的な鉄銚様式が解体する段階の基準資料と評価することもできるだろう。

第6項 古墳時代後期の鉄銚の階層性

三角穂式鉄銚出土古墳のうち、綿貫観音山古墳、八幡観音塚古墳、金鈴塚古墳、上塩冶築山古墳、中田装飾横穴は、後期後半・末における最大級の墓域をもつ。また、賤機山古墳や馬越長火塚古墳、双六古墳の横穴式石室は、それぞれ駿河、三河、沓岐地域における最大規模のものである。

三角穂式鉄銚は、後期的な武装様式の最上位に位置づけうる倭装大刀や小札甲、金銅装馬具と共伴することが多い。おもな項目別に列挙すると次のとおり。(●)は、三角穂式鉄銚複数副葬を示す。

倭装大刀 | 中田装飾横穴 (●), 綿貫観音山 (●), 金鈴塚 (●) 甕塚, 賤機山 (●),
井田川茶白山, 河内愛宕塚, 上塩冶築山 (●), 沖ノ島7号 (●), 箕田丸山
※滋賀県大岩山古墳群では、甲山で銀装三角穂式鉄銚、円山で振り環が出土

小札甲 | 中田装飾横穴 (●), 綿貫観音山 (●), 八幡観音塚 (●), 金鈴塚 (●),
塚田2号 (●), 甕塚, 賤機山 (●), 甲山, 王墓山 (●), 沖ノ島7号 (●)

棘葉形杏葉 | 風返稲荷山, 賤機山 (●), 馬越長火塚, 沖ノ島7号 (●)
※栃木県明神山古墳群では10号で三角穂式鉄銚が2本, 1号で棘葉形杏葉が出土

花形鏡板・杏葉 | 八幡観音塚 (●), 金鈴塚 (●), 賤機山 (●), 定東塚 (●)

以上の古墳のうち、いずれにもあてはまるのは賤機山古墳だけであり、沖ノ島7号遺跡がそれに準じる。そのほか綿貫観音山古墳と上塩冶築山古墳では折衷系の装飾大刀も出土しており、類似した刀剣組成を示す[図53]。八幡観音塚古墳と金鈴塚古墳は、それぞれ上野・上総における最後の前方後円墳でもあり、上記項目のほかにも銀装鶏冠頭大刀や旋回式獣像鏡系倭鏡、承台付銅鏡、桃核が出土するなど葬送儀礼の共通点が多い。いずれも、後期的な副葬品の組みあわせが示す最上位階層に位置づけられよう。

関東・東海に限定してみても、群馬や静岡に集中するいっぽうで長野、埼玉、栃木に少なく、装飾大刀出土数の多寡とおおむね一致する。金鈴塚古墳では全国最多の装飾大刀をとまなうほか、風返稲荷山古墳でも

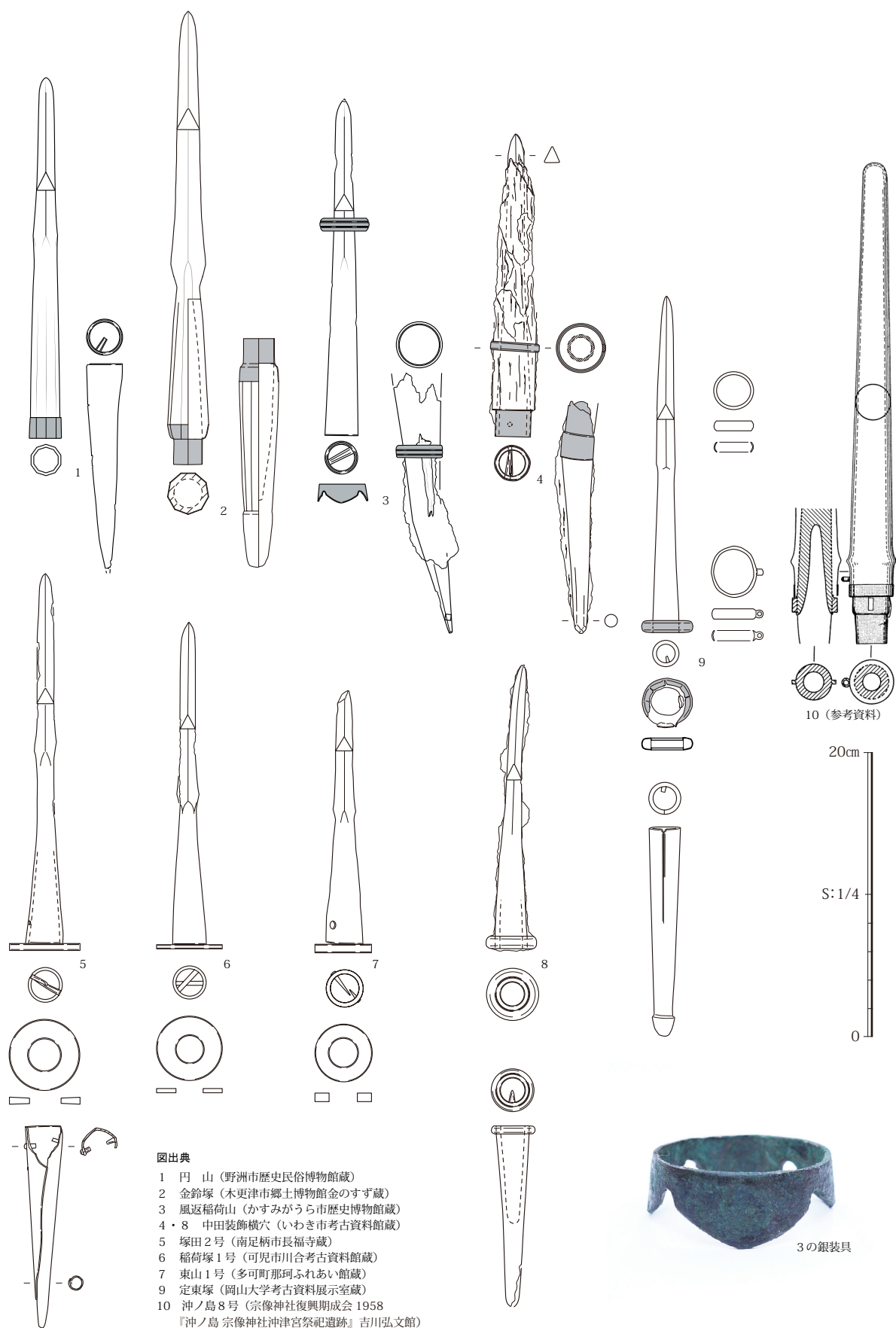


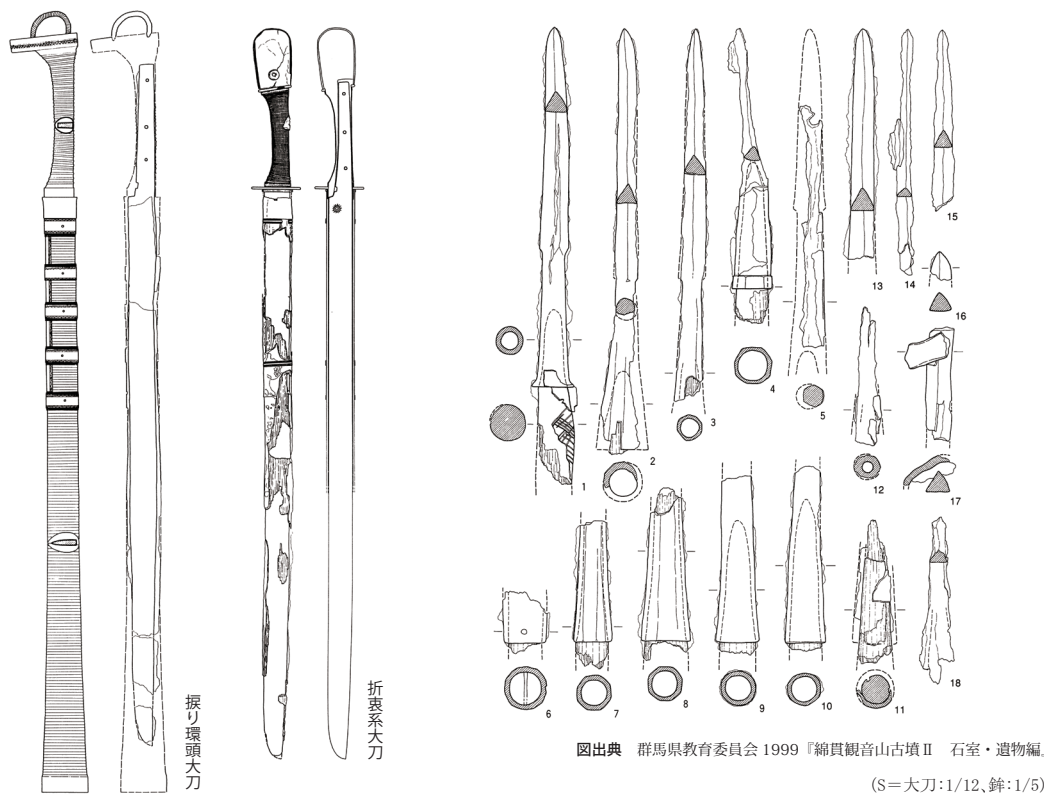
図52 銀装・鐔付三角穗式鉄鉾の諸例

綿貫観音山古墳



図出典 群馬県教育委員会 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』

上塩冶築山古墳



図出典 群馬県教育委員会 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』

(S=大刀:1/12、鉾:1/5)

図53 三角穂式鉄鉾副葬最多級の古墳

5振の装飾大刀と三角穂式鉄鉾が出土した。金鈴塚古墳の鉾は石突も銀装であることから、装飾大刀の保有量と鉾の階層性に相関性を読みとることもできる。群馬は三角穂式鉄鉾、装飾大刀、甲冑すべての出土古墳数が卓越する。綿貫観音山古墳では甲冑2組に鉾多数、八幡観音塚古墳でも甲冑2組に鉾2本（鉾本体は1本だが、石突は2本）がともなう。静岡では三角穂式鉄鉾出土古墳数と甲冑出土古墳数が拮抗する。賤機山古墳、甕塚古墳では両者がともなう。また、奈良と福岡が分布の核の一つとなる点も後期甲冑の様相とつづける [橋本・鈴木2014]。

また、綿貫観音山古墳、上塩冶築山古墳、定東塚古墳に代表される三角穂式鉄鉾の多量副葬は、前段階までの副葬は原則1本である状況と対照的なありかたである。このうち綿貫観音山古墳では、新羅系をふくむ4組の馬具が出土している。こうした状況は、鉾を装備する複数人の従者が王を囲む、高句麗・新羅系の軍構成を想起させる。従来の百済・加耶と類似していた倭の武装や軍事組織の編成が、高句麗・新羅系に変化したのだろうか。欽明21年（560）以降には、新羅が継続的に倭へ使者を派遣して文物を提供しているし、欽明23年（562）の大加耶の滅亡や、推古朝に高句麗から倭にたいして使者や僧侶を派遣したことなども無関係ではないだろう。MT85-TK43型式期に多くの新羅系文物が倭に舶載されたことや [内山2012]、定東塚古墳で高句麗系の凹字形鋤先 [李2012] が出土したことは、こうしたうごきの証左となろう。

鎬式鉄鉾を副葬する後期古墳として、茨城県常陸観音寺山7号墳（TK43-TK209）、栃木県七廻り鏡塚古墳（円墳・30m, TK10）、長野県埴輪神塚古墳（円墳, TK10）、静岡県宇洞ヶ谷横穴（TK10-TK43）、岐阜県虎溪山1号墳（TK10）、京都府物集女車塚古墳（円墳・20m, TK10）、兵庫県具足塚古墳、岡山県岩田14号墳（円墳・22m, TK43）、鳥取県宗像1号墳（前方後円墳・37m, TK43-TK217）、島根県めんぐろ古墳（MT15-TK10）、島根県上塩冶築山古墳（円墳・43m, TK43）、福岡県番塚古墳（前方後円墳・50m, TK47-MT15）・桂川王塚古墳（前方後円墳・86m, TK10）・正籠3号墳（前方後円墳・33m, MT15）・脇田山古墳（円墳・22m, TK10-TK209）・石ヶ元8号墳（TK209）、佐賀県潮見古墳などがある。

後期の鎬式鉄鉾出土古墳のなかにも中規模の前方後円墳がふくまれ、番塚古墳や桂川王塚古墳、潮見古墳、めんぐろ古墳、物集女車塚古墳では、倭装大刀あるいは金銅装f字形鏡板付轡などをとめない、一般的な古墳にたいする階層的優位性はじゅうぶんに評価できる。しかし、それはほぼ後期前半までを中心とするもので、後期後半には規模が縮小する。共伴する装飾大刀も石ヶ元8号墳や岩田14号墳のように半島系が目立つようになる。また、鎬式鉄鉾の多くは地方に分布し、倭王権の中核地域は空白地帯である点も注目できる。なお、三角穂式と鎬式の共伴は稀であるという指摘もある [高田1998]。鎬式鉄鉾のうち物集女車塚古墳例は、袋端部に銀製円環金具をつけ、三角穂式鉄鉾と鎬式鉄鉾が集約された工房ないし、ちかしい工房で目的、差別的に製作された可能性を示す。

以上をふまえると、三角穂式鉄鉾副葬古墳は、鎬式鉄鉾副葬古墳の墳丘規模や副葬品組成よりも相対的に上位に位置づけられる。ただし、三角穂式鉄鉾出現直後には全長規格がうかがえず、身部形式を問わずに銀装品がみられ、また一部の上位階層でも鎬式鉄鉾を副葬するという錯綜した様相は、三角穂式鉄鉾生産最初期の揺籃状況を示している。いっぽう、後期後半以降の三角穂式鉄鉾にはたかい全長規格がうかがえるとともに、多角形袋式のなかでも製作に手間のかかる九角形のものが綿貫観音山古墳や金鈴塚古墳などの大型前方後円墳に副葬される。後期末においては、明確に銀装具を装着する鉾は三角穂式にかざられることから、後期後半以降には一定の規範にもとづいて三角穂式鉄鉾が生産され、これを上位とする鉄鉾の階層構造が整備されたとみてよい。

三角穂式鉄鉾には多角形袋式や銀装品があるいっぽうで山形抉り式はみられず、その成立の背景に百済・加耶系の影響がうかがえる。規格性のたかさや造りこみの入念度合いからは、特定工房における限定的かつ連続的な生産が想定できる。また、上位墳墓の一部に銀装品が副葬され、振り環頭大刀や小札甲、棘葉形杏

葉などの上位品目との共伴が目立つことから、三角穂式を上位、鎬式を下位とする階層性が読みとれる。その生産・流通・保有・副葬の一部、あるいはすべてにおいて一定の規範があったと理解する。以上をもとに、新徳古墳例や、後期大型前方後円墳である金鈴塚古墳から出土した、石突もふくめた銀装三角穂式鉄鉾を真正品として評価したい。

くわえて、金銅装馬具との共伴が多いことを重視すれば、以上の階層性は鉄鉾単独で成り立つものではなく、武装に示される階層編成の一環として認識できるとともに、末期の三角穂式鉄鉾の短小化傾向は金銅装馬具をふくめた儀仗武装への採用の結果として説明できよう。さらに、当初は百済・加耶系の影響を受けて創出された三角穂式鉄鉾が、後期においては新羅系の棘葉形杏葉をとまうことが多いという錯綜する状況は、武器・武具・馬具の総体として完成する「武装」は個別パーツの起源や対外交渉云々を超越し、国家形成へと向かう倭独自の階層編成を貫徹させるための装置と化したものであることを物語っている。

たほう、高句麗・新羅系の要素である鐔付も存在するが、初期の製品には装着せず、大型古墳への副葬もみられないため、三角穂式鉄鉾の本質にどの程度かわるのか詳らかでない。この段階には新羅の鉄鉾資料にも恵まれていないため、これが新羅との交渉を示すものなのか否かさえ現状では発言できない。

第7項 分布からみた三角穂式鉄鉾の性格

1. 各地の分布状況 [図55]

東北・関東 関東平野の利根川流域における三角穂式鉄鉾副葬古墳の集中は、後期大型前方後円墳の築造と密接にかかわると同時に、他地域と異なっており、最有力墳から従属的な階層の古墳にいたるまで三角穂式鉄鉾を副葬することに注意したい。また、断面多角形の袋部や銀装具、鐔などの特殊な造作をほどこすものが、中田装飾横穴、綿貫観音山古墳、八幡観音塚古墳、金鈴塚古墳など、東日本でも最大規模の墳墓に副葬される。さらに、群馬の鈴塚古墳などの中規模墳には1本副葬するばかりが多いことから、三角穂式鉄鉾の副葬本数や造りこみの入念度合いに階層性をうかがうことができる。

三角穂式鉄鉾副葬古墳の被葬者は、巨視的にみればおもに水系を利用した交通の要衝に立つ。利根川流域への集中はその典型であるし、金鈴塚古墳被葬者の存立基盤は東京湾の制海権を握ることにあった。ことに山林が多くを占める甲信越では三角穂式鉄鉾の出土が知られず、東日本への流通にあたっては東海道を經由した可能性がたかい。なかでも、神奈川県足柄平野北部に位置する塚田2号墳に注目したい。塚田2号墳は墳丘の規模が不明ながら、長大な銅本孔鉄刀や金銅装の単鳳環柄頭、小札甲、金銅装磯金具、鉄製輪鏝とともに、三角穂式鉄鉾が3本出土している。うち1本には、円形鐔がともなう。半径50km圏内に、これほどの副葬品を誇る首長墳は知られていない。駿河と相模の国境である足柄峠（標高759m）越えのルートを意識した基点に立地することから、その被葬者は東海と関東の境界に立っていたとみられる。

総じて東日本では、綿貫観音山古墳や八幡観音塚古墳、賤機山古墳、風返稲荷山古墳、赤羽B-1号横穴墓、中田装飾横穴など、後期後半・末の首長墓に副葬する。西毛と上総の「gateway」⁴⁾ [内山2018] では多量副葬や倭装大刀との共伴が目立つ。「gateway」の障壁を司る首長への多量集積をへて中小首長層に再分配され、南関東から南東北にかけての有力首長を結ぶ器財として機能したのでろう。

東海 駿河は、自然地理、物質文化を問わず、さまざまな面で東西日本の境界接触世界に位置づけられる。近年では、古墳時代社会を構成する物資にも、東西日本の境界領域としての側面が反映されていることに注目が集まってきた [太田2018, 田村2018]。東海の三角穂式鉄鉾出土古墳のなかで、先述の塚田2号墳と距離的に最も近いのが賤機山古墳である。賤機山古墳では駿河最大規模の畿内系横穴式石室を有する。副葬された3本以上の三角穂式鉄鉾は、時期的に先行する綿貫観音山、上塩冶築山をのぞくと最多級である。静岡では三角穂式鉄鉾を副葬する古墳がこのほかに4基知られ、上神増E16号墳や梶ヶ谷横穴のようになら

ずしも優位とはいえない群集墳や横穴からも出土する。

三河でも、地域最大規模の横穴式石室を有する馬越長火塚古墳をはじめ、根川1号墳のような中小規模の円墳に三角穂式鉄鉾が副葬される。馬越長火塚古墳、根川1号墳では、西日本に多く分布するトンボ玉も出土している。

近畿【図55】 烏土塚古墳における3本の副葬を最多として、牧野古墳や平林古墳など、奈良盆地とくに平群地方の前方後円墳に分布の核がある。全国的にみても最も分布の密度がたかく、三角穂式鉄鉾流通の中心とみなしうる。

平群地方は、磐余や飛鳥といった当時の政治的中心と、国際港である難波を結ぶ水陸交通の要衝であり、軍事や外交面において重要な役割を果たした。加藤謙吉は、6世紀後半から7世紀にかけて生じた東アジアの変動のなかで、外交・内政の両面で危機的状況にさらされた倭王権が水陸交通の要衝である平群地方を軍事的、外交的に重視した結果、平群氏や額田部氏、膳氏、紀氏のほか、東漢氏を中心とした渡来系氏族が現地に移住するという結果をもたらした。当該地の軍事的・外交的機能がたかまったと述べる〔加藤1991〕。ここでは、騎兵用の馬匹生産がおこなわれるとともに、渡来人による馬具生産も推しすすめられた。三角穂式鉄鉾の生産と流通の中心に立つ具体的な勢力はあきらかでないものの、第3段階における列島各地への急速な展開の背景を考えるうえで示唆に富む指摘である。くわえて、敏達天皇の皇子・押坂彦人大兄皇子の墓とされる牧野古墳から出土したことをふまえると、その生産と流通の背景に倭王権が関与した可能性はたかいといえるだろう。

山陰・山陽 上塩冶築山古墳、二子塚古墳、王墓山古墳、定東塚古墳など、地域最有力の古墳に4～9本副葬される。

上塩冶築山古墳は古宍道湾を介して日本海に面するほか、古代山陰道推定地に隣接する。桃崎祐輔は、上塩冶築山古墳の銅鈴を古代の駅鈴の原型として評価し、その被葬者を推古朝における「プレ駅家の駅長的な首長」と想定する〔桃崎2019a〕。定東塚古墳も、吉備、美作、伯耆、出雲を結ぶ小盆地に位置するなど、交通の要衝として理解できる。二子塚古墳、王墓山古墳は瀬戸内海のなかでもとくに狭まった地域の北辺に

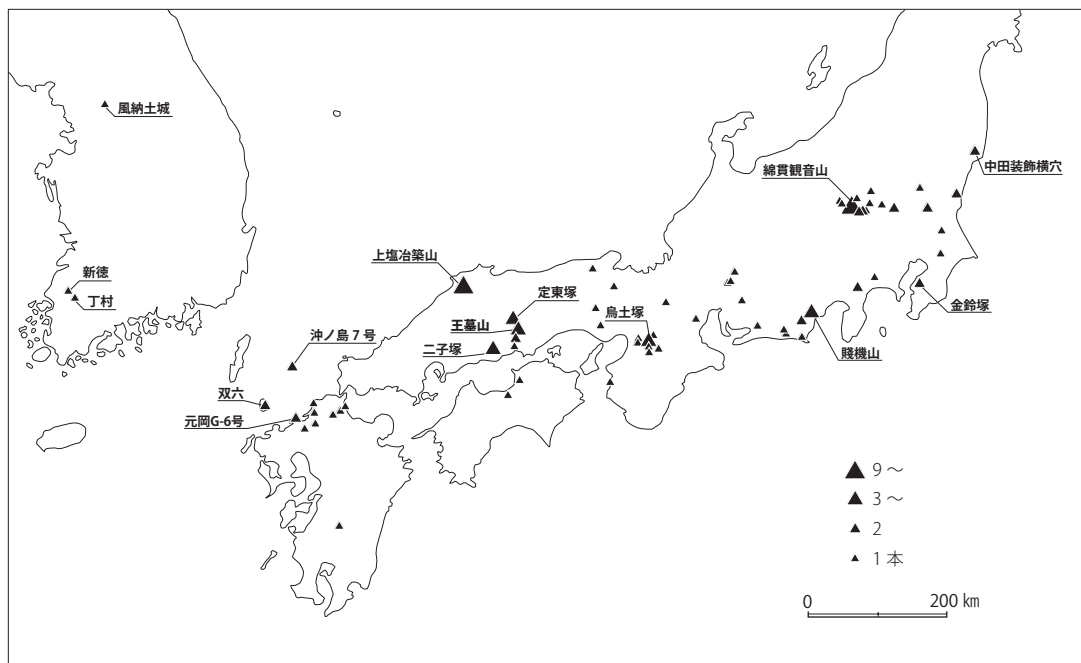


図54 三角穂式鉄鉾の分布

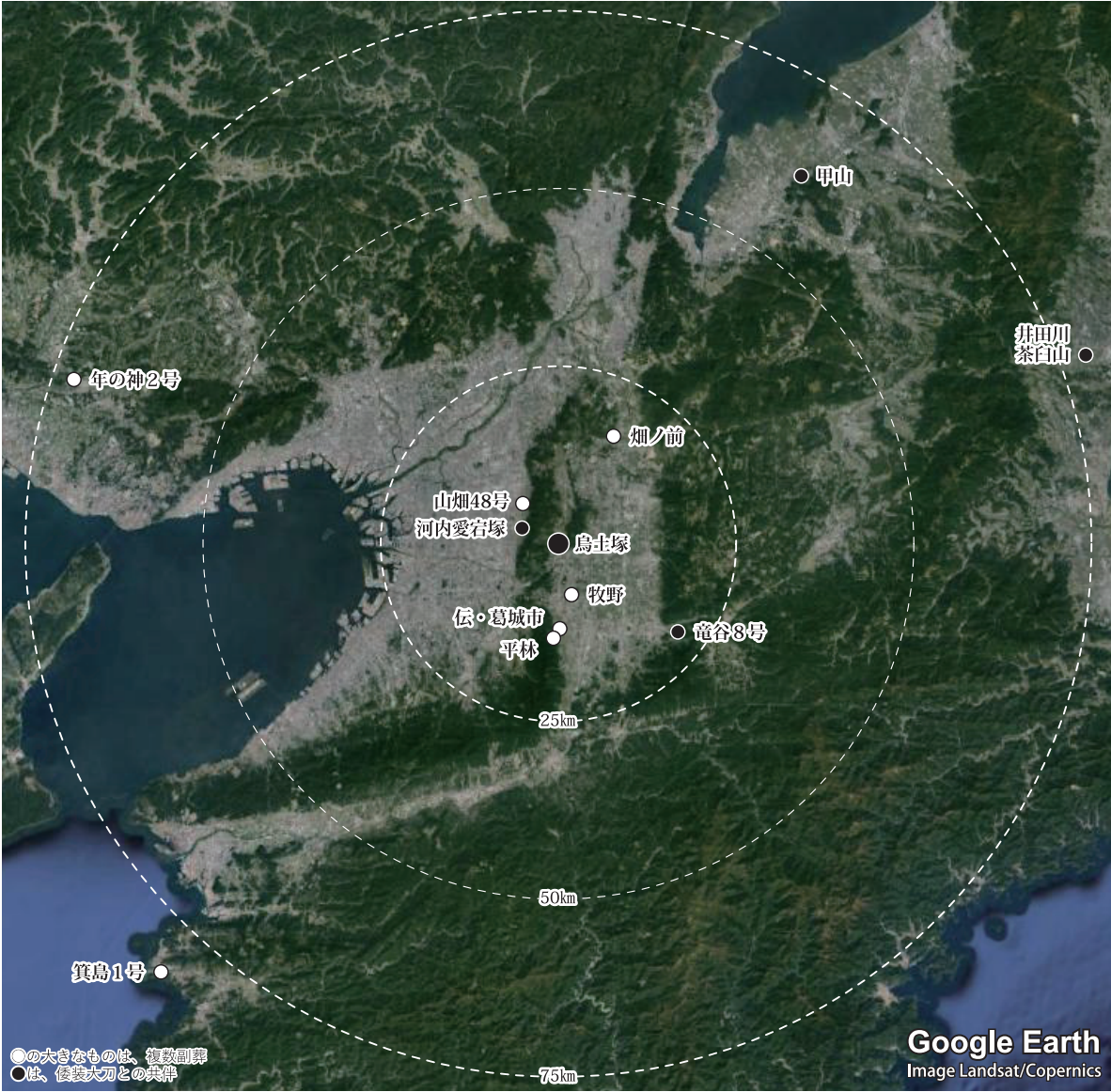


図55 奈良盆地周辺における三角穂式鉄鋳の分布

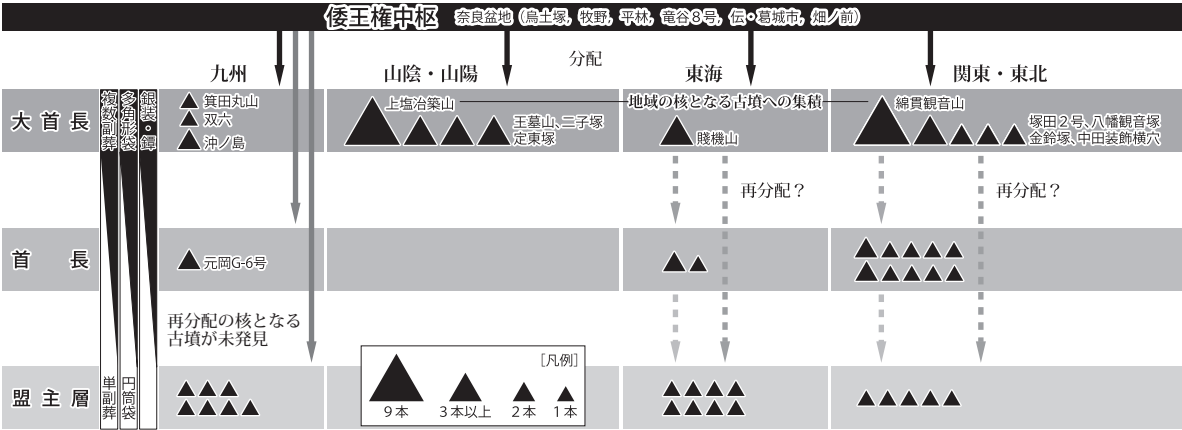


図56 三角穂式鉄鋳の分配

あたることから、畿内と北部九州間の海上交通を介した人びとの往来にかかわるなかで入手するばあいが多かったと考える。

ただ、次に示すように、こうした交通網の最西端に位置する北部九州において、かならずしも有力とはいえない古墳から三角穂式鉄鉾が出土していることのほうが、より三角穂式鉄鉾副葬の本質を内包しているように思われる。

北部九州 群馬にみられるような内陸における装飾大刀や甲冑と重なる集中分布とは対照的に、勝浦水押SO-01号墳、原口A1号墳、宇美観音浦KS3号墳、片縄山古墳群丸の口IV群2号墳、元岡G-6号墳など、中小規模の三角穂式鉄鉾副葬古墳が玄界灘を囲むように点在し、それらが結ぶ先には沖ノ島祭祀遺跡がたたずむ。くわえて、伊田狐塚D-4号横穴や袂水1号墳、箕田丸山古墳もふくめると、福岡県の三角穂式鉄鉾副葬古墳数は関東および関西とならんで全国有数となる。

ただし、沖ノ島での出土は三角穂式鉄鉾が国家祭祀の場でも重視されたことをうかがわせる反面、特定地域への局地的な集中や有力な古墳への副葬、複数副葬が希薄である。元岡G-6号墳も、墳丘規模が不明で甲冑や金銅装馬具も出土しておらず、武装にみる階層的優位性がうかがえるわけではない。しかしながら元岡G-6号墳においては宋の元嘉暦法による庚寅銘金象嵌大刀が出土していることから、国際的な先進文物を入手できる立場にあったことは疑いえない。共伴した列島最大級の銅鈴についても、上塩冶築山古墳同様、のちの駅鈴につながるようなものと評価しうる。とくに元岡G-6号墳のばあい、玄界灘や対馬海峡をはさんで対朝鮮半島政策を担う軍事的な境界領域としての特質をも示す可能性がある。

北部九州では三角穂式鉄鉾にかぎらず、列島全体の有力な古墳に副葬されることの多い反刃鎌や金属装鞍、花形鏡板・杏葉も、群集墳や横穴墓にしばしば副葬される。長頸鎌の地域型式も、関東のように顕著ではない。倭王権による軍備が、比較的下位に位置づけられる古墳にまで直接およんでいた可能性がある。磐井の乱（528）の戦後処理として王権の直轄地であるミヤケが設置され、6世紀中葉以降に大型前方後円墳の築造が規制される地域が多い状況とも関連する事象だろう。このように考えるとき、三角穂式鉄鉾の流通を倭王権による地方弱体化政策の一環とみなした高田貫太の見解は〔高田1998〕、資料的な制約が多い時期の研究にあつて、まさに卓見だったといえる。

2. 小 結

列島全体では、中田装飾横穴や金鈴塚古墳、甕塚古墳、馬越長火塚古墳、箕島1号墳、長砂古4号墳のように、河川や港湾を望む臨海性に長じた立地の古墳からの出土が目立つ状況とあわせ、海上交通や対外交渉にかかわる所有者像を描くことができる。三角穂式鉄鉾を3本以上副葬する事例は九州には存在せず、中国地方以东の拠点的な古墳にみられる。北部九州とそれ以外の地域では、三角穂式鉄鉾の流通動態が異なるとみてよいだろう〔図56〕。

ある物品を政治的な威信財として認めるための条件として、①分布の中核が生産や流通を管理していたこと、②一定の規格化がすすんだものが有力な古墳に特権的に副葬されることを示す必要がある〔鈴木一2003c〕。さらに、このような財体系が一定の社会的まとまりを形成するための条件をつけくわえるとすれば、③仕様の違いにもとづく階層構造の下位に位置づけられる物品が、従属的な階層間に流通することを示す必要もあろう。

その点において関東の三角穂式鉄鉾様相は、①②③の条件を満たしており、特定の財の流通と地域・集団形成が密接にかかわる地域として評価できる。たほう北部九州には、再分配の核となるような有力な古墳への多量集積が認められないことから、中小規模の古墳にいたるまで倭王権が直接配布したとみることもできるだろう。武器の流通や保有の動態には、すくなく地理勾配が存在した可能性がうかがえる。

第6節 結 語

本章の検討と、東アジア世界における装飾大刀や馬具、帯金具の身分表示にかんする先行研究の成果〔町田1970・1988, 白石1993, 桃崎1999, 内山2012, 上野2014〕をふまえ、各王権における上位階層の武装には、その王権独自の形式やセットが重視されたと考える。また、鉄銚の形態や軍構成は、各国の同盟・従属関係などを枠としながら、おおきく類型化できることを予察した。このような理解を深めれば、後期的な武装の類型化はもちろんのこと「各王権ないし王朝を特徴づける武装」「地方と中央、あるいは王権間の政治的距離」など、より個別の実態に即した解釈が可能になると思われる。

以上、第Ⅰ部では、日本列島の古墳に副葬される鉄刀および鉄銚の系譜をたどった。鉄製武器の多くは脆く錆びついており、金銀装装飾大刀や馬具のような華美な印象を受けるものではない。しかし、ここまでの分析をつうじて、鉄製武器にみられる微細な変化の背景にも、東アジア諸国の覇権をかけたシンボリズムやアイデンティティを読みとりうるという光明が差してきた。このような展望と期待を抱きながら第Ⅱ部では、分析の地域を倭王権の東西端にあたる北部九州および関東に絞り、各地の主要な武器出土古墳の歴史的位置づけに迫りたい。

註

- 1) 【**積石木槨墓**】 基底面の中心に長方形の木槨を築き、中に木棺を納める。その後、木槨のまわりに石を積み、土を盛り上げて墳丘とする。
- 2) 【**中原高句麗碑**】 5世紀初頭、忠州市可金面龍田里に建立された。高句麗と新羅との関係を兄弟になぞらえつつ、高句麗を「大王」、新羅王を「東夷之寐錦」と位置づける。朝鮮半島に勢力を拡大した長寿王の治世（413-491）において、高句麗が新羅を従属させていたことを示す第一級資料。
- 3) 鐔付鉄銚の変遷観については、本章の構成要素となる齊藤2013・2015論文の刊行後、寺井誠も同様の見解を示している〔寺井2019〕。
- 4) 【**gateway**】 門口地域・玄関。「新開地の都市的集落において中心地機能に先立って立地し、広大な開拓地域と旧開地との遠距離地域間結合を生じさせる」〔寺谷2002, p.100〕。内山敏行は、近畿を旧開地、北関東・東関東・中部高地を新開地とみなし、西毛・上総・下伊那にgatewayの障壁を想定する。

第Ⅱ部 境界領域の 武器と武装

第6章 磐井の乱前夜の新羅系文物

— セスドノ古墳出土扁円魚尾形杏葉を手がかりに —

第1節 はじめに

日本の古代国家研究における磐井の乱 — 古代史上最大の内乱 — の本質は、継体勢力の地方進出と、朝鮮半島とりわけ新羅と独自に交流した北部九州勢力の衝突が、その後の倭王権による地方経営戦略に影響をあたえたことにある。周知の内容ではあるが、以下、磐井の乱のあらましをまとめる。

『日本書紀』継体21年（527）6月、大王に命じられた近江毛野臣が、新羅に破られた南加羅（^{ありひしのから}慶尚南道金海）・喙己吞（^{とくことん}慶尚北道慶山）を復興するために朝鮮半島に赴こうとしたが、新羅とむすびついていた筑紫君磐井が火・豊の勢力とともにその進行を防いだ。翌年11月11日、物部大連鹿火が中央から派遣され、筑紫御井郡（福岡県久留米市周辺）で乱は鎮圧された。乱後の磐井の消息には諸説あるが、むしろ、父の罪の連座を恐れた磐井の息子・葛子が「糟屋屯倉」（福岡県糟屋郡から古賀市付近か）を倭王権の直轄地として献上したという継体22年（528）12月条こそが、この事件の主要な論点となっている。

「糟屋屯倉」にはじまる、乱後処理としてのミヤケや国造制の設置にかんしては、考古学、文献史学双方の資料をふまえながら盛んに議論されてきた〔岩永2012, 館野1978, 田中史2018など〕。ただし、その多くは6世紀の社会構造の説明に重点を置いたものであり、5世紀の考古資料のありかたを「乱前夜」と捉えうえて5・6世紀史を連続して論じる視点に乏しい。

たしかに、日朝の考古資料を整理した総論や〔朴2007, 高田2014〕、ミクロな地域史研究はあるが〔亀田2004, 松浦2005〕、近年、福岡県飯塚市山の神古墳を中心とする遠賀川流域の再評価や、玄界灘沿岸における6世紀の大野城市善一田古墳群、古賀市鹿部田淵遺跡（糟屋屯倉か）、船原古墳、7世紀後半にさかのぼりうる粕屋町阿恵遺跡（糟屋評か）の発掘調査があいつぎ、古墳時代から古代にかけて生じた北部九州の社会変動にかんする研究は、新たな局面を迎えた。第Ⅱ部は、そうした議論の総合化への予察である。

本章では、北部九州のなかでもとくに新羅系要素が集中する遠賀川上流域の資料、とりわけ福岡県田川市セスドノ古墳から出土した、ある一葉の金銅板に端を発し、新羅系文物からみた当該地域の動態をさぐる。

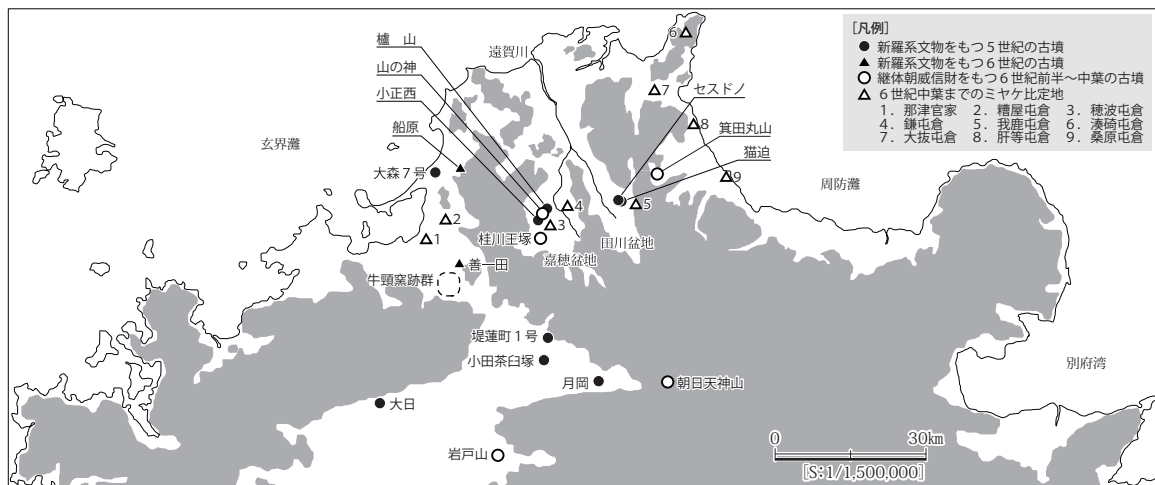


図57 第6章にかかわる北部九州のおもな遺跡

第2節 セスドノ古墳をめぐる学説史

第1項 概要 [図58・60]

セスドノ古墳は、周防灘から南西20km、遠賀川上流の彦山川中流域内陸の東西にのびる標高40～50mの丘陵上に立地する。直径37m、高さ5mの墳丘、幅5mの周溝、幅15mの周堤をあわせると、直径78mになる田川地方最大の円墳である。墳丘上には円筒埴輪を樹立し、竪穴系横口式石室を主体部とする。この石室の系譜をめぐっては、壁面に天井までおよぶ大型石をもちいる点が、韓国大邱達西面（達城）55号墳¹⁾の石室に類似することが指摘されている [森下1987]

石室からは、人骨5体（熟年男性・女性、青年男性・女性、小児）、珠文鏡、金銅製垂飾付耳飾、耳環、玉類、滑石製有孔円板、櫛、剣、刀、鉾、槍、石突、鉄鏃、横矧板鋌留短甲、鈴付鏡板・杏葉、辻金具、鉸具、須恵器（陶質土器？）の蓋付小壺、そして金銅板が出土した。

その築造時期については、報告者である佐田茂が石室に注目して5世紀末頃に位置づける見解を示して以降、大方の賛同を得てきた。しかし、時期を明確に伝える須恵器が出土していないことや、追葬可能な石室構造の本質を鑑みれば、さまざまな要素に目配りした年代観を想定する必要があるだろう。実際に近年、石室や武器、馬具の型式学的研究の深化にともない、その初葬、追葬をめぐる年代観がみなおされつつある。

第2項 円筒埴輪・石室 [図58・59]

セスドノ古墳の円筒埴輪はⅣ期（TK216-TK208並行）に位置づけられる [古川2007]。また、本墳に隣接し、石室構造が類似する田川市猫迫1号墳では、TK216型式期頃の須恵器と埴輪をとまなう [井上義2007]。

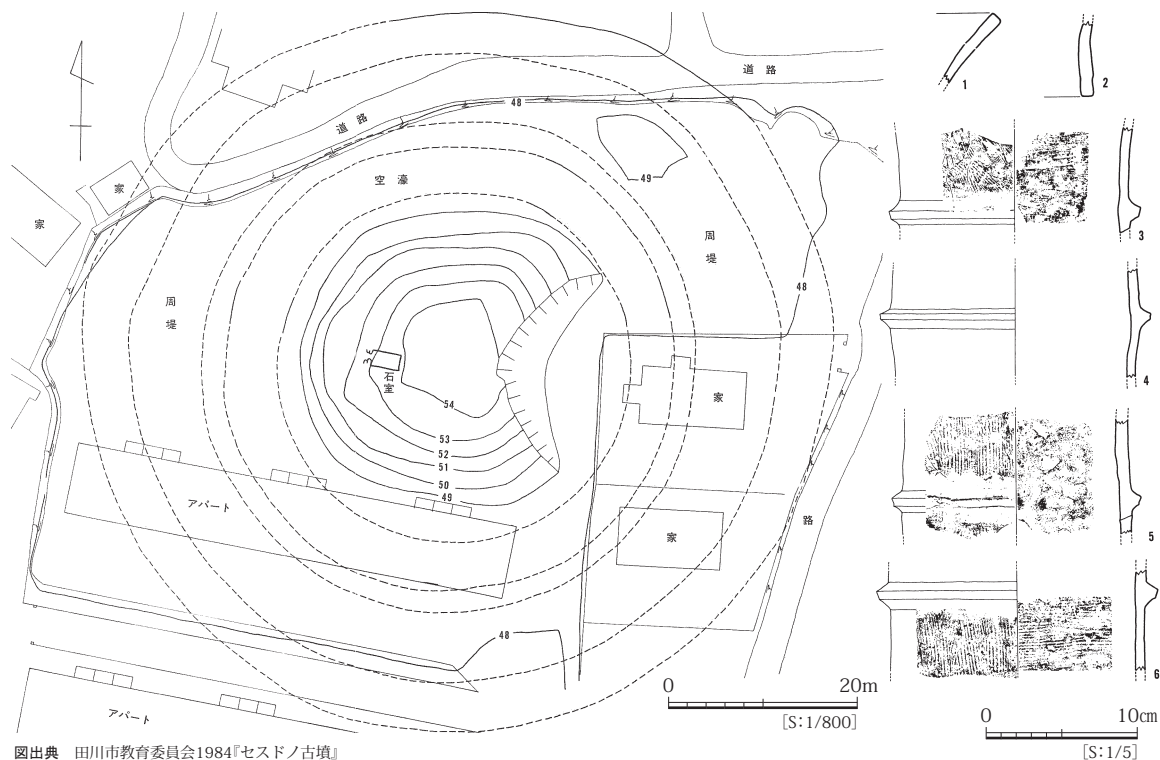


図58 セスドノ古墳の墳丘と円筒埴輪

重藤輝行は、猫迫1号墳の時期をTK73-TK216型式期に位置づけるとともに〔亀田ほか2004〕、遠賀川流域における大型古墳の石室の変遷を整理するなかで、「楣石上の天井石」という共通要素に注目して猫迫1号→セスドノ→苅田町番塚古墳（TK47-MT15）という流れを示し、セスドノ古墳を番塚古墳に先行するTK23・TK47型式期に絞りこむ〔重藤2015〕。

しかしながら、セスドノ古墳と番塚古墳の石室の壁面構造はまったく異なり、前者から後者への推移を認めるのであれば、そのあいだには系譜の転換ないし1型式以上の年代的懸隔を想定せざるをえない。むしろ、セスドノ古墳石室の玄門の平面構造は猫迫1号墳にちかい。

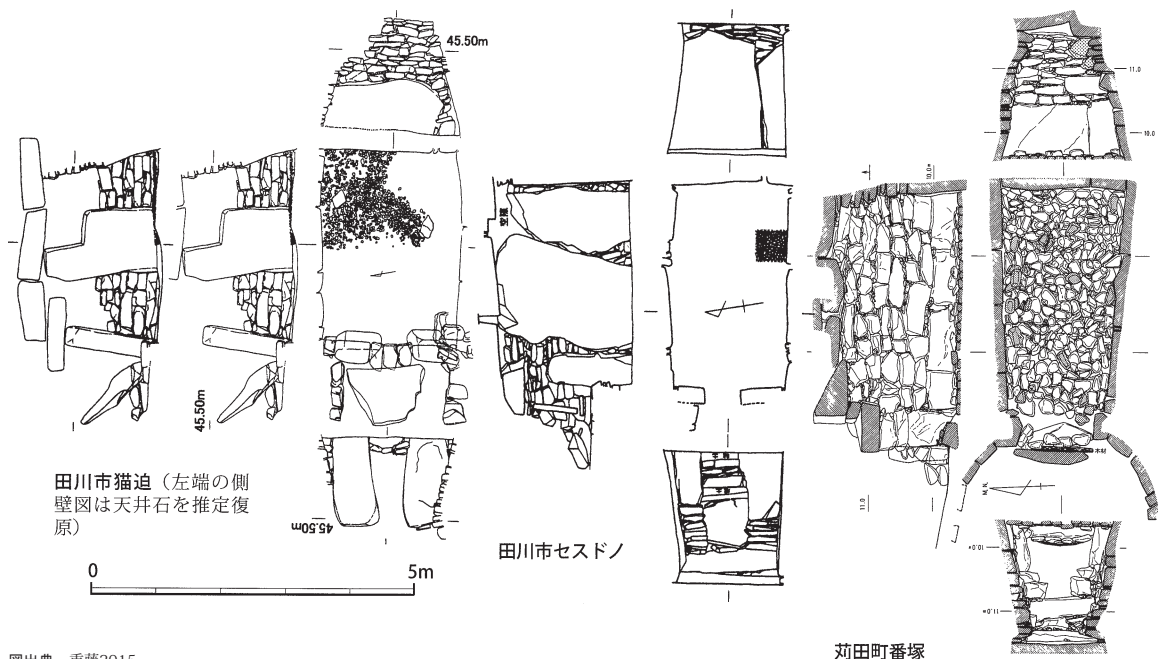
第3項 副葬品〔図60〕

馬具 副葬品からみたセスドノ古墳築造時期の遡上仮説にあたっては、鈴付楕円形鏡板轡と鈴杏葉の編年をめぐる議論が鍵を握る。鈴杏葉の編年については斎藤弘による体系的な研究があるが〔斎藤1985〕、セスドノ古墳出土品の編年をめぐる議論は内山敏行の馬具総論を契機とする。内山は別造りの鈴をつけた鏡板を祖型として、鈴が外につくものが古く、鈴が本体に食いこむものが新しいという前提に立ち、セスドノ古墳の馬具と短甲を、自身の馬具・甲冑編年における中期末段階（TK47並行）に据えた〔内山1996・2003〕。

たほうで、斎藤、内山と同じくPHALANX — 古墳文化研究会 — のメンバーであった宮代栄一は、セスドノ古墳の馬具を辻金具の型式からTK23型式期以降に位置づけ〔宮代・谷畑1996〕、その後も、轡の珠文配置や引手と銜の連結構造に注目しながら、内山と逆の変遷観を示している〔宮代2010〕。

桃崎祐輔は五鈴杏葉を編年するなかで、本体の縁に擬似鋸表現がある京都府松尾穀塚古墳例（TK23）と群馬県高根森古墳例を最古とみる永沼律朗の指摘〔永沼1983〕を受けつつ、セスドノ古墳例は本体の扁円剣菱部が扁平・幅広であり原型と思しき剣菱形杏葉にちかい特徴を示すため、前二者よりも古く位置づけ、轡・杏葉ともに最古段階のTK208-TK23型式期にさかのぼりうるとした〔桃崎2011〕。

宮代と桃崎の変遷観は近年、鈴付馬具出土古墳の代表格である愛知県志段味大塚古墳の築造がTK208-TK23型式期に位置づけられることによって説得力を増し、片山健太郎による鈴付馬具の編年〔片山



図出典 重藤2015

図59 遠賀川上流域大型古墳の初期横穴式石室

2017], および関義則が, ながらく散逸していた埼玉県四十塚古墳出土品の資料化をもとに三鈴杏葉の成立過程を論じるなかでも [関2018], おおむね支持されている。

武器 現存する鉄刀の茎尻形式は不明だが, 刃関幅は, 報告書Fig.7の2 (刀C) が3.2cm, 3と5 (刀B) が3.5cm, 6 (刀A) が2.6cmであり, 筆者の中期鉄刀分類のa～c類にあたる [第3章]。TK216-TK23型式期を中心とした時期に位置づけられよう。また, 新羅系の刀装具である凸状造出佩用装置をつけた短刀(刀D) も出土している。

3本出土した鉄鉾のうち残存長45.2cmを測る長身鎬式鉄鉾の初現は, 福岡県飯塚市向田Ⅲ-2号墳や朝倉市小田茶臼塚古墳出土品のように, TK208-TK23型式期までさかのぼりうる [第5章]。

鉄鏃は, 報告書に記載されたのはわずか15本だが, 実際には細片をふくめ, 150片以上が出土している。とくに図60に示した新古二相は, 次のような根拠によって分けている。

西岡千絵は, 中期鉄鏃の鏃長(鏃身長+頸部長)に占める頸部長の相関関係から, 鏃長が約5～10cm以下, 頸部長が約1～6cmの短頸鏃, 頸部長が6cm以上の長頸鏃に分類できることを示したうえで, ①短頸鏃最初期の大阪府和泉黄金塚古墳, 岡山県月の輪古墳, 大分県岬古墳では, 鏃長約8cm, 頸部長約4.5cm程度におさまるが, TK73型式期には若干の長頸化がみられ, 鏃長約9cm以下, 頸部長5cm以下の範囲で展開すること, ②TK216型式期には, 長頸鏃が出現するいっぽうで, 短頸鏃も継続し, 頸部長にもかなりの差があるが, TK208型式期には長頸鏃の頸部長が7～12cmのあいだで一定化することを指摘した。

古相の一群はあたかも長頸鏃に見えるが, 西岡の定義にしたがえば短頸鏃の範疇におさまる。また, 頸部の幅が7mm前後とB類よりもひろく, 時期的に古相を示す。類例としては, 中期中葉から後半にかけての群馬県鶴山古墳, 鳥根県中仙寺2号墳, 宮崎県下北方5号地下式横穴墓例が知られるが, 事例は多くない。中期後半以降に全国で大量の出土が知られる典型的な片刃長頸鏃の前段階の状況を示すものとする。鈴木一有も, 鏃身部が異常に長い片刃長頸鏃の一群について, TK23-TK47型式期に鏃身・頸部長が定型化する前の「揺籃期」の産物として評価するほか [鈴木一2005], 小嶋篤は, 福岡県苅田町百合ヶ丘27号墳(中期後半古段階) から出土した鏃身部が異常に長く頸部が無い柳葉鏃を「長刃鏃」の概念で把握し, 中期前半の鳥舌鏃が長身化する過程の一樣相と評価する [小嶋2013]。鏃身部の形態を問わず, 中期中葉において鉄鏃全体の長身化へ向けた試行錯誤があったとみられる。

このように, セスドノ古墳の鉄鏃は, TK216-TK208型式期を中心とする古い一群と, TK23-TK47型式期を中心とする新しい一群に分かれることがわかる。

短甲 セスドノ古墳の横矧板鉾留短甲は, 短甲編年総論のなかでしばしばとりあげられる。端的に言えば, 鉾の数が全部で101個程という, 鉾留短甲全体のなかでも最少級であることを重視し, 最新相に位置づける意見が多い [川畑2016, 滝沢2008, 平野2008]。帯金式短甲の終焉をもって古墳時代中期の終わりとする定義や [橋本達2010], TK47型式期とMT15型式期の境を中期と後期の境とみる通説に依拠するかぎりは, セスドノ古墳の短甲はTK23-TK47型式期に位置づけてよいだろう。

陶質土器/須恵器 陶質土器あるいは須恵器の両耳付壺と蓋が出土している。その故地や類例は不明瞭だが, 中久保辰夫はTK23-TK47型式期に位置づけている [中久保2018]。

第4項 小 結

猫迫1号墳の時期についても整理する必要があるとはいえ, おもに埴輪や須恵器の分析から, TK216型式期までに築造された猫迫1号墳に後続するセスドノ古墳がTK208型式期に築造・初葬されたという理解は, 副葬品の型式学的検討からも首肯できる。さらに, 最終末の様相を示す横矧板鉾留短甲の存在から, TK23-TK47型式期にかけて追葬されたとみてよい。以下ではこうした年代観を前提に論をすすめる。

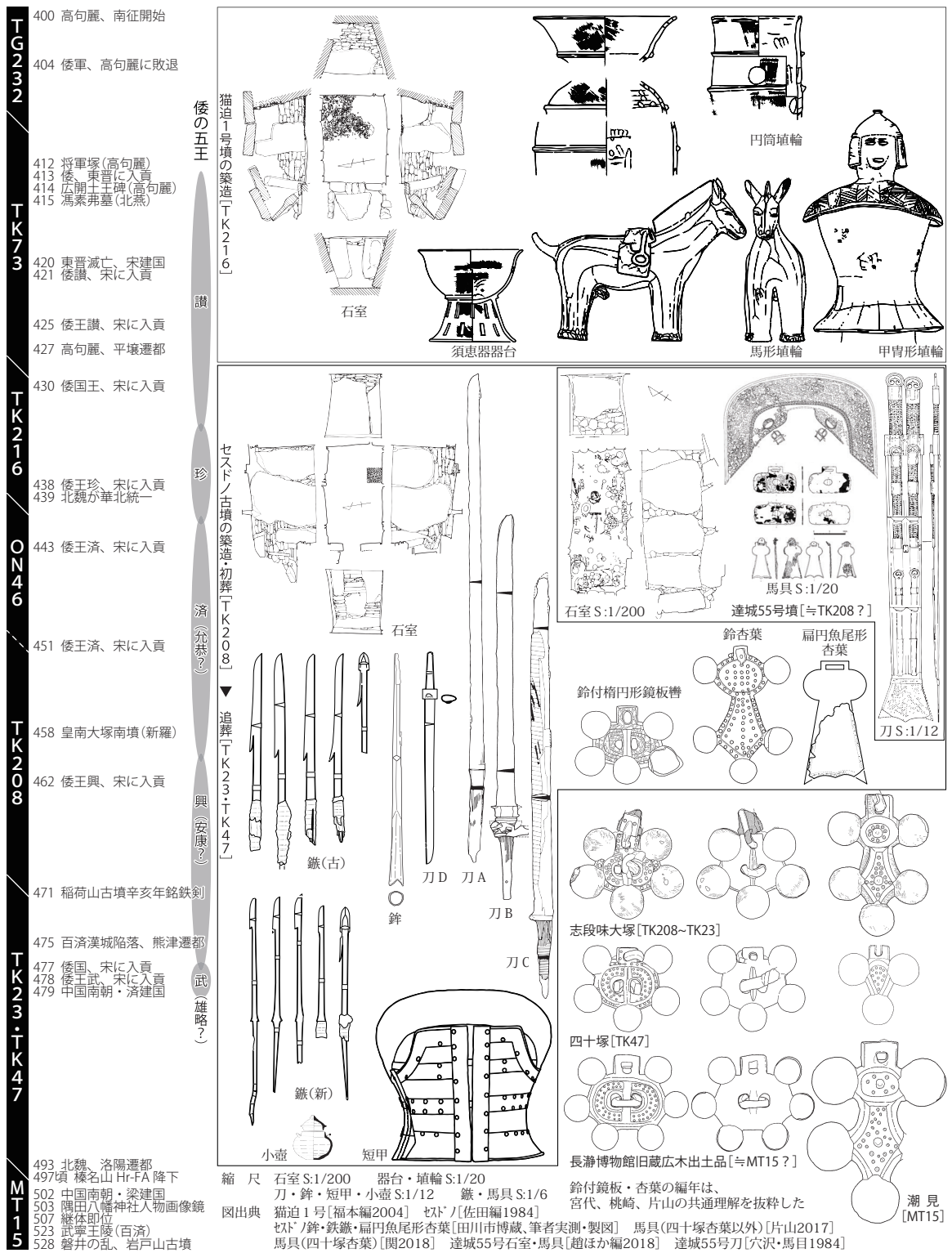


図60 5世紀史のなかのセトノ古墳

第3節 それは馬具か冠か

第1項 問題の所在

セスドノ古墳から出土した金銅板の破片は、報告書において「金冠の部分とは断定できないが、立飾の一部分である可能性」が指摘されつつも、太字で「金冠片」と項目立てされ、幅の広いほうが上向きに図示されたこともあり、ながらく異議が唱えられることはなかった。

しかしそもそも、この金銅板と直接対比できる冠の実物は知られていない。むしろ、韓国慶州皇南大塚南墳主槨出土品を思い起こせば、馬具の一種である「扁円魚尾形杏葉」の破片である可能性がある。本節では、金銅板の再実測図と写真を示しながらこの仮説を検証する。

第2項 資料の提示 [図61]

金銅板は、残存長7.2cm、残存幅5.5cm、厚さ0.2～0.5mmで、華奢な印象を受ける。表面は鍍金するが、裏面には何もほどこさない。図面向かって右側の縁と、下部の弧を描く部分以外は、欠損がはげしい。

縁には、約4mmの間隔をもつ平行線を、タガネをもちいて反時計回りに蹴り彫りする。弧部は1mmピッチ、直線部は1.5～2mmピッチのストロークである。平行線のあいだには、波状文を蹴り彫りする。波状文ピッチは約9mm、高さは約2mm。波状文の谷部には径約1mmの点を打つ。右側は表面の鍍金が剥落して緑青も吹いているため、文様がみえにくい。

第3項 扁円魚尾形杏葉の規格性 [図62]

田中由理は、外形線を重ねあわせる方法で馬具の形の規格性を類型化するなかで、新羅の扁円魚尾形杏葉のうち、王陵から出土するものと、周辺地域の古墳から出土するものには、法量と技術に格差があることを見出し、後者はたかい規格性をもって配布するために大量生産された可能性を指摘した。いっぽう、加耶にも新羅製品と形態や法量が類似するものがあるが、その多くは在地の技法をもちいて模倣製作したものであり、馬具にたいする志向の違いがあるという [田中由2015]。

このうち金銅板一枚造りで縁に波状列点文をほどこす事例は、皇南大塚南墳主槨・同北墳や天馬塚など、新羅王陵のなかでも最上位の墓からしか出土していない。

試みに、田中の方法に倣って、セスドノ古墳の金銅板を扁円魚尾形杏葉として復元し、皇南大塚南墳出土品2枚の輪郭と重ねると、魚尾部両側の角度が一致することがわかる [図62、田中分類のタイプ③]。この2枚も蹴り彫りで波状文をほどこすことから、セスドノ古墳の金銅板は「扁円魚尾形杏葉」と判断する（報告書に掲載されていない皇南大塚南墳出土品のなかには、点打ちで波状文をほどこす事例もある）。

ただし、これらは合同ではなく相似形である。また、皇南大塚南墳例の蹴り彫りは精緻で波状文もなだらかな曲線を描くのたいし、セスドノ古墳例の蹴り彫りは粗く、波状文も曲線というより直線を繋げたような印象を受ける。以上のような状況から、これらは同工品ではなく、設計図を共有した別工人の製作と考える。

第4項 扁円魚尾形杏葉の性格

三燕・高句麗・新羅馬具の系譜や並行関係を整理した諫早直人は、とくに鎧の型式に注目しながら、皇南大塚南墳副槨出土馬具は5世紀中葉をさかのぼりえないことを示し、その墓主は新羅第19代訥祗王（在位：417-458）であるという立場をとる。そのうえで、5世紀の中原高句麗碑が物語るような高句麗による軍事的圧力からの脱却をはかる新羅が、独自のアイデンティティとして創出した装飾馬具の代表として扁円魚尾

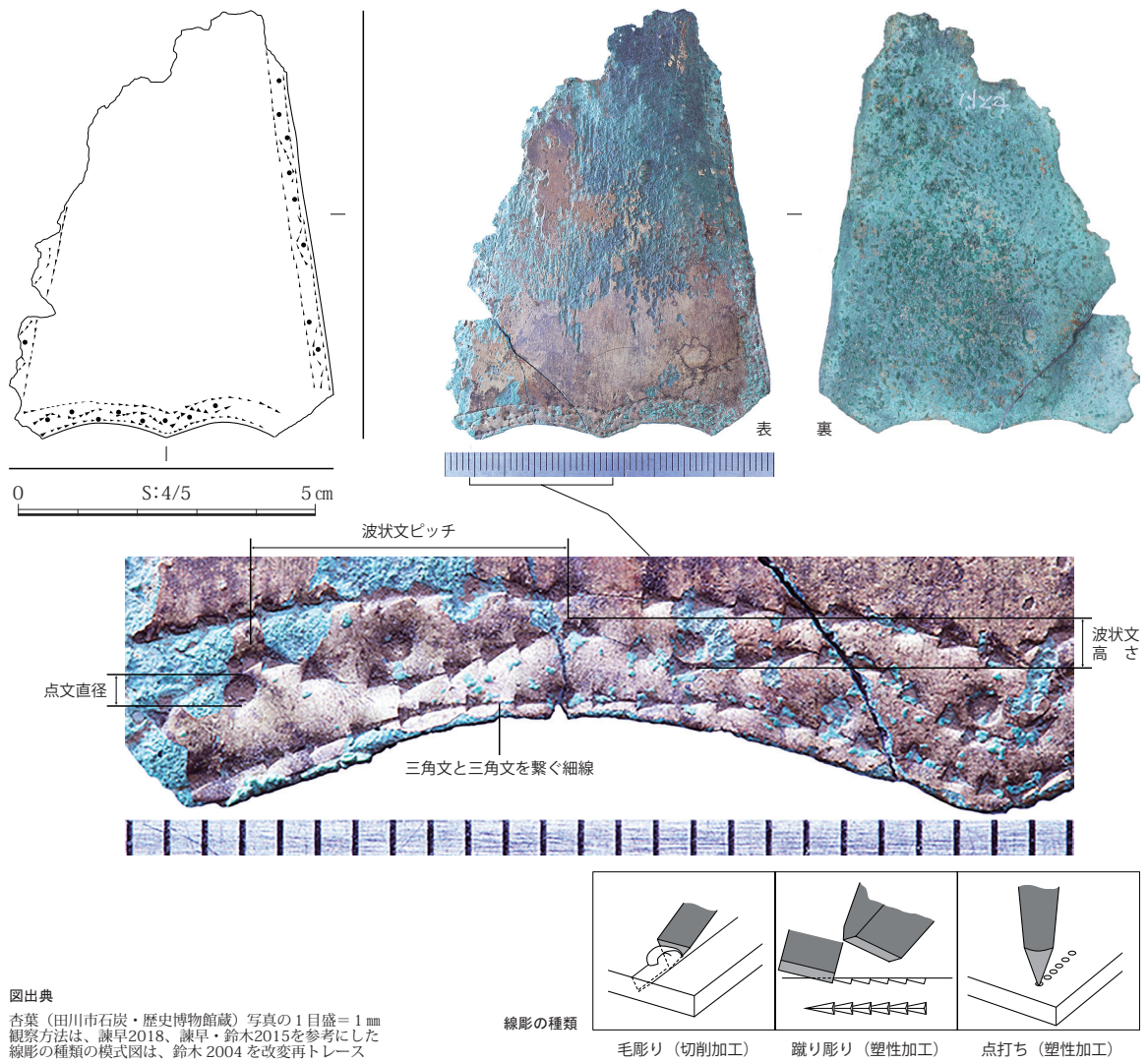


図61 セスドノ古墳出土の金銅板

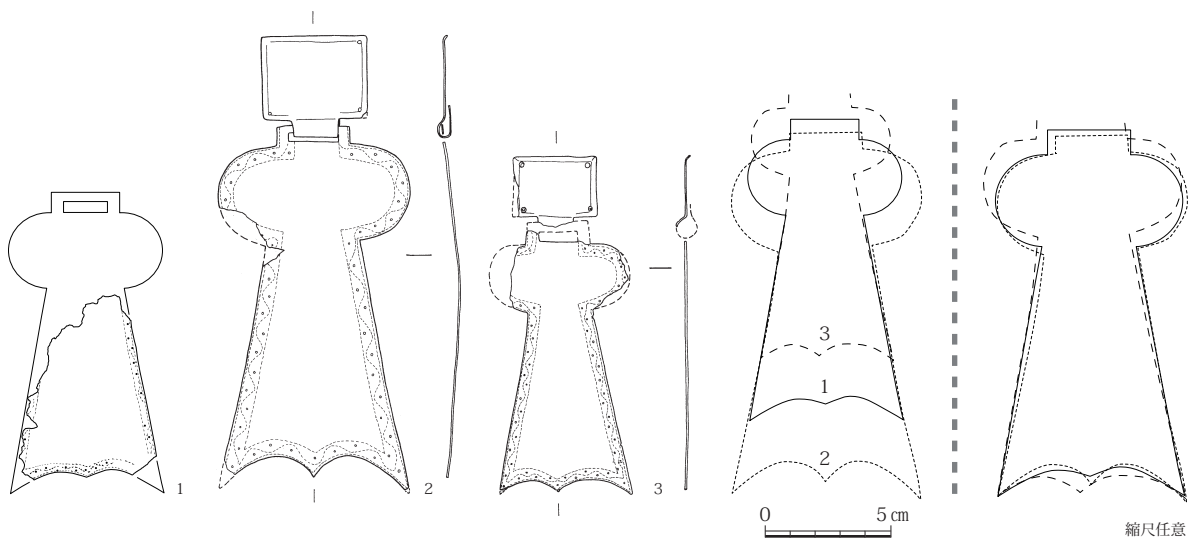


図62 セスドノ古墳出土金銅板の復元とその類例との比較

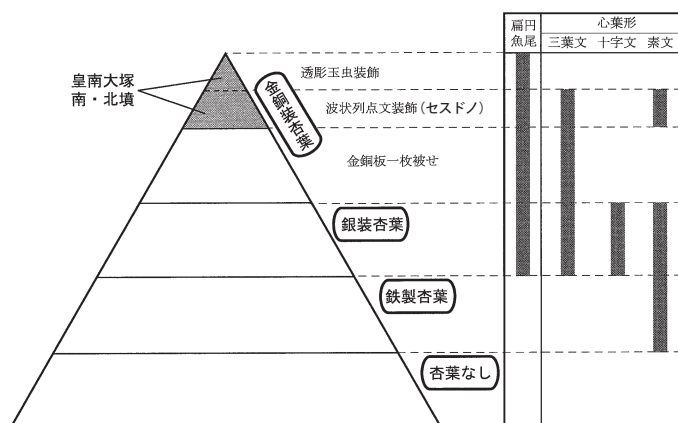


図63 杏葉にみる5世紀前葉～中葉の新羅馬装の階層性 [諫早2012改]

わち、南墳副槨では金銅装透彫玉虫装飾をふくむ、技巧を凝らした重厚かつ荘厳なデザインの馬具が8組以上計827点（副槨出土品の約11%）出土しているのにたいして、主槨では装飾大刀や装身具、甲冑、容器類が主体をなす。とくに馬具についていえば、轡や鞍、鐙といった騎乗に直接必要な部品はふくまず、金銅板一枚造りの扁円魚尾形杏葉12枚、鉄地銀張心葉形杏葉4枚、雲珠180点、金銅製装飾1点の計197点（主槨出土品の約1%）が出土したにすぎない。そもそも、副槨に取められた数百本の鉄鉾や8組以上の装飾馬具は個人で装備できる範疇を超えていることや、それを想起させる大勢の兵士に護衛されながら牛車に乗る王を描く高句麗壁画を参考にすれば、高句麗の諸制度を模倣した新羅王は公の場で馬に乗る風習はなかったと考えることもできる [第5章]。

くわえて高久健二が注目するように、皇南大塚南墳と北墳の築造プロセスにおいては、それぞれ墳墓としての本来的な墳丘（1次墳丘）を構築したのち、墳丘頂上部付近で馬具の埋納や土器の供献儀礼にともなう墳丘（2次墳丘）が構築される [高久2018]。2次墳丘に埋納される馬具は、南墳、北墳ともに、金銅板一枚造り扁円魚尾形杏葉と金銅製雲珠という組み合わせで共通しており、その他の轡や鐙、鞍などは出土していない [図64]。つまり、皇南大塚南墳主槨出土馬具の様相は、埋葬をともなわない儀礼と共通するのである。この状況は、セストノ古墳の扁円魚尾形杏葉も孤立した存在であることを考えるうえで示唆に富む。

たとえば桃崎祐輔は、この手の杏葉を「葬送用明器」と理解し、セストノ古墳の被葬者が弔問外交などの場で入手したと考える [桃崎2013]。また、福島県管内37号・38号横穴で同巧の雲珠と辻金具が出土したことを受け、馬具保有や副葬の原理に「形見分け」が存在した可能性を指摘する [桃崎2002]。

宮代栄一も管内横穴墓群のほか、静岡県山ノ崎古墳・鍋坂3号墳、同県堀之内13号墳・D1号横穴の馬具分割副葬に注目し、優位な古墳のほうが多くの馬具を副葬する傾向を指摘しつつ、同じ馬装を構成する馬具を切り離して副葬する背景に、「形見分け」や同じ馬装の一部をもつ者どうしの同族関係の確認に類する営みを想定する [宮代2016]。

皇南大塚における金銅板一枚造りの扁円魚尾形杏葉のあつかわれかた、および、孤立した馬具へたいする桃崎、宮代の意見を参考にすると、セストノ古墳の事例についても、その華奢な構造とあわせ、実際の乗馬や軍行には供しない「葬送用明器」や「形見」のようなものと考えられる。倭王済に比定される允恭の崩御（453年か）にともなって新羅から弔問団が派遣されたという『日本書紀』の記事²⁾を思い起こすが、むしろ、その実際の経緯はわからない。しかしそれでもなお、セストノ古墳の初葬者と皇南大塚南墳の被葬者が同世代を生きた可能性がたかいことや、セストノ古墳石室の系譜が達城55号墳に求められることから、新羅王権との交流を示す重要な資料という評価は揺るがないだろう。

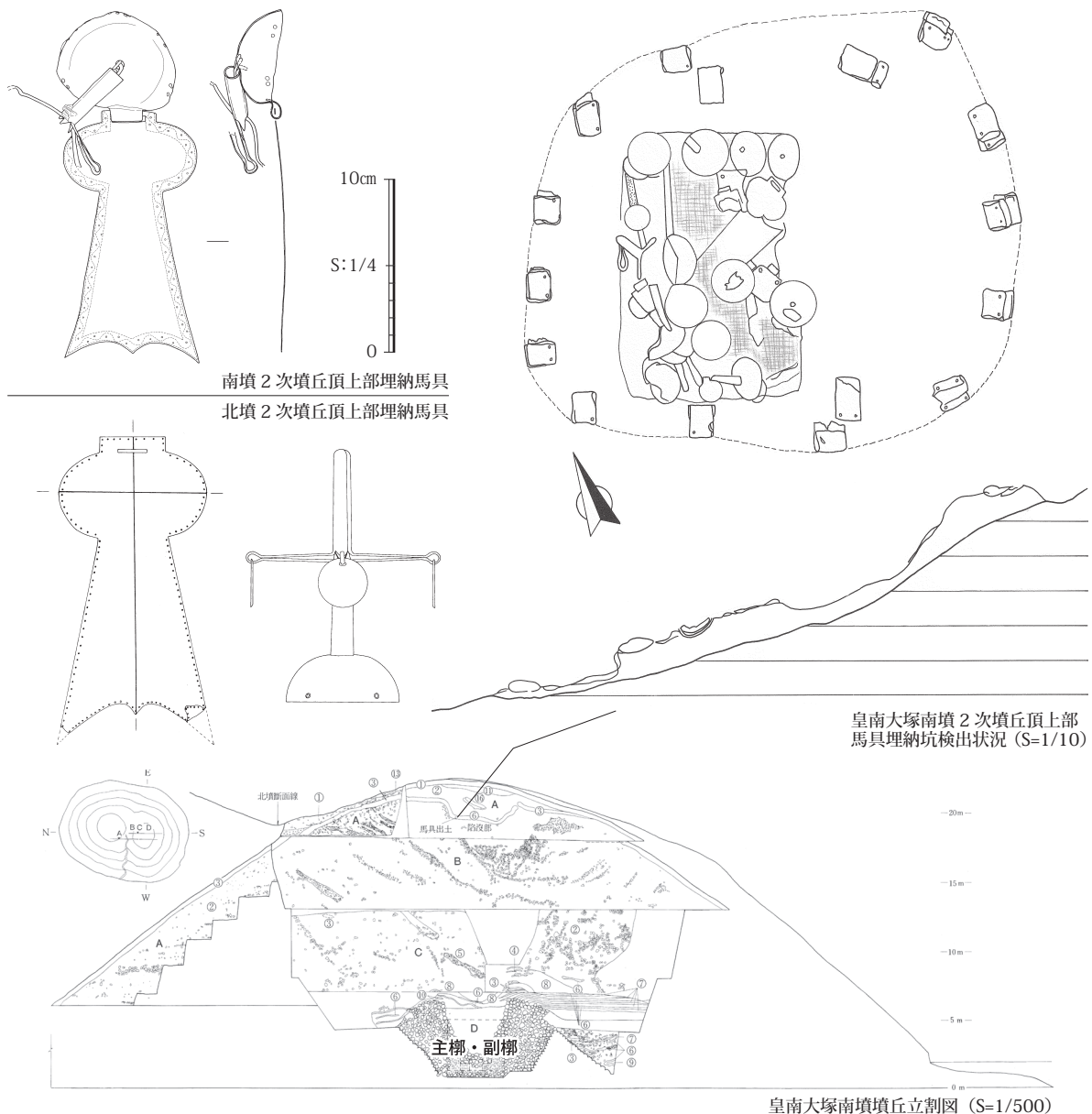


図64 皇南大塚2次墳丘頂上部埋納馬具 [高秀吉編1993より構成]

第4節 磐井の乱前夜の動と静

第1項 セスドノ古墳の被葬者像と、軍事的境界領域の設定 [図65・66]

以上の分析をふまえて、セスドノ古墳の被葬者像および5世紀の北部九州勢力の動態を素描してみよう。

結論を先にいえば、新羅王権で一定の役割を担った人物が祖国の威信財をたずさえて北部九州、とくに田川・嘉穂両盆地を中心に渡来したと考える。そこには、新羅と倭双方の中核レベルの交流にかぎらない、新羅の有力者と北部九州勢力の接触があった。そして、その接触こそが当地域の5・6世紀史を形づくったのである。

猫迫1号墳では、輪鍔や鞍を表現した最古段階の馬形埴輪、甲冑形埴輪、革綴甲冑と思われる鉄片が出土し、セスドノ古墳は、周溝・周堤をふくめた直径78mの大型円墳である点に、つよい独自性を認められる。

いずれも5世紀中頃までに台頭した新興勢力の古墳として評価できよう。

その後の当地域には、嘉麻市かつて塚古墳（≒TK23）の鉄鐸や、向田Ⅲ-2号墳（TK208-TK23）の棒状立間用金具付鑢轡、山の神古墳（TK23-TK10）の鑄造鉄斧、飯塚市櫛山古墳（TK47）の葉文透彫帯金具、飯塚市小正西古墳1号石室（TK47-MT15）の補強鉄棒付木心鉄板張輪鐙など、新羅・加耶周辺に類例の多い資料が散見される。櫛山古墳の帯金具は皇南大塚南墳や達城55号墳と共通し、小正西古墳1号石室の輪鐙もまた、星州星山洞59号墳や陝川玉田M28号墳などに類例があるが、日本では唯一の事例である。

このうち、セスドノ古墳とかつて塚古墳の竪穴系横口式石室の幅は近似するとともに、複数本の刀剣や長身鎬式鉄鉾、片刃長頸鏃、横矧板鉾留短甲など、類似した武装をもつ。向田Ⅲ-2号墳も竪穴系横口式石室を主体部として、それに準ずる武装具を副葬する。山の神古墳や小正西古墳1号石室でもセスドノ古墳と似た鉄鏃組成がみられる〔中井2015〕。ここで注意すべきは、セスドノ古墳や山の神古墳の独立片逆刺長頸鏃は、倭系の武器でありながらも、その埋葬施設の多くに渡来系要素が認められることである〔鈴木一2003〕。セスドノ古墳やかつて塚古墳、向田Ⅲ-2号墳の長身鎬式鉄鉾、小正西古墳1号石室の刀身式鉄鉾も帯金式甲冑との共伴事例が多いものの、朝鮮半島との双方向的な交流のなかで出現した可能性がたかい器物である〔第5章〕。

これらの古墳被葬者の活躍期は5世紀後半、すなわち雄略朝に重なり、対東アジア外交を睨んだ列島内の秩序形成がすすめられた時期にあたる。田川・嘉穂両盆地周辺では渡来系の一族を汎列島的な倭の秩序に組みこむことによって、対外戦略に長けた指揮官を上位とする階層構造が整備された可能性が考えられる。

ところで、福岡北部の響灘に面する遠賀川流域は、一見、犬鳴山系によって福岡平野と隔たれた閉鎖的な地域であるかのような印象を受ける。しかし朝鮮半島側から鳥瞰すると、西から唐津平野、糸島半島、福岡平野、京都平野とならんで、倭への開放的な窓口を形成していることは一目瞭然である。さらに福岡平野は二日市地峡帯を挟んで、筑後平野、佐賀平野へとつながる。当該地帯においては、セスドノ古墳、かつて塚古墳、向田2号墳のほか、小田茶臼塚古墳、佐賀県唐津市中原5号墳、上峰町船石2号墳など、帯金式甲

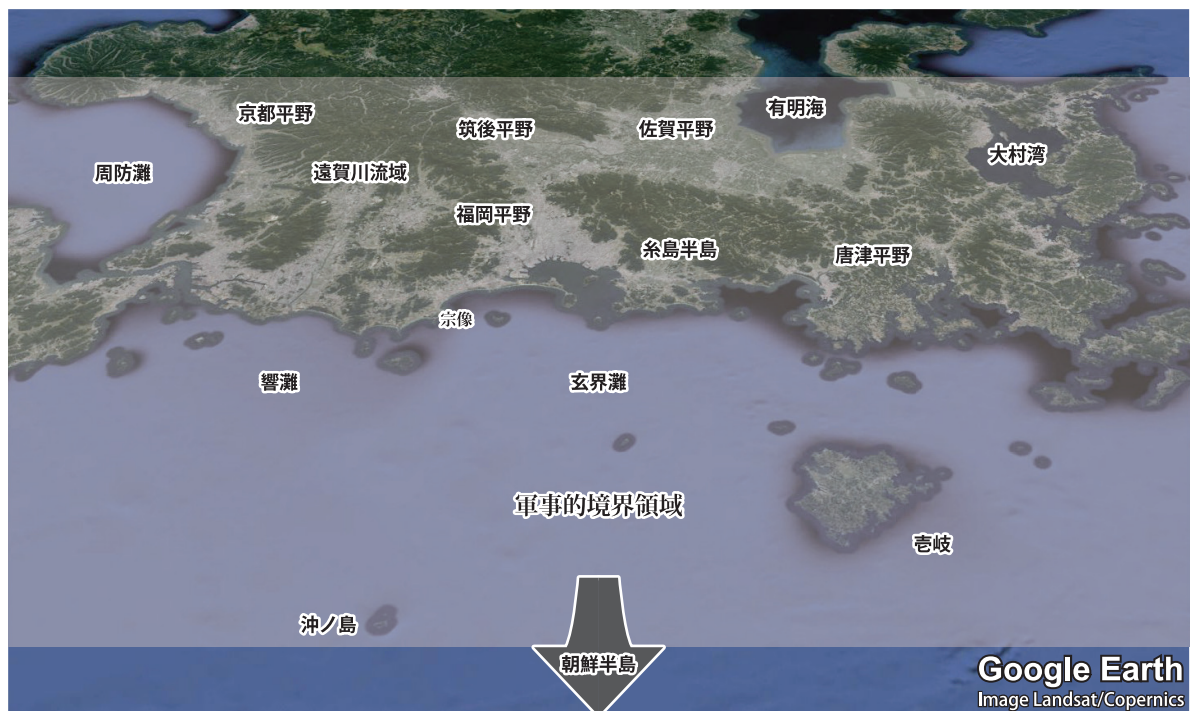


図66 北西からみた北部九州の軍事的境界領域

冑や中期型の特殊鉄鉾を副葬する古墳が日本列島でも有数の集中域を形成する。さらに、瀬戸内を介して近畿へつながるルートの起点に位置する京都平野においては、稲童古墳群において金銅装眉庇付冑をふくむ豊かな甲冑セットや中期には希少な金属装倭装刀剣の出土が知られる。倭王権中枢部の意向を承けながら対朝鮮半島政策にあたった集団編成が、まさにこの地域一帯でおこなわれたのであろう。

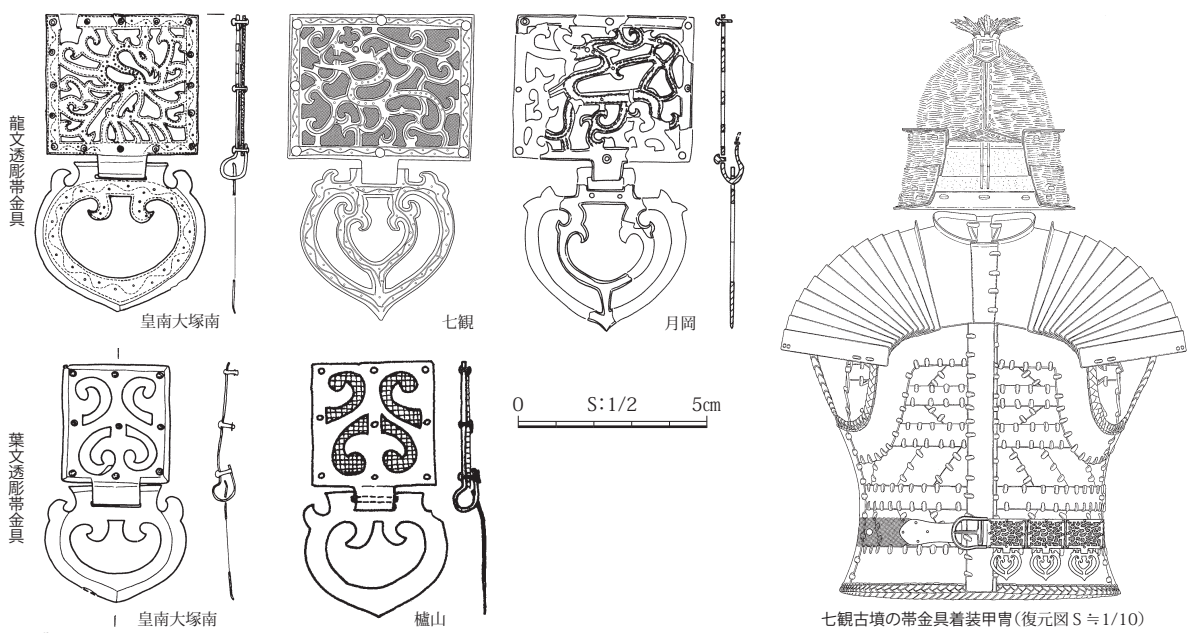
ただし、いうまでもなく平野や盆地といった小地域ごとのまとまりや階層編成は考慮すべきであり、遠賀川流域の集団も軍事的な境界領域の一翼を担ったとみるべきだろう。猫迫1号墳やセストノ古墳の被葬者らはそうした地域形成の第1世代に位置づけることができる。そのばあい、大邸周辺に出自をもちつつ新羅王権中枢とも密な関係にあったセストノ古墳の被葬者集団は、大型の墳丘や祖国様式の石室を築造するとともに、中期後半の倭の武装体系のなかでも優位に位置づけられる独立片逆刺長頸鎌や横刃板鉾留短甲の副葬にいたるが、それはむしろ倭の境界領域で果たした軍事的役割の褒章と評価できるだろう。

このように考えると、とくに突出した地形をみせる宗像や福津周辺、あるいは沖ノ島、壱岐において上位の武器・甲冑や渡来系文物が混在するありかたも、そうした領域の最前線としての必然であることにあらためて気づかされる。明確な線引きはむずかしいものの、以上をふまえて、本章以降でもちいる「北部九州の軍事的境界領域」とはおおむね図66中央に帯状に網掛けした地域一帯を指すことにしたい。

第2項 古墳時代中期の新羅系文物

このほかにも、5世紀の新羅系、あるいは新羅を介して入手したとみられる中国大陸系の文物として、福岡県宗像市久原I-1号墳の鉄製輪鐙（≒中期中葉）、新宮町大森7号墳の三葉環頭大刀（≒後半古段階）、朝倉市堤蓮町1号墳の三累環柄頭（≒前半）、朝倉市小田茶臼塚古墳の凸状造出佩用装置（≒後半古段階）、うきは市月岡古墳の龍文透彫帶金具（≒中葉）、佐賀県佐賀市大日遺跡2区ST0001の鐔付鉄鉾（≒末）を挙げる〔図65〕。

しかしながら以上の古墳は、遠賀川上流域にみられるような時期、分布の集中は認められないし、堤蓮町



図出典

皇南大塚南(高秀古編1993『皇南大塚Ⅱ(南墳)発掘調査報告書』(図版・図面)文化財管理局文化財研究所)
七観(阪口英毅編2014『七観古墳の研究—1947年・1952年出土遺物の再検討—』七観古墳研究会 甲冑復元図は改変)
月岡(児玉真一編2005『若宮古墳群Ⅲ』吉井町文化財調査報告書19)
壱山(嶋田光一1991『福岡県壱山古墳の再検討』『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集 児島隆人先生喜寿記念事業会)

図67 龍文・葉文透彫帶金具と着裝甲冑

1号墳や大日遺跡2区ST0001は上位階層に位置づけられるわけでもない。くわえて、扁円魚尾形杏葉や三累環頭大刀、三葉環頭大刀、鐔付鉄鉾は近畿への集中がみられないことから、これらの多くは制度化した身分標識として倭で定着しない、単発的な舶載品として評価すべきだろう。したがって、こうした希少な金属製品が出土したからといって、いわゆる「倭王権との密接な関連」などうかがうことはできない。

たほう、龍文透彫帯金具も慶山林堂洞7B号墳や皇南大塚南墳出土品をはじめとする新羅系文物として知られるが、倭では大阪府七観古墳や和歌山県五条猫塚古墳、兵庫県宮山古墳、滋賀県新開1号墳など、畿内周辺の甲冑出土古墳に類例があり、王権間の交渉を象徴する。五条猫塚古墳や七観古墳例のような帯金具を着装した甲冑は新羅にはみられないことや[図67, 上野2014]、同じく新羅系の意匠である葉文が倭独自の眉庇付冑に採用されたことも[橋本達1995]、新羅系の金工技術や意匠が倭の上位武装に組みこまれたことを示すものだろう。金銅製品をふくむ九州最多4組の帯金式甲冑が出土した月岡古墳についても、倭王権による地方経営を担う存在と評価されることから[藤田1988]、帯金具は倭王権を介して入手したと考える。

このように、新羅系文物のなかにも、倭王権の財体系に組みこまれたものと、組みこまれなかったものの二者がある。東アジア全体を包む、刀剣をもちいた王権の表象や身分秩序表示システムへ参入するために独自の様式を完成させたい倭にとって、外来系の三累環頭大刀や三葉環頭大刀、鐔付鉄鉾は、有事における集団編成の指標とはなり得なかったのだろう。

第5節 結 語

本章の成果は次の2点である。

- ①セスドノ古墳は遅くともTK208型式期には築造・初葬され、TK23・TK47型式期にかけて複数回の追葬があった可能性を示した。実年代に換算すれば、おおむね5世紀中葉から末にかけての40年ほどの時間幅が考えられる。中期甲冑編年の最新段階に位置づけられる横矧板鋌留短甲は最終埋葬にともなうと考えられ、本墳を一律TK47型式期に据えた先行研究はすくなくならず、各品目の型式学的位置づけや実年代観を古く修正する必要が生じた
- ②そのうえで、石室の系譜から新羅系渡来人一族と密接にかかわる可能性を念頭におきつつ、これまで漠然と「冠」片と考えられてきた金銅板の破片は、実際には「冠」としての対比資料が存在しないなか、新羅最大の王陵である皇南大塚南墳主槨から出土した扁円魚尾形杏葉と規格が同じであることを示した

西暦400年以降、軍事大国高句麗の南征という圧力下で、新羅はそれまでの倭との敵対関係を解消しようと企図し、たいする倭も金官加耶の衰退にともなって、ガラスや金属製品をはじめとする財を確保するために新羅との交渉を本格化させている。5世紀の新羅系文物が北部九州に集中するいっぽうで、新羅王陵から出土する金冠や金製帯金具などにも日本列島産の硬質硬玉が多量にもちいられている状況は、こうした双方向的な交流を示すものだろう[朴2007]。

このように倭と新羅の利害が一致する東アジア情勢のもと、猫迫1号墳やセスドノ古墳の出現以降、田川・嘉穂両盆地周辺において新羅系文物と倭の武器や甲冑と一緒に副葬する古墳が集中的に築造された事実は、北部九州の古墳時代史を描くうえで過小評価できない。5世紀前半から中頃にかけて田川盆地周辺に入植した新羅系渡来集団そのものか、あるいはその後裔が、倭王権による軍事的厚遇を受けながら外交を担ったと評価しうが、皮肉にもそれはそのまま、磐井の乱やその後のミヤケ設置による地域再編の前史へと反転したのであった。

なお、6世紀における北部九州勢力の動態については次章以降あらためて論じるにしても、田川・嘉穂両

盆地周辺の6世紀史へたいする見通しとして、5世紀の新羅系文物が集中した当該地周辺に6世紀の倭系威信財が集中すること、すなわち特定地域における財体系の核が転換した事実は、磐井の乱後の地域社会の変革を示すと予察しておきたい。

すなわち、ミヤケの設置や経営には渡来人が関与したという門脇禎二の説を〔門脇1957〕、考古資料の実態に引きつけて拡大解釈するならば、乱後処理の過程で穂波屯倉や鎌屯倉が集中的に設置された当地においては、前方後円墳である山の神古墳や桂川町王塚古墳などの被葬者に6世紀の倭系威信財である振り環頭大刀や鉄地金銅張f字形鏡板付轡、三葉文楯円形杏葉を重点的に配布することで在来勢力を牽制するとともに、在来勢力へたいする外来系環頭大刀の配布や横穴墓の採用をつうじて、新たな地域秩序を構築したと考えることができる〔岩橋2015, 辻田2012, 松浦2005など〕。小正西古墳1号石室の追葬にともなう鉄製f字形鏡板付轡と山の神古墳や桂川王塚古墳の鉄地金銅張製品の材質差、あるいは、飯塚市鶴三緒横穴や田川市伊田横穴群から出土したという規格大量生産品の単龍鳳環頭大刀は、こうした秩序を反映するものだろう。

次章以下では、このような仮説を一つの羅針盤としながら、古墳時代中・後期における北部九州社会の動態変化をみていきたい。

註

- 1) 【**達城古墳群**】 韓国慶尚北道大邱市達城郡達西面所在。このうち55号墳は、日本統治時代（1910-1945）の1923年に、朝鮮総督府博物館古蹟調査課嘱託研究員だった小泉顯夫と野守健が発掘調査した5世紀中頃の円墳（皇南大塚南墳や、倭のTK208型式期に並行する頃か）。主体部の竪穴系横口式石室から、慶州新羅王陵の様式と類似する金工品と加耶系統の土器が出土したことから、大邱地域の支配者の墓と考えられる。とくに、大・中型の刀と小型の笄を2本ずつ並べて計6本組みあわせた金銅装親子三葉環頭大刀（復元全長67.9cm, 図60右端中央）は、鞘尻に扁円魚尾形杏葉を思わせる銅板をつけており、新羅王権中枢への従属と大邱一帯へたいする優位性の二面性を示す。ただし、穴沢啄光はこの意匠について民族大移動時代のロシアノボシースク付近ヂュルソ河墓地出土品と対比しながら、5世紀の汎ユーラシア的コンテキストのなかで評価すべきことを喚起する〔穴沢・馬目1984〕。
- 2) 【『**日本書紀**』允恭42年春正月条】「四十二年春正月乙亥朔戊子、天皇崩りましぬ。時に年八十一。是に於て新羅王天皇既に崩りましぬと聞きて、驚き愁ひて、調船八十艘及び種々の樂人八十を貢ぎ上る。是れ對馬に泊りて大に哭す。筑紫に到りて亦大に哭す。難波津に泊りて、則ち皆素服きる。悉に御調を捧げ、且つ種種の樂器を張りて、難波より京に至りて、或いは哭き泣ち、或は歌ひ憊ふ。遂に殯宮に參會ふ」〔読み下しは、黑板勝美1931『訓読 日本書紀』中巻 岩波文庫：pp.204-205〕

第7章 振り環頭大刀の展開と王権 — 岩戸山古墳の大刀形石製表飾を手がかりに —

第1節 はじめに

本章では、福岡県八女市岩戸山古墳から出土した振り環頭大刀形石製表飾を手がかりとして、振り環頭大刀が地方に展開する過程を検討する。

振り環頭そのものの成立が倭の内的発展のみならず、中国大陸由来の環頭大刀の柄を倭風に改造する過程で徐々に形づくられたものであろうことは第2章で述べた。すなわち、現状における振り環頭大刀の最古事例の一群である峯ヶ塚古墳出土品は、いずれも内蔵する刀身が長大な一文字d類とみられるほか、三輪玉や鰭本孔、茎元挟り、象嵌、振り技法といった、古墳時代中期末までに出現していたさまざまな要素を収斂している。堅穴系埋葬施設にほぼ同形同大の大刀を多量に副葬する状況もまた、量的な差で格差を表示した中期的な刀剣副葬あるいは埋納のありかたを彷彿とさせる。このように、振り環頭大刀は後期前半に突如出現したものではなく、中期までの刀剣にまつわる要素を複合するかたちで出現したものとする。

また、後期前半から中葉にかけての資料が、大阪府芝山古墳や福井県十善の森古墳などでも出土し、このうち芝山古墳においては最低6振以上の副葬が確認されていることから [金2014]、分布の核が近畿地方とその周辺にある状況が揺らぐことは当面ないだろう。そうした点において、穴沢味光が紹介した本来の「威信財システム」[穴沢1985ab] とはややニュアンスが異なるものの、近年定着した「継体朝威信財」の概念は振り環頭大刀の性格を直感的に理解するうえで利便である。

しかしながら、振り環頭大刀の展開を継体勢力とむすびつける高松雅文の解釈が [高松2006]、6世紀前半の継体没後から7世紀初頭の副葬事例にいたるまで、無批判に拡大されていることがまみられることには疑問を抱かざるをえない。くわえて、これまでは畿内とその周辺のモデルの説明には熱心であっても、日本列島における分布の西限である北部九州や、東限である東北南部・関東への展開の背景については、いまだじゅうぶんな説明が提示されてこなかった。以下、北部九州と関東への振り環頭大刀展開のありかたを比較し、倭王権の地方進出過程を特定の器物からさぐる方法論を提示したい。

第2節 岩戸山古墳出土の振り環頭大刀形石製表飾

岩戸山古墳はMT15-TK10型式期に築造された全長138mの前方後円墳で、同時期の九州では最大規模を誇る。墳丘は、真の継体陵とみられる大阪府今城塚古墳（190m）と10（今城塚）：7（岩戸山）の比率で規格を共有し [図68, 小澤2003]、愛知県断夫山古墳（151m）、群馬県七興山古墳（146m）に次ぐ規模を誇る。そしてそれ以上に、久留米藩の学者だった矢野一貞（1794-1879）の『筑後将士軍談』や、戦後の森貞次郎による地道な考証をつうじて、古墳時代最大の内戦である「磐井の乱」を主導した筑紫君磐井の寿墓に比定されたことでも著名だろう [森1956]。

一貞、森ともに岩戸山古墳を磐井の墓と比定した根拠の一つとして、石製表飾がある。石製表飾は、約9万年前の阿蘇噴火にともなってできた阿蘇溶結凝灰岩でつくられた、墳丘上を飾る石製品の総称であり、人形や動物形、大刀形、甲冑形、鞍形など多様な種類が知られる。分布の中心は、福岡県南部から熊本県にかけての有明海沿岸地域や八代海沿岸地域にある。基本的には一基の古墳に人形や甲冑形を1、2体樹立するにとどまるが、岩戸山古墳にはそのすべての種類が立ちならび、石製表飾文化の白眉である [図69]。

大刀形のなかには、振り環と三輪玉を装着した振り環頭大刀を模すものがふくまれる。大刀形石製表飾は岩戸山古墳以外に類例が知られていないものの、実物の振り環頭大刀については1980年代後半以降多くの研究の蓄積があり、古墳時代後期における倭の刀剣体系の最上位に位置づけられること、そしてその生産と流通には倭王権、とくに継体勢力が深く関与していたことが指摘されている。

それでは、このように倭王権との紐帯を示す振り環頭大刀を模した石製表飾の樹立と、筑紫君磐井をめぐる地方豪族の反乱伝承という背反する現象は、どのように理解すべきだろうか。岩戸山古墳の振り環頭大刀形石製表飾の性格について、類例のない現状では石製表飾文化の枠組みで理解することはむずかしい。以下、実物の振り環頭大刀の研究と九州での様相をまとめ、その歴史的意義を考える。

第3節 研究の現状と資料の提示

第1項 研究の現状

岩戸山古墳の振り環頭大刀形石製表飾については、はやくに後藤守一が大刀形埴輪を集成するなかで注目し、三輪玉と直弧文がほどこされることを指摘したが、振り環部分については触れていない〔後藤1932abc〕。これは、振り環が刀装具であるという認識がなかった時代の制約であり、近年にいたってようやく深谷淳が倭装の金属装大刀全体の構成要素を検討するなかで注目した。深谷はこの石製品に振り環が表現されていることを述べ、装飾大刀研究の立場から6世紀前半の資料と評価しうることを示唆した〔深谷2008〕。

1963年夏に北部九州を襲った集中豪雨によって、岩戸山古墳の封土の一部が流れ、円筒埴輪列や石製品が露出した。このとき石製品については鞍1、扁平石製品（鞍?）1、大刀形4（いずれも鞘部分）が出土した。原位置はあきらかにされなかったものの、大刀形のうち3点が図化され、残り1点は現地に埋め戻さ

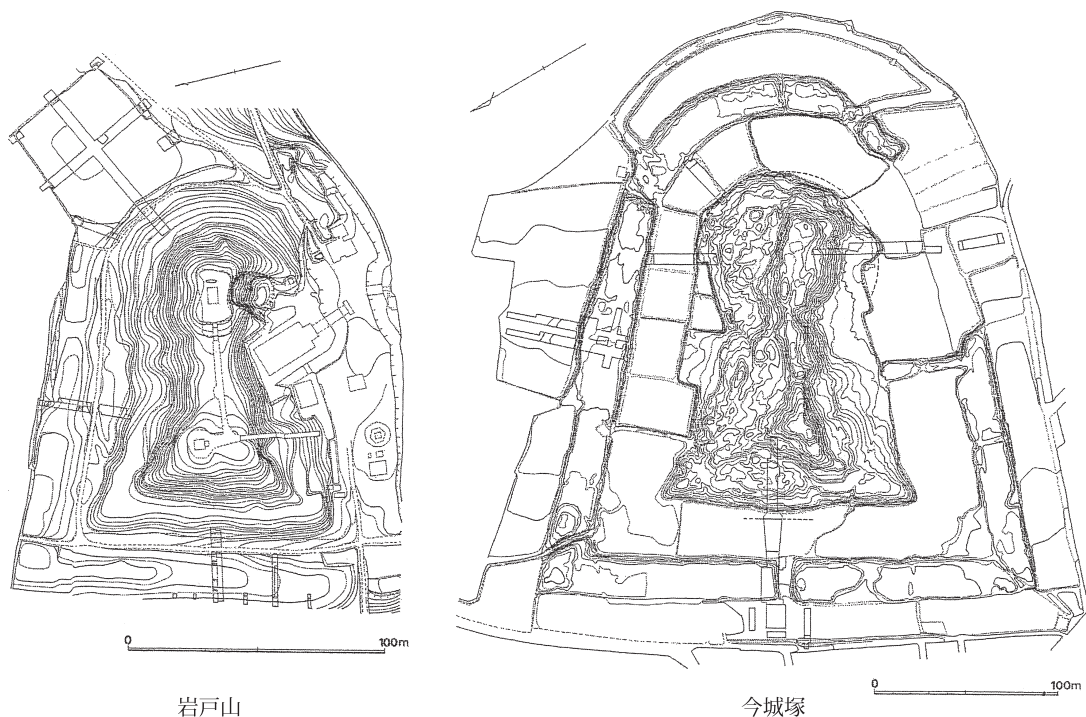


図68 岩戸山古墳と今城塚古墳の墳丘測量図〔小澤2003〕

れたという [波多野・小田1964]。

大塚恵治も、三輪玉を表現した勾金の石製表飾を紹介するなかで、第2次大戦後の開墾時に別区の斜面周辺で出土したのだらうと述べているが、詳細な樹立状況や出土状況まではあきらかにしていない。なお、その他の大刀形石製表飾のなかに接合する資料はないという [大塚2010]。

このように、岩戸山古墳の大刀形石製表飾はさまざまな時期にわたって偶発的に出土し、幾度か資料紹介されてはいるものの、類例がないためかその歴史的意義にかんする議論は途上にある。以下、具体的な観察から大刀形石製表飾の構造をあきらかにしたうえで、実物と対比した展望を示す。

第2項 資料の提示

八女市岩戸山歴史文化交流館いわいの郷に保管されている、大刀形石製表飾の破片5点を提示する [図70・71]。このうち5は波多野・小田1964報告の第8図-1にあたるが、1～4については出土した時期、場所は明確でない。

図70-1は、後藤守一の1932年論文で示されたもので、表面に三輪玉2、裏面下部に振り環を浮彫りする。柄は欠く。残存長28.7cm, 最大幅17.3cm, 最大厚13.9cm。振り環の残存高10cm, 幅12.6cm, 太さ2.5～3cm。

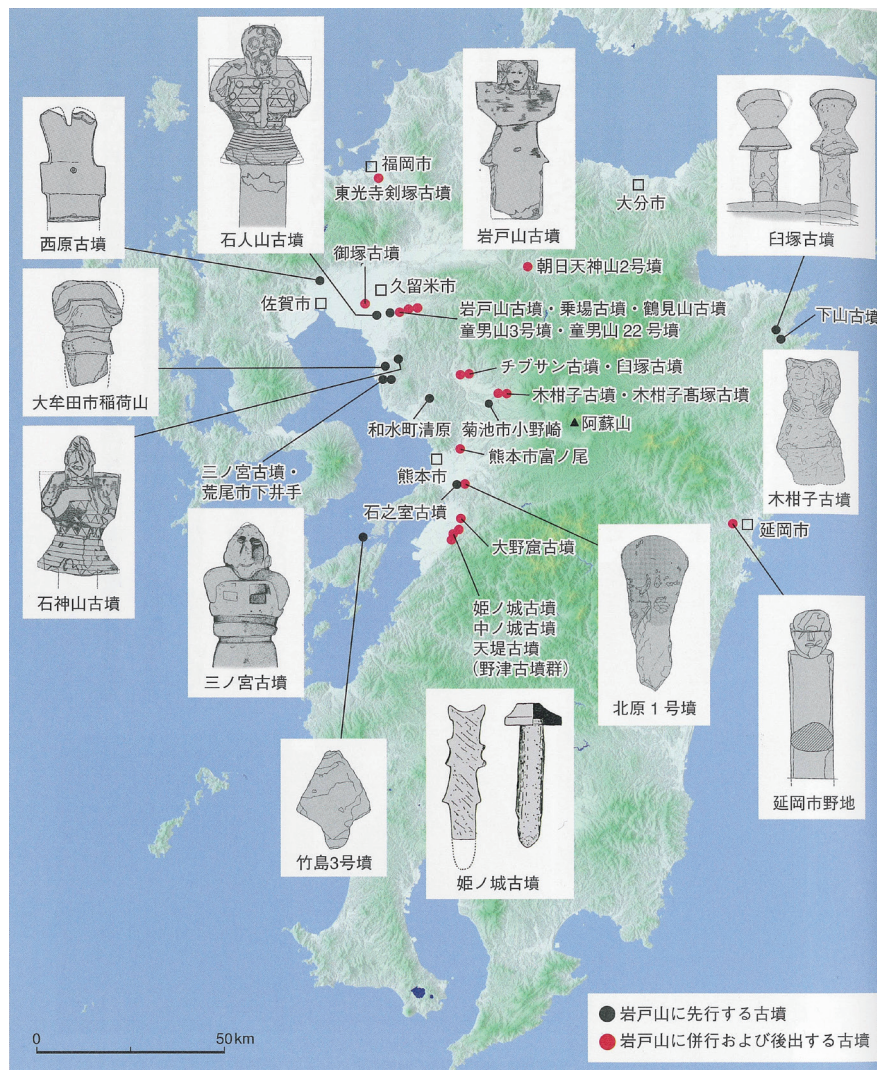
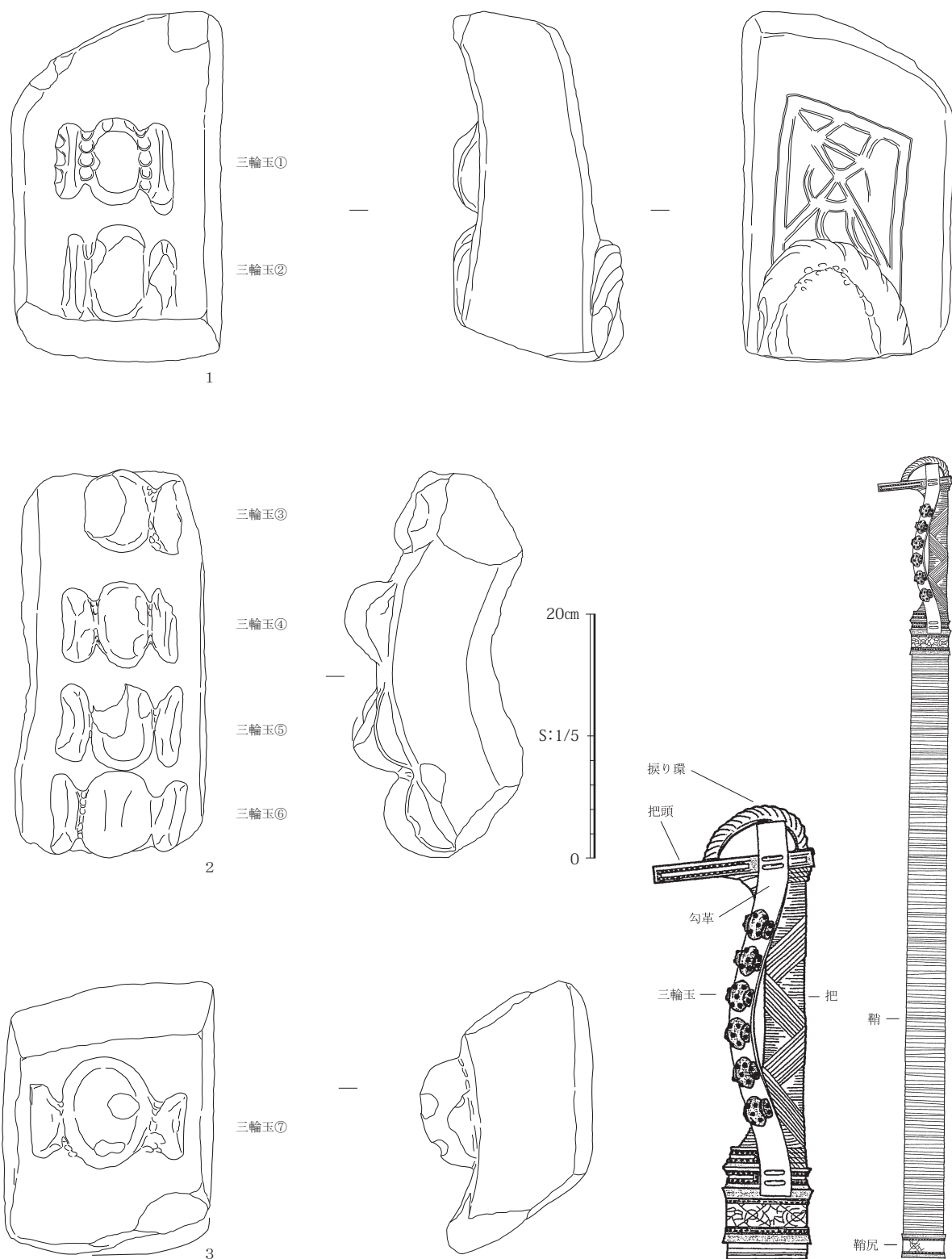


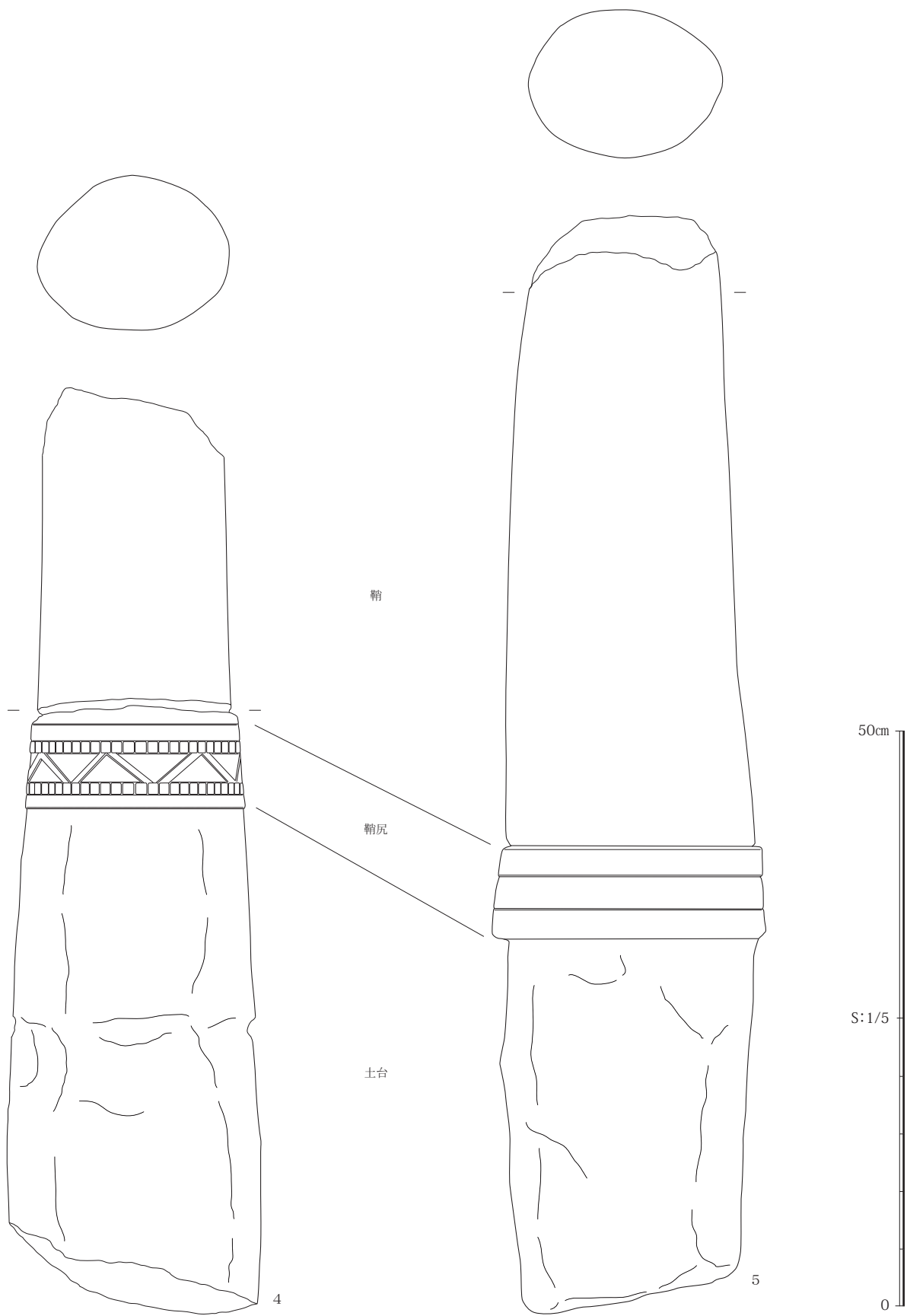
図69 九州の石製表飾出土古墳および採集地 [柳沢2014]



図出典 岩戸山歴史文化交流館いわいの郷蔵

振り環頭大刀各部名称
羽曳野市教育委員会2002
『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』改

図70 岩戸山古墳の大刀形石製表飾 (1)



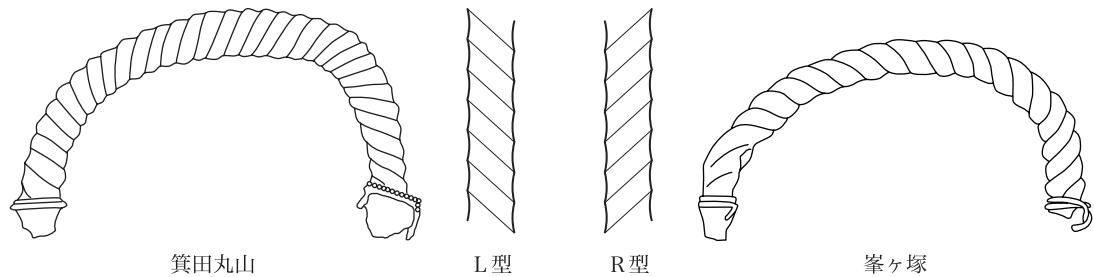
図出典 岩戸山歴史文化交流館いわいの郷蔵

図71 岩戸山古墳の大刀形石製表飾 (2)

三輪玉①は縦7.1cm, 幅9.8cm, 高さ2.1cm, ②は縦7.8cm, 幅約9.1cm, 高さ約1.3cm。

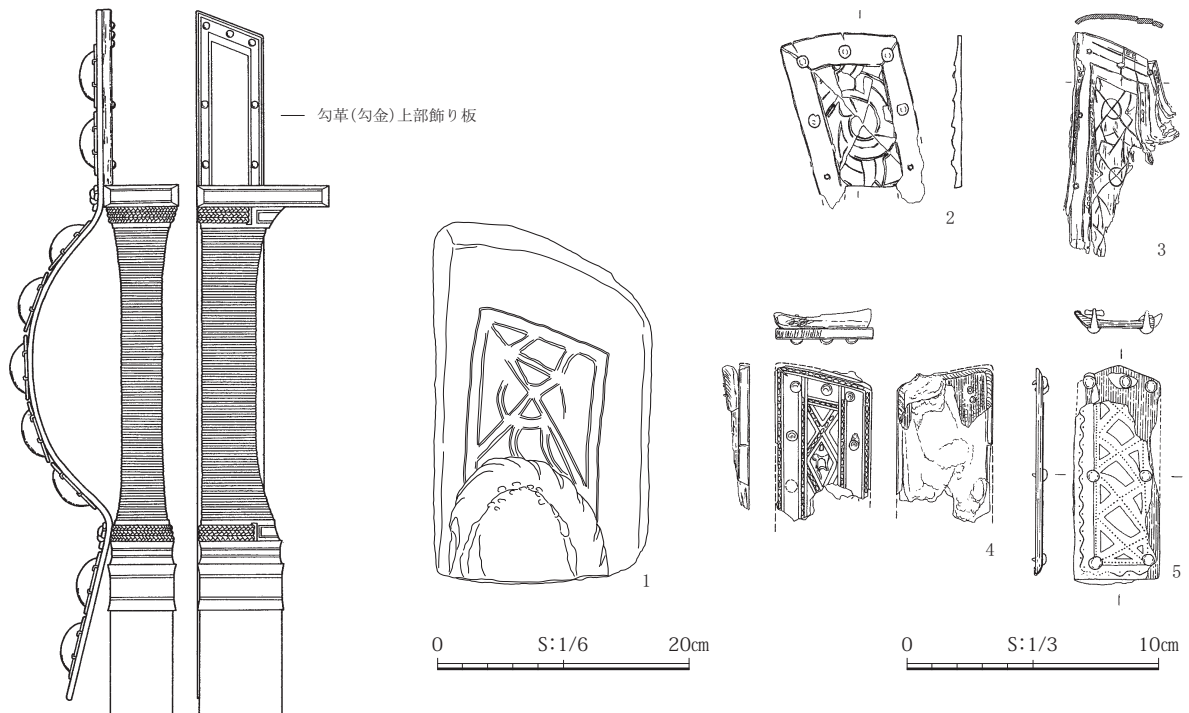
振りを表現する凹凸のラインは、環を縦長の棒状に引き伸ばした際、右上から左下にかけてはしる。振りの文様について、深谷は、右上-左下にはしるものを「左下がり」、左上-右下にはしるものを「右下がり」と呼ぶのに対して、金宇大は、右上-左下にはしるものを「右下がり」と呼ぶように認識の錯綜がみられる〔深谷2008, 金宇大2014〕。また、振り環の中央付近に注目するか、屈曲した下端部に注目するかによって方向が90度変わってしまう。そこで筆者は縄文原体の分類に倣い、振り環を縦長に引き伸ばした際、凹凸ラインが右上-左下にはしるものをR型、左上-右下にはしるものをL型と呼ぶ。このばあい、岩戸山古墳の石製表飾はR型である〔図72〕。R型振り環は大阪府峯ヶ塚古墳や群馬県古海原前1号墳、福井県十善の森古墳、大阪府芝山古墳など、出現初期すなわちMT15-TK10型式期の事例に集中し、岩戸山古墳の築造年代とも親和的である。

三輪玉を表現する板状の部分は、倭装大刀の柄につける勾革（勾金）を模すものである。上端部は斜めに



図出典 箕田丸山（福岡大学人文部考古学研究室 2004『長崎県・景華園遺跡の研究 / 福岡県京都郡における二古墳の調査 / 佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊）
 峯ヶ塚（羽曳野市教育委員会 2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』） *いずれも再トレース

図72 振り文様の分類



深谷2005の第9図を改変

1. 岩戸山 2. 溝口の塚 3. 峯ヶ塚 4. 藤ノ木 5. 新沢千塚262号
 2~5は、深谷2008より引用改変

図73 勾革（勾金）上部の飾り板

カットする。振り環の上部には、線彫りで長方形に区画したなかに直弧文と思しき文様を半肉彫りするが、摩滅が激しいため本来の文様は読解できない。この文様部分は倭装大刀の勾革上部につけた装具を模したものともみられ〔深谷2008〕、長野県溝口の塚古墳（鹿角製）、大阪府峯ヶ塚古墳（木地銀張）、奈良県藤ノ木古墳（木地銀張）、奈良県新沢千塚262号墳（木地銀張）に実物の資料がある〔図73〕。このうち峯ヶ塚、藤ノ木、新沢千塚262号例は振り環頭大刀にともなう。

2は、大塚恵司の2010年論文で紹介されたものである。勾革（勾金）の表面に三輪玉を四つ浮彫りする。勾革（勾金）部分は全体的にアーチ状をなし、裏面は平滑に仕上げる。残存長31.8cm、最大幅15.6cm。三輪玉③は、縦6.7cm、残存幅8cm、残存高約2cm。④は、縦7.1cm、残存幅9.3cm、高さ約3cm。⑤は、縦7cm、幅約10cm、高さ約3.5cm。⑥は、縦7.5cm、幅11cm、高さ約3.5cm。

3は、勾革（勾金）の下端部にあたる部分である。表面に三輪玉を一つ浮彫りし、裏面は平滑に仕上げる。残存長22.4cm、最大幅17.4cm。三輪玉⑦は縦9.2cm、幅12.9cm、高さ約4.3cmで、①～⑥より大きく、良好に遺る。三輪玉中央部の下側がやや尖る卵状を呈する点や、両側面の突起部が上から下にかけて幅を狭める点は、金属製三輪玉の形状を①～⑥よりも忠実に模している。

図71は、鞘と鞘尻を表現した部分である。鞘尻にかけて幅を増す形状から、倭装大刀を模したものともみえるが、柄が残るものはない。鞘は実際の大刀同様に断面が楕円形で、表面を平滑に整えるのにたいして、鞘尻を挟んで下は表面の調整が粗いことから、樹立する際に土に埋める部分とみられる。4の鞘尻は5段に分かれ、上から2段目・4段目は約1cm間隔で縦に刻み目をいれる。3段目には、直線的な山形波線を半肉彫りで表現する。5の鞘尻についても、波多野・小田の1964年報告では4同様の文様が図化されたが、現在は摩滅が著しく判然としない。4は、残存長80.5cm、鞘部残存長29.2cm、鞘尻の高さ7.4cm、鞘尻下端部幅19cm。5は、残存長95cm、鞘部残存長55cm、鞘尻の高さ8cm、鞘尻下端部幅24cm。

このうち1～3は、図示したように実物の振り環頭大刀のように配置でき、側面観や三輪玉の合計数7に違和感はない。深谷によれば、三輪玉の装着個数がわかるものは、TK208型式期の福岡県稲童21号墳、群馬県鶴山古墳の6個、MT15型式期の栃木県七廻鏡塚古墳の8個、京都府坊主山古墳の13個、TK43型式期の奈良県藤ノ木古墳の大刀1が10個、大刀5が7個であり、MT15型式期を境として装着個数が増えるという〔深谷2008〕。1～3を同一個体とみなせるならば、こうした状況とも親和的である。しかし、勾革（勾金）の幅や三輪玉の大きさに差異があることや、そもそも確実な接合面がないことから、1～3が同一個体であるとは断言できない。また、4・5のように、鞘部の破片が数個体分出土していることから、本来、大刀形石製表飾は複数本樹立していたと考えるべきだろう。

第3項 大きさの復元

岩戸山古墳と時期的にちかく、なおかつ残りの良い事例との比較から、大刀形石製表飾の大きさの復元を試みる。

峯ヶ塚古墳出土品のうち良好に遺存する振り環は、高さ3.5cm、幅7.0cmである。岩戸山古墳の振り環は高さ10cm、幅12.6cmと、幅に対する高さの数値がおおきいので、高さと幅でそれぞれ比較すると高さは約3倍、幅は1.8倍となる。三輪玉に注目すると、坊主山古墳例の最大幅が3.3cm、芝山古墳例の最大幅が3.9cmである。岩戸山古墳例の三輪玉の幅は、図の上から、①9.8cm、②9.1cm、③欠損、④9.3cm、⑤10cm、⑥11cm、⑦12.9cmだから、実物のおよそ3倍という数値が得られる。

4の鞘尻の幅は19cmだから、峯ヶ塚古墳出土大刀のうち鞘尻の幅が判明するもの2点（7.4cm、7.0cm）と比べると2.5倍強、5の鞘尻の幅は24cmだからおよそ3倍強の数値が得られる。

以上より、岩戸山古墳の大刀形石製表飾は、実物のおよそ2.5～3倍の大きさに復元しうる。峯ヶ塚古墳

の振り環頭大刀は全長120cmに復元されているから、これを参考にすると岩戸山古墳の石製表飾の復元値は3～3.6mとなる。峯ヶ塚古墳の振り環の幅との比率1.8をかけても2mを超える。むしろ、大刀形埴輪にみられるような形骸化があったことを考慮すれば、本来はこれよりも小さかったと考えられるが、いずれにしても当該時期の実物にはない巨大な大刀を意識して製作したことは間違いないだろう。

第4項 小 結

岩戸山古墳の振り環頭大刀形石製表飾は、石製表飾全体のなかに類例はないものの、実物の振り環頭大刀との比較は可能である。すなわち、R型の振り文様から6世紀前半を中心とする時期に位置づけられる。三輪玉や勾草上部につける直弧文の装具は、峯ヶ塚古墳や藤ノ木古墳といった、倭装大刀序列の最上位に位置づけうる資料と共通する。そのほか、三輪玉⑦や勾草（勾金）の上下端部、鞘尻の形態も写实的である。つまり、この大刀形石製表飾の製作者は実際の振り環頭大刀の構造を知る人物であると想定され、実際に磐井が振り環頭大刀を所有していた可能性が浮かびあがる。

第4節 九州における振り環頭大刀の特質―東国との対比から―

本節では、畿内からの周縁地域である東北・関東の状況との対比から九州の様相を検討する。

第1項 九州の振り環頭大刀出土古墳〔表10、図74・75上段〕

岩戸山古墳の石製表飾をふくむ九州の振り環頭大刀出土遺跡および出土数は、11遺跡15例が知られる。

森貞次郎の研究によって筑紫君磐井の寿墓であることが定説化した岩戸山古墳は、真の継体陵と目される今城塚古墳と埴丘規格を共有し、石製表飾を有する古墳のなかでは種類・数量ともに最多である。振り環頭大刀を模した石製表飾は、現状では岩戸山古墳例しか知られていない。岩戸山古墳にどれだけの数の大刀形石製表飾が樹立されていたのかはわからないが、鞘部分の破片だけでも4振分以上の存在が知られる。今城塚古墳の内堤北側張出において200個体以上の形象埴輪が出土し、そのなかに倭装大刀形埴輪（振り環頭大刀形はない）が列をなす状況と対比しうる。

国家祭祀の場として知られる沖ノ島7号遺跡では、石敷の祭壇から、棘葉形杏葉をふくむ金銅装馬具や小札甲、横矧板鋌留衝角付冑、三角穂式鉄鉾など、有力な後期古墳と共通する武装具とともに、石英製（9点）と水晶製（8点）の三輪玉がそれぞれ振り環と近接して出土した。本来はこれらが組みあって2振の振り環頭大刀を構成したのだろう。各種武装具の年代観から、おおむねTK10型式期からTK43型式期に並行する。

山の神古墳では、TK47型式期前後の初葬、TK10型式期前後の追葬が想定される。振り環1点と三輪玉6点が出土しており、辻田淳一郎の検討によって、山の神古墳から出土した鉄刀のうち残存長116cmの長大な鰐本孔鉄刀にともなう可能性、および三輪玉の類例との比較からTK10型式期前後の追葬にともなう可能性がたかいことがあきらかにされた〔辻田2015〕。全長100～120cm前後の長大な鰐本孔鉄刀を内蔵する振り環頭大刀は、峯ヶ塚古墳、藤ノ木古墳のほか、岡山県岩田14号墳、京都府鹿谷古墳、奈良県大谷今池2号墳2号木棺、愛媛県東山鷹ヶ森2号墳などで出土しており、一定の規範がうかがえるため、筆者は辻田の復元案を支持する。

桂川王塚古墳は、遠賀川流域最大規模を誇る前方後円墳である。また、筑豊最古の装飾古墳にして石室壁画の白眉とも賞される。阿蘇溶結凝灰岩製の石屋形存在から八女地域との関連が、また、後述する韓国新徳古墳との石室形態の類似からは朝鮮半島勢力との関連がうかがえる。築造はTK10型式期頃とみられ、その初葬者は山の神古墳の追葬者とほぼ同時期を生きたと考えられる。振り環頭大刀2振のほか、3組の金銅

表10 九州の振り環頭大刀出土遺跡一覧

遺跡	所在地	形態・規模	時期	型式・数	三輪玉
岩戸山	福岡県八女市	方円・138m	MT15	石製表飾 R・1	○
山の神	福岡県飯塚市	方円・80m	TK10	木地銀張 L・1	○
箕田丸山	福岡県みやこ町	方円・40m	TK10	木地銀張 R・1	—
				木地銀張 L・1	—
桂川王塚	福岡県桂川町	方円・86m	TK10～TK43	鉄地銀張 L・2	—
沖ノ島7号祭祀遺跡	福岡県宗像市	岩陰祭祀	TK10～TK43	鉄地銀張 L・2	○
双六	長崎県壱岐市	方円・91m	MT85～	鉄地 R・1?	○
鬼の窟	長崎県壱岐市	円・45m	TK43～	鉄地 L・1	—
妙泉寺7号	長崎県壱岐市	円・16m	TK209	鉄地銀張 L・1	—
伝・朝日天神山1号	大分県日田市	方円・33m	TK10～TK43	鉄地銀張 L・1	△
国越	熊本県宇城市	方円・62.5m	TK10	鉄地銀張 L・2	—
打越稲荷山	熊本県熊本市	円・30m	TK43～TK209	鉄地銀張 L・1	—

装馬具（十字文楕円形鏡板＋三葉文楕円形杏葉，子持剣菱付 f 字形鏡板付轡＋剣菱形杏葉，蕨手文楕円形鏡板付轡）や小札甲が出土している。

箕田丸山古墳では，前方部石室から振り環頭大刀2振と単鳳環頭大刀1振，三角穂式鉄鉾，金銅装馬具セットが出土した。R型とL型の振り環が1点ずつ出土していることから，時期差を想定できる。三角穂式鉄鉾は全長37cmの長大なものである。馬具のうち蕨手文楕円形鏡板や鉾状一体造り辻金具，六脚遍在配置雲珠は，桂川王塚例と類似するほか，鞍の磯金具は峯ヶ塚古墳に後続する [山口2004]。このように，箕田丸山古墳の大刀や鉾，馬具は，当該期の地方古墳としては破格の先進性と内容をそなえる。ちなみに，岡山県岩田1号墳でも蕨手文楕円形鏡板付轡が出土しているが，同14号墳で振り環頭大刀が出土していることは，当該馬装と振り環頭大刀が似たような経路に則って流通していたことをうかがわせる。

双六古墳で出土した振り環とされる鉄製品（R型）は細片であり，初葬の後期後半にはR型はほとんどみられないことから確実に振り環といえるのか疑問が残る。しかし，全長90m以上の前方後円墳であることや，三輪玉が出土していることから，振り環頭大刀を副葬していてもおかしくはない。実際に壱岐島では，後続する鬼の窟古墳や妙泉寺7号墳にも列島最西端かつ最新段階の振り環頭大刀を副葬している。

伝・朝日天神山1号墳出土品は，1928年に後円部が破壊された際に出土したと伝わる，馬具や須恵器など多数の資料群の一部である。その来歴は鮮明でないが，1997年に日田市教育委員会が中心となっておこなった朝日天神山古墳群の調査中に，1号墳で水晶製の三輪玉が採集されており，振り環との関連が示唆される。また，このときの調査で2号墳のくびれ部から凝灰岩製品が出土している。伝・1号墳出土品はおおむねTK43型式期に位置づけられている。

国越古墳からは，振り環2，直弧文をほどこした鹿角製装具をともなう鉄鉾，銅鉾，鏡3などが出土している。築造はMT15型式期とみられるが，振り環については福田匡朗が，TK10型式期とTK43型式期の2時期に分けている [福田2016]。

打越稲荷山古墳は後期末に位置づけられ，九州の古墳から出土した振り環頭大刀としては最新段階の事例である [宮代ほか2014]。そのほかの注目すべき副葬品として沖ノ島7号遺跡例に後続する金銅装棘葉形杏葉がある。振り環頭大刀と棘葉形杏葉の確実な共伴事例は，沖ノ島7号遺跡，奈良県藤ノ木古墳，埼玉県將軍山古墳にかぎられる。打越稲荷山古墳は直径30mの円墳で，先行する国越古墳より縮小化するものの，石室には線刻や彩色を有する装飾古墳であり，磐井の乱後においても地域の有力者にたいして秀逸な武装が供給されたことを物語る。



図出典

- 1 岩戸山 (岩戸山歴史文化交流館いわいの郷蔵)
- 2・13 山の神 (辻田淳一郎編 2015『山の神古墳の研究―「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室)
- 3・4・14・15 箕田丸山 (福岡大学考古学研究室 2004『長崎県・景華園遺跡の研究／福岡県京都郡における二古墳の調査／佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告3)
- 5・6 沖ノ島7号 (宗像神社復興期成会編 1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』吉川弘文館)
- 7 桂川王塚 (京都帝国大学文学部 1940『筑前國嘉穂郡王塚裝飾古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第15冊)
- 8 伝・朝日天神山1号 (別府大学付属博物館蔵)
- 9 妙泉寺7号・10 鬼の窟 (辻田淳一郎・齊藤 希・福永将大 2018『妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』『吉岐原の辻間線遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室)
- 11 国越 (熊本県立装飾古墳館蔵)
- 12 打越稲荷山 (宮代ほか 2014)

図74 九州出土の振り環頭大刀

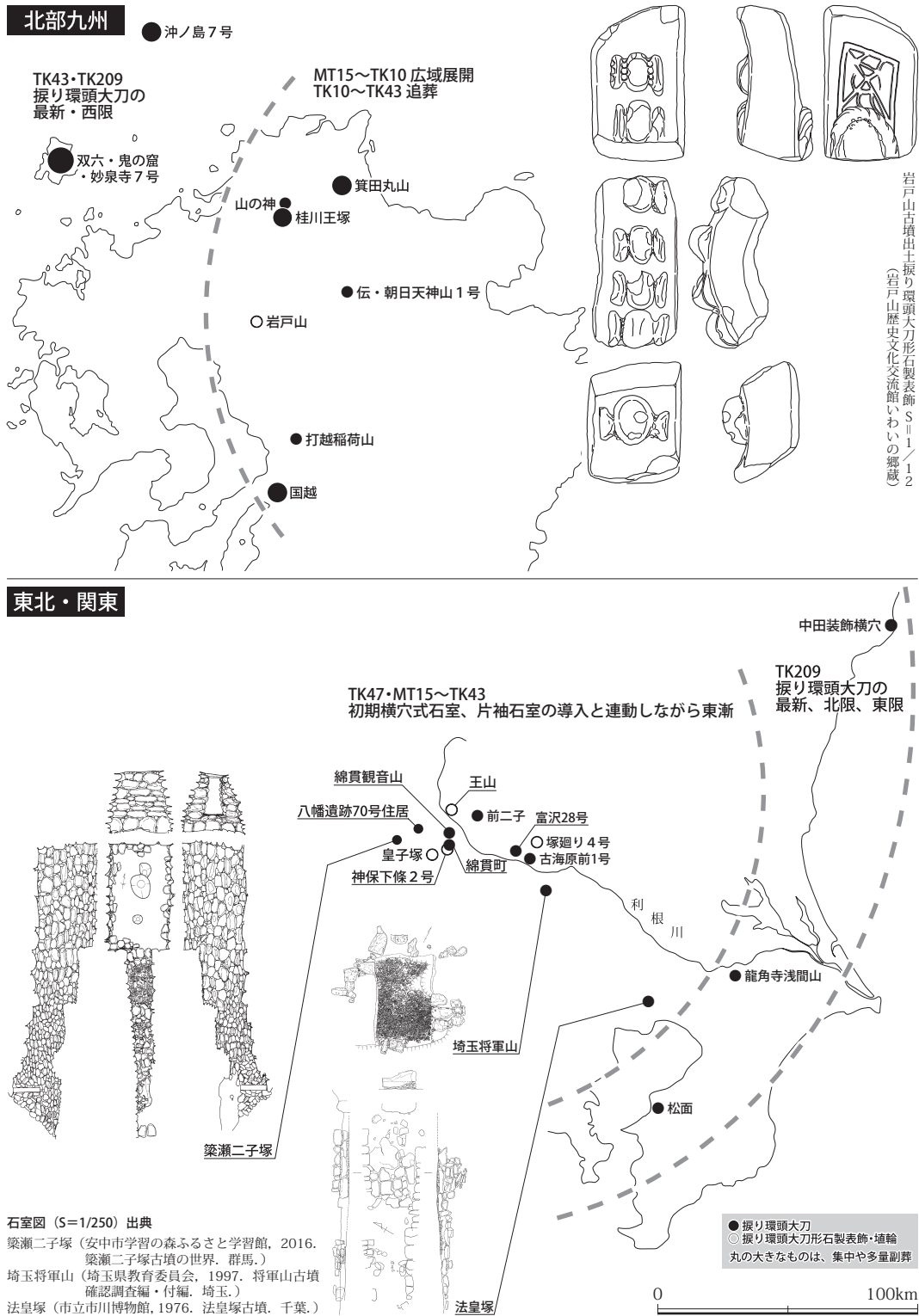


図75 日本列島東西の境界領域における振り環頭大刀の展開

朝鮮半島でも、全羅南道の栄山江流域、新徳古墳（前方後円墳・51m、6世紀前半～中頃）の九州系横穴式石室から、半球状飾金具をともなう振り環頭大刀、三角穂式鉄鉾、広帯二山式冠など、列島の有力墳でしばしばみられる遺物が出土している。その被葬者は対百済外交で活躍した倭系有力者とみられているが、九州系横穴式石室を内蔵することから、九州の有力者のなかから抜擢されたと考える。

このように九州では、岩戸山古墳が築造された後期前半には実物の振り環頭大刀は普及しておらず、そのほとんどが中葉以降に位置づけられる。これは、安閑2年（535）の筑紫・豊国への集中的な屯倉設置の時期と一部重なる。辻田淳一郎は、単龍鳳環頭大刀と屯倉の関係を示唆するが〔辻田2012:p.493〕、筆者は、屯倉は倭王権の地方支配制度であることから、そこでは倭装の武器が最重視されたと考える。また、磐井の乱後に築造された肥後系の石屋形をともなう横穴式石室と屯倉の分布が一部重なることを重視して、那津官家と東光寺剣塚古墳（前方後円墳・75m、TK10）、穂波屯倉と桂川王塚古墳の関係に注目する意見もある〔瓜生2001〕。磐井の乱後の宣化元年（536）に設置された那津官家は、諸国の屯倉から穀物を集積するとともに、来航する外国使節や対外的な有事にそなえたというのが、屯倉設置と、後期後半以降の半島系環頭大刀の展開には時期差がある。また、桂川王塚古墳では彩色壁画や石屋形を有する横穴式石室を内蔵することから、その被葬者は九州の在地勢力と評価するのが自然であり、屯倉の運営には在地の有力者がかかわった可能性がたかい。

第2項 関東・東北の振り環頭大刀出土古墳〔図75下段〕

振り環頭大刀分布の東限にあたる関東から東南北部にかけては、後期前半の群馬県古海原前1号墳（帆立貝？・30m）、群馬県築瀬二子塚古墳（前方後円墳・80m）、前二子山古墳（前方後円墳・94m）など、関東平野の利根川流域への集中が顕著である。ただし、墳丘規模が最大を誇るのは、後期後半に下る群馬県綿貫観音山古墳（前方後円墳・97m）である。

また、倭装大刀を模した埴輪も畿内と東日本に分布の偏りがあり、あわせて140例あまりが知られるが、そのうち約60例が上野地域（群馬県域）に集中する。そのなかに振り環頭大刀形は少ないなか、群馬県塚廻り4号墳、王山古墳、神保下條2号墳、皇子塚古墳例などから出土していることとあわせ〔浅見2000〕、当該地域における倭装大刀受容の優位性がうかがえる。

埼玉では後期後半の將軍山古墳（前方後円墳・90m）、千葉でもやはり後期後半の法皇塚古墳（前方後円墳・54.5m）などが、最古段階の振り環頭大刀副葬古墳とみられる。

以上に挙げた関東の振り環頭大刀出土古墳の多くは、それぞれの地域における初期横穴式石室の導入や、在地の首長系譜に連ならない新興勢力の登場と重なる。とくに將軍山古墳や法皇塚古墳の石室が片袖系であることを積極的に評価すれば、その被葬者は倭王権中枢を発信源とする新式埋葬施設の構築にかかわる情報を、いち早く得ることができた人物とも考えられよう。

さらに、後期末の副葬が千葉県龍角寺浅間山古墳（前方後円墳・78m）、松面古墳（方墳・97m）、福島県中田装飾横穴など、分布の最北・東端でみられるため、関東以東における振り環頭大刀の展開は後期後半・末とみてよい。龍角寺浅間山古墳では漆塗釘付木棺が検出されていることから、やはり、畿内の先進的な葬送儀礼にかかわる情報と組みあいながら振り環頭大刀も入手した可能性がある。

第5節 振り環頭大刀の終焉

前節では、振り環頭大刀の全国的な展開を概観した。では、振り環頭大刀の終焉を実際のモノからどのように追うことができるだろうか。型式学的な方法論では、モノのはじまりを捉えることは比較的容易だが、

逆に終焉を捉えることはむずかしい。しかし、金属装倭装大刀の列島生産の開始をもって後期の指標の一つとみなす以上は、その終焉の様相にも可能なかぎりの見通しを立てることによって後期の終わりを検討すべきだろう。以下、振り環頭大刀成立の意義についてあらためて評価したい。

高松雅文以来の諸研究では振り環頭大刀の展開を継体朝（507-531）と直截的にむすびづけられてきたが、その分布と装飾化の最盛期は後期後半、すなわち欽明朝（539-571）から敏達朝（572-585）にその大部分が重なることに注意を要する。すると、振り環頭大刀は6世紀をつうじて王権が地方進出に際して利用した、後期を代表する財とみなすことができる。そして、地方への展開速度を列島東西の境界領域で比較すると、相対的に北部九州が早いのにたいして、関東は緩やかで漸次的であるように、その展開は同心円的なものではないことがわかる。それは、単に振り環頭大刀の盛衰のみによって成り立ちえたものではなく、あらたな葬送儀礼の波及と連動するものでもあった。

古墳時代後期における主要な金属装倭装大刀のうち、千葉県木更津市に所在する松面古墳例に注目する〔図76・77〕。松面古墳は、TK209型式期に築造された一辺44mの墳丘と二重周溝をもつ大型方墳である。房総最終末の前方後円墳である金鈴塚古墳に後続する首長墓とみられる。墓制の変化には、前方後円墳から方墳へという、近畿のうごきとも連動する終末期的様相をみせるいっぽう、副葬された刀剣類には振り環頭大刀や双龍環頭大刀、人頭大の柄頭をもった巨大頭椎大刀（伝承）、鉦本孔鉄刀、双魚佩がふくまれるなど、後期的な大刀様式の様相を色濃く残す。房総半島、なかんずく現在の木更津市一帯は、古墳時代をつうじて、畿内と関東を結ぶ玄関窓口として機能した地域である〔内山2018〕。中期中葉の祇園大塚山古墳から出土した金銅製眉庇付冑や、金鈴塚古墳、松面古墳、すなわち6世紀末から7世紀初頭の長須賀古墳群において継続的に金属装倭装大刀が副葬されたことは、こうした地域の特徴を象徴する。

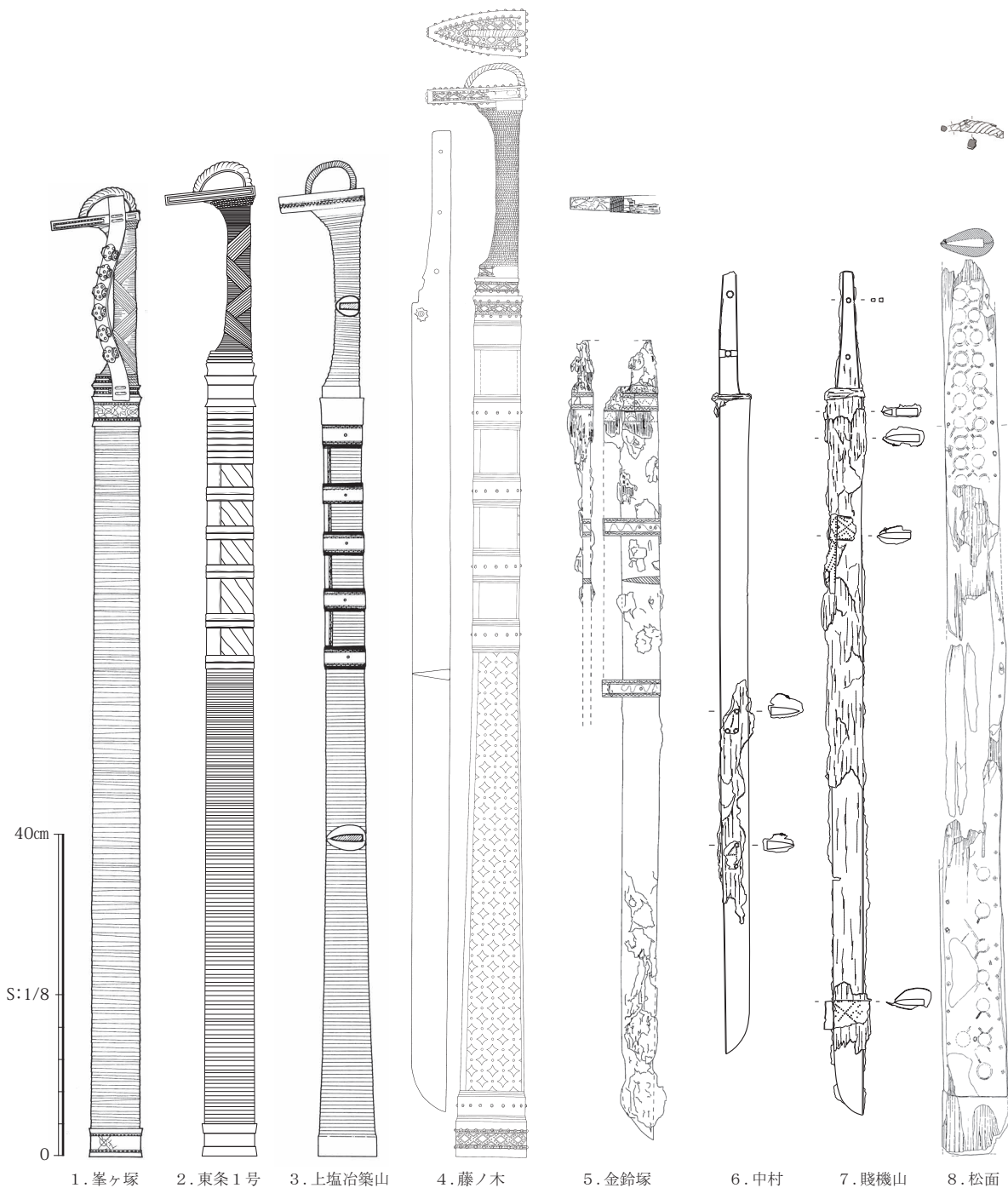
松面古墳の振り環頭大刀は、金銅製の鞘飾金具に2列の円形浮文をあしらう点で独自性がたかく、同じ時期に規格生産された頭椎大刀や双龍環頭大刀と共通する要素である。また、格子文をあしらう点では一段階古い藤ノ木古墳の振り環頭大刀を彷彿とさせる〔橋本英2012〕。鞘の筒金具の表面に格子状列点文をほどこす大刀は、TK209型式期の金鈴塚古墳で1振、静岡県賤機山古墳で4振、島根県中村古墳で1振出土している。この6振はいずれも振り環をともしないが、一文字d類の鉄刀を内蔵することから倭装大刀の範疇で捉えられる。TK209型式期には、伝統的な倭系大刀の生産が半島系の刀工集団のもとに吸収されることが指摘されており、上記の金属装倭装大刀群はそうした装飾大刀生産全体の統合過程、あるいは解体段階の錯綜した状況を示している〔橋本英2006、大谷晃2012〕。

なお、金鈴塚古墳、賤機山古墳、中村古墳の金属装倭装大刀が振り環をともしないことについて一步踏みこんで言及するならば、その墳丘規模や副葬品組成からみて、振り環の有無による階層分化とみなすことはできない。むしろ、振り環頭大刀を頂点とした刀剣体系の解体にともなって、従来の形態規範が形骸化する段階のものと評価すべきだろう。

松面古墳の築造は金鈴塚古墳の第2次埋葬（TK209型式期以降）と並行すること、および、金鈴塚古墳の倭装大刀も追葬にともなうことから、大刀の具体的な新旧関係は詳らかでない。また、装飾大刀が集中する上総地域においても、松面古墳築造後には倭装大刀の出土事例は認められなくなる。そのかわり、同じ木更津市内に所在する7世紀中葉頃の庚申塚古墳からは方頭大刀が出土している〔図78〕。この大刀形式は、一基の古墳につき一振の副葬を原則とする。完結した地域のなかで、後期的な刀剣体系から古代的な刀剣体系への転換を描くことができる稀有なフィールドといえるだろう。

こうした刀剣体系の転換は、後期後半の比較的新しい段階から後期末にかけて起こった。しかしそれでもなお振り環頭大刀は完全には消滅せず、形骸化しながらも後期末までは一部残存したとみてよい。後期後半と末にかけて生じた装飾大刀生産体制の統合は多くの先行研究において指摘されているが〔大谷晃1999、

時期	MT15	TK10	TK43	TK209
分類	振り環R型		振り環L型	
仕様	有機質装		金銀装	金銅装
鞘			帯状装飾	円形浮文装飾
三輪玉	盛行期			消滅?
刀身			片関	不均等両関



図出典

- 1 羽曳野市教育委員会 2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』
- 2 三重県埋蔵文化財センター 2015『東条1号墳・屋敷の下遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 360 改変
- 3 島根県古代文化センター 1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 4
- 4 奈良県立橿原考古学研究所 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』改変
- 5 木更津市教育委員会 2007『木更津市文化財調査集報』12 (金鈴塚古墳出土遺物の再整理 2—大刀の実測—)
- 6 出雲市弥生の森博物館蔵
- 7 静岡市埋蔵文化財センター蔵
- 8 千葉県 2002『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料』第1分冊

図76 古墳時代後期における金属装倭装大刀の変遷

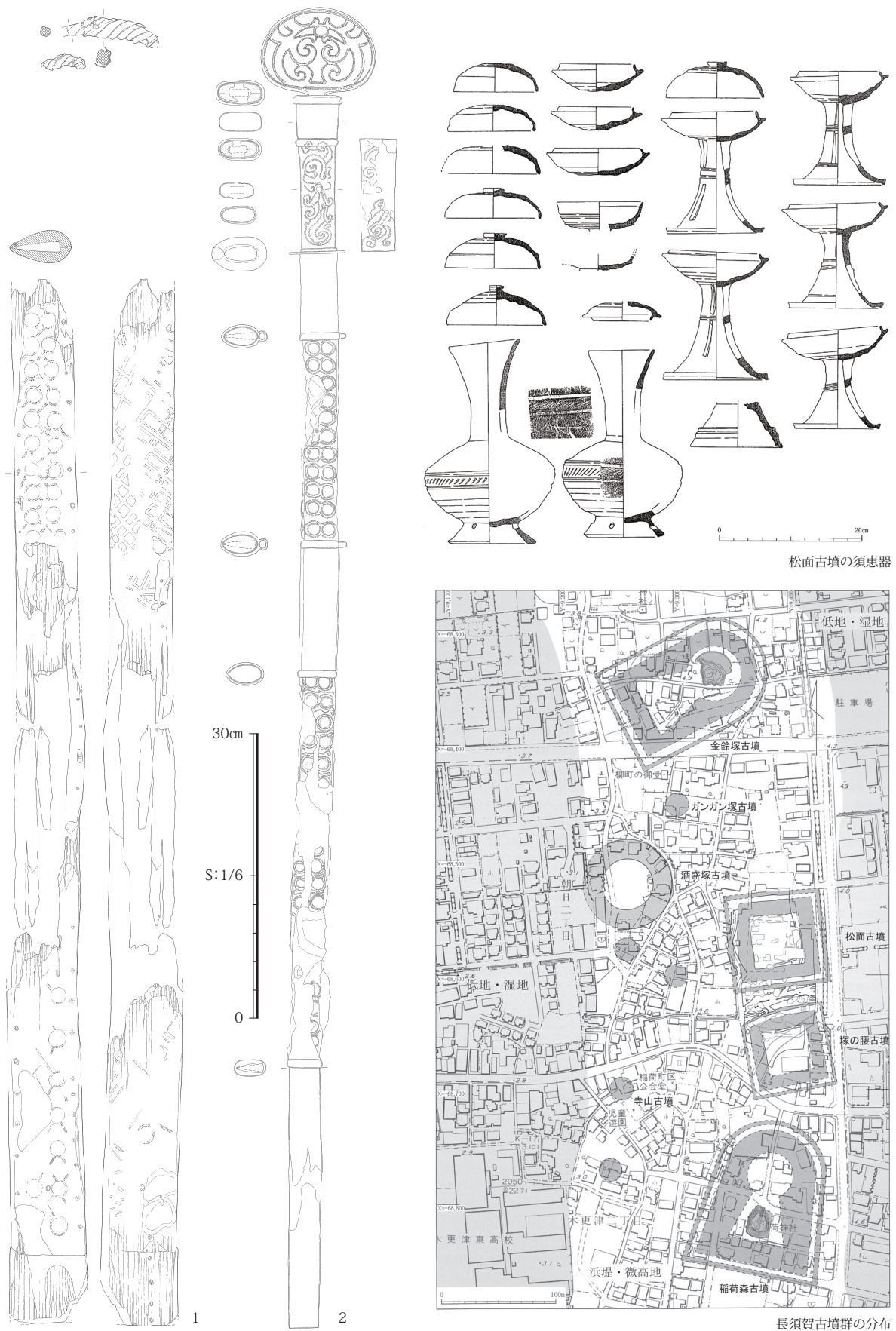
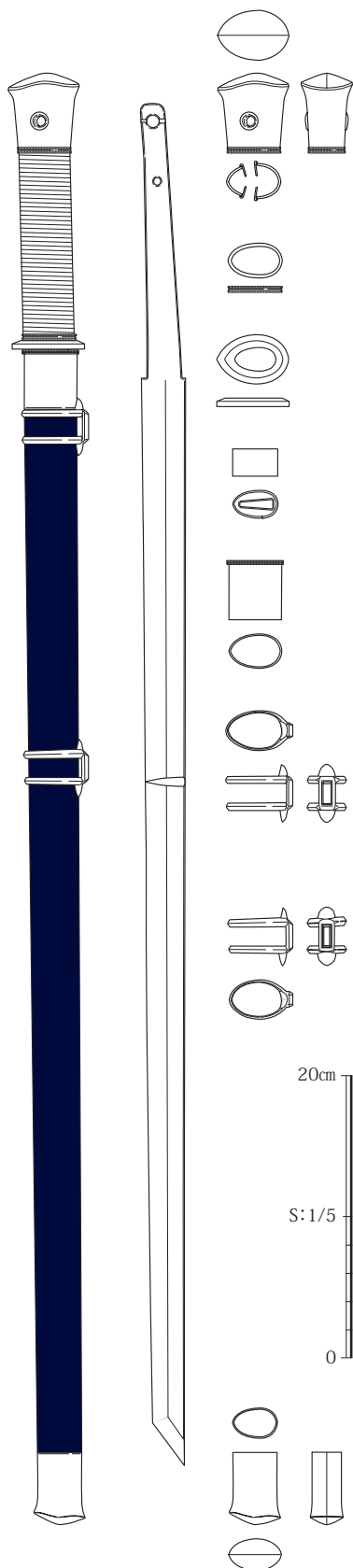


図77 松面古墳



木更津市郷土博物館金のすず蔵

図78 庚申塚古墳出土方頭大刀

松尾2001など], このように倭装大刀にかぎってみても同様の流れをうかがうことができた。したがって, 金属装倭装大刀が成立するMT15型式期を古墳時代後期の指標の一つとして捉えるかぎりは [橋本達2010, 鈴木一2018], その終焉段階のTK209型式期をもって古墳時代後期の終わりを定義すべきだろう。

第6節 結 語

本章では, 岩戸山古墳から出土した振り環頭大刀形石製表飾の型式学的位置づけを試み, MT15型式期の築造とみられる岩戸山古墳の年代と矛盾しないことを示した。現状では, この大刀形石製表飾は九州で出土した振り環頭大刀全体よりも古く位置づけられ, 振り環頭大刀が九州で展開する端緒となったと結論できる。高さ2~3mちかくに復元でき, 7世紀の福岡県宮地嶽古墳から出土した復元全長3m前後の金銅装頭椎大刀をのぞくと, これほど巨大な大刀の実物はない。

くわえて岩戸山古墳は, 振り環頭大刀が出土した日本列島および朝鮮半島すべての古墳のなかで最も大きな墳丘をもつ。倭装大刀形埴輪樹立古墳をふくめても, 今城塚に次ぐ規模となろう。古海原前1号墳の振り環頭大刀は, 岩戸山古墳の振り環頭大刀形石製表飾よりも若干古く位置づけうるが, その墳丘規模は岩戸山古墳におよばない。

磐井の乱は地元では英雄譚と化し, 石製表飾はそうした地方豪族の威儀を示すものという説明にとどまっていた。しかし, 本節で検討した大刀形をはじめ, 堅矧板系の冑を模した武装石人 [福尾1989], 石馬 [図79, 神ほか2018] をこんにち的な研究水準から評価するならば, 磐井の乱以前の継体朝との政治的紐帯をうかがわせると同時に, 中国大陸や朝鮮半島とも交流した地方有力豪族の威風を放つモノリス (monolith) といえる。しかしそれでもなお, 『筑前国風土記』逸文に記された石製表飾の破壊記事とともに伝わる無残な姿に, 倭王権による国造制施行前夜に生きた筑紫君の栄光と挫折が交錯する。

岩戸山古墳以後の九州では, 東北・関東では希薄な振り環頭大刀の複数副葬・奉獻が, 桂川王塚古墳, 箕田丸山古墳, 沖ノ島7号遺跡, 国越古墳でおこなわれた。壱岐島における振り環頭大刀の集中も同様の脈絡で評価すべきものだろう。時の王権中枢とみられる芝山古墳や峯ヶ塚古墳, 藤ノ木古墳, あるいは国家祭祀の聖域である沖ノ島7号遺跡は別格としても, 山の神古墳と桂川王塚古墳など, 近在する古墳における継続的, あるいは同時多発的な保有は過小評価できない。

ただし, 装飾大刀序列の最高位に位置づけうる藤ノ木古墳の2振でさえ, 石棺内に葬られた世代差のある二人の被葬者それぞれにとともに推定されていることから [新納2009], 振り環頭大刀は一人の被葬者に複数振はともなわない規範をうかがうことができる。つまり北

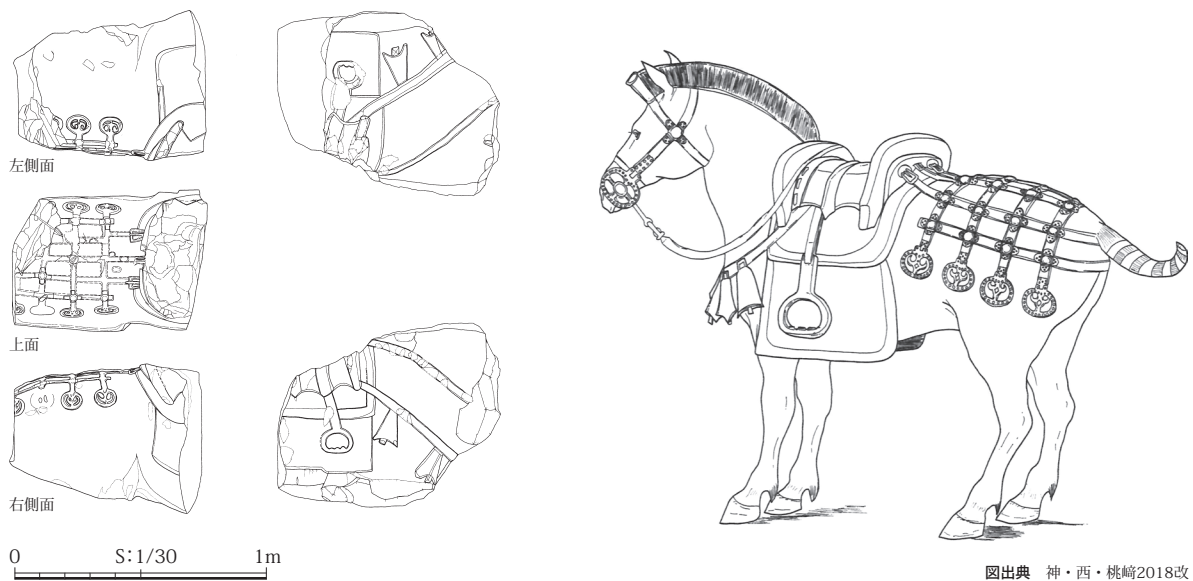


図79 岩戸山古墳出土石馬と馬装復元図

部九州においては、同一首長系譜の数世代にわたって振り環頭大刀が下賜される状況にあったと考える。その背景としては、国造制やミヤケの設置を前後して一振ずつ配布された可能性を想定しておきたい。

九州で前方後円墳の規模が縮小化する6世紀後半には、中型円墳である打越稲荷山古墳にも振り環頭大刀を副葬するが、相伴した棘葉形杏葉は沖ノ島7号遺跡例に後続するものであり〔岩原2012〕、一概に振り環頭大刀副葬古墳の被葬者階層が低下したとはいえない。むしろ北部九州から中九州にかけては、列島各地の首長墳に副葬されることの多い三角穂式鉄鉾や金属装鞍、反刃鏃、花形鏡板・杏葉、銅鏡、銀製空玉といった上位品目を群集墳や横穴墓にまで副葬する事例が目立つ。磐井の乱以後の北部九州においては、大型前方後円墳の築造が規制、あるいは停止された地域が多いとはいえ、軍事的境界領域の最前線へたいする武器供給の規制は緩かったと評価する。

関東では、最終末の振り環頭大刀が千葉に集中する。分布の北限にして最終段階の振り環頭大刀が中田装飾横穴から出土していることもふまえ、倭王権が関東以東に進出する拠点だったとみられる。東北・関東における振り環頭大刀の性格は、横穴式石室の導入とともに倭王権の地方進出過程のなかで議論すべきだろう。

本章の検討をつうじて、継体没後の列島東西における振り環頭大刀流通の側面がみえてきた。第8章、第9章では、このように武装の分配にはすくなくない地理勾配が存在することを念頭におきながら、古墳時代後期における北部九州と関東の武装のありかたを整理し、北部九州の武装の特質を描く終章へつなげよう。

註

- 1) 【『筑後国風土記』逸文 磐井墓】上妻縣。縣南二里、有筑紫君磐井之墓。墳高七丈、周六十丈、墓田南北各六十丈、東西各卅丈。石人、石盾各六十枚、交陣成行、周匝四面。當東北角、有一別區。號曰衙頭。【衙頭、政所也】其中有一石人、縱容立地、號曰解部。前有一人、裸形伏地、號曰偷人。【生為偷屠、仍擬決罪】側有石猪四頭、號曰賊物。【賊物、盜物也】彼處亦有石馬三疋、石殿三間、石藏二間。古老傳云：「當雄大迹天皇繼體之世、筑紫君磐井、豪強暴虐、不偃皇風。生平之時、預造此墓。俄而官軍動發、欲襲之間、知勢不勝、獨自遁于豐前國上膳縣、終於南山峻嶺之曲。於是、官軍追尋失蹤。土怒未泄、擊折石人之手、打墮石馬之頭」古老傳云：「上妻縣、多有篤疾、蓋由茲歟」

第8章 武装からみた西の境界領域 — 玄界灘沿岸を中心に —

第1節 はじめに

近年、福岡県北西部の玄界灘沿岸地域において重要な古墳・古代遺跡の調査や報告書の刊行があいついだ。2000年代には、古賀市鹿部田渕遺跡における官衙的大型建物群の発見を受け、磐井の乱後に設置された「屯倉」の考古学的検討が盛行したが〔小田2003, 甲斐2004, 桃崎2010, 日本考古学協会2012, 嘉麻市教育委員会2012〕, その機運は落ちつく間もなく、粕屋町阿恵遺跡を中心とした7・8世紀の糟屋評の研究や、福津市では、宮地嶽古墳に準ずる構造の石室から金銅装馬具が出土した手光波切不動古墳、宗像市では小札甲、鉾留冑、金銅装馬具をふくむ武装が出土した相原古墳、古賀市では墳丘横の逆L字形土坑から大量の馬具や武器、武具が出土した船原古墳遺物埋納土坑、福岡市では庚寅銘金象嵌大刀が出土した福岡市西区元岡G-6号墳、大野城市では福岡平野最大級の円墳や新羅系渡来集団の墓を含む善一田古墳群の調査・研究が話題となった。さらに、飯塚市山の神古墳や八女市岩戸山古墳出土品の再検討もすすみ、北部九州の古墳・古代史研究は一大転換点を迎えている。

このうち船原古墳遺物埋納土坑出土品については正式報告にいたっていないが、新羅製の金銅製品を含む6組以上の馬具や日本で3例目となる馬冑、銀製弓弭を装着した飾り弓などは、北部九州在地勢力の内的発展のみでは説明しえない破格の内容である。各々の型式学的位置づけについては今後の研究進展に俟つほかないが、それを取りまく周辺地域の歴史的評価を考えることは、こうした器財の入手にいたる背景を描くうえで必須の作業といえるだろう。

元岡G-6号墳については、石室や須恵器からは7世紀代の築造が想定されるいっぽうで、大刀の銘文には宋の元嘉暦法による「大歳庚寅正月六日庚寅（西暦570年1月27日）」という、築造にさかのぼる限定的な暦が示されている。庚寅銘大刀の製作地について豊島直博は百濟製と評価する〔豊島2018〕。すくなくともその銘文に宋の暦法がもちいられている以上、国際的な文化に触れることができた者の武器であることは間違いないだろう。近在するG-1号墳でも金銅装圭頭大刀ほか多数の刀、胡籙金具など、充実した武器や武具が出土している。

善一田古墳群からは銀象嵌大刀や三累環頭大刀、鍛冶具、鉄滓、銅滓にくわえ、新羅土器が出土したことから、新羅系渡来集団とかかわる墓地群として評価される〔上田2019〕。とくに古墳群造営の契機となった18号墳は、福岡平野広域のなかでも最大規模を誇る円墳であることが注目される。

古代の福岡平野周辺、とくに現行政区画における大野城市域一帯（宇美町、太宰府市をふくむ）は、西日本最大の須恵器窯である「牛頸窯」や、天智2年（663）の白村江の戦い¹⁾後に築かれた大宰府政庁防衛の要「水城」跡、日本最古の朝鮮式山城「大野城」跡が物語るように、古代の生産や国防の拠点として知られる。こうした国家的事業の遂行には、組織だった人員の確保と彼、彼女らを統括する指揮層による集団編成が不可欠だが、その求心力や階層性は長い時間をかけて人々の心を掌握してゆくことによってしか醸成されない。では、こうした集団の階層編成や地縁の萌芽を考古資料から描くことはできるだろうか。

本章では、磐井の乱と白村江の戦いという、日本古代史上とくに重要な二つの戦争の時期的はざまに造営された宗像地域の有力な古墳群、ならびに善一田古墳群や元岡G-6号墳など、近年の重要な調査成果をふまえながら、上記の問いにたいする一つの試論を示したい。

第2節 武装からみた北部九州諸勢力の分業

第1項 宗像地域 — 宮地嶽古墳を中心に — [図80]

北部九州では、古墳時代後期後半以降、大型墳の築造が停止・縮小する地域が多い。山の神古墳や桂川王塚古墳の追葬者のように、単独で大型墳を築造してもおかしくない者も、先代の墓に追葬されることもある。

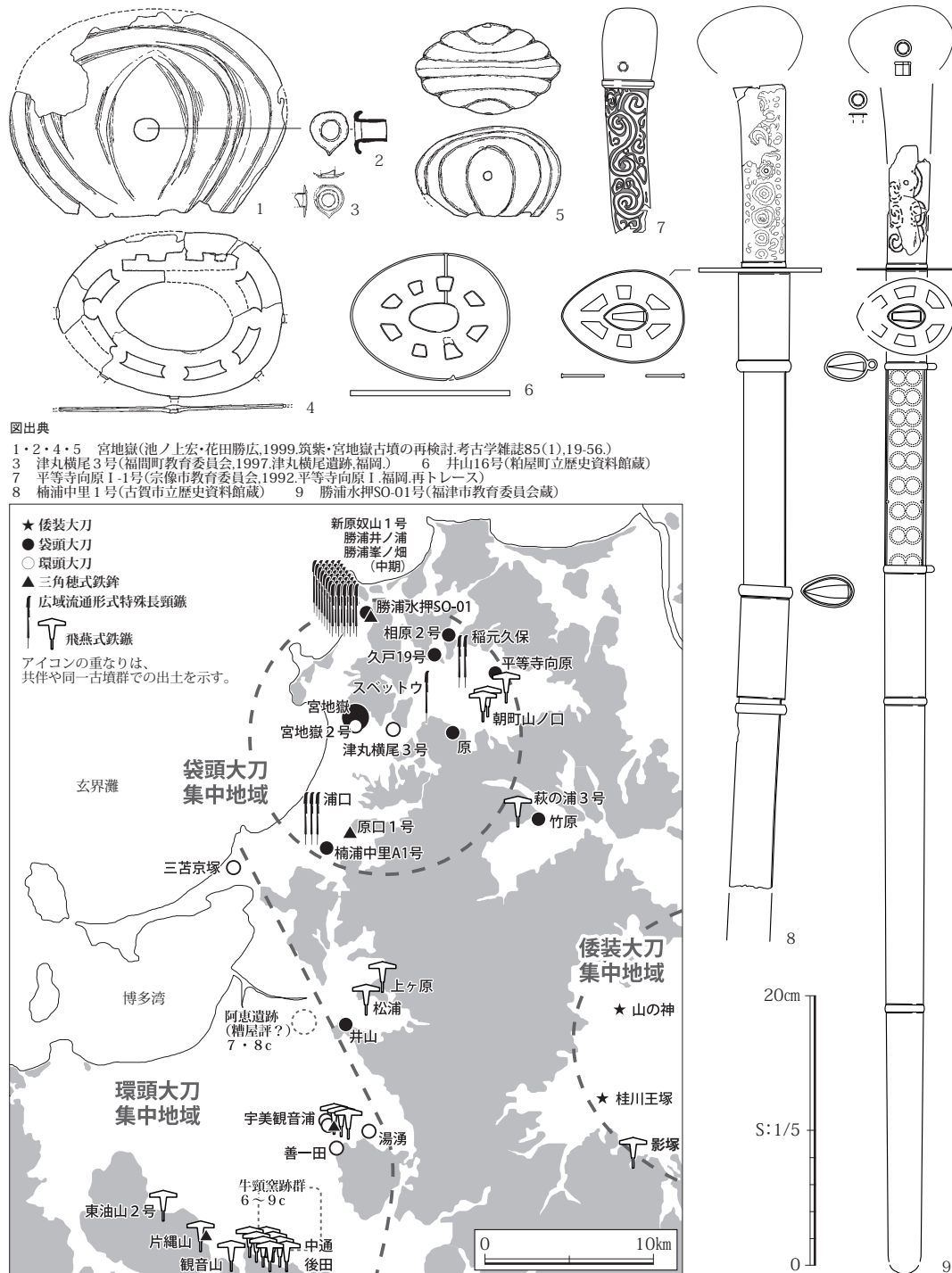


図80 北部九州の金銅装袋頭大刀と装飾大刀の主要分布域

そうしたなか、福津・宗像・古賀では中規模以上の前方後円墳が累々と築造され、東日本の有力墳にも劣らない武装具が副葬される。宮地嶽古墳や船原古墳の金属製壺鐙についても、類例の分布域が東海東部から関東に偏在することから〔鈴木一2008〕、同様の脈絡で捉えうる。このように、北部九州のなかに認められる在地勢力の牽制と、東国にも劣らない軍事力の維持という一見背反する二相は、どのように理解すべきであろうか。

そもそも当該地域の軍事的優位性は中期には発露しており、宗像市上高宮古墳の長方板革綴短甲をはじめ、中期前葉の久戸6号墳から三角板革綴短甲、中葉の古賀市永浦4号墳から三角板鋳留短甲、横矧板鋳留肩付胄、頸甲が出土している。福津市では、全長70mの前方後円墳である津屋崎10号墳の小札甲のほか、同13号墳の三角板革綴短甲、横矧板鋳留衝角付胄、井手ノ上古墳の三角板鋳留短甲や、池尻古墳の横矧板鋳留短甲等、甲冑の保有が際立つ。

後期には袋頭大刀の集中も注目できる。宮地嶽古墳から出土した日本最大の頭椎大刀をはじめ、古賀市楠浦中里A1号墳や福津市勝浦水押SO-01号墳の大刀についても柄頭が残っていないが、鐔や柄の形状からいずれも頭椎大刀ないしは袋頭大刀とみてよい。

装飾大刀の生産や配布、副葬の主体として、頭椎大刀に物部氏、双龍環頭大刀に蘇我氏を対応させる意見がある〔桐原1969, 清水1983, 豊島2018b〕。たしかに、5世紀の木製頭椎柄頭が出土した奈良県布留遺跡が物部の本貫地であることを重視すれば、頭椎大刀の創出に物部が関与した可能性は否めない。また、金銅装頭椎大刀は、後期末に振り環頭大刀が衰退した後の倭を代表する形式であり、振り環頭大刀の性格の一部を継承した可能性がある。

しかし、金銅装頭椎大刀出土古墳は後期末以降に位置づけられるため、587年に本宗家が滅亡した物部とはむすびつかないし、宗像地域周辺に物部の存在を示す資料も乏しい。同一名称の大刀が創出から終焉にいたるまで同じ性格を保ちつづけたという発想を放棄する必要がある。そもそも、一形式に特定の氏族を対応させているのは、複数形式の大刀が共伴する理由や、金銅装頭椎大刀と双龍環頭大刀が鞘の意匠を共有する理由を説明できない〔図81〕。

ここで、物部本宗家滅亡後の蘇我氏による物部門跡の接收を想起する。田中史生によれば、物部本宗家滅亡後の家産は蘇我馬子の妻・太媛（物部守屋の妹）の管理となり、さらに蘇我蝦夷がその家産を入鹿の弟の「物部大臣」に伝領させたという〔田中史1999〕。

こうした背景のもと、従来物部が生産していた頭椎大刀のデザインを蘇我が接收し、双龍環頭大刀と頭椎大刀の鞘の意匠を統一したと仮定すれば、統一後の両形式の大刀はそれぞれ特定の氏族ではなく、むしろ橋本英将が想定するように、軍事や外交など、特定の職

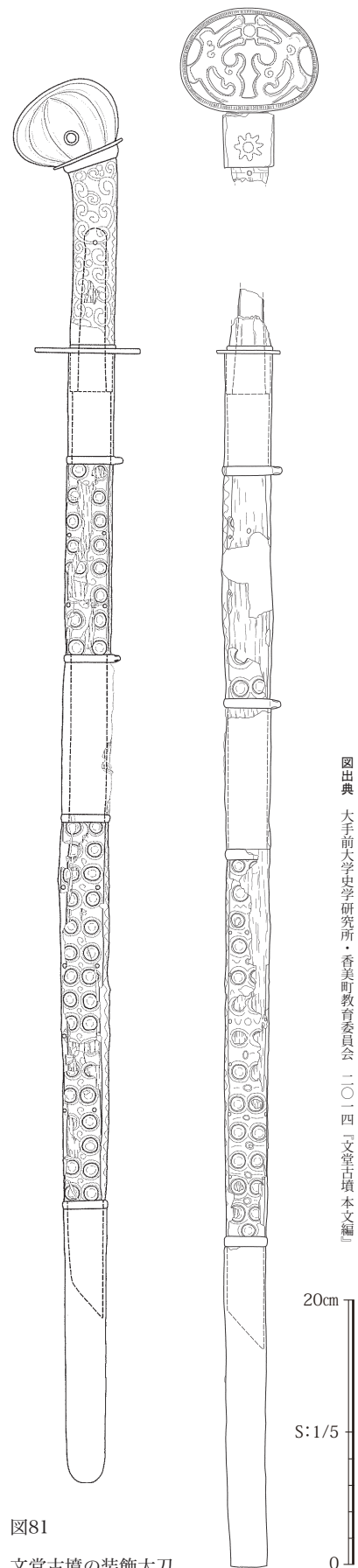


図81
文堂古墳の装飾大刀

図出典 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 二〇一四『文堂古墳本文編』

さらに、宗像地域の性格を考えるうえでは宮地嶽古墳の被葬者像が鍵を握る。宮地嶽古墳は直径34mの円墳で、当該期最長22mの横穴式石室ならびに石槨を主体部とする。宗像地域においては、倭王権中枢部の朝鮮半島にたいする利権をめぐって、4世紀後半より海上航路の確保ならびに安全を願ひ沖ノ島祭祀が開始される。こうした動向を反映するかのように、内地には多くの前方後円墳が造営される。7世紀初頭における前方後円墳の終焉後に築造された宮地嶽古墳の被葬者は、沖ノ島祭祀を担い、のちに宗像郡司となる一族の首長・胸形君徳善とみる説が有力視されている。徳善の娘・尼子娘が天武天皇（在位：673-686）の側室となることもふまえると、朝鮮半島の百済救援にともない、宗像から沖ノ島を経由して朝鮮半島にいたる交通網を掌握する胸肩氏が、倭王権と婚姻関係をむすびつくほどの勢力をもっていたことがわかる。宗像は交通・軍事の要衝であり、宗像大神が「道主貴」と称された海上交通の特殊祭祀をおこなっていたことにも起因するものだろう。当該時期最大規模の石室や装飾大刀を有する背景、後期末にさかのぼる周辺地域での金銅装袋頭大刀の集中は、こうした首長権の成長過程として理解する。

倭と朝鮮半島との緊張関係がたかまる 5・6 世紀において、沿岸部に前方後円墳を累々と築造した福津・宗像・古賀一帯は軍事的な境界領域の最前線だった。現在では糟屋郡域にふくめられることが多い古賀周辺も、前方後円墳の築造や同質の武装の共有という観点からは「宗像地域」にふくまれる。これは、特定形式の横穴式石室や土師器の分布にもとづいて区分された北部九州の領域設定 [図82, 小嶋2012] や、『和名類聚抄』にみえる郷名との比定にもとづいた考証 [木下1999] とも親和的である。とくに宗像型石室が主体



となる地域（小嶋篤の「第Ⅰ領域」）に金銅装袋頭大刀が集中する点は、まさにこうした装飾大刀群のおもな保有者集団が宗像君であった可能性を示す。

第2項 福岡平野広域 — 善一田古墳群を中心に —

1. 善一田古墳群被葬者集団の編成 [図83]

善一田古墳群の造営は、おおきく4段階に区分できる。また、古墳のまとまりからA～Dの4支群、このうちC群は三つの小支群に分かれる。

1段階 18号墳（A群）のみの築造である。直径約25mの円墳であり、同古墳群のなかで最大である。後期後半に築かれ、2振以上の鐔付鉄刀、両頭金具や盛矢具をともなう弓具、瓢形素環轡を中心とする馬装、全体像は不明瞭ながら金銅装製品をともなう馬装など、古墳群全体で最も充実した武装具が副葬された。ただし、小札が一片も出土していないことから、甲冑はそもそも副葬していなかったとみてよい。

また、鍛冶具である鉄鉗も出土している。18号墳の鉄鉗は全長20cm程の小型品であり、農工具や馬具といった小型製品の製作・補修に適する。この鉄鉗は、握り部の先端が蕨手状に曲げられている点も特徴的で、後期後半・末の佐賀県東十郎特-ロ号墳に類例がある。鍛冶具の副葬習俗は朝鮮半島洛東江以東の新羅圏に多く認められ、日本列島では北部九州、岡山県域、畿内に集中する。新羅系陶質土器の出土とあわせ、18号墳被葬者の出自を考えるうえで注目できる。

鐔付鉄刀や両頭金具、鞍は全国流通型の武器である。装飾大刀や甲冑保有層につぐ武装類型と評価でき、中小規模の群集墳においては階層的優位に立つ。2段階以降の古墳が18号墳の石室開口方向を意識した築造であることをふまえると、同一集団の墓地群として理解できる。18号墳の被葬者はそうした集団の統率者や始祖であり、倭王権内で一定の役割を果たしつつ、金工生産や朝鮮半島勢力との対外交渉にもたずさわった者だろう。くわえて、近在する王城山古墳群や古野古墳群をふくめても、善一田18号墳に匹敵する墳丘規模や副葬品組成を示す古墳はないから、乙金山一帯の諸集団のなかでも優位な被葬者像が描ける。

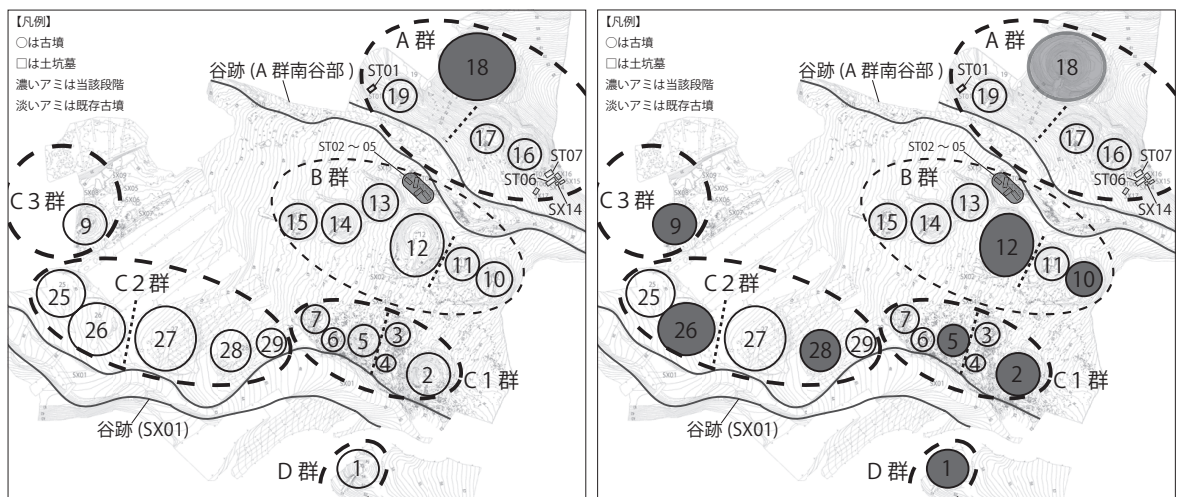
2段階 B群、C1群・C2群・C3群、D群が派生する段階。B群は、谷を隔ててA群の直下に展開する。大甕をはじめさまざまな器種の須恵器が多く出土しており、台付長頸壺や、陶質土器の系譜を引くと思われる脚付長頸壺などもふくむ。12号墳は、2段階以降の古墳群全体のなかで最大規模であることとあわせ、祭式を担う有力な被葬者像が描ける。B群はそのほかの支群と異なり、4段階にいたるまで同一規模の古墳を築きつづける。また、古墳築造停止後の7世紀後半に12号墳を拡張するなど、古墳群全体のなかで特異なありかたをみせる。18号墳の眼下において特別視された一群であることに起因しよう。

C群では、2号墳（C1群）で鉄地銀象嵌鍔をつけた鉄刀やU字鋤先2点、多量の須恵器大甕、26号墳（C2群）で金銅装三累環柄頭、大量の金属滓、9号墳（C3群）で九つの円孔を穿つ鐔をつけた鉄刀が出土しており、各群の核となる古墳には特徴的な大刀や手工業生産を示す資料がともなう。銀象嵌の鉄刀は倭系、三累環頭大刀は外来系であり、各被葬者が倭王権の規制と外交窓口としての約得を受けていたことを示す。

D群はB・C群と谷を挟んで1号墳が単独で立地する。瓢形素環轡とともに、木芯鉄板張三角錐形壺鐙の吊金具と思われる大小2種類の破片が出土しており、2組以上の馬装を示唆する。立地のうえでは18号墳から離れるが、副葬品には親縁性が読みとれる。

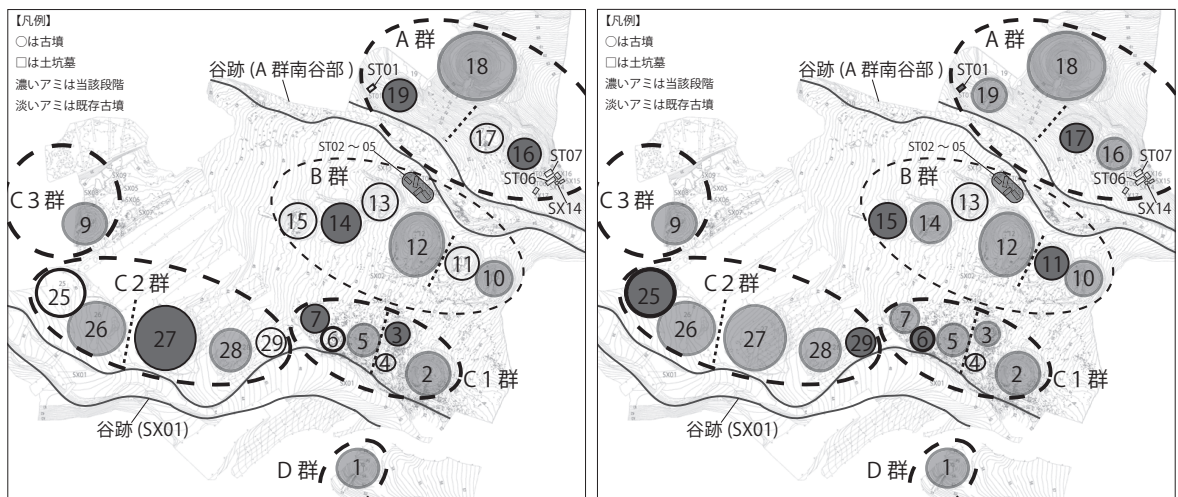
3a段階以降 C2群で27号墳（約18m）が築造される。副葬品には、鉄鏃や馬具といった武装具に、刀子、鉄斧が加わり、武威と生産の両面にたずさわった被葬者像が描ける。いっぽう、古墳群全体の規模は縮小する。A群では16号墳、19号墳が築造されるが、18号墳とは時期的な隔りがある。3b段階には、墳丘規模や副葬品目からみた明確な階層性が薄くなり、4段階に古墳の築造が終わる。

このように、2段階以降に展開する各支群は、18号墳の被葬者に連なる分家の存在を示唆する。18号墳



善一田古墳群 1 段階 (TK43)

善一田古墳群 2 段階 (TK209古相)



善一田古墳群 3 段階 (TK209新相)

善一田古墳群 4 段階 (TK217)

上の図出典 大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書159

段 階	牛 頭 編 年	陶 色 編 年	A 群	B 群	C1 群	C2 群	C3 群	D 群
1	III B (新)	TK43	18号墳 鐔付鉄刀2、鉄鏃、 両頭金具、鞍、平胡録、 金銅装馬具？ 瓢形素環轡、 木芯鉄板張三角錐形壺鍔、 金鉗					
2	IV A (古)		?	12 刀装具 鉄鏃 土器主体	2 銀象嵌鉄刀 鉤具 U字鋤先2	5 鉄鏃 鉤具 刀子	26 三累環頭 鉄鏃 鍔吊金具 鞍座金具 刀子	9 鐔付 鉄刀
3a	IV A (新)	TK209	19 鉄鏃	14 刀装具 轡、鞍鉤具	3	7 鉄鏃	27 鉄鏃、 木芯鉄板張 三角錐形壺鍔 刀子、鉄斧	1 鉄刀、鉄鏃、 瓢形素環轡、 木芯鉄板張 三角錐形壺鍔
3b	IV B (新)		17 鉄刀	15 刀子	11	6	25 29	
4	V	TK217		13 鉄鏃 刀子	4			

* 円の大きさは、墳丘規模を相対的に示す
* ●は、階層的優位性が明らかなもの

図83 善一田古墳群の編成

が谷や斜面を隔てて高所に築造されたことから、その被葬者へたいする崇拜観念が係累的に働いていたと考えることもできる。墳丘規模や立地、副葬品の組みあわせが示す階層性が調和的な好例である。

2. 善一田古墳群とその周辺の武器・馬具が提起する諸問題

善一田古墳群の副葬品のうち、被葬者の性格を示すものとして、装飾大刀の装具や、瓢形素環轡がある。以下、先行研究に導かれながらこれらの型式学的位置づけを考える。また、善一田古墳群では確実な出土を確認していないが、大野城市域とその周辺に集中する特徴的な武器のうち、飛燕式鉄鏃にも注目する。

(1) 三累環頭大刀 [図84・85]

研究動向 三累環頭大刀は、日本では50例弱がある。その個別研究は小田富士雄による九州の事例紹介を嚆矢とし [小田1966]、穴沢味光・馬目順一の系譜論 [穴沢・馬目1983a]、野垣好史の編年がある [野垣2002]。野垣は、環頭部と茎の接続技法や環頭部の材質の組みあわせから、第1～第8型式に分類・編年した。そして、第1～第4型式は朝鮮半島製品をふくむ可能性があるのにたいし、第5～第8型式は日本列島でのみ出土することから倭製品と評価した。しかし、三累環頭大刀はすべて舶載品とみる意見もあり [大谷晃2012]、その認定方法について議論を深める必要がある。

近年では、朝鮮半島出土品の構造について金宇大による精緻な観察がある [金宇大2011・2017]。列島出土品の意義については、高田貫太や鈴木一有らの見解がある。以下、これらの研究成果をふまえながら、善一田26号墳例の位置づけを考える。

型式学的検討 善一田例は野垣第4型式にあたる。環頭と一体の茎は長さ約1cm、幅1.6cmであり、長さ3.7cmの別の鉄板を重ね継いでいる。X線CT画像で

は鉄板の目釘孔はみえないが、環頭茎には二つの孔が横位にならぶため、鉄板にも同じ位置に孔があつて両者を木製の見釘で留めたか、あるいは紐で緊縛したと考える。これは、千葉県金鈴塚古墳の獅喙環頭大刀と同じ構造とみられる [持田2016]。

獅喙環頭大刀が倭の装飾大刀とは製作の技術系統が異なることを考えると、善一田例も舶載品あるいは渡来系工人による倭製品第1段階にあたるという仮説が立つ。以下、福岡平野周辺の出土事例と比較しながら善一田例の位置づけを試みる。

中期中葉の朝倉市堤蓮町1号墳例は、平面形態や環の断面が扁平な楔形をなす点が、東萊・福泉洞8号・11号、大邸・汶山里M1号、蔚山・下三亭2号積石木槨例などに似る [金宇大2011・2017]。野垣分類の第1型式とみられるもので、福島県柞木古墳例 (第1型式) や香川県原間6号墳例 (第2～3型式?) とならぶか、先行して列島最古級の事例である。原間6号墳例は半島系大刀に特徴的なカマス鋒である点が注目されるが、高田貫太もまた、その被葬者像に「渡来人集団の統率者的立場」を描く [高田2014]。最古級

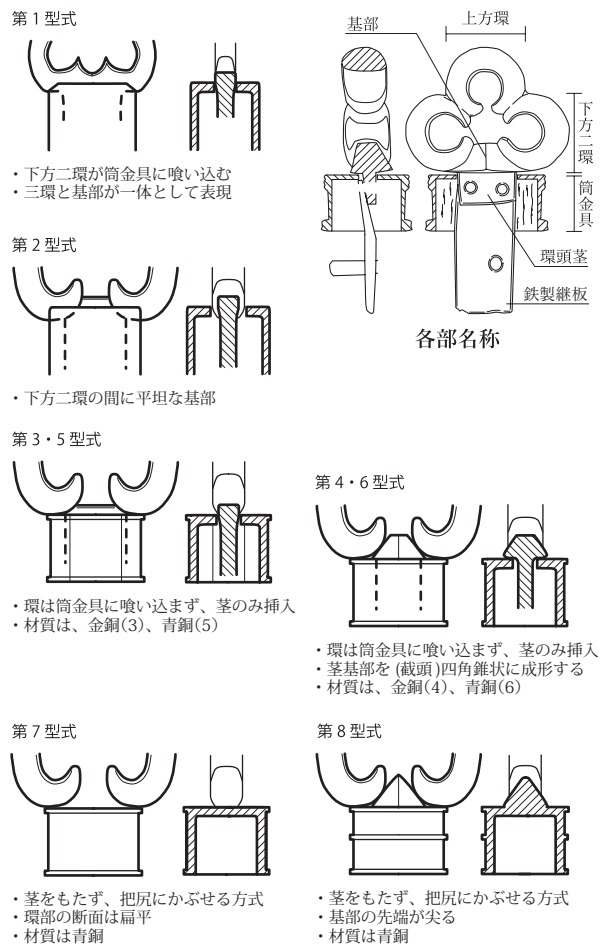


図84 三累環柄頭の変遷模式図 [野垣2002を再構成]

の事例が九州や四国、東北に点在し、畿内に集中しない点、その後倭に定着しない点などから、三累環頭大刀の倭への将来にあたっては、王権中枢部を介さずに渡来人そのものか、地方の有力者が独自に入手したと考えるべきだろう。

筑紫野市剣塚1号墳例は金銅製とみられ、下方二環は完全に環にならない第3型式にあたる。基部は、表裏両面の左右下端部を斜めに削って平面台形状に造り出すもので、慶州皇南大塚例や金冠塚例の表裏に丸く張り出した基部の痕跡器官とみられる。環の表裏と側面は丁寧に面取りされるため、断面はD字志向の六角形をなす。これは金宇大による朝鮮半島の三累環頭大刀2式にあたり、6世紀初頭以降に位置づけられる[金宇大2017]。剣塚1号墳は6世紀中葉に位置づけられ、6世紀の列島出土品としては最古の事例である。類例は列島では未確認である。善一田例は第4型式以降の事例のなかでは環の断面が厚いことや、見栄えが金色であること、基部が明瞭な截頭四角錐をなし、表裏からみると台形を呈することなどから、剣塚1号例に直接後続する可能性がたかい。截頭四角錐の基部を、典型的な四角錐状の基部の退化型式とみることもできるかもしれないが、最新段階の群馬県倉賀野町出土品（第8型式）が四角錐状の基部を有するから、これは截頭に仕上げる工程を省略することで成立したと考える。すなわち、截頭四角錐の基部が古く、四角錐の基部が新しい要素と考える。善一田例と最もよく似た資料は、田川市夏吉21号墳例（第4型式）だが、石室は善一田26号墳より新しい。

第6型式は青銅製で、善一田例よりも新しい一群である。豊前市黒部古墳例は形態的に善一田例にちかいが、福岡市吉武D-11号墳例は基部があまい四角錐状をなすなど細部の造りの粗さにおいて黒部古墳例よりも新しい。宇美観音浦KS12号墳例は環部が大型である点、断面が扁平である点において第7型式にちかい。KS12号例は、倭に特有の単脚足金物をともなうため倭製品である可能性がたかい。

第7型式は、九州では福岡県福岡市東区三苦京塚1号墳、みやま市東濃施古墳、佐賀県吉野ヶ里町上三津栗原1号墳、多久市大工田6号墳、伝・宮の上古墳、長崎県山田古墳例がある。九州以外では茨城県武者塚古墳、山形県安久津1号墳例が知られるに過ぎない。このうち上三津栗原1号墳例は、宇美観音浦KS22号墳例と同様の装具（佩用装置か）をともない、両者の製作地が同じである可能性を示す。三累環頭大刀の装具には規則性や統一性が認めにくいなか、注目的一组といえる。

列島出土三累環頭大刀の製作地 野垣好史は、第4型式以降の事例が日本で出土していることから日本製と評価するのにたいし、大谷晃二は、三累環頭大刀は日本で出土する他形式の装飾大刀との技術的交流がみられないことから、すべて舶載品と評価する。しかし、6世紀の半島出土品がほとんど知られない現状においては、大谷による「祖形なき舶載品論」を積極的に首肯することはむずかしい。むしろ、次の①～⑥を考えあわせると、三累環頭大刀の一部は当該地周辺で作られた可能性も考慮されてよい。

- ①日本列島出土三累環頭大刀の4割は北部九州に集中し、そのほかの倭製装飾大刀との技術交流や共伴も希薄である
- ②剣塚1号墳例の登場後まもなく善一田例が作られ、二日市地峡帯を中心として北部九州一円に分布が拡散する
- ③北部九州は金工関連遺物の集中域である
- ④畿内に三累環頭大刀の集中はみられない
- ⑤宇美観音浦KS12号墳、上三津栗原ST001古墳例にともなう装具は本州ではみられない
- ⑥最終段階の第7型式のほとんどが西北九州で出土する

これによって、列島だけの分布と、列島で出土する他形式の大刀との排他的なありかた、という、一見矛盾する二つの課題を止揚できるだろう。

考 察 三累環頭の系譜の一端は、中国東北部三燕喇嘛洞IM5墓にあるが[豊島2009]、朝鮮半島では5

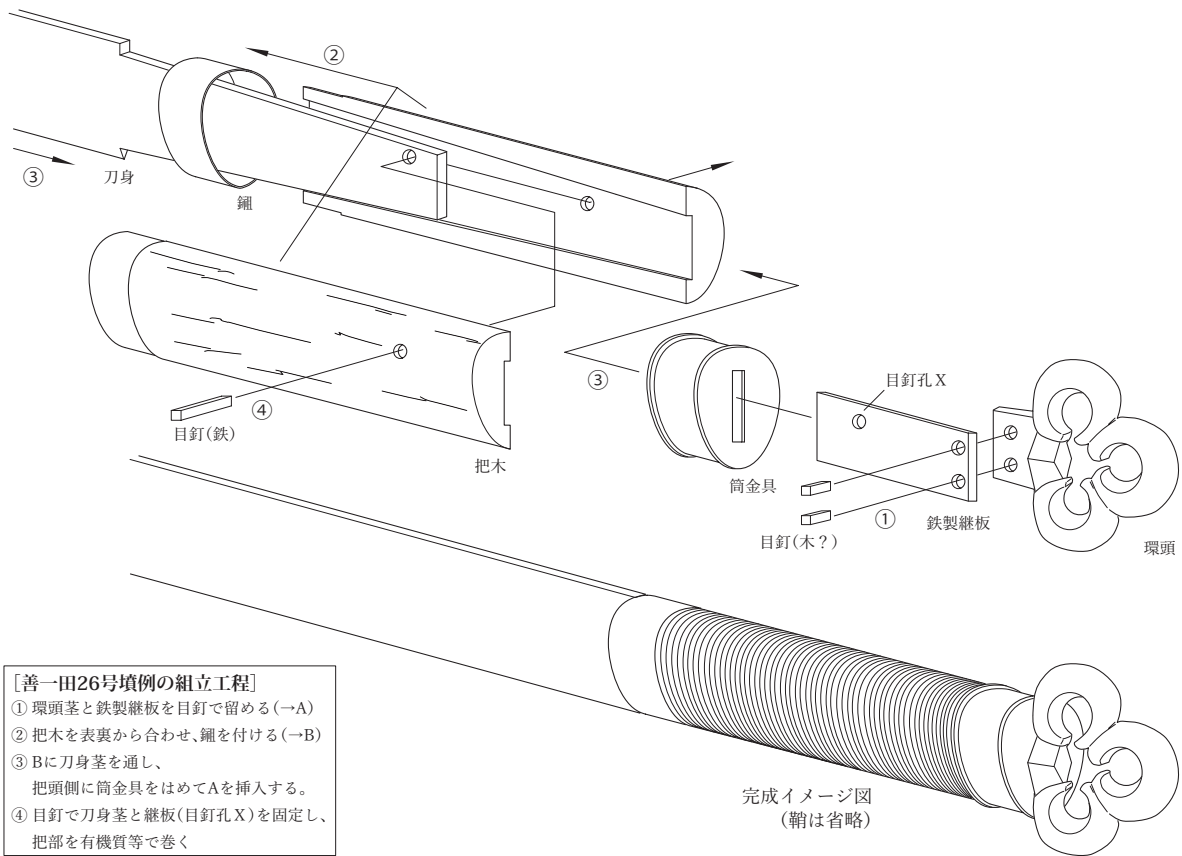
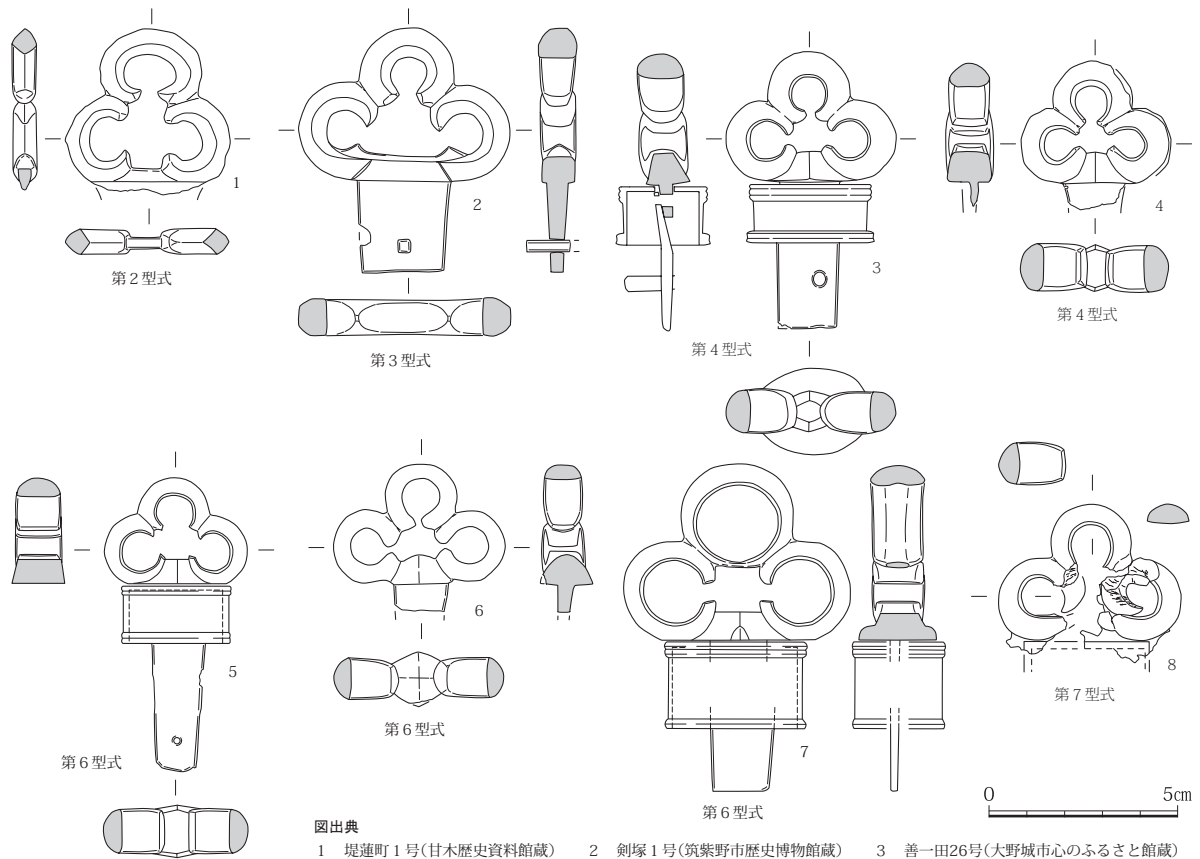


図85 福岡県域出土三累環柄頭の諸例と組立工程

世紀の新羅王権において最高位に位置づけられた。いっぽう日本列島では前方後円墳からの出土は2例が知られるのみで、ほとんどが円墳からの出土である。穴沢咏光・馬目順一は、倭では「家格の高くない」大刀と評価する〔穴沢・馬目1983a〕。

堤蓮町1号墳では百済系垂飾付耳飾をともない、いずれも舶載品とみられる。2号墳の小札甲や、北方に位置する古寺・池の上墳墓群とあわせ、渡来系集団の墓地として理解される所以である。これら渡来系集団の墓地が直径20m以下の円墳や土坑墓で占められるのにたいし、南東に位置する堤当正寺古墳（前方後円墳・70m）で倭系の帯金式甲冑が出土している。鈴木一有はこうした状況を、渡来系集団を統括する中間層と、地域を統括する首長層が保有する武装具の具体的様相と捉える〔鈴木一2016b〕。

5世紀の三累環頭大刀としてはこのほか、香川県原間6号墳例があり、その主体部（木槨）も釜山・金海地域に系譜が求められる。ただし、当時の日本列島では定着しなかった。畿内への集中も認められないこととあわせ、倭への将来にあたっては、倭王権中枢部を介さずに渡来人そのものか地方の有力者が単発的に入手したとみてよい。そのほか、5世紀の北部九州には少なくない数の新羅系文物が点在しており、磐井の乱前後の様相を示している。

福岡平野と筑紫平野を結ぶ二日市地峡帯に立地する筑紫野市剣塚1号墳は、6世紀中葉の築造とみられる前方後円墳である。主体部は片袖の横穴式石室と考えられており、その被葬者の出自は在地よりもむしろ倭王権中枢部か朝鮮半島に求められる。なお、前方後円墳からの出土例としては6世紀後半の群馬県綿貫観音山古墳例もあるが、6世紀中葉では唯一の事例である。

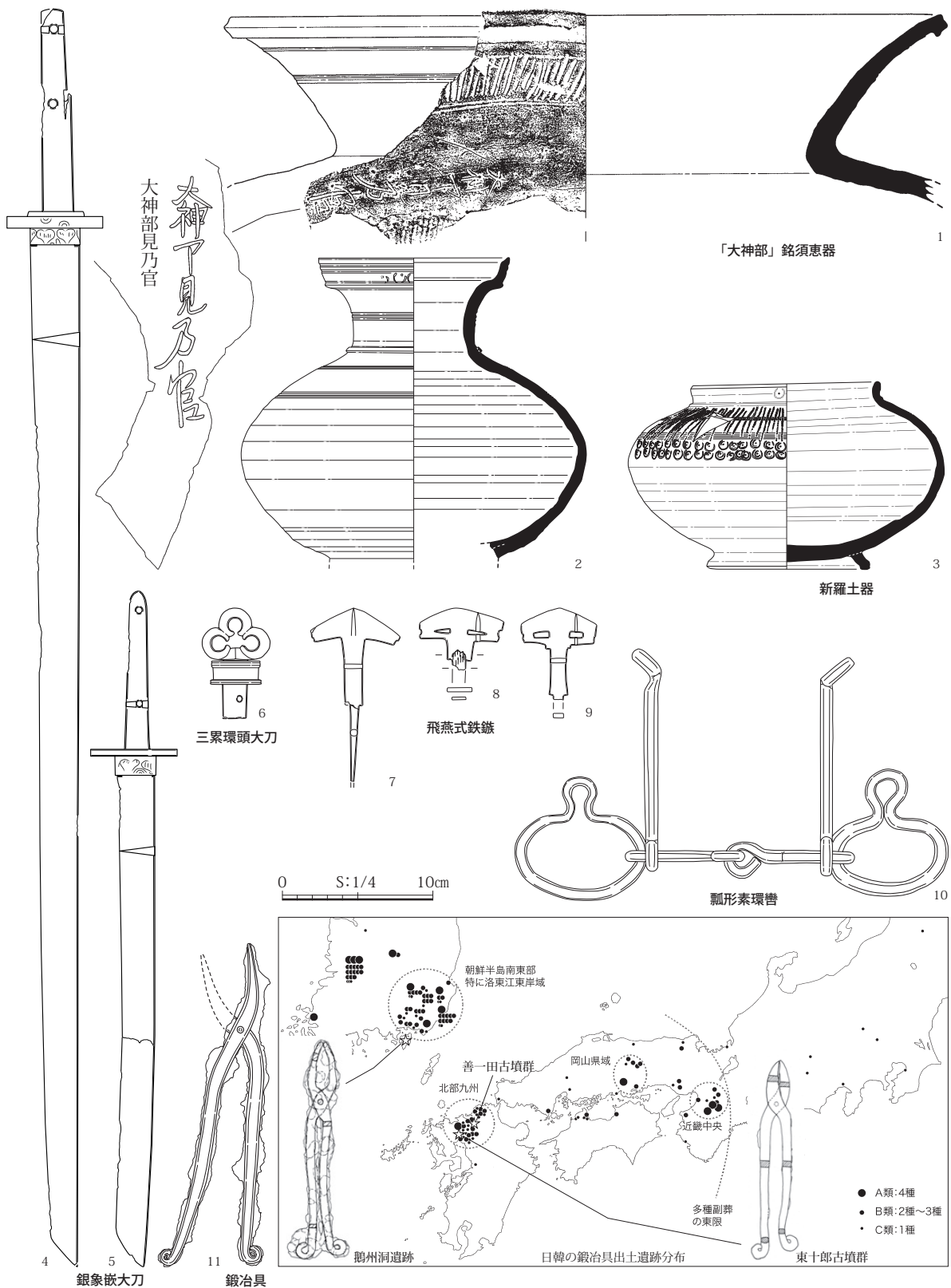
6世紀後半の西北九州には列島出土三累環頭大刀の4割が集中する。そのなかに大型古墳はふくまれず、階層とは異なるメカニズム（特定の職掌など）によって流通した可能性がたかい。ここで、糸島半島一帯に単龍鳳環頭大刀が密集することが脳裏をよぎる。『和名類聚抄』によれば、筑前国怡土郡は肥後国飽田郡から移住してきた肥君一族の居住地であり、欽明17年（556）には、百済王子を護衛するため筑紫国の船師と「筑紫火君」の率いる千名が派遣された。くわえて、単鳳環頭大刀が出土した福岡市西区石ヶ元古墳群は、嶋七郷のうち川邊郷にあたる。川邊郷は、『正倉院文書』大宝2年（702）戸籍にみえる「筑前国嶋郡戸籍川邊」の故地で、「嶋郡大領肥君猪手」らの居住地である。肥君猪手は、磐井の乱後に肥前から筑前に進出した者の子孫と推察されており、石ヶ元古墳群もその祖先や一族の墓地と考えられている〔小田1997〕。

これにたいして『続日本後紀』によれば、肥前養父郡に「筑紫火公」がみえ、佐賀県鳥栖市周辺がその進出先として考えられている〔瓜生2001〕。付近では、上三津栗原1号墳、大工田6号墳、佐賀市小清兵衛山古墳など、三累環頭大刀出土古墳が集中する。磐井の乱以後、筑紫勢力の主体的な対外交渉活動は倭王権によって規制され、糟屋屯倉や那津官家の設置にともなって王権の外交活動に奉仕するものへ変化したと説かれるように〔高田2014〕、半島系環頭大刀の集中は、こうした在来勢力の特性を維持しつつ、倭王権傘下に組みこむ懐柔策だったと評価する。しかしそれでもなお柄頭の形式差が解消されなかった背景には、地域集団ごとの身分標識が同時に機能していた可能性を指摘しておきたい。

(2) 銀象嵌大刀 〔図86～88〕

福岡平野周辺の出土古墳 善一田2号墳からは、心葉文銀象嵌鍔をつけた刀が出土した。玄室からは袋頭大刀にともなう鳩目金具が出土しており、本来この鉄刀と組みあって、木製漆塗の袋頭大刀を構成していた可能性がある。

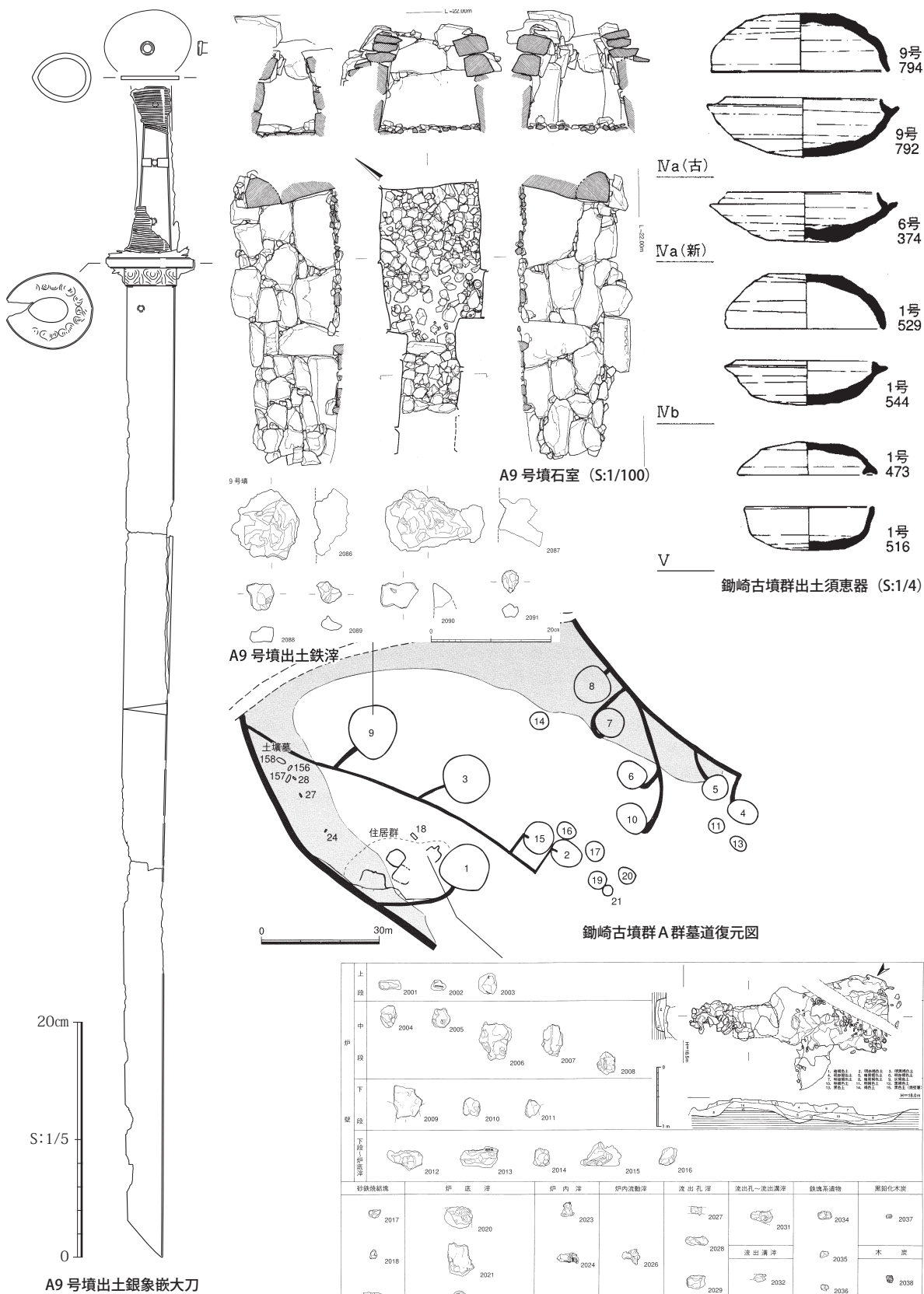
大野城市域では、窯廃業後に墓に転用された牛頸梅頭1号窯跡（後期末）からも、鐔と鍔に心葉文を銀象嵌した大刀が出土しており、文様構成は善一田2号例と似る。装具がよく残っていないため明確な新古関係は不明瞭だが、個々の心葉文の間隔を充填する文様の便化に注目すると、梅頭1号窯例が古く、善一田2号墳例がやや新相を示す。



図出典

- 1 牛頭本堂遺跡(大野城市教育委員会2008『牛頭本堂遺跡群Ⅶ』大野城市文化財調査報告書60)
 2 善一田4号墳(大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書159)
 3 善一田古墳群A群南谷部(大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書159)
 4 牛頭梅頭1次1号築跡(大野城市心のふるさと館蔵) 5 善一田2号墳(大野城市心のふるさと館蔵) 6 善一田26号墳(大野城市心のふるさと館蔵)
 7 中通10号墳(大野城市心のふるさと館蔵) 8 中通10号墳(大野城市心のふるさと館蔵) 9 後田2号墳(大野城市心のふるさと館蔵)
 10 善一田18号墳(大野城市心のふるさと館蔵) 11 善一田18号墳(大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書159)
 日韓の鍛冶具出土遺跡分布(鈴木2016、上田2017をもとに再構成)

図86 特殊遺物にみる大野城市域周辺のアイデンティティ



図出典
大 刀 (福岡市埋蔵文化財センター蔵)
その他 (福岡市教育委員会 1997 『鋤崎古墳群2』
福岡市埋蔵文化財調査報告書 506)

図87 鋤崎A9号墳と鋤崎製鉄A遺跡

福岡市西区鋤崎A9号墳（後期末）でも、鐔と鍔に心葉文を銀象嵌した木装頭椎大刀（切羽など、部分的に金銅装）と思しき鉄刀が出土している。この刀は全長約100cmの鍔本孔鉄刀A群を内蔵するなど、銀象嵌大刀全体のなかでも大型品に位置づけられる優品である。

A9号墳は古墳群の盟主墓にとみられる。墓道からは合計1,934.5gの鉄滓（流出滓、炉内滓）や大型の炉壁片が出土し、製錬にかかわる一連の過程で生じる資料を網羅している。ただ、鍛冶滓は出土しておらず、もっぱら鉄そのものの生産にたずさわった被葬者像が描かれる。およそ30m南の地点ではほぼ同時期に操業されたとみられる炉床、およびコンテナ20箱分の鉄滓が出土している。古墳群全体では、9基の古墳に鉄滓が供献されている。

象嵌大刀副葬古墳の性格 橋本文は、象嵌大刀は地域の最有力墳に副葬されるばあいもあるいっぽうで、小規模な円墳にも副葬されることから、ひろい階層に下賜されたものと評価する〔橋本博1993〕。西尾克己は長野県の象嵌大刀を集成し、シナノの舎人と関連づける〔西尾2016・2017〕。

牛頸梅頭1号窯跡を調査・報告した石木秀啓は、窯転用墳墓という非在地的な墓制にくわえ、ヘラ書き須恵器から判明する7・8世紀の牛頸窯の工人は「大神部」という畿内系氏族であることに注目して牛頸の首長の出自を畿内に求め、その管理者として那津官家を想定する〔石木2012〕。また、牛頸窯周辺の古墳群には窯の構築に必要なU字刃先が多く副葬されることから、窯業にたずさわった工人集団をふくむとみられる〔小嶋2011〕。

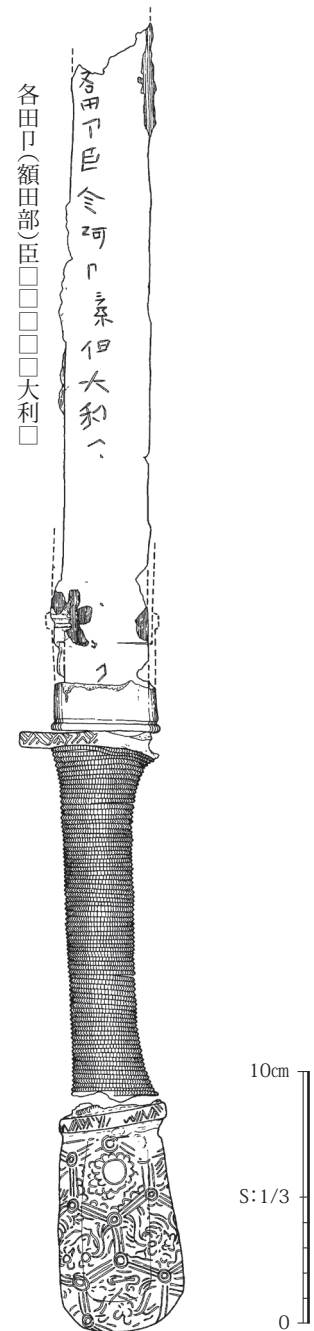
善一田2号墳でも大甕をふくむ多くの須恵器とU字刃先2点、19号墳西側のST01土坑では「奈」字のヘラ書き須恵器が出土している。「奈」の須恵器はTK209型式期のなかでも比較的新しく、牛頸窯のヘラ書き須恵器の年代とも親和的である。ただし、これが牛頸産か否かの断定はできず、近在の雉子ヶ尾窯や未知の窯跡もふくめ、乙金地区の窯業生産も射程にいれておく。

ここで象嵌大刀全体の性格を判断することはできないが、金工生産を担った善一田古墳群の被葬者集団や牛頸梅頭1号窯跡の被葬者像を鑑みると、王権膝下の生産拠点において流通していた可能性が浮かびあがる。さらに、島根県岡田山1号墳の「額田部」銘銀象嵌円頭大刀を思い起こせば、銀象嵌大刀は部民とかかわる可能性もある。

桃崎祐輔も、銀象嵌大刀と一緒に出土した福岡県飯塚市山王山古墳の馬具が、岡田山1号墳のほか、島根県上塩冶築山古墳、奈良県牧野古墳、福岡県朝倉市狐塚古墳など、額田部、刑部、壬生部にかかわる可能性がある馬具の構造を踏襲することをあきらかにし、岡田山1号墳の象嵌大刀を引きあいに出しながら、額田部との関連を読みとろうとする〔桃崎2014〕。

このようなありかたは、銀象嵌大刀が全国で600例ちかく知られるその普遍性や〔瀧瀬2019〕、倭系大刀の仕様による階層性の中位に位置づけられることとも親和的な状況といえるだろう〔橋本英2014〕。

善一田2号墳の被葬者は、牛頸窯の操業に出仕して牛頸梅頭1号窯跡の操業者に継ぐような地位を担ったか、あるいは牛頸窯の技術者集団と密接な関



図出典
島根県教育委員会 1987『出雲岡田山古墳』

図88

岡田山古墳の銀象嵌大刀

連を築きつつ、善一田古墳群周辺における未知窯の操業や製鉄を統率するような人物と考える。ただしこれはあくまでも「大野城モデル」であり、西山要一が指摘するように、本来的には倭王権の公的組織である品部の金工工房による独占的な生産と供給が前提にあったのだろう〔西山1986〕。

(3) 瓢形素環轡〔図89〕

善一田18号墳と1号墳から各一個体出土した。一基の古墳や特定の古墳群から複数個体の瓢形素環轡が出土する事例は、岐阜県大牧1号墳や山口県為弘古墳群、大分県飛山横穴墓群などが知られるに過ぎない。

18号墳例は鏡板が大きい、成形にともなう屈曲点が不明瞭なほど造りが丁寧である。これにたいして1号墳例は、鏡板が小型で鏡板成形時の屈曲点がゴテゴテとしており、また、銜先環に連結した鏡板と引手の前後関係が左右で逆転するなど、全体的に造りが粗い印象を受ける。18号墳例が古く、1号墳例が新しい様相を示すとみれば、古墳築造の順序とも親和的である。

鏡板と銜、引手の連結構造は、いずれも銜先環に鏡板・引手を連結する「銜介在型連結」〔大谷宏2008a〕である。引手壺も、ともに「く」の字状だが、1号墳例の引手のうち銜に連結する環は蕨手状で比較的新しい要素がみられる。鏡板の断面をみると、18号墳例は明瞭な円形だが、1号墳例はやや扁平気味である。環状鏡板付轡全体の地域性を検討した宮代栄一は、鏡板の断面が扁平な環状鏡板付轡は、TK209型式期以降の福岡・佐賀に集中するもので他地域にはほとんど類例がなく、当該地域のいずこかで生産されたものと述べる〔宮代1998〕。1号墳の轡は、こうした在地化の過渡期的様相を示している。大谷は、瓢形素環轡はそのほかの素環轡と比べて補修事例が多いことや、吉備のような鍛冶との関連がうかがえる地域での出土が多いことに注目し、鍛冶技術との関連で各地にもたらされたものとみる。

福岡県域で最古の事例とみられるのは鞍手町安城3号墳例である。鏡板は一本の鉄の棒を瓢形に形成し、薄く造り出した端部を立間上部の表裏で重ねあわせる技法が、TK43型式期の島根県高野2号横穴例と共通する。善一田18号墳例は大きさや造りこみの丁寧さからこれに後続するとみられるが、安城3号例は鏡板介在型連結であるのにたいし、善一田18号例は後出する1号例と同じ銜介在型連結である。福岡県那珂川市片縄山丸ノ口V群4号墳では、銜介在型、蕨手状引手の瓢形素環轡とともに、全長約34cmの鉄鉗が出土している。すなわち、瓢形素環轡のすべてが一元的に配布されたとする根拠は弱く、祖形品が広域に流通したのちに各地で模倣生産された可能性もじゅうぶんある。

福岡平野周辺は、補修痕跡のある馬具が多く出土することでも知られる〔栗林2004〕。月隈丘陵上にある堤ヶ浦5号墳・7号墳でも、在地製あるいは補修品と思しき歪な轡が出土している。福岡市東区和白遺跡上和白地区では、製鉄関連遺物と猿の塚古墳の歪な瓢形素環轡の関連が示唆的である。那珂川市片縄山古墳群では、丸ノ口V群4号墳から瓢形素環轡と鉄鉗、丸ノ口IV群2号墳では銜を補修した心葉形十字文透鏡板付轡が出土している。

井野山を挟んで善一田古墳群の北方に位置する宇美町湯湧2号墳でも瓢形素環轡が出土しており、全体的な造りの形骸化や扁平化から善一田1号例よりも新しい。また宇美観音浦KS22号墳の大型矩形立間環状鏡板付轡は、本来2連銜だったものが銜の中央付近で壊れたのか、華奢なS字形のフックでこれらをつなぎ留め、真横にピンと轡を張ると鏡板が左右で捻れた配置となる。このような脆弱な補修痕跡は、粕屋町脇田山古墳から出土した鉄製内湾楕円形鏡板付轡の細い螺旋状遊環にもみられる。作業場の特定に課題は残るが、中島圭があきらかにしているように、糟屋郡域では7世紀以前の鍛冶の存在を示す資料が皆無に等しく〔中島2008〕、なおかつ善一田古墳群と地理的に近いことから、これらの轡を製作・補修したのは善一田古墳群の被葬者集団そのものだった可能性もある。いずれにせよ、馬具の生産や補修にかかわる最低限の技術は、古墳時代後期における福岡平野広域のいずこかには存在していたとみてよいだろう〔西2016〕。

(4) 飛燕式鉄鏃〔表11, 図90〕

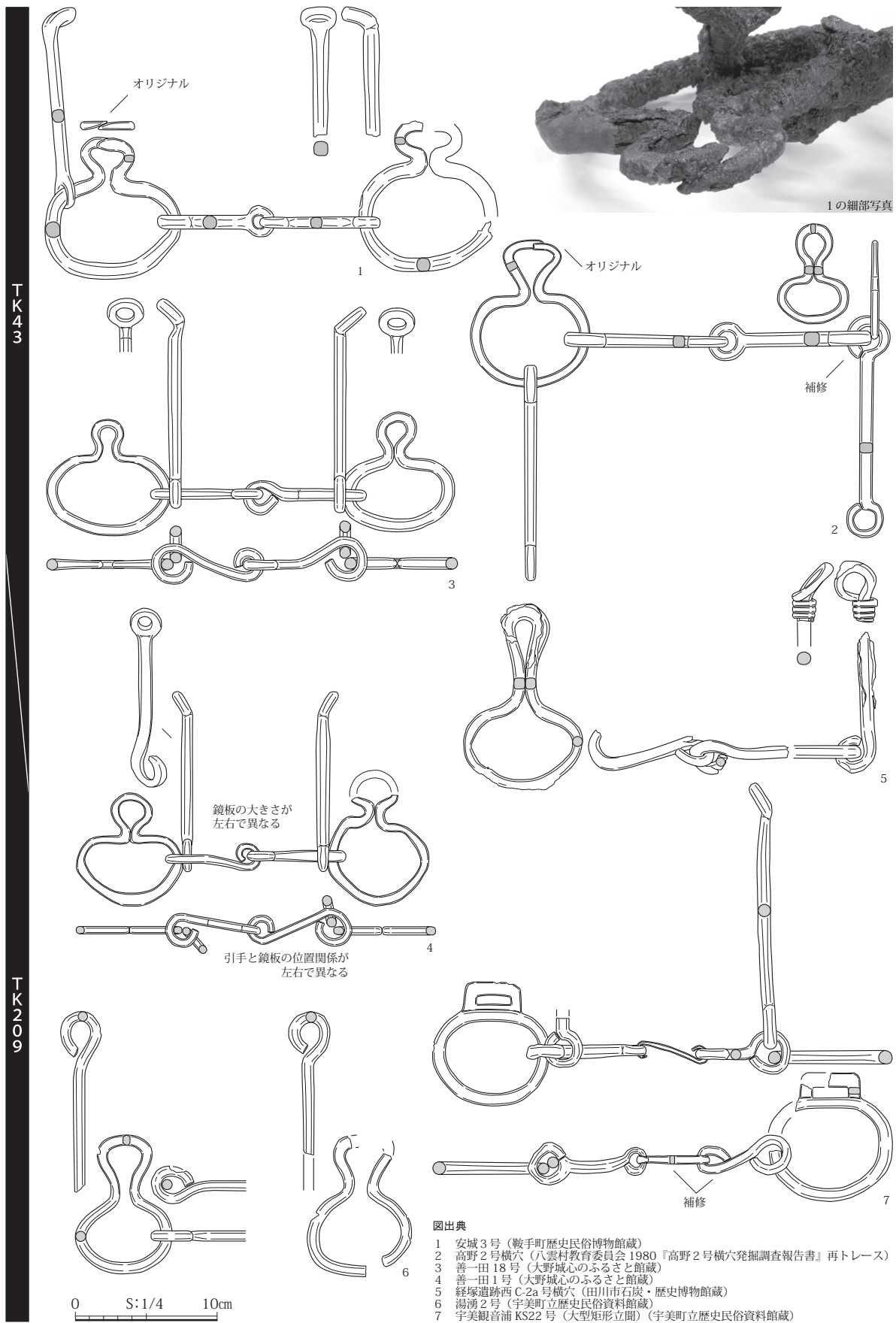


図89 善一田古墳群の瓢形素環轡と関連資料

形態の規範 飛燕式鉄鏃は三角形鏃あるいは五角形鏃のうち、鏃身幅が鏃身長 ≥ 2 倍以上にひろがるもので、北部九州での出土例が多い〔尾上1993, 西岡2005〕。

これまでは、最古段階の飛燕式鉄鏃は山の前1号墳例とみられ、後期中葉に位置づけられてきたが、共伴する須恵器の多くはTK209型式期、さかのぼってもTK43型式期の比較的新しい段階のものであることから、飛燕式鉄鏃の厳密な製作開始時期を求めることはむずかしい。

飛燕式鉄鏃は一点一点の個性がつよいものの、鏃身部の両下端部隅に抉りがある資料が多くみられる。この抉りは非常に微細な造りであり、現物の流通がなければ簡単に形骸化しかねない。抉りがある事例の鏃身部は大型のものが多く、また形状に比較的高規格性がうかがえるが、抉りのないものは小型品が多く、個々の形状にばらつきが目立つ。抉りがある事例は、福岡平野周辺から二日市地峡帯を挟んで熊本北部にかけて分布し、飛燕式鉄鏃全体の集中域と重なることから、抉りのあるものを真正品と理解する。

那珂川市片縄山古墳群丸ノ口V群3号墳例のように、鏃身部に多角形透かしのあるものもふくまれるほか、そのほかの透かし鏃との共伴事例も多く知られ、弥生時代以来の北部九州における伝統的な透かし鏃との親縁性、たとえば、両者の製作・配布主体がちかしい関係にある可能性などを示す。九州以外では、多角形透かしのある飛燕式鉄鏃は確認していない。

いっぽうで、飛燕式鉄鏃には、独立片逆刺などの広域流通型式との折衷はみられない。関東や東海、瀬戸内にも点的な事例があるが、北部九州出土品の形態と趣が異なるものが多く、時期も北部九州より新しいものがほとんどである。静岡県地蔵平A26号例は鏃身部端に抉りを有するが、北部九州には事例のない円孔を穿つなど、独自性がみられる。北部九州のなかでも、佐賀県武雄市東福寺ST014古墳や大分県中津市上ノ原51号横穴のように、密集地である二日市地峡帯から距離的に離れた場所での出土事例には長頸鏃との折衷品がふくまれるが、抉りはみられない。また、群馬県白山古墳や東京都梵天山横穴墓、岡山県定北古墳のように、1基の古墳から4点以上出土することもあるが、北部九州では4点以上出土した古墳はなく、鏃組成のなかでのありかたにも相違がある。遠隔地には形態規範や保有意義にかんする情報の変容が認められる。

出土古墳（群）の性格 北部九州の飛燕式鉄鏃は各地にまんべんなく分散するというよりもむしろ、特定の地域や古墳群に集中することが多い。また、装飾大刀や馬具との共伴事例もみられるが、出土古墳は中小規模の円墳が多く、現状では前方後円墳からの出土は知られていない。また、振り環頭大刀との共伴事例はない。このような状況から、飛燕式鉄鏃に一定の社会的優位性を認めるが、倭王権内の階層序列などを示すとはいいがたい。むしろ、小地域において果たした古墳（群）の性格を積極的に評価したい。また、同一古墳からの出土数は1本が基本で、多くても嘉麻市新行坊古墳の3本である。鏃組成のなかで1～3本という少なさは、実用性よりも象徴的な性格を印象づける。

具体的には、大野城市域では中通古墳群と後田古墳群で計8本、宇美町域では岩長浦・観音浦古墳群で計4本が知られ、最密集地域を形成する。中通古墳群や後田古墳群は、牛頸窯操業者集団の墓域のなかでもおおきなまとまりであり〔舟山2010〕、築窯に不可欠なU字刃先がまとまって出土した後田10号墳の被葬者こそが窯業を統べる存在とされる〔小嶋2011〕。両古墳群周辺から西の油山山麓に飛燕式鉄鏃出土古墳が点する点も特徴的なありかたといえるだろう。岩長浦古墳群でも、2基の須恵器窯を囲むように11基の円墳が築かれ、そのうち立地や墳丘・石室の規模、副葬品から盟主墓とみられる1号墳で飛燕式鉄鏃が出土している。須恵器との関連でいえば、八女産須恵器との共伴や分布の重なりも指摘される〔長・中島2013〕。

二日市地峡帯を挟んで南の小郡市域においても、横隈北田古墳群、津古内畑遺跡、三沢古墳群などに飛燕式鉄鏃が集中し、三沢44号墳では全国最大の事例が2本出土している。三沢古墳群周辺は殉葬馬の検出事例も多く、馬匹生産との関係で注目される。津古内畑遺跡には6基の古墳時代土坑墓があり、このうち飛燕式鉄鏃が出土した2号土坑が最大である。近在する横隈鍋倉遺跡では、鍛冶集団とのかかわりが想定される

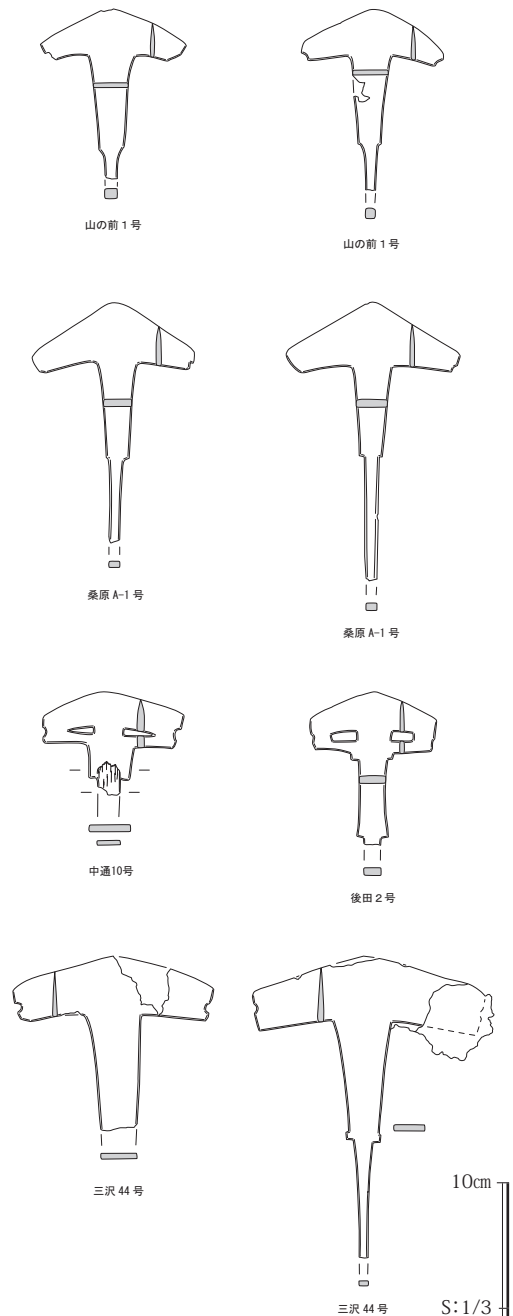
表11 九州の飛燕式鉄鏃集成

遺 跡	所在地 (旧所在地)	墳形・規模 (m)	数	実測
平等寺向原 I - 1 号	福岡県宗像市	円・14	1	●
平等寺向原 II - 17 号	福岡県宗像市	-	1	●
朝町山の口 6 号	福岡県宗像市	円	1	●
安城 3 号	福岡県鞍手町	円	1	●
萩の浦 3 号	福岡県宮若市 (若宮町)	-	1	×
新行坊	福岡県嘉麻市 (嘉穂町)	円	3	●
影塚 3 - ③ 号	福岡県桂川町	横穴	2	●
上ノ原 6 号	福岡県久山町	円・13	2	●
松浦 5 号	福岡県篠栗町	横穴	1	●
観音浦 KS15 号	福岡県宇美町	円	2	●
観音浦 KS23 号	福岡県宇美町	円	1	●
岩長浦 IW 1 号	福岡県宇美町	円	1	●
中通 1 号	福岡県大野城市	円	1	●
中通 9 号	福岡県大野城市	円	2	●
中通 10 号	福岡県大野城市	円	2	●
中通 12 号	福岡県大野城市	円	2	●
後田 2 号	福岡県大野城市	円	1	●
八隈 3 号	福岡県筑紫野市	円	1	●
横隈北田 1 号	福岡県小都市	円	1	●
三沢 9 号	福岡県小都市	円	1	●
三沢 44 号	福岡県小都市	円	3	●
津古内畑 2 号土坑墓	福岡県小都市	土坑	1	×
柿原 G-1 号	福岡県朝倉市 (甘木市)	円	3	●
下淵名子 4 号	福岡県朝倉市 (甘木市)	円	1	●
須川ノケオ 1 号	福岡県朝倉市 (朝倉町)	円・15	1	●
仙道 9 号	福岡県筑前町 (三輪町)	円・12	1	×
益生田 A-15 号	福岡県久留米市 (田主丸町)	円	1	●
鬼塚 2 号	福岡県広川町	-	1	●
植松 1 号	福岡県広川町	円・14	1	●
上長延 6 号	福岡県広川町	円・12	1	●
上長延 9 号	福岡県広川町	円	1	●
山の前 1 号	福岡県広川町	円・24	2	●
東濃施	福岡県みやま市 (高田町)	円・24	1	×
望谷	福岡県大牟田市	-	1	×
東油山 2 号	福岡県福岡市城南区		1	●
徳永アラタ 6 号	福岡県福岡市西区	円・10	1	●
桑原 A-1 号	福岡県福岡市西区	-	2	●
丸ノ口 V 群 3 号	福岡県那珂川町	円・11	1	●
観音山Ⅲ-9 号	福岡県那珂川町	円・10	1	●
東十郎特-イ号	佐賀県鳥栖市	円	1	×
都谷 B 区 ST002 号	佐賀県鳥栖市	円・10	1	×
東福寺 ST014 号	佐賀県武雄市	円	3	×
高下	長崎県雲仙市 (国見町)	-	2	×
瀬戸口横穴墓群前提部	熊本県菊池市 (七城町)	横穴	1	×
荻迫 3 号	熊本県合志市 (西合志町)	横穴	1	×
つつじヶ丘 C-1 号	熊本県熊本市	横穴	1	×
湯の口 129 号	熊本県山鹿市	横穴	1	×
上ノ原 51 号	大分県中津市 (三光村)	横穴	3	×
春村	鹿児島県伊佐市 (山野村)		1	×

TK43

TK209

TK217



図出典

山の前 1 号 (九州歴史資料館蔵)
 桑原 A-1 号 (福岡市埋蔵文化財センター蔵)
 上長延 9 号 (広川町古墳公園資料館蔵)
 中通 10 号 (大野城市心のふるさと館蔵)
 後田 2 号 (大野城市心のふるさと館蔵)
 三沢 44 号 (小都市埋蔵文化財センター蔵)

図90 飛燕式鉄鏃の変遷



図91 飛燕式鉄鍬最密集地域とその周辺

鉄鐸が3点出土している。

挟りや透かしを有する飛燕式鉄鏃分布の南限である熊本北部では、山鹿市湯ノ口129号横穴（盟主墓）や、鉄滓を出土する支群の最上位に位置づけられる熊本市つつじヶ丘C-1号横穴でも飛燕式鉄鏃が出土している。牛頸窯では操業期間をつうじて鉄生産がおこなわれたこともふまえると、飛燕式鉄鏃出土古墳の被葬者は、手工業生産を担う上位層と密接にかかわるとみられる。ただし、福岡の飛燕式鉄鏃出土遺跡のほとんどが円墳であるなか、熊本や大分では横穴主体である。二日市地峡帯周辺が飛燕式鉄鏃様式圏の中心といえる。

以上は、最新の集成をふまえたうえで西岡千絵が示した諸論点を追認するものだが、かならずしも墳丘の形態や規模に反映される階層構造の上位にあるものではなく、むしろ特定集団へ帰属するという視点は掘り下げなければならない。飛燕式鉄鏃の出現が後期後半の八女地域に求められるという指摘も、磐井の乱や屯倉設置との関連を想起させる。いずれにせよ、飛燕式鉄鏃を副葬する古墳の被葬者は、在地勢力に連なる者とみてよい。

北部九州で飛燕式鉄鏃と共伴する、あるいは飛燕式鉄鏃出土古墳の近隣から出土する装飾大刀は半島系が多い。つまり、当該時期の北部九州における装飾大刀の性格は、飛燕式鉄鏃を介在させると理解しやすいという仮説が立つ。たとえば、みやま市東濃勢古墳では、三累環頭大刀と飛燕式鉄鏃が共伴しているほか、朝倉市域の須川ノケオ1号墳や下淵名子4号墳では、玄室の平面プランが円形を呈する肥後型横穴式石室から飛燕式鉄鏃、下淵名子2号墳では双龍環頭柄頭の外環が出土している。福岡市西区の徳永アラタ6号墳や桑原A-1号墳では、装飾大刀は共伴していないが、同 高崎1号墳の単鳳環頭大刀、糸島市香力1号墳や同 西堂古賀崎古墳の単龍環頭大刀、伝・大門出土の双龍環頭大刀などが目立つように、糸島周辺は九州一の龍鳳文環頭大刀の集中地域である。

欽明17年（556）には、百済王子を護衛するため筑紫国の船師と筑紫火君の率いる千名が派遣されている。くわえて『和名類聚抄』によれば、筑前国怡土郡は肥後国飽田郡から移住してきた肥君一族の居住地である。単鳳環頭大刀が出土した福岡市西区石ヶ元古墳群は、嶋七郷のうち川邊郷にあたる。川邊郷は、『正倉院文書』大宝2年（702）戸籍にみえる「筑前国嶋郡戸籍川邊」の故地で、「嶋郡大領肥君猪手」らの居住地である。肥君猪手は、磐井の乱後に肥前から筑前に進出した者の子孫と推察されており、石ヶ元古墳群もその祖先や一族の墓地と考えられている〔小田1997〕。

獅嚙環頭大刀は、列島全体で33例、このうち九州では福岡県福智町神埼2号墳、佐賀県唐津市半田古墳、長崎県大村市茶屋の辻古墳、大分県杵築市シラハゲ古墳の4例が知られる。

半田古墳と茶屋の辻古墳は、飛燕式鉄鏃出土古墳の西限である東福寺ST014号墳や高下古墳に最も近い装飾大刀出土古墳であるし、杵築市では七双子3号墳から飛燕式鉄鏃が出土しており、シラハゲ古墳とともに国東半島では希少な装飾武器出土古墳である。これらは共伴しているわけではないため、同じ配布原理では説明できないものの、獅嚙環頭大刀や飛燕式鉄鏃が似たようなルートをつうじてもたらされた可能性が浮かびあがる。このうち半田古墳は松浦半島の基部に立地するが、『日本霊異記』には肥前国松浦郡に「火君之氏」とみえる。肥前養父郡には「筑紫火公」がみえ、付近では三累環頭大刀が出土した佐賀県吉野ヶ里町上三津栗原1号墳、多久市大工田6号墳、佐賀市小清兵衛山古墳、飛燕式鉄鏃が出土した鳥栖市東十郎特-イ号墳、都谷B区ST002号墳などがある。このように、当該時期における北部九州の半島系装飾付環頭大刀と飛燕式鉄鏃出土古墳の分布は、瓜生秀文が整理した肥君勢力の進出先と一部重なる〔表12、瓜生2001〕。

それ以外にも、粕屋町鶴見塚古墳は全長約80mの前方後円墳に復元され、『筑前国続風土記』には、磐井の息子・葛子の墓として伝えられる。記載された石室の形状や寸法は東光寺剣塚古墳と類似する。そして鶴見塚古墳以降、糟屋地域における前方後円墳の築造は停止する。葛子の墓伝承の真偽はともかく、筑紫・肥君勢力が当該地に残っていたとすれば、近在する久山町上ヶ原古墳群や篠栗町松浦横穴墓群での飛燕式鉄鏃

表12 北部九州における「肥君一族」の進出先一覧〔瓜生2001〕

表記	進出先	出典	備考
火君之氏	肥前国松浦郡	『日本霊異記』下巻35	肥君
肥君猪手	筑前国嶋郡	『大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍』	肥君
飽田郷	筑前国怡土郡	『和妙抄』筑前国怡土郡条	肥後国飽田郡からの移住
吡伊郷	筑前国早良郡	『和妙抄』筑前国早良郡条	肥君
益城連	筑前国御笠郡	『続日本紀和銅二年六月廿一日条	肥後国益城郡からの移住
筑紫公火公貞直	肥前国養父郡	『続日本後紀』嘉祥元年八月六日条	筑紫肥君



図92 三累環頭大刀・瓢形素環轡・飛燕式鉄鍔の分布の重なり

の出土も理解しやすい。

豊前では、単鳳環頭大刀が出土したみやこ町皆見大塚古墳の横穴式石室に「×」文や「△」文が描かれ、筑後・肥後地方の装飾古墳と共通する。これは近在の上毛町百留横穴墓群にはない装飾文様であり、乱後に磐井が「豊前国上膳県」（福岡県豊前市付近？）に逃げたという『筑後風土記逸文』の記事を想起させる。

このようにみると、肥後系の石室、半島系装飾大刀、飛燕式鉄鏃のつながりがおぼろげながらに浮かびあがる。しかしそれらが完全に一致しないのは、装飾大刀の配布元と、飛燕式鉄鏃の配布元の相違にもとづくものと考ええる。

いっぽう、国家祭祀の場である沖ノ島祭祀遺跡では、おびただしい数の金属製品が出土したものの飛燕式鉄鏃は出土していない。宗像沿岸部も飛燕式鉄鏃の空白地帯であり、後期の環頭大刀も、福津市宮地嶽2号墳の単龍環頭大刀や津丸横尾3号墳の三累環頭大刀が知られる程度である。むしろ宗像周辺では、福津市宮地嶽古墳の日本一巨大な頭椎大刀が目立ち、福津市勝浦水押SO-01号墳や古賀市楠浦・中里A1号墳の金銅装大刀も、頭椎大刀である可能性がたかい。宗像市平等寺向原I-1号墳の金銅装円頭大刀や、宗像市相原2号墳、久戸19号墳、原3号墳の圭頭大刀も注目され、九州のなかで倭系の金銅装袋頭大刀が最も濃密に分布するが、獅嚙環頭大刀や双龍環頭大刀は現状では確認できず、糸島一帯とは好対照である。

似たような状況は、飛燕式鉄鏃や半島系の金銅装刀装具が出土した篠栗町松浦横穴墓群と、その南方約1.6kmにあった粕屋町井山古墳群との対比にも認められる。井山古墳群は、横穴式石室を主体部とする円墳群で、鉄刀や鉄鏃、馬具、農工具、鉄滓、金属器模倣須恵器などが出土しているが、16号墳から出土した端部断面がT字形の大型金銅装鐔が目立つ〔図80-6〕。この鐔は、袋頭大刀にともなった可能性がたかいが〔橋本英2012〕、古墳群全体でも飛燕式鉄鏃は確認できなかった。

このような大刀の系譜ごとの分布の違い、あるいは飛燕式鉄鏃の分布の粗密は、宗像沿岸部に80～100m級の前方後円墳をふくむ古墳群を造営した宗像君と、筑紫君や火（肥）君の出自が異なることに起因すると考える。

(5) 小 結

善一田古墳群の被葬者集団はおおきく二つの手工業を担っていたとみられる。すなわち、①鍛冶具や一部在地製とみられる馬具の副葬からは、金工品の製作や補修を、②多量の須恵器・U字鋤先や銀象嵌大刀の副葬は牛頸窯操業集団の古墳群とつうじることから、須恵器生産をおもな生業としていたことを想定できる。くわえて、三累環頭大刀や新羅土器の存在から、朝鮮半島洛東江以東の勢力に系譜が連なるか、何らかの接触をもっていたと考えられる。

古墳時代後期の福岡平野周辺では、磐井の乱後処理にともなう地域再編をつうじて、倭王権傘下に組みこまれた協業的地縁が形成された。生産力のたかさや副葬品目の様相から、その中心の一端は牛頸窯や乙金丘陵周辺の古墳群にあると思われるが、このような組織だった人員の確保と運営には、旧来の在地集団と彼らを統括する指揮層による階層編成ないし秩序形成が不可欠である。その在地集団には、筑紫君や肥君勢力が一定数組みこまれていたと考えるのが自然であり、彼らを束ねるための一人として配置されたのが、在来の首長系譜に連ならない剣塚1号墳の被葬者だった可能性は考慮してよいだろう。

牛頸における須恵器生産の本格化は那津官家設置を契機とし、福岡市博多区東光寺剣塚古墳の被葬者をその管掌者とみる意見があるが〔瓜生2001〕、三累環頭大刀の密集や地理的距離でいえばむしろ、大野城市域の諸集団を直接統括したのは剣塚1号墳の被葬者だった可能性もある。飛燕式鉄鏃出土古墳は、6世紀後半以降、剣塚1号墳を中心とした地域に最も集中することと同様の脈絡で理解しうる。

善一田古墳群における広域流通型の武装具や朝鮮半島由来の鍛冶具副葬は、境界領域における被葬者集団の性格を反映する。彼、彼女らは須恵器や金属製品の生産、馬具の補修などをおこない、その一部を周辺

地域に分配したと考える。鉄地銀象嵌大刀はそうした王権の公的な下部構造に組みこまれた集団の表象であり、三累環頭大刀は対外的な身分の象徴だろう。舶載品の可能性がある剣塚1号墳の三累環頭は、そうした集団を統括する広域的な階層的優位性と、境界領域の地域的特質を表象する。

善一田26号墳の三累環頭は、剣塚1号例に直接後続するとみられ、倭製品ならば初期の事例である。その後、三苦京塚1号墳や吉武D-11号墳など福岡平野広域、さらに時期が下れば二日市地峡帯を挟んだ南部、佐賀平野以西に分布をひろげ、列島一の集中域を形成してゆく。吉武D-11号墳でも合計約4,000gの鉄滓が出土していることから、鉄生産を媒介とした流通が想定できる。三累環頭が出土した三苦京塚1号墳と、鍛冶関連遺物や瓢形素環轡が出土した和白遺跡は、直線距離で3kmも離れていない。北部九州の飛燕式鉄鍔は、おおむね三累環頭大刀や瓢形素環轡と分布が重なることから〔図91・92〕、手工業にたずさわる地域集団が創出したアイデンティティとして評価しうる。福岡平野周辺から離れた、大牟田市東濃施古墳における三累環頭大刀と飛燕式鉄鍔の共伴は、こうした理解を助けるものである。

第3項 糸島半島周辺 ― 元岡・桑原遺跡群を中心に ― 〔図93・94〕

糸島半島では、元岡・桑原遺跡群周辺の人々が地域経営の中心を担った。石ヶ元古墳群では大量の鉄製武器や馬具のほか大型の鍛冶具や鉄滓も出土していることから、そのなかには少なくない数の在地生産・補修品をふくむとみられる。

そのうち12号墳からは倭装大刀とみられる一文字d類鉄刀や銀象嵌鐔付大刀とともに、生産用具である鋸、鉋、鑿、鉄床、鉋、大型の鉄鉋が出土している〔図94上段、図95-1・2・3〕。後期古墳副葬鍛冶具の組成、量としては、日本列島において最もすぐれた一群である〔鈴木一2016a〕。共伴した二条線透かしを穿つ平根鍔は長崎県壱岐市笹塚古墳にも類例があることから、石ヶ元古墳群周辺で製作した鉄製品を壱岐に供給していた可能性がある〔図97〕。

たほう、8号墳では生産関連遺物が少ないかわりに、単鳳環頭大刀や石突をとまなう鉄鉾が2本以上出土するなど、12号墳よりも武威の面ではすぐれていることから、8号墳こそが石ヶ元古墳群階層構造の最上位とみられてきた感は拭えない。しかし、実際には12号墳に長大な倭装大刀があることから、生産を統べる12号墳が最上位、8号墳はその軍事的もしくは対外的な場面での補佐、というような被葬者集団の相関関係を描くことができる。そのばあい、石ヶ元古墳群がもつ本質は生産面に求められる。

これは、元岡G-1号墳や、石ヶ元古墳群の西方約4kmに位置する社古田2号墳において金銅装圭頭大刀〔図98〕、糸島半島のつけ根に位置する荒無田1号墳で大量の小札と頸甲片が出土していることとも抵触する問題である。とくに社古田2号墳は、糸島半島のなかで最も海浜に面した旧・志摩町久米地区に立地し、推古10年（602）、任那を滅ぼした新羅にたいする征討計画の際、征新羅將軍として来目皇子（生年不詳-603）が2万5000人の軍を率いて島郡に屯営したという『日本書紀』の記事²⁾を想起させる。断定はできないが、金銅装圭頭大刀を佩用した社古田2号墳や元岡G-1号墳の被葬者を軍事指揮官、甲冑をもつ荒無田1号墳の被葬者をその補佐、そしてそのような軍事集団を物資や人的資源の面で支えたのが、ほかならない石ヶ元古墳群の被葬者集団だったと評価できるだろう。

石ヶ元古墳群の南西1kmに位置する元岡G-6号墳から出土した武器や馬具のうち注目できるものとして、庚寅銘金象嵌大刀、三角穗式鉄鉾、飛燕式鉄鍔、大型銅鈴を挙げることができる〔図96〕。

三角穗式鉄鉾は、複数本副葬されていることや推定全長26.5cmという数値から、TK43-TK209型式期頃に位置づけられる。北部九州では元岡G-6号墳のほか、国家祭祀の場である宗像市沖ノ島7号遺跡でも2本出土していることが示唆的である。三角穗式鉄鉾の保有そのもののみならず、保有する数にも一定の階層的差異がうかがえる。全国的には有力な墳墓での多量副葬がみられ、これが三角穗式鉄鉾流通の本質にもかか

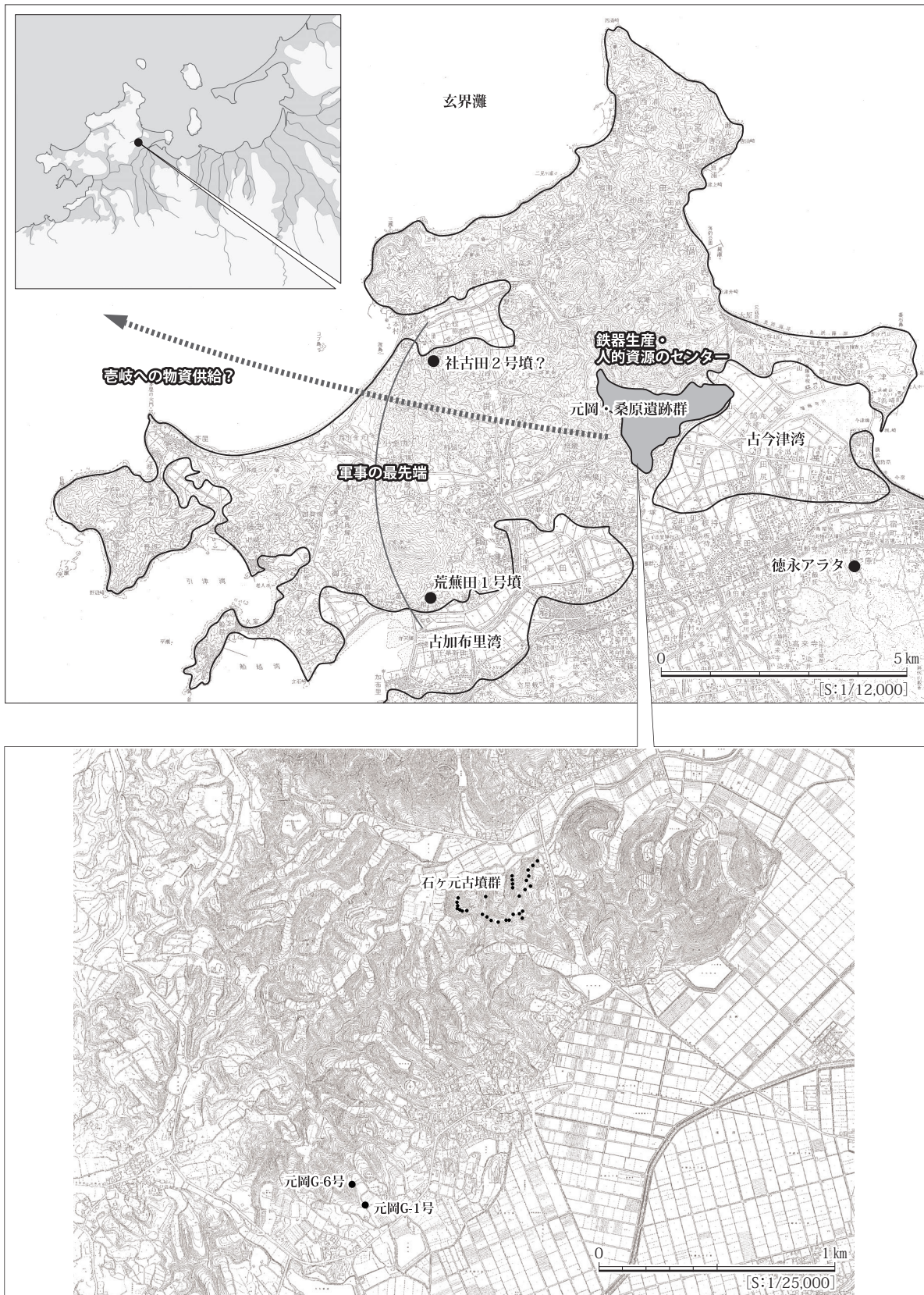
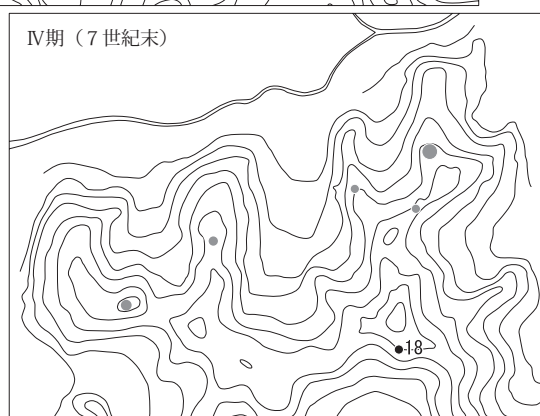
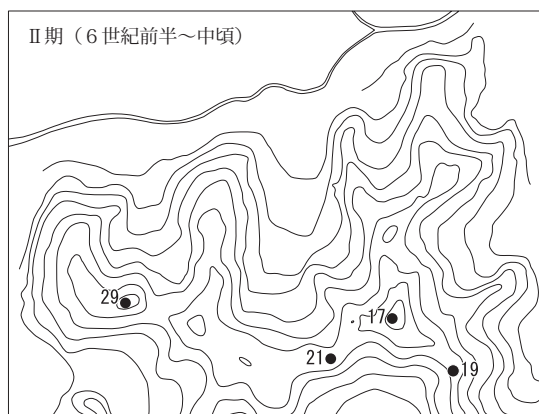
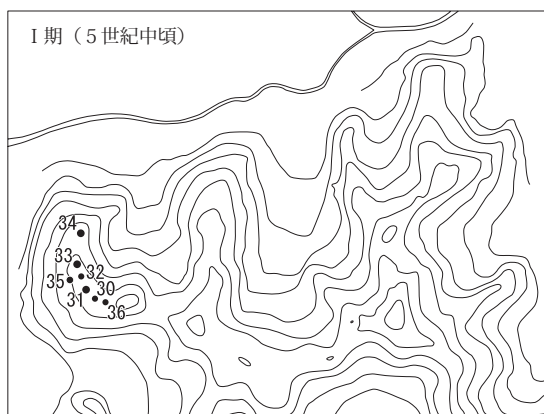
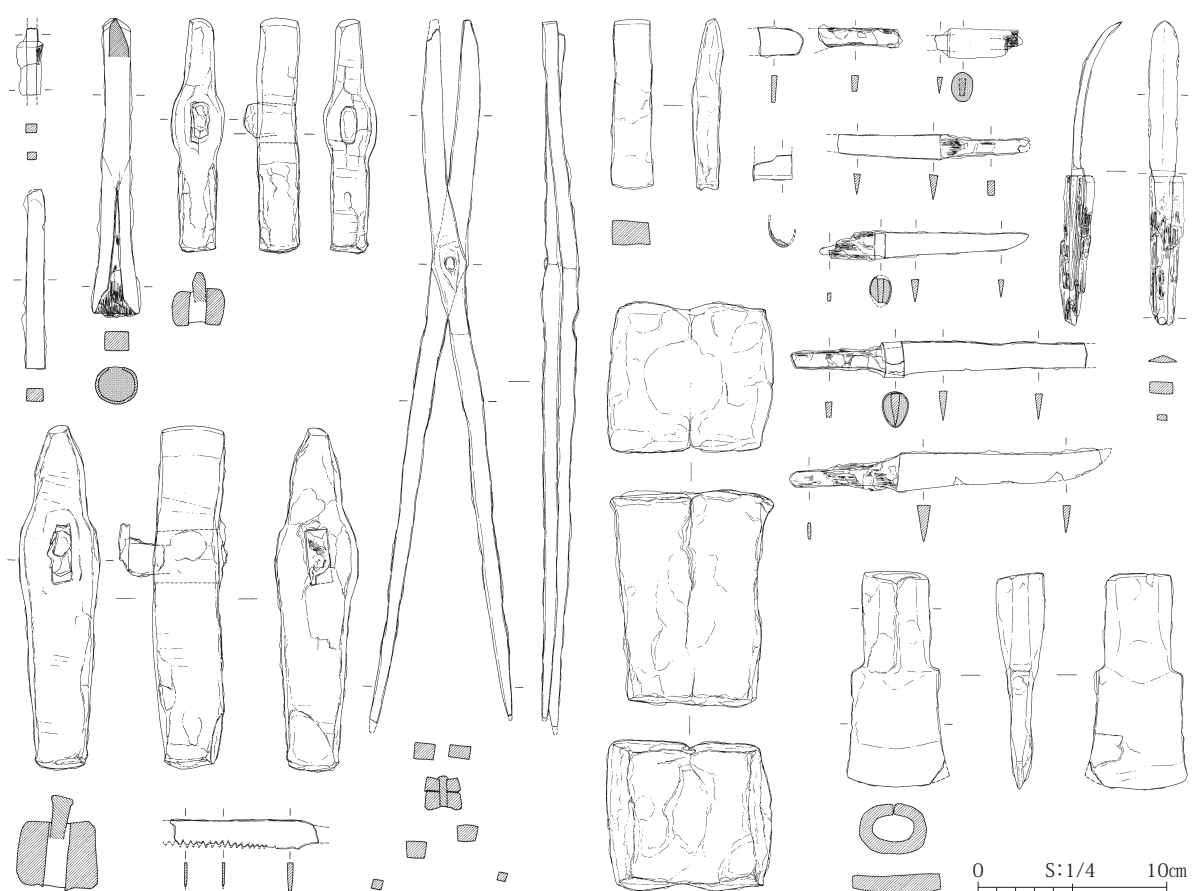


図93 元岡・桑原遺跡群の位置



図出典 福岡市教育委員会 2003『元岡・桑原遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書 744

図94 石ヶ元12号墳の生産用具（上段）と石ヶ元古墳群の変遷（下段）

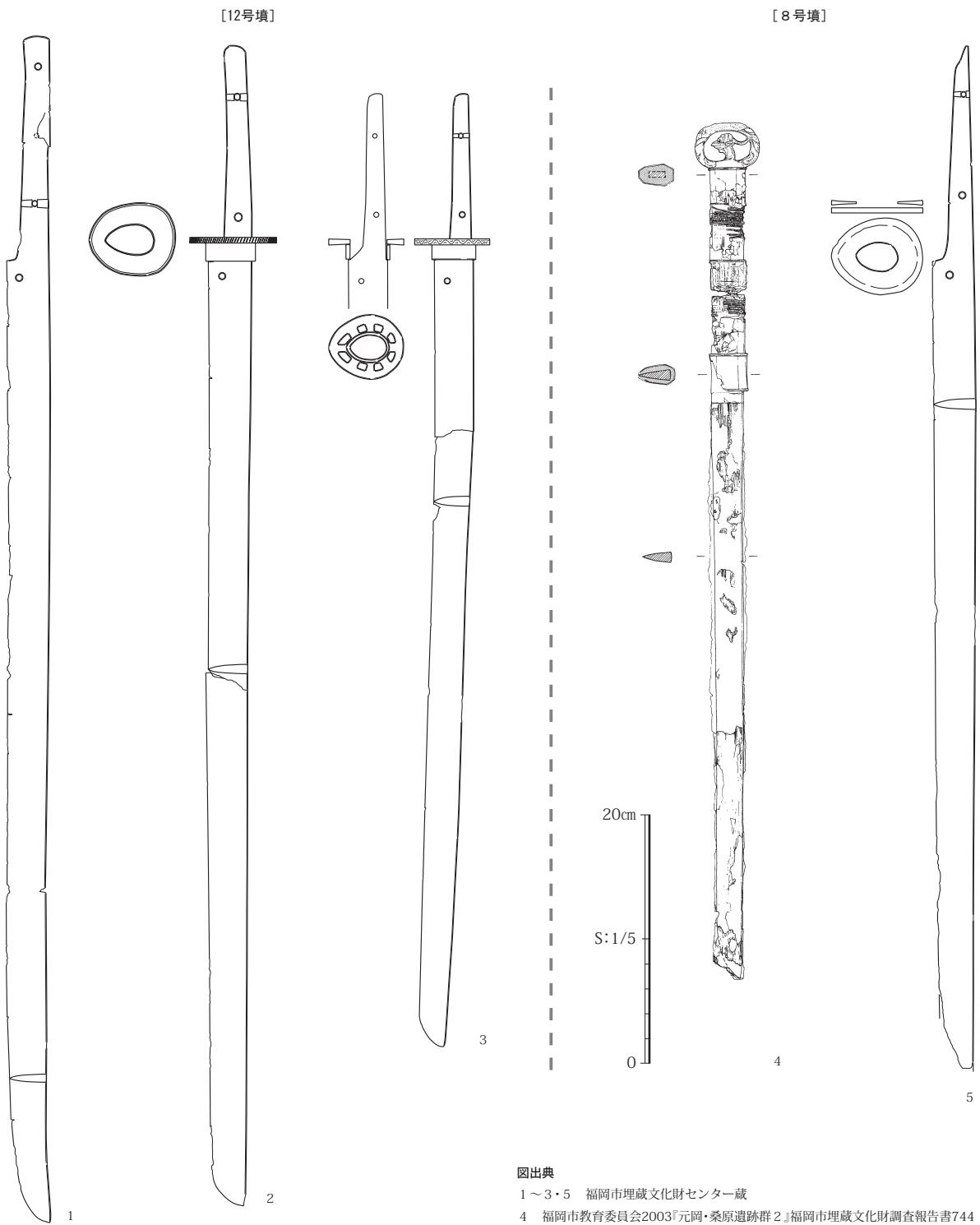
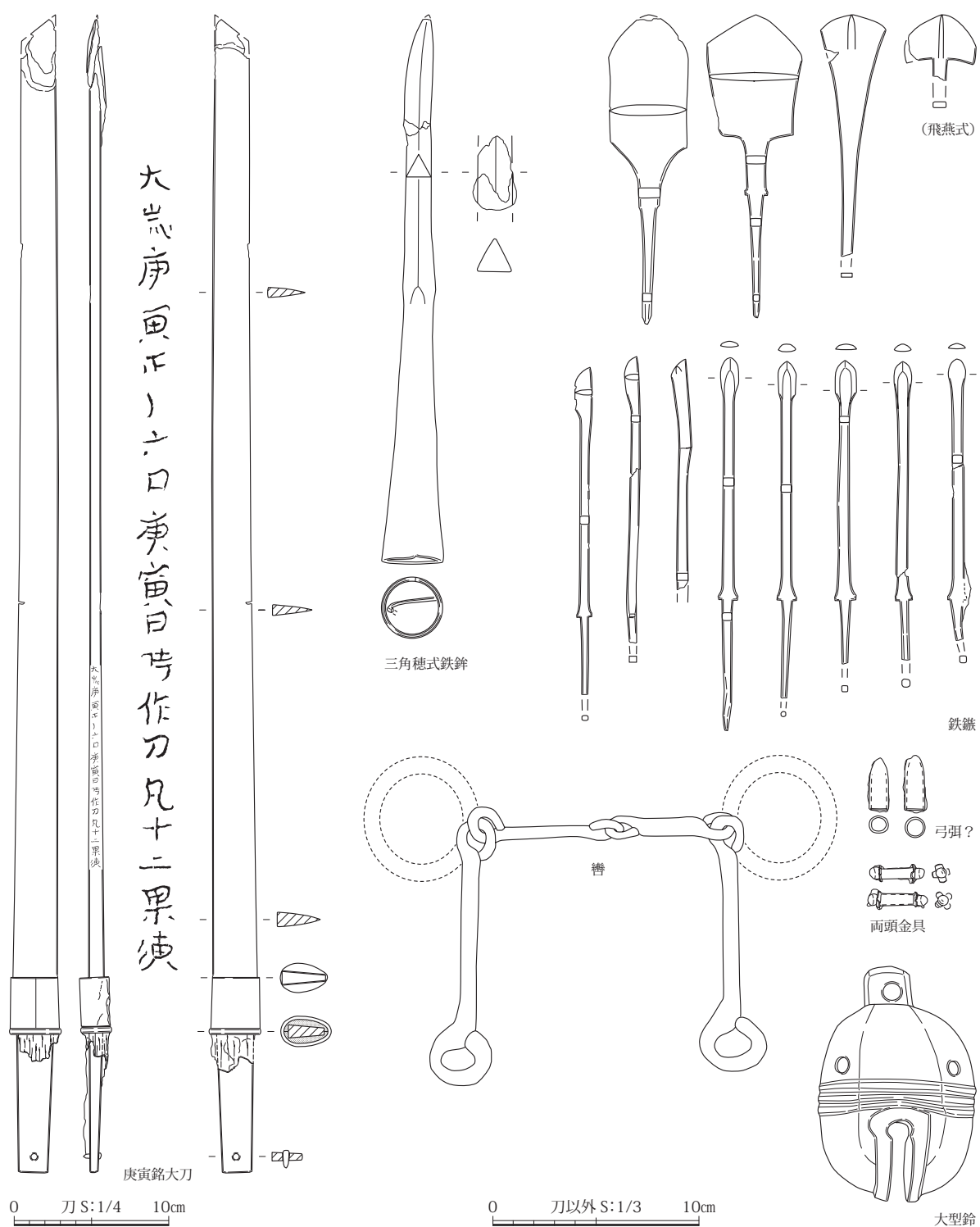


図95 石ヶ元12・8号墳の大刀



図出典
 刀・鉾・鏃・弓弭・両頭金具（福岡市埋蔵文化財センター蔵）
 鈴（福岡市教育委員会 2013 『元岡・桑原遺跡群 22』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 1210 を再トレース）
 轡（福岡市教育委員会 2018 『元岡・桑原遺跡群 30』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 1355 を再トレース）

図96 元岡G-6号墳の武装

わると考えるが〔第5章〕、北部九州では、福岡県福津市勝浦水押SO-01号墳、古賀市原口A1号墳、宇美町観音浦KS3号墳、那珂川市片縄山古墳群丸の口IV群2号墳など、中小規模の三角穂式鉄鉾副葬古墳が玄界灘を囲むように点在する。それらが結ぶ先には沖ノ島祭祀遺跡がたたずむ。沖ノ島での出土は三角穂式鉄鉾が国家祭祀の場でも重んじられたことをうかがわせ、G-6号墳では宋の暦法をもちいた庚寅銘大刀が出土しており、三角穂式鉄鉾が先進的な国際文化や情報に接触できた者の武器であることを物語る。

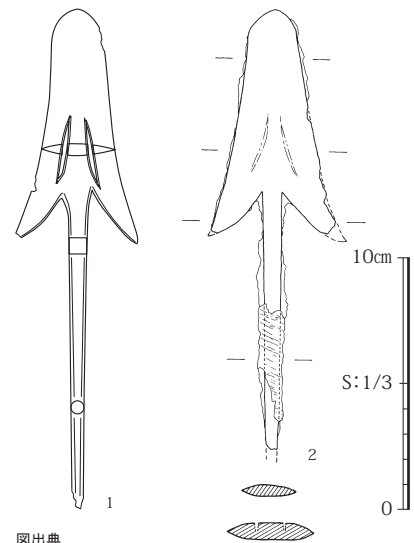
飛燕式鉄鏃は、糸島半島付近では、徳永アラタ6号墳と桑原A-1号墳例があり、玄界灘沿岸一帯では分布の西限にあたる〔図93〕。

ただし、元岡G-6号墳の被葬者像について、庚寅銘大刀の保有をもって過大に評価することは慎まなければならない。なぜならば、朝鮮半島製の可能性がたかいこの大刀は倭の身分秩序のなかで機能するものではないし、金銅装馬具や甲冑も不在であるなか、在地生産品とみられる平根鏃を比較的多くもつことから、かならずしも倭王権の論理のなかで軍事的に優位だったとはいえないのである。

むしろ、元岡G-6号墳被葬者の本質は、全国最大級の大型鈴と三角穂式鉄鉾、飛燕式鉄鏃の保有にある。大型銅鈴と三角穂式鉄鉾は交通の要衝を担う者の装備とみられるし〔第5章〕、飛燕式鉄鏃の保有が地縁を示すとすれば、在地から擁立されて倭王権中枢と東アジア諸国との結節点に立つ、外交の橋渡しの人物像を想定できる。桃崎祐輔も、G-6号墳の被葬者について、征新羅軍にかかわる軍事通信、あるいは遣隋使派遣、隋使、唐使来航などの外交情報を伝える立場にあった人物で、律令期の比叡駅の前身を担った集団の長を想定している〔桃崎2019b〕。

元岡G-6号墳から出土した、弓弭とみられるキャップ状鉄製品も類例がかぎられるなか、金属器生産をおこなった古代の常陸国衙関連遺跡・茨城県鹿の子C遺跡（8世紀）で小札などとともに出土していることは示唆的である。8世紀以降の元岡・桑原遺跡群の製鉄遺構群からも総重量80トン以上の鉄滓や木簡が出土していることから、大規模な官営の製鉄工場が存在したことは疑いえない。くわえて、雷山神籠石や8世紀の怡土城の存在もまた、古代の糸島半島が外交や国防の前線基地であったことを語るにじゅうぶんな資料といえるだろう。

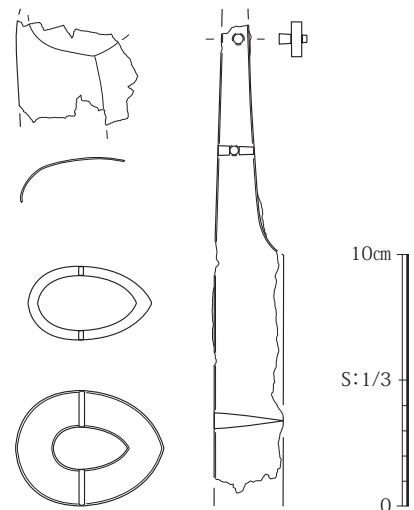
そのほかにも、桑原A-10号墳の円孔鐔に注目する。本来は、背側に二つの円孔を穿つ鐔だったとみられる。二円孔鐔は宮城県南部から千葉県域にかけて集中し、これまでは静岡県原分古墳が分布の西限とみられていた〔図99、大谷宏2008b〕。関西および中四国は分布の空白地帯にあたり積極的な評価にはいたらないが、このような鐔をつけた大刀の佩用者は、東日本世界の集団とも直接ないし間



図出典

1 石ヶ元12号（福岡市埋蔵文化財センター蔵）
2 笹塚（岩崎市教育委員会 2005『笹塚古墳』岩崎市文化財調査報告書5）

図97 二条線透かし平根鏃



図出典 福岡県立糸島高等学校郷土博物館蔵

図98 社古田2号墳の圭頭大刀



図99 二円孔鐔と主要分布図

接的なつながりをもっていた可能性がある。

以上、糸島半島の集団は当該地域の生産を担うのみならず、日本列島および朝鮮半島の境界領域の最前線の一角を担っていたことはあきらかである。石ヶ元古墳群周辺における明確な首長墓は後期中葉古段階に築造された元岡石ヶ原古墳であり、つづく石ヶ元12号墳の被葬者が長大な倭装大刀を保有することをふまえるならば、後期後半から末の段階においては石ヶ元古墳群の被葬者集団こそが、軍事動員にかかる生産や人的資源の差配を担っていたと考えられる。

第3節 結 語

古墳時代後期の武装からみた玄界灘沿岸地域の様相を考察した。

後期中葉以降の北部九州においては墳墓の築造が規制される地域が多いなか、宗像沿岸部のような軍事の要衝では、墳丘の形態や規模による階層性を維持しつつ袋頭大刀や甲冑を共有している。有事における上意下達の命令系統が機能したのであろう。

たほう、鉄や須恵器の生産、そしてそれにともなうであろう森林開発などを担った、後期後半以降の福岡平野広域から糸島半島にかけて点在する集団は、三累環頭大刀や銀象嵌大刀保有者を頂点として、みずから製作、補修したとみられる飛燕式鉄鏃や瓢形素環轡などで武装しながら広範な協業的地縁を構築した。

このような構造は、当該地域の鉄・鉄器生産集団を抽出した近年の研究成果とも親和的だが〔小嶋2009, 西2016〕、「製品」としての武器研究の立場からは、さらに細かい分掌のありかたを示すことができる。すなわち、共伴品や周辺の遺跡環境から、銀象嵌大刀の佩用者は部民的性格をもつ集団の統括、三累環頭大刀の佩用者は対外交渉、単龍鳳環頭大刀の佩用者は軍事面を担うような分掌があったと考える。そのような地域経営の基層基盤を、おもに物資供給や人的資源の面で支えたセンターは、福岡平野広域では大野城市域の乙金周辺に居住した集団や西日本最大の須恵器窯である牛頸窯の操業者集団、糸島半島周辺では元岡・桑原遺跡群、とくに石ヶ元古墳群の被葬者集団だったとみられる。

さらにいえば、このような集団がもつ金属器生産技術や対外交渉網がミヤケ経営の柱に据えられたという仮説も立つ。牛頸本堂遺跡で出土したへう書き須恵器の「大神部見乃官」は7世紀の牛頸の統括者とみられ、その牛頸で生産された瓦が、外交や軍事の拠点としておかれた那津官家中枢の福岡市博多区比恵・那珂遺跡で出土していることはその証左となろう。

菱田哲郎は、6・7世紀における各地のミヤケ比定地と、鉄や塩、そして須恵器の生産拠点のありかたを整理したうえで、6世紀後半から7世紀前半の手工業生産がミヤケおよび部民制と深い関係をもって展開したと述べる〔菱田2007〕。ただし、長期間にわたる須恵器生産の継続性は、ミヤケから郡家に踏襲される政治拠点の創出と関連づけられるものであり、継続的な生産が認められる地域こそが6世紀後半以降の倭王権の内部領域として確保されていたと想定する。つまり、継続的な生産、あるいは生産開始時期のタイムラグは、倭王権の内部領域の拡大過程をさぐるうえで重要な問題を提起することになる。

菱田の説に照らすならば、それに先立つ6世紀中頃から9世紀前半にかけて推定500基以上の窯が操業された牛頸窯とその周辺の手工業生産は、決して王権から独立したうごきではなく、むしろ安閑朝に集中的に設置されたミヤケ運営と連動する、倭王権による地方経営戦略の先駆的なモデルとして機能したと考えることができる。このばあい、飛燕式という地域形式鉄鏃の創出もまた、王権と対峙する地域集団というよりはむしろ、境界領域にあって王権に奉仕する部民的集団の生産力や武力の成長として評価することもできよう。

そして、このような規制と懐柔を受けた集団の後裔が7世紀後半の国家事業である古代山城「大野城」の築造にたずさわった可能性を思い起こせば、5世紀から7世紀にかけて生じた北部九州の動態変化、ひいて

は7世紀の二日市地峡帯における国防戦線形成にさえ影響をあたえるような地縁基盤がみえてくる。

いっぽう古代の糸島半島一帯は、考古学的には同一首長系譜における古墳時代前・中期甲冑の継続的な保有〔橋本達2002〕、後期における半島系大刀の集中分布、文献史的には征新羅將軍・来目皇子の駐屯記事、大宝2年（702）の嶋郡川辺里戸籍などから、政治・軍事的に重要な地域だったことは疑いえない。元岡G-6号墳のあるじについても、列島における三角穗式鉄鉾や飛燕式鉄鏃分布の西限地域に立つことや、庚寅銘大刀や大型銅鈴との共伴を鑑みることによって、倭王権中枢部および東アジア諸国との交通の結節点に君臨した被葬者像が導かれる。

さて、このような視点を養ったうえで、あらためて宗像地域に目を向けると、甲冑などの際立った武装具

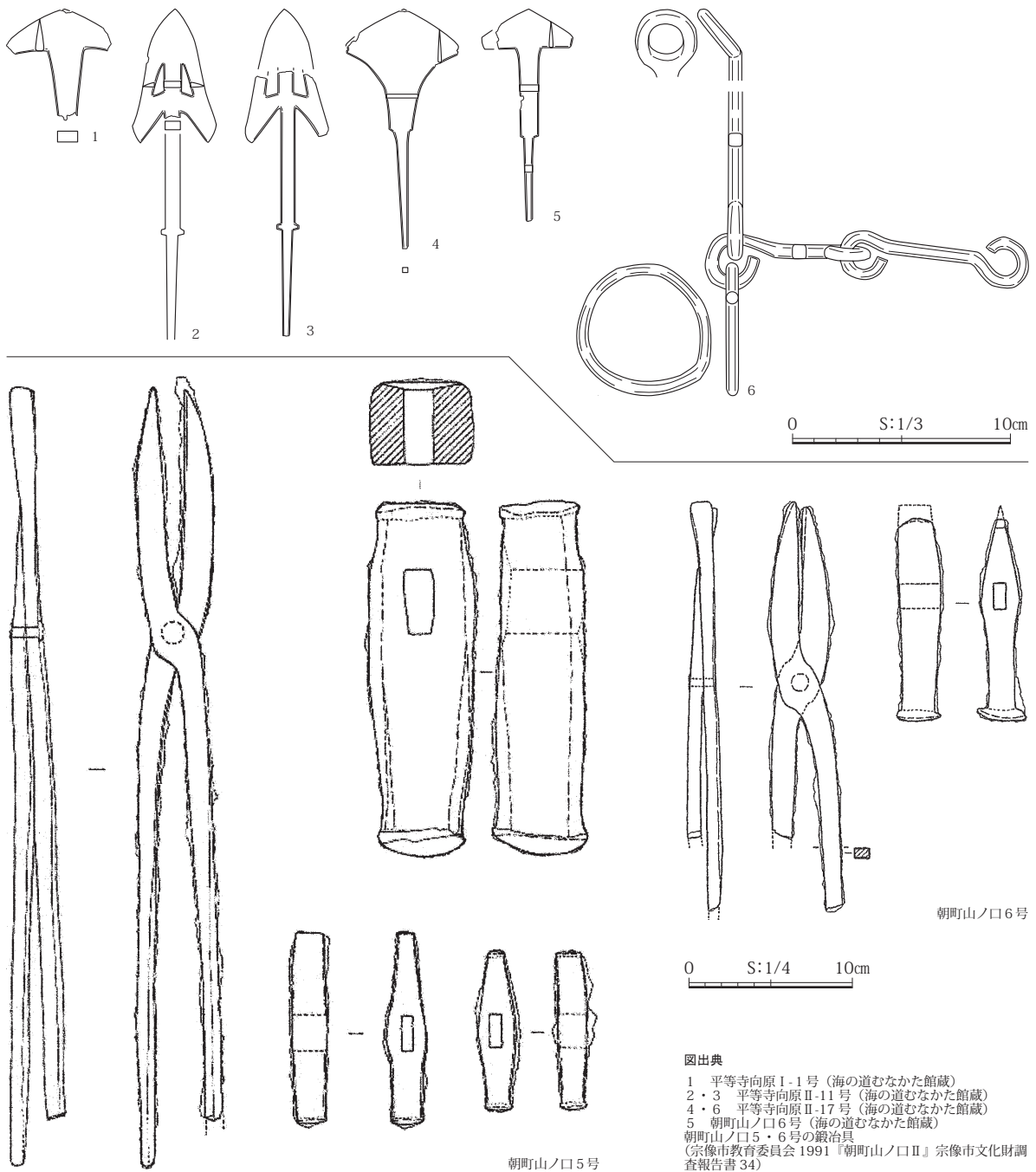


図100 宗像地域の飛燕式鉄鏃と関連資料

をもたない宗像市東部の盆地内においては、平等寺向原古墳群や朝町山ノ口古墳群に飛燕式鉄鏃や鍛冶具、華奢でいびつな円環轡が集中することがわかる〔図100〕。沿岸部の広域流通形式特殊長頸鏃の分布とは排他的で、袋頭大刀集中地域の周縁に位置するこれら古墳群の被葬者集団は、むしろ福岡平野広域の集団とのつながりを見出すことができる。とくに朝町山ノ口5号墳の鉄鉗は後期古墳出土品のなかで最大級のものであることから、大型鉄製品を生産した可能性や沿岸部に点在する武装集団を物資の面で支えた集団の姿を彷彿とさせる。

以上本章では、宗像地域、福岡平野広域、糸島半島に焦点を絞り、それぞれの地域で展開した武装が、胸形君や筑紫君といった、おもに血縁を媒介とするような集団、あるいは須恵器、鉄生産といった特定の手工業を担った地縁集団を表象する可能性を提示した。その大枠の一部は、小嶋篤が抽出した、宗像型（系）石室や土師器高坏の共有にもとづく領域区分とも親和的なありかたを示す。すると、在地系石室の共有が倭王権の論理ではなく血縁ないし地縁の表象であると仮定するかぎりにおいては、武装が表象するものについても全国一律の論理で解釈するのではなく、一定の地域性が存在した可能性も考慮すべきではないだろうか。

第9章では、このような課題へ臨むうえで、よりたしかな展望を得るために、古墳時代当時の倭の東限にあたる関東の武装について考える。

註

- 1) 【白村江の戦い】天智2年8月（663年10月）に朝鮮半島の白村江（現在の錦江河口付近）で勃発した、日本・百済遺民の連合軍と、唐・新羅連合軍との戦争。白村江での敗戦を受け、唐・新羅による日本侵攻を怖れた天智天皇は、百済帰化人の協力のもと、対馬や北部九州の大宰府の水城、瀬戸内海沿いの西日本各地に朝鮮式古代山城を築き、北部九州沿岸に防人を配備するなど、国防ラインを強化した。そのいっぽうで、唐の友好関係樹立が模索されるとともに急速に国家体制が整備され、天智朝（668-672）には近江令法令群、天武朝（673-686）には最初の律令法とされる飛鳥浄御原令の制定が命じられるなど、律令国家の建設がすすみ、倭は「日本」へと国号を変えた。
- 2) 【『日本書紀』推古10年春二月・冬十月，11年春二月条】十年春二月己酉朔，來目皇子を撃新羅將軍と爲し，諸の神部及び國造，伴造等，并せて軍衆二萬五千人を授けたまふ。夏四月戊申朔，將軍來目皇子筑紫に到りたまふ。乃ち進みて嶋郡に屯み，船舶を聚めて軍糧を運ぶ。六月丁未朔己酉，大伴連嚙，坂本臣糖手，共に百済より至る。是の時，來目皇子臥病たまひて，征討を果さず。冬十月，百済の僧觀勒來く，仍りて曆本及び天文地理書並びに遁甲方術書を貢る。是の時，書生三四人を選びて，以て觀勒に學び習しむ。陽胡史祖玉陳曆法を習ひ。大友村主高聰天文遁甲を學び，山背臣日立方術を學ぶ。皆學びて業を成す。閏十月乙亥朔己丑，高麗の僧僧隆，雲聰，共に來歸けり。十一年春二月癸酉朔丙子，來目皇子筑紫に薨ませり。仍りて驛使して奏上ぐ，爰に天皇聞しめして大に驚きたまひ，則ち皇太子と蘇我大臣を召して，詔して曰く，「征新羅大將軍來目皇子薨せぬ，其れ大事に臨みて遂げず，甚だ悲しきかな」〔読み下しは，黒板勝美1931『訓読 日本書紀』下巻 岩波文庫：pp.120-121〕

第9章 武装からみた東の境界領域 — 金鈴塚古墳と銀の武装 —

第1節 はじめに

第6章から第8章にかけて、日本列島西限の境界領域にあたる北部九州の武装について考えた。ただ、倭王権中枢部が地方をどのように経営したのか、あるいは地方がどれだけの独自性をもちえたのかについては、できるだけ離れた二地域以上のありかたを比較することが望ましい。そこで本章では、列島東限の境界領域にあたる関東のありかたを整理する。ただし筆者には、北部九州と関東を同じ水準で分析することはできないため、ここでは、東国で最も充実した武装を誇る千葉県木更津市金鈴塚古墳〔図101〕の出土品、そのなかでもとりわけ特徴的な銀装の武器の影響を整理するにとどめ、今後の基礎研究とする。

さて、金鈴塚古墳の横穴式石室からは、その名の由来となった金製の鈴のほか、金銅装の大刀や馬具、飾金具、銅鏡が出土し、多くの人々を魅了してきた。いっぽう、こうした黄金色の装いの影に隠れて、わずかではあるが銀装の武器や利器も出土していることには注意が払われていない。しかし、金鈴塚古墳から出土した銀装の武器や利器、すなわち圭頭大刀、鶏冠頭大刀、刀子、鉄鉾、石突、弓金具は、いずれも類例が少ないか、あるいは最古段階に位置づけうるものであり、類例を探索するといずれも東国を中心に列島各地の有力な古墳から出土していることがわかる。以下、金鈴塚古墳から出土した銀装の武器・利器のうち、北部九州との対比資料として耐えうる鶏冠頭大刀、鉄鉾、弓金具の分析をつうじて、その被葬者像を考える。



図101 金鈴塚古墳の墳丘

第2節 鶏冠頭大刀

金鈴塚古墳からは全国最多約20振の装飾大刀が出土した〔図102〕。内訳は、金銅装頭椎大刀2，金銅装単龍環頭大刀1，金銅装単鳳環頭大刀1，金銅装双龍環頭大刀2，金銅装獅嚙環頭大刀3，金銅装圭頭大刀3，銀装圭頭大刀1，銀装鶏冠頭大刀2，金銅装鶏冠頭大刀1，金銅装倭装大刀1，金銅装鐔付大刀1である。

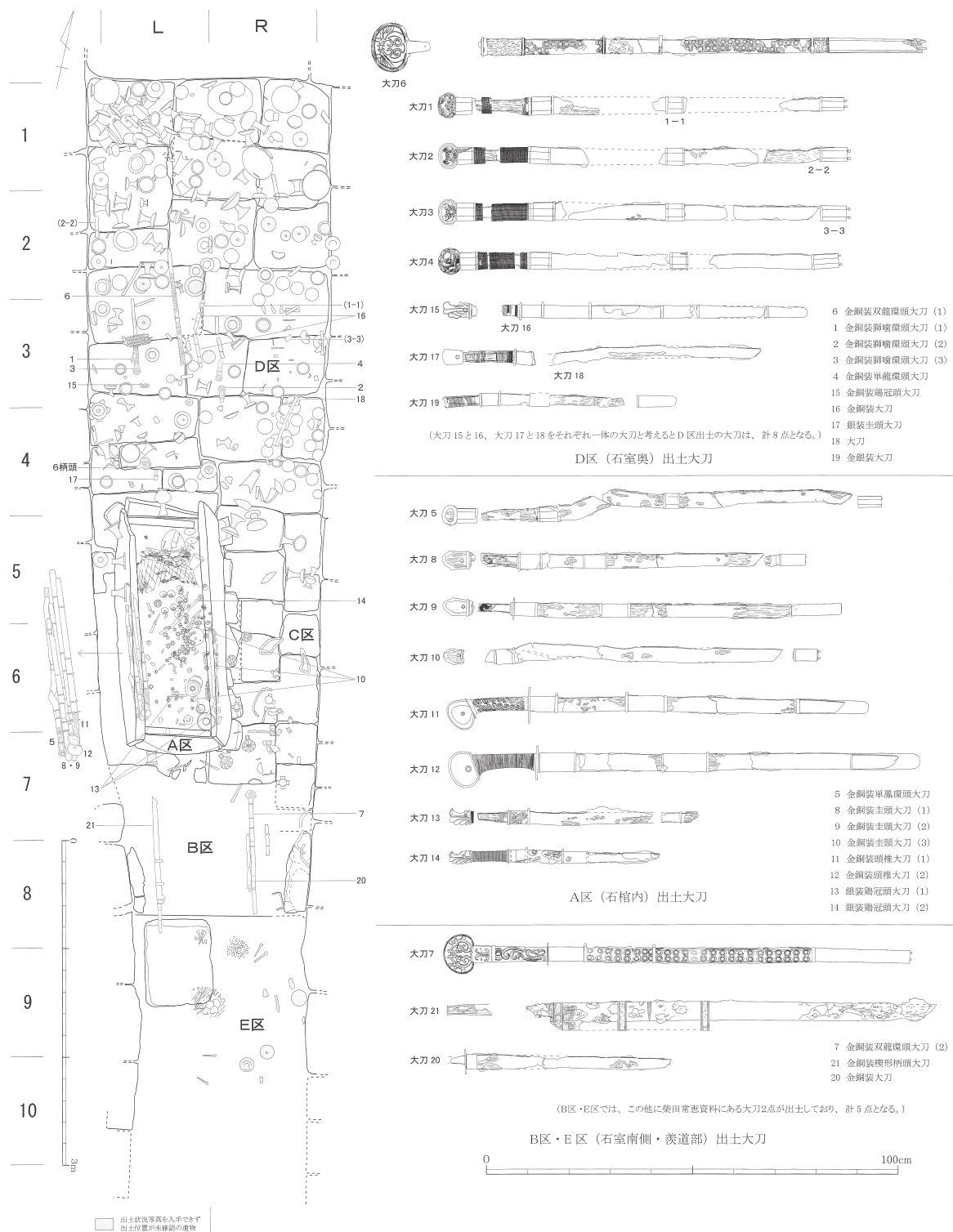


図102 金鈴塚古墳の装飾大刀と出土状況図〔酒巻2007〕

このうち鶏冠頭大刀は金鈴塚古墳の3振、群馬県八幡観音塚古墳、広島県土肥谷1号墳、長崎県双六古墳の各1振、計4古墳6振が知られるのみで〔図103〕、その半数を有する点は金鈴塚古墳の評価をたかめるとともに、その被葬者像を描く重要な鍵となりうる。本節では、鶏冠頭大刀の系譜と、倭の大刀体系全体のなかでの位相を考える。

第1項 鶏冠頭大刀の研究史

鶏冠頭大刀の最も古い出土品は、1945年に発掘された観音塚刀だが、1950年の金鈴塚古墳発掘調査とその報告を経て、はじめて論考として世に問うたのは、金鈴塚古墳の発掘調査を担った瀧口宏の「鳥首刀考」である〔瀧口1952〕。

その表題にあるように瀧口は、こんにち鶏冠頭大刀と呼ぶものを「鳥首大刀」と呼んだ。そして、鶏冠頭柄頭の左右非対称をなす造形は倭が創出した頭椎大刀に通低すると述べ、圭頭柄頭に仏教伝来前後に将来した大陸系の忍冬文が融合したものと理解した。また、観音塚刀が古く、金鈴塚刀3振が新しいとするも、その根拠は述べていない。

1960年代には金鈴塚古墳出土品が修理され、各資料の詳細な観察所見がまとめられた。この『金鈴塚古墳出土品修理報告書』に掲載された修理前の遺物写真は、それらの製作技法を考えるうえで重要な情報をもつ。また、1959年の金鈴塚古墳出土品重要文化財指定にあたり、室町時代の刀にも「鳥首太刀」と呼ぶものがあるために混同を避けて「鶏冠頭大刀」と登録した旨が記される〔木更津市教育委員会1965〕。

1977年、新谷武夫は5例目となる土肥谷刀の柄頭を図示し、その佩用者像に「ヤマト政権の官僚機構にくみこまれていた地方派遣の支配者」を描いた〔新谷1977〕。

1997年から2000年にかけて発掘調査された双六古墳から6例目の鶏冠頭柄頭が出土した。しかし報告書では、巨石をもちいた複室構造の横穴式石室や、共伴したトンボ玉、新羅土器、北齊製二彩陶器などが重視され、鶏冠頭大刀の考察はなされなかった。

1990年代初頭におこなわれた八幡観音塚古墳出土品再整理事業のなかで瀧瀬芳之は、佩用装置に注目して観音塚刀を吊手佩用のⅠ類、金鈴塚刀を二足佩用のⅡ類に分けた。製作時期は、この分類が圭頭大刀に準じることから、6世紀後半～後葉に位置づけた。また「聖徳太子及二王子像」に鶏冠頭大刀に似た大刀が描かれることに注目し、鶏冠頭大刀成立の背景に仏教の影響を想定した〔瀧瀬1992〕。さらに、鶏冠頭大刀の装具には銀を多用するなど、朝鮮半島起源の技法が駆使されることも指摘している〔瀧瀬2011〕。

大谷晃二は、古墳時代後期の金銀装大刀をⅠ～Ⅳ段階、倭製装飾大刀の工房をA～Dに分けた。このうち、金鈴塚古墳の鶏冠頭大刀は、銀装圭頭大刀や倭製双龍環頭大刀と、鐔や鐃の造り、柄巻銀線の刻目の形状が一致するため、いずれも「工房B」の製品であると理解し、Ⅲ段階（TK43新段階-TK209前半）に据えた〔大谷晃2012〕。ただし、鶏冠頭大刀自体の分類や編年にはおよんでいない。

以上、鶏冠頭大刀をめぐる諸論点は瀧口が示したとおりと考えるが、その具体的な製作技術の解明から導かれる先後関係、上・下限年代、製作地、系譜、出現の背景、佩用者の性格、副次埋葬における副葬のタイミングなど、検討すべき課題は多い。

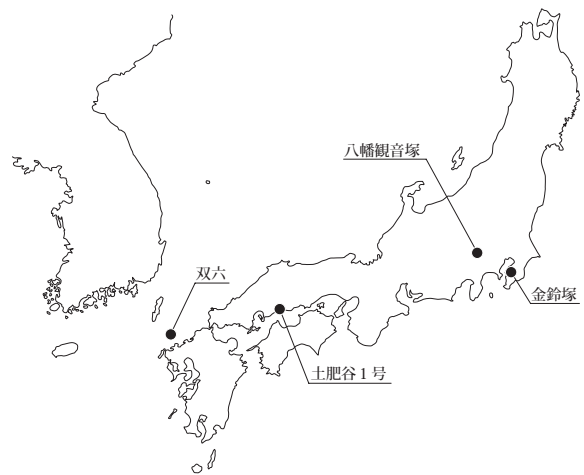


図103 鶏冠頭大刀出土古墳の分布

第2項 鶏冠頭大刀出土古墳の概要

金鈴塚古墳 小櫃川によって形成された、海拔約5.5mの沖積平野上に立地する。墳丘長90mの前方後円墳で、盾形二重周濠をふくめた推定全長は約140mである。埴輪や葺石はない。

1950年に千葉県と早稲田大学による発掘調査がおこなわれ、無袖の横穴式石室から、古墳名の由来にもなった金製の鈴5個をはじめとする、おびただしい数の遺物が出土した。そして副葬品の内容から、石棺奥（D区）、石室中央の箱式石棺内（A区）、石棺手前（B区）の順で、最低3人の埋葬が想定された。さらに、B区では耳環が二対出土したため、被葬者は全部で4、5人程と考えられている。

D区では、装飾大刀（①金銅装獅噛環頭大刀、②金銅装獅噛環頭大刀、③金銅装獅噛環頭大刀、④金銅装単龍環頭大刀、⑥金銅装双龍環頭大刀、⑤金銅装鶏冠頭大刀、⑬金銅装大刀、⑭銀装圭頭大刀、⑮大刀、⑯金銀装大刀（○の数字は、酒巻2007による大刀の番号））、三角穂式鉄鉾、鉄鏃、銀製弓弭、金銅製馬具、金銅冠、金製鈴、琥珀製東玉、ガラス玉、変形四乳鏡、銅鏡、鉄釘、須恵器（蓋坏・有蓋高坏・同蓋・無蓋高坏・長頸壺・短頸壺・甗・平瓶・提瓶・横瓶・高台付坏身・同蓋・台付盤）が出土した。須恵器はTK43型式を若干ふくむが、TK209型式を中心としてTK46型式までおよぶ〔酒巻2006〕。

このうち、大刀⑮と⑬が同一個体と想定されている〔酒巻2007〕。しかし、金鈴塚古墳共同研究会では、この想定は根拠不十分であり、a. 鶏冠頭大刀の刀身・鞘は全体に小ぶり（短い）なのにならして、大刀⑮は大きい。b. むしろ、サイズの的には大刀⑯のほうがふさわしい、という意見もある。本章では、両方の案を変遷図に示しておく。

A区では、装飾大刀（⑤金銅装単鳳環頭大刀、⑧金銅装圭頭大刀、⑨金銅装圭頭大刀、⑩金銅装圭頭大刀、⑪金銅装頭椎大刀、⑫金銅装頭椎大刀、⑬銀装鶏冠頭大刀、⑭銀装鶏冠頭大刀）、鉄鏃、小札甲、堅矧広板鉾留衝角付冑、金銅製耳環、ガラス玉、三神五獣鏡、銅鏡、桃核などが出土した。石棺の脇でも金銅製馬具が出土し、位置関係から石棺の被葬者に帰属すると考えられている。また被葬者は、骨の特徴から青年男性であることがわかっている。

B区では、装飾大刀（⑦金銅装双龍環頭大刀、⑫金銅装大刀、⑭金銅装楔形柄頭大刀）、銀製弓弭、金銅製馬具、水晶製切子玉、ガラス玉、銅鏡、鉄釘などが出土した。また、1932年の道路工事の際に出土した金銅製飾履も、B区の被葬者にとまうと考えられている。

これらにくわえて、B区では柴田常恵資料にある大刀2点も出土している。

金鈴塚古墳が属する長須賀古墳群の造営は、5世紀前半から中頃の高柳銚子塚古墳（前方後円墳・142m）にはじまり、7世紀半ばまでつづく。このうち6世紀後半から7世紀初めには、金鈴塚古墳のような大型前方後円墳を筆頭として、70mの丸山古墳、それに次ぐ円墳が造営されており、金鈴塚古墳を頂点とした階層構造が想定される。そしてその被葬者は小櫃川流域の首長であり、『国造本紀』にある馬来田国造と考えられている。

くわえて、金鈴塚古墳は全国的にも最後の前方後円墳の一基であるが、B区の埋葬と同時期には、南方約200mに、二重周溝をもつ一辺44mの方墳である松面古墳が造られた。前方後円墳築造停止後に大型方墳を造る点は、隣接する富津市域の内裏塚古墳群や、埼玉県埼玉古墳群などの、関東の有力古墳群と共通する。

また石棺には、「秩父青石」と呼ばれる荒川水系産の緑泥片岩をもちいる。これは東京湾をつうじて当地まで運ばれたとみられるのにならして、石室石材の千葉県富津市産砂岩は、埼玉將軍山古墳の横穴式石室にももちいられている〔白井・芳賀1996〕。このように、隣接する内裏塚古墳群の造営集団や、武蔵北部の首長との交流から、小櫃川流域の首長と目される金鈴塚古墳被葬者の優位性がうかがえる。

筆者は、このような多様な交流が、金鈴塚古墳被葬者が多くの装飾大刀を入手する下地になったと考える。

大谷も、金鈴塚古墳の装飾大刀⑥⑦⑧⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱は、渡来人またはその子孫から編成される「工房C」をのぞくすべての工房A・B・Dの製品であり、金鈴塚古墳の被葬者が、倭の各工房にともなう配布主体とつながりをもっていたことを示した。舶載品については、中国・百済の製品（①②③④⑤⑩）をふくむいっぽうで新羅系の大刀を欠くことに、被葬者の対外交渉の一端を反映しているという [大谷晃2012]。

八幡観音塚古墳 碓氷川と烏川に挟まれた舌状台地上に立地する。墳丘復元長105mの前方後円墳で、埴輪と葺石をともなう。主体部は、全長15.3m、玄室長7.14・幅3.55・高さ2.8m、羨道長8.26mの両袖式横穴式石室である。

石室からは、装飾大刀（銀装鶏冠頭大刀1、銀装圭頭大刀2、銀製唐草文透鞘金具1、鳩目金具5）、刀子、銀装刀子金具（柄頭・鋸・鞘口金具・鞘尻）、三角穂式鉄鉞、石突、鉄鏃、銀製弭、鉄製両頭金具、鉄製小札（挂甲・肩甲・手甲・臑当？・籠手？）、馬具（鉄地金銅張花形鏡板付轡・鉄製環状鏡板付轡・鹿角製鑣轡・鉄地金銅張雲珠・鈴付金銅製雲珠・鉄地金銅張辻金具・鈴付金銅製辻金具・銅地鉄透板被辻金具・鉄地金銅張花形杏葉・金銅製心葉形透彫杏葉・革帯金具・鞍・障泥・鉸具・吊金具・兵庫鎖・飾金具）、鉄斧、鉄鉈、銅鏡（画文帯環状乳神獸鏡・獸形鏡・内行花文鏡・五鈴鏡）、金環、承台付銅鏡、銅鏡、筒形容器（銀製容器蓋・責金具・環状覆輪金具）、須恵器（蓋・高坏・甕・長頸壺・脚付長頸壺・提瓶・甕）、鉄釘、鉄製鈎、金銅製円環金具、銅製責金具、桃核など、300点余の遺物が出土した。須恵器はTK209型式である。

鉄製鈎は石室の左奥壁に差しこまれていることから、布幕によって石室内の空間を仕切っていたとみられる。類例は、奈良県藤ノ木古墳や滋賀県甲山古墳、群馬県綿貫観音山古墳、千葉県城山1号墳といった有力な後期首長墳のほか、朝鮮半島では百済武寧王陵でも出土している。右島和夫はその確実なルーツのひとつが、中国河南省安陽市西高穴2号墓（魏曹操高陵？）までさかのぼることを指摘し、「高度にシステム化された古代中国のハード・ソフトが東アジア世界に拡散していった」と述べる [右島2011]。

先述した倭の古墳は、いずれも第一級の半島系文物の出土で知られ、政権中枢の要人に準ずるような葬送儀礼を共有した。八幡観音塚古墳の被葬者も倭王権の秩序に組みこまれたと同時に、東アジアの最先端文物を入手し得た有力首長であったことは想像に難くない。

土肥谷1号墳 1960年に木下忠によって調査された。このときすでに、横穴式石室の奥壁（高さ0.9m、幅1.6m）と側壁が残るのみだったという [文化財保護委員会1967『全国遺跡地図』遺跡番号2035]。墳丘にかんする情報は不明だが、出土した須恵器30点には、坏や高坏のほか平瓶がふくまれ、6世紀末以降の副葬があったと考える。2号墳（円墳・7.5m）は埴輪をともなう [新谷2012]。

土肥谷1号墳と沼田川を挟んで位置する梅木平古墳（円墳？、6世紀末～7世紀初頭）の横穴式石室は、全長13.25m、玄室長6.9・幅3.0・高さ4.2mで県内最大である。

梅木平古墳の東方約200mには、広島県域最古の古代寺院・横見廃寺（7世紀中葉）があり、梅木平古墳被葬者一族の氏寺と考えられている。出土した瓦には、山崎信二の分類による、楔形の毛羽を子葉にそってめぐらす有子葉単弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ類）と、忍冬葉単弁蓮華文軒丸瓦（Ⅱ類）がある。Ⅰ類は奈良県檜隈寺（倭漢氏の氏寺）講堂出土品と同範とみられ、Ⅱ類は奈良県若草伽藍・中宮寺・法隆寺東院に類例がある。Ⅱ類の類例を出土する寺院は、いずれも倭王権の文書記録や財政、外交などを担った渡来系氏族である倭漢氏との関連が想定されている [山崎2003]。

梅木平古墳の西約2kmには、後期末の御年代古墳がある。御年代古墳の横穴式石室は花崗岩をもちいた切石積の二室構造で、玄室にはそれぞれ、花崗岩製剝拔式家形石棺を置く。副葬品には、須恵器（蓋坏・台付甕・脚付長頸壺・子持脚付壺・子持脚付盤・子持平瓶）、鉸具（金銅製？）がある [本村1977]。御年代古墳の石室と石棺はともに畿内色が濃厚で、とくに奈良県岩屋山古墳石室と類似する。脇坂光彦は御年代古墳の被葬者像として、「地方行政組織の設立に関して、畿内政権から派遣された高級官人」を考える [脇

坂1999]。御年代古墳と横見廃寺は、梅木平古墳とのあいだにやや距離や年代の開きがあるものの、当地に基盤をおいた豪族が律令下の郡司に組織され、寺院を私有して従前の権力を維持した流れを考える。脇坂もこのような背景として、沼田川が後の安芸と備後の国境となる地理的状況を重視している [脇坂1999]。

双六古墳 壱岐は、博多港から約67km、九州北西部の玄界灘にある南北17km、東西14kmの島で、九州本土と対馬の中間にある。双六古墳は島の中央、標高110mの丘陵上に立地し、県内最大の墳丘長91mを測る前方後円墳である。

後円部の横穴式石室は、全長11m、玄室長3.5・幅2.6・高さ4.2m、前室長6.28・幅1.8・高さ1.68m、羨道長1.28・幅1.28・高さ1.7mの複室構造で、装飾大刀（金銅製単龍環頭大刀柄頭、金銅製圭頭大刀柄頭、銀製鶏冠頭大刀柄頭、振り環頭？、金銅製鐔、象嵌鐔、金銅製責金具、青銅製足金具、金線、銀線、銀線葛巻、金銅製鞘中金具、金製筒金具、鉄製鞘尻金具）、三角穗式鉄鉾、石突、鉄鏃、両頭金具、鞍あるいは胡祿の金具、馬具（金銅製辻金具・雲珠・杏葉・鈴・飾金具、青銅製鈴）、刀子、鉄鋏、鉄鎌、鉄釘、青銅製帶金具、銀製空玉、ガラス製丸玉・小玉・蜻蛉玉、滑石製子持勾玉・白玉・管玉、琥珀製棗玉、金糸、金箔、象嵌ガラス製品、須恵器、土師器、陶質土器、新羅土器、北齊製二彩陶器などが出土した。

壱岐で現況最古の古墳は、5世紀後半の大塚山古墳（円墳・14m）だが、その後6世紀後半にいたる首長系譜は詳らかでない。6世紀後半になると、壱岐中央部に対馬塚古墳（63m）や双六古墳などの大型前方後円墳が出現する。

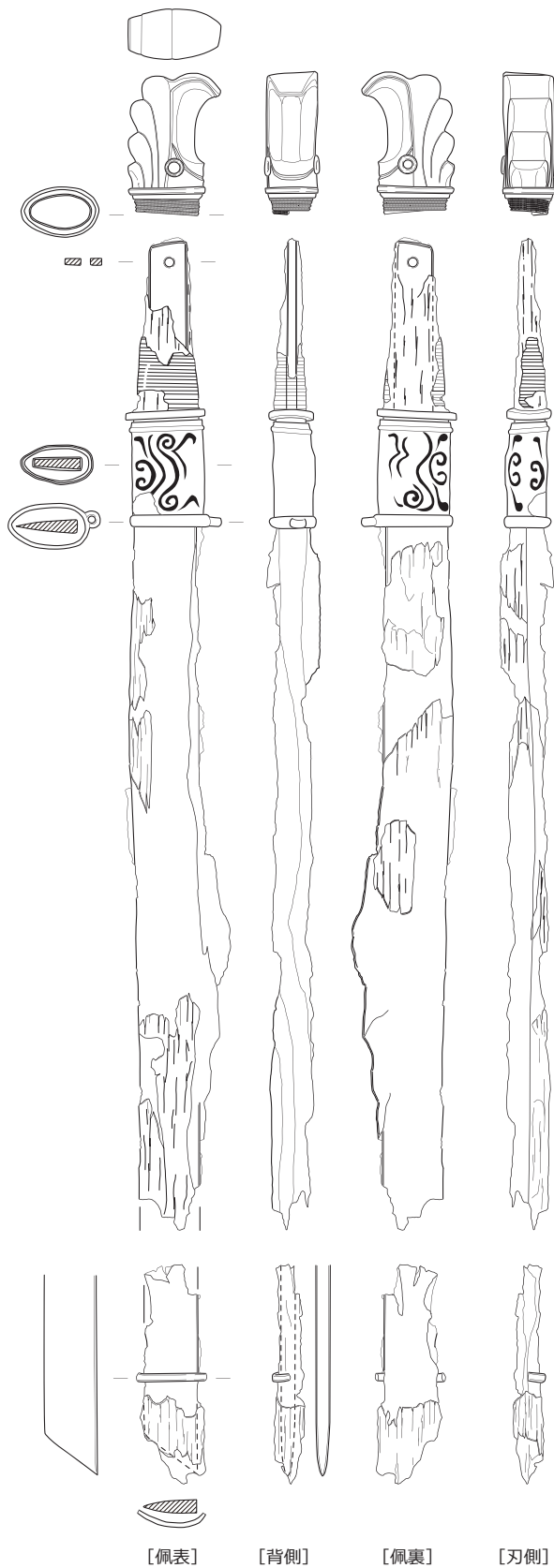
さらに後期末の壱岐島には、笹塚古墳（70m）、兵瀬古墳（53.5m）、鬼の窟古墳（45m）、掛木古墳（約30m）など、巨石をもちいた三室構造の横穴式石室を内蔵する大型円墳が林立する [田中聡2007]。このうち笹塚古墳では、心葉形鏡板・杏葉、鬼の窟古墳では振り環頭大刀が出土している。全国的には前方後円墳の築造停止や規模の縮小がみられるなか、倭王権の後ろ盾を得た有力者の存在を想定できる。『国造本紀』には、伊吉島（壱岐島）の人が筑紫君磐井に従った新羅人を討った功によって、伊吉島造に任命されたとある。そして、6世紀後半以降の大型古墳の築造は、大陸・半島への制海権を掌握した壱岐の豪族を倭王権が取りこみ、兵站基地化してゆく過程と理解される。

第3項 鶏冠頭大刀の編年 [図109]

金鈴塚古墳から出土した鶏冠頭大刀の編年を考える。旧報告では、横穴式石室から出土した副葬品内容をもとに、①石棺奥（D区）、②石室中央の箱式石棺（A区）、③石棺手前（B区）の順で最低3回の埋葬が想定され [図101]、また、B区では耳環が二対出土したため、被葬者は計4～5人程と考えられている [千葉県教委1951]。この埋葬順に従えば、鶏冠頭大刀の変遷は15→13・14という方向性も考えられる。しかし、D区の須恵器は二段三方透しの長脚有蓋高坏を含み、上限はTK43型式期あるいはTK209型式期古段階、下限はTK46型式期までおよぶ。すべての埋葬時にD区に副葬品が置かれた可能性もある。したがって、鶏冠頭大刀の編年ではそれ自体の型式学的検討を優先する。

柄頭の種類 柄木への装着方法の違いに基づいて、鳩目金具をともなわないものをA類（観音塚）、ともなうものをB類（土肥谷、双六、金鈴塚）に分ける。くわえて、柄頭そのものに二つの製作技法があるため、先の分類と製作技法を組みあわせて、大刀13・14をB1類（ α 技法）、大刀15をB2類（ β 技法）に細分する。

α 技法は、別個の覆輪状金具を刃側と背側から接合する。柄頭の木心部は、柄頭とほぼ同大に削り出すため、その間には隙間がほとんどない。つまり、完成した金属製柄頭を柄木に被せることはむずかしい。すると、柄木に添わせながら金属製柄頭を接着したことになるが、このばあい、高温処理が必要な銀鉨づけをおこなうと柄木が燃えるため、他の接合方法を採用必要がある。現状ではその方法は不明だが、接着剤に使われた可能性として漆を挙げておく。



図出典 木更津市郷土博物館金のすず蔵



修理前写真
[木更津市教委1965]



銀線巻の始点



X線画像(永嶋正春撮影)

図104 金鈴塚古墳の鶏冠頭大刀 (1) (大刀13)

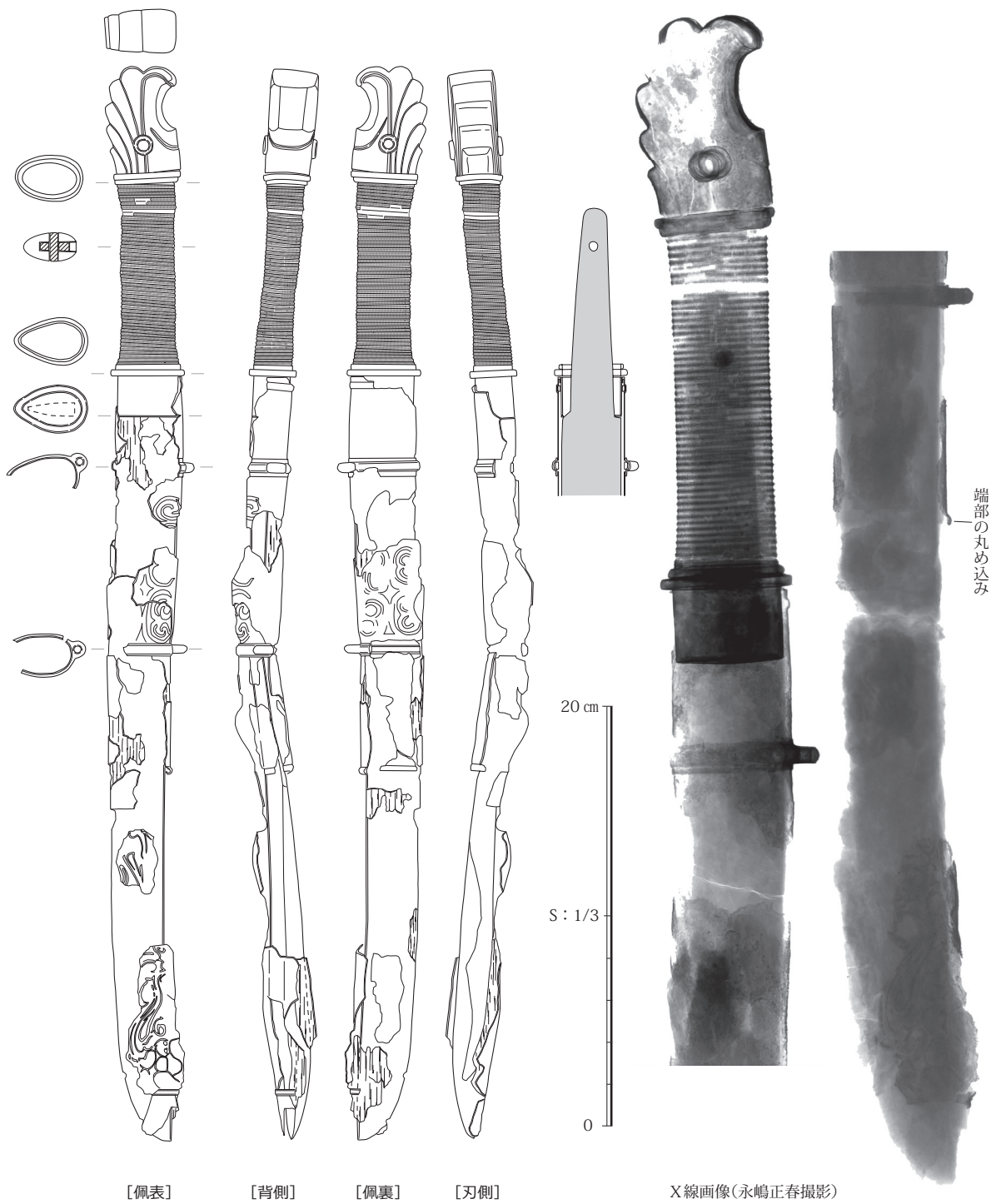
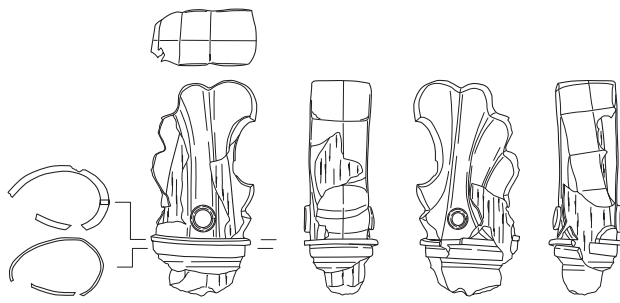


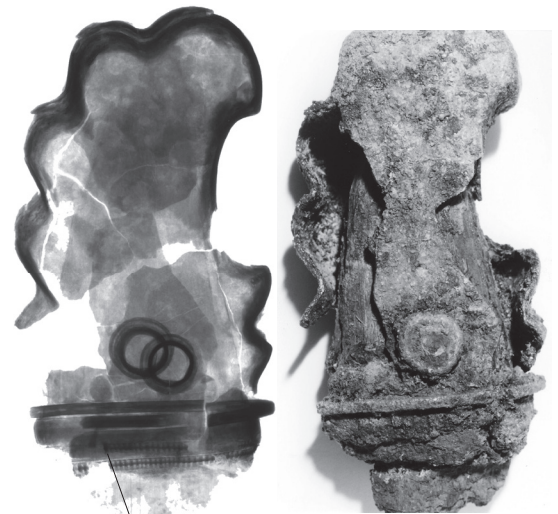
図105 金鈴塚古墳の鶏冠頭大刀 (2) (大刀14)

β 技法は、鏡対称の同形同大に打ち出した二つの金銅板を表裏から貝合わせする。その接合には、銀蟬づけがおこなわれたとみてよい。木芯部は柄頭よりも小さい山形であるため、木芯部に完成した柄頭を被せることができる。この技法は、金銅装頭椎柄頭と通底する〔横田1986、大谷晃1996、橋本英2014など〕。また、大刀15の山形突起の区画線は、大刀13・14のような明瞭な段をもたず、断面は緩やかな波を打つ。これも、金銅装頭椎柄頭の畔目と造りが似る。さらに、柄頭と柄間の間の環状金具も、金銅装頭椎大刀の切羽や縁金具と様相が似る。こうしたありかたから、金銅装頭椎大刀の工人が鶏冠頭大刀の製作にかかわった

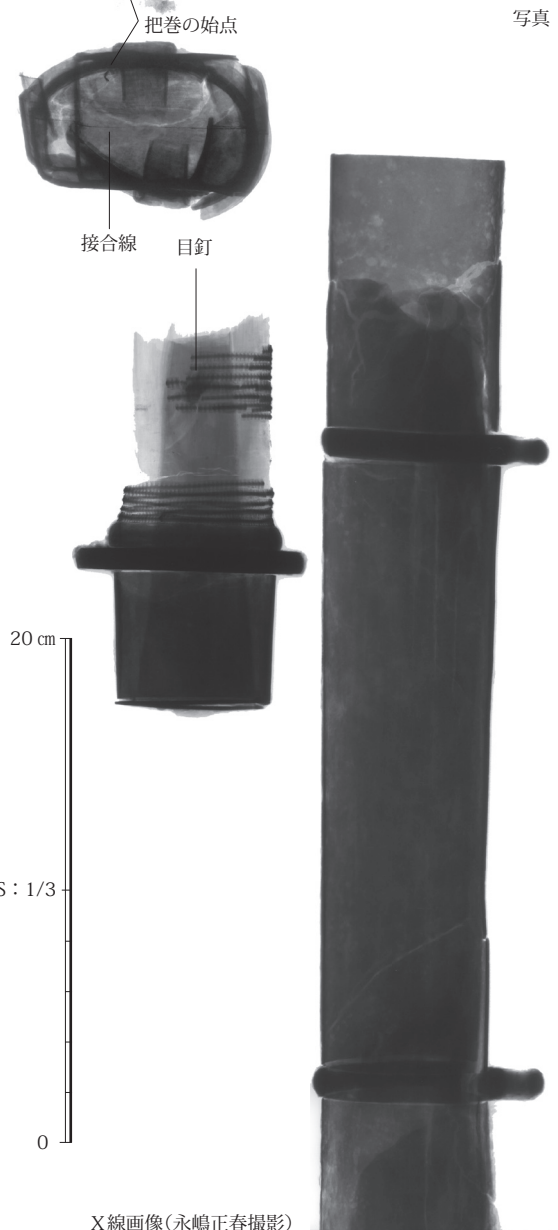
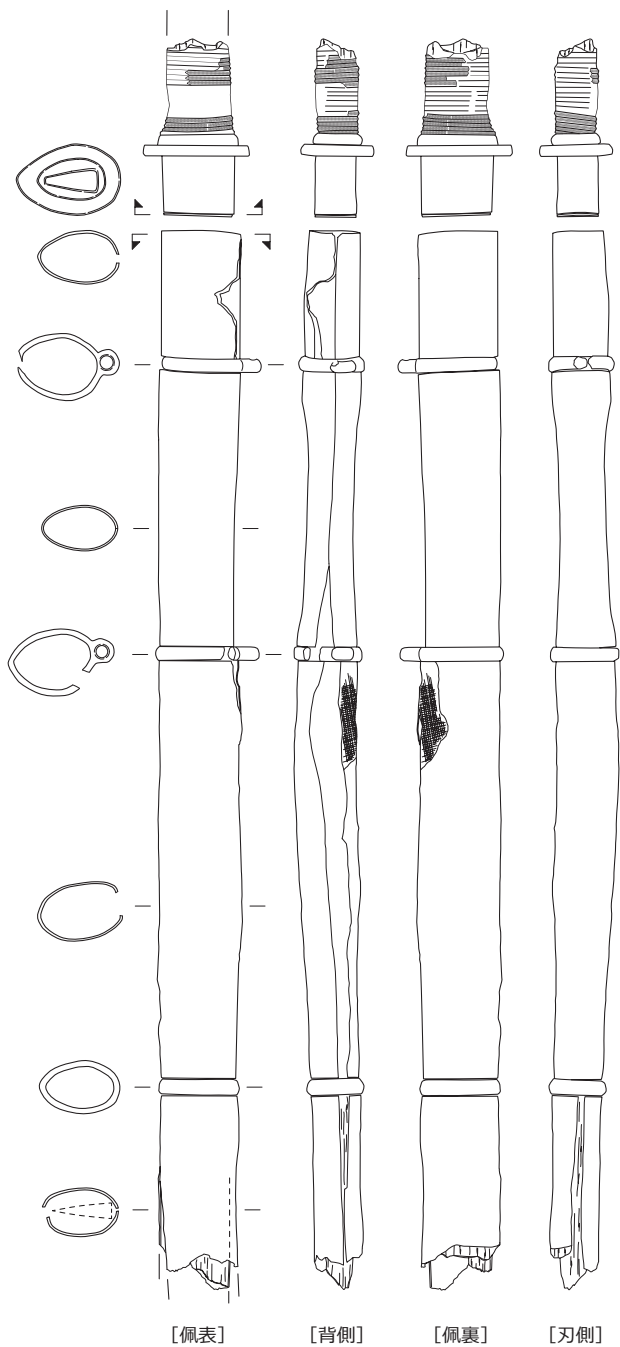


図出典 木更津市郷土博物館金のすず蔵

図106 金鈴塚古墳の鶏冠頭大刀 (3) (大刀15)



写真



X線画像(永嶋正春撮影)

図出典 木更津市郷土博物館金のすず蔵

図107 金鈴塚古墳の金銅装大刀 (大刀16)

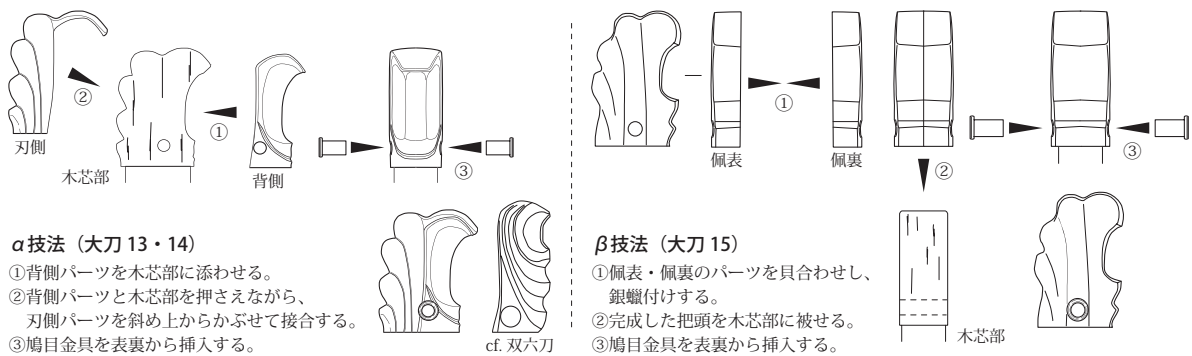


図109 鶏冠頭柄頭の製作技法

のちに懸通孔を割りつけるためか、背と刃側のパーツ双方に孔がまたがり、製作工程上の入念度合いの退化もうかがえる。このような変化の方向性は、TK43型式期までの装飾大刀は金と銀を多用しTK209型式期には金一色に変化するという変遷観〔大谷晃1999, 橋本英2010, 古川2010, 持田2011〕と親和的である。

柄 大刀13は、落とし込み柄に両関鉄刀を内蔵し、茎の背と柄の背の間に、別造りの角柱状木材をはめる。この技法の類例には、島根県キコロジ遺跡から出土した圭頭大刀の柄がある。キコロジ遺跡の時期はTK43-TK209型式期であり〔岩本2011〕、金鈴塚古墳の築造時期とちかい。

いっばんに落とし込み式の柄は、振り環頭大刀などの倭系装飾大刀にもちいるが、これらの多くは片関で茎が背側に寄るため、柄と鉄本体の間に空間はない。しかし、TK43-TK209型式期は、不均等両関の倭製鉄刀が普及し始める段階であり〔臼杵1984〕、そうした鉄刀本体の型式変化に連動して、このような茎落とし込み柄の垂型式が出現したのだろう。

鞘口金具 金属線を芯にして銀板を張ることで凸線を造りだす鞘口金具は、八幡観音塚古墳、京都府湯舟坂2号墳、島根県鳥木横穴墓の銀装圭頭大刀にみられ、いずれもTK43-TK209型式期に位置づけられる。大谷晃二の銀装圭頭大刀編年によれば、八幡観音塚古墳例が最も古く、金鈴塚刀17がこれに続く〔大谷晃2014〕。この変遷観は鶏冠頭大刀編年の方向性と同じであるため、八幡観音塚古墳から出土した鶏冠頭大刀の意匠と圭頭大刀の製作技術が融合して、金鈴塚古墳の鶏冠頭大刀が成立したと考えることができる。

大刀13・14の鞘の銀板に凹線文様をほどこす事例は、兵庫県黍田15号墳の双龍環頭大刀や、神奈川県秦野二子塚古墳などにみられる。大谷は、こうした技術を共有する大刀群を「工房B」の作品と評価し、その製作年代をTK43～TK209型式期に位置づける〔大谷晃2012〕。この凹線文様の表現技法について大谷は、鈴木勉のいう「木彫銀張り技法」¹⁾〔勝部・鈴木1998〕とみる。しかし、大刀13の鞘口金具は先端まで木鞘がおよぶのか不明瞭だし、およぶとしても極めて薄く、木彫銀張り技法のように鞘木を彫って下絵を作ることはむずかしい。おそらく、銀板に直接描いた下絵を先端の丸い工具でなぞるように施文したのだろう。

足金物 観音塚刀は、凸状造出佩用装置（瀧瀬1992のⅠ類）、金鈴塚刀3振は吊手孔付単脚足金物を備える（Ⅱ類）。Ⅰ類は大刀を縦位に佩用、Ⅱ類は2個一組でもちいることで大刀を横位に佩用する。

Ⅰ類は、慶州市皇南大塚南墳の三累環頭大刀や昌寧校洞11号墳の円頭大刀など、5～6世紀の新羅・加耶系装飾大刀に装着される〔瀧瀬1991〕。日本でもわずかに、5世紀後半頃の福岡県セストノ古墳例や小田茶臼塚古墳例があるが拵の全体像は不明で、確実に倭系といえる刀剣に装着する資料は知らない。

Ⅱ類は、中国や韓国での出土をほとんどみないことから、倭で出現したと考える。これは、吊手環を貴金具の佩裏に蟻づけするものから、環が徐々に貴金具の背側直上に近づきつつ、環と貴金具を一体で铸造するものに変化する〔新納1987〕。

Ⅱ類はさらに、断面蒲鉾状のものをa類（大刀13）、貴金具本体の開口方向に鰭が付き、断面が扁平なΩ

状のものをb類(大刀14)に細分できる。IIa類はTK209～TK217型式期に大量生産される装飾大刀群において、柄頭の形式を超えて採用される。IIb類はIIa類ほど一般的ではないが、金鈴塚刀14や京都府湯舟坂2号墳の銀装圭頭大刀が最古段階とみられ、TK209型式期後半段階から奈良時代にかかる東京都岡本1号横穴の円頭大刀、TK217型式期の茨城県虎塚古墳の銀装刀子など、比較的広い時間幅で確認できる。IIa類とIIb類は系列が異なり、TK209-TK217型式期に併存したと考える。

このように、足金物の違いは大刀の製作順序を示さない。類例の出現順序として相対的にI類が古く、II類が新しいこと、また、系譜の故地が異なることを指摘するに留める。

鉄刀 白杵勲の茎分類によれば、大刀13が内蔵する鉄刀は「均等両関一文字尻中細」、大刀14・19は「均等両関栗尻中細」にあたり、いずれもTK209-TK217型式期に盛行する。均等両関の多くは、身幅が3cm前後、刀身長が30～90cmにおさまる、小振りである[白杵1984]。先の二型式が明確な時期差を示すのかについては慎重を要するが、栗尻に後出的な要素を見出すならば、大刀13→14・19の順に新しいといえる。

また、大刀13はカマス鋒であることも注目できる。最古段階にあたる観音塚刀も両関・カマス鋒であることをふまえるならば、大刀13がこの影響を受けたと考えることができる。これは、金鈴塚刀のなかで大刀13を相対的に古くみる先の想定を支持しうる。同時に、鶏冠頭大刀が内蔵する鉄刀は半島系の要素をもつといえるが、それすなわち半島製とは断言できない。

大刀16・19の相対年代 前章で、大刀15の同一個体となる候補に大刀16と19を挙げた。ここではそのどちらにともなう可能性がたかいのか検討し、大刀15の製作時期として想定できる幅を絞りこみたい。

鞘の検討にあたり、瀧瀬芳之の用語に倣えば[瀧瀬1984]、大刀16は、全体を金属板で包む“飾鞘”，大刀19は、鞘口と鞘尻以外にも筒金具を装着する“準素鞘”である。瀧瀬によれば、準素鞘から飾鞘に変化するという。つまり、相対的に大刀19が古く、16が新しいと仮定できる。さらに、頭椎大刀の編年を細分化した橋本英将によれば、TK209型式期初頭に無畦式で佩用装置をともしない準素鞘(第1段階)、これに遅れて畦目式で佩用装置をともしない無文の金銅装鞘(第2段階)、TK209後半～TK217型式期に飾板をもちいる金銅装鞘(第3段階)が出現するという[橋本英2012]。これにあてはめれば、大刀19はTK209型式期前半～中頃、大刀16はTK209型式期中頃～後半古段階に位置づけられる。

ここで、大刀15の柄頭の区画線が金銅装頭椎柄頭の畦目に似ることを積極的に評価すれば、頭椎大刀第2段階以降の製作を想定でき、大刀16にともなうと評価しうる。すると、大刀15・16からなる金銅装鶏冠頭大刀の製作はTK209型式期中頃以降と考えられるが、同時に頭椎大刀第3段階の特徴はもたないため、TK217型式期以降に下る可能性は低い。

ただし、大刀14と大刀19の全長がちかしく、大刀19を大刀15の鞘とみる案をのぞくこともできない。むしろ、大刀16あるいは19にともなう4振目の鶏冠頭大刀の存在すら想定しうる。

工房Bと工房Dの狭間 TK209型式期後半には、頭椎大刀を製作していた工房Aと、銀装鶏冠頭大刀を製作していた工房Bが統合し、各種大刀を金銅装で斉一化する工房Dがあらわれる[大谷晃2012]。大谷は大刀15を工房Bの作品とみたが、先の検討によって、これにも頭椎大刀工人の関与がうかがえた。ただし、大刀15の柄は金銅板巻ではないため、工房Dにおける全金銅装大刀の安定的な生産が開始する直前に置ける。すると大刀15は、装飾大刀工房の統合過渡期という、限定的な時期の産物と評価できる。したがって、大刀15は石室奥に副葬されつつも、初葬ではなく3回目以降の埋葬にともなうと判断でき、金鈴塚刀3振はすべて追葬にともなうことになる。

小結 大刀13・14の柄頭は倭系の刀装具や柄構造をともしうため倭製品と考えてよい。大刀15の製作技法は金銅装頭椎柄頭と通底する。平面形態の形骸化から大刀13→14→15の順に編年できるため、装飾大刀の工房Bが工房Dに統合される過程を鶏冠頭大刀の変遷からも追認できる。

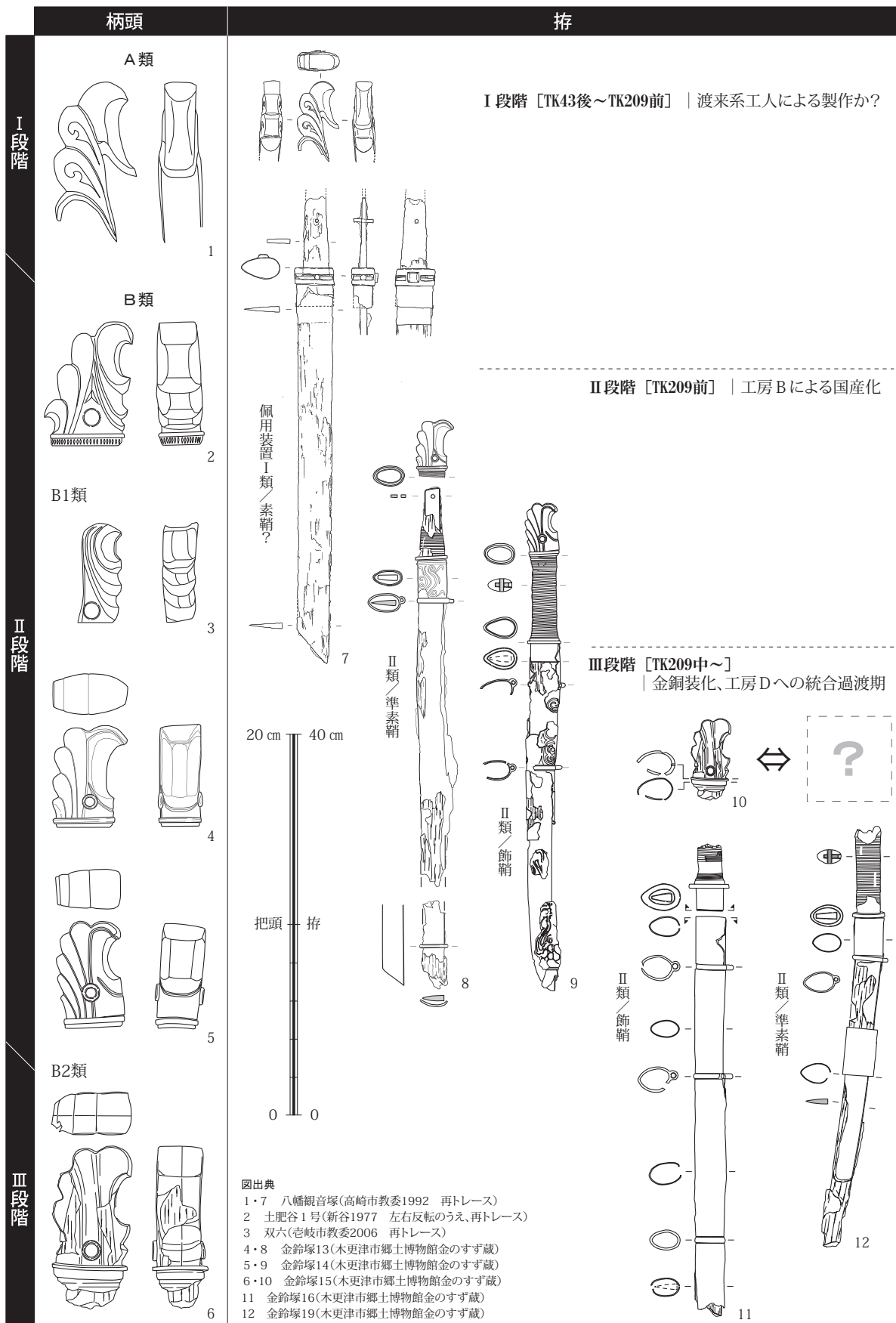


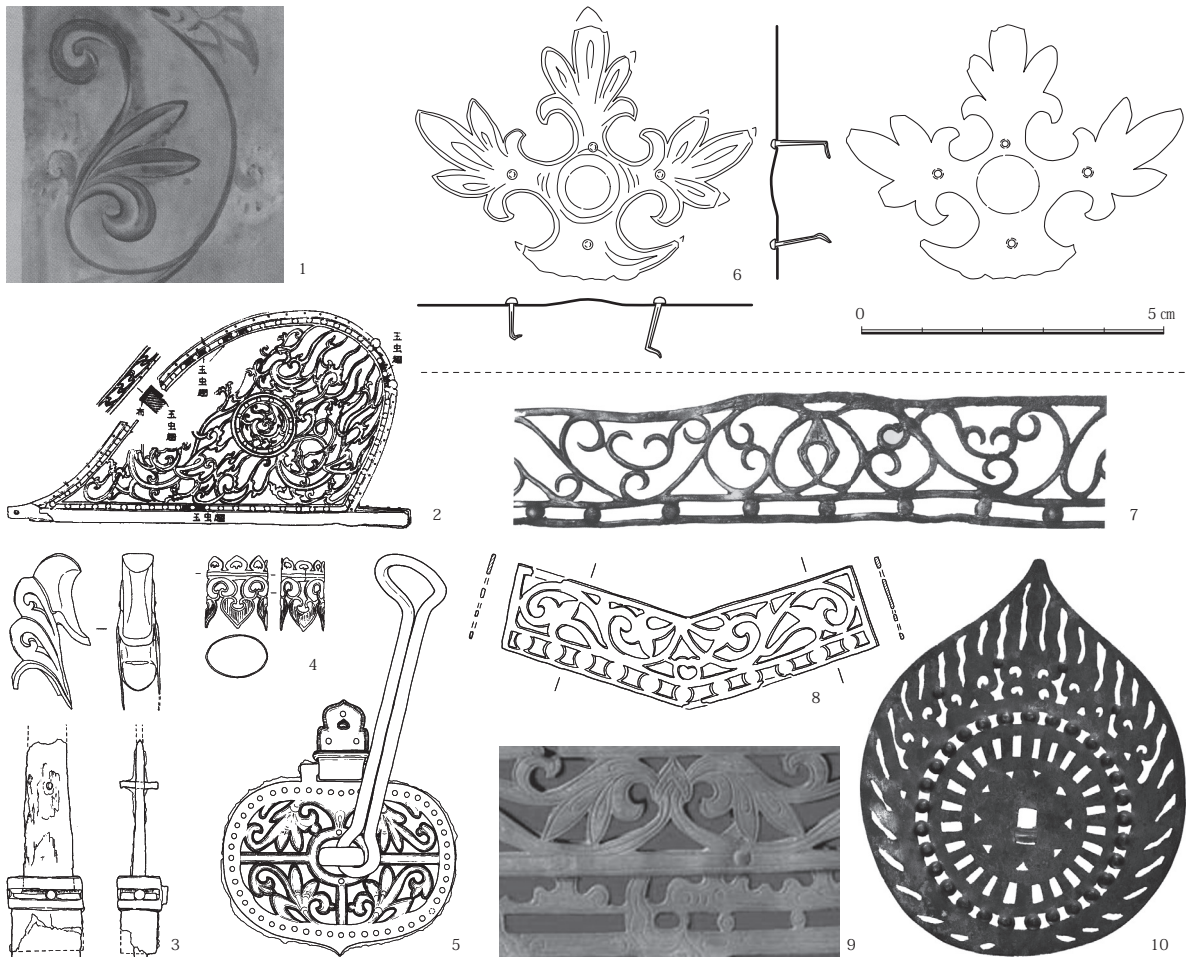
図110 鶏冠頭大刀の編年

製作時期は、大刀13・14はさかのぼってもTK43型式期後半，実質的にはTK209型式期前半，大刀15はTK209型式期中頃～後半だろう。これは実年代で西暦600年前後，すなわち推古朝（592-628）にあたる。次項では，この年代観を念頭におきながら，鶏冠頭大刀の系譜と展開の背景を考える。

第4項 意匠の系譜 [図111]

鶏冠頭大刀を語るためにはまず，その特異な柄頭の系譜をあきらかにしなければならない。

橋本英将は，鶏冠頭柄頭の意匠は，上顎と下顎の間から雲気を吐く龍の顔を模したものであり，本来は大刀本体を一尾の龍に見立てる龍首刀のようなものであったと考える [橋本英2013]。また，三田覚之も指摘するように，金鈴塚古墳から出土した単龍環頭大刀の龍表現は百済金銅大香炉(594年?)に表現された「雲を纏う龍」と似るし [三田2015]，百済武寧王陵から出土した単龍環頭大刀の柄頭下部に表現された雲気も，鶏冠頭柄頭に似ていなくもない。しかし，鶏冠頭柄頭の意匠を「龍の顔と雲気」とみるばあい，金鈴塚古墳で共伴した精巧な単龍環柄頭の意匠の精緻さと比べると相当のデフォルメを想定しなければならない。



図出典

- 1 江西中墓女室第1持ち送り天井壁画 [共同通信社 2005『高句麗壁画古墳』]
- 2 真坂里1号墳出土玉虫透彫杖 [梅原未治 1966『朝鮮古文化総論』]
- 3 八幡観音塚古墳出土鶏冠頭大刀 [瀧瀬 1992]
- 4 八幡観音塚古墳出土刀装具 [瀧瀬 1992]
- 5 藤ノ木古墳出土心葉形鏡板付替 [奈良県立橿原考古学研究所 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第1次調査報告書』]
- 6 金鈴塚古墳出土銀葉飾金具 [木更津市郷土博物館のすず蔵]
- 7 武者塚古墳出土銀帯状金具 [上高津貝塚ふると歴史の広場 2014『武者塚古墳とその時代』]
- 8 八幡12号横穴墓出土金銅製透彫金具 [いわき市教育委員会 2011『八幡横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告 148]
- 9 法隆寺金銅灌頂輪 [画像提供 | 東京国立博物館]
- 10 法隆寺光背 [画像提供 | 東京国立博物館] * 6以外，縮尺不同

図111 パルメント文および連珠文をほどこす文物の諸例

ところが、観音塚刀の柄頭は立体的で精緻な造りであり、その祖形となる何かが形骸化したものとは思えない。やはり瀧口宏の研究以来語られてきたように、その柄頭の祖形は、エジプトに起こり、ギリシャ、ローマ、ササン朝ペルシア、西域、そして仏教美術とむすびついて中国南北朝、朝鮮半島、倭へ伝わったパルメット文を求めるのが自然だろう〔高崎市観音塚考古資料館2007〕。そもそもパルメット文は、雲気、気流、流雲、天人など神仙的なモチーフと同化しやすく、透かし彫り製品の意匠に多用されるものである〔立田1997〕。つまり、橋本や三田のいう「龍の雲気」も、鶏冠頭柄頭も、そうした派生作品の一つであって互いに直接対比すべきものではない。

さて、パルメット文を表現する古墳時代の資料としては、金鈴塚古墳の銀葉飾金具や、奈良県藤ノ木古墳の金銅装馬具類、福岡県宮地嶽古墳の金銅製壺釦などがあり、6世紀後半から7世紀にかけての最上位階層に好まれた意匠といえる。ところが、これらのパルメット文は単体では左右非対称のものをふくみつつも総体としては左右対称の意匠を構成するのにたいし、鶏冠頭柄頭は左右二つに分割された二分割型パルメット文の片方を象る点で違いがある。観音塚刀の柄頭のデザインと直接対比すべきは、高句麗・江西中墓（朝鮮民主主義人民共和国平安南道南浦市江西区域三墓里、6世紀末～7世紀初頭）の玄室天井第1平行持ち送り側面に描かれたパルメット文である。これと同じ構成の文様は、7世紀の法隆寺金銅灌頂幡にも表現されるため、江西中墓に描かれた意匠が倭に何らかのかたちで伝わったと考える。

では、鶏冠頭柄頭の意匠に、多様なパルメット文のなかから二分割型が選択されたことには何か理由があるのだろうか。鈴木一有のご教示によれば、「古墳時代の倭人は左右非対称の意匠の武器を好む傾向にある」という。たしかに、大陸・半島系の三累環頭大刀や三葉環頭大刀、獅嚙環頭大刀、双龍環頭大刀の柄頭が左右対称をなすいっぽうで、倭が創出した独立片逆刺長頸鏃や剣装具、楔形柄頭大刀、振り環頭大刀、頭椎大刀の柄頭は左右非対称をなす。すると、倭において、多くの半島系大刀形式のなかでとりわけ単龍鳳環頭大刀が流行したもの、中心飾りが左右非対称であることに由来すると考えることができる。

くわえて、観音塚刀の佩用金具に表現される連珠文にも注目しておこう。凸状造出佩用装置の形態は新羅に系譜が連なるいっぽうで、パルメット文と連珠文をあしらう金工品の系譜は、平壤真坡里1号墳の玉虫翅枕金具にその一端が求められ、倭では、茨城県武者塚古墳の銀製带状金具や福岡県宮地嶽古墳の金銅冠、福島県八幡12号横穴の金銅製金具などを経て、法隆寺夢殿救世観音の宝冠、金銅灌頂幡などにつながる。また、7世紀前後には鐔や佩用装置に連珠文をあしらう装飾大刀が一定数つくられており、観音塚刀はそれらに影響した初期の事例として評価できる。

さらに、佩用装置の形態差に反映される、大刀を縦位に佩用するか、横位に佩用するかというスタイルの違いは、各王権の文化的背景に由来する。すると、すくなくとも観音塚刀にかぎっていえば、倭の刀工が倭王権のイデオロギーのみにしたがって製作した可能性は低いといわざるを得ない。

第5項 列島への将来の背景

このように、観音塚刀は仏教系意匠を複合的に表現し、また新羅式の佩用方法を採用するなど、日本列島製の金属製品や刀剣からは系譜を追うことができない特徴をそなえている。

その将来の背景については議論の余地があるが、当時の倭をとりまく国内外の状況として、

- ①用明2年（587）の崇仏戦争による廃仏派・物部氏の衰退と崇仏派・蘇我氏の台頭
- ②崇峻5年（592）以降、高句麗が隋に入貢しないことによって生じた関係の悪化が高句麗と倭のむすびつきをつよめ〔山尾1989〕、推古3年（595）に高句麗僧慧慈が厩戸皇子の師に就いたこと
- ③推古15年（607）にその厩戸皇子が法隆寺を建立したこと

以上の3点をふまえるならば、慧慈をつうじて倭における高句麗の位相をたかめるための政策の一環とし

て [井上直2011], 高句麗系の仏教意匠をあしらう観音塚刀が創出されたと解釈できる。このように、複雑な国際情勢の渦中で渡来した集団が観音塚刀を合同製作したならば、その製作年代が西暦590年頃をさかのぼるとは考えがたい。

ただし、6世紀末には金銅製毛彫馬具が出現し、ハート形透かしや平行多条直線文構成の毛彫などが、馬具・装飾大刀・仏教荘厳・仏像の宝冠に共通してみられ [田中新1980], その後7世紀の金銅仏光背は連珠文を明瞭に造り出すいっぽうで、装飾大刀の連珠文は急速に形骸化する。毛彫をほどこす刀装具も、八幡観音塚古墳出土品以外ほとんど知らない。つまり、TK209型式期の装飾大刀に仏教系意匠の影響を認めることはできるが、そのつながりの度合いは馬具ほどつよくはないと思われる。ここでは、鶏冠頭大刀と仏教の緊密な関係は観音塚刀一代かぎりの言説に留め、次節でその後の鶏冠頭大刀の性格を考える。

第6項 鶏冠頭大刀出土古墳の性格

現状では、近畿の古墳からは鶏冠頭大刀は出土しておらず、いずれも地方に立地する。しかし、土肥谷1号墳以外は全長100mを前後する最終末の大型前方後円墳であり、多くのばあい装飾大刀や三角穗式鉄鉾、甲冑、金銅装馬具、銅鏡、鏡をともしなう。

大刀副葬の観点からみると、金鈴塚古墳では多種多様な約20振の装飾大刀、双六古墳でも鶏冠頭大刀、振り環頭大刀、単龍環頭大刀、金銅装圭頭大刀、金銅装方頭大刀など、最低5振以上の装飾大刀を副葬している。これは、大阪府峯ヶ塚古墳や奈良県藤ノ木古墳のように、もっぱら倭装の刀剣を多量に副葬する王権中枢の古墳と対照的なありかたといえ、金鈴塚古墳や双六古墳の被葬者がさまざまな氏族や刀工集団と交流していた、あるいはさまざまな職掌を担っていた可能性を示す。

また、群馬と千葉の装飾大刀出土古墳数は列島で甲乙を争い、そのなかでも八幡観音塚古墳と金鈴塚古墳は墳丘規模が示す階層構造の頂点に立つ。こうした状況は、鶏冠頭大刀の佩用者が数ある装飾大刀佩用者のなかでも一際たかい階層に立つことを示す。倭系と半島系という系統分類に照らすならば、双六古墳と金鈴塚古墳では両系統の大刀が一定数副葬されており、倭装大刀＝国内の身分表象、半島系大刀＝国際関係時の身分表象という図式 [町田1988] が数世代に渡って発現していたとも考えられる。

その他の要素に着目すれば、八幡観音塚古墳と金鈴塚古墳は当該地における最後の前方後円墳でもあり、釘付木棺の存在や、旋回式獣像鏡系倭鏡、断面多角形の袋部をもつ三角穗式鉄鉾、銀製弓弭、甲冑、花形鏡板・杏葉、承台付銅鏡、桃核が出土するなど共通点が多い。このうち三角穗式鉄鉾は、対外交渉や海上交通にかかわる有力者像を示すし、承台付銅鏡は、推古16年(608)の隋使裴世清来航や翌年の飛鳥大仏開眼などを契機として生産・配布されたものといわれる [桃崎2006]。双六古墳でも、三角穗式鉄鉾、断面多角形の石突、国内最古の北齊製二彩陶器、新羅土器など、国際色豊かな文物を副葬する。いずれも、王権レベルでの交流の履歴として評価しうる。実際に、金鈴塚古墳と双六古墳はいずれも臨海性がたかく、制海権の掌握を重視した立地にある。金鈴塚古墳被葬者の存立基盤の一つは東京湾周辺の首長間交流の掌握にあり、吉野島最大規模を誇る双六古墳もまた、倭の最前線の兵站基地として理解できる。

また、双六古墳の前方部は細長く扁平なのにならして、後円部の傾斜が急で高低差がはげしい。このような墳丘形態は、欽明陵に比定される奈良県見瀬丸山古墳(318m)のほか、愛知県馬越長火塚古墳(70m)、岡山県こうもり塚古墳(100m)、福岡県元岡石ヶ原古墳(49m)、熊本県大野窟古墳(123m)など、後期中葉から後半にかけての中型・大型前方後円墳に稀にみられる。これらの副葬品や立地を検討した土生田純之は、欽明朝(539-571)における対外交渉にあたった有力者の墓と評価する [土生田2012]。

以上の検討と、土生田が描く双六古墳初葬者の性格が推古朝を前後する時期の追葬者にも継承された可能性をふまえ、双六刀や金鈴塚刀は推古朝における外交や地域間交流の場面でもちいられた儀仗刀と考える。

第7項 鶏冠頭大刀の諸段階

以上の検討をもとに、鶏冠頭大刀の展開を3段階に整理する。

I 段階 | 八幡観音塚 現状において、鶏冠頭大刀は中国大陆や朝鮮半島での類例をみないが、観音塚刀の佩用装置は新羅系の構造で、なおかつ仏教系意匠の連珠文をあしらうため、その製作には渡来系工人がかかわったとみられる。製作時期は、廃仏派の物部氏が衰退した西暦590年前後（TK43型式期とTK209型式期の過渡期か）をおおきくさかのぼらない。中国隋（581-618）の成立を前後する複雑な国際関係のなかで渡来した大陸・半島系の工人が、倭の需要や流行に応じて共同で製作したのだろう。ただし、直接の対比資料がないため、倭の大刀体系が示す身分秩序や階層性のなかに位置づけることはむずかしい段階でもある。以上より、奢侈品としての性格がつよいと考える。

II 段階 | 土肥谷、双六、金鈴塚13・14 TK209型式期前半を中心として、工房Bが鶏冠頭大刀の国産化を図り、倭の大刀体系に定着の兆しをみせる段階。II・III段階の事例は各地に点的に分布するが、出土古墳の立地や規模、副葬品の様相から、推古朝の外交にともなう儀仗刀と評価する。

III 段階 | 金鈴塚15 鶏冠頭柄頭の意匠と、頭椎柄頭の製作技法が融合する段階。TK209型式期を中心として、装飾大刀の工房Bが工房Dに統合されてゆく限定的な時期である。金鈴塚古墳の須恵器はTK46型式をふくむため、大刀15の製作時期の下限は厳密には特定できないが、TK217型式期以降に下るとも考えがたい。

第3節 三角穂式鉄鉾

金鈴塚古墳には最低2本以上の三角穂式鉄鉾が副葬されていた〔図112～114〕。このうち1本は袋端部に銀製の筒状金具（以下、「銀装具」と記す）をつけるものである。同様の銀装具をつけた石突も出土しており、本来はこれらが組みあって1本の鉾を構成していたとみられる。くわえて、この石突は通有の錐状のものと異なり、先端をやや膨らませた形状であることが注目できる。そのほか、鉄鉾を保護する鞘の責金具や、銀装具を挟んで袋端部につけていたとみられる円筒状の鹿角製品も出土していることから、金鈴塚古墳の鉾は、きわめて装飾性に富んだ事例であったことがわかる。以下、これらの属性ごとに類例を示し、金鈴塚古墳出土品の位相を考える。なお、三角穂式鉄鉾出土古墳の所在地は第5章の表9を参照。

第1項 諸属性の類例

1. 銀装具

金鈴塚古墳例と構造的に似るのは甲山古墳、將軍山古墳例である。また、甲山古墳例、風返稲荷山古墳例、中田装飾横穴例は三角穂式であり、石突にも銀装具をとまなうものは金鈴塚古墳例と中田装飾横穴例にかぎられる〔図52〕。

銀装の鉄鉾は朝鮮半島に系譜の一端が求められるものであり、大加耶や百済の威信財として認識されている。倭においても各地の有力な墳墓から出土しているが、ただ銀装三角穂式鉄鉾を直截的に朝鮮半島の動静と結びつけることには注意を要する。なぜならば、三角穂式鉄鉾は倭の上位階層でひろく流通したものだから、銀装の系譜が5世紀の百済あるいは加耶に求められるとしても、6世紀後半以降の倭においてはそうした認識が薄らぎ、倭の上位武装体系に定着したと捉えることも可能だからである。

2. 鹿角装

群馬県金井東裏遺跡の鉄鉾は、銀装具を挟んで円筒状鹿角製品をつける。鹿角装具をとまなう鉾は類例がかぎられるが、福岡県稲童21号墳例（TK208）や熊本県国越古墳例（MT15）がある。金井東裏や国越例



銀装三角穂式鉄鉾・石突



鉾

袋部



鹿角製品



銀装飾



銀装飾と鹿角製品装着状況

図出典 木更津市郷土博物館金のすず蔵

図112 金鈴塚古墳の三角穂式鉄鉾（1）

が直弧文をともなうように、中期以来の伝統的な刀剣装具に連なる要素といえる。

3. 鞘入り鉄鉾

三角穂式鉄鉾、あるいはそれにともなう石突の表面に木鞘の痕跡が残る事例は、若田大塚古墳、金鈴塚古墳、風返稲荷山古墳、中田装飾横穴例などが知られる。鞘の断面構造はわからないが、一木造りよりも複数部材を合わせた造りとみるほうが、一応の理にはかなっている。

中田装飾横穴出土鉾・石突の鞘には断面が扁平な蒲鉾形の銅地銀張環が外接しており、複数部材を組みあわせた鞘の分離を防ぐための責金具とみられる。金鈴塚古墳、風返稲荷山古墳、八幡観音塚古墳、定東塚古墳から出土した環状金具も同様の性格をもつものだろう。

定東塚古墳では小型の単環をつけた円形の金銅製責金具が出土している。沖ノ島8号遺跡から出土した金銅装鞘入り鉄鉾と同様の見栄えを呈するものであり、やはり鉾鞘の装具とみてよいだろう。なお、この沖ノ島8号遺跡は、金銅装の鞘に銀装鉄鉾が収められた状態で錆ついており、鉾本体の形式はわからない。

4. 先端が膨らむ石突

金鈴塚例は一般的な石突にちかい印象だが、後続する①八幡観音塚古墳（TK209）、②島根県向山1号墳（TK209-TK217）、③定東塚古墳（TK217）、④奈良県正倉院宝物（8c）の順に丸みを帯びてゆく。正倉院例が定東塚例にちかい宝珠形であることから、金鈴塚例を起点として徐々に膨らみと丸みを帯びる亜系列が派生したと考える。このうち金鈴塚古墳と八幡観音塚古墳の事例は、緩やかな段をつけたのちに先端部にかけて比較的鋭く連続し、端部をやや丸く仕上げるのにならして、向山1号例は深く段をつけて端部にかけて半球状に形成する。後者の類例として、TK217型式期の定東塚古墳例や8世紀の正倉院伝世品があることから、前者が古く、後者が新しいとみられる。金鈴塚、八幡観音塚、定東塚例と組みあう鉄鉾は、いずれも三角穂式である。

したがって、鉄鉾と石突の組みあわせから得られる変遷観は、金鈴塚≒房子塚→八幡観音塚→向山1号≒風返稲荷山→定東塚となろう。これは、鉾本体の短小化から導かれる変遷観とも矛盾しない。

第2項 関東における三角穂式鉄鉾の展開

関東における三角穂式鉄鉾の展開は全国に先駆けてはやく、MT15型式期頃の群馬県若田大塚古墳、同広瀬弦巻塚古墳に副葬されている。ただし数は少なく、三角穂式鉄鉾の広域普及はTK43-TK209型式期である。さらに、綿貫観音山古墳の多量副葬、金鈴塚古墳の装飾性豊かな事例が際立つ。

綿貫観音山古墳周辺においては、房子塚古墳や八幡観音塚古墳など、後期末の前方後円墳での出土が多くみられ、全国屈指の集中域を形成する。これらに先行する綿貫観音山古墳への多量の集積をふまえると、三角穂式鉄鉾の生産と流通の大元の発信源が仮に近畿地方にあったとしても、すくなくとも上野にかぎっていえば綿貫観音山古墳を中心とした威信財システムが成立している。

房総半島では三角穂式鉄鉾の出土が少なく、こうした「威信財システム」を想定することはむずかしい。ただ、金鈴塚古墳例が三角穂式鉄鉾全体のなかでも最も装飾性豊かな資料であることは看過できない。TK209型式期以降には風返稲荷山古墳や赤羽B-1号横穴、中田装飾横穴など、群馬をのぞく北関東から南東北の有力首長墓においても三角穂式鉄鉾が副葬されることを考えれば、霞ヶ浦や太平洋沿岸などの水上交通を駆使した広域拡散モデルを描くことができる。金鈴塚古墳、風返稲荷山古墳、中田装飾横穴の事例はいずれも同時期の他地域にはみられない銀装であることもふまえて、三角穂式鉄鉾が紐帯する東国有力首長間ネットワークの存在を想定する。そのようにみれば、当該地域の三角穂式鉄鉾出土古墳は直線距離にしておおむね50km前後の間隔でならぶことから、これがそのネットワークの実態を示すとみられる。そのネットワークの影響力がおよぶ範囲は、金鈴塚古墳を中心として西はおおむね静岡県賤機山古墳、北は中田装飾

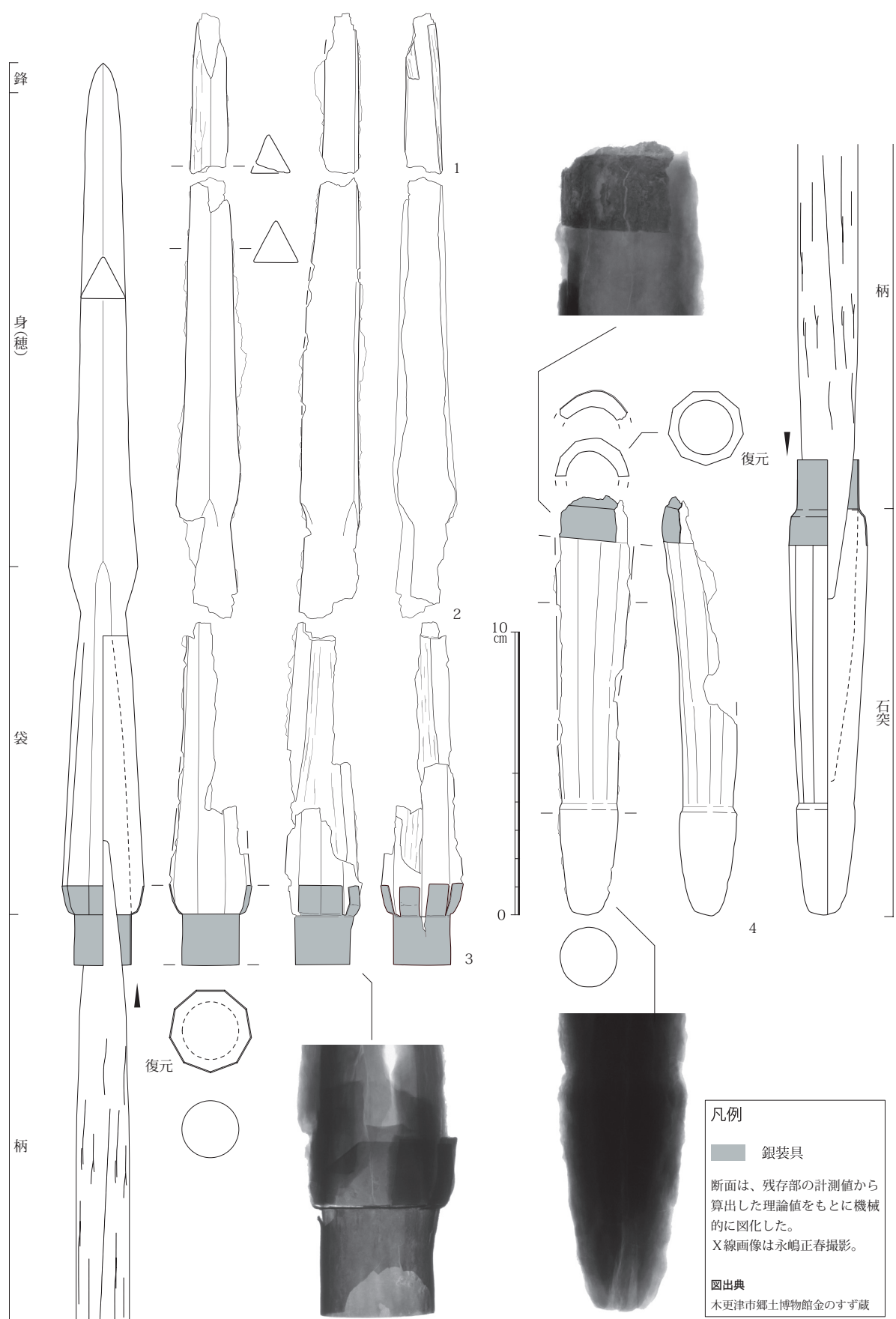
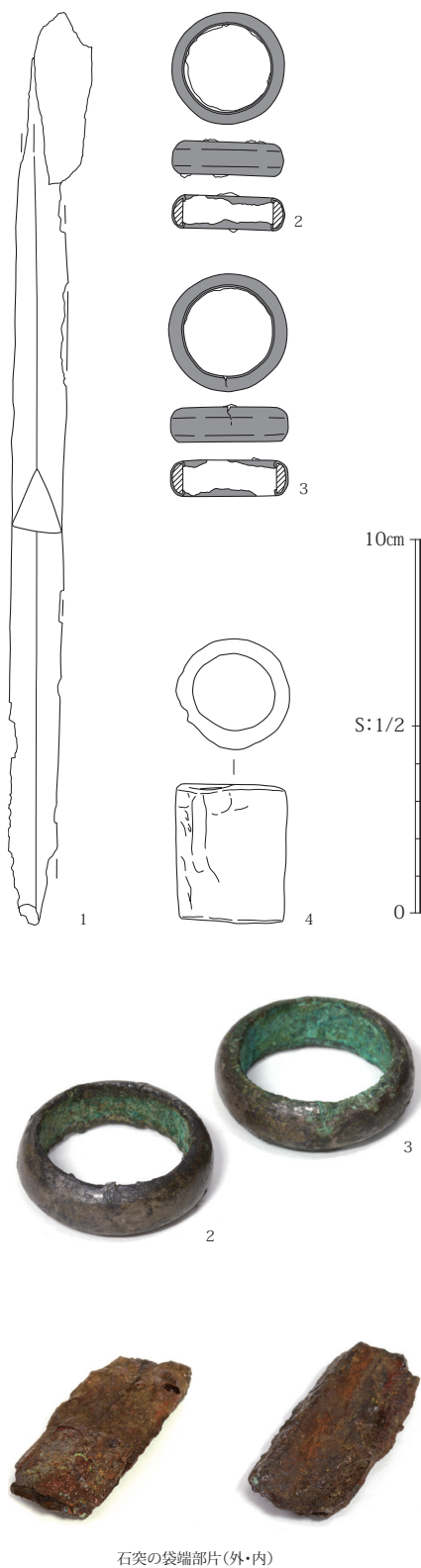
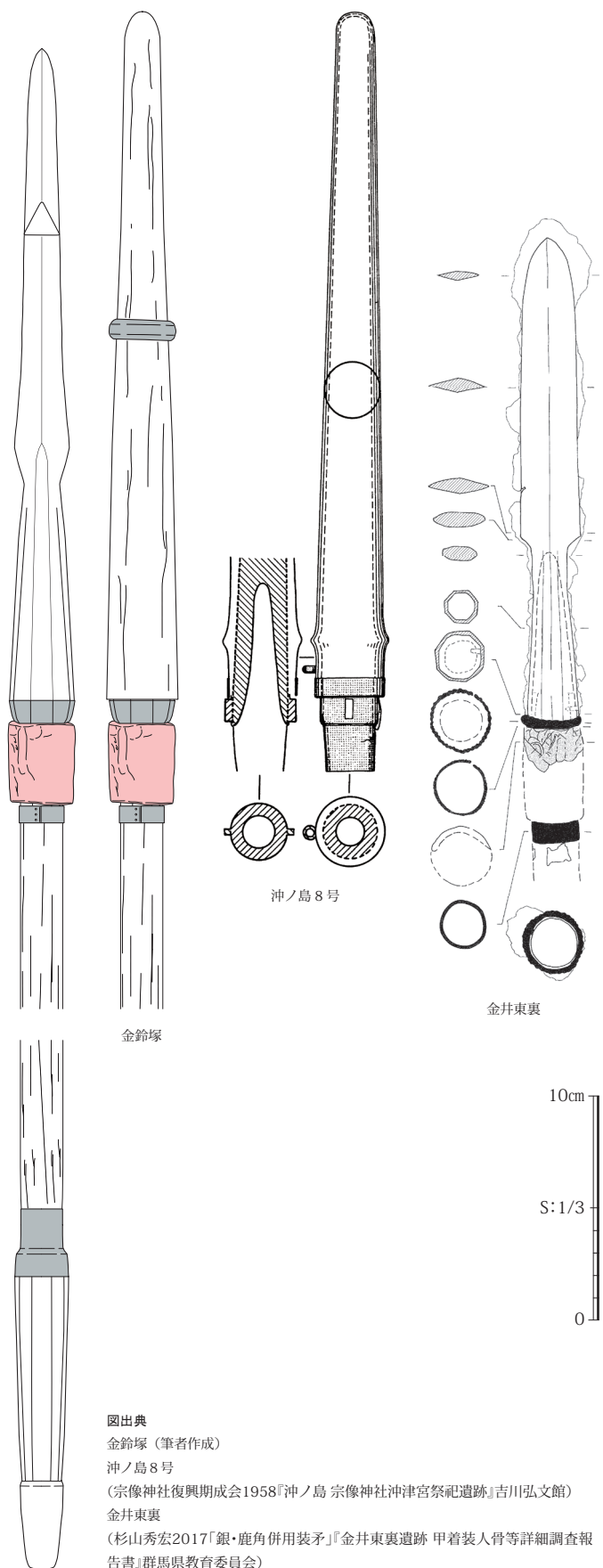


図113 金鈴塚古墳の三角穂式鉄鉾 (2)



図出典 木更津市郷土博物館金のすず蔵

図114 金鈴塚古墳の三角穗式鉄鉾 (3)



図出典

金鈴塚 (筆者作成)

沖ノ島8号

(宗像神社復興期成会1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』吉川弘文館)

金井東裏

(杉山秀宏2017『銀・鹿角併用装矛』『金井東裏遺跡 甲着装人骨等詳細調査報告書』群馬県教育委員会)

図115 金鈴塚古墳出土三角穗式鉄鉾の復元

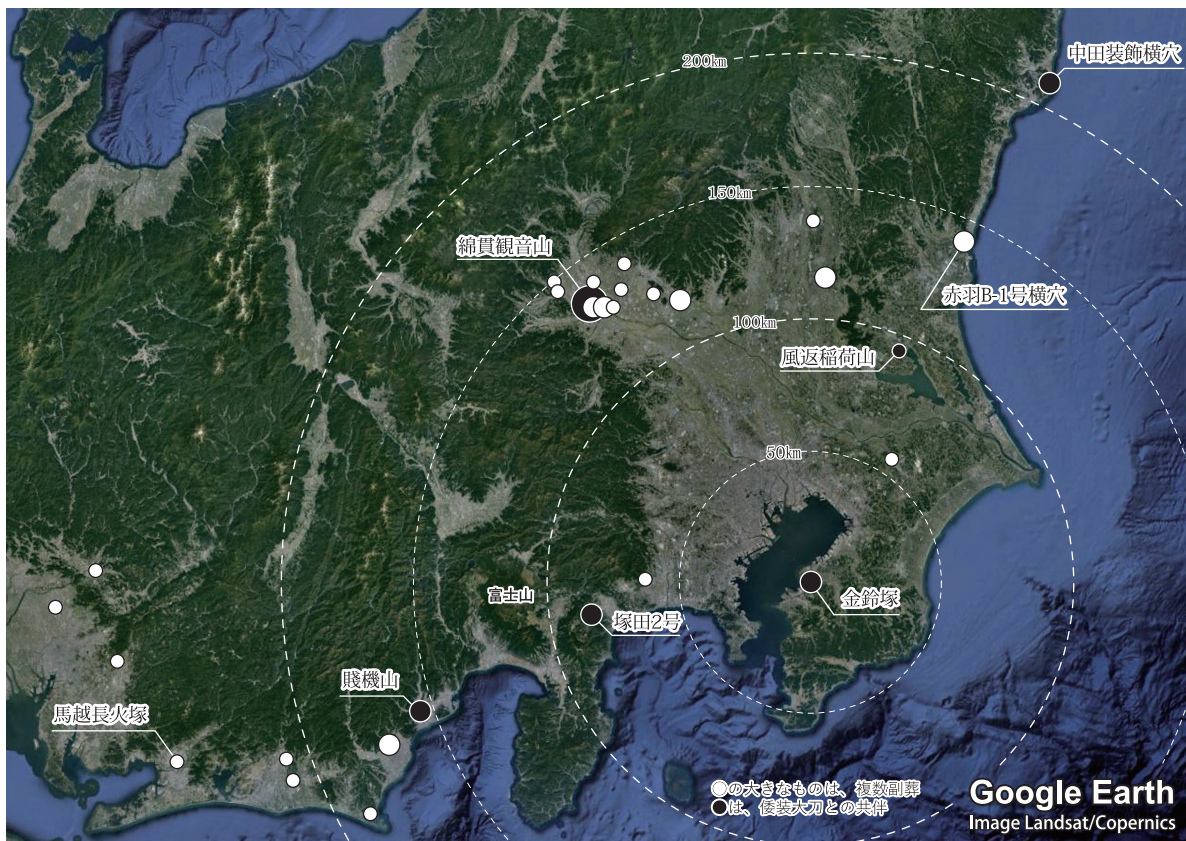


図116 東日本における三角穗式鉄鉾の分布

横穴あたりまでの、半径およそ200km圏内に絞りこめる。このうち、賤機山古墳、塚田2号墳、金鈴塚古墳、風返稲荷山古墳、中田装飾横穴では、倭装大刀が出土していることも、こうした想定を傍証する。

このようにして形成される東国の地域的まとまりの西限は、現状では足柄峠を押さえた塚田2号墳周辺、東海側の視点に立つならば、それは薩埵峠を控えた賤機山古墳周辺だったかもしれない。賤機山古墳よりも西の地域では、かならずしも有力とはいえない群集墳への三角穗式鉄鉾の副葬が目立つことから、上記のようなものとは異なる形態のコミュニティを形成したとみられる。三角穗式鉄鉾が地域の最有力墳に集中すると同時に、周辺の中小規模墳へも副葬（再分配？）する状況は、東海東部すなわち駿河が東西日本それぞれの財体系の特徴が接触する境界領域であることを認識させる。塚田2号墳と賤機山古墳の間には日本最高峰の富士山（標高3,776m）が聳え立つこともまた、交通の要衝や境界というキーワードを考えるうえで受ける示唆はおおきい。そうした地域の急先鋒に立つ賤機山古墳には、駿河最大の畿内系横穴式石室や家形石棺が導入されるとともに、同時期では最多級の三角穗式鉄鉾や倭装大刀、金鈴塚型の小札甲、藤ノ木古墳にも劣らない金銅装馬具、関東の有力墳に多くみられる銅鉤が副葬されている。倭王権中枢部の要人に連なると同時に、関東世界にもつうじる広域交流網を掌握した被葬者像が想定できるだろう。

第3項 小 結

金鈴塚古墳の三角穗式鉄鉾は、全長30cm前後の大型品をふくむ複数副葬から、TK43型式期に位置づけうる。類例はかぎられるが、5世紀から6世紀前半の刀剣類に多くみられる鹿角製の装具をとめない、銀装具がMT85-TK43型式期の将軍山例と似ることも、こうした年代観と矛盾するものではない。石室奥で出土したことから初葬か第2次埋葬にともなうとみられ、甲冑の年代観とも親和的である [内山2017]。

さらに評価すべきは、製作に手間のかかる断面九角形の袋部、先端を膨らませた石突、銀装の石突、円筒状鹿角装具、そして鞘を揃えた類例はない点である。中期以来の刀剣や鉾の構成要素を収斂し、鉾の階層構造の頂点に据えた、東アジア的な鉄鉾様式の極致といえる。そのような伝統をそなえながらも、関東広域の首長間ネットワークや階層編成、葬送、あるいは祭祀の場で重んじる高位な鉾であったと評価できる。

第4節 銀製弓弭

金鈴塚古墳からは、全国最多6個体の銀製弓弭が出土した〔図118・119〕。弓の上下に装着したとすれば、都合3張分の飾り弓が存在したことになる。

第1項 概要〔表13、図117〕

弓の上下端を覆う金属製の飾り、すなわち金属製弓弭には、青銅製、銀製、金銅製がある。弓の上端部を末弭、下端部を本弭と呼ぶ。古墳時代の金属製弓弭は、先端の両側面に段を設けることによって、突起および傾斜した肩部を造り出す。これは、松木武彦による弓分類のF類Ⅱ〔松木1984〕、すなわち古墳時代以降の弓の主要型式に対応する形態である。金属製弓弭のセット関係や、本弭か末弭かを判別するうえでは、凸部の長さや、袋端部の造作の共通性に注目する。

凸部の長さ 金銅製弓弭の装着状況を良好に残す小申田北18号横穴例は、末弭の凸部長が3.8cm、本弭の凸部長が2.3cmで、末弭のほうが1.5cm長い。八幡観音塚古墳でも銀製弓弭が2点出土しており、凸部の長さは3.6cmと2.7cm。風返稲荷山古墳例は3.1cmと2.7cmである。後世の事例ではあるが、奈良県正倉院の梓弓第1号や、神奈川県鶴岡八幡宮古神宝類の朱漆塗弓の金銅製弓弭なども、末弭のほうが長い。

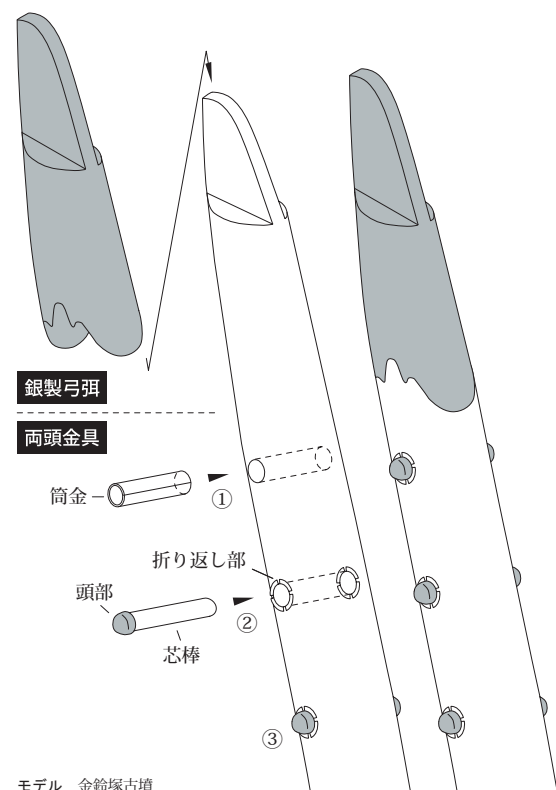
袋端部の造作 小申田北18号横穴例は、本弭と末弭の袋端部に円環を介して波状の環をつける。風返稲荷山古墳例は2個とも袋端部に三角形の抉りがある。金属製弓弭の袋端部は、本弭・末弭ともに同じ造作をほどこすようである。

以上の理由から、金鈴塚古墳の銀製弓弭の組みあわせは、図119の1と1'（Xセット）、2と2'（Yセット）、3と3'（Zセット）に分ける。

金属製弓弭を体系的にあつかった先行研究としては田中新史による分類と編年があり〔田中新2006〕、その大枠に異論はない。以下、田中の研究に導かれながら、金属製弓弭の編年を整理する。ただし本節では、田中編年Ⅲ期の新古二相区分の意義について副葬品複合の立場から再検討し、分布論的な検討もくわえる。

第2項 分類と編年

材質と構造にもとづいてA～C類に分類する〔図118・119〕。ただし、このうちA・B類は中期初頭か



- ①弓幹の穿孔に筒金を差し込み、両端を折り返して脱落を防ぐ
このとき、折り返し部は花弁状になる
②芯棒を差し込む。このとき半球状の頭部は片側だけ造り出している
③芯棒の先端を半球状にかしめて完成

図117 金属製弓弭と両頭金具の構造

表13 金属製弓弭出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	墳形	時期	両頭金具	装飾大刀			鍔	甲冑	馬具	銅鏡	特記
					倭	袋	環					
A類（銅製）												
黒石山（馬見古墳群）	奈良県広陵町											出土古墳の詳細不明
津堂城山（古市古墳群）	大阪府藤井寺市	方円・210m	TG232					○	○	○		古市古墳群の嚆矢
B類（鉄留）												
金冠塚	慶州	円・46m	5c末					○	○	○	○	新羅王陵
池山洞47号	高霊		6c中									旧・主山39号墳
箕田丸山・前方部石室	福岡県みやこ町	方円・37m	TK10	○（銀装）	●		○	●		○		
C1類（銀製）												
東京湾エリア												
金鈴塚	千葉県木更津市	方円・140m	TK209	○（銀装）	○	○	○	●	○	○	○	馬来田国造？
松 面	千葉県木更津市	方・44m	TK209		●	△	○				○	
利根川上流エリア												
八幡観音塚	群馬県高崎市	方円・90m	TK209	○（銀装？）	○			●	○	○	○	
房子塚	群馬県玉村町	方円・45m	TK209					○	●			○ 出土古墳の詳細不明
高瀬24号墳	群馬県富岡市	円・30m	TK209								○	
八幡山	埼玉県行田市	円・78m	7 c				○					漆塗棺
霞ヶ浦エリア												
宮中野大塚	茨城県鹿嶋市	帆立貝・92m	7 c中	○（銀装）			○					最大の帆立貝式
その他の地域												
向山 1号	島根県松江市	方・20×32m	TK209	○（銀装）				○		○		2 段築成
船原遺物埋納坑	福岡県古賀市	方円・42m～	TK209						○	○		木製漆塗弓10～12張
C2類（金銅製）												
東京湾エリア												
野々間（内裏塚古墳群）	千葉県富津市	方・19.5m	TK217				○					
亀 塚（内裏塚古墳群）	千葉県富津市	方・37m	7 c中？								○	群 2 位の規模
割見塚（内裏塚古墳群）	千葉県富津市	方・40m	7 c後							○		千葉最大の切石横石室
かろうと山	神奈川県横須賀市	円	TK217									
江奈 2 号	神奈川県三浦市	横穴	TK217	○（金銅装）								
大蔵寺	神奈川県厚木市	横穴	—									
利根川上流エリア												
足利公園10号	栃木県足利市	円										
諏訪神社	群馬県藤岡市	方円・57m						○				
大應寺	群馬県高崎市											
奈良古墳群	群馬県沼田市											出土古墳の詳細不明
霞ヶ浦エリア												
風返稲荷山（石室前室）	茨城県かすみがうら市	方円・78m	TK217		○	○		●		○	○	大刀・馬具はTK209か
龍角寺浅間山	千葉県栄町	方円・78m	TK217	○（金銅装）	○				○	○		漆塗棺
その他の地域												
小申田18号	福島県いわき市	横穴		○（金銅装）								
滝の平A1号	愛知県豊橋市	円・12m	TK217				○					
【凡例】 倭：倭装大刀 袋：袋頭大刀 環：環頭大刀 倭装大刀の●：握り環頭大刀 鉄鍔の●：三角穂式鉄鍔												

【凡例】 倭：倭装大刀 袋：袋頭大刀 環：環頭大刀 倭装大刀の●：振り環頭大刀 鉄鍔の●：三角穂式鉄鍔

ら後期中葉に位置づけられるため、ここでは触れない。

A類）銅製 B類）金属板を巻いた合せ目を鉄留するもの

C1類）銀製のうち、鉄留しないもの C2類）金銅製のうち、鉄留しないもの

A類の盛行時期を第1段階（田中Ⅰ期）、B類の盛行時期を第2段階（田中Ⅱ期）、C類の盛行時期を第3段階（田中Ⅲ期）とするが、ここで問題なのは、C1類とC2類の材質差が何を示すのかの判断である。

ここで、金鈴塚古墳例の雲気文状に挟る袋端部に注目する〔図119-1・1'〕。これは、仏教やヒンドゥー教において世界の中心にあると考えられる想像上の山・須弥山を彷彿とさせる造作である。同様の造作は、同じ木更津市域の丸山古墳から出土した銀装刀子の鞘口金具、鞘中金具、鞘尻金具にもほどこされる。この銀装刀子は鍔に線彫をほどこすもので、八幡観音塚古墳の銀製唐草文透鞘金具と同様の脈絡で理解できよう。いずれもTK209型式期に位置づけられる。

いっぽう、向山1号墳、かろうと山古墳、小申田18号横穴例のように、端部に別造りの波状金具をつけるものは波の形状が単調であることから、金鈴塚古墳例に後続するとみられる。以下、こうした仮説のもと、C1類とC2類が出土した古墳の年代観を確認する。

C1類が出土した八幡観音塚古墳と金鈴塚古墳は、それぞれの地域における最終末の大型前方後円墳であるほか、旋回式獣像鏡系倭鏡、銀装圭頭大刀、銀装鶏冠頭大刀、石突をとまう三角穂式鉄鉾、小札甲、花形鏡板・杏葉、銅鏡、桃核の出土など、多くの共通点がある。出土須恵器はTK209型式を主体とする。

このうち、鶏冠頭大刀、銀装圭頭大刀〔大谷晃2014〕、銅鏡〔桃崎2000〕、花形鏡板・杏葉〔桃崎2012〕は、八幡観音塚例が古く金鈴塚例が新しい。鉄鉾・石突と小札甲〔内山2003、鈴木2010〕は順序が逆の可能性がある。八幡観音塚古墳の小札は、崇峻5年（592）に埋納された奈良県飛鳥寺塔心礎出土品と類似し、TK209型式期古相に位置づけられる。

第3段階の金属製弓弭は、C1類とともなうおもな武器や馬具の編年観から、船原・八幡観音塚・金鈴塚・房子塚がおおむね並行し、これに向山1号墳、宮中野大塚古墳、八幡山古墳がつづく。

C2類のうち、C1類の金鈴塚古墳例のように下端部を抉るものが、風返稲荷山古墳横穴式石室前室で出土している。共伴須恵器はTK217型式に位置づけられる〔日高2000b〕。弓弭は下端部を三角形に抉り、金鈴塚例よりも形骸化したものだろう。向山1号墳例と並行するならば、鉄鉾・石突の変遷観とも矛盾しない。

かろうと山古墳や小申田18号横穴の事例は、金銅製弓弭の袋端部に円環を介して波状の環をつける。かろうと山古墳から出土した脛は位置づけがむずかしいものの、TK209型式よりもあきらかに新相を示す。

以上より、かならずしも明確に線引きできるわけではないものの、第3段階はおおむねTK209型式期に銀製弓弭が盛行する古相、TK217型式期を中心に金銅製弓弭が盛行する新相に区分できる。古墳時代以降の事例である法隆寺や正倉院宝物梓弓第1号、鶴岡八幡宮に伝わる国宝・朱漆弓にとりつけられた金銅製弭は、時代がはるか先とはいえ、こうした変遷観の延長線上で理解できるものだろう。

第3項 金属製弓弭副葬古墳の性格

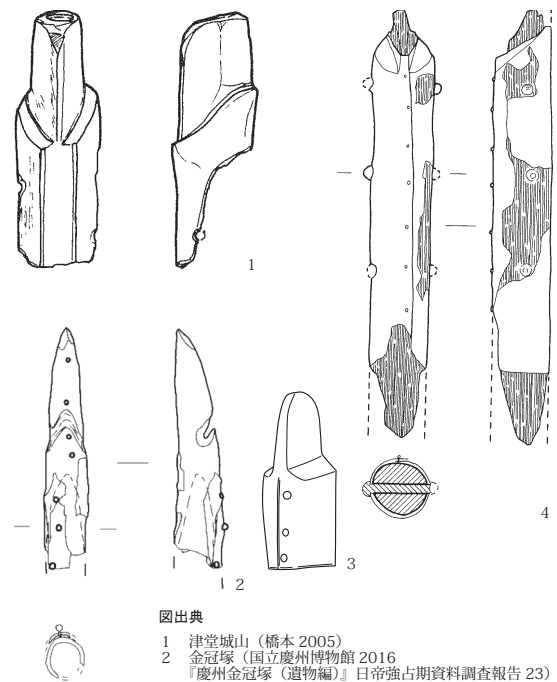
金属製弓弭C類を副葬する古墳の性格を、分布の観点から考える〔図121〕。

C類は、西日本では船原古墳や向山1号墳でも出土しているものの、東日本での出土事例が大半を占める。

東日本のなかでも分布にはおおきく二相ある。すなわち、集中地帯である千葉や群馬では、副葬古墳の多くが前方後円墳や終末期方墳であるのにたいし、周縁には江奈2号、小申田北18号などの横穴墓がみられる。

関東はさらに、三つの集中地域に分かれる。すなわち、房総半島と三浦半島を含む東京湾周辺、埼玉から群馬にかけてひろがる関東平野の利根川上流沿岸、および茨城県霞ヶ浦周辺の三地域である。いずれも関東を代表する水系を臨む立地に、局地的に展開する。

ただし、C1類が主体となる金鈴塚古墳と八幡観音塚古墳のある東京湾・利根川上流エリアにたいして、



図出典

- 1 津堂城山（橋本2005）
- 2 金冠塚（国立慶州博物館2016
『慶州金冠塚（遺物編）』日帝強占期資料調査報告23）
- 3 池山洞47号（田中新史2006再トレス）
- 4 箕田丸山（福岡大学考古学研究室2004
『長崎県・景華園遺跡の研究
／福岡県京都郡における二古墳の調査
／佐賀県・東十郎古墳群の研究』）

図118 金属製弓弭A・B類の諸例

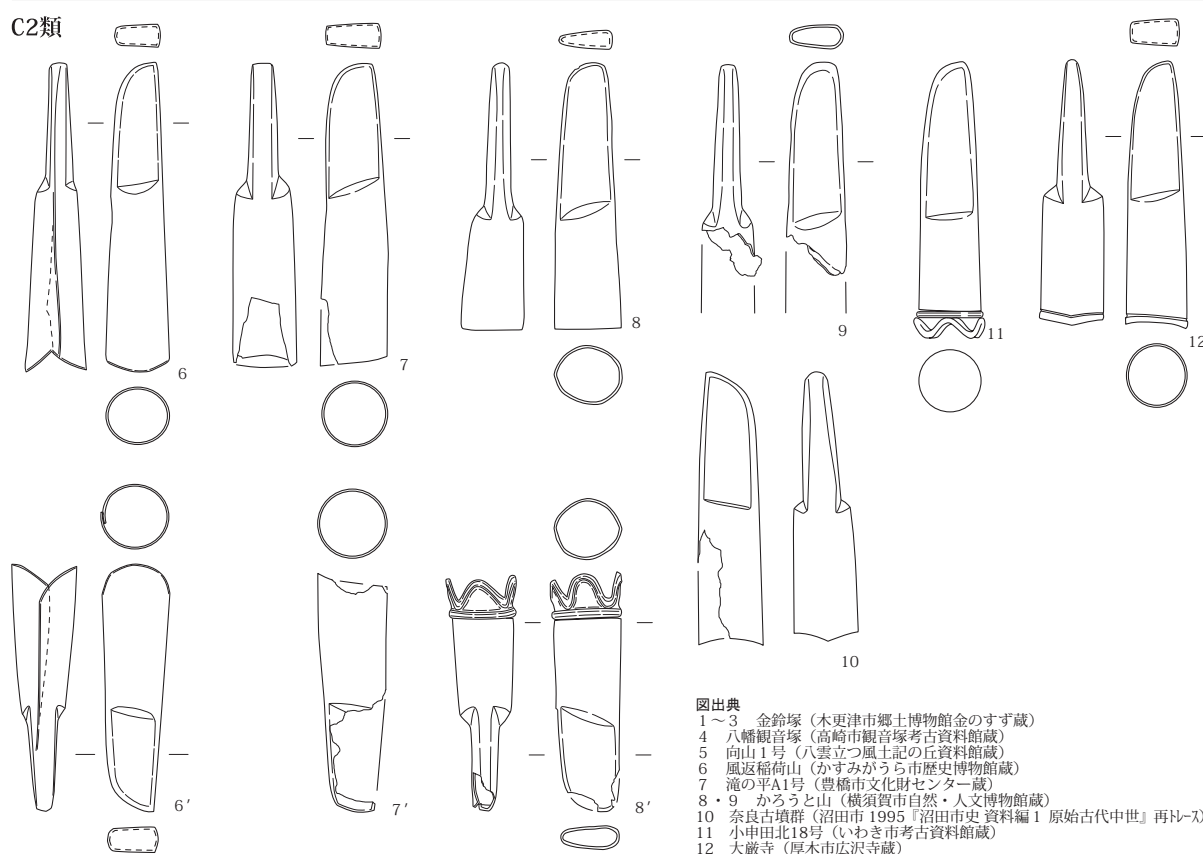
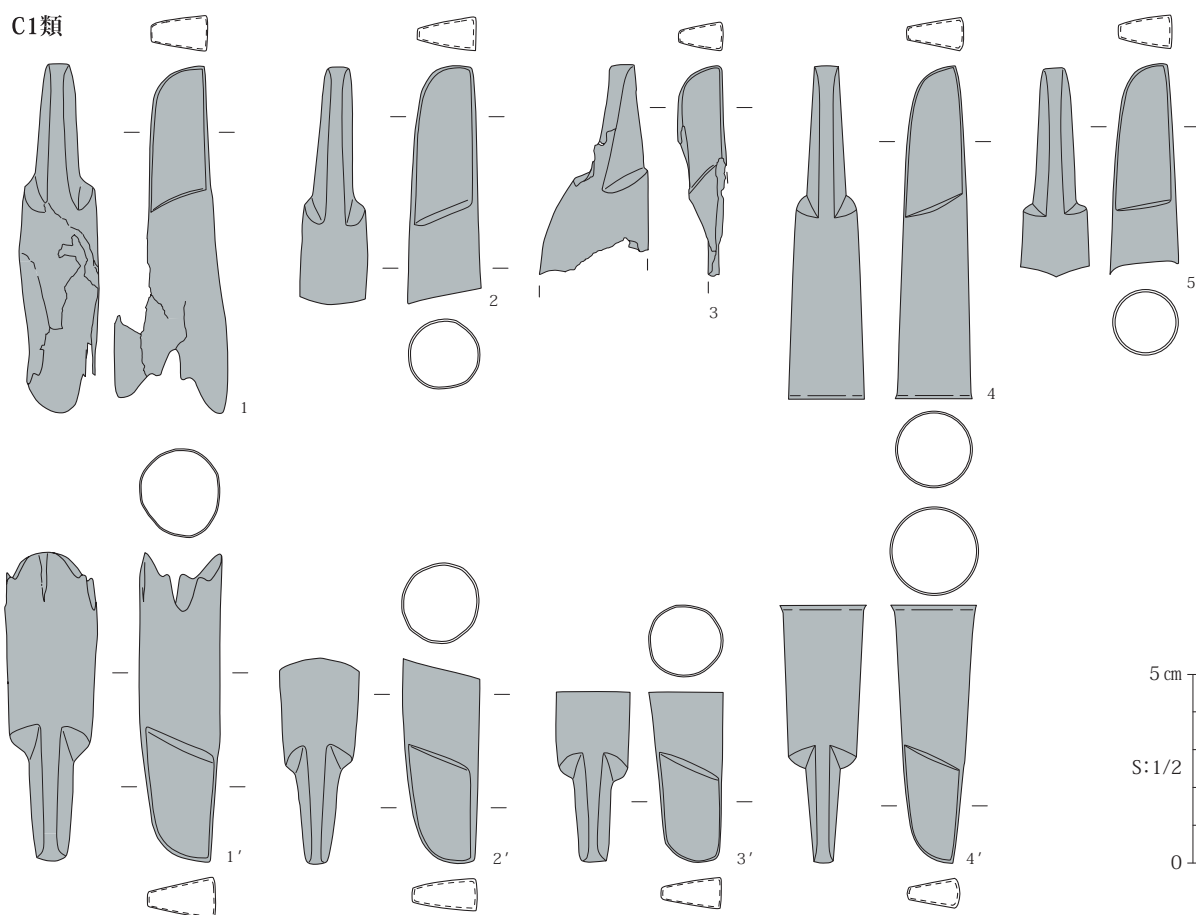


図119 金属製弓矢C1類・C2類の諸例



図120 金鈴塚古墳の銀製弓弭と銀装両頭金具

C2類が主体となる霞ヶ浦エリアは後発する。すなわち、各エリアで最古段階あるいは最上位に位置づけられる金鈴塚古墳、八幡観音塚古墳、風返稲荷山古墳では、須恵器の無蓋高坏、台付甗、台付長頸壺、瓶類が共通して出土しており〔図122〕、金鈴塚古墳と八幡観音塚古墳例がともにTK209型式の範疇におさまるのにたいして、風返稲荷山古墳例はより新しいTK217型式期に位置づけられる〔日高2000b〕。なお、脚（台）付須恵器を副葬する古墳は、墳丘形態にみる古墳序列の上位に位置するという指摘がある〔寺前2005〕。こ



図121 金属製弓矢の分布

うした葬送儀礼の類似からも、この三古墳が各エリアにおいて有力な位置を占めていたことがわかる。

それと同時に、このような分布状況は関東一円において重要視された地域が時期を追って変化ないし広域化したことを示す。内裏塚古墳群における3基の終末期方墳で系累的に副葬されたこともまた、金属製弭をともし弓の保有原理に地域性がはたらいていたことの証左となろう。また、内裏塚古墳群周辺と東京湾を挟んで互いに視認できる三浦半島にも金属製弓弭出土古墳が3基存在することは、東京湾沿岸の有力者集団が金属製弓弭保有の伝統を比較的長期にわたって堅持していたことを示す。

金属製弓弭出土古墳の形態は、第3段階古相には大型前方後円墳が多いが、第3段階新相には円墳、方墳、群集墳、横穴墓から出土する。これは、銀製弓弭の生産と流通につよい規制がはたらいていたのにたいして、金銅製弓弭の保有は比較的緩和であったことを示す。

なお、少数ながらも西日本でも確認されるからといって、直截的に倭王権とのつながりのみによって説明することはできない。なぜならば、確実な工房跡を検出しないかぎり第一に注目しなければならないのは「分布の核」であり、C1類のなかで最も装飾性がたかく、かつ最多の副葬数を誇る金鈴塚古墳から関東一円に拡散する流れを重視すれば、金属製弓弭が表象する地縁がつないでいたのは関東の有力者集団にほかならないからである。金属製弓弭文化圏にない船原古墳周辺の諸集団が、船原古墳の銀装弓をみても、それが何を表象するのか知覚できないだろう。現代日本人が米軍の階級バッジをみても、その意味を何も理解できないのと同じ理屈である。したがって、金属製弓弭C1類の発信源が倭王権であれば、船原古墳の騎兵に関東の大型前方後円墳被葬者と同程度の軍事権を保証したとみなせるいっぽうで、関東の有力者が北部九州に派遣された可能性もまた、じゅうぶん提示に耐えうるのである。



図122 金属製弓弭出土古墳の須恵器

第5節 結 語

金鈴塚古墳から出土した銀装武器がもつ特異性を、次の6点にまとめる。

- ①鶏冠頭大刀は4古墳6振が知られ、そのうち半分（うち一振は金銅装）が金鈴塚古墳に副葬された
- ②鞘，銀装具，先端の膨らんだ石突をそなえた三角穂式鉄鉾は，金鈴塚古墳例のみである
- ③金属製弓弭をとまう弓の出土数は金鈴塚古墳が最多であるとともに，C1類の最古事例とみられる
- ④丸山古墳から出土した銀装刀子の装具のデザインを介して，銀製弓弭と銀装刀子が近い工房で作られたか，似たような性格をもっていた可能性がある
- ⑤銀装武器およびそれに準じる武器の多くは，関東を中心とする東日本で出土しており，そのなかでもすべて揃えているのは，金鈴塚古墳のみである
- ⑥金鈴塚古墳では，広域流通形式である片刃長頸鏃，小札甲，堅矧広板鉾留衝角付冑，鉄製・金銅装馬具など，倭王権が発信したとみられる後期的武装様式も完備するが，銀の武装は東日本の有力首長層をつなぐ身分表象財であることを重視すべきである

鶏冠頭大刀や三角穂式鉄鉾出土古墳の多くが臨海性に秀でた立地にあることを思い起すとき，こうした白銀の武装は倭王権中枢部とつながる威信財的要素であると同時に，東日本の有力首長層をつなぐ身分表象財でもあったと評価できるだろう。

金鈴塚古墳ではこれらのほかにも，小札甲，堅矧広板鉾留衝角付冑，金銅装馬具も出土していることから，後期的な武装様式の最上位層に位置づけることができる。類例の少ない「一点モノ」の装飾大刀や甲冑，馬具が多く出土した群馬県高崎市綿貫観音山古墳と比べると，金鈴塚古墳の武装具は全国的に規格化されたデザインのものが多いことも特徴の一つといえるだろう。むろん，副葬されたすべての武器や馬具を一人で装備したとはいえないが，広域流通形式の武装は，東国における大首長としての権威づけにとどまらず，倭王権の機構のなかでも高位に位置していたことを示す。同じ木更津市内の中期古墳である祇園大塚山古墳から出土した金銅製眉庇付冑とあわせ，近現代に陸上交通が整備されるはるか以前の当該地域は，東京湾沿岸の港を介して交通のひらけた，まさに房総への玄関窓口であったことに，あらためて思いいたらされる。

さらに，舶載品とみられる精巧なつくりの単龍環頭大刀や獅嚙環頭大刀の保有は，東アジア世界との交渉にも一定の利権をもっていたことを示す。その活動実態を描くことはむずかしいが，金鈴塚古墳のあるじは倭王権のなかでも相当の役割を果たしつつ，独自の財体系を掌握することによって，東国経営の中心に立っていたことは間違いないだろう。

以上のような複雑な情報の交点こそが金鈴塚古墳被葬者のアイデンティティと評価しうるが，その基層基盤は房総から常陸，あるいは武蔵にかけての交流の掌握にあった。金鈴塚古墳から出土した銀装の武器は，東京湾沿岸から太平洋沿岸におよぶ首長間交流の覇者にふさわしい「いぶし銀の輝き」を放っている。

註

- 1) 【木彫銀（金）張り技法】「あらかじめ木に文様を彫り込んでおき，そこに金銀の薄板を被せて何らかの方法で板を押し込む技法」〔勝部・鈴木 1998：p.215〕

終章 北部九州における武器保有の実態

以上、2部9章にわたって古墳時代の武器の系譜と、日本列島東西の境界領域における武装のありかたを論じてきた。とくに第Ⅱ部をつうじて、すくなくとも列島の東西端においては武器の流通動態に違いがあることがわかった。こうした状況を念頭におきながら終章では、古墳時代後期の武器研究へたいする以下第1節のような問いや仮説について北部九州を事例とした理論と実践で応え、本論全体の結論とする。

第1節 問い — 既存学説へたいするささやかな抵抗 —

第一に、古墳時代後期の武装具保有は、すべて倭王権中枢部を頂点、あるいは中心とした上意下達の論理によって説明できるのだろうか。

近年、古墳時代中期を代表する帯金式甲冑の属性分析を最大限にまでたかめ、その系統を整理した川畑純は、導入当初の甲冑生産と流通は独占的に掌握されていたのにたいし、新来工人集団の掌握と組織化をへて、複数工房による生産および各工房を掌握する集団による各地への配布体制が構築されるという解釈を示した〔川畑2018〕。大阪府野中古墳の発掘調査を担った北野耕平の研究以来〔北野1969〕、倭王権による一元的な生産と配布が論じられてきた中期の甲冑について、複数勢力による具体的かつ多元的な配布モデルが提示されたのである。

ただし、川畑によるこの研究は従来の甲冑研究の成果を否定するものではなく、むしろ最新の型式学的研究をふまえたうえで批判的に発展させたものと評価すべきである。それでも、中期社会を特徴づける甲冑の流通モデルが構築しなおされたいま、より多様な後期の武装具保有の意味についても、社会の上部構造が府官制的秩序や人制から、ミヤケ制や部民制、国造制へ変化することをふまえつつ再検討する必要があると考える。これに先立つ川畑の研究〔川畑2015〕もふまえて予想するならば、中期後半を境として「量的格差表象システム」から「質的格差表象システム」¹⁾へ転換する古墳時代の財体系を、一貫した論理で説明することはできないはずだからである。

第二に、墳墓の形態や規模、武装は、どこまで被葬者の階層的位置を表すのだろうか。

新納泉による群集墳の階層モデルや〔新納1983〕、都出比呂志による「前方後円墳体制」が提唱されて以来〔都出1991〕、あたかも墳墓の形態や規模と武装の充実度が比例していることを前提とした言説が多くみられる。しかし実際には、後期後半・末の北部九州の群集墳と、関東の大型前方後円墳に共通して副葬される武装具は多く、最新の研究成果をふまえた地域編成モデルの構築が求められる。

第三に、古墳時代の武装具はすべて「威信財」といえるのか。

穴沢味光が経済人類学における「威信財システム」の語を日本考古学に紹介して以来〔穴沢1985ab〕、その定義が曲解され、さまざまな金属製品や石製品が「威信財」として説明されてきた。たほうで、古墳時代の財の多様性にかんする議論も多く〔鈴木一1999、内山2000、下垣2010、辻田2006など〕、鈴木一有は、ある物品を威信財として認めるための条件として、①分布の中核が生産や流通を管理していたこと、②一定の規格化がすすんだものが有力な古墳に特権的に副葬されることを示す必要性の2点を簡潔に提言する〔鈴木一2003c〕。ただし、「これは威信財でない」と判断するばあいには、それ相応の対案を示す義務があるといえるだろう。

第2節 仮説 — 武器のデザインとは何か —

第I部の分析をつうじて、古墳時代の刀や鉾は、かならずしも多くはない型式（type）分類のなかで円滑な変遷を遂げるばあいが多いことを示した。そのような広範かつ円滑な変遷を示すこと自体が、倭王権が一元的に武器を生産した根拠、といえはそれまでだが、それでもなお、ほかの資料と一線を画す個性豊かなデザインの資料群が存在する。端的にいえばそのデザインの違いこそが考古学の形式（form）にあたる。物理的な機能は同じでもデザインが異なる背景には、複雑で錯綜した意図が反映されているはずである。

鉄器の生産力がたかく評価される古墳時代後期の北部九州のなかにも、宗像地域のように、前方後円墳が林立するとともに、全国的にみても比較的豊かな武装が重点的に配布される地域がある。そうした地域性は、装飾大刀や特殊鉄鏃、装飾馬具のデザインが明確に示す。これらには古墳時代人でも現代人でもその違いを認識できる、明確なデザインの差があるからにはほかならない。しかし、全国的に規格化された簡素なつくりの刀身や鉾には、保有そのものに階層的優位性を認めることはできても、保有者の性格の違いを読みとることはむずかしい。こうした武器のデザインの差は何を示し、そして何を読みとることができるのだろうか。

そもそも、保有自体に社会的優位性が反映される規格性のたかい刀剣や鏃、甲冑は、古墳時代中期には成立していた。同質な武装の授受や共有が倭王権との紐帯を示し、そうした武装をより多く保有したり加飾したりすることを高位な社会的地位として承認する仕組みが、中期的な武装の本質である〔橋本達2016〕。

たほう後期的な武装の本質は、複数形式の大刀や馬具をもちいて、保有者の性格を明示する仕組みにある。人制から、国造制、ミヤケ制、部民制へという、社会構造の複雑化と関連する問題であろう。とくに筆者は、装飾大刀の諸系列こそが、そうした多様性を端的に示す後期的な武装の核であると理解している。

装飾大刀の保有にかんする町田章や橋本英将の理論〔町田1976・1988、橋本英2014〕を抽象化すると、基本構造は共通しつつも、装飾の度合いや象嵌の有無による階層性をもつ倭装ないし袋頭大刀の諸系列は、現在の自衛隊や警察官、消防士、国境警備隊、海上保安官などのバッジと似た機能をもつ。有事の最前線に立つ者は、序列を明確化した命令系統に従って行動するために階級が定められる。その階級を誰もが知覚できるように、こうした仕様の差別化が必要なのである。

これにたいして、保有自体が社会的な優位性を示すものの、形式ごとの仕様の違いが不明瞭な環頭大刀は、弁護士や議員の記章、医師免許などを彷彿とさせる。または、得意な外交先などを示したパスポートのような機能も想定できるだろう。生産をはじめとする特定の活動を担う集団や、特定の交流網をもつ集団の統括者に特定形式の環頭大刀を配布したと仮定すれば、複数形式の環頭大刀が共伴する事例が少ない理由を説明できる。

ただし、これらが一元的な生産と流通によるものなのか、また、特定の氏族や部などを象徴するものなのかは次元の異なる議論であり、より多くの地域研究をふまえたうえで検証すべきだろう。特定形式の武装具が集中する地域で特定の氏族が特定の仕事を担当していれば、間接的に「●●形式の武装具≡▲▲氏」という図式が成り立つからである。しかし実際には、時期の違いや共伴、追葬関係、被葬者が生前に属したさまざまな履歴や形見分け、伝世などによって、これらが複合的にみえることのほうが多く、この図式が古墳被葬者の評価に直截的につながるわけではない。ましてや、これが全国的に普遍化できるのかについては、各地域の事例研究をすりあわせたうえで議論する必要がある。そうした分析をつうじてはじめて、武器供給の実態や地方経営のありかたをあきらかにできるだろう。

以上のような問いと仮説、展望のもとに第3節、第4節では、北部九州における装飾性のたかい武器が果たした役割とその背景の評価に臨む。前章までの記載との重複も多いが、本論全体のまとめとして詳述する。

第3節 実態 — 北部九州における武装の特質とその背景 —

第1項 認識の転回

九州の古墳からは百数十振の装飾大刀や約1,000組の馬具セット、200例ちかい甲冑が出土している。とりわけ福岡は、このいずれにおいても全国有数の集中地域として知られる。その理由について「東アジア諸国との対外交流窓口だから」と答えるのはたやすい。しかし個々の事情に即してみると、こうした言説にも有効である部分と、そうでない部分がある。

たしかに当該地域は、日本列島のなかで朝鮮半島に最も近い。しかしながら、初期舶載品の三葉環頭大刀は、福岡県若八幡宮古墳、大分県上ノ坊古墳のほかにも、奈良県、福島県で各1例が知られる。列島最古の舶載単鳳環頭大刀も、5世紀の山形県大之越古墳例をはじめ、奈良県石上神宮禁足地・大阪府石切箭神社蔵・靖国神社所蔵伝群馬県倉賀野古墳の同工品3点などがある。福岡県雷山の舶載双鳳環頭大刀も滋賀県鴨稲荷山古墳に類例があり、刀剣の舶載にあたって、かならずしも九州の絶対的優位性を見出すことができるわけではない。日本列島における外来系環頭大刀の受容におおきな時期差や地域の重心、つまり北部九州や近畿の勢力が一元的に受容、再分配したとみる根拠はないのである〔図123〕。東北南部から九州までの各地の有力者が独自の交流をつうじて単発的に入手したと考えるのが自然な解釈だろう。

北部九州への武器集中の特質は別のところにある。第一に、中期の帯金式甲冑にともなう刀剣の大部分は倭風のもので占められ、半島系大刀出土古墳とは排他的な関係にあること、第二に、中期段階の新羅系環頭大刀の受容にかぎってのみ、西日本、あるいは北部九州の優位性がみられること、第三に、磐井の乱以降の北部九州では、新形式ないし新系列の倭製装飾大刀が早い段階で配布されることである。

以上のような北部九州の刀剣がもつ歴史的特質を古墳時代史全体の叙述に寄与できる点は何か、と考えたときにまず思い浮かぶのは、やはり「磐井の乱」とその戦後処理としての地域再編だろう。屯倉は倭王権の直轄地であるから、乱を前後して、当地の武装にも何らかの変化が生じたと想像する。以下、古墳時代の武装の展開を3段階区分し、各段階における北部九州の武装の特質を抽出する。

第2項 画期と諸段階

第1段階 — 中国大陸系刀剣・甲冑の舶載 — 〔図124左〕

福岡県域の藤崎遺跡第3次調査6号方形周溝墓、若八幡宮古墳、一貴山銚子塚古墳の環頭大刀は舶載品とみられる。若八幡宮古墳では方形板革綴短甲が出土しており、環頭大刀と組みあわせた前期最上位の武装を示す。また、豊前地域では、小札革綴甲冑が近畿について特異な集中をみせる。中国大陸から北部九州へ直接もたらされたか、あるいは畿内の有力首長へ賜与された大刀、甲冑を北部九州の有力者が再分配するような、まさに威信財システムそのものの枠組みで理解できる。

ただ、最近では福岡市博多遺跡群での鉄器生産、武器生産論が高揚の兆しにある。今後の発掘調査はもちろん、「例外」として等閑視されてきた過去の調査成果にも目配りしながら、より資料の実態に即した生産・流通モデルを模索すべき重要な課題といえるだろう。

第2段階 — 倭装刀剣と帯金式甲冑の成立・普及 — 〔図124右〕

第2段階最大の画期は、中国大陸や朝鮮半島からの舶載品とは異なる次元での、倭装刀剣および帯金式甲冑の安定した規格大量生産・配布体制の達成である。ただ、そうしたなかにあっても、大阪府津堂城山古墳や福岡県鋤崎古墳に代表される中期初頭においては、長方板革綴短甲と素環頭大刀の組みあわせがみられる。中期初頭は、いまだ外来系の武装体系の模倣に頼らざるを得ない状況にあったのだろう。

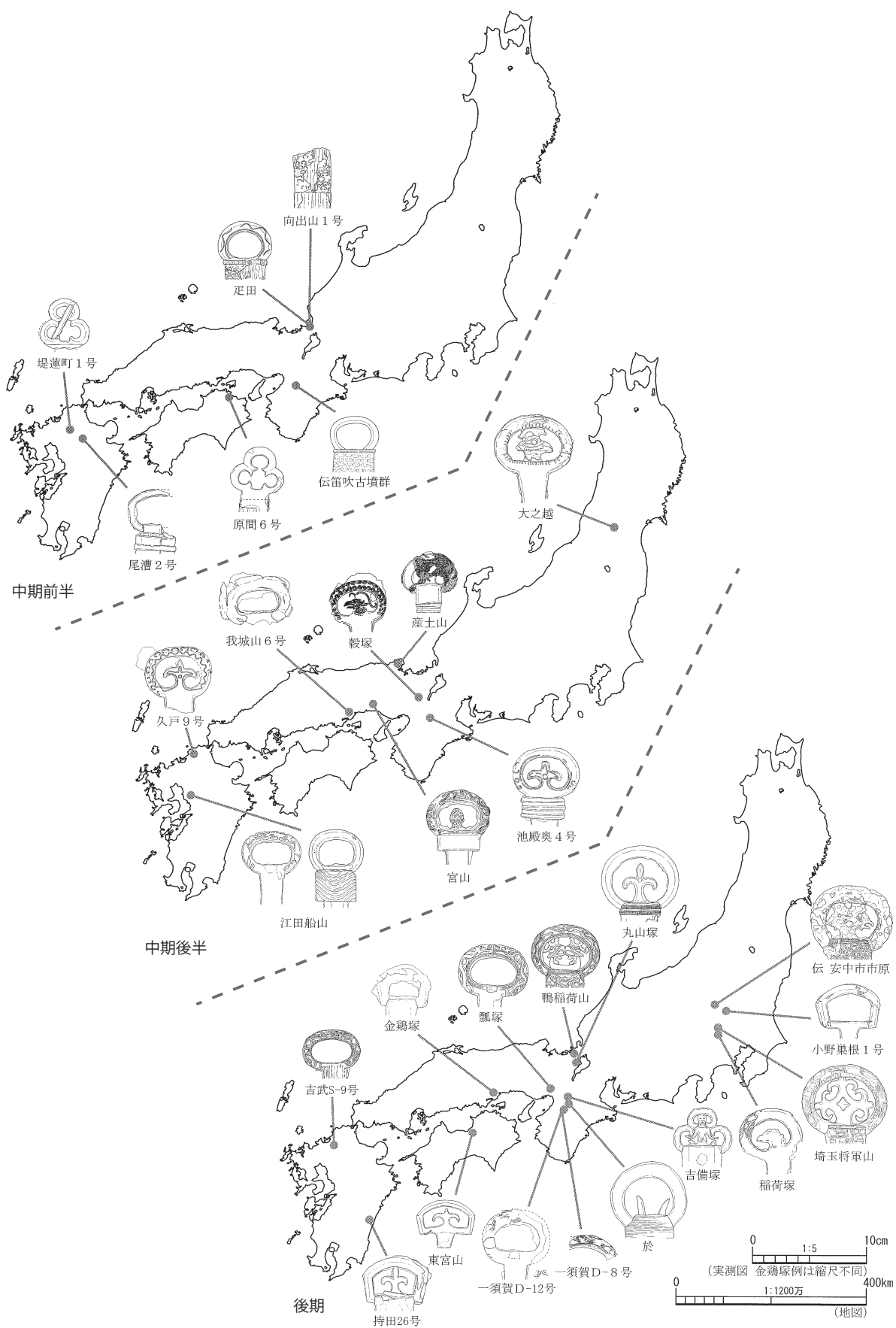


図123 船載金銀装環頭大刀の分布 [金字大2017を基に構成]

わせは、大阪府百舌鳥古墳群の城ノ山古墳（TK216）にもみられ、倭王権中枢部を規範とした鉄鉾の保有形態といえるだろう。また、朝鮮半島との交流のなかで成立したとみられる長身鎬式鉄鉾や刀身式鉄鉾などの中期型鉄鉾が北部九州に集中するありかたも、対半島政策にかかわる雄略朝の武装整備として評価できる。

第3段階 — 倭装大刀を頂点とした身分秩序の複雑化段階 —

古墳時代中期の北部九州において、新羅系の文物が散見される状況を磐井の乱前史として評価した。いっぽう、装飾性豊かな武器や馬具が保有者の身分や職掌を示すものであるならば、磐井の乱後処理としての地域再編、すなわちミヤケや国造制の設置をつうじて武装の様相にも何らかの転換があったと考える。以下、当該期の北部九州における特徴的な武器出土古墳の様相をみてみよう。

1. 装飾大刀 [表14]

ここでは、おおきく倭装大刀と袋頭大刀、環頭大刀の三系統に分けて論議する。

倭装大刀 筑紫君磐井の寿墓である福岡県岩戸山古墳は、真の継体陵と目される今城塚古墳と墳丘規格を共有し、振り環頭大刀形石製表飾、尻繫に三葉文楕円形杏葉を模した石馬、鞍負の武装石人を樹立する。振り環頭大刀や大刀形外表（石製表飾、埴輪）を樹立した古墳の規模は、岩戸山古墳が最大であるとともに、石製表飾を有する古墳のなかでは数量、種類ともに最多である。このうち大刀形と石馬は、乱以前の磐井と継体の政治的紐帯を表している。大刀形石製表飾は、実物の振り環頭大刀出現初期に多いR型振り環や三輪玉、勾革上部裏面の直弧文板を表現し、同時期の峯ヶ塚古墳例と対比できるこの石製表飾の工人は、実際の振り環頭大刀の構造を知る者であり、かつ磐井自身が振り環頭大刀を所有していた可能性がある [第7章]。

その後、後期中葉までに箕田丸山古墳や山の神古墳、桂川王塚古墳、朝日天神山1号墳、国越古墳など、九州中部以北の有力墳に副葬され、後半までに2振目を副葬する事例が多い。近畿以外で振り環頭大刀の複数副葬古墳が集中するのは九州だけである。山の神古墳や桂川王塚古墳など嘉穂盆地への集中は、穂波屯倉や鎌屯倉の設置を想起させる。そのばあい、磐井の乱後の地域再編をへて倭王権との連携を更新できた次世代の首長に2振目が配布されたと評価できる。後半・末には双六古墳、鬼の窟古墳、妙泉寺7号墳など、壱岐島に集中する。

関東・東北では、後期前半の古海原前1号墳、築瀬二子塚古墳、後半の綿貫観音山古墳など、利根川上流域の西毛に集中する。広域拡散は九州よりも遅く、後半・末の埼玉將軍山古墳、法皇塚古墳、松面古墳、龍角寺浅間山古墳が各地域の最古事例である。東国の振り環頭大刀は、各地の横穴式石室の導入や在地の首長系譜に連ならない新興勢力の登場と連動しながら、千葉から福島南部にかけて東漸する。なお、新式の横穴式石室と連動するうごきは愛媛県東山鷲ヶ森2号墳などにも認められる。振り環頭大刀の流通は、後期をつうじて倭王権の地方進出と連動したと評価できるだろう。

袋頭大刀 東日本の有力者は頭椎大刀や圭頭大刀を重視する [内山2018]。九州では、後期後半以降の大型墳が多い宗像・福津・古賀に、金銅装袋頭大刀が集中する。後期末から終末期に位置づけられる宮地嶽古墳では、日本一巨大な復元全長約3mの金銅装頭椎大刀の残欠と、通有の大きさの金銅装頭椎柄頭が出土している [図80-1・2・4・5]。円頭大刀や圭頭大刀は円墳や横穴から出土する傾向があり、袋頭大刀のなかにも、頭椎を上位、円頭・圭頭を下位とする階層性がうかがえる。

鉄製の鍬や鐔などに象嵌する大刀の多くは、柄頭は失っていても本来は倭製の袋頭大刀に連なる可能性がたかい。善一田古墳群（窯業・鉄生産）や牛頸梅頭1号窯（窯業）、鋤崎古墳群（鉄生産）などの銀象嵌大刀は、窯業や製鉄といった部民的活動の統括者を表象する [第8章]。そのためであろうか、象嵌大刀は全国各地で600振以上の事例が知られ、特定の集中地域を形成しない。

なお、金銅装袋頭大刀と銀象嵌袋頭大刀には明確な主従関係がない。軍事と生産、社会の上部構造と下部構造などの緩やかな反映とみる。

表14 北部九州の装飾大刀出土古墳

	倭装大刀	環頭大刀	袋頭大刀
前方後円墳	筑後・岩戸山（墳丘長138m）〔石製表飾〕		
	杵岐・双六（91）〔振〕▲●	〔単鳳※〕	〔方頭※，鶏冠頭〕
	筑前・桂川王塚（86）〔振×2〕●◆		
	筑前・山の神 追葬（80）〔振〕●		
	肥後・国越（63）〔振×2〕	筑後・乗場（60）〔単鳳〕●	
	筑前・日拝塚（46）〔鋪本孔鉄刀〕●	〔単鳳※〕	
		筑前・剣塚1号（40）〔三累※〕	
円墳	豊前・箕田丸山（37）〔振×2〕▲●	〔単鳳※〕	
	筑後・釘崎3号（35）〔長大な鉄刀〕	〔単龍〕	
	豊後・（伝）朝日天神山1号（33）〔振〕●		
	杵岐・鬼の窟（45）〔振〕		筑前・宮地嶽（34）〔頭椎〕●
	肥後・打越稲荷山（30）〔振〕●	豊前・岩見大塚（22）〔単鳳〕● 筑後・東濃施（22）〔三累〕	筑後・塚花塚（30）〔象嵌円頭〕 豊前・黒部山3号（22）〔圭頭〕 筑前・湯湧2号（22）〔圭頭〕 筑前・浦江SO03（21）〔象嵌円頭？〕 筑前・平等寺向原Ⅰ-1号（20）〔円頭〕 肥前・神山（20）〔圭頭〕
		筑前・西堂古賀崎（20）〔単龍〕● 筑後・中原狐塚（19）〔三累〕	筑前・山王山（18）〔象嵌円頭〕● 筑後・鈴ヶ山2号（18）〔象嵌円頭〕 筑前・竹原（17）〔圭頭×2〕● 筑後・童男山12号（16）〔圭頭〕 筑前・善一田2号（15）〔袋頭〕 筑前・原田6号（15）〔圭頭〕
	杵岐・妙泉寺7号（16）〔振〕	筑前・湯湧1号（16）〔単鳳〕 筑前・善一田26号（15）〔三累〕 筑前・津丸横尾（15）〔三累〕 肥前・上三津栗原1号（15）〔三累〕	福津・勝浦水押SO-01号（14）〔頭椎？〕▲ 筑前・代（13）〔圭頭〕 筑前・鋤崎A9号（12）〔象嵌袋頭〕 筑前・原3号（12）〔圭頭〕
		筑前・観音浦KS12号（12）〔三累〕▲● 筑前・八旗神社1号（10）〔双龍〕	筑前・久戸19号（8）〔圭頭〕
	凡例	方墳	筑前・元岡G-1号（18）〔圭頭〕▲
	1）墳丘の規模が不明なもの、伝世品は除外 2）※は、舶載品あるいは、各系列のなかで最古段階に位置づけられるもの 3）▲＝三角穗式鉄銚 ●＝金銅・銀装馬具 ◆＝甲冑 との共伴か同一古墳群での出土	横穴	筑前・池田1号〔頭椎，圭頭×2〕 豊前・竹並G121-1号〔圭頭〕 豊前・小牧西牟田B6-イ号〔圭頭〕 豊前・上ノ原51号〔圭頭〕 肥後・加茂22号〔方頭〕

環頭大刀 山陽の有力層は龍鳳環頭大刀を重視する〔内山2018〕。

北部九州では、舶載品や各形式の初期倭製品が中規模以上の前方後円墳に副葬される。後期後半に規格大量生産された龍鳳文環頭大刀が糸島半島周辺に集中するが、総じて龍鳳文環頭大刀は倭装大刀と共伴したり同じ古墳群から出土したりすることが多く（箕田丸山古墳，釘崎3号墳，石ヶ元古墳群，竹並横穴墓群など），それぞれが特定氏族を表象する大刀としては捉えにくい。

箕田丸山古墳の単鳳環頭大刀は、無文の銀装外環と塗金した環内飾が別造りであること、柄頭が責金具に食いこむこと、責金具の文様が菱形と珠文を交互に繰り返すことから、大阪府海北塚古墳例とならんで、6世紀の単龍鳳環頭大刀のなかで列島最古級に位置づけられる。また、無文の有凌外環は、新羅系の製作技術であることが指摘されている〔持田2010〕。外環にたいして環内飾りが小さく、角が外環から離れていること、3本の冠毛が分かれていること、顎鬚が長く先端がシャープであること、眉や頸毛が明瞭に造りだされていること、嚙んでいる玉が嘴の前にあり明瞭に造りだされることから、シンプルかつ精緻な造りの印象を受け、短い3本の冠毛が離れているのは武寧王陵の単龍環頭大刀とも類似する。

列島では有凌素環の含玉系単鳳環頭大刀の類例として、群馬県賀茂神社境内古墳出土例がある。大谷晃

二はこの資料を慶尚北道伝善山出土例に後続するとみるとともに、舶載品の可能性を指摘する〔大谷晃2004〕。さらに、善山例の類例に江藤正澄氏旧蔵資料がある〔後藤1928, 持田2010〕。江藤氏資料は、貴金具の文様が珠文を繰り返すもので、菱形文と珠文を繰り返す箕田丸山例よりも後出的な要素である。

以上を整理すると、含玉系単鳳環頭大刀の変遷は、①箕田丸山→②江藤正澄氏旧蔵資料・伝善山→③賀茂神社境内と理解できる。したがって、箕田丸山古墳の単鳳環頭大刀を倭製品とみる根拠は弱く、また近畿地方に類例がみられないことから、倭王権を介さずに朝鮮半島から直接入手した可能性を考えたい。

福岡県みやこ町伝彦徳横穴出土の単龍環頭大刀は、外環と環内飾りは一鑄で渡金するが、龍の牙や舌の細かい造作は列島出土品のなかでも屈指の作風である。鞘飾金具は長方形透かしを狭い間隔で2列に配する。鞘飾金具の透かし配置は、新納Ⅰ式の武寧王陵例が、連続する菱形文の隙間を鈍角二等辺三角形で充填する3列志向、Ⅱ式の海北塚古墳例は長方形1列で縦方向の間隔が狭いもの、Ⅳ式の釘崎3号墳例は長方形1列で縦方向の間隔がひろいものである。Ⅳ式段階には静岡県宇洞ヶ谷横穴例のように、心葉形透かしの系列が出現し、Ⅴ式では主流となる。これにあてはめれば、伝彦徳横穴例は武寧王陵と海北塚のあいだに位置づけられる。柄頭の位置づけとあわせ、Ⅱ～Ⅲ式の過渡期にあたるものだろう。製作時期はTK10-MT85型式期か。

福岡平野から佐賀平野にかけては、三累環頭大刀を副葬する小規模墳が多くみられ、西北九州の三累環頭大刀には在地生産品をふくむ可能性がある〔第8章〕。その分布は、磐井の乱後に筑紫君と肥君がむすびついた「筑紫火君」の居住領域とも重なる。新羅と独自に交流してきた北部九州の勢力が保有することによって、対外交渉権を表象したと考える。

三累環頭大刀は西三河（愛知県域）でも比較的多く出土するが、当該地は、横穴式石室の形態にみられるように北部九州や朝鮮半島とのつながりがつよい地域である〔鈴木一2006〕。西三河の三累環頭大刀も、石室と似たような情報網をつうじて北部九州からもたらされた可能性がある。北部九州にしても西三河にしても、流通の核となるような有力墳への三累環頭大刀の副葬や集積は認められない。広域に流通する武器＝倭王権を中心とする威信財、とはいえない好例である。

小 結 振り環頭大刀の全国的な最盛期は6世紀後半であるなか、北部九州ではそれよりもはやい段階で展開した。沖ノ島7号遺跡は別格としても、山の神古墳、桂川王塚古墳、箕田丸山古墳など近在する古墳での継続的な保有は過小評価できない。北部九州の有力首長層は倭装大刀（振り環頭大刀）を主、環頭大刀を副として保有する点において、有力首長が袋頭大刀を副葬する関東・東海東部、環頭大刀を副葬する山陰・山陽と異なり、近畿の様相とちかい。東アジア諸国との境界領域において、倭装大刀＝国内の身分表象、外来系大刀＝国際関係時の身分表象という図式〔町田1988, 内山2012〕がうまく働いていたと考える。

山の神古墳、桂川王塚古墳、箕田丸山古墳は後期中葉古段階には築造されており、安閑2年（535）の筑紫・豊国への集中的な屯倉設置の時期と重なる。箕田丸山古墳の振り環頭大刀2振についても、豊前地域に点する肝等屯倉（福岡県荏田町？）、我鹿屯倉（福岡県赤村？）、桑原屯倉（福岡県築城町？）などとの関連が想起される。くわえて、箕田丸山古墳から出土した単鳳環頭大刀は舶載品である可能性がたかいため、倭王権の秩序のなかで理解することはむずかしい。京都平野広域の地域経営を果たしつつ、対半島政策にもかかわった被葬者の一面を物語るものだろう。

桂川王塚古墳では彩色壁画や石屋形を有する横穴式石室を主体部することから、その被葬者は九州の在地勢力とみるのが自然である。そのような古墳の被葬者を中央からの派遣将軍と理解することはむずかしく、ひいては屯倉の経営には在地の有力者がかかわった可能性を示唆する。

2. 三角穗式鉄鉾

箕田丸山古墳や沖ノ島7号遺跡のほか、中田装飾横穴、綿貫観音山古墳、井田川茶白山古墳、河内愛宕塚古墳、上塩冶築山古墳、咸平新徳古墳などの有力墳で、振り環頭大刀との共伴がみられるほか、後期後半以

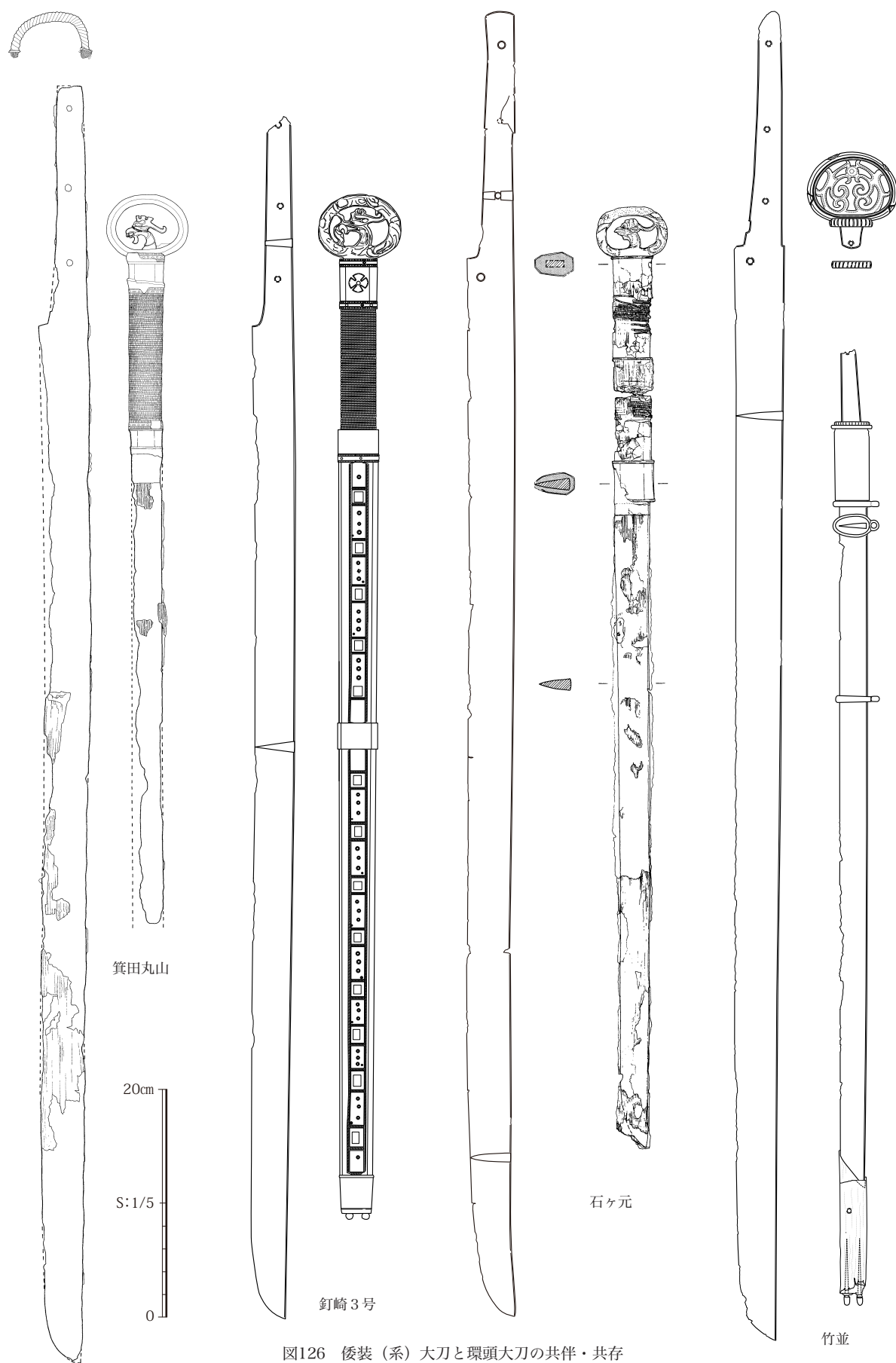


図126 倭装（系）大刀と環頭大刀の共伴・共存

降の三角穂式鉄鉾は、各地の最有力墳で複数本が出土する傾向にある。

北部九州では、沖ノ島7号遺跡や双六古墳をのぞくと、群集墳や横穴墓からの出土が多く、集積や再分配の核も認めにくい。むしろ、古代の官道や駅家と重なる位置に分布することに注目する。実際、桃崎祐輔が古代駅鈴の祖形と認識する古墳時代後期の銅鈴〔桃崎2019a〕と、三角穂式鉄鉾の共伴や同一古墳群での出土が、賤機山古墳、井田川茶白山古墳、上塩冶築山古墳、元岡G-6号墳、片縄山古墳群、双六古墳で知られる〔第5章〕。とりわけ、元岡G-6号墳の鈴は全国最大級であり、百濟製とみられる庚寅銘大刀、広域流通形式の長頸鉾、地域形式の飛燕式鉄鉾、実用に適した簡素な鉄製馬具との共伴とあわせ、交通の結節点を担う。

3. 特殊鉄鉾〔図127〕

後期の鉄鉾は、おおきく長頸鉾に多い広域流通形式と、平根鉾に多い地域型式に分かれる。広域流通形式には、全国で大量の出土が知られる片刃長頸鉾もふくむため、ここでは、より特徴的な形態と分布をみせる独立片逆刺長頸鉾、段違逆刺長頸鉾、反刃鉾に注目する。この3種の特殊長頸鉾は、互いに関連しながら派生したことが指摘されている〔鈴木一2003b〕。

広域流通形式長頸鉾 独立片逆刺長頸鉾（2・3）と段違逆刺長頸鉾（1・4）は中期後半、反刃鉾（3～5）は後期前半に出現し、いずれも各地の拠点的な古墳に副葬された。井田川茶白山古墳や上塩冶築山古墳では、反刃鉾と振り環頭大刀や三角穂式鉄鉾、鉄装鞍がともなう。

中・後期の福岡県域、とくに宗像・福津・古賀でも、福津市勝浦峯ノ畑古墳、同 勝浦井ノ浦古墳、同 新原奴山1号墳（50m）、宗像市スベットウ古墳などの甲冑を副葬する前方後円墳を筆頭として、宗像市浦谷古墳群や同 稲元久保横穴墓群、古賀市浦口古墳群などの群集墳や横穴墓にいたるまで、独立片逆刺長頸鉾、段違逆刺長頸鉾、反刃鉾が互いの属性を混交しながら出土しており、中・後期甲冑の集中分布域と重なる。

地域形式平根鉾 北部九州では、弥生時代以来の透かし鉾（6）と飛燕式鉄鉾がある（7・8）。両者の共伴が多くみられるほか、飛燕式自体に透かしがあるものもあり（8）、いずれもちかしい生産・流通環境にあったことを示す。

とくに飛燕式鉄鉾は、後期末以降、二日市地峡帯を中心とする福岡平野南部から筑後平野に最密集地帯を形成する。その多くは中小規模の盟主墓に副葬される。環頭大刀や象嵌大刀の分布とおおむね重なるが、倭装大刀や頭椎大刀、広域流通形式特殊長頸鉾とは排他的に分布する。また、須恵器窯や鍛冶関連遺物など、生産にかかわる遺構や遺物との関連もつよい〔第8章〕。

その他の地域 関東では、大型古墳や前方後円墳よりも中小古墳で地域型式を副葬することが多い〔内山

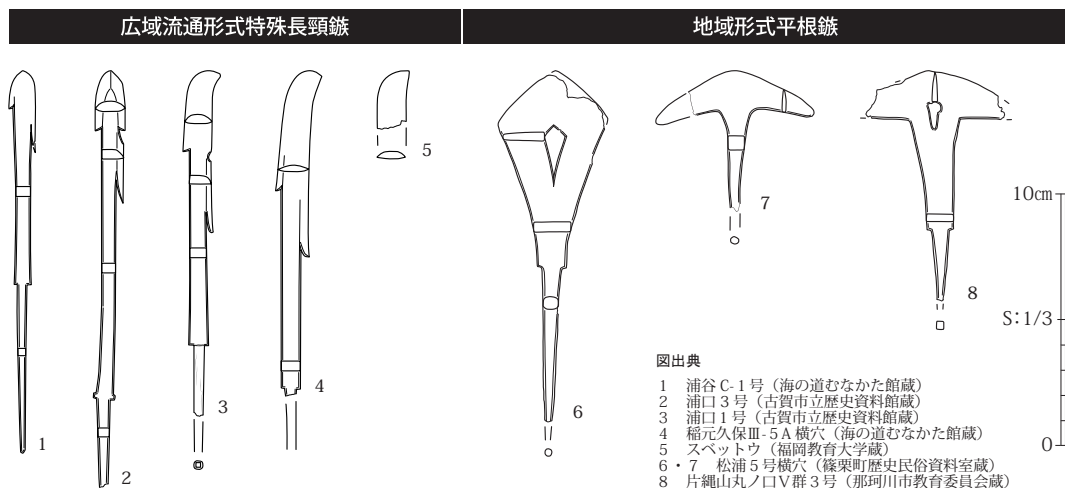


図127 北部九州における特殊鉄鉾の二相

2011]。関東の地域形式鉄鏃の位置づけは「鏃束単位」での補完であることから、倭王権による直接的な武器供給がおよぶのが上位階層までであることがわかる。

北部九州の豊前では、後期後半の上位階層墓と下位階層墓が鉄鏃組成を共有するほか、二日市地峡帯では大宰府成立期にいたるまで中央からの武装整備が図られたという [小嶋2015・2016]。そのなかで九州の地域形式鉄鏃は、鏃束のうち数本程度、という象徴的なありかたを示す。北部九州では従属的な階層にいたるまで倭王権が長頸鏃を供給していたか、あるいは在地でつくっていたとしても、中央の製作技術や規範にたいする依存度がたかいことがわかる。

4. 金属製弓弭

後期末に金属製弓弭C1類（銀製）が成立する。副葬数が最多で装飾性も豊かな金鈴塚古墳例をはじめ、東京湾や利根川、香取海を介して八幡観音塚古墳や宮中野大塚古墳など、関東各地の有力首長墳に副葬される。関東以外では向山1号墳と船原古墳遺物埋納坑例しか知らない。

銀製品にやや遅れてC2類（金銅製）が出現し、東日本では房総半島や三浦半島、関東平野利根川上流域を中心に銀製品よりもひろく分布する。また、大型前方後円墳のほか、群集墳や横穴墓にも副葬される。

銀製品と金銅製品をあわせると、東京湾を挟んで房総半島と三浦半島に集中域がある。倭王権中枢部が生産したものとしても、近畿の有力墳から出土していない現状では倭全体の秩序を示す財とは評価できない。むしろ、三角穗式鉄鉾や花形鏡板・杏葉、銅鏡との共伴や分布の傾向から、東国の有力首長間の紐帯を示すことを第一に重視すべきだろう。

5. 鉄装鞆 [図128・129]

矢を携行する武具として、鏃を下向きに収めて腰に提げる胡籛と、鏃を上向きに収めて背負う鞆がある。胡籛は中期中葉に伝来した中国大陸・朝鮮半島系、鞆は古墳時代前期以来の倭系の武具である。前・中期の鞆は有機質装であるため、実際には副葬されていても、発掘調査で認識することはむずかしいことが多い。たほう、後期には長方形の鉄板を鋳留して補強するため、破片が出土すれば鞆の存在を認識できる。

このうち鉄装鞆は、全国的に連動した規格性を持ちながら広域に分布するため [土屋2017]、一元的な生産を想定できる。また、峯ヶ塚古墳や藤ノ木古墳、金鈴塚古墳、井田川茶白山古墳、上塩冶築山古墳、双六古墳などでは、振り環頭大刀や三角穗式鉄鉾との共伴がみられるほか、上塩冶築山古墳や栃木県伯仲1号墳では鉄装鞆と反刃鏃が出土している。かならずしもこれらすべての武装具がセットになるわけではないが、いずれも上級の武装として似たような流通網をつうじて配布された可能性がある。

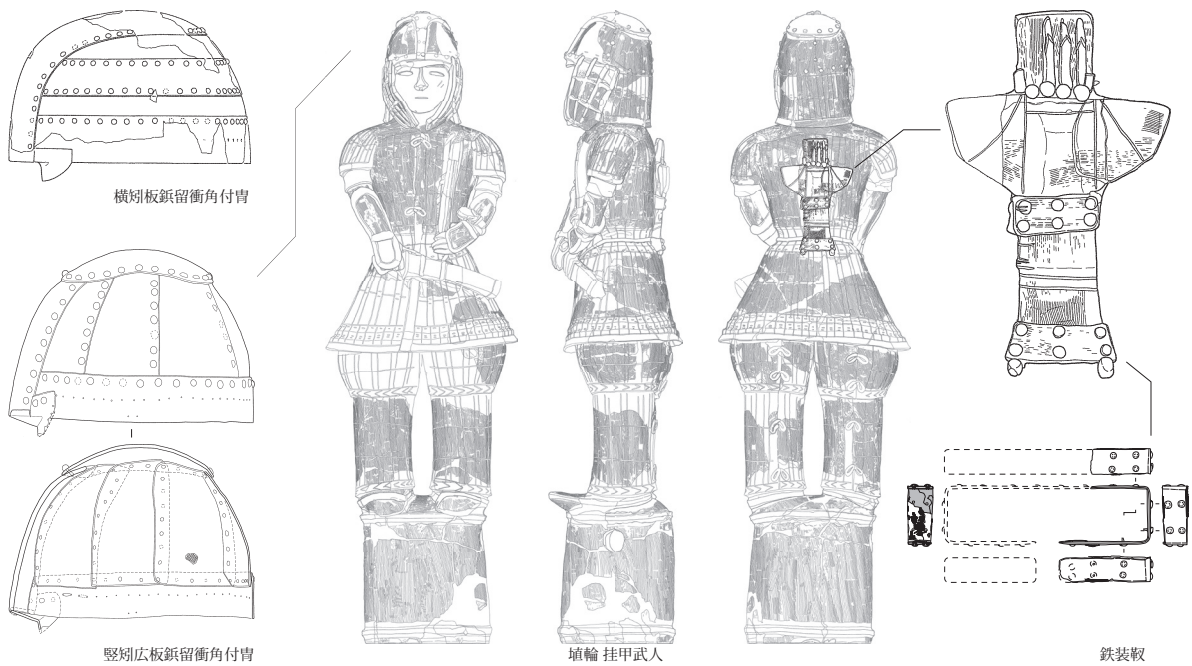
前方後円墳をふくむ大型墳への副葬は、近畿をのぞくと北部九州と関東に多い。関東では千葉県城山1号墳、経僧塚古墳、金鈴塚古墳など、装飾大刀を多く副葬する有力墳から出土する。

北部九州では群集墳や横穴墓（福岡県嘉麻市宮の上4号横穴など）にも副葬する。1.5km離れた善一田18号墳と宇美観音浦KS3号墳での出土は全国で最至近距離の関係にある。これらの地域と近畿をつなぐ東海や瀬戸内では、中小規模墳からの出土が目立つが、分布が希薄である。

このように、鉄装鞆の副葬と墳墓の形態や規模は比例しない。しかしながら、群集墳のなかでも善一田18号墳のような盟主墓に副葬されたり、観音浦KS3号墳では三角穗式鉄鉾と共伴したりするといった、ある程度の優位性をふまえると、墳形や規模には表出されない潜在的な首長や盟主層の存在を想定できる。

6. 甲 冑 [図128・130・131]

後期の甲冑は、小札甲と衝角付冑（横矧板鋳留式、堅矧広板鋳留式）の組みあわせからなる。出土遺跡数は群馬が最多で、千葉、埼玉、奈良、福岡とつづく [橋本・鈴木2014]。後期の冑の多くは東北・関東で出土しているが、中期の横矧板鋳留衝角付冑の発信源を近畿に求めるかぎりには、後期甲冑の発信源も同様に理解できる [鈴木一2010]。甲冑保有者を地域の最上位層とみる意見は多いが、金鈴塚古墳のほか、埼玉県小



図出典

横刳板銀留衛角付冑(埼玉將軍山)(鈴木一有2010「古墳時代後期の衛角付冑」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会:503-523頁)
 縦刳広板銀留衛角付冑(金鈴塚)(内山敏行2017「金鈴塚古墳の衛角付冑」『金鈴塚古墳研究』5 木更津市郷土博物館金のすず:1-10頁)
 冑輪 挂甲武人(群馬県出土)(古谷 毅2015「冑輪 挂甲武人」『国宝 冑輪 挂甲武人 重要文化財 冑輪 盛装女子 附 冑輪 盛装男子』同成社:18-29頁)
 鞍金具(善一田18号)(大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23』(上巻))

図128 古墳時代後期の冑と鉄装鞍



土屋2017の集成に伯仲1号墳を追加して作成

図129 鉄装鞍副葬古墳の分布

見真観寺古墳、永明寺古墳、三重県琴平山古墳、大阪府南塚古墳、寛弘寺75号墳では追葬や副次的な埋葬にとまなう。初葬者を軍事的に補佐する職掌や〔鈴木一2010、内山2016〕、首長の近親者または配下の人物を想定する意見〔藤田2006〕がある。

北部九州では、宗像周辺に中・後期の甲冑出土古墳が集中する。中期では、宗像市上高宮古墳の長方板革綴短甲を嚙矢として、久戸6号墳の三角板革綴短甲、古賀市永浦4号墳の三角板鋳留短甲、横矧板鋳留眉庇付冑、頸甲、福津市津屋崎10号墳の挂甲小札、同13号墳の三角板革綴短甲、横矧板鋳留衝角付冑、井手ノ上古墳の三角板鋳留短甲、池尻古墳の横矧板鋳留短甲などが知られ、全国的にみてもたかい集中密度である。

後期後半では沖ノ島7号遺跡をはじめ、相原古墳（旧E-1号墳）、スベットウ古墳、田野瀬戸4号墳などの中規模以上の前方後円墳で小札が出土しているが、いずれも明確に装飾大刀の副葬を示す資料は知られていない。沖ノ島7号遺跡と相原古墳では横矧板鋳留衝角付冑や類似する辻金具も知られる。相原古墳は宗像地域屈指の規模を誇るものとあわせ、その被葬者像には沖ノ島祭祀を補佐する集団の長を想定する。

福岡平野から糟屋平野にかけての多々良川流域では、後期中葉・後半頃の篠栗町長者の隈古墳で、明治期に甲冑とともに後輪に鞍を四つ配した金銅装鞍が出土している。複雑な尻繫構造を思わせるこのような後輪は、列島では藤ノ木古墳にしか類例がない。中国大陸や朝鮮半島でも、遼寧省朝陽十二台郷磚廠88M1号墓、慶州皇南大塚南墳や天馬塚、大邱達城55号墳、尚寧校洞7号墳など、王陵級の古墳で数例知られる程度である〔桃崎2009〕。長者の隈古墳の横穴式石室は宗像地域の中規模前方後円墳に匹敵し糟屋郡域では最大規模を誇るが、墳丘は直径約15mの円墳に過ぎず、墳墓の築造規制がうかがえる〔桃崎・小嶋2009〕。

さらに、長者の隈古墳の北西3.5kmに位置する福岡市東区かけ塚山古墳（後期後半か）でも、小札、堅矧広板鋳留衝角付冑片、金銅装鞍金具が出土している。ただ、これをのぞく堅矧広板鋳留衝角付冑出土古墳の西限は岡山県王墓山古墳であることから、糟屋平野周辺の人々は、かけ塚山古墳の被葬者を長として認識することはむずかしかったかもしれない。

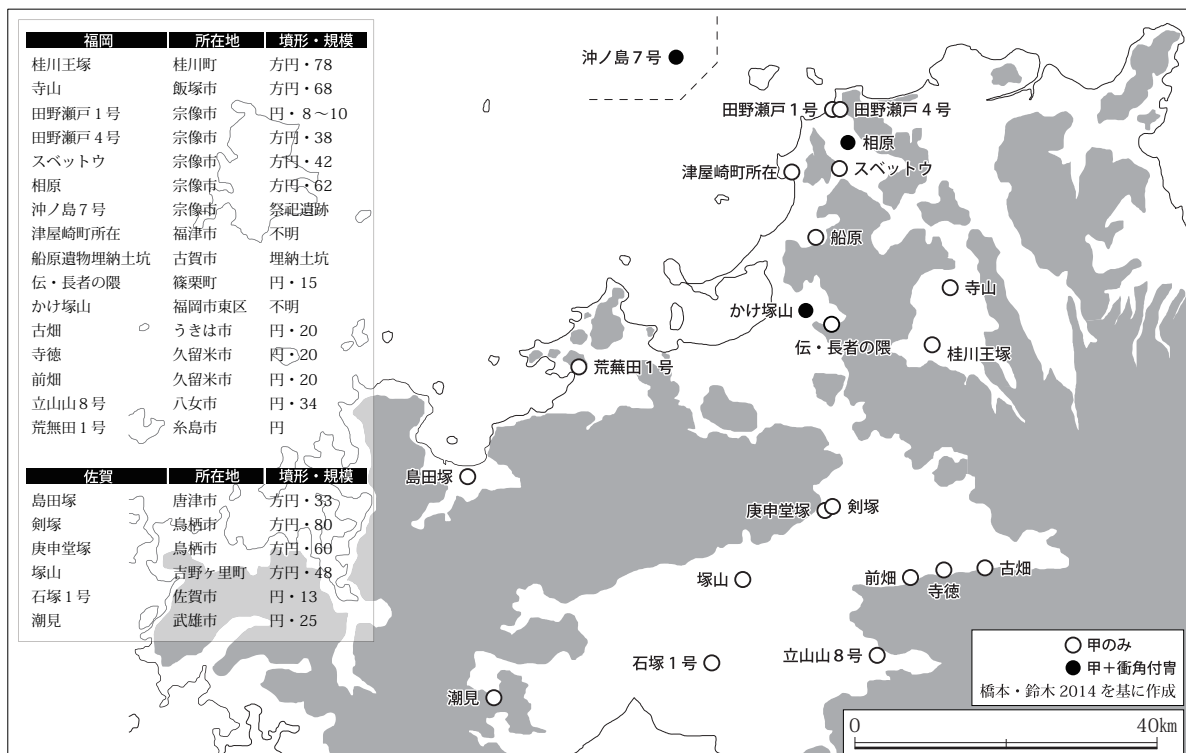


図130 北部九州における甲冑出土後期古墳の分布

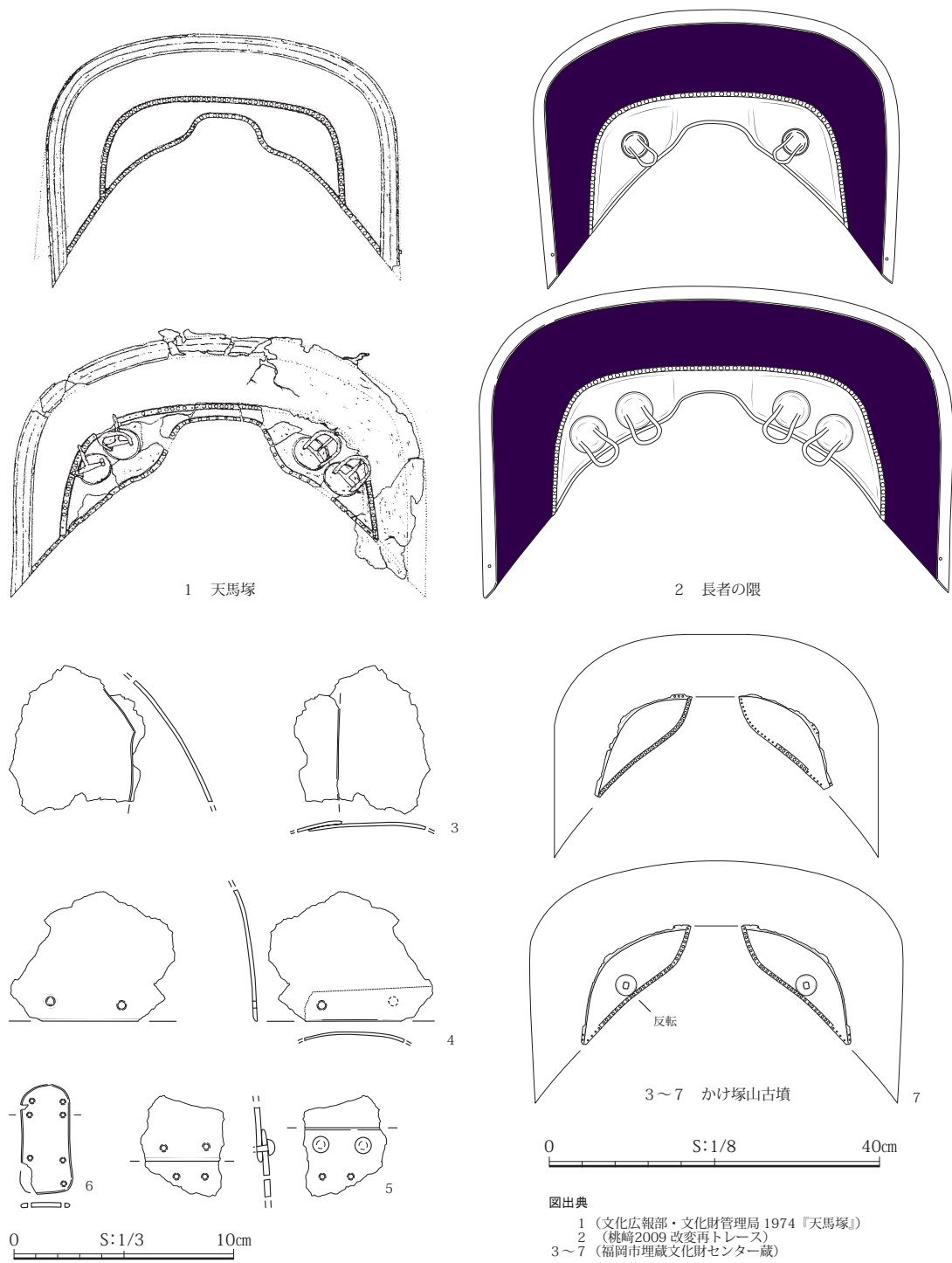


図131 長者の隈古墳とかけ塚山古墳の馬具・甲冑

糟屋郡域では後期中葉の粕屋町鶴見塚古墳（82m）を最後に中規模以上の前方後円墳の築造が停止し、小規模な円墳群が造営される。そうしたなか、磐井の乱後に糟屋屯倉が設置されたと考えられる当地で甲冑や金銅装馬具を保有した層は、在地集団の長としてよりもむしろ、倭王権の意向を承けて屯倉経営に関与していた可能性がたかい。かけ塚山古墳が7・8世紀の糟屋評（郡）衙とみられる粕屋町阿恵遺跡に近在することをふまえれば、それに先行する屯倉管掌者の補佐として評価できる。

嘉穂地域では、最上位の桂川王塚古墳（後期中葉古段階）で振り環頭大刀、甲冑、金銅装馬具の組みあわせがみられる。山の神古墳に準じる規模の飯塚市寺山古墳でも小札が出土しており、振り環頭大刀をもつが甲冑はもたない山の神古墳追葬者（後期中葉古段階）の補佐と理解する。

唐津平野の島田塚古墳は後期前半に位置づけられ、金銅製三輪玉や釦本孔鉄刀が出土しており、倭装大刀をもっていたことがわかる。

佐賀平野においても、剣塚古墳、庚申堂塚古墳、塚山古墳など、宗像や嘉穂地域に匹敵する中規模以上の前方後円墳で甲冑の出土が知られる。やはり、いずれも目立った装飾大刀が出土していない。装飾大刀が盗掘された可能性ももちろんあるが、本来は有力な装飾大刀保有層が近在した可能性も視野にいれておいてよいだろう。直径25mの円墳である潮見古墳においても、小札やf字形鏡板付轡が出土しているものの、倭装大刀の存在をうかがわせる資料は知られていない。

総じて、後期前半から中葉古段階までは倭装大刀と甲冑が組みあう武装がみられるのにたいして、後期後半以降には倭装大刀や袋頭大刀を保有する層と、甲冑を保有する層に分離してゆく。

7. 金銅装鏡板・杏葉 [図132]

後期中葉までに築造された前方後円墳である山の神古墳、苅田町番塚古墳、桂川王塚古墳ではf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉、箕田丸山古墳と桂川王塚古墳では楕円形蔵手文鏡板が出土している。沖ノ島7号遺跡では、桂川王塚古墳と同形の子持剣菱形杏葉が出土しており、沖ノ島祭祀に桂川王塚古墳の被葬者もかかわった可能性がある。箕田丸山古墳の唐草文透彫鞍は峯ヶ塚古墳例に後続する。

上記の5遺跡からはいずれも長大な倭装大刀、箕田丸山古墳以外の4遺跡からは甲冑も出土しており、倭王権中枢部に連なる地方最高首長の武装を構成する。

後期後半・末の地方に多い金銅装馬具として、棘葉形と花形の鏡板・杏葉がある。東海では、愛知県馬越長火塚古墳から大塚南古墳、あるいは賤機山古墳の追葬関係などで、棘葉形から花形へ転換する [内山2018]。両系統の馬具が集中する北部九州でも地域全体として同様の状況にある。

棘葉形杏葉は、沖ノ島7号遺跡、藤ノ木古墳、埼玉將軍山古墳など、各地の重要遺跡で倭装大刀や甲冑、三角穗式鉄鉾などをともなう。熊本市打越稲荷山古墳は石室に装飾を有し在地色がうかがえるが、振り環と沖ノ島7号遺跡に後続する棘葉形杏葉がともなう。

花形鏡板・杏葉の分布も畿内に希薄で、北部九州と東日本に偏る。東日本では前方後円墳への副葬が多いが、九州では船原古墳をのぞくと、朝倉市狐塚古墳、宮若市竹原古墳、鞍手町銀冠塚古墳、佐賀県鳥栖市永田古墳群2区ST202など、円墳からの出土が多い。また、二重圏円文をあしらう大型品 [桃崎2012のD類] が、関東では金鈴塚古墳や八幡観音塚古墳などの大型前方後円墳に副葬されることから階層性を示唆するいっぽう、分布の南限である熊本市つつじヶ丘C-1号横穴で金鈴塚古墳例に後続する事例が出土している。桃崎祐輔は、歴史地理学的な分析をつうじて、壬生部との関連を指摘する [桃崎2012]。

以上より、北部九州の特定地域でみられる墳墓の縮小化は、特定形式の馬具が表象する軍事権や氏族などの不在ではなく、特定集団の墳墓築造に規制があったことを示すと考える。

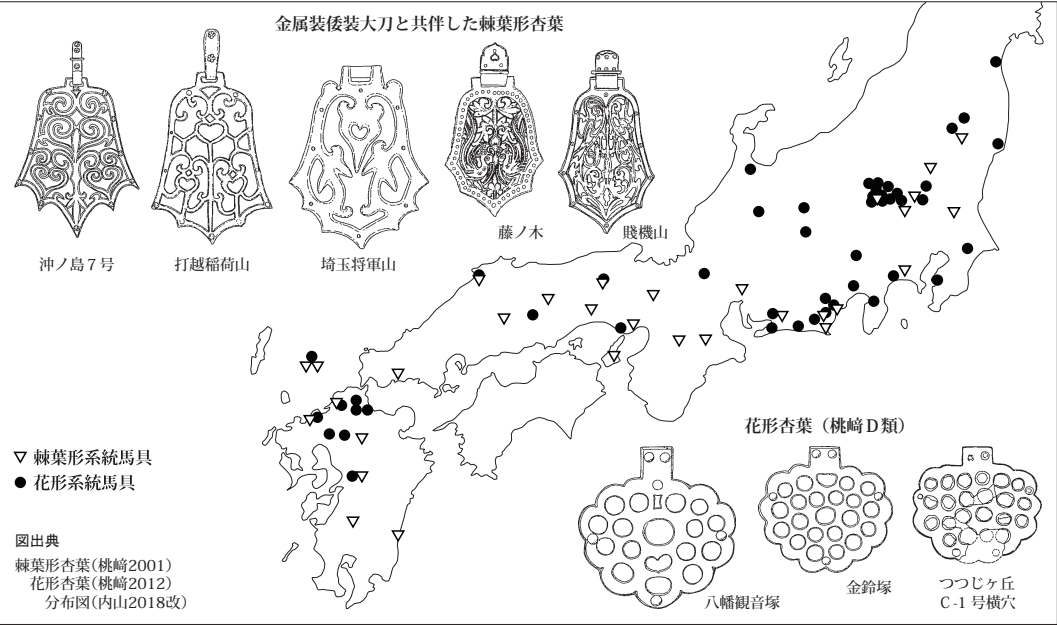
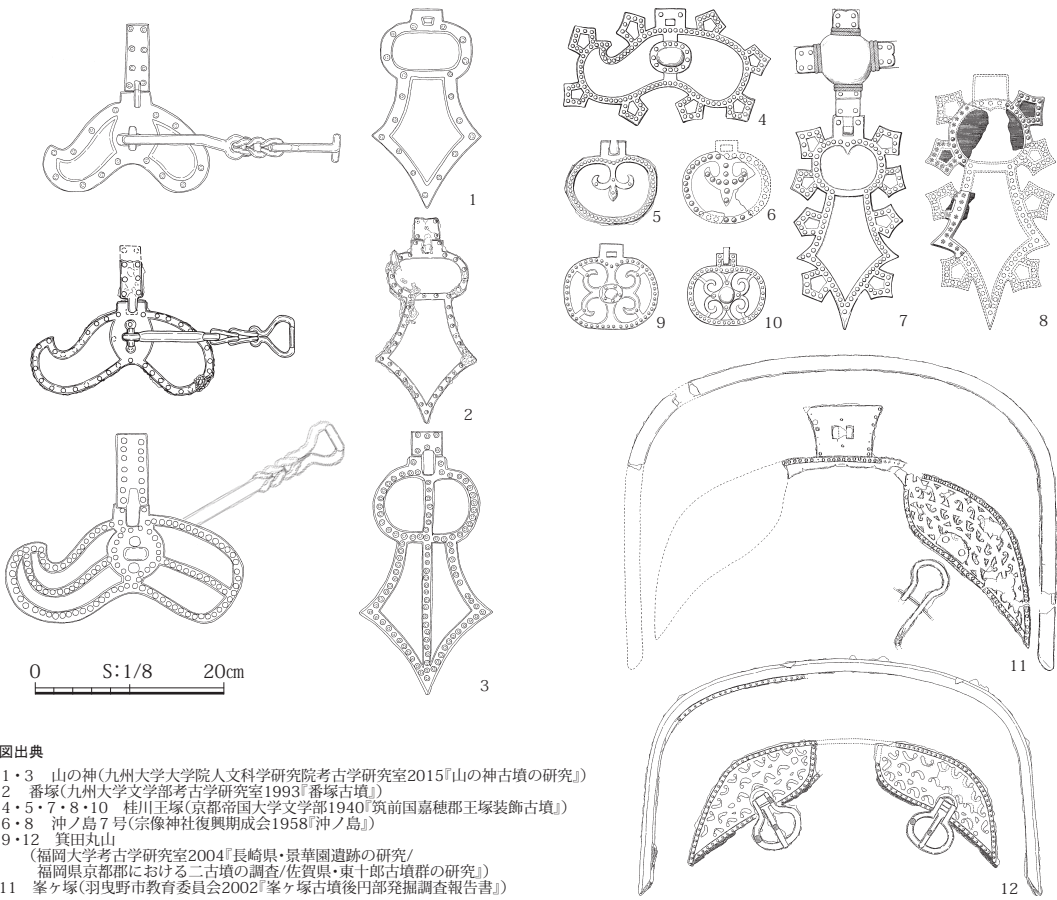


図132 北部九州の金銅装馬具

第4節 理 論 — 北部九州勢力の武装モデル，階層論の壁を超えて —

前節までに示した問いや展望，事実をふまえながら，北部九州における武装具保有の意味を抽象化する。

図133は，新納泉による群集墳の階層構造図〔新納1983〕において最上位に位置づけられた装飾大刀の保有層を，大型の墳丘や石室を有し，広域な地域経営の最高指揮権をもつ〈第Ⅰ階層〉と，その下で軍事や生産，外交などを分掌する集団（群集墳）を束ねた〈第Ⅱ階層〉に細分したものである。つづく〈第Ⅲ階層〉は，質実な刀剣，馬具を有することから社会全体のなかで一定程度の優位性をもつものの，装飾大刀はもたない層である。なお，この図は一世紀以上の時間幅を強引に凝縮したものだが，その間，基本的な構造はほとんど変わらないことを断っておく。

第Ⅰ階層 岩戸山古墳は振り環頭大刀が九州で展開する端緒となった。振り環頭大刀や金銅装馬具など，倭王権中枢部に連なる武装をもつ桂川王塚古墳や山の神古墳（追葬）の被葬者は，鎌・穂波両屯倉の管掌者とみる。宗像地域にも，秀逸な武装具が重点的に配布され，沖ノ島祭祀や宗像君を頂点とする階層編成が貫徹された。後期後半までは沖ノ島7号遺跡の振り環頭大刀，後期末には宮地嶽古墳の巨大頭椎大刀が最上位に位置づけられる。相原古墳，田野瀬戸4号墳，スベットウ古墳のように，甲冑保有層がかならずしも装飾大刀をともなうとはかぎらないことから，沖ノ島祭祀を軍事面で補佐する立場にあったと考える。

すると，倭装大刀や袋頭大刀は戦闘というよりはむしろ，倭王権の意向を承けて広域な地域経営の最高指揮権を表象する節刀のようなもので，甲冑保有層がそれを軍事的に補佐するような職掌の分化が徐々に制度化されたと考えることができる。節刀とは，出征する将軍や遣唐使に天皇が持たせた任命の印としての刀を指す。『日本書紀』によれば，磐井の乱に際して磐井征討を命じられた物部麁鹿火に継体が刀を授けたことが，その嚆矢とされる。その刀がこんにち考古学的に認識できる大刀形式のどれに該当するのかはわからないが，もしそれが振り環頭大刀ないし倭装大刀だったとすれば，後期前半から中葉の北部九州における倭装大刀の集中や拡散は，磐井の乱後における地域再編に際して二次的に普及したものと評価できる。

なお，第Ⅰ階層の古墳では在地生産・補修品の武器や馬具，鍛冶関連遺物の出土が乏しい。

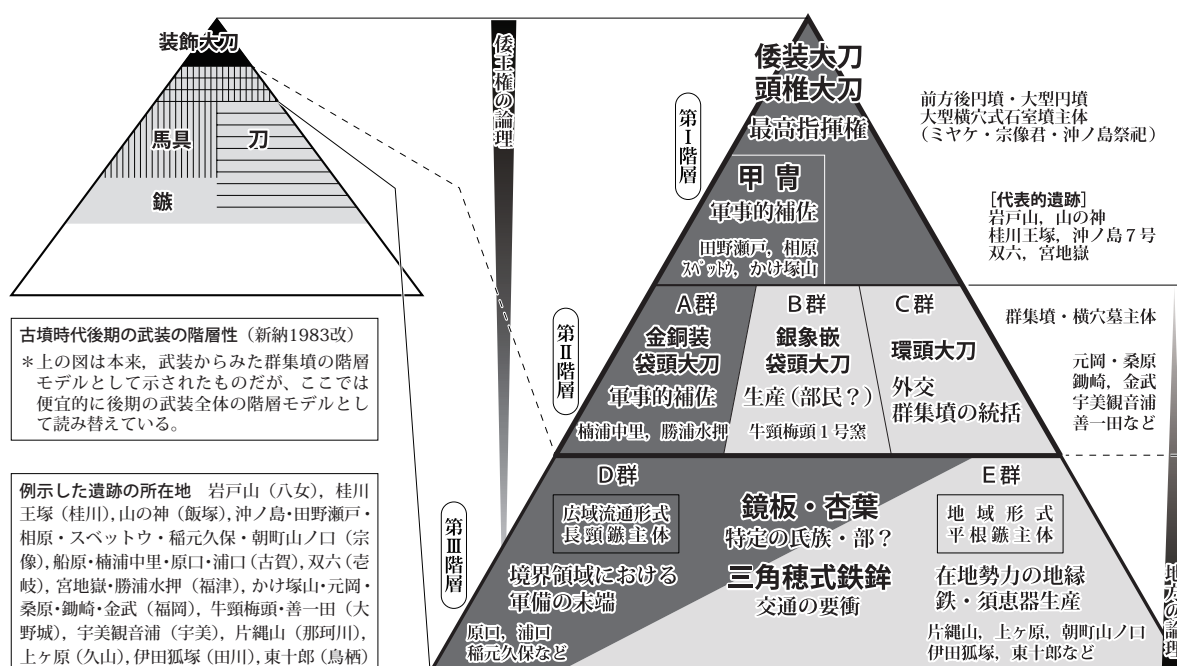


図133 北部九州における有力者層の武装具保有モデル

第Ⅱ階層・第Ⅲ階層 端的に言えば群集墳である。このうち第Ⅱ階層が盟主層、第Ⅲ階層が一般構成員にあたる。第Ⅱ階層は装飾大刀保有層、第Ⅲ階層は装飾大刀を保有しない層である。いずれも甲冑はもたない。

第Ⅱ階層は、副葬する装飾大刀の形式によってA～C群に分ける。宗像地域に集中するA群の楠浦中里A1号墳や勝浦水押SO-01号墳では金銅装頭椎大刀や広域流通形式長頸鏃が出土するが、地域形式平根鏃はふくまない。宗像君配下の諸集団の長とみられる。さらに、おもに広域流通形式の長頸鏃で武装する稲元久保横穴墓群、原口古墳群、浦口古墳群はそうした地域の末端に位置づけられる（第Ⅲ階層D群）。

銀象嵌大刀を副葬するB群は、鉄や須恵器を生産する部民的集団の長とみられる。たいして、外来系環頭大刀を副葬するC群の位置づけは詳らかでない点が多いが、ここでは暫定的に、対外的な場面を担った人物を想定する。ただしB・C群は排他的な集団ではなく、福岡平野広域で共存、協業した。

B・C群および彼らを支える第Ⅲ階層E群の多くは、飛燕式鉄鏃や瓢形素環轡などの在地生産・補修品で武装する。銀象嵌大刀と三累環頭大刀が共存し、かつ飛燕式鉄鏃や瓢形素環轡の密集地域を形成する牛頸窯跡群、善一田古墳群がその中心とみられるほか、福岡平野周辺に点在する福岡市鋤崎古墳群、同 石ヶ元古墳群、同 金武古墳群、同 浦江古墳群、同 東油山古墳群、同 大牟田古墳群、那珂川市片縄山古墳群、宇美町観音浦古墳群、同 岩永浦古墳群、久山町上ヶ原古墳群などの被葬者集団も、その典型である。

彼、彼女らは、須恵器や金属製品の生産、補修などをおこなったり、あるいはそれにかかわる物品の供献・副葬習俗〔小嶋2009〕を共有したりすることによって協業的な地縁に連なる。銀象嵌大刀はそうした王権の下部構造に組みこまれた部民的集団を表象する。三累環頭大刀は対外交渉網をもつ在地勢力の特性を活かしつつ、倭王権傘下に組みこむための懐柔策として再生産・分配されたか、あるいは地域勢力の象徴として在地で生産したものとみられる。

広域流通形式長頸鏃の保有量は王権中枢による軍備の度合いを測る尺度であるのにたいして、地域形式平根鏃はたとえ少量であっても、保有そのものが地縁集団の紐帯を示す。

なお、三角穂式鉄鏃は第Ⅰ階層から第Ⅲ階層の各階層にみられる。いずれも立地から水陸交通の要衝に立つ者の表象としての性格がつよく看取され、「上位階層の武器」という認識のほうが副次的な要素となる。

小 結 以上のような複雑な論理の錯綜が武装の多様性の正体である。一口に「武装」とはいつても、その成立の背景には軍事や戦争にとどまらず、生産や交通、地縁など、さまざまな要因を想定できることがあきらかとなった。

ただし、一見、暴力や戦争とは無関係にみえる要素まで武器で表象する点に、古墳時代社会をとりまく緊張感が読みとれることから、各階層の活動が独自に展開したとは考えない。図133の階層性にくわえて、袋頭大刀集中地域と環頭大刀集中地域の境に7・8世紀の糟屋評（郡）衙とみられる粕屋町阿恵遺跡が存在することは重要である〔図80左下、図134〕。評に先行する糟屋屯倉が近在したとすれば、軍事・外交などの対外戦略および生産力の拡大という内的発展の差配が当該地周辺で執りおこなわれたことになる。牛頸窯の須恵器・瓦生産が那津官家とかかわることも鑑みると、図132は単なる武装の階層性にとどまらず、第8章の図81・91・92と組みあわせることによって、より巨大な地域経営モデルへと昇華できるだろう。

ただし以上のうち、倭王権との紐帯を示す「威信財」と評価できるものがあるとすれば、それは、質、量ともに近畿に核がある第Ⅰ階層の装飾大刀や甲冑までだろう。外来系の武器や甲冑を重視した財体系から脱却し、独自の形式や様式を最上位とする武装の階層構造を確立するいっぽうで、北部九州や瀬戸内を中心に武器や馬具の在地生産・補修技術を獲得した古墳時代後期の倭には、もはや一元的な求心力をもつ「威信財」はほとんど存在しないといってもよい。それは、王を中心、あるいは頂点とした府官制的秩序や人制からの脱却を経て、ミヤケ制、部民制に代表される各地域・集団ごとの統治機構へ転換してゆく流れとも無関係ではないだろうし、そうした一元化できない複雑なありかたこそが、後期的な武装の偽らざる実態なのである。



図出典 粕屋町教育委員会 2018『阿恵遺跡』粕屋町文化財調査報告書43改

図134 阿恵遺跡周辺図

第5節 結 語 — 古墳時代武器研究史上における本論の役割 —

倭王権による武器の一元生産・配布論も、それと対をなす地方生産論も、結局は工房跡を発見しないかぎり交わることはない。もはや、研究者個人の帰属意識にかかわる問題といってもよいだろう。

これにたいして本論では、特定形式の武器がどのような地域で重視されたのかという分布論的に把握できる事実をまずふまえたうえで、周辺の生産遺跡の状況を確認しながら地方生産力の強弱を検討することのほうが建設的な議論につながることを、すなわち古墳時代の武器の流通には、倭王権を発信源とした一方的な流れのみならず、地方の論理との折衝のなかで形づくられる地域性が存在する可能性を、資料に即しながら示した。最後にその成果をまとめ、擱筆したい。

第Ⅰ部の成果

個別細分化する刀剣型式学の成果は先学に譲りつつも、これまで個別にすすめられてきた装飾大刀と刀身の研究を区別することなく、一体の様式として捉える視点を提示した。そのなかで、これまではその限界ばかりが主張されてきた鉄刀をもちいた古墳編年が、中期においては須恵器陶器編年に換算して平均1.5型式分ほどの精度で有用であることを示した。

また、刀身や鉄鉾本体からみた王権論への糸口を見出した。とくに中期における発展段階的な倭製鉄刀の長大化や加飾化は、刀剣をもちいた東アジアの秩序に参入するための政治的パフォーマンスであり、倭の五王による度重なる中国南朝への朝貢と連動する可能性を説いた。そして、5世紀後半に倭王武が「使持節

都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事 鎮東大將軍 倭王」に任じられることによって中国の世界秩序下に編成された段階で刀身の長大化はおさまること、ついで擁立された継体が完成させた振り環頭大刀はこうした前史の集大成として捉えるべきものであると結論した。

長大化はおさまるいっぽうで、仕様による階層分化や形式の多様化がすすむ後期の刀剣体系は、府官制的秩序からミヤケ制や国造制、氏族制などへ複雑化する社会構造そのものの質的転換を反映するものである。

日本列島の古墳から出土する特殊な鉄鉾についても、本来は中国大陆、朝鮮半島の動向を反映しながら中期後半にかけて多様化していたものが、後期になると三角穂式鉄鉾へと一元化され、倭の鉄鉾様式の中心に据えられてゆく過程があきらかとなった。後期後半以降にみられる銀装や鐔付の三角穂式鉄鉾は、直截的に百済や新羅の動向と結びつくものではなく、倭国内の秩序を示す財へと変容したものである。

第Ⅱ部の成果

第Ⅰ部で示した仮説を検証するため、特定地域における古墳時代中・後期の武装の意義を考察した。その過程で、セストノ古墳や岩戸山古墳をはじめ、玄界灘沿岸地域出土品の調査をつうじて得た情報の質と量は、九州の古墳時代史そのものを再構築するにふさわしい材料となった。

考察にあたっては、北部九州こそが倭と東アジア世界の境界領域であるとあらためて認識したうえで、倭の版図の東端である関東のありかたと対比することによって、その位置づけを相対化するように努めた。すなわち、従来の北部九州の位置づけは、朝鮮半島との交流のなかで、あるいは東に目を向けてもせいぜい近畿地方との交流のなかで論じられることが多かったが、本論では倭の版図における質差を最大限明瞭にするために、古墳時代当時の列島の西限と東限を比較検討したのである。

その結果、高位に位置づけられる武器の流通動態にも西と東ですくなく地理勾配が存在することをあきらかにするとともに、こんにちの武器研究にたいして最もおおきな影響力をもつ下記の流通モデルや、じゅうぶんに検証されていなかった保有意味論を見なおし、対案を示すにいたった。

振り環頭大刀流通の発信源＝継体説 振り環頭大刀の成立動態を、継体朝における財体系の刷新に求める理解そのものには首肯する。しかし、振り環頭大刀の盛行は継体没後の6世紀後半である。とくに関東から東北南部にかけては、新式の埋葬施設の情報と連動しながら東漸し、最新の事例は、分布の北限や東限にあたる中田装飾横穴や龍角寺浅間山古墳など、6世紀末から7世紀初頭の有力な墳墓で出土している。したがって、振り環頭大刀の展開を一律継体朝の論理に求めることはできない。古墳時代後期をつうじて倭王権中枢部が各地を掌握するために利用した威信財的要素として、柔軟に解釈すべきだろう。

金銅装頭椎大刀の製作・保有＝物部氏、双龍環頭大刀の製作・保有＝蘇我氏説 1960年代末以降、金銅装頭椎大刀と物部氏、双龍環頭大刀と蘇我氏をむすびつける解釈が示されてきた。しかし実際には、両形式の大刀は鞘の意匠を共有したり共伴したりする事例もあることや、そもそも金銅装頭椎大刀の盛行は6世紀末から7世紀初頭にあたることから、587年に本宗家が滅亡した物部氏とむすびつけると論理が破綻する。また、最も巨大な製品が存在する宮地嶽古墳周辺には物部氏の存在を示す資料が知られていない。たしかに、5世紀の布留遺跡段階のような木装頭椎大刀は物部氏による生産品かもしれないが、本論では、物部本宗家滅亡後には頭椎大刀のデザインが蘇我氏に接收され、蘇我氏による一元管理のもと、頭椎大刀＝軍事、双龍環頭大刀＝外交、のような保有者の社会的役割を表象するかたちで分配した可能性を支持した。ただし、この仮説は実証困難であるため、絶えず検証し続ける必要がある。

6世紀の三累環頭大刀の製作地 6世紀の三累環頭大刀の製作地をめぐるのは、その多くが倭に分布することから国産品とみる理解と、その他の倭製装飾大刀との技術共有が希薄であることから舶載品とみる理解が対立している。二説とも、極端な論理としかいえない。

これにたいして本論では、①後期最古段階の事例が福岡県剣塚1号墳に副葬されること、②日本列島における三累環頭大刀の四割ちかくが北部九州に集中するのにたいして近畿では希薄であること、③北部九州では群集墳の上位層に副葬され、一定の身分表示機能が働いていたこと、④鍛冶具や鉄滓、銅滓のほか、地域生産・補修が考えられる飛燕式鉄鏃や瓢形素環轡の分布と良好に重なることなどを重視し、三累環頭大刀のすくなくとも一部は北部九州で生産された可能性を示した。

銀象嵌大刀・飛燕式鉄鏃・瓢形素環轡の保有意味 象嵌刀剣は全国で600ちかい事例が知られており、かならずしも貴重な武器とはいえない。同時に、資料の多さから全国的なモデルの構築も道半ばである。

銀象嵌大刀保有の事例研究として本論では、牛頸窯跡群周辺（窯業・鉄生産）や鋤崎古墳群（鉄生産）、石ヶ元古墳群（鉄器生産）など、玄界灘沿岸の事例を挙げながら、銀象嵌大刀は須恵器や鉄生産を司る部民的集団の長が佩用した可能性を示した。とくに、飛燕式鉄鏃や瓢形素環轡のように、福岡平野周辺での生産・補修が想定できる武器や馬具とおもな分布域が重なることから、こうした協業的地縁でつながる集団の象徴として機能した可能性は否定できない。

ただし、銀象嵌大刀を保有する者の生業の特定については、なお慎重を要する。本論で示した構図が「全国一律モデルの一部」なのか、「北部九州のローカル・ルール」なのか、製塩や馬匹、埴輪生産、土木など、さまざまな手工業、あるいは部民にかんする歴史地理学的研究の成果も視野に入れながら、列島各地のモデルを樹立したのちに比較、検証する必要があるだろう。

甲冑の保有者＝最高首長説 特定の論者による主張ではなく、いっばんに浸透している「誤解」である。すでに甲冑研究の立場からは、一部の後期甲冑出土古墳の被葬者について、最高首長を軍事的に補佐する人物、あるいは配下の人物とみる説が示されているが、適切に引用されていない。

北部九州においては確実に副次的な被葬者に甲冑がともなう事例を抽出できないが、最上位の装飾大刀出土古墳で甲冑が共伴するのは後期中葉までであり、後期後半から終末期にかけては、倭装大刀や袋頭大刀出土古墳の周辺に甲冑出土古墳が存在するばあいがある。後期後半以降、装飾大刀が表象する地域経営権と甲冑をとともなう軍事権へと、政軍分離ないし職掌の分化がすすんだ可能性があり、このような甲冑保有者は、沖ノ島祭祀や宗像君、あるいは屯倉管掌者といった特定権力を軍事的に補佐する人物像を想定する。

古墳時代の武器＝倭王権を中心とする威信財説 古墳時代の武器や甲冑、馬具を「倭王権との密接な関係がうかがえる威信財」とみる意見は根づよく、当時の武装にたいする適切な評価から乖離するいっぽうである。

これにたいして本論第Ⅱ部では、東アジア諸国との境界領域にあたる北部九州勢力の武装体系について、従来の階層論を発展させるかたちでモデル化した。そして、古墳時代後期においては、同じ器物でもそれが威信財として機能する地域と機能しない地域に弁別できる可能性や、そもそも、同じ形式の武器が列島各地に同じ論理で配布されたと解釈すること自体に限界があることを示した。

とくに関東の武装のありかたについては銀装の武器、あるいはそれに準じるを中心に検討し、金鈴塚古墳や綿貫観音山古墳の被葬者が倭王権との密なつながりのなかで入手した武器を関東独自の財体系で運用することによって東国の有力首長間ネットワークが形成されたことを論じた。

北部九州玄界灘沿岸地域においては、古墳時代後期の畿内と同調した墳墓築造の縮小化がみられる地域が多い半面、中規模の前方後円墳を築造しながら東国に勝るとも劣らない充実した武装をもつ地域が存在することが明快となった。すなわち、磐井の乱後の地域再編をつうじて多くの既存勢力が牽制されるなか、宗像のような国家祭祀および国防の最前線においては、倭王権中枢部を中心とした上意下達の指揮命令系統が維持されたと考える。

ただし、磐井の乱以前から朝鮮半島との交流という地理的役得を獲得してきた旧来の在地勢力、すなわち筑紫君や肥君は、ミヤケや国造の設置によって弱体化したわけではなく、むしろ須恵器生産や鉄・鉄器生産

を媒介としながら協業的地縁を形成し、倭国の最前線を担う人的資源ないし物資供給のセンターとしての役割を確立した。そして、そうした諸集団の最高意思決定機関である那津官家に瓦を供給した牛頸窯の操業期間（6世紀中頃～9世紀中頃）が物語るように、このような地域経営モデルは古墳時代社会の時空間で完結するようなものではなく、古代律令国家成立への序章として評価すべきだろう。

おわりに

本論では、軍事的境界領域の武装がもつ本質を単に「珍しいものをもつ者＝有力者」というお国自慢的な説明ではなく、東アジアから日本列島、そして特定の地域へと絞りこむ視点によって描いた。これまでその歴史的重要性が叫ばれながらも、じゅうぶんに体系化されていなかった北部九州の武装を考察した第Ⅱ部は、個別具体的な地域史モデルの一つとなろう。

ただし、課題も多く残った。とくに、関東の有力首長層を支えた集団や首長権力の成長過程について群集墳レベルでの分析までいたらなかった点は、本論の論理的重層性やバランスを著しく弱めている。かといって、北部九州における各群集墳の詳述や、倭王権中枢部と境界領域を結ぶ中継地域の検討も決してじゅうぶんなものとはいえない。本来は、各地の地域経営モデルを同じ水準で比較、相対化しないかぎり、王権中枢がどのように地方を掌握しながら国家形成へいたったのかを解明できないはずである。

このような課題を解決するためにも、有力首長を支えた集団や首長権力の成長過程について、群集墳や集落の動態から通時的に描く必要がある。今後も、財体系に基づいた階層生成にかんする研究[下垣2018など]や特定地域の経営に注目した研究[若狭2018など]を参照しながら、各地のモデルを糾合した列島古墳時代史、そして東アジア史の再構築をすすめていきたい。

さて、本論の出来、不出来にかかわらず、近年の研究成果と本論をあわせれば、古墳時代の武器、武具、馬具にかんするほとんどの基礎研究が出揃ったはずである。いまだ会わぬ「武器研究第Ⅷ世代」は、どのような資料をどのように分析し、どのような考察を生み出すのだろうか。それは向後の愉しみとするほかないが、その道すがらには、時として船原古墳遺物埋納坑出土品のような常識や先行研究の成果を超越する資料が私たちの知的好奇心をくすぐり、そして悩ませつづけてゆくことだろう。しかしその都度、伝統的な方法論を厳しく吟味、吸収、批判、そして発展させながら、きらびやかな出土品を前に冷静さを失わず丁寧に観察し、類例の悉皆的な集成と比較検討を蓄積してゆけば、かならずや盤石な考察につながると私は信じている。付度や迎合なき研究の前進こそが学史へたいする真の敬意であるとともに、考古学が科学たりえるための条件であることは、世代を超えても永遠に変わらないのだから。

註

- 1) 【量的格差表象システム・質的格差表象システム】川畑純が提唱した概念。古墳中期中葉までは「同一品目の武器・武具の数量的な集積が、個人の社会的地位の表象の役割」を担う。こういった器物の入手や保有にたいする価値体系と、それを前提として推しすすめられる器物の生産・流通体制を「量的格差表象システム」という。その後は「材質の違いなどによる同一品目中の質的な差違によって、個人の社会的地位を表象」するようになる。こういった器物の入手や保有にたいする価値体系と、それを前提とした器物の生産・流通体制を「質的格差表象システム」という[川畑2015：pp.309-310]。

参考文献（刀剣論以外）

- 東 潮 1988「慶州の古墳（1）」『韓国の古代遺跡1 新羅編（慶州）』中央公論社：pp.49-94
- 東 潮 1997『高句麗考古学研究』吉川弘文館
- 穴沢咏光 1985a「三角縁神獣鏡と威信財システム（上）」『潮流』4 いわき地域学会：pp.1-3
- 穴沢咏光 1985b「三角縁神獣鏡と威信財システム（下）」『潮流』5 いわき地域学会：pp.1-3
- 穴沢咏光 1988a「蒙古鉢形」冑と4～7世紀の軍事技術『考古学叢考 中』齊藤忠先生頌寿記念論文刊行会 吉川弘文館
- 穴沢咏光 1988b「五胡十六国の考古学（上）」『古代学評論』創刊号 古代を考える会：pp.77-100
- 穴沢咏光 1991「五胡十六国の考古学（下）」『古代学評論』2 古代を考える会：pp.67-99
- 穴沢咏光 2014「国家の起源」『考古学研究60の論点』考古学研究会：pp.53-54
- 穴沢咏光・馬目順一 1973「北燕・馮素弗墓の提起する問題 — 日本・朝鮮考古学との関連性 —」『考古学ジャーナル』85 ニュー・サイエンス社：pp.6-12
- 穴沢咏光・馬目順一 1984a「安陽孝民屯晋墓の提起する問題（Ⅰ）—「現存最古の鏡」を含む馬具をめぐって—」『考古学ジャーナル』227 ニュー・サイエンス社：pp.31-36
- 穴沢咏光・馬目順一 1984b「安陽孝民屯晋墓の提起する問題（Ⅱ）—「現存最古の鏡」を含む馬具をめぐって—」『考古学ジャーナル』228 ニュー・サイエンス社：pp.35-38
- 諫早直人 2008「古代東北アジアにおける馬具の製作年代 — 三燕・高句麗・新羅 —」『史林』91-4 史学研究会：pp.1-40
- 諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣
- 諫早直人・鈴木 勉 2015「古墳時代の初期金銅製品生産 — 福岡県月岡古墳出土品を素材として —」『古文化談叢』73 九州古文化研究会：pp.147-209
- 石木秀啓 2012「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」『古文化談叢』67 九州古文化研究会：pp.23-54
- 石母田正 1971『日本の古代国家』岩波書店
- 李 東冠 2012「九州出土の鉄製農工具と鍛冶関係遺物からみた対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』前方後円墳研究会：pp.139-167
- 井上直樹 2011「6世紀末から7世紀半ばの東アジア情勢と高句麗の対倭外交」『朝鮮学報』221 朝鮮学会：pp.1-42
- 井上義也 2007「九州における古墳時代中期の埴輪」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会：pp.75-106
- 岩永省三 2012「ミヤケ制・国造制の成立 — 磐井の乱と6世紀の諸変革 —」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会：pp.457-462
- 岩橋由季 2015「遠賀川流域における横穴墓の出現と展開」『山の神古墳の研究 —「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に—』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室：pp.234-247
- 上田龍児 2019「乙金古墳群の研究」『古文化談叢』82 九州古文化研究会：pp.1-36
- 上野祥史 2014「龍文透彫帯金具の受容と創出 — 新羅と倭の相互交渉 —」『七観古墳の研究 — 1947・1952年出土遺物の再検討 —』七観古墳研究会：pp.279-294
- 内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館：pp.42-47
- 内山敏行 2003「古墳時代後期の諸段階と甲冑・馬具」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会：pp.43-58
- 内山敏行 2011「後期・終末期古墳出土の鉄鏃 — 東日本の場合 —」『考古学ジャーナル』616 ニュー・サイエンス社：pp.19-22
- 内山敏行 2017「金鈴塚古墳の銜角付冑」『金鈴塚古墳研究』5 木更津市郷土博物館金のすず：pp.1-10
- 瓜生秀文 2001「古代」『筑紫野市史 資料編（上）』筑紫野市史編さん委員会：pp.109-138
- 大谷宏治 2008a「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会：pp.201-214
- 小澤太郎 2003「岩戸山と今城塚 — 二つの前方後円墳における平面形態の比較試論 —」『史紋』1 史紋編集委員会：pp.91-103

- 小田富士雄 1997「筑前国志麻〈嶋〉郡の古墳文化 ― 福岡市元岡所在古墳群 ―」『古文化談叢』39 九州古文化研究会
- 小田富士雄 2003「『糟屋屯倉』遺跡の発見とその意義」『新世紀の考古学 ― 大塚初重先生喜寿記念論文集 ―』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性 ― 長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として ―」『考古学研究』40-1 考古学研究会：pp.61-85
- 甲斐孝司 2004「鹿部田淵遺跡の官衙的建物群」『福岡大学考古学論集 ― 小田富士雄先生退職記念 ―』小田富士雄先生退職記念事業会：pp.447-468
- 片山健太郎 2017「鈴付馬具からみた志段味大塚古墳」『志段味古墳群Ⅲ ― 志段味大塚古墳の副葬品 ―』名古屋市文化財調査報告94：pp.167-174
- 加藤謙吉 1991「平群地方の地域的特性と藤ノ木古墳」『大和政権と古代氏族』吉川弘文館：pp.163-195
- 門脇禎二 1957『古代国家と天皇』創元社
- 亀田修一 2004「豊前西部の渡来人 ― 田川地域を中心に ―」『福岡大学考古学論集 ― 小田富士雄先生退職記念 ―』小田富士雄先生退職記念事業会：pp.547-564
- 亀田修一・田代健二・重藤輝行・岸本 圭・福本 寛 2004「田川市猫迫1号墳の検討」『古文化談叢』50（下）九州古文化研究会：pp.49-64
- 川西宏幸 1981「前期畿内政権論」『史林』64-5 史学研究会：pp.110-149
- 川西宏幸 1983「中期畿内政権論」『考古学雑誌』69-2 日本考古学会：pp.1-35
- 川西宏幸 1986「後期畿内政権論」『考古学雑誌』71-2 日本考古学会：pp.1-42
- 川畑 純 2016『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究』奈良文化財研究所
- 川畑 純 2018「古墳時代甲冑の系統と授受」『史林』101-2 史学研究会：pp.1-39
- 木更津市教育委員会 1965『上総国木更津市金鈴塚古墳出土品修理報告書』
- 木更津市郷土博物館金のすず 2012『金鈴塚古墳展 ― 蘇る東国古墳文化の至宝 ―』
- 北野耕平 1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』54-4 日本考古学会：pp.1-20
- 木下 良 1999「律令制下における宗像郡と交通」『宗像市史 通史編2』宗像市史編纂委員会：pp.161-221
- 木村龍生 2007「須恵器 ― 時期・産地比定 ―」『菊水町史 江田船山古墳編』菊水町史編纂委員会：pp.178-184
- 久住猛雄 2018「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋南部・二日市地峡北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態Ⅰ ― 弥生時代終末期～古墳時代前期 ―（追加資料）』九州前方後円墳研究会：pp.465-508
- 栗林誠治 1993「古墳時代・甕の分類と変遷」『真珠』2 徳島県埋蔵文化財研究会：pp.73-99
- 栗林誠治 2004「馬具の生産と地域展開 ― 偏在分布する馬具と修理痕を有する馬具 ―」『鉄器文化の多角的研究』鉄器文化研究会：pp.13-40
- 小嶋 篤 2009「鉄滓出土古墳の研究 ― 九州地域 ―」『古文化談叢』61 九州古文化研究会：pp.139-167
- 小嶋 篤 2011「筑前の鉄釘出土古墳」『古文化談叢』65 九州古文化研究会：pp.33-50
- 小嶋 篤 2012「墓制と領域：胸肩君一族の足跡」『研究論集』37 九州歴史資料館：pp.1-26
- 小嶋 篤 2013「百合ヶ丘古墳群出土鉄製品についての検討」『百合ヶ丘古墳群』苅田町文化財調査報告書45：pp.140-149
- 小嶋 篤 2015「菅見大塚古墳出土鉄鏃の検討」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』17 九州歴史資料館：pp.88-92
- 小嶋 篤 2016『大宰府の軍備に関する考古学的研究』九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
- 小林行雄 1950a「古墳時代における文化の伝播（上）」『史林』33-3 史学研究会
- 小林行雄 1950b「古墳時代における文化の伝播（下）」『史林』33-4 史学研究会
- 小林行雄 1951a「上代日本における乗馬の風習」『史林』34-3 史学研究会：pp.1-18
- 小林行雄 1951b『日本考古学概説』東京創元社

- 後藤守一 1939「上古時代鉄鍬の年代研究」『人類学雑誌』54-4 東京人類学会：pp.1-29
- 斎藤 弘 1984「鈴杏葉の分類と編年について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX — 古墳文化研究会 —：pp.71-83
- 阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社
- 酒巻忠史 2006「金鈴塚古墳出土遺物（土器）の再整理」『木更津市文化財調査集報』11 木更津市教育委員会：pp.1-26
- 坂元義種 1967「古代東アジアの国際関係 — 上 — 和親・封冊・使節よりみたる」『ヒストリア』49 大阪歴史学会：pp.1-25
- 坂元義種 1968「古代東アジアの国際関係 — 下 — 和親・封冊・使節よりみたる」『ヒストリア』50 大阪歴史学会：pp.37-52
- 重藤輝行 2015「山の神古墳横穴式石室の時期と系譜」『山の神古墳の研究 — 「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に —』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室：pp.225-233
- 白井克也 2003「馬具と短甲による日韓交差編年 — 日韓古墳編年の並行関係と暦年代 —」『土曜考古』27 土曜考古学会：pp.85-114
- 白井久美子・芳賀正和 1996「古墳に使用された礫石」『土筆』4 土筆舎：pp.142-149
- 神 啓崇・西 幸子・桃崎祐輔 2018「岩戸山古墳石馬の馬装研究」『古文化談叢』81 九州古文化研究会：pp.51-78
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鍬について」『樞原考古学研究所論集8』吉川弘文館：pp.529-644
- 下垣仁志 2010「威信財論批判序説」『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会：pp.97-127
- 下垣仁志 2018『古墳時代の国家形成』吉川弘文館
- 鈴木一有 1999「遠江における後期古墳の副葬品にみる階層性」『三河の後期古墳を考えるⅡ』三河古墳研究会：pp.12-15
- 鈴木一有 2003a「中期古墳における副葬鍬の特質」『研究報告』11 帝京大学山梨文化財研究所：pp.49-70
- 鈴木一有 2003b「後期古墳に副葬される特殊鉄鍬の系譜」『静岡県埋蔵文化財研究所研究紀要』10：pp.217-236
- 鈴木一有 2003c「副葬鍬の変質」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会：pp.11-25
- 鈴木一有 2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳調査報告編』静岡県埋蔵文化財調査研究所：pp.163-174
- 鈴木一有 2010「古墳時代後期の衝角付冑」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会：pp.503-523
- 鈴木一有 2014a「七観古墳出土遺物からみた鋳留技法導入期の実相」『七観古墳の研究 — 1947年・1952年出土遺物の再検討 —』七観古墳研究会：pp.353-380
- 鈴木一有 2014b「朝鮮半島出土の倭系武装にみる日韓交流」『武器・武具と農工具・漁具 — 韓日 三国・古墳時代資料 —』『韓日交渉の考古学 — 三国時代・古墳時代 —』第2回共同研究会：pp.33-47
- 鈴木一有 2016a「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告59：pp.221-248
- 鈴木一有 2016b「武器・武具生産 — 渡来人と武装具のかかわり —」『季刊考古学』137 雄山閣：pp.32-36
- 鈴木一有 2017「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王権」『志段味古墳群Ⅲ — 志段味大塚古墳の副葬品 —』名古屋市文化財調査報告94：pp.175-186
- 鈴木 勉 2004『ものづくりと日本文化』樞原考古学研究所附属博物館選書1
- 関 義則 2018「旧岡部町四十塚古墳の鈴杏葉」『埼玉県立史跡の博物館紀要』11：pp.61-74
- 高久健二 2018「新羅積石木槨墓の埋葬プロセス 皇南大塚を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』211：pp.167-209
- 高崎市観音塚考古資料館 2007『バルメット，日本上陸 — 古墳時代の植物文様』
- 高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係 — 新羅・百済・大加耶と倭の交渉史 —』吉川弘文館
- 高田貫太 2017『海の向こうから見た倭国』講談社現代新書
- 滝沢 誠 2015『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社
- 田中晋作 2001『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社
- 田中新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具 — 年代と系譜の検討」『古代探叢 — 滝口宏先生古希記念考古学論集 —』早稲田大学出版部
- 田中新史 2006「野々間古墳出土遺物の検討」『土筆』9 土筆舎：pp.677-709
- 田中俊明 2001「高句麗の軍制」『季刊考古学』76 雄山閣：pp.75-78

- 田中史生 1999 「七世紀の寺と「家」－「家産」管理の側面からの考察－」『国史学』169：pp.89-118
- 田中史生 2018 「磐井の乱前後の北部九州と倭王権」『日本古代史の方法と意義』勉誠出版：pp.289-312
- 田中由理 2015 「5世紀後葉から6世紀前葉の日本列島の馬具生産とその背景」『古代武器研究』11 古代武器研究会：pp.27-38
- 立田洋司 1997 『唐草文様 世界を駆けめぐる意匠』講談社
- 館野和己 1978 「屯倉制の成立－その本質と時期－」『日本史研究』190 日本史研究会：pp.1-30
- 田村隆太郎 2018 「静岡県の後期古墳研究にみる「東西のはざま」の評価」『境界の考古学』静岡県考古学会：pp.61-72
- 長 直信・中島 圭 2013 「福岡県内出土の八女系須恵器について」『古墳時代の地域間交流Ⅰ』九州前方後円墳研究会：pp.193-211
- 辻田淳一郎 2006 「威信財システムの成立・変容とアイデンティティ」『東アジア古代国家論－プロセス・モデル・アイデンティティ－』すいれん舎：pp.31-64
- 辻田淳一郎 2012 「雄略朝から磐井の乱に至る諸変動」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会：pp.489-498
- 土屋隆史 2017 「善一田18号墳出土盛矢具の意義」『乙金地区遺跡群23』〈中巻〉大野城市教育委員会：pp.125-140
- 土屋隆史 2018 『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の形成過程』岩波書店
- 都出比呂志編 1989 『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱－」『日本史研究』343 日本史研究会：pp.5-33
- 寺谷亮司 2002 『都市の形成と階層分化－新開地北海道・アフリカの都市システム－』古今書院
- 中井 歩 2015 「鉄鍬」『山の神古墳の研究－「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に－』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室：pp.57-74
- 中久保辰夫 2018 「古墳時代中期甲冑および須恵器の集成」『X線CT調査による古墳時代甲冑の研究』鹿児島大学総合研究博物館：pp.87-96
- 中島 圭 2007 「福岡県内における製鉄・鍛冶の様相」『牛頸本堂遺跡群Ⅶ～第7次調査～』大野城市文化財調査報告書81：pp.263-274
- 永沼律朗 1983 「鈴杏葉考」『古代』75・76合併号：pp.1-28
- 西岡千絵 2005 「飛燕式鉄鍬の研究」『七隈史学』6 七隈史学会：pp.17-25
- 西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』10 岡山史学会：pp.154-207
- 西 幸子 2016 「福岡平野における馬具在地生産の可能性の検討」『古文化談叢』76 九州古文化研究会：pp.67-104
- 朴天秀 2007 『伽耶と倭－韓半島と日本列島の考古学－』講談社選書メチエ398 講談社
- 橋本達也 1995 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義－眉庇付冑を中心として－」『考古学雑誌』80-4 日本考古学会：pp.1-33
- 橋本達也 2002 「鋤崎古墳出土短甲の意義」『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書730：pp.127-129
- 橋本達也 2005 「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論－松林山古墳と津堂城山古墳から－」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学友の会：pp.539-556
- 橋本達也 2010 「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価－中期と後期を分かつもの－」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会：pp.481-501
- 橋本達也 2012 「東アジアにおける眉庇付冑の系譜－マロ塚古墳出土眉庇付冑を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』173：pp.411-434
- 橋本達也 2016 「古墳時代中期の武装具体系とその意義」『古代日韓交渉の実態』国立歴史民俗博物館：pp.1-6
- 橋本達也・鈴木一有 2014 『古墳時代甲冑集成』大阪大学大学院文学研究科
- 波多野皖三・小田富士雄 1964 「筑後・岩戸山古墳新発見の埴輪列、石製品の調査」『九州考古学』20・21 九州考古学会：pp.1-9

- 土生田純之 2012「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書120：pp.329-348
- 濱崎範子 2008「韓半島出土の鉄製鍛冶具について ― 日韓出土資料の比較から ―」『朝鮮古代研究』9 朝鮮古代研究刊行会：pp.51-64
- 菱田哲郎 2007『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 日高 慎 2000a「雲母片岩使用の横穴式石室と箱形石棺」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会：pp.95-107
- 日高 慎 2000b「風返稲荷山古墳出土須恵器をめぐる諸問題」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会：pp.109-120
- 福岡弘道 2006「弓研究 1 ― 古墳時代以前の弭 ―」『七隈史学』7 七隈史学会：pp.87-96
- 舟山良一 2010「牛頸窯跡群の生産体制解明に向けて」『古代窯業の基礎研究 ― 須恵器窯の技術と系譜 ―』真陽社
- 福尾正彦 1989「岩戸山古墳出土の冑着装円体石人頭部に関する若干の考察」『古文化談叢』21 九州古文化研究会：pp.93-103
- 福岡匡朗 2016「国越古墳の被葬者について」『考古学は科学か ― 田中良之先生追悼論文集 ― 下』田中良之先生追悼論文集編集委員会：pp.647-658
- 藤田和尊 1988「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集 8』吉川弘文館：pp.425-527
- 藤田和尊 2006『古墳時代の王権と軍事』学生社
- 藤原 哲 2018『日本列島における戦争と国家の起源』同成社
- ブルース・パートン 2000『日本の「境界」前近代の国家・民族・文化』青木書店
- 古川 匠 2007「東九州（豊前・豊後地域）における中期古墳の検討」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会：pp.205-221
- 古川 匠 2019『古墳時代の装飾馬具生産体制』雄山閣
- 平野隆之 2008「出土遺物の検討 ― 10号墳出土遺物の検討と被葬者像 ―」『高丸・友田遺跡群』岡垣町文化財発掘調査報告書27：pp.222-234
- 穂積裕昌 2012「伊勢神宮成立に関する考古学的評価」『古代学研究』194 古代学研究会：pp.1-23
- 松浦宇哲 2005「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学友の会：pp.657-670
- 松尾充晶 2014「社殿の成立過程とその背景 ― 出雲国 ―」『古代文化』66-3 古代学協会：pp.90-100
- 松木武彦 1984「原始・古代における弓の発達 ― とくに弭の形態を中心に ―」『待兼山論叢』史学篇：pp.18-22
- 右島和夫 2011「横穴式石室の鉤状鉄製品」『古文化談叢』65（4）九州古文化研究会：pp.101-124
- 三崎良章 2002『五胡十六国 ― 中国史上の民族大移動 ―』東方書店
- 水野清一・長廣敏雄 1953「雲岡石窟：西暦五世紀における中国北部佛教窟院の考古學的調査報告：東方文化研究所調査 昭和十三年-昭和二十年. 第八卷・第九卷 第十一洞および第十二洞」京都大學人文科學研究所雲岡刊行會
- 水野敏典 1993「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬 ― 長頸鏃の形態変遷と計量の相関に見る武器供給から ―」『古代』早稲田大学考古学会：pp.74-104
- 水野敏典 2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会：pp.29-41
- 三田覚之 2015「仏教美術を中心とする上代工芸作品から見た金鈴塚古墳出土金具」『金鈴塚古墳研究』3 木更津市郷土博物館金のすず：pp.14-27
- 宮代栄一 1998「古墳文化における地域性 ― 九州地方出土の環状鏡板付轡を中心に ―」『駿台史学』102 駿台史学会：pp.111-129
- 宮代栄一 2010「名古屋博物館所蔵の馬具について」『美濃の考古学』11 美濃の考古学刊行会：pp.100-113
- 宮代栄一 2016「馬具でなくなった馬具 ― 古墳時代後期における馬具の副葬形態をめぐる一考察 ―」『駿台史学』157 駿台史学会：pp.47-68
- 宮代栄一・谷畑美帆 1996「続・埼玉県内出土の馬具一副葬品としての馬具分析の問題点」『埼玉考古』32 埼玉考古学会：pp.117-152
- 宮代栄一・林田和人・美濃口紀子 2014「熊本市稲荷山古墳出土遺物の研究」『古文化談叢』71 九州古文化研究会：pp.135-202
- 村川義典 2012「芦屋市三条岡山遺跡の祭祀遺構」『菟原Ⅱ ― 森岡秀人さん還暦記念論文集 ―』菟原刊行会：pp.575-584
- 本村豪章 1977「後期古墳の一樣相 ― 安芸・御年代古墳を中心として ―」『考古論集 ― 慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集 ―』松

- 崎寿和先生退官記念事業会：pp.335-352
- 桃崎祐輔 1999「日本列島における騎馬文化の受容と拡散 — 殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響 —」『渡来文化の受容と拡散 — 5世紀における政治的・社会的変化の具体相（2） —』埋蔵文化財研究会：pp.373-420
- 桃崎祐輔 2000「風返稲荷山古墳出土銅鏡の検討」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会：pp.121-134
- 桃崎祐輔 2001「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』12 筑波大学考古学フォーラム：pp.1-36
- 桃崎祐輔 2002「筑内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.36-74
- 桃崎祐輔 2005a「コトからモノへ — 古墳時代馬具研究の立場からモノへの回帰を論じる —」『西欧中世比較史料論研究：平成17年度研究成果年次報告書』：pp.17-23
- 桃崎祐輔 2005b「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会：pp.99-124
- 桃崎祐輔 2006「金属器模倣須恵器の出現とその意義」『筑波大学 先史学・考古学研究』17 筑波大学考古学研究室：pp.81-101
- 桃崎祐輔 2009「長者の隈古墳馬具の検討」『長者の隈古墳・若杉今里窯跡』福岡大学考古学研究室研究調査報告8：pp.64-76
- 桃崎祐輔 2010「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦？、還暦！ — 武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集 —』武末純一先生還暦記念事業会：pp.217-255
- 桃崎祐輔 2011「岡山県勝負砂古墳から出土した鍔銅鈴付馬具類の予察」『福岡大学考古資料集成4』福岡大学考古学研究室研究調査報告10：pp.169-195
- 桃崎祐輔 2012「大塚南古墳出土花形鏡板の年代とその歴史的意義」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会：pp.281-297
- 桃崎祐輔 2013「近年の韓国出土古墳時代馬具と日本列島の馬具の比較検討」『日韓交渉の考古学 — 古墳時代 —』「日韓交渉の考古学 — 古墳時代 —」研究会：pp.1-12
- 桃崎祐輔 2014「山王山古墳出土馬具の検討」『山王山古墳』飯塚市文化財調査報告書45：pp.45-57
- 桃崎祐輔 2019a「額田部の馬具と鈴 — 心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって —」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集22 島根県古代文化センター：pp.363-414
- 桃崎祐輔 2019b「庚寅年銘大刀と鈴からみた元岡G6号墳の被葬者像」庚寅銘大刀重要文化財指定記念シンポジウム資料集
- 桃崎祐輔・小嶋 篤 2009「総括」『長者の隈古墳・若杉今里窯跡』福岡大学考古学研究室研究調査報告8：pp.82-87
- 森 公章 2010『倭の五王 5世紀の東アジアと倭王群像』日本史リブレット2 山川出版社
- 森下浩行 1987「九州型横穴式石室考 — 畿内型出現前・横穴式石室の様相 —」『古代学研究』115 古代学研究会：pp.14-36
- 森貞次郎 1956「筑後国風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」『考古学雑誌』41-3 考古学会
- 八尾市文化財調査研究会 2007『小阪合遺跡第41次調査現地説明会資料』
- 柳沢一男 2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」 岩戸山古墳』シリーズ遺跡を学ぶ094 新泉社
- 山尾幸久 1989『古代の日朝関係』塙書房
- 山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社
- 若狭 徹 2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階」『国立歴史民俗博物館研究報告』211：pp.307-350
- 脇坂光彦 1999「広島県尾市・御年代古墳」『季刊考古学』68 雄山閣：pp.45-46

古墳時代刀剣研究文献一覧

日本語文献

ア

- 青笹基史 2019「古墳時代の神奈川県・東京都・埼玉県における社会構造と刀剣」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会：pp.17-21
- 赤崎敏男 1979「九州の主頭大刀」『竹並遺跡』東出版寧楽社：pp.308-319
- 赤沼英男 2005『遺物の組成からみた物質文化交流』岩手県立博物館
- 赤沼英男 2005「日本刀成立過程解明の現状と課題」『考古学ジャーナル』532 ニュー・サイエンス社：pp.3-4
- 赤沼英男 2006「出土遺物の組成からみた古代北方地域出土刀剣類の分類」『北の出土刀を科学する ― 最新科学と考古学からみた刀剣文化史への道程 ―』pp.140-167
- 赤沼英男 2009『東北地方北部および北海道出土刀剣類の形態と組成からみた日本刀成立過程』岩手県立博物館調査研究報告書24
- 赤沼英男・佐藤矩康 2009「藤沢秋森古墳群出土刀剣類の刀装構造と組成に基づく分類」『岩手県立博物館 研究報告』26：pp.23-34
- 浅見恵理 2000「西と東の大刀形埴輪」『埴輪研究会誌』4 埴輪研究会：pp.31-63
- 東 潮 2008「百済の製鉄技術と七支刀」『王権と武器と信仰』同成社：pp.658-667
- 穴沢咏光 1959「蔵手刀の一新例」『考古学雑誌』45-2 日本考古学会
- 穴沢咏光 1965「川崎市新作出土の金銅圭頭柄頭」『あるかいあ』6
- 穴沢咏光 2001a「越後国頸城郡春日山林泉寺付近出土の双竜環柄頭 ― 『古図類纂』『観古集』の所収資料」『新潟考古』12：pp.125-129
- 穴沢咏光 2001b「慶州鶏林路14号墓宝剣の再検討」『土車』121 古代学協会
- 穴沢咏光 2003「マラーヤ・ペレシチェピナ遺宝とその金装環頭大刀 ― ブルガール可汗クヴラートの飾大刀 ―」『新世紀の考古学 ― 大塚初重先生喜寿記念論文集 ―』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会：pp.1019-1034
- 穴沢咏光 2004「アヴァールとその環頭大刀」『三笠宮殿下米寿記念論集』刀水書房：pp.19-32
- 穴沢咏光 2005「群馬県佐波郡玉村町下茂木オトカ塚古墳の出土遺物および関係文書について」『史学』74-1・2：pp.1-38
- 穴沢咏光 2008「韓半島南部出土と伝えられる列島系双竜環頭大刀について」『王権と武器と信仰』同成社：pp.739-748
- 穴沢咏光 2011「装飾付大刀研究最近の進歩」『考古学ジャーナル』616 ニュー・サイエンス社：p.1
- 穴沢咏光・近藤真佐夫・横須賀倫達 2010「会津若松市大塚山横穴墓群出土鉄刀の研究 ― 象嵌鉄刀の発見とその意義 ―」『福島考古』51 福島県考古学会：pp.63-82
- 穴沢咏光・新谷武夫 1988「山口県秋芳町・里古墳出土の単鳳環頭大刀」『古文化談叢』20（上）九州古文化研究会：pp.37-46
- 穴沢咏光・新谷武夫 1989「山口県秋芳町・里古墳出土の単鳳環頭大刀」についての補足」『古文化談叢』20（下）九州古文化研究会：pp.22
- 穴沢咏光・中村五郎 1972「福島県真野寺内20号墳に関する考察」『考古学研究』19-1 考古学研究会：pp.67-78
- 穴沢咏光・馬目順一 1976「龍鳳文環頭大刀試論」『百済研究』7 忠南大學校百済研究所：pp.229-263
- 穴沢咏光・馬目順一 1977「頭椎大刀試論 ― 福島県下出土例を中心にして ― 〈付・頭椎大刀出土地目録〉」『福島考古』18 福島県考古学会：pp.89-108
- 穴沢咏光・馬目順一 1978「東北地方出土の環頭大刀の諸問題」『福島考古』19 福島県考古学会：pp.63-82
- 穴沢咏光・馬目順一 1979a「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」『物質文化』33 物質文化研究会：pp.1-22
- 穴沢咏光・馬目順一 1979b「郡山市牛庭出土の銀作大刀」『福島考古』20 福島県考古学会：pp.101-116
- 穴沢咏光・馬目順一 1979c「伝・羽前最上郡塚塚出土の金銅双鳳環柄頭」『山形考古』3-2 山形考古学会：pp.1-7
- 穴沢咏光・馬目順一 1980a「蟹目釘付鞘尾装具をもつ飾大刀とその系統について」『福島考古』21 福島県考古学会：pp.13-22
- 穴沢咏光・馬目順一 1980b「慶州鶏林路14号墓出土の嵌玉金装短剣をめぐる諸問題〈付〉慶州鶏林路出土の短剣についてのソ連邦・西独

- の考古学者の諸見解」『古文化談叢』7 九州古文化研究会：pp.245-278
- 穴沢咏光・馬目順一 1983a「三累環刀試論 — 伝・常陸岩井出土の竜紋三累環柄頭を中心にして —」『古文化論叢 — 藤沢一夫先生古希記念 —』藤沢一夫先生古希記念論集刊行会：pp.293-328
- 穴沢咏光・馬目順一 1983b「南原郡月山里出土金銀錯素環頭大刀に寄せて — 日韓出土の鉄製金銀錯刀装具の系譜 —」『古代文化』35-5 古代学協会：pp.28-29
- 穴沢咏光・馬目順一 1984「三国時代の環頭大刀」『考古学ジャーナル』236 ニュー・サイエンス社：pp.16-20
- 穴沢咏光・馬目順一 1985a「獅噛環刀試考」『信濃』31-4 信濃史学会：pp.1-17
- 穴沢咏光・馬目順一 1985b「出雲出土の獅噛環頭大刀」『八雲立つ風土記の丘』69・70合併号 島根県立八雲立つ風土記の丘
- 穴沢咏光・馬目順一 1985c「玉纏太刀の源流 — 東葉福泉洞22墓出土の青銅製七頭鈴に寄せて —」『古文化談叢』15 九州古文化研究会：pp.271-281
- 穴沢咏光・馬目順一 1986a「単竜・単鳳環頭大刀の編年と系列 — 福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単竜環頭大刀に寄せて —」『福島考古』27 福島県考古学会：pp.1-22
- 穴沢咏光・馬目順一 1986b「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布 — 一つの試論 —」『考古学ジャーナル』266 ニュー・サイエンス社：pp.16-22
- 穴沢咏光・馬目順一 1987a「獅噛環刀試考（改稿版）」『日本考古学論集8 — 武器・馬具と城柵 —』吉川弘文館：pp.133-162
- 穴沢咏光・馬目順一 1987b「古新羅墳丘墓出土の環頭大刀」『朝鮮学報』122 朝鮮学会：pp.168-190
- 穴沢咏光・馬目順一 1988a「金銅装単鳳環頭大刀の柄頭破片」『海老名本郷II』：pp.269-272
- 穴沢咏光・馬目順一 1988b「井上コレクションの単鳳環頭大刀柄頭」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社：pp.242-246
- 穴沢咏光・馬目順一 1988c「井上コレクションの金銅製大刀の伏金系鞘金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社：pp.247-249
- 穴沢咏光・馬目順一 1989「武器・武具と馬具」『古代を考える 古墳』吉川弘文館：pp.171-206
- 穴沢咏光・馬目順一 1990「足利市西宮町長林寺裏古墳（機神山22号墳）出土の双龍環頭大刀」『古代』89 早稲田大学考古学会：pp.208-226
- 穴沢咏光・馬目順一 1993「陝川玉田出土の環頭大刀群の諸問題」『古文化談叢』30（上）九州古文化研究会：pp.367-385
- 穴沢咏光・馬目順一 1996「メトロポリタン美術館所蔵傳洛陽出土の環頭大刀を論じて唐長安大明宮出土品に及ぶ」『古文化談叢』36 九州古文化研究会：pp.79-91
- 穴沢咏光・馬目順一 2002「出羽出土の韓半島系環頭大刀」『悠山姜仁求教授停年記念 東北亞古文化論叢』悠山姜仁求教授停年記念 東北亞古文化論叢編纂委員會 韓國精神文化研究院：pp.443-463
- 穴沢咏光・馬目順一・今津節生 1989「会津大塚山古墳出土の鉄製三葉環頭大刀について」『福島考古』30 福島県考古学会：pp.41-61
- 穴沢咏光・馬目順一・中山清隆 1979「相模出土の環頭大刀の諸問題」『神奈川考古』6 神奈川考古同人会：pp.59-76
- 安間拓巳 2013「安芸高田市吉田町明官地古墳群の調査研究（2） — 第2・3・4号古墳の墳丘と出土遺物の調査 —」『芸備』43 芸備友の会：pp.37-59
- 荒木幸治 2018「後期古墳の武器とその次代」『武器からみた古墳時代の播磨』第18回播磨考古学研究集会実行委員会：pp.37-50
- 荒田敬介 2019「鉄製武器からみた弥生時代における西日本の地域間交流」『弥生時代における東西交流の実態 — 広域的な連動性を問う —』西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会合同シンポジウム予稿集：pp.87-100
- 有馬義人 2001「宮崎県出土の環頭大刀集成」『宮崎考古』17 宮崎考古学会：pp.45-55
- 有馬義人 2008「九州の裝飾付大刀 — 環頭大刀の集成と検討 —」『後期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会：pp.61-78
- 安藤鴻基 1984「房総出土の飾大刀」『年報』7 千葉県立房総風土記の丘：pp.22-29
- 安藤道由 2004「武器」『千葉県の歴史 — 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物） —』千葉県：pp.822-831

イ

- 五十嵐聡江 2014「房の沢古墳群の編年から古墳群の展開を探る」『山田湾まるごとスクールのしおり』山田湾まるごとスクール事務局 新潟大学災害・復興科学研究所 危機管理・災害復興分野：pp.51-65
- 李漢祥 2006「伽耶の装飾大刀の変遷と画期」『古代武器研究』7 古代武器研究会：pp.58-69
- 行田裕美・保田義治 1989「津山市天神原1号墳 ― とくに金銅装双龍環頭大刀と共伴遺物について ―」『古代吉備』11：pp.55-64
- 李 勲 2008「瑞山富長里墳丘墓と装飾大刀」『古代武器研究』9 古代武器研究会：pp.26-38
- 池上 悟 2011a「東国後期古墳出土大刀の様相」『立正大学大学院紀要』27 立正大学大学院文学研究科：pp.95-133
- 池上 悟 2011b「東国古墳出土の刃関孔大刀」『施檀林の考古学 ― 大竹憲治先生還暦記念論文集 ―』大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会：pp.235-246
- 池上 悟 2013「南武蔵における終末期古墳の築造企画」『考古学の諸相3 ― 坂詰秀一先生喜寿記念論文集 ―』立正大学考古学会：pp.87-96
- 池田源太 1983「刀剣の呪術的性格 ― その生態学的視角を立てる ―」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』9：pp.1-9
- 池田征弘 2009「金銅装単鳳環頭大刀について」『窟屋1号墳』兵庫県文化財調査報告353：pp.53-56
- 池畑耕一 2003「蛇行剣についての諸問題」『考古学ジャーナル』498 ニュー・サイエンス社：pp.4-5
- 池畑耕一 2011「鹿児島県出土の蛇行剣の特性」『施檀林の考古学 ― 大竹憲治先生還暦記念論文集 ―』大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会：pp.373-384
- 池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察 ― 古墳時代前半期の刀剣類を中心として ―」『古代文化研究』1 島根県古代文化センター：pp.41-104
- 池淵俊一 2003a「鉄製大刀」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター：pp.97-99
- 池淵俊一 2003b「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観7 ― 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 ―』小学館：pp.167-172
- 池淵俊一 2014「古墳時代前期における刀剣ヤリ矛の編年研究の課題」『前期古墳編年を再考する ― 広域編年再構築の試み ―』中国四国前方後円墳研究会：pp.71-90
- 池淵俊一 2018「刀剣ヤリ鉞」中国四国前方後円墳研究会編『前期古墳編年を再考する』六一書房：pp.77-87
- 池淵俊一 2019「武器からみた伯耆国分寺古墳の年代」『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会：pp.53-60
- 李鉉相 2014「百濟漢城期装飾大刀の製作技法の検討 ― 水村里と龍院里を中心に ―」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.50-60
- 石井昌国 1966『蔵手刀 ― 日本刀の始原に関する一考察 ―』雄山閣
- 石井昌国 1974「古代の刀剣」『日本古代文化の探求 鉄』社会思想社：pp.151-179
- 石井昌国・佐々木稔 1995『古代刀と鉄の科学』考古学選書39 雄山閣
- 石川考古学研究会 1996『武器・武具・馬具Ⅰ』石川県考古資料調査・集成事業報告書
- 石橋茂登・諫早直人・大河内隆之 2016「飛鳥寺塔心礎出土刀子」『奈良文化財研究所紀要2016』：pp.18-21
- 石橋 宏 2009「鉞」『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳 史跡整備事業報告書 第2分冊 遺物・分析・考察編』高崎市文化財調査報告書231 (2)：pp.166-167
- 泉森 皎 1985「刀剣の出土状態の検討 ― 刀剣の呪術的性格の理解のために ―」『末永先生米壽記念献呈論文集 乾』末永先生米寿記念会：pp.393-435
- 遺跡発行会 2011「愛媛県鉄製武器・武具出土遺跡一覧表」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.67-98
- 一瀬和夫 1996「大刀外装の変化」『金の大刀と銀の大刀 ― 古墳・飛鳥の貴人と階層 ―』大阪府立近つ飛鳥博物館図録9：pp.74-83
- 市原市教育委員会・市原市文化財センター 1988『「王賜」銘鉄剣概報 ― 千葉県市原市稲荷台1号墳出土』吉川弘文館
- 伊藤玄三 1967「直弧文の分類について ― 所謂「直弧文C型」不在論 ―」『考古学雑誌』53-1 日本考古学会

- 伊藤玄三 1968「志摩半島御座の鹿角装刀」『古代学研究』52 古代学研究会：pp.17-24
- 伊藤玄三 1973「福島県上の原4号墳の鹿角製刀装具」『福島考古』14 福島県考古学会：pp.74-83
- 伊藤玄三 1980「鹿角製刀剣装具の直弧紋」『法政大学文学部 紀要』26：pp.7-32
- 伊藤雅文 2002「銚状鉄製品から見る古墳前期の鉄器製産」『究班Ⅱ ― 埋蔵文化財研究会25周年記念論文集 ―』25周年記念論文集編集委員会：pp.227-236
- 伊藤雅文 2008「中部地方出土の蛇行剣」『古代学研究』180 古代学研究会：pp.295-302
- 伊東信雄 1938「北見出土の蔵手刀に就いて」『考古学雑誌』28-7 日本考古学会
- 稲本章宏 2013「丸山古墳に関する一試論」『千葉文華』42 千葉県文化財保護協会：pp.1-12
- 稲田健一 2016a「館出支群Ⅰ区第32号墓出土の大刀」『十五郎穴横穴墓群 ― 東日本最大級の横穴墓群の調査 ―』ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告42：pp.237-238
- 稲田健一 2016b「館出支群Ⅰ区第35号墓出土の刀子」『十五郎穴横穴墓群 ― 東日本最大級の横穴墓群の調査 ―』ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告42：p.262
- 稲田健一・高木寛之 2016「十五郎穴横穴墓群出土鉄製品のX線CT調査」『十五郎穴横穴墓群 ― 東日本最大級の横穴墓群の調査 ―』ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告42：pp.208-224
- 井上一樹 2005「直弧文の成立過程」『立命館大学考古学論集Ⅳ』立命館大学考古学論集刊行会：pp.131-153
- 井上一樹 2007「茨城県舟塚古墳出土刀装具片の直弧文」『明治大学博物館 研究報告』12：pp.79-88
- 井上一樹 2008a「奈良県大和天神山古墳出土木製装具の文様について」『鹿園雑集』10 奈良国立博物館：pp.111-121
- 井上一樹 2008b「伝・茨城県舟塚古墳出土鹿角製刀子柄の直弧文」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 井上一樹 2010a「関西大学博物館所蔵鹿角製刀剣装具の直弧文」『立命館大学考古学論集Ⅴ』立命館大学考古学論集刊行会
- 井上一樹 2010b「鹿角製刀剣装具」立命館大学考古学資料集3 立命館大学考古学論集刊行会
- 井上一樹 2013「福井県西谷山2号墳出土鹿角製鞘尻の直弧文」『立命館大学考古学論集Ⅵ ― 和田晴吾先生定年退職記念論集 ―』立命館大学考古学論集刊行会：pp.273-280
- 井上一樹 2017「福島県上の原4号墳出土鹿角製刀装具の直弧文」『福島考古』59 福島県考古学会
- 井上一樹 2019「西庄遺跡の直弧文について ～ 文様構成と彫り方 ～」『海辺における集落と墓制の実像 ― 磯間岩陰遺跡と西庄遺跡 ―』紀伊考古学研究会第22回大会：pp.60-63
- 井上雅孝 2014「平清水Ⅲ遺跡と蔵手刀」『北三陸の蝦夷・蔵手刀』岩手考古学会：pp.11-16
- 茨城県立歴史館 2009『かがやきにこめた権威と荘厳 ― 金と銀の考古学 ―』
- 李漢祥 2006「伽耶の装飾大刀の変遷と画期」『古代武器研究』7 古代武器研究会：pp.58-69
- 李漢祥 2014「公州水村里古墳群出土の金属装身具と装飾大刀の検討」『第11回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.61-78
- 今尾文昭 1982a「素環頭鉄刀考」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』8：pp.15-62
- 今尾文昭 1982b「中平紀年銘大刀をめぐる問題 ― 東大寺山古墳出土三葉環頭大刀の系譜 ―」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ：pp.191-199
- 今尾文昭 1990「鉄刀と鉄長剣」『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告6 同志社大学文学部文化学科：pp.108-110
- 今尾文昭 2009『古墳文化の成立と社会』古代日本の陵墓と古墳Ⅰ 青木書店
- 岩井顕彦 2007「北近畿出土弥生時代鉄剣の再検討」『物質文化』84 物質文化研究会：pp.23-42
- 岩井顕彦 2019「西庄遺跡出土の刀剣装具」『海辺における集落と墓制の実像 ― 磯間岩陰遺跡と西庄遺跡 ―』紀伊考古学研究会第22回大会：pp.50-59
- 岩城三郎 1942「伊予国今治市近見発見の環頭大刀柄頭」『考古学雑誌』32-6 日本考古学会
- 岩崎卓也 1986「刀剣類について」『武者塚古墳』新治村教育委員会：pp.80-81

- 岩崎卓也・松尾昌彦 1987「古墳時代の道具」『長野県史 考古資料編 全1巻 (4) 遺構・遺物』長野県史刊行会：pp.518-572
- 岩手考古学会 2014『北三陸の蝦夷・蕨手刀』
- 岩橋孝典 2019「水晶生三輪玉の変遷とその政治・社会的背景」『古墳時代の玉類の研究』島根県古代文化センター研究論集21：pp.159-182
- 岩原 剛 1998a「牟呂王塚古墳について」『市場遺跡・市杵嶋神社古墓群・牟呂王塚古墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告書42：pp.177-178
- 岩原 剛 1998b「飾大刀について」『磯辺王塚古墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告書43：pp.122-129
- 岩原 剛 2001a「東海の飾大刀」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会：pp.175-197
- 岩原 剛 2001b「副葬品の変質 — 東海地方における後期古墳の副葬品から —」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会：pp.407-428
- 岩原 剛 2002「北長尾3号墳出土の象嵌装大刀」『豊橋市美術館 研究紀要』11
- 岩原 剛 2003「田原町神明社古墳の調査」『三河考古』18 三河考古談話会：pp.73-90
- 岩原 剛 2005「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.37-48
- 岩本 崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』90-4 日本考古学会：pp.1-35
- 岩本 崇 2010「古墳時代中期刀剣の復元的検討」『史跡 茶すり山古墳』総括編 兵庫県文化財調査報告383：pp.481-499
- 岩本 崇 2011「キコロジ遺跡出土木製柄装具と刀剣装具の生産」『農村振興総合整備事業 宍道湖中海沿岸地区（長善寺ため池）に伴うキコロジ遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団：pp.60-65

ウ

- 上田正昭・大塚初重監修，金井塚良一編 2001『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』学生社
- 禹在柄 1991「素環刀の型式学的研究」『待兼山論叢』25 史学篇 大阪大学文学部
- 禹在柄 1999「鉄剣の型式学的研究」『国家形成期の考古学 — 大阪大学考古学研究室10周年記念論集 —』大阪大学考古学研究室：pp.431-456
- 禹柄喆 2008「鉄鍬と鉄鉾からみた新羅，加耶，そして倭」『日・韓交流の考古学』嶺南考古学会・九州考古学会：pp.141-162
- 禹柄喆 2009「4～5世紀における新羅と倭の武器体系についての比較検討」『嶺南文化財研究院・大阪市文化財協会交流10周年記念 Symposium古代嶺南と大阪の出会い — 道路・土器・鉄器 —』嶺南文化財研究院：pp.315-331
- 禹柄喆 2014「三国時代装飾大刀の特性と系譜」『武器・武具と農工具・漁具 — 韓日 三国・古墳時代資料 —』『日韓交渉の考古学 — 三国時代・古墳時代 —』第2回共同研究会：pp.83-102
- 上掬 武 2008「穴が遼古墳出土銀装円頭大刀の構造的特質」『八幡山遺跡 八幡山南遺跡 八幡山門明寺跡 尾崎遺跡 中町B遺跡 穴が遼遺跡 穴が遼古墳 今岡D遺跡 今岡中山遺跡 今岡古墳群 高岡遺跡 (第2分冊)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213 岡山県文化財保護協会：pp.443-447
- 上掬 武 2014「岡山市西山3号墳出土刀装具の装着状況復元」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.115-125
- 上掬 武 2019「岡山県総社市こうもり塚古墳出土の単鳳環頭大刀」『文化財と技術』9 工芸文化研究所：pp.5-12
- 白杵 勲 1984a「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX — 古墳文化研究会 —：pp.49-70
- 白杵 勲 1984b「鯨本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』31-1 考古学研究会：pp.97-106
- 白杵 勲 1985「古墳出土鉾の分類と編年」『日本古代文化研究』2 PHALANX — 古墳文化研究会 —：pp.1-7
- 白杵 勲 1986「古墳出土鉄刀の多変量解析」『日本古代文化研究』3 PHALANX — 古墳文化研究会 —：pp.21-32
- 白杵 勲 1990「武器」『考古学ジャーナル』321 ニュー・サイエンス社：pp.15-19
- 白杵 勲 1992「柴又八幡神社古墳出土鉄刀と7世紀型鉄刀」『柴又八幡神社古墳』葛飾区郷土と天文の博物館：pp.58-67
- 宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44-1 考古学研究会：pp.72-92

- 宇治田和生 1975「大阪府藤田山古墳発見の鉄剣と鉄斧」『古代学研究』78 古代学研究会：p.31
- 内田律雄 2011「象嵌太刀にみる鶴飼意匠」『青山考古』27 青山考古学会：pp.33-46
- 内山敏行 2000「鉄器副葬の性格を考える上での視点」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会：pp.155-166
- 内山敏行 2011「毛野地域における6世紀の渡来系遺物」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17 雄山閣：pp.142-147
- 内山敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書120：pp.313-324
- 内山敏行 2016「武器の副葬と軍事編成」『金鈴塚古墳のかがやき』国立歴史民俗博物館：pp.27-33
- 内山敏行 2018「武器・武具・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『境界の考古学』日本考古学協会2018年度静岡大会研究発表資料集
日本考古学協会2018年度静岡大会実行委員会：pp.295-308
- 宇野慎敏 2001「海の武装集団 ― 響灘・周防灘沿岸の後期小古墳にみる二つの画期 ―」『勾玉 ― 山中英彦先生退職記念論文集 ―』山中
英彦先生退職記念論文集刊行会：pp.31-40
- 宇野慎敏 2006「豊前北部の武器・甲冑」『行橋市史 資料編 ― 原始・古代 ―』行橋市史編纂委員会：pp.451-477
- 宇野慎敏 2014「金銅製双龍環頭柄頭の製作工程について」『八旗神社古墳群』北九州市文化財調査報告書137：pp.68-72
- 梅原末治 1920「鹿角製刀装具」『大正六年度古蹟調査報告』朝鮮総督府：pp.260-272
- 梅原末治 1923「日本発見刀剣鹿角装具集成」『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告8 京都帝国大学：
pp.106-111
- 梅原末治 1962a「日本出土の漢中平の紀年大刀 ― 大和櫛本東大寺山古墳新出土品 ―」『大和文化研究』7-11：pp.15-25
- 梅原末治 1962b「奈良県櫛本東大寺山古墳出土の漢中平年記の鉄刀」『考古学雑誌』48-2 日本考古学会
- 梅本康広 2012「葛城・伝笛吹古墳群付近出土の装飾大刀 ― 新羅式環頭大刀の展開 ―」『龍谷大学考古学論集Ⅱ ― 網干善教先生追悼論
文集 ―』龍谷大学考古学論集刊行会：pp.217-254

エ

- 会下和宏 2007「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学』23 日本考古学協会：pp.19-39
- 江坂輝弥 1959「福島県下発見の蕨手刀」『古代』31 早稲田大学考古学会：pp.10-12
- 江藤古雄 1977「福島県須賀川市前原古墳群発見の飾大刀2題 ― 環頭・方頭 ―」『福島考古』18 福島県考古学会：pp.75-88
- 遠藤千映美 1999「森北1号墳出土鉄製品の検討」『森北古墳群』創価大学・会津坂下町教育委員会：pp.151-165
- 遠藤千映美 2003「東北地方における前期古墳出土鉄製品の検討」『行政社会論集』15-3 福島大学行政政策学類：pp.69-120

オ

- 大分県前方後円墳研究会 1990「大分県前方後円墳集成Ⅱ ― 大分市市尾上ノ坊古墳の測量調査 ―」『大分考古』3 大分県考古学会：
pp.30-75
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 1996『金の大刀と銀の大刀 ― 古墳・飛鳥の貴人と階層 ―』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 大澤正吾 2015「人物埴輪の大刀表現に関する基礎的検討」『東京国立博物館所蔵 重要考古資料学術報告書 国宝 埴輪 挂甲武人 重要文
化財 埴輪 盛装女子 附 埴輪 盛装男子』同成社：pp.50-65
- 大澤正巳 1995「女原上ノ谷遺跡出土鉄滓と徳永古墳群H群26号墳出土三葉環頭大刀の金属学的調査」『徳永古墳群3 ― H群2次調査 ―
女原上ノ谷製鉄址』福岡市埋蔵文化財調査報告書436：pp.71-79
- 大澤元裕 2005「稲童古墳群出土の武器について」『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書32：pp.327-336
- 大谷晃二 1991「剣の柄の構造」『権現山51号墳』同刊行会：pp.112-113
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 島根考古学会：pp.39-82
- 大谷晃二 1999a「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4：pp.134-
148

- 大谷晃二 1999b「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4：pp.179-193
- 大谷晃二 2001「まとめ」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書10：pp.121-124
- 大谷晃二 2004「日韓の龍鳳文環頭大刀の展開」『古墳出土金工製品の日韓比較研究』大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府弥生文化博物館・大阪府近つ飛鳥博物館：pp.49-68
- 大谷晃二 2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府弥生文化博物館・大阪府近つ飛鳥博物館共同研究成果報告書』大阪府文化財センター：pp.145-164
- 大谷晃二 2010「福島県須賀川市上川原古墳出土の単鳳環頭大刀」『福島考古』51 福島県考古学会：pp.47-62
- 大谷晃二 2011「6世紀の黄金文化 — 大刀と馬具を中心に —」『三遠南信文化交流展 黄金の世紀』豊橋市美術博物館・飯田市美術博物館：pp.155-163
- 大谷晃二 2012「金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこでつくられたか？」『金鈴塚古墳展 — 蘇る東国古墳文化の至宝 —』木更津市郷土博物館金のすず：pp.18-23
- 大谷晃二 2014a「上塩冶横穴墓群32支群出土の銀装大刀」『出雲弥生の森博物館 研究紀要』4：pp.1-10
- 大谷晃二 2014b「双竜環頭大刀の環部文様についての予察」『八旗神社古墳群』北九州市文化財調査報告書137：pp.73-78
- 大谷晃二 2015「金鈴塚古墳出土大刀の研究（1）単竜環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』3 木更津市郷土博物館金のすず：pp.1-13
- 大谷晃二 2016a「金鈴塚古墳出土大刀の研究（2）単鳳環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』4 木更津市郷土博物館金のすず：pp.1-8
- 大谷晃二 2016b「御崎山古墳の獅嚙環頭大刀」『八雲立つ風土記の丘』219 島根県立八雲立つ風土記の丘：pp.2-7
- 大谷晃二 2016c「金鈴塚古墳の装飾付大刀」『金鈴塚古墳のかがやき』国立歴史民俗博物館：pp.9-14
- 大谷晃二 2018a「古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会：pp.91-102
- 大谷晃二 2018b「獅嚙環頭大刀と金銀装大刀の製作と流通」『改めて出自をさぐる！ 獅嚙三累環頭大刀柄頭』八戸市博物館：pp.33-43
- 大谷晃二 2019「石州府1号墳の金銅装頭椎大刀」『古墳と国家形成期の諸問題 — 白石太一郎先生傘寿記念論文集 —』山川出版社：pp.413-418
- 大谷晃二 2020「金銀装大刀と豪族」『大宰府前夜 — 筑紫の大宰と豪族 —』九州国立博物館：pp.2-11
- 大谷晃二・松尾充晶 1999「出雲平野の主要後期古墳とその副葬品」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4：pp.205-211
- 大谷晃二・松尾充晶 2004「島根県装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』20・21 島根考古学会：pp.545-572
- 太田博之 1995「句兵を表現する埴輪」『古代』100 早稲田大学考古学会：pp.345-356
- 太田博之 2001「古墳時代の句兵」『考古聚英 — 梅澤重昭先生退官記念論文集 —』：pp.211-218
- 大塚恵治 2010「岩戸山古墳出土の石製表飾品（石翳・勾金）について」『福岡考古』22 福岡考古談話会：pp.25-30
- 大塚初重 1959「大和政権の形成 武器武具の発達」『世界考古学大系3 — 日本Ⅲ 古墳時代 —』平凡社：pp.67-87
- 大塚初重 2009「金・銀・銅と古代日本人」『かがやきにこめた権威と荘厳 — 金と銀の考古学 —』茨城県立歴史館：pp.1-8
- 大西智和 2003「出土品にみる蛇行剣の意義 — えびの市島内地下式横穴墓群の場合 —」『考古学ジャーナル』498 ニュー・サイエンス社：pp.13-17
- 大西智和 2014「地下式横穴墓出土の蛇行剣の性格」『Archaeology From the South II』新田栄治先生退職記念事業会：pp.239-250
- 大野延太郎 1905「鹿角の剣頭について」『東京人類学会雑誌』236 東京人類学会：pp.62-64
- 大場磐雄 1947「蔵手刀に就いて」『考古学雑誌』34-10 日本考古学会
- 大場磐雄・甘粕 健 1963「千葉県市原市姉崎町山王山古墳出土の環頭太刀」『考古学雑誌』49-2 日本考古学会
- 大橋泰夫 1988「鈴纏大刀小考」『考古回覧』3：pp.17-23
- 大橋泰夫 1993「古墳時代中期における大刀の系譜」『古代』96 早稲田大学考古学会：pp.66-73

- 大場利夫 1954「蔵手刀」『考古学雑誌』40-3 日本考古学会
- 大庭康時 1986「弥生時代鉄製武器に関する試論 — 北部九州出土の鉄剣・鉄刀を中心に —」『考古学研究』33-3 考古学研究会：pp.94-106
- 大前篤子 2001「刀剣装具の装飾とその社会的意義 — 木製・鹿角製装具を中心に —」『滋賀史学会誌』13 滋賀史学会：pp.69-88
- 大道和人 2012「環頭大刀 — 高島の鉄生産との関連で —」『湖を見つめた王 継体大王と琵琶湖』滋賀県立安土城考古博物館：pp.24-26
- 大谷宏治 2000「遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』7：pp.31-55
- 大谷宏治 2001「階層構造論 — 階層構造からみた東海の後期古墳 —」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会：pp.429-450
- 大谷宏治 2003「遠江の装飾付大刀三題」『静岡県考古学研究』35 静岡県考古学会：pp.39-48
- 大谷宏治 2004「鉄鉾について」『寺山古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告149：pp.87-91
- 大谷宏治 2008「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳 調査報告編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告184：pp.175-186
- 大谷宏治 2010a「上神増E2号墳出土の三葉環頭大刀について」『合代島丘陵の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告218：pp.221-224
- 大谷宏治 2010b「上神増B7号墳出土の環付足金物で佩用する大刀について」『合代島丘陵の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告218：pp.225-228
- 大谷宏治 2010c「船津古墳群、須津古墳群、鶴無ヶ淵・間門古墳群の馬具と武器について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告231：pp.177-179
- 大谷宏治 2010d「装飾大刀からみた谷口原30号墳の被葬者の性格」『市内遺跡発掘調査報告書』島田市教育委員会：pp.95-99
- 大谷宏治 2011「象嵌装大刀の変遷 — 円頭・頭椎・圭頭大刀を中心に —」『考古学ジャーナル』616 ニュー・サイエンス社：pp.13-18
- 大谷宏治 2012「象嵌装大刀の拵えについて」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書120：pp.325-328
- 大谷宏治 2013「牧之原市大ヶ谷横穴墓群出土金属製品について」『静岡県埋蔵文化財センター 研究紀要』2：pp.23-34
- 大谷宏治 2016「中原4号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告59：pp.193-208
- 大谷宏治 2018a「磐田市上神増E2号墳出土三葉環頭大刀について」『静岡県埋蔵文化財センター 研究紀要』6：pp.19-22
- 大谷宏治 2018b「東平1号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像」『伝法 東平第1号墳』富士市埋蔵文化財調査報告64：pp.79-100
- 大野 薫 1997「古墳時代鉄製素環頭大刀の観察—東京国立博物館所蔵資料をめぐって」『大阪府文化財調査研究センター調査研究報告』1：pp.129-138
- 大野延太郎 1905「鹿角製の剣頭について」『東京人類学会雑誌』21-236
- 大和久震平 1969「玉纏太刀について」『考古学雑誌』55-2 日本考古学会
- 大和久震平 1987「前橋市小稲荷遺跡3号墳出土の湾曲直刀について」『日本考古学協会第53回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.36-37
- 岡幸二郎 1975「大刀埴輪片」『青陵』29 奈良県立橿原考古学研究所：p.6
- 小笠原信夫 1994『日本刀の拵え』日本の美術332 至文堂
- 小笠原信夫 1997「刀剣概説」『日本のかたな — 鉄のわざと武のこころ —』東京国立博物館：pp.8-33
- 岡田 博・三宅博士 1989「新見市金谷所在の一古墳から出土した双竜環頭大刀と伴出遺物」『古代吉備』11 古代吉備研究会：pp.65-70
- 岡本一秀 2008「伝瓢塚古墳出土環頭の由来」『兵庫県立考古博物館 研究紀要』1：pp.45-53
- 岡本敏行 2000「大刀装具 — 清野謙次コレクションから —」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』5：pp.29-38
- 岡部裕俊・大谷晃二 2015「西堂古賀崎古墳に関する新知見 — 墳丘・石室測量図の発見と単竜環頭大刀の詳細観察の成果 —」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』10：pp.1-13
- 岡安光彦 2005「古墳時代中・後期の画期と武装システムの変化」『古代武器研究』6 古代武器研究会：pp.6-15

- 岡安光彦 2008 「井上1号墳出土の鉄器について」『井上1号墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書30：pp.45-47
- 岡安光彦 2012 「神武東征の考古学」『日本考古学協会第78回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.46-47
- 岡安光彦 2013 「壬申の乱における兵器と兵士 ― 考古学的検討 ―」『土曜考古』35 土曜考古研究会：pp.19-43
- 岡安光彦・白杵 勲・近江かおる・太田浩司 1986 「江田船山古墳象嵌銘鉄刀の製作年代」『考古学研究』32-4 考古学研究会：pp.107-117
- 置田雅昭 1982 「東西礼拝場ふしん地の発掘」『大望』162
- 置田雅昭 1985a 「古墳時代の木製刀柄装具」『天理大学学報』36-3 天理大学学術研究会：pp.39-63
- 置田雅昭 1985b 「古墳時代の木製刀剣鞘装具」『考古学雑誌』71-1 日本考古学会：pp.23-36
- 置田雅昭 1987 「天理参考館所蔵の鉄製品 ― 天理市〔旧丹波市町〕近傍古墳出土 ―」『天理参考館報』創刊号 天理大学付属天理参考館：pp.10-20
- 置田雅昭 1989 「中国 鉄素環頭大刀の柄の構造」『古文化談叢』20（中）九州古文化研究会：pp.77-84
- 置田雅昭 1991 「館蔵鉄刀剣の調査」『天理参考館報』4 天理大学付属天理参考館：pp.134-141
- 置田雅昭 1996 「古墳時代の短剣柄装具」『ヒト・モノ・コトバの人類学 ― 国分直一博士米寿記念論文集 ―』慶友社：pp.580-591
- 奥野正男 2003 「鉄製武器の東漸 ― 直刀の系譜論を中心に ―」『東アジアの古代文化』114 大和書房：pp.2-16
- 尾崎 誠 1996 「河内愛宕塚古墳出土鉄製品の保存処理 ― 竜文銀象嵌口鞘金具の象嵌表出 ―」『八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要』7：pp.57-65
- 尾崎 誠 1997 「岸和田市風吹山古墳出土金属製品の保存処理」『創立30周年記念誌』元興寺文化財研究所：pp.47-53
- 尾崎 誠 2002 「消し象嵌技法に関する復元実験的研究」『元興寺文化財研究所 研究報告2001』
- 尾崎 誠 2005 「銀錯貼金環頭大刀の科学的調査」『開館記念特別展 宮山古墳 姫路市埋蔵文化財センター』pp.30-31
- 押元信幸 2002a 「筑内6号横穴墓出土大刀の鉄地銀被せの技術について」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.223-226
- 押元信幸 2002b 「筑内26号横穴墓出土大刀の復元過程について」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.227-232
- 押元信幸 2005a 「弘法山5号横穴墓出土針葉文銀象嵌大刀」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.48-57
- 押元信幸 2005b 「八幡23号横穴墓出土大刀の花形文象嵌刀身の復元」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.108-118
- 小田富士雄 1966 「九州発見の三累環頭柄頭」『九州考古学』29・30 九州考古学会
- 小田富士雄 1977 「鉄器」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会：pp.207-242
- 小田富士雄 1979 「九州発見の三累環頭柄頭」『九州考古学研究 古墳時代篇』学生社：pp.622-630
- 小野山節 1987 「武器・武具と馬具」『世界考古学大系』日本篇補遺抜刷 天山舎：pp.139-148
- 小山市立博物館 2000 『古代の大刀のかがやき』
- 折原洋一 1997 「房総地域における有窓（孔）鐔について」『生産の考古学 ― 倉田芳郎先生古希記念論集 ―』同成社：pp.109-117
- 折原洋一 2001 「山田・宝馬古墳群の鉄鏃と直刀」『山田・宝馬古墳群 ― 68号墳調査報告書 ―』山武考古学研究所：pp.47-60

カ

- 甲斐貴充 2012 「宮崎県持田古墳群出土三葉環頭大刀について」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』8：pp.35-42
- 甲斐貴充・和田理啓 2012 「古墳時代の日向における対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方考円墳研究会：pp.547-573
- 甲斐寿義 2004 「鹿角装鉄剣・鉄刀」『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』大分県文化財調査報告書171：pp.57-59
- 甲斐寿義 2004 「6号墓羨道部側壁の刺突刀子について」『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』大分県文化財調査報告書171：pp.59
- 鏡山 猛・小田富士雄 1958 「後期古墳出土の金銅装刀子の珍例」『九州考古学』3・4 九州考古学会：pp.5-7
- 鍵谷純子 2013 「技術との接点 ― 銹《錆》を透して見えてくるもの ―」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.204-235
- 角正淳子 2019 「刀剣類からみる古墳時代の三重」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会：

pp.22-25

影山悦子 2015「ユーラシア東部における佩刀方法の変化について — エフタルの中央アジア支配の影響 —」『内陸アジア言語の研究』X
XX 中央ユーラシア学研究会：pp.29-47

梶谷亮治 2016「金銅荘大刀3号の平脱文様について」『国宝 東大寺金銅鎮壇具 保存処理調査報告書』東大寺：pp.279-283

柏木善治 2004「神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討 — 大刀・鉄鐙について —」『研究紀要 かながわの考古学』9 かながわ考古学財団：pp.117-132

柏木善治 2008「副葬大刀から見た相模の地域相 — 後期・終末期の古墳・横穴墓出土遺物からみた地域性の予察する —」『神奈川考古』44 神奈川考古同人会：pp.96-108

柏木善治 2011「6・7世紀における相模地域の動態 — 三ノ宮古墳群を手掛かりとして —」『総研大文化科学研究』7 総合研究大学院大学文化科学研究科：pp.83-109

柏木善治 2014『埋葬技法からみた古代死生観 — 6～8世紀の相模・南武蔵地域を中心として —』雄山閣

柏木善治・立花 実 2004「吾妻坂古墳出土の鉄製武器類について」『吾妻坂古墳 — 出土資料調査報告 —』厚木市教育委員会：pp.53-61

春日皓介・小澤健太・篠田浩輔 2019「鉄製鐙の法量的位置づけ」『穂高古墳群 2016・2017年度F9号墳発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告55 國學院大學考古学研究室：pp.91-96

勝部明生 1968「西郷町下西出土の金銅装大刀」『隠岐』関西大学・島根大学共同隠岐調査会：pp.138-139

勝部明生 1981「弥生時代の鉄製武器」『三世紀の考古学』中巻 学生社：pp.194-212

勝部明生 1993「鉄刀の経年変化について」『関西大学考古学研究室30周年記念論集』関西大学：pp.131-154

勝部明生・鈴木 勉 1998『古代の技 — 藤ノ木古墳の馬具は語る —』吉川弘文館

加藤一郎 2002「素環頭鉄刀の柄の構造について」『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書730：pp.122-126

加藤一郎 2010「雲部車塚古墳出土の剣・刀・ホコについて」『兵庫県立考古博物館 研究紀要』3：pp.115-120

加藤一郎 2013「津堂城山古墳出土の刀剣類について」『津堂城山古墳』古市古墳群の調査研究報告IV 藤井寺市文化財報告33：pp.317-321

加藤俊吾・伊藤幸司・福田さよ子 2006「大阪歴史博物館所蔵の装飾大刀 — その保存処理作業にともなう —」『大阪歴史博物館 研究紀要』5：pp.101-112

金井塚良一 2008「東松山市岩鼻古墳群から出土した蛇行剣について」『埼玉考古』43 埼玉考古学会：pp.3-12

金関 恕 2010a「中平銘大刀の銘文小考一文刀について」『東大寺山古墳の研究 — 初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究 —』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館：pp.413-417

金関 恕 2010b「卑弥呼と中平銘鉄刀」『よみがえるヤマトの王墓 — 東大寺山古墳と謎の鉄刀 —』天理大学附属天理参考館：pp.90-92

金田明大 2001「刀子金具について」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室：pp.340-342

鹿屋市教育委員会 2012『鹿屋市市制5周年記念 第1回文化財シンポジウム 科学で蘇る1500年前の輝き 象嵌装大刀と古代吾平を探る』

鎌田郁雄・山地正夫 1991「観音寺市・母神山古墳群出土の柄頭 — 粟井村某古墳出土の柄頭と久米塚の調査 —」『瀬戸内歴史民俗資料館 紀要』6：pp.118-124

かみつけの里博物館 2019『飾り大刀 — 武器からみた古墳時代のぐんま —』

上村俊雄・酒匂義明 1972「鹿児島県吾平町新発見の地下式土壇」『考古学ジャーナル』68 ニュー・サイエンス社：pp.17-21

亀井正道 1979「船山古墳と銀象嵌大刀」『MUSEUM』340 東京国立博物館：pp.4-16

鴨志田篤二 2003「十五郎横穴墓出土の黒作大刀について」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会：pp.167-176

鴨 重元 1956「小松町南川大日裏山古墳出土銀装の大刀について」『小松史談』37-3 小松史談会

鴨 重元 1956「小松町南川大日裏山・茨谷古墳出土銀装方頭大刀について（第二報）」『小松史談』37-3 小松史談会

川江秀孝 1992「飾大刀」『静岡県史 資料編3 考古3』静岡県：pp.570-602

川江秀孝 1994「潰された飾大刀について — 飾大刀を副葬する静岡県の後期古墳 —」『地域と考古学 — 向坂鋼二先生還暦記念論集 —』

向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会：pp.229-248

- 川上博子 2000「畿内における古墳出土の刀剣について」『古代武器研究』1 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.5-9
- 川上博子 2001「沂南画像石墓の刀剣画像に関する試論」『古代武器研究』2 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.120-125
- 川北通雄 1975「奈良県天理市出土の大刀形の埴輪」『古代学研究』75 古代学研究会：pp.34
- 川口勝康 1993「刀剣の賜与とその銘文」『岩波講座 日本通史2 ー 古代I ー』岩波書店：pp.332-348
- 川口 陟 1973『定本 日本刀剣全史1 原始時代・大和・奈良時代・平安時代(1)』歴史図書社
- 川越哲志 1993「鉄剣・短剣の歴史的意義」『弥生時代の鉄器文化』雄山閣：pp.182-184
- 河野一隆 2005「刀子小考」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.193-197
- 河野常吉 1914「蝦夷の刀剣」『考古学雑誌』4-5 日本考古学会
- 川畑 純 2014「武器埋納の展開と変遷」『七観古墳の研究 ー 1947年・1952年出土遺物の再検討 ー』七観古墳研究会：pp.333-352
- 川畑 純 2015『武器が語る古代史 ー 古墳時代社会の構造転換 ー』京都大学学術出版会
- 川畑 純・初村武寛 2012「加古川市域の中期古墳出土鉄製品の再検討」『加古川市 西条古墳群 尼塚古墳』尼塚古墳発掘調査団・加古川市教育委員会：pp.57-70
- 神林淳雄 1936「『双脚』足金物に就いて」『考古学雑誌』26-7 日本考古学会：pp.21-26
- 神林淳雄 1938a「原始時代刀剣外装を通して観たる我上代装飾文様」『上代文化』16 上代文化研究会：pp.59-69
- 神林淳雄 1938b「古墳時代鍔付足金物に就いて」『考古学雑誌』28-7 日本考古学会：pp.41-44
- 神林淳雄 1938c「原始時代剣装攷」『考古学雑誌』28-9 日本考古学会：pp.28-39
- 神林淳雄 1939a「金銅装大刀と金銅製柄頭 ー 特に原始時代金銅製柄頭群の形式分類について ー」『考古学雑誌』29-4 日本考古学会：pp.11-29
- 神林淳雄 1939b「刀子について」『人類学雑誌』54-7 日本人類学会：pp.22-30
- 神林淳雄 1940a「鐵装大刀と鐵製柄頭」『考古学雑誌』30-3 日本考古学会：pp.23-35
- 神林淳雄 1940b「太刀外装二題」『考古学雑誌』30-10 日本考古学会
- 神林淳雄 1943「鍔頭柄頭雑攷 ー 鍔頭大刀とその文化 ー」『考古学雑誌』33-12 日本考古学会：pp.36-47
- 上林史郎 2002「副葬品配置が意味するもの」『未盗掘古墳の世界』大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.73-80
- 菅 宏司 2001「広島県内における古墳出土の鉄槍・鉄鉾の副葬状況」『花園大学考古学研究論叢 ー 花園大学考古学研究室20周年記念論集ー』花園大学考古学研究室20周年記念論集刊行会：pp.34-42

キ

- 菊地芳朗 1990「出土遺物の検討と大年寺山横穴群の造営年代」『大年寺山横穴群』宮城県文化財調査報告書136：pp.61-89
- 菊地芳朗 1993「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館 紀要』7：pp.1-32
- 菊地芳朗 1996a「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究 考察編』八日市市教育委員会：pp.49-82
- 菊地芳朗 1996b「副葬品からみた福島県の後・終末期古墳 ー 装飾付大刀を中心に ー」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会：pp.197-190
- 菊地芳朗 2002a「筑内6号・26号横穴墓出土大刀の構造と復元案」『福島県文化財センター白河館 研究紀要2001』福島県文化財センター白河館・福島県教育委員会：pp.216-222
- 菊地芳朗 2002b「筑内6号・26号横穴墓出土大刀の構造と復元案」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.216-222
- 菊地芳朗 2003「装飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会：pp.19-28
- 菊地芳朗 2004「古墳時代刀剣類研究の諸問題 ー 後期を中心に ー」『鉄器文化の多角的探究』鉄器文化研究会：pp.1-12
- 菊地芳朗 2008「成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳」『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書426：pp.485-498

- 菊地芳朗 2010a『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- 菊地芳朗 2010b「古墳時代終末期における日本列島周縁部の太平洋沿岸交流 ― 副葬刀剣をもとに ―」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系：pp.109-130
- 菊地芳朗 2010c「経僧塚古墳出土主頭大刀の検討と主頭大刀の系譜」『武射経僧塚古墳 石棺編報告』早稲田大学経僧塚古墳発掘調査団：pp.187-198
- 菊地芳朗 2012「堂山1号墳の鉄製品とその被葬者」『堂山古墳群のひみつ』大東市立歴史民俗資料館：pp.14-15
- 菊地芳朗 2013「骨角製品」『古墳時代の考古学4 ― 副葬品の型式と編年 ―』同成社：pp.219-231
- 菊地芳朗 2014a「古墳時代刀剣類研究の諸問題 ― 前期・中期を中心に ―」『第10回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.31-39
- 菊地芳朗 2014b『古墳時代環頭大刀集成』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 菊地芳朗 2014c「鉄製刀剣類の作図と提示にかんする覚書き」『土筆』11 土筆舎：pp.976-980
- 菊地芳朗 2014d「古墳時代刀剣類研究の諸問題 ― 前期・中期を中心に ―」『古代武器研究』10 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室：pp.7-13
- 菊地芳朗 2016「出土武器類からみた城の山古墳」『城の山古墳発掘調査報告書（4次～9次調査）』胎内市埋蔵文化財調査報告書26：pp.363-369
- 岸本一宏・岩本 崇 2003「茶すり山古墳出土刀剣の検討」『鉄器文化の方向性を探る ― 刀剣研究をケーススタディとして ―』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所：pp.183-208
- 北野耕平 1960「蔵手刀子の年代」『古代学研究』23 古代学研究会：pp.27-30
- 北野耕平 1976「鉄剣」『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告2：pp.122-123
- 北野耕平 1980「金象嵌竜文大刀」『井上薫教授退官記念 古代国家と宗教 上巻』吉川弘文館
- 北見一弘 2003「刀子小考Ⅰ」『市原市文化財センター 研究紀要』Ⅳ：pp.33-43
- 北山峰生 1999「副葬された蛇行剣 ― 意義と特質に関する予察 ―」『石ノ形古墳』袋井市教育委員会：pp.315-346
- 北山峰生 2003「蛇行剣の分布と変遷」『考古学ジャーナル』498 ニュー・サイエンス社：pp.6-9
- 北山峰生 2007「フネ古墳出土の特殊な剣 ― 蛇行剣について ―」『長野県考古学会誌』119 長野県考古学会
- 木下哲人 2005「郭内横穴墓群出土鐔の復元制作及び疑問について」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.83-88
- 木下政利 2009「鹿角製刀剣小考」『伊那』57-7 伊那史学会：pp.19-23
- 金 宇大 2011「装飾付環頭大刀の技術系譜と伝播 ― 朝鮮半島東南部出土資料を中心に ―」『古文化談叢』66 九州古文化研究会：pp.87-127
- 金 宇大 2013「百済・加耶における装飾付大刀の製作技法と系譜」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.54-77
- 金 宇大 2014a「大阪府芝山古墳の掘り環」『古代学研究』204 古代学研究会：pp.33-34
- 金 宇大 2014b「単龍・単鳳環頭大刀製作の展開」『第11回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.79-100
- 金 宇大 2015「単龍・単鳳環頭大刀製作の展開」『古代武器研究』11 古代武器研究会：pp.83-102
- 金 宇大 2016「江口治郎コレクションの龍鳳文環頭大刀」『和泉市久保惣記念博物館 紀要』20：pp.53-42
- 金 宇大 2016「穀塚古墳出土環頭大刀に施された象嵌文様」『京都大学総合博物館ニュースレター』38：pp.2-3
- 金 宇大 2017a「洛東江以東地域における装飾付環頭大刀の変遷」『第28回東アジア古代史・考古学研究会交流会 研究発表会資料集』pp.17-24
- 金 宇大 2017b『金工品から読む古代朝鮮と倭 ― 新しい地域関係史へ ―』京都大学学術出版会
- Woodae Kim 2018「The pommel of a ring-pommel sword with central decoration missing」『News Letter』4 Project for Researching Gowland's Collection：pp.25-26（英文）（金 宇大 2018「中心飾が失われた環頭大刀柄頭」『ニュースレター』4 ゴ

ーランド・コレクション調査プロジェクト)

金 宇大 2019a「旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価」『文化財と技術』9 工芸文化研究所：pp.13-30

金 宇大 2019b「木村定三コレクションM318単龍環頭大刀の検討」『研究紀要』25 — 木村定三コレクション編 — 愛知県美術館：pp.73-79

金 宇大 2019c「木村定三コレクション環頭大刀・耳環目録」『研究紀要』25 — 木村定三コレクション編 — 愛知県美術館：pp.80-94

金 宇大 2019d「刀剣から読む古代朝鮮と倭」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会：pp.1-8

金 宇大・土屋隆史 2019「刀剣類」『鹿谷古墳の研究 — ゴーランド調査古墳の研究2 —』『ゴーランド・コレクション調査研究報告書2 ゴーランド・コレクション調査プロジェクト』pp.145-147

キム・セボム 2012「原三国後期における鉄矛と鉄鏃の生産と流通」『生産と流通』嶺南考古学会・九州考古学会：pp.181-191

金 跳咏 2013「大加耶龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.43-53

鬼本信雄 1978「尾原古墳出土鉄刀のX線透視」『尾原古墳発掘調査報告』千代田町教育委員会：pp.38-39

京都府立丹後郷土資料館・京都府立山城郷土資料館・京都府立総合資料館 1983『環頭大刀の発見 — 丹後・湯舟坂2号墳 —』

桐原 健 1969「頭椎大刀佩用者の性格」『古代学研究』56 古代学研究会：pp.28-36

桐原 健 1970「信濃における古墳出土の鉄剣」『信濃』22-4 信濃史学会：pp.45-56

桐原 健 1976「蔵手刀の祖形と性格—信濃における蔵手刀のあり方について」『信濃』28-4 信濃史学会：pp.1-14

桐原 健 1998「蔵手刀雑考 — 信濃出土の同刀が提起する問題」『長野県考古学会誌』84・85 長野県考古学会

桐原 健 2018「あずまに面する信濃の意義」『信濃』70-7 信濃史学会：pp.555-566

ク

草原孝典 2019「南坂1号墳出土の鉄器」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』11 岡山市教育委員会：pp.62-69

忽那敬三 2013「玉里舟塚古墳の副葬品と年代」『明治大学博物館 研究報告』18：pp.75-85

久保和士・宮本康治 1995「喜連東遺跡出土の錫装刀子」『葦火』10-5 大阪文化財研究所

宮内庁正倉院事務所 1974『正倉院の刀剣』日本経済新聞社

宮内庁正倉院事務所 1977『正倉院の大刀外装』小学館

宮内庁書陵部 1985『出土品展示目録 武器 武具 馬具』

栗山雅夫 2005「馬場ヶ平横穴墓群出土の銀象嵌鉄製頭椎柄頭について」『ふくおかの飛鳥時代を考える — 富山・能登の横穴からのアプローチ』福岡町教育委員会・富山考古学会：pp.118-119

車崎正彦 1987「剣と玉と」『早大所沢文化財調査室月報』23 早大所沢校地文化財調査室

黒石哲夫 2019「和歌山県古墳時代の刀剣類の調査と研究」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会：pp.26-29

黒田一充 1996「冠位十二階と律令位階制」『金の大刀と銀の大刀 — 古墳・飛鳥の貴人と階層 —』大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.92-97

黒川 浩 2000a「珠城山3号墳出土心葉形杏葉と新沢327号墳出土大刀龍文銀象嵌の復元について」『文化財と技術』1 工芸文化研究所

黒川 浩 2000b「珠城山3号墳出土心葉形杏葉と新沢327号墳出土大刀龍文銀象嵌の復元について」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』6：pp.121-125

黒川 浩 2005「八幡2号横穴墓出土心葉文象嵌鐔の復元について」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.98-99

黒川真道 1897「古刀の刃部にある穴につきて」『考古学会雑誌』4 考古学会：pp.163-165

黒済和彦 2004「群馬県出土の蔵手刀の分類と編年」『群馬県考古学手帳』14 群馬土器観会

黒済和彦 2005「群馬県出土蔵手刀の分布とその性格」『群馬県考古学手帳』15 群馬土器観会：pp.1-13

黒済和彦 2006「出雲市馬木町小坂古墳出土蔵手刀の再検討」『古代文化研究』14 鳥根県古代文化センター：pp.33-50

- 黒済和彦 2008「蔵手刀の型式分類および編年と分布」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室：pp.183-199
- 黒済和彦 2016「茨城県出土の蔵手刀について」『十五郎穴横穴墓群 ― 東日本最大級の横穴墓群の調査 ―』ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告42：pp.239-254
- 黒済和彦 2018『蔵手刀の考古学』ものが語る歴史39 同成社
- 桑原久男 2010「中平銘鉄刀と東大寺山古墳の時代」『よみがえるヤマトの王墓 ― 東大寺山古墳と謎の鉄刀 ―』天理大学付属天理参考館：pp.88-89
- コ
- 恋河内昭彦 2017「竪穴住居から出土した石製三輪玉 ― 埼玉県本庄市辻ノ内遺跡第7号住居跡出土の水晶製三輪玉の検討 ―」『地域考古学』2 地域考古学研究会：pp.97-108
- 小池 寛 1994「人物埴輪から見た刀装具について」『京都考古』74
- 小池 寛 1997「蛇行剣における基礎的研究 ― 蛇行剣のもつ概念と出土の意義 ―」『宗教と考古学』勉誠社：pp.177-197
- 小池 寛 2008「蛇行剣の出土とその意義」『京都府埋蔵文化財情報』106 京都府埋蔵文化財調査研究センター：pp.43
- 小池伸彦・川畑 純・清野孝之・森先一貴・諫早直人 2014「遼寧省北票市金嶺寺遺跡および大板営子遺跡出土遺物の調査」『奈良文化財研究所紀要2014』：pp.14-15
- 肥塚隆保・白杵 勲・町田 章 1997「黍田15号墳出土双龍環頭大刀」『奈良国立文化財研究所 年報』1997-Ⅰ：p.8
- 越田賢一郎・加藤 克・高谷文仁・後藤和哉・八十嶋伸敏・佐藤矩康・成田重信 2009「江別兵村出土刀のX線CT撮影による解析について」『北大植物園研究紀要』9 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地園ステーション植物園：pp.21-27
- 小嶋 篤 2020「象嵌大刀と刀装具の世界」『大宰府前夜 ― 筑紫の大宰と豪族 ―』九州国立博物館：pp.12-23
- 児玉真一 1982「鉄製環頭刀 ― 集団墓出土資料を中心に ―」『古文化論集 ― 森貞次郎博士古希記念 ― 上巻』森貞次郎博士古希記念論文集刊行会：pp.703-724
- 後藤守一 1928「原史時代の武器と武装」『考古学講座』1・6 雄山閣：pp.1-400
- 後藤守一 1932a「所謂消火器形埴輪に就て（1）― 頭椎大刀と御神寶太刀との関係 ―」『考古学雑誌』22-7 日本考古学会：pp.1-28
- 後藤守一 1932b「所謂消火器形埴輪に就て（2）― 頭椎大刀と御神寶太刀との関係 ―」『考古学雑誌』22-8 日本考古学会：pp.1-26
- 後藤守一 1932c「所謂消火器形埴輪に就て（3）― 頭椎大刀と御神寶太刀との関係 ―」『考古学雑誌』22-12 日本考古学会：pp.38-60
- 後藤守一 1934a「北海道に於ける古墳出土遺物の研究（1）」『考古学雑誌』24-2 日本考古学会：pp.103-128
- 後藤守一 1934b「北海道に於ける古墳出土遺物の研究（2・完）」『考古学雑誌』24-3 日本考古学会：pp.191-203
- 後藤守一 1936a「頭椎大刀について（1）」『考古学雑誌』26-8 日本考古学会：pp.6-32
- 後藤守一 1936b「頭椎大刀について（2）」『考古学雑誌』26-12 日本考古学会：pp.9-26
- 後藤守一 1940「古墳時代前期の剣」『考古学雑誌』30-3 日本考古学会：pp.1-22
- 後藤守一 1942a「所謂消火器形埴輪に就て」『日本古代文化研究』河出書房：pp.109-142
- 後藤守一 1942b「古墳時代前期の剣」『日本古代文化研究』河出書房：pp.669-688
- 後藤守一 1942c「頭椎大刀に就て」『日本古代文化研究』河出書房：pp.689-732
- 後藤守一 1973「奈良朝以前の外装」『新版日本刀講座8 ― 外装編 ―』雄山閣：pp.86-87
- 小西一郎 2002「筑内6号横穴墓出土大刀鞘と柄の製作」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.233-234
- 許斐麻衣 2007「九州の裝飾付大刀集成」『福岡大学考古資料集成1』福岡大学考古学研究室研究調査報告6：pp.47-72
- 小林 茂 1957「武蔵熊谷市広瀬出土の蔵手刀」『古代』24 早稲田大学考古学会：pp.26-28
- 小林行雄 1930「直弧紋私考」『考古学』1-2 東京考古学会：pp.12-19
- 小林行雄 1951「古墳時代の武器」『日本考古学概説』東京創元社：pp.189-199
- 小林行雄 1952「鉄製素環頭大刀について」『福岡県糸島郡 ― 貴山村田中銚子塚古墳の研究』便利堂

- 小林行雄 1959「歩兵装備から騎兵装備へ」『古墳の話』岩波新書（青版）342 岩波書店：pp.93-103
- 小林行雄 1976a「鹿角製刀剣装具」『古墳文化論考』平凡社：pp.431-482
- 小林行雄 1976b「直弧文」『古墳文化論考』平凡社：pp.483-540
- 小林行雄 1986a「古墳時代の大刀」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』3：pp.1-19
- 小林行雄 1986b「古墳文化における装飾付大刀の意義」『考古学ジャーナル』266 ニュー・サイエンス社：pp.2-4
- 小林義孝 2020「河内愛宕塚古墳と龍文銀象嵌の飾り大刀」『大阪春秋』177（令和2年冬号）新風書房：pp.48-49
- 小林義孝・有井宏子 1996「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀 ― 龍文銀象嵌鞘金具付振り環頭大刀 ―」『八尾市歴史民俗資料館 研究紀要』7：pp.29-56
- 五味 聖 2002「筈内6号横穴墓出土大刀の柄の糸巻きについて」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：p.235
- 五味 聖 2002「筈内21号横穴墓出土刀子の鞘・柄の製作工程」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.241-242
- 小森哲也 1986「真岡市根本兜塚古墳出土の頭椎大刀について」『真岡市史案内』5 真岡市教育委員会社会教育課文化係市史編さん室
- 小谷地肇 2000「獅嚙式環頭大刀の分類」『青森県考古学』12 青森県考古学会：pp.1-28
- 小谷地肇 2002「伏岩里3号墳第7号石室出土獅嚙式環頭大刀をめぐって」『海と考古学とロマン ― 市川金丸先生古希記念献呈論文集 ―』市川金丸先生古希を祝う会：pp.235-245
- 小谷地肇 2014「糠部沿岸部の古墳・蕨手刀」『北三陸の蝦夷・蕨手刀』岩手考古学会：pp.41-40
- 小柳津貴子 2005「鹿角装刀剣の性格についての検討」『Archaeo-clio』6 東京学芸大学考古学研究室：pp.69-80
- 近藤 広 1998「近江高島郡における渡来系文化 ― 中央政権および周辺地域との関連 ―」『滋賀考古』20 滋賀考古学研究会：pp.41-53

サ

- 崔基殷 2017a「製作技法分析からみた百済象嵌資料の系統とその解釈」『文化財と技術』8 工芸文化研究所：pp.5-17
- 崔基殷 2017b「武寧王陵出土装飾刀の製作技術と製作地」『文化財と技術』8 工芸文化研究所：pp.83-109
- 埼玉県教育委員会 1979『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』
- 埼玉県立博物館 1984『北武蔵 杖刀人とその時代展』
- 埼玉県立博物館 1989『古墳 ― かざり大刀の世界 ―』
- 埼玉県立歴史と民俗の博物館 2014『甦る鉄剣』
- 斎藤和夫・宇佐晋一 1952a「直弧文の研究（1）」『古代学研究』6 古代学研究会
- 斎藤和夫・宇佐晋一 1952b「直弧文の研究（2）」『古代学研究』7 古代学研究会
- 斎藤和夫・宇佐晋一 1955「直弧文の研究（3）」『古代学研究』11 古代学研究会
- 齊藤賢一 1991「鬼面紋象嵌柄頭の発見の経緯について」『瀬戸内歴史民俗資料館 紀要』6：p.112
- 齊藤大輔 2009「銅本孔鉄刀の基礎的研究」『第3回東アジア考古学会・中原文化財研究院研究交流会予稿集』東アジア考古学会・中原文化財研究院：pp.1-20
- 齊藤大輔 2011a「古代東アジアにおける鉄鉾の系譜」『高梨学術奨励基金年報 平成22年度研究成果概要報告』高梨学術奨励基金：pp.171-178
- 齊藤大輔 2011b「セソドノ古墳出土鉄製武器・武具の再検討」『九州考古学』86 九州考古学会：pp.85-95
- 齊藤大輔 2012a「小野牟田2号横穴出土鉄刀の検討」『直方市内遺跡群Ⅱ』直方市文化財調査報告書42：pp.80-82
- 齊藤大輔 2012b「九州出土大刀からみた対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会：pp.283-331
- 齊藤大輔 2013a「鶏冠頭大刀考」『土曜考古』35 土曜考古学研究会：pp.69-84
- 齊藤大輔 2013b「皇南大塚南墳副塚出土鉄鉾の系譜」『福岡大学考古学論集2 ― 考古学研究室開設25周年記念 ―』福岡大学考古学研究室：pp.225-241
- 齊藤大輔 2014a「武器からみた松浦横穴墓群の性格」『松浦横穴墓群』篠栗町文化財調査報告書8：pp.43-46

- 齊藤大輔 2014b「北部九州における装飾武器の特質とその背景」『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会：pp.141-158
- 齊藤大輔 2014c「葉師の森1号墳出土鹿角装鉄剣の構造」『乙金地区遺跡群10』大野城市文化財調査報告書115：pp.156-159
- 齊藤大輔 2014d「古代東アジアにおける装飾鉄銚の系譜」『第11回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.1-21
- 齊藤大輔 2015a「古墳時代刀剣研究文献一覧」『熊本古墳研究』6 熊本古墳研究会：pp.69-108
- 齊藤大輔 2015b「古代東アジアにおける特殊鉄銚の系譜」『古代武器研究』11 古代武器研究会：pp.7-26
- 齊藤大輔 2016「金鈴塚古墳出土大刀の研究（2）鶏冠頭大刀」『金鈴塚古墳研究』4 木更津市郷土博物館金のすず：pp.28-47
- 齊藤大輔 2017a「古墳時代刀剣研究史」『土曜考古』39 土曜考古学研究会：pp.99-128
- 齊藤大輔 2017b「古墳時代中期の刀剣編年」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ— 広域編年と地域編年の齟齬 —』中国四国前方後円墳研究会：pp.73-88
- 齊藤大輔 2017c「武装からみた善一田古墳群と6世紀の西北九州」『乙金地区遺跡群23』〈中巻〉大野城市文化財調査報告書159：pp.109-124
- 齊藤大輔 2017d「刀剣研究のまなざし」『第14回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.57-84
- 齊藤大輔 2018a「金鈴塚古墳と銀の銚」『金鈴塚古墳研究』6 木更津市郷土博物館金のすず：pp.44-50
- 齊藤大輔 2018b「鉄刀・金銅装大刀」『金鈴塚古墳研究』6 木更津市郷土博物館金のすず：pp.51-53
- 齊藤大輔 2018c「元岡G-6号墳と鉄の武装」『元岡・桑原遺跡群30— 元岡古墳群G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 —』福岡市埋蔵文化財調査報告書1355：pp.103-114
- 齊藤大輔 2018d「岩戸山古墳出土の振り環頭大刀形石製表飾」『古文化談叢』81 九州古文化研究会：pp.171-186
- 齊藤大輔 2018e「後期古墳出土武装具の評価をめぐる諸問題— 北部九州と東国の対比から—」『平成30年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会：pp.71-80
- 齊藤大輔 2018f「古墳時代武器研究史のなかの刀剣研究」『古代武器研究』14 古代武器研究会：pp.77-102
- 齊藤大輔 2019「古墳時代後・終末期における武装具保有の実態— 境界領域としての北部九州—」『九州考古学』94 九州考古学会：pp.27-47
- 齊藤大輔・片多雅樹 2009「福岡市西区石ヶ元8号墳出土鐮本孔鉄刀の政治的意義」『平成21年度九州考古学会総会 研究発表資料集』九州考古学会：pp.67-76
- 斎藤 弘 1992「石橋町郭内遺跡出土の刀装具」『唐澤考古』11 唐澤考古会
- 早乙女雅博・東野治之 1990「朝鮮半島出土の有銘環頭大刀」『MUSEUM』467 東京国立博物館
- 酒井宗孝 2005「熊堂古墳群出土の方頭大刀」『花巻市博物館 研究紀要』1
- 阪口英毅 2018「鉄製品の多量副葬とその意義」『畿内乙訓古墳群を読み解く』季刊考古学・別冊26 雄山閣：pp.86-95
- 坂田邦洋 1984「三葉環頭大刀の一例」『別府大学 紀要』25 別府大学史学会：pp.33-40
- 酒巻忠史 2007『金鈴塚古墳出土遺物の再整理2・大刀の実測』木更津市文化財調査集報12
- 酒巻忠史 2008「山川古墳出土資料」『相里古墳関連資料・山川古墳出土資料・金鈴塚古墳関連資料・埋蔵文化財（根田横穴墓群・鶴巻塚古墳・宮脇遺跡・東谷遺跡・内屋敷遺跡・土器崎遺跡・南久保宿遺跡・明石口遺跡・上桑田谷遺跡・林遺跡）の発掘調査』木更津市文化財調査集報13：pp.4-11
- 酒巻忠史 2009「松面古墳出土双魚佩の図上復元」『君津地方の古式須恵器集成・矢那大原古墳出土資料・松面古墳出土双魚佩の図上復元・埋蔵文化財（銚子塚古墳・金鈴塚古墳）の発掘調査』木更津市文化財調査集報14：pp.49-53
- 酒巻忠史 2010「最大長の双龍環頭大刀について」『日本基層文化論叢』相山林継先生古稀記念論集刊行会：pp.137-148
- 酒巻忠史 2011「伝舟塚古墳出土の双龍環頭大刀について」『小美玉市史料館報』5：pp.107-124
- 酒巻忠史 2014a「大野雲外からの絵葉書— 古記録に見る鶴巻塚古墳について—」『日本考古学史研究』2：pp.49-58
- 酒巻忠史 2014b「古記録に見る君津地方の古墳調査（1）— 明治・大正期を中心にして—」『東邦考古』38 東邦考古学研究会：pp.8-

- 桜井達彦 1986「頭椎大刀の編年」『考古学ジャーナル』266 ニュー・サイエンス社：pp.5-8
- 桜井達彦 1987「頭椎大刀の編年に関する一考察」『比較考古学試論 — 筑波大学創立10周年記念考古学論集 —』雄山閣：pp.171-189
- 櫻井久之 1997「加美遺跡の直弧文板について」『第35回大阪府下埋蔵文化財研究会資料集』大阪府文化財調査研究センター
- 櫻井久之 1999「直弧文の成立とその意義」『ヒストリア』163 大阪歴史学会
- 櫻井久之 2000「直弧文はいかにしてできたか」『大阪市文化財協会 研究紀要』3：pp.1-14
- 櫻井久之 2003「木製刀装具にみる直弧文の一例 — 兵庫県入佐川遺跡出土例の検討 —」『大阪歴史博物館 研究紀要』2
- 櫻井久之 2012「2つの刀剣装具による文様系統論 — 忍岡・大和天神山両古墳出土例からの考察 —」『日本考古学』33 日本考古学協会：pp.53-69
- 佐々木稔・大江正行・相京建史 1987「清里・長久保遺跡7号墳出土の小刀の研磨と金属学的検討」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』4：pp.49-66
- 佐田 茂 1991「岩戸山古墳における石製品の樹立」『古文化論叢 — 児嶋隆人先生喜寿記念論集 —』児嶋隆人先生喜寿記念事業会：pp.448-464
- 佐藤矩康 2006『北の出土刀を科学する — 最新科学と考古学からみた刀剣文化史への道程』
- 佐藤矩康・成田重信 2005「X線CTによる上古刀の分類」『考古学ジャーナル』532 ニュー・サイエンス社：pp.19-22
- 佐藤矩康・森岡健治・成田重信・山崎克彦・赤沼英男 2003「自然科学的調査結果からみたカンカン2遺跡出土直刀の刀剣史における位置」『北海道考古学』39 北海道考古学会：pp.65-76
- 佐藤真穂 1928「肥前国生月村発見の環頭」『考古学雑誌』14-13 日本考古学会
- 佐野市郷土博物館 1986『よみがえる古墳 — 佐野とその周辺 —』
- 佐野美術館 2003『草創期の日本刀 反りのルーツを探る』
- 沢田むつ代 2008「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き — 織物などの種類と仕様 —」『MUSEUM』617 東京国立博物館：pp.5-35
- 沢田むつ代 2012「島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する繊維等について」『島内地下式横穴墓群IV』えびの市埋蔵文化財調査報告書53：pp.153-160
- 沢田むつ代 2015「古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例」『文化財と技術』7 工芸文化研究所：pp.111-142
- 沢田むつ代・古谷 毅・犬木 勉 2002「宮崎県内遺跡出土の繊維製品の調査」『日本出土原始古代繊維製品の集成及び基礎的研究』東京国立博物館
- シ
- 寺社下博 1997「地方の多角形墳」『生産の考古学 — 倉田芳郎先生古希記念論集 —』同成社：pp.83-98
- 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31
- 島根県八雲立つ風土記の丘資料館 1996『黄金に魅せられた倭人たち』
- 清水 篤 1987「大塚古墳の鉄刀剣」『摂津豊中大塚古墳』豊中市教育委員会：pp.136-140
- 清水久男 1995「多摩川台古墳群9号墳出土の銀象嵌装大刀」『大田区立郷土博物館 紀要』5：pp.189-202
- 清水真一 2011「南予地方の古墳時代金属製武器・武具」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.61-66
- 清水みき 1983「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』久美浜町文化財報告7：pp.157-167
- 下江健太 2001「方頭大刀の編年」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室：pp.307-329
- 下大迫幹洋 2003「環付足金物を配する古代刀剣について」『古代近畿と物流の考古学』学生社：pp.269-280
- 下原幸裕 2004「箕田丸山古墳出土大刀の検討」『長崎県・景華園遺跡の研究／福岡県京都郡における二古墳の調査／佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告3：pp.135-146

- 白石太一郎 1990「玉纏太刀の原像」『歴博』41 国立歴史民俗博物館：pp.4-5
- 白石太一郎 1992「木更津市松面古墳出土の双魚佩について」『古墳時代の造形 — 金工品にみる技術と美 —』千葉県立上総博物館
- 白石太一郎 1993「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館 研究報告』50：pp.141-162
- 白石太一郎 1997「有銘刀剣の考古学的検討」『歴博大学院セミナー 新しい史科学を求めて』吉川弘文館：pp.189-240
- 白石太一郎 2011『古墳と古墳時代の文化』塙書房
- 新谷武夫 1975「広島県出土の環頭柄頭について」『芸備』3 芸備友の会
- 新谷武夫 1977「環状柄頭研究序説」『考古論集 — 慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集 —』松崎寿和先生退官記念事業会：pp.271-312
- 新谷武夫 1988「里古墳出土の環頭大刀について」『秋芳町地方文化研究』24 秋芳町地方文化研究会：pp.2-5
- 新谷武夫 2012「安芸・備後の装飾大刀」『芸備』41 芸備友の会：pp.1-18
- 新谷武夫 2014「安芸・備後の環付足金具」『広島県の考古学と文化財保護 — 松下正司先生喜寿記念論集 —』pp.163-174
- 新谷武夫 2018「安芸・備後の装飾大刀編年」『芸備』50 芸備友の会：pp.71-82
- 宍道年弘 1988「蛇行鉄剣出土遺跡地名表・蛇行鉄剣等出土地分布図」『古代の女性』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館特別展図録

ス

- 末永雅雄 1938「鹿角装刀剣」『考古学』9-7 東京考古学会：pp.317-339
- 末永雅雄 1938「環頭太刀」『考古学論叢』8 考古学研究会：pp.107-138
- 末永雅雄 1940「新日本刀私案」『考古学雑誌』30-3 日本考古学会
- 末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂書房
- 末永雅雄 1943『日本武器概説』桑名文星堂
- 末永雅雄 1970「金錯銘直刀身」『考古学雑誌』56-1 日本考古学会
- 末永雅雄 1971『日本武器概説』社会思想社
- 末永雅雄 1977「正倉院大刀の意義」『正倉院の大刀外装』小学館：pp.213-232
- 末永雅雄 1982『増補 日本上代の武器』木耳社
- 菅 博絵 2016「同範・同型品と考えられる単鳳環頭大刀」『京都府埋蔵文化財論集7 — 創立35周年記念誌 —』京都府埋蔵文化財調査研究センター：pp.253-260
- 菅谷文則 1975「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集 — 創立35周年記念 —』吉川弘文館
- 菅谷文則 1989「X線調査の経緯と経過」『大和考古資料目録16 X線調査資料（1）— 新沢千塚の鉄刀剣 —』奈良県立橿原考古学研究所 付属博物館：pp.95-97
- 菅谷文則 2001「中国南北朝の木製刀剣」『古代武器研究』2 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.100-104
- 杉原和雄 1968「わが国の鉄製素環頭大刀について」『史想』14 京都教育大学考古学研究会：pp.43-49
- 杉山和徳 2008「東日本における鉄剣の受容とその展開」『古文化談叢』60 九州古文化研究会：pp.25-54
- 杉山和徳 2009「ミニチュア鉄剣に関する一考察」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』15：pp.17-32
- 杉山和徳 2010「間門松沢第1号墳出土刃関双孔鉄剣について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 231：pp.159-162
- 杉山和徳 2012「九州出土弥生時代鉄剣について」『中原遺跡VI』佐賀県文化財調査報告書193：pp.233-243
- 杉山和徳 2013a「沼津市高尾山古墳出土のヤリをめぐる諸問題」『静岡県考古学研究』44 静岡県考古学会
- 杉山和徳 2013b「ヤリについて考える。」『西相模考古』22 西相模考古学研究会：pp.73-78
- 杉山和徳 2015a「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』61-4 考古学研究会：pp.45-64
- 杉山和徳 2015b「鉄剣を集めた。」『西相模考古』24 西相模考古学研究会：pp.29-50
- 杉山和徳 2016「長茎短身鉄剣に関する一考察」『埼玉考古』51 埼玉考古学会：pp.37-54

- 杉山和徳 2017「弥生鉄剣論」『日本考古学』43 日本考古学協会：pp.21-38
- 杉山和徳 2019「関東地方における鉄製武器の普及と防御集落 ― 刀剣類と環濠集落を中心に ―」『第16回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.93-122
- 杉山晋作 1992「有銘鉄剣にみる東国豪族とヤマト王権」『新版 古代の日本8 関東』
- 杉山晋作 1995「蕪木5号墳出土の2つの金銅製品」『蕪木5号古墳』山武考古学研究所：pp.43-49
- 杉山晋作 2006「男性埴輪にみる第三の大刀佩用法」『東国の埴輪と古墳時代後期の社会』六一書房：pp.39-49
- 杉山秀宏 1993「群馬県出土の鉄鉾について」『群馬県内古墳出土の武器・武具』群馬県古墳時代研究会資料集1 群馬県古墳時代研究会：pp.16-21
- 杉山秀宏 2009「単龍環頭柄頭の終末例 ― 太田市南金井出土例より ―」『群馬県立歴史博物館 紀要』30：pp.1-7
- 杉山秀宏 2016「金井東裏遺跡出土銀・鹿角併用装鉾について ― 装飾鉾及び県内出土鉾との比較 ―」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』34：pp.19-38
- 杉山秀宏 2017「銀・鹿角併用装矛」『金井東裏遺跡 甲着装人骨等詳細調査報告書』群馬県教育委員会：pp.216-227
- 杉山秀宏 2019「銀・鹿角併用装鉾」『金井東裏遺跡《古墳時代編》本文編2』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652：pp.834-845
- 杉山正美 1982「乎獲居の叫び声 ― 115の金象箆文字 ―」『考古学ジャーナル』201 ニュー・サイエンス社：pp.21-23
- 鈴木一有 1996「前期古墳の武器副葬」『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団：pp.145-174
- 鈴木一有 2002「振りと渦巻き」『東海之路 ― 平野五郎先生還暦記念 ―』『東海之路』刊行会：pp.261-282
- 鈴木一有 2005a「蕨手刀子の盛衰」『待兼山考古学論集 ― 都出比呂志先生退任記念 ―』大阪大学考古学友の会：pp.519-538
- 鈴木一有 2005b「東海の甲冑出土古墳にみる古墳時代中期の変革過程」『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VI 天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第6・7次調査）』三重県埋蔵文化財調査報告259：pp.217-228
- 鈴木一有 2006「東海の馬具と飾大刀にみる地域性と首長権」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会：pp.237-240
- 鈴木一有 2009「鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜」『鳥居松遺跡5次』円頭大刀編 浜松市文化振興財団：pp.33-52
- 鈴木一有 2012a「清州新鳳洞古墳群の鉄器にみる被葬者集団」『清州新鳳洞百濟古墳群発掘30周年記念国際学術会議』忠北大学校博物館：pp.71-93
- 鈴木一有 2012b「清州新鳳洞古墳群の鉄器にみる被葬者集団」『百済学報』8 百済学会：pp.105-131
- 鈴木一有 2012c「錫装鉄鉾の意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』173：pp.214-216
- 鈴木一有 2012d「武器・武具」『古墳時代研究の現状と課題 下 ― 社会・政治構造及び生産流通研究 ―』同成社：pp.107-127
- 鈴木一有 2018「副葬品組成からみた古墳時代中期から後期への変革」『待兼山考古学論集Ⅲ ― 大阪大学考古学研究室30周年記念論集 ―』大阪大学考古学友の会：pp.475-496
- 鈴木一有 2019「三味塚古墳出土武器とその特徴」『明治大学博物館 研究報告』23：pp.17-26
- 鈴木一有編 2009『鳥居松遺跡5次』円頭大刀編 浜松市文化振興財団
- 鈴木琢也 2014「北海道の末期古墳と蕨手刀」『北三陸の蝦夷・蕨手刀』岩手考古学会：pp.47-54
- 鈴木 勉 2000「藤ノ木古墳倭装大刀出現の技術史的意義 ― 木彫金張り装の技術移転から6世紀の技術状況を考える ―」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』6：pp.31-40
- 鈴木 勉 2003「彫金 ― 古墳時代の金工技術（1） ―」『考古資料大観7 ― 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 ―』小学館：pp.354-358
- 鈴木 勉 2004『ものづくりと日本文化』榎原考古学研究所附属博物館選書（1）
- 鈴木 勉 2005a「古墳時代の鉄事情から見た象嵌技術」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.8-28
- 鈴木 勉 2005b「古墳時代象嵌資料の研究復元制作」の再現実験の課題」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.29-31
- 鈴木 勉 2005c「弘法山5号、中田、郭内8号各横穴墓から出土した象嵌遺物の復元」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.58-82
- 鈴木 勉 2005d「古墳時代象嵌資料の研究復元制作」の技術的成果」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.119-122
- 鈴木 勉 2013a「百練鉄をめぐる技術移転論 第六 金石文などから読み取る古代日本列島の鉄事情」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：

- pp.11-27
- 鈴木 勉 2013b「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その1 鉄の鑄造環頭と銅の鑄造環頭」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.138-141
- 鈴木 勉 2013c「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その2 透彫り金銅の技術となめくり象嵌の技術」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.142-144
- 鈴木 勉 2013d「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その3 連珠文の連珠ピッチから施文時の加工法を探る」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.145-147
- 鈴木 勉 2013e「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その5 飾履塚古墳からの他の出土品の製作技術」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.153-155
- 鈴木 勉 2013f「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その6 玉田M3号墳龍文装環頭大刀の精密鑄造技術」『文化財と技術』5 工芸文化研究所：pp.156-159
- 鈴木 勉 2014a「九州の円弧状なめくりたがねと（渡来系）工人ネットワーク — 江田船山銀象嵌銘鉄刀など円文を持つ鉄製品 —」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.5-28
- 鈴木 勉 2014b「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その7 なめくりか毛彫りか？」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.132-133
- 鈴木 勉 2014c「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その8 玉田M3号墳龍文装環頭大刀の筒金の線彫り技術など」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.134-135
- 鈴木 勉 2014d「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その9 はがねとなまがね（1）鉄製品に孔をあける技術」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.136-137
- 鈴木 勉 2014e「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その10 はがねとなまがね（2）刀剣の素材」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.138-139
- 鈴木 勉 2014f「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その11 環頭の鑄造技術 慶尚南道咸安道項里54号銀張龍鳳文大刀」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.140-142
- 鈴木 勉 2014g「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その12「大加耶龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」に対する李漢祥教授の反論」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.143-144
- 鈴木 勉 2014h「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その13 鉄地金銀貼り，Parting Line」『文化財と技術』6 工芸文化研究所：pp.145-146
- 鈴木 勉 [編] 2008『論叢 文化財と技術1 百鍊鉄刀とものづくり』雄山閣
- 鈴木 勉・河内國平 2006『復元七支刀 — 古代東アジアの鉄・象嵌・文字 —』雄山閣
- 鈴木 勉・関川尚功・吉松茂信 2000「藤ノ木古墳大刀の復元」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』6：pp.59-96
- 鈴木 勉・福井卓造 2002「熊本県江田船山古墳出土大刀の銀象嵌銘と5世紀の製鋼技術」『精密工学会大会学術講演会講演論文集』101
- 鈴木 勉・福井卓造 2002「江田船山古墳出土大刀銀象嵌銘「三寸」と古墳時代中期の鉄の加工技術〈付説：法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘の「尺寸」と「ろう製原型鑄造法」について〉」『考古学論攷』梶原考古学研究所紀要25：pp.1-28
- 鈴木 信 2001「所謂「北海道式古墳」と「周溝のある墓」について」『千歳市ユカンボシC15遺跡（4）』（第1分冊）北海道埋蔵文化財センター調査報告書159：pp.199-230
- 鈴木 信 2005「北・東日本の出土刀にみる彎刀の起源」『考古学ジャーナル』532 ニュー・サイエンス社：pp.10-14
- 須藤智夫 1992「古墳時代相模の軍事基盤に関する覚書」『考古学の世界』8 学習院考古会：pp.1-31
- 諏訪昭千代 1987「蛇行鉄剣考」『鹿児島考古』鹿児島県考古学会：pp.43-56

セ

- 清喜裕二 2002「筑内21号横穴墓出土刀子と装具の復元について」『文化財と技術』2 工芸文化研究所：pp.236-240

清喜裕二・横田真吾・土屋隆史 2017「妻鳥陵墓参考地墳丘外形調査および出土品調査報告」『書陵部紀要』68〔陵墓篇〕 宮内庁書陵部：pp.17-62

清家 章 1998「女性首長と軍事権」『待兼山論叢』第32号 大阪大学文学部：pp.25-47

関川尚功 2000「藤ノ木古墳の大刀の構造」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』6：pp.1-14

ソ

十亀幸雄 1987「愛媛県出土の古墳時代の装飾大刀」『遺跡』30 遺跡発行会：pp.55-74

十亀幸雄 2011「道後平野南部の鉄製武器・武具」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.49-60

孫明助 2012『百済の鉄器文化』孫明助先生追悼記念事業会

タ

高久健二 1992a「韓国出土鉄鉾の伝播過程についての研究 — 楽浪地域から南部地域まで —」『歴史考古学誌』8：pp.113-147

高久健二 1992b「鉄製遺物」『昌寧校洞古墳群』東亜大学校博物館：pp.254-274

高崎市観音塚考古資料館 2011『輝ける大刀 — 古墳時代の装飾 —』

高島 徹 1996「装飾付大刀を出土した古墳」『金の大刀と銀の大刀 — 古墳・飛鳥の貴人と階層 —』大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.84-88

高田貫太 1998「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』45-1 考古学研究会：pp.49-69

高田貫太 2001「三角穂式鉄鉾の基礎的整理」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室：pp.330-339

高田貫太 2002「朝鮮半島南部地域の三国時代古墳副葬鉄鉾についての予察」『古代武器研究』3 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.4-14

高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係 — 新羅・百済・大加耶と倭の交渉史 —』吉川弘文館

高田貫太 2015「八幡観音塚古墳の副葬品をめぐる地域間交渉」『改訂版 観音塚古墳の世界』高崎市観音塚考古資料館

高田貫太 2019「金井東裏遺跡と朝鮮半島の遺物・遺構との比較」『金井東裏遺跡《古墳時代編》理学分析編・考察編』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652：pp.472-478

高野昌司・青山恒美 2000「藤ノ木古墳出土大刀・剣・魚佩の復元に使用する繊維製品」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』6：pp.25-30

高橋克壽 2015「向山1号墳の副葬品組成」『若狭 向山1号墳』若狭町：pp.247-252

高橋健自 1910「日本上古の刀剣に就きて」『史学雑誌』21-8：pp.1-43

高橋健自 1911「劔」『鏡と劔と玉』富山房：pp.124-177

高橋健自 1912a「上古の刀剣」『考古学雑誌』2-11 日本考古学会：pp.1-13

高橋健自 1912b「古代の槍」『考古学雑誌』3-3 日本考古学会：pp.132-138

高橋信雄 2000「蔵手刀」『考古学による日本歴史6 — 戦争 —』雄山閣

高島孝宗 2005「オホーツク文化における威信財の分布について」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会：pp.23-44

高慶秀 2002「韓半島における鉄製儀器に関する考察 — 三韓・三国時代の有刺儀器を中心に —」『祭祀考古学』3 祭祀考古学会：pp.93-120

高松雅文 2006「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会：pp.259-280

高松雅文 2007a「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告4：pp.279-300

高松雅文 2007b「継体大王者の政治的連帯に関する考古学的研究」『ヒストリア』205 大阪歴史学会：pp.1-27

高松雅文 2007c「古墳時代後期の政治変動に関する考古学的研究」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会：pp.383-397

高松雅文 2008「5～7世紀における石川流域の動向とヤマト王権」『ヒストリア』212 大阪歴史学会：pp.42-57

高松雅文 2009「寛弘寺75号墳の振り環付楔形柄頭大刀」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』12：pp.49-55

- 高松雅文 2010「継体大王の時代を読み解く」『継体大王の時代 百舌鳥・古市古墳群の終焉と新時代の幕開け』大阪府立近つ飛鳥博物館図録51：pp.118-124
- 高松雅文 2015「東条1号墳出土の大刀」『東条1号墳・屋敷の下遺跡 ― 伊賀市東条 ―』三重県埋蔵文化財調査報告360 三重県埋蔵文化財センター：pp.69-70
- 瀧口 宏 1952「鳥首刀考」『史観』38 早稲田大学史学会：pp.92-98
- 滝沢 誠 2001「武器・武具」『静岡県的前方後円墳 総括編』静岡県文化財調査報告書55：pp.201-213
- 滝沢 誠・西澤正晴 2000「井田松江18号墳出土の象嵌刀装具類について」『井田松江古墳群』戸田村文化財調査報告書5：pp.89-98
- 瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX ― 古墳文化研究会 ―：pp.5-40
- 瀧瀬芳之 1986a「終末期の前方後円墳と飾大刀」『日本古代文化研究』3 PHALANX ― 古墳文化研究会 ―：pp.63-66
- 瀧瀬芳之 1986b「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266 ニュー・サイエンス社：pp.9-15
- 瀧瀬芳之 1991a「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集 ― 設立10周年記念論文集 ―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団：pp.739-778
- 瀧瀬芳之 1991b「埼玉県の拵付大刀」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』8：pp.101-126
- 瀧瀬芳之 1992「大刀と刀子について」『観音塚古墳調査報告書』高崎市教育委員会：pp.125-130
- 瀧瀬芳之 2002「武器」『季刊考古学』79 有山閣：pp.70-73
- 瀧瀬芳之 2004「環頭大刀について」『百済武寧王と倭の王たち 秘められた黄金の世紀展』福岡市博物館：pp.126-129
- 瀧瀬芳之 2011a「古墳時代後・終末期における大刀拵の様相」『考古学ジャーナル』616 ニュー・サイエンス社：pp.3-6
- 瀧瀬芳之 2011b「旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について ― 埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2） ―」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』25：pp.159-178
- 瀧瀬芳之 2012「装飾付大刀からみた武蔵・相模の後期古墳」『平成23年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係団体普及連携事業公開セミナー 武蔵・相模の後期古墳 ― その地域性と交流をさぐる ―』東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター：pp.28-32
- 瀧瀬芳之 2013「将軍山古墳の装飾付大刀」『古代の豪族 ― 将軍山古墳とその時代 ―』埼玉県立さきたま史跡の博物館：pp.20-23
- 瀧瀬芳之 2014a「王の象徴 ― 装飾大刀 ―」『シンポジウム 埼玉古墳群の謎 ― 東国を治めた古代豪族 ―』さきたま魅力アップ実行委員会：pp.20-28
- 瀧瀬芳之 2014b「飾り大刀の世界 ― 象嵌装大刀を中心に ―」『甦る鉄剣』埼玉県立歴史と民俗の博物館：pp.23-26
- 瀧瀬芳之 2015「城山1号墳出土大刀群の評価」『日本考古学協会第81回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.140-141
- 瀧瀬芳之 2016a「金鈴塚古墳出土大刀の研究（2）銀装圭頭大刀」『金鈴塚古墳研究』4 木更津市郷土博物館金のすず：pp.48-51
- 瀧瀬芳之 2016b「装飾付大刀と東国社会」『金鈴塚古墳のかがやき』国立歴史民俗博物館：pp.35-40
- 瀧瀬芳之 2017「桶川市樋詰6号墳出土の大刀について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』31：pp.125-132
- 瀧瀬芳之 2019a「日本列島内出土象嵌遺物集成（刀剣・鉾・刀子編）」『文化財と技術』9 工芸文化研究所：pp.49-95
- 瀧瀬芳之 2019b「大刀に施された象嵌について」『飾り大刀 ― 武器からみた古墳時代のぐんま ―』かみつけの里博物館：pp.40-47
- 瀧瀬芳之・野中 仁 1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究 ― 埼玉県の象嵌装大刀 ―」『埼玉県埋蔵文化財事業団 研究紀要』12：pp.37-94
- 立谷聡明 2019「九州地方における鉄製武器の普及 ― 刀剣・戈・有孔鏃を中心として ―」『第16回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.15-40
- 玉井 功 2009「副葬品配置から見た葬送儀礼鏡と刀剣類のセットを持つ古墳」『花園大学考古学研究論叢Ⅱ ― 花園大学考古学研究室30周年記念論集 ―』花園大学考古学研究室30周年記念論集刊行会：pp.49-62
- 田中 茂 1976「地下式横穴出土の蛇行剣について」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- 田中 茂 1988「南九州出土の蛇行剣」『宮崎県史研究』2：pp.29-46
- 田中晋作 2001「古墳時代における武器・武具研究の諸問題」『日韓合同鉄器文化シンポジウム 日本海（東海）がつなぐ鉄の文化』鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会：pp.58-63

谷本 進 1994「銘文入り刀剣の世界」『史跡 箕谷古墳群 ― 保存整備事業報告書 ―』八鹿町文化財調査報告書11：pp.104-111

田村隆太郎 2008「遠江の堅穴系埋葬施設における副葬刀剣の配置」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会

俵 国一 1919「再び古墳発掘の直刀に就き」『日本鉄鋼協會々誌』5-8 日本鉄鋼協会：pp.895-913

俵 国一 1953『日本刀の科学的研究』日立評論社

丹原佐智子・安井幸雄 1986「トコチ山古墳出土鉄製遺物の保存処理について」『よみがえる古墳 ― 佐野とその周辺 ―』佐野市郷土博物館：pp.9-10

チ

千賀 久 1987「新沢327号墳の竜虎刀について」『花園史学』8 花園大学史学会：pp.130-137

千賀 久 1989「新沢千塚の鉄刀剣」『大和考古資料目録16 X線調査資料(1) ― 新沢千塚の鉄刀剣 ―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館：pp.98-108

千賀 久 2012「象嵌大刀と馬の墓」『「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』宮崎県えびの市教育委員会：pp.15-20

千葉県立房総風土記の丘 1983『古墳時代の武具・馬具』千葉県立房総風土記の丘

長 直信 2002「装飾付太刀および鉄刀」『国史跡 矢立山古墳群 ― 保存修理事業に伴う発掘調査 ―』厳原町文化財調査報告書7：pp.111-115

ツ

塚田良道 2016「魚を追う鳥 ― 江田船山古墳出土大刀の天界図像 ―」『魂の考古学 ― 豆谷和之さん追悼論文編 ―』豆谷和之さん追悼事業会：pp.453-462

塚本敏夫 2003「装飾大刀の分析と復元」『鉄器研究の方向性を探る ― 刀剣研究をケーススタディとして ―』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所：pp.40-56

塚本敏夫 2006「園部垣内古墳出土有樋鉄刀の発見」『園部城跡第3次発掘調査報告書』南丹市文化財調査報告3：pp.9-12

塚本敏夫・井上美知子・菅井裕子・大澤正己 1997「銀装大刀の自然科学的分析」『ふたがみ』7 香芝市二上山博物館

塚本敏夫・菅井裕子・井上美知子・中野敦夫 2000「三重県明和町坂本1号墳出土金銅装頭椎大刀の分析と復元」『日本文化財科学会第17回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会

塚本敏夫・中村 弘 2017「文堂古墳出土金銅装頭椎大刀の復元」『兵庫県立考古博物館 研究紀要』10：pp.1-18

塚本敏夫・橋本英将・中村 弘・多賀茂治・石松 崇・中村栄順・小林正夫・森地正和 2009「文堂古墳出土の金銅装頭椎大刀の分析と復元」『日本文化財科学会第26回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会：pp.234-235

辻田淳一郎 2015「鉄製刀剣・鉾」『山の神古墳の研究 ― 「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に ―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室：pp.45-56

土屋隆史 2018「古代日本の盛矢具と母子大刀 ― 羅州丁村古墳出土品との比較検討 ―」『古代韓・日の矢筒と装飾大刀』国立羅州文化財研究所：pp.101-149

堤圭三郎 1968「宇治市坊主山古墳出土の三輪玉について」『史想』14 京都教育大学考古学研究会：pp.7-13

津野 仁 2003a「唐様大刀の展開」『とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 研究紀要』11：pp.61-94

津野 仁 2003b「奈良時代武器・武具生産への変化」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会：pp.57-74

津野 仁 2003c「唐様大刀の性格」『日本考古学協会第69回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.99-102

津野 仁 2005a「関東・東北地方の比較にみる地域性」『北方の境界接触世界』七世紀研究会：pp.19-32

津野 仁 2005b「毛抜形太刀の系譜」『國學院大學考古学資料館 紀要』21：pp.217-244

津野 仁 2008a「方頭大刀の源流」『王権と武器と信仰』同成社：pp.773-783

津野 仁 2008b「蝦夷の武装」『考古学研究』54-4 考古学研究会：pp.41-60

- 津野 仁 2010「日本刀の成立過程」『考古学雑誌』94-3 日本考古学会：pp.1-39
- 津野 仁 2011『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館
- 津野 仁 2014a「日本古代の刀と周辺諸国の比較試考」『第10回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.87-110
- 津野 仁 2014b「古代日本と周辺諸国の刀剣比較試考」『古代武器研究』10 古代武器研究会・山口大学文学部考古学研究室：pp.91-111
- 津野 仁 2015『日本古代の軍事武装と系譜』吉川弘文館
- 津野 仁 2018「日本古代の武装と社会的機能の変化 — 古墳時代との比較を通じて —」『土曜考古』40 土曜考古学研究会：pp.53-78
- 津野 仁・内山敏行 2017「武器・武具・馬具」『モノと技術の古代史 金属編』吉川弘文館：pp.55-97

テ

- 寺井 誠 2019「朝鮮半島と日本列島の鐔付鉄鉾」『渡来文化の故地についての基礎的研究 — 新羅・加耶の要素を中心として —』大阪歴史博物館：pp.63-72
- 寺沢知子 1990「鉄製ヤリ」『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告6 同志社大学文学部文化学科内考古学研究室：pp.112-115
- 寺前直人 2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 天理ギャラリー 1993『古墳時代の武器・武具・馬具』
- 天理大学付属天理参考館 1992『古墳時代の武器・武具・馬具』
- 天理大学付属天理参考館 2010『よみがえるヤマトの王墓 — 東大寺山古墳と謎の鉄刀 —』

ト

- 東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』
- 東京国立博物館 1993『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』
- 東京国立博物館 1997『日本のかたな — 鉄のわざと武のころ —』
- 東京国立博物館 2008『重要文化財 東大寺山古墳出土 金象嵌銘花形飾環頭大刀』東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書
- 東京国立博物館 2013『東京国立博物館所蔵 骨角器集成2 — 鹿角製刀剣装具篇 —』
- 東大寺 2015『国宝 東大寺金銅鎮壇具 保存処理調査報告書』
- 東大寺山古墳研究会 2010『東大寺山古墳と謎の鉄刀』雄山閣
- 東野治之 1993「銘文の釈読」『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』東京国立博物館：pp.62-69
- 常盤 茂 2011「道後平野東部出土の鉄製武器・武具」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.37-48
- 徳江秀夫 1988「堂山古墳出土の頭椎大刀 — 群馬県千代田町光恩寺収蔵資料の基礎調査 —」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』5：pp.57-72
- 徳江秀夫 1992「上野地域における装飾付大刀の基礎的調査」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』10：pp.161-196
- 徳江秀夫 1999「大刀・刀子の刀装について」『綿貫観音山古墳Ⅱ — 石室・遺物編 —』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 255：pp.329-333
- 徳江秀夫 2005「上野地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.21-35
- 徳江秀夫 2008「小泉古墳群の環頭大刀について」『小泉大塚越2号古墳と小泉長塚1号古墳』玉村町歴史資料館：pp.9-11
- 徳江秀夫 2009「萩塚古墳出土鉄製銀象嵌装門頭大刀について」『川井・茂木古墳群』佐波郡玉村町教育委員会：pp.123-125
- 徳江秀夫 2011a「装飾付大刀 — 上毛野地域を中心として —」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17 雄山閣：pp.148-152

- 徳江秀夫 2011b「装飾付大刀からみた群馬県古墳時代」『輝ける大刀 ― 古墳時代の装飾 ―』高崎市観音塚考古資料館：pp.25-34
- 徳江秀夫 2019「金井東裏遺跡1号墳出土素環頭大刀をめぐって」『金井東裏遺跡《古墳時代編》理学分析編・考察編』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652：pp.461-464
- 富田和気夫・松山温代 1996「刀剣類」『武器・武具・馬具Ⅰ ― 石川県考古資料調査・集成事業報告書 ―』石川考古学会：pp.68-113
- 富山直人 2017「近畿地方出土鉄鋒の基礎的研究 ― 古墳時代中期を中心として ―」『考古学研究』64-1 考古学会：pp.40-59
- 豊島直博 2000a「鉄器埋納施設の性格」『考古学研究』46-4 考古学会：pp.76-92
- 豊島直博 2000b「大量副葬 ― 古墳時代中期の鉄製武器 ―」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会：pp.141-152
- 豊島直博 2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通 ― 近畿地方を中心に ―」『考古学研究』48-2 考古学会：pp.82-101
- 豊島直博 2003a「ヤリの出現」『古代武器研究』4 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.61-68
- 豊島直博 2003b「弥生時代の鹿角装鉄剣」『東国史論』18 群馬考古学会：pp.13-26
- 豊島直博 2004「弥生時代の鉄刀の柄」『考古学研究』51-3 考古学会：pp.53-72
- 豊島直博 2005a「武器・武具からみた井ノ内稲荷塚古墳・物集女車塚古墳の被葬者像」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学報告3 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団：pp.459-471
- 豊島直博 2005b「弥生時代における素環頭刀の地域性」『待兼山考古学論集 ― 都出比呂志先生退任記念 ―』大阪大学考古学研究室：pp.227-245
- 豊島直博 2005c「弥生時代における鉄剣の流通と柄の地域性」『考古学雑誌』88-2 日本考古学会：pp.1-37
- 豊島直博 2005d「弥生時代の鉄製刀剣」奈良文化財研究所
- 豊島直博 2006「三燕および日本出土鉄製刀剣の比較研究」『東アジア考古学論叢 ― 日中共同研究論文集 ―』日本奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古研究所：pp.73-80
- 豊島直博 2007「古墳時代前期の刀装具」『考古学研究』54-1 考古学会：pp.68-87
- 豊島直博 2008a「古墳時代前期の剣装具」『王権と武器と信仰』同成社：pp.642-657
- 豊島直博 2008b「古墳時代前期の鉄製刀剣」奈良文化財研究所
- 豊島直博 2008c「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』22 群馬考古学会：pp.1-26
- 豊島直博 2008d「大刀の復元」『特別史跡 キトラ古墳発掘調査報告書』文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会：pp.98-99
- 豊島直博 2008e「中畷古墳出土鉄製武器について」『南丹市文化財調査報告書 平成18年度』南丹市文化財調査報告8：pp.9-10
- 豊島直博 2009「三燕の鉄製武器」『北方騎馬民族のかがやき ― 三燕文化の考古新発見 ―』飛鳥資料館：pp.46-54
- 豊島直博 2010a「中国の鉄製刀剣と装具」『待兼山考古学論集Ⅱ ― 大阪大学考古学研究室20周年記念論集 ―』大阪大学考古学友の会：pp.35-56
- 豊島直博 2010b「鉄製武器の流通と初期国家形成」塙書房
- 豊島直博 2010c「天水経塚古墳出土鉄剣と関連資料」『熊本古墳研究』3 熊本古墳研究会：pp.37-43
- 豊島直博 2010d「東日本型金属器文化圏の盛衰とその背景」『小羽山墳墓群の研究』研究編 福井市立郷土歴史博物館研究報告：pp.201-211
- 豊島直博 2011「飛鳥池遺跡出土刀装具について」『奈良文化財研究所 紀要2011』pp.44-45
- 豊島直博 2013a「剣・刀・槍・矛」『古墳時代の考古学4 ― 副葬品の型式と編年 ―』同成社：pp.85-94
- 豊島直博 2013b「高尾山古墳出土の鉄やりと関連資料」『西相模考古』22 西相模考古学会：pp.133-136
- 豊島直博 2013c「環付足金具をもつ鉄刀の編年」『考古学研究』60-3 考古学会：pp.77-95
- 豊島直博 2013d「出土武器が語る壱岐の歴史 ― 原の辻遺跡と双六古墳 ―」壱岐市立一支国博物館しまごと大学講座【特別講座】資料
- 豊島直博 2014a「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』98-3 日本考古学会：pp.1-28

- 豊島直博 2014b「ヤリの編年と元稲荷古墳の年代」『元稲荷古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書101：pp.165-168
- 豊島直博 2014c「日韓の刀・剣・鉾」『武器・武具と農工具・漁具 ― 韓日 三国・古墳時代資料 ―』『韓日交渉の考古学 ― 三国時代・古墳時代 ―』第2回共同研究会：pp.73-82
- 豊島直博 2015「熊本市宮穴22号墓出土柄頭と関連資料」『熊本古墳研究』6 熊本古墳研究会：pp.62-68
- 豊島直博 2016「九州南部の刀剣類にみる地域性と広域共通性」『古代武器研究』12 古代武器研究会：pp.53-60
- 豊島直博 2017「双龍環頭大刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』99-2 日本考古学会：pp.51-87
- 豊島直博 2018a「古墳時代の軍隊と播磨」『武器からみた古墳時代の播磨』第18回播磨考古学研究集会実行委員会：pp.1-12
- 豊島直博 2018b「庚寅銘大刀の考古学的位置づけ」『元岡・桑原遺跡群30 ― 元岡古墳群G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 ―』福岡市埋蔵文化財調査報告書1355：pp.97-102
- 豊島直博 2018c「岡山県北部における古墳時代から古代への転換」『待兼山考古学論集Ⅲ ― 大阪大学考古学研究室30周年記念論集 ―』大阪大学考古学友の会：pp.605-626
- 豊島直博 2018d「日本における鉄製武器の生産・流通と国家権力の形成」『考古学研究』65-2 考古学研究会：pp.54-68
- 豊島直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』102-1 日本考古学会：pp.77-121
- 十和田育美 2014「『上新山遺跡』と蔵手刀」『北三陸の蝦夷・蔵手刀』岩手考古学会：pp.17-20
- ナ
- 永井義博 1994「掘り環頭大刀」『団子塚9号墳出土遺物保存処理報告書 ― 平成3・4・5年度国庫補助事業 ―』袋井市教育委員会：pp.157-164
- 中里正憲 2003「角閃石安山岩混入の埴輪〈大刀編〉」『埴輪研究会誌』7 埴輪研究会：pp.19-26
- 永嶋正春 1993「『王賜』銘鉄剣のX線の調査と銘文の表出」『国立歴史民俗博物館 研究報告』50：pp.409-442
- 永嶋正春 2008「岡崎18号墳出土遺物のX線の調査」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告3：pp.132-137
- 仲辻慧大 2019「鹿角製刀子柄からみた西庄遺跡」『海辺における集落と墓制の実像 ― 磯間岩陰遺跡と西庄遺跡 ―』紀伊考古学研究会第22回大会：pp.40-49
- 長友 信 2011「『鹿角製』刀剣装具の制作技法の変遷」『青山考古』27 青山考古学会：pp.7-31
- 長友 信 2013「古墳出土鉄刀の隅切尻・隅扶尻茎」『青山考古』29 青山考古学会：pp.83-98
- 長友 信 2014「青山学院大学所蔵・古墳出土鉄刀の佩用装置について」『青山考古』30 青山考古学会：pp.1-10
- 中野和浩 2012「114号墓出土象嵌大刀の龍文について」『島内地下式横穴墓群Ⅳ』えびの市埋蔵文化財調査報告書53 えびの市教育委員会：pp.123-124
- 長野県立歴史館 1998『古墳時代の武人のすがた 古代シナノの武器と馬具』
- 長野県立歴史館 2013『刃が語る信濃 武器，象徴，そして芸術へ』
- 中村 修 2013「直弧文の北部九州への拡散過程」『立命館大学考古学論集Ⅵ ― 和田晴吾先生定年退職記念論集 ―』立命館大学考古学論集刊行会：pp.281-288
- 中山清隆 2008「靖国神社所蔵の単鳳式環頭大刀柄頭をめぐって」『王権と武器と信仰』同成社：pp.749-761
- 名本二六雄 2011「愛媛県における鉄製武器・武具に就いて」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.1-5
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1989『大和考古資料目録16 X線調査資料（1） ― 新沢千塚の鉄刀剣 ―』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2006『古代刀剣の復元 七支刀の製作技術と刀匠・河内國平の世界』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別陳列図録9
- 奈良文化財研究所・京都大学総合博物館 2013『京都大学総合博物館所蔵秋田市小阿地遺跡出土金銅装大刀の調査』

ニ

- 新納 泉 1982a「京都府下出土の装飾付大刀」『京都考古』26 京都考古刊行会：pp.4-8
- 新納 泉 1982b「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』65-4 史学研究会：pp.110-141
- 新納 泉 1983a「双竜・双鳳環頭大刀」『湯舟坂2号墳』久美浜町文化財調査報告書7：pp.91-97
- 新納 泉 1983b「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30-3 考古学研究会：pp.50-70
- 新納 泉 1984「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX — 古墳文化研究会 —：pp.41-47
- 新納 泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』34-3 考古学研究会：pp.47-64
- 新納 泉 1989「王と王の交渉」『古代史復元6 — 古墳時代の王と民衆 —』講談社：pp.145-161
- 新納 泉 1992「巨大墳から巨石墳へ」『新版 古代の日本4 — 中国・四国 —』角川書店：pp.115-132
- 新納 泉 1998「武器」『古墳時代の研究8 — 古墳Ⅱ 副葬品 —』雄山閣：pp.25-39
- 新納 泉 2001「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』48-3 考古学研究会：pp.56-74
- 新納 泉 2002「古墳時代の社会統合」『日本の時代史2 — 倭国と東アジア —』吉川弘文館：pp.136-167
- 新納 泉 2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」『考古学研究』56-3 考古学研究会：pp.71-91
- 新納 泉 2011「装飾付大刀分布の歴史的背景」『覇者の愛した煌めき — 6世紀代の日韓金銅製品 —』宮崎県立西都原考古博物館：pp.70-79
- 仁木 聡 2004「古墳時代における長柄武器について — 全長規格とその武装 —」『古代学研究』165 古代学研究会：pp.1-24
- 仁木 聡 2007「王権祭祀と沖ノ島 古墳副葬品の出土状況からみた沖ノ島祭祀遺跡について」『神々の至宝 祈りの心と美のかたち』島根県立古代出雲歴史博物館：pp.210-229
- 西尾克己 2016「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち」『長野県立歴史館研究紀要』22：pp.83-101
- 西尾克己 2017「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち2」『長野県立歴史館研究紀要』23：pp.1-7
- 西川明彦 2003「須賀川市稲古館古墳出土大刀について — 正倉院の大刀外装との比較による構造調査 —」『稲古館古墳 稲古館遺跡』須賀川市文化財調査報告40：pp.63-72
- 西川明彦 2009『正倉院の武器・武具・馬具』日本の美術523 ぎょうせい
- 西川 宏 1966「武器」『日本の考古学V 古墳時代（下）』河出書房：pp.251-273
- 西澤正晴 2000「井田松江18号墳出土の金銅装圭頭大刀について」『井田松江古墳群』戸田村文化財調査報告書5：pp.77-88
- 西澤正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『静岡県埋蔵文化財研究所 研究紀要』9：pp.72-104
- 西澤正晴 2006「E区SI4出土の蕨手刀について」『河崎の柵擬定地発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書474
- 西澤正晴 2014「蕨手刀概論」『北三陸の蝦夷・蕨手刀』岩手考古学会：pp.1-10
- 西谷真治・置田雅昭 1992「京都府元稲荷古墳出土鉄製品の再検討」『日本考古学協会第58回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.60-61
- 西山要一 1981「X線透過試験による古墳時代刀剣の調査 — 素環頭大刀と象嵌のある刀装具について —」『出土遺物・民俗文化財へのX線透過試験の応用』元興寺文化財研究所
- 西山要一 1986「古墳時代の象嵌 — 刀装具について —」『考古学雑誌』72-1 日本考古学会：pp.1-30
- 西山要一 1995「文字の書かれた大刀 — 象嵌銘文大刀」『考古学と自然科学』31・32 日本文化財科学会：pp.81-106
- 西山要一 1999「東アジアの古代象嵌銘文大刀」『文化財学報』17 奈良大学文学部文化財学科：pp.37-85
- 西山要一 2003「象嵌 — 古墳時代の金工技術（2） —」『考古資料大観7 — 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 —』小学館：pp.359-362
- 西山要一 2009「シシヨツカ古墳出土の象嵌遺物の年代」『加納古墳群・平石古墳群 本文編』大阪府教育委員会：pp.363-370
- 西山要一 2014「山王山古墳出土の象嵌円頭柄頭」『山王山古墳』飯塚市文化財調査報告書45：pp.58-62
- 西山要一 2016「古代象嵌技法と象嵌大刀の招福・攘災の祈り」『元興寺文化財研究所 研究報告2015 — 水野正好所長追悼論文集 —』：pp.133-142

西山要一・山口誠治・李午憲 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（1）－ 日韓文化交流の源点をさぐる」『青丘学術論集』9：pp.5-96

西山要一・山口誠治・李午憲 1997「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（2）－ 日韓文化交流の源点をさぐる」『青丘学術論集』10：pp.97-174

丹羽崇史 2012a「飛鳥時代の武器と武具」『比羅夫がゆく－ 飛鳥時代の武器・武具・いくさ－』飛鳥資料館：pp.23-32

丹羽崇史 2012b「唐様大刀をめぐって」『比羅夫がゆく－ 飛鳥時代の武器・武具・いくさ－』飛鳥資料館：pp.41-45

ヌ

布目順郎 1983「熊本県久保遺跡第1号石棺出土の鉄剣に付着する平絹について」『古代学研究』100 古代学研究会：pp.29-31

ノ

野垣好史 2002「三果環頭大刀の編年－ 日本出土資料を中心に－」『物質文化』74 物質文化研究会：pp.40-60

野垣好史 2005「富山県の頭椎大刀」『ふくおかの飛鳥時代を考える－ 富山・能登の横穴からのアプローチ』福岡町教育委員会・富山考古学会：pp.244-251

野垣好史 2006「装飾付大刀変遷の諸段階」『物質文化』82 物質文化研究会：pp.1-24

野垣好史 2013「装飾付大刀」『若狭と越の古墳時代』季刊考古学・別冊19 雄山閣：pp.105-112

野口良也 2001「大刀形埴輪の表現と地域性」『松戸市立博物館 紀要』8

野島 永 1997「弥生・古墳時代の鉄器生産の一樣相」『たたら研究』38 たたら研究会

野島 永 2003「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって」『古代武器研究』4 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.54-60

野島 永 2009『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣

野村 崇・瀧瀬芳之 1990「北海道余市町フゴッペ洞窟前庭部出土の鉄製武器」『古代文化』42-10 古代文化研究会：pp.21-25

ハ

白雲翔（佐々木正治 訳）2009『中国古代の鉄器研究』同成社

朴敬道 2011「三国時代における環頭大刀の製作と日本列島との関係」『覇者の愛した煌めき－ 6世紀代の日韓金銅製品－』宮崎県立西都原考古博物館：pp.63-69

白谷朋世 1988「“被葬者併置刀剣”考」『兎原－ 森岡秀人さんと島聖子さんのご結婚によせて－』芦屋郷土資料室OB会

朴天秀 1995「渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的変動」『待兼山論叢』29－ 史学編－ 大阪大学文学部：pp.53-84

朴天秀 1999「装飾鉄銚の性格とその地域性」『国家形成期の考古学－ 大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学友の会：pp.457-470

橋本達也 2002「四国における古墳時代前・中期の鉄製品」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会：pp.531-544

橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論－ 松林山古墳と津堂城山古墳から－」『待兼山考古学論集－ 都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室：pp.539-556

橋本達也 2006「九州における古墳時代前期の鉄製品」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会：pp.27-48

橋本達也 2010「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価－ 中期と後期を分かちもの－」『待兼山考古学論集II－ 大阪大学考古学研究室20周年記念論集－』大阪大学考古学友の会：pp.481-501

橋本達也 2012「九州南部における島内地下式横穴墓の位置づけ」『島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像 予稿集』えびの市教育委員会：pp.27-32

橋本達也 [編] 2014『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館

- 橋本達也・中野和浩・塚本敏夫・初村武寛 2017「銀装円頭大刀と東アジアの鮫皮柄巻 — 宮崎県えびの市島内139号地下式横穴墓出土例を中心に —」『日本考古学協会第83回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.46-47
- 橋本英将 2003a「外装からみた装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る — 刀剣研究をケーススタディとして —』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所：pp.131-144
- 橋本英将 2003b「刀剣装具の復元と位置づけ」『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書12：pp.439-446
- 橋本英将 2004a「伝統系装飾大刀の製作系譜」『元興寺文化財研究』85 元興寺文化財研究所：pp.1-9
- 橋本英将 2004b「若狭における古墳の展開」『市場古墳』上中町文化財調査報告9：pp.47-52
- 橋本英将 2005「心合寺山古墳出土鉄製三葉環頭大刀の構造と意義」『史跡心合寺山古墳整備事業報告書』八尾市教育委員会：pp.144-149
- 橋本英将 2006a「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研究』7 古代武器研究会：pp.50-57
- 橋本英将 2006b「らせん状柄巻をもつ装飾大刀 — 中村1号墳出土大刀の検討から —」『上塩冶築山古墳・角田古墳・高岡Ⅱ遺跡・中村1号墳出土装飾大刀』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書16：pp.23-32
- 橋本英将 2008「古墳時代刀剣の変遷に関する覚書」『元興寺文化財研究所 研究報告2007』：pp.35-40
- 橋本英将 2010「金銅装頭椎大刀から検出されるAgの解釈」『遠古登攀 — 遠山昭登君追悼論文集 —』遠古登攀刊行会：pp.1-16
- 橋本英将 2011「大之越古墳出土単鳳環頭大刀」『出羽の国成立以前の山形』山形県立博物館：pp.71-72
- 橋本英将 2012a「東大寺金堂鎮壇具を見直す（1） — 陰劔・陽劔の発見とその考古学的意義 —」『考古学雑誌』96-2 日本考古学会：pp.36-50
- 橋本英将 2012b「中村1号墳出土装飾大刀群の位置付け」『中村1号墳 本文編（第1分冊）』出雲市の文化財報告15：pp.197-206
- 橋本英将 2012c「寺山古墳出土の象嵌刀装具」『明石の古墳Ⅱ』発掘された明石の歴史展実行委員会：pp.71-76
- 橋本英将 2013「装飾大刀」『古墳時代の考古学4 — 副葬品の型式と編年 —』同成社：pp.95-110
- 橋本英将 2014a「キトラ古墳出土遺物とその意義」『キトラ古墳壁画』朝日新聞社：pp.99-102
- 橋本英将 2014b「金銅装頭椎大刀の製作技術と佩用者像」『文堂古墳』本文編 大手前大学史学研究所研究報告13 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会：pp.163-176
- 橋本英将 2015「奈良時代の装飾大刀」『国宝 東大寺金銅鎮壇具 保存処理調査報告書』東大寺：pp.273-278
- 橋本英将 2016「東大寺金銅鎮壇具 — 大刀を中心として —」『東大寺の新研究Ⅰ 東大寺の美術と考古』法蔵館：pp.87-110
- 橋本英将・塚本敏夫・植田直見・井上美知子 2005「エミシンの大刀とヤマトの大刀 — 材質・技法・デザインの比較からみる地域間交渉 —」『日本文化財科学会第22回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会：pp.70-71
- 橋本博文 1981「亀甲繫鳳凰文象嵌円頭大刀について」『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会：pp.49-61
- 橋本博文 1985「亀甲繫鳳凰文象嵌円頭大刀・小刀及び鑑本を象嵌装飾する大刀と佩用者の性格」『板倉町史 — 原始・古代 —』板倉町：pp.287-306
- 橋本博文 1986a「パルメット文銀象嵌円頭大刀をめぐる — 栃木県佐野市トコチ山古墳出土例を中心として —」『よみがえる古墳 — 佐野とその周辺 —』佐野市郷土博物館：pp.2-8
- 橋本博文 1986b「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年 — 亀甲繫鳳凰文・花文系列を中心として —」『考古学ジャーナル』266 ニュー・サイエンス社：pp.23-28
- 橋本博文 1990「百練の利刀を賜う」『古代史復元7 — 古墳時代の工芸 —』講談社：pp.108-120
- 橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚 — 久保哲三先生追悼論文集 —』真陽社：pp.221-256
- 橋本博文 2000「古墳時代の装飾付大刀」『古代の大刀のかがやき』小山市教育委員会：pp.1-9
- 長谷川達 2001「剣を折る・鏡を割る」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会：pp.109-120
- 服部伊久男 2003「畿内の大刀形埴輪」『考古学に学ぶⅡ — 考古学研究室開設50周年記念 —』同志社大学考古学シリーズⅧ：pp.255-267
- 服部伊久男 2007「大和の装飾大刀概観」『考古学に学ぶⅢ — 森浩一先生傘寿記念献呈論集 —』同志社大学考古学シリーズⅨ：pp.263-

274

- 服部伊久男 2008 「大和の装飾大刀」『王権と武器と信仰』同成社：pp.762-772
- 服部伊久男 2008 「大和出土の振環付大刀について」『古代学研究』180 古代学研究会：pp.288-294
- 土生田純之 2019 「飾り大刀と渡来人」『飾り大刀 ― 武器からみた古墳時代のぐんま ―』かみつけの里博物館：pp.48-53
- 濱田耕作・梅原末治 1923 『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告8 京都帝国大学
- 林 昭三・島地 謙・福田さよ子 1993 「石棺内出土刀剣類等の木質部の樹種」『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』分析と技術編集
奈良県立橿原考古学研究所
- 林 大智 2019 「日本海沿岸地域における鉄製武器の普及と防衛集落 ― 舶載大型武器の受容と遺跡群の形成 ―」『第16回古代武器研究会
発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.79-92
- 坂 靖 2000 「古墳時代の武器生産」『古代武器研究』1 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.58-66

ヒ

- 樋上 昇・早野浩二 2013 「安城市惣作遺跡出土の刀柄装具について」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』14：pp.23-32
- 光本 順 2001 「古墳の副葬品配置における物と身体分類及びその論理」『考古学研究』48-1 考古学研究会：pp.96-116
- 比佐陽一郎 2006 「金属製遺物の保存処理にみる考古学と自然科学の接点」『七隈史学』7 七隈史学会：pp.144-129（後ろからpp.139-154）
- 比佐陽一郎・今西寿光・塚本敏夫・植田直見・池ノ上宏 2005 「錫で装飾された古墳時代の環頭大刀 ― 福岡県福津市勝浦高堀出土資料の
保存科学的調査 ―」『日本文化財科学会第22回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会：pp.78-79
- 日高敬子 2007 「(伝) 永野原古墳出土金銅装頭椎大刀の保存処理」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』3：pp.56-59
- 日高 慎 2000c 「風返稲荷山古墳出土の飾大刀と佩用方法について」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会：
pp.181-192
- 日高 慎 2004 「千葉県稲荷山遺跡出土の七星剣をめぐる諸問題」『日本考古学協会第70回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.162-165
- 日高 慎 2005 「象嵌の形態とその意味するもの ― 律令期の刀剣類にみる ―」『考古学ジャーナル』532 ニュー・サイエンス社：
pp.15-18
- 日高 慎 2008 「後期古墳における刀類立てかけ副葬について」『王権と武器と信仰』同成社：pp.784-795
- 櫃本誠一 1973 「兵庫県和田山町筒江出土の頭槌大刀」『古代学研究』67 古代学研究会：pp.25-26
- 氷見市立博物館 2002 『コシの軍団 ― 古墳時代の武器と武具 ―』
- 兵庫県立考古博物館 2018 『装飾大刀と日本刀 ― 煌めきの古墳文化 ―』展示図録23
- 平石 充 2005 「文献からみた装飾付大刀の機能とその分布」『装飾付大刀と後期古墳 ― 出雲・上野・東海地域の比較研究 ―』島根県古
代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.67-78
- 平尾和久 2004 「まとめ ― 福岡県内出土象嵌製品集成 ―」『朝田塚花遺跡』福岡県文化財調査報告書185：pp.9-14
- 平尾良光・齋藤美奈子・谷水雅治 2006 「島根県かわらけ谷古墳から出土した金銅装双龍環頭大刀飾りの鉛同位体比」『古代文化研究』14
島根県古代文化センター：pp.25-31
- 平澤祐子・藤村茂克・八木光則 1999 『蔵手刀集成』（第2版）文化財資料集2 盛岡市教育委員会文化財調査室
- 平田洋司 1995 「森の宮遺跡の銀装刀子」『葦火』10-4 大阪文化財研究所
- 平ノ内幸治 1981a 「三累環式環頭柄頭について」『宇美観音浦』下巻 宇美町教育委員会：pp.253-254
- 平ノ内幸治 1981b 「蜻蛉装足金具について」『宇美観音浦』下巻 宇美町教育委員会：pp.254-256
- 平ノ内幸治 1984 「装飾大刀について」『湯湧古墳群』宇美町文化財調査報告書4：pp.26-34
- 廣井雄一 2003 「日本刀の成立と展開」『草創期の日本刀 反りのルーツを探る』佐野美術館：pp.119-126

廣井雄一 2005 「刀姿・刀装具の様式変化 ― 刀から日本刀発生にいたるまで ―」『考古学ジャーナル』532 ニュー・サイエンス社：pp.5-9

フ

深沢靖幸 1998 「高倉古墳群出土の銀象嵌大刀」『府中郷土の森紀要』11：pp.65-84

深谷 淳 2003 「関西大学博物館所蔵の金属製刀装具」『関西大学博物館紀要』9：pp.199-213

深谷 淳 2005 「鉄地金銅張半球文勾革飾金具の性格 ― 三田市西山6号墳出土資料をめぐって ―」『市史研究さんだ』8 三田市：pp.1-25

深谷 淳 2008 「金銀装倭系大刀の変遷」『日本考古学』26 日本考古学協会：pp.69-101

福島県立博物館 1988 『日本刀の起源展』

福島雅儀 1983 「県南地方の横穴群から出土した鉄刀について」『七軒横穴群』矢吹町文化財調査報告6：pp.43-74

福島雅儀 1991 「鉄製板鍔付鉄刀の成立」『蝦夷穴12号横穴墓調査報告』中島村文化財調査報告書2：pp.23-42

福島雅儀 1996 「福島県の飛鳥文化」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会：pp.191-206

福島雅儀 2000 「出土遺物と年代的検討」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告8 弘法山古墳群』福島県文化財調査報告書369：pp.147-155

福島雅儀 2001 「7世紀金属製鉄刀の構造と年代」『日本考古学協会第67回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：pp.96-99

福島雅儀 2003 「稲古館出土鉄刀とその意義」『稲古館古墳 稲古館遺跡』須賀川市文化財調査報告40：pp.50-62

福島雅儀 2005 「古代金属製鉄刀の年代」『考古学雑誌』89-2 日本考古学会：pp.47-75

福島雅儀 2008 「古代装飾付大刀の政治的役割」『考古学雑誌』92-2 日本考古学会：pp.49-84

福島雅儀 2010 「古代、金属装鉄刀の暦年代」『考古学研究』57-2 考古学研究会：pp.92-100

福島雅儀 2018 「金鈴塚古墳石棺内出土 金銅装飾圭頭大刀」『金鈴塚古墳研究』6 木更津市郷土博物館金のすず：pp.1-26

福島雅儀 2019 『北からみた倭国』雄山閣

福田 理 1994 「内反素環頭大刀考」『日本文化』16：pp.1-50

福永伸哉・杉井 健・橋本達也・朴天秀 1998 「4, 5世紀における韓日交渉の考古学的再検討 ― 地域間相互交流の視点から」『青丘学術論集』12 韓国文化研究振興財団：pp.5-122

福宿孝夫 1990 「稲荷山古墳鉄剣と江田船山古墳大刀の両銘字体 ― その同時性の検証 ―」『宮崎大学教育学部紀要 人文科学』67：pp.1-27

福山敏男 1934 「江田発掘大刀及び隅田八幡神社鏡の製作年代について（日本最古の金石文）」『考古学雑誌』24-1 日本考古学会：pp.31-40

福山敏男 1982 「東大寺山大刀と稲荷山鉄剣の銘文」『考古学ジャーナル』201 ニュー・サイエンス社：pp.2-4

藤井章徳 2000 「古墳に副葬される刀剣」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会：pp.53-73

藤井章徳 2007 「古墳時代鉄鉾の袋部について」『元興寺文化財研究所創立40周年記念論文集』元興寺文化財研究所・元興寺文化財研究所民俗文化財保存会：pp.199-208

藤井康隆 2001 「大刀の復元的検討」『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ ― 前方部副葬品研究篇 ―』向日丘陵古墳群調査研究報告Ⅰ 向日市埋蔵文化財センター：pp.111-116

藤井康隆 2004 「中国東晋南朝の武装について」『古代武器研究』5 古代武器研究会：pp.57-66

藤沢 敦・菊地芳朗 2002 「村田町中山岡横穴墓群の出土遺物」『宮城考古学』宮城県考古学会：pp.127-136

藤澤一夫 1982 「埼玉稲荷山墓鉄剣の金錯銘 ― 追考 ―」『考古学ジャーナル』201 ニュー・サイエンス社：pp.9-13

藤田 淳 1999 「金属製品に遺存する有機質遺物について」『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告191：pp.179-193

- 藤田和尊・木許 守 2011「鎧とその表象品」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会：pp.110-125
- 藤永正明 1996「装飾付大刀をもつ人」『金の大刀と銀の大刀 — 古墳・飛鳥の貴人と階層 —』大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.89-91
- 藤平裕子 1998「塚原29号墳出土の鍔付き鉄剣」『君津郡市文化財センター 研究紀要』Ⅷ：pp.109-116
- 藤村 翔 2012「銀装刀子とその類例」『宇東川遺跡A地区』富士市埋蔵文化財調査報告50：pp.163-170
- 藤村 翔 2013「金の刀子と銀の刀子 — 古墳時代後期における装飾刀子の展開と特質 —」『立命館大学考古学論集VI — 和田晴吾先生定年退職記念論集 —』立命館大学考古学論集刊行会：pp.321-332
- 藤本英夫・菊池徹夫 1964「北海道ウサクマイ出土の蔵手刀について」『考古学雑誌』49-4 日本考古学会
- 復元研究プロジェクトチーム 2002「福島県内出土古墳時代金工遺物の研究 — 笹内古墳群出土馬具・武具・装身具等，真野古墳群A地区20号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作 —」『福島県文化財センター白河館 研究紀要2001』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団
- 古川 匠 2010「古墳時代後・終末期の装飾馬具と装飾付大刀における貴金属の使用について」『京都府埋蔵文化財論集6 — 創立30周年記念誌 —』：pp.183-190
- 古川 匠 2013「古墳時代中・後期の金工品生産体制についての一試論」『立命館大学考古学論集VI — 和田晴吾先生定年退職記念論集 —』立命館大学考古学論集刊行会：pp.289-298
- 古野徳久 1989「老司古墳出土の環頭大刀」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書209：pp.193-196
- 古谷 清 1907「異形なる矛に就て」『考古界』6-6 考古学会：pp.322-327
- 古谷 毅 2000「鉄製武器武具と古墳文化」『古代武器研究』1 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.67-74
- 古谷 毅 2001「鉄製刀剣の系譜」『季刊考古学』76 雄山閣：pp.25-29
- 古谷 毅 2010「東大寺山古墳出土家形・花形飾環頭大刀の性格」『東大寺山古墳の研究 — 初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究 —』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学付属天理参考館：pp.403-412
- 古谷 毅 2011「日本における古墳出土金属器の分析と調査研究方法論 — 鉄製武器・武具・馬具を中心に —」『東アジアの古墳文化』書景文化社：pp.303-327
- 古谷 毅 2012「島内地下式横穴墓群出土武器武具の資料的意義 — 保存状態と武器武具の性格 —」『「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委員会：pp.9-14
- 古谷 毅 2018「物部氏と武器生産 — 石上神宮と王権の武装 —」『ここまで判った物部氏 — 考古学の調査研究成果から —』天理市観光協会：pp.81-98

ホ

- 細川晋太郎 2007「古墳時代中期の鉄剣と鉄刀の構造 — 珠金塚古墳南棺出土刀剣の観察 —」『古文化談叢』58 九州古文化研究会：pp.97-137

マ

- 前坂尚志 1994「蛇行剣小考」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI：pp.313-331
- 正岡睦夫 2011「越智郡・今治市の鉄製武器・武具」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.6-25
- 増澤文武・村田忠繁 1992「透過試験による頭椎大刀の観察」『神戸市立博物館 研究紀要』9：pp.34-38
- 増田恵美子・増田 啓 2009「古墳時代中期の刀剣類に見られる柄巻きの糸について」『歴史文化遺産研究』2 大手前大学史学研究所：pp.12-13
- 増田精一 1961「山形足金物の源流」『MUSEUM』126 東京国立博物館
- 増田精一 1967「前期古墳出土刀剣の拵えについて」『史潮』100 大塚史学会：pp.34-46
- 増田精一 1982「つるぎのたち」『考古学ジャーナル』201 ニュー・サイエンス社：pp.5-8
- 増田孝彦 1988「高山古墳群（12号墳）出土の象嵌をもつ刀装具」『京都府埋蔵文化財情報』30 京都府埋蔵文化財調査研究センター：

- pp.38-40
- 町田 章 1976「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報28：pp.77-105
- 町田 章 1984「鉄に象嵌」『鉄の文化史 五千年の謎とロマンを追って』東洋経済新報社：pp.171-183
- 町田 章 1986「環頭大刀二三事」『山陰考古学の諸問題 — 山本清先生喜寿記念論文集 —』山本清先生喜寿記念論文集刊行会：pp.277-300
- 町田 章 1987「岡田山1号墳の儀杖大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会：pp.84-98
- 町田 章 1988「三重県井田川茶白山古墳の鉄地銀象嵌掘じり環頭大刀について」『井田川茶白山古墳』三重県埋蔵文化財調査報告26：pp.105-114
- 町田 章 1989「江田船山古墳の鉄刀銘文を読む」『考古学研究』36-3 考古学研究会：pp.98-101
- 町田 章 1991「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内歴史民俗資料館 紀要』6：pp.113-117
- 町田 章 1995「装飾大刀にみる文化交流」『東アジアの古代文化』83：pp.29-43
- 町田 章 1997「加耶の環頭大刀と王権」『加耶諸国と王権』仁済大学校加耶文化研究所：pp.123-147
- 松井和幸 2004「蛇行剣の新一例」『北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告 B類 歴史』1：pp.49-52
- 松尾充晶 2001a「金銅装双龍環頭大刀の調査成果」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書10：pp.53-70
- 松尾充晶 2001b「装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書10：pp.77-92
- 松尾充晶 2002「装飾付大刀」『下布施横穴墓群・案久寺遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書4 木次町教育委員会：pp.19-25
- 松尾充晶 2003a「身分表象としての装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る — 刀剣研究をケーススタディとして —』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所：pp.145-164
- 松尾充晶 2003b「装飾付大刀」『考古資料大観7 — 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 —』小学館：pp.173-179
- 松尾充晶 2004「装飾付大刀と金銅装馬具の評価」『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会：pp.327-338
- 松尾充晶 2005a「研究の目的と方法」『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.1-6
- 松尾充晶 2005b「装飾付大刀の表徴機能・氏族関係に関する研究史」『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.7-10
- 松尾充晶 2005c「出雲地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.11-20
- 松尾充晶 2005d「総括：装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳 — 出雲・上野・東海地域の比較研究 —』島根県古代文化センター調査研究報告書31 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター：pp.79-89
- 松尾充晶 2012「集成 出雲地域の装飾付大刀」『松江市史 史料編2 — 考古資料 —』松江市：pp.797-801
- 松尾充晶 2019「出雲の装飾付大刀からみた、古墳時代後期の地域首長と王権」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会：pp.30-35
- 松木武彦 2002「日本列島における先史・古代武器の進化と退化」『武器の進化と退化の学際的研究 — 弓矢編 —』国際日本文化研究センター：pp.67-84
- 松木武彦 2005『日本列島と朝鮮半島の国家形成期における武器発達過程の考古学的比較研究』岡山大学
- 松木武彦 2007『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会
- 松崎元樹 1985「古墳出土銀付足金物を施す大刀について」『東京考古』3 東京考古談話会
- 松崎元樹 1994「大田区塚越14号横穴墓出土の鞘飾金具」『東京考古』12 東京考古談話会：pp.82-84
- 松崎元樹 2006「古墳時代終末期の地域構造 — 多摩川流域の石室墳および横穴墓の検討 —」『考古学論究』11 立正大学考古学会：

pp.117-135

- 松崎元樹 2007「後・終末期古墳の威信財」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学・別冊15 雄山閣：pp.98-106
- 松林正徳 2005a「八幡横穴墓群出土銀線象嵌鍔の復元制作」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.89-93
- 松林正徳 2005b「八幡横穴墓出土心葉文象嵌鍔の文様復元」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.94-97
- 松村冬樹 1981「名古屋市守山区東禅寺2号墳」『名古屋市博物館研究紀要』5
- 松本建速 2001「蕨手刀と牧」『海と考古学』4 海交史研究会
- 松本建速 2003「蝦夷と蕨手刀」『物質文化』75 物質文化研究会：pp.30-44
- 真鍋成史 2017「鍛冶遺跡出土の刀剣について」『古代武器研究』13 古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.29-38
- 真鍋秀身 2003「愛媛県東部の渡来系遺物」『遺跡』40 遺跡発行会：pp.1-19
- 丸山瓦全 1924「下野国湯津上村発掘鹿角製鐔」『考古学雑誌』13-11 日本考古学会

ミ

- 三木 弘 2017「藤の森古墳に副葬された鉄銚」『大阪府教育庁文化財調査事務所年報』21 大阪府教育委員会：pp.20-21
- 水野敏典 2013「古墳時代中期の武器と東アジア世界」『漆黒の武具・白銀の武器 ― 百舌鳥古墳群と5世紀の動乱 ―』堺市文化財講演会録6 堺市：pp.112-143
- 水野敏典 2018「黒塚古墳出土武器をめぐる諸問題」奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳の研究』八木書店：pp.314-321
- 溝口禎次郎 1912「正倉院御物中の刀剣」『考古学雑誌』2-11 日本考古学会
- 三田覚之 2015「仏教美術を中心とする上代工芸作品から見た金鈴塚古墳出土金具」『金鈴塚古墳研究』3 木更津市郷土博物館金のすず：pp.14-27
- 三宅博士 1986「山陰地方出土刀子に関する覚書き」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会：pp.167-189
- 三宅博士 1988「奥山B-II号横穴出土大刀について」『季刊文化財』61 島根県文化財愛護協会：pp.33-42
- 三宅博士 1998「古代大刀復元作業から派生する諸問題」『刀剣美術』495 日本美術刀剣保存協会：pp.10-19
- 三宅正浩 1996「金・銀・金銅装大刀」『金の大刀と銀の大刀 ― 古墳・飛鳥の貴人と階層 ―』大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.69-73
- 宮坂光昭 1990「清水窪古墳出土の鉄刀と鉄鏃」『諏訪市史研究紀要』2 諏訪市史編纂室：pp.67-78
- 宮崎市定 1977『謎の七支刀 五世紀の東アジアと日本』中公新書703 中央公論社
- 宮崎県立西都原考古博物館 2011『覇者の愛した煌めき ― 6世紀代の日韓金銅製品 ―』
- 宮島義和 1998「遺跡出土の形に関する一視点」『人類史集報1998』漆利用の人類史調査・飛騨山峡の人類史調査グループ：pp.159-167
- 宮原俊一 2000「王子ノ台遺跡出土の鉄剣と類例」『王子ノ台遺跡Ⅲ ― 弥生・古墳時代編 ―』東海大学：pp.654-658
- 三好裕太郎 2014「北後田1号地下式横穴墓出土鉄器の製作技術と年代」『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館：pp.28-31

ム

- 向坂綱二 1971「飾大刀について」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県文化財調査報告書10：pp.39-47
- 武藤一郎 1925「羽後国仙北郡六郷東根村上中村古墳と蕨手刀に就て」『考古学雑誌』15-12 日本考古学会
- 村岡恭子・関 邦一・徳江秀夫 1998「邑楽町松本23号墳出土の象嵌装大刀」『群馬県埋蔵文化財事業団 研究紀要』15：pp.35-58
- 村上英之助 1978「考古学から見た七支刀の製作年代」『考古学研究』25-3 考古学研究会：pp.86-105
- 村上英之助 1988「古新羅の刀子」『たたら研究』29：pp.39-48
- 村上恭通 1999a「鉄製武器形副葬品の成立とその背景 ― 三韓・三国時代と前方後円墳成立期を対象として ―」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古会：pp.59-85
- 村上恭通 1999b『倭人と鉄の考古学』青木書店

村上恭通 2000「鉄器生産・流通と社会変革 — 古墳時代の開始をめぐる諸前提 —」『古墳時代像を見なおす — 成立過程と社会変革 —』
青木書店

村上恭通 2001「古墳時代成立期における鉄製武器の国内生産」『季刊考古学』76 有山閣：pp.61-64

モ

茂木雅博 1980a「環頭大刀の性格」『上総山王山古墳』市原市教育委員会：pp.134-175

茂木雅博 1980b「古墳出土の鉄鉾について」『常陸観音寺山古墳の研究』：pp.89-110

茂木雅博 2008「古墳時代東国の武器副葬 — 常陸国を中心に —」『王権と武器と信仰』同成社：pp.687-696

持田大輔 2004「装飾付大刀外装の系統と変遷」『遡航』22 早稲田大学文研考古談話会：pp.35-50

持田大輔 2005「韓半島と倭国における装飾環頭大刀の展開」『益子天王塚古墳の時代』早稲田大学文学学術院考古学研究室：pp.28-30

持田大輔 2006a「龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』52（第4分冊）：pp.139-148

持田大輔 2006b「倭装大刀の装飾化と半島系装飾大刀の導入」『古代武器研究』7 古代武器研究会：pp.70-79

持田大輔 2010「含玉系単龍鳳環頭大刀の検討 — 日本列島および朝鮮半島出土例より —」『比較考古学の新天地』同成社：pp.413-422

持田大輔 2011「古墳時代後期・終末期の装飾付環頭大刀」『考古学ジャーナル』616 ニュー・サイエンス社：pp.7-12

持田大輔 2013「律令制儀刀の成立に関する一考察」『技術と交流の考古学』同成社：pp.652-661

持田大輔 2016「金鈴塚古墳出土大刀の研究（2）獅嘯環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』4 木更津市郷土博物館金のすず：pp.9-27

持田大輔 2017「明治・大正期における個人収集品の様相 — 「双龍環頭」を中心に —」『奈良県立橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』
40：pp.59-73

持田大輔・中條英樹 2009「益子天王塚古墳出土遺物の調査（2）— 環頭大刀・馬具 —」『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』
10：pp.67-89

桃崎祐輔 2005c「七支刀の金象嵌銘技術にみる中国尚方の影響」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.131-192

桃崎祐輔 2008「江田船山古墳遺物群の年代をめぐる予察」『王権と武器と信仰』同成社：pp.287-312

森 浩一 1977「高松塚古墳の大刀の刀身について」『古代学研究』84 古代学研究会：pp.42

森 浩一 1994「武器・武具に古代の戦闘をさぐる」『考古学と古代日本』中央公論社：pp.565-600

森 幸彦 2005a「古墳時代象嵌資料の研究復元制作」の企画」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.1-7

森 幸彦 2005b「福島県内出土の象嵌資料」『文化財と技術』4 工芸文化研究所：pp.32-45

森下章司・高橋克壽・吉井秀夫 1995「鴨稲荷山古墳出土遺物の調査」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室：
pp.49-72

森嶋 稔 1980「刃関ぎわの孔」『しなのろじい』100 千曲川水系古代文化研究所：pp.51-56

森 泰通 2008「屈曲型目釘をもつ鉾について」『井上1号墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書30：pp.48-52

門田誠一 1988「古代加耶の戦士」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV：pp.497-517

門田誠一 2000「装飾古墳の画題からみた地域間交渉の一側面 — 熊本県広浦古墳の石棺に表わされた親子大刀 —」『鷹陵史学』26 鷹陵
史学会：pp.245-264

門田誠一 2006a「古墳出土の曲げられた鉄器について — 同志社大学所蔵西山2号墳出土鉄剣の観察から —」『佛教大学文学部論集』
90：pp.51-62

門田誠一 2006b「高句麗古墳壁画における鎧馬図考 — 鎧馬騎乗人士の階層的位置づけをめぐる —」『鷹陵史学』32 鷹陵史学会：
pp.27-52

門田誠一 2006c「加耶地域墳墓における副葬鉄矛についての基礎的考察」『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社：pp.267-282

ヤ

- 八木光則 1996「蕨手刀の変遷と性格」『考古学の諸相 — 坂詰秀一先生還暦記念論文集 —』pp.375-396
- 八木光則 2003「7・8世紀鉄刀の画期と地域性」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会：pp.43-56
- 八木光則 2010『古代蝦夷社会の成立』同成社
- 八木光則編 1993『蕨手刀集成』（第1版）文化財資料集1 盛岡市教育委員会文化財調査室
- 八木光則・藤村茂克編 2003『蕨手刀集成』（第3版）文化財資料集3 盛岡市文化財研究会
- 安中哲徳 2013「武器・武具」『若狭と越の古墳時代』季刊考古学・別冊19 雄山閣：pp.97-104
- 柳澤清一 2011a『北方考古学の新展開 火山灰・蕨手刀をめぐる通説編年の見直しと精密化』六一書房
- 柳澤清一 2011b「新北方編年案とB-Tm火山灰から見た蕨手刀の副葬年代 青苗砂丘遺跡から目梨泊遺跡・モヨロ貝塚へ」『古代』126
早稲田大学考古学会：pp.151-189
- 柳田敏司 1964「秩父市大野原出土の蕨手刀」『埼玉考古』2 埼玉考古学会：pp.7-9
- 柳田敏司・金井塚良一・原島礼二編 1980『鉄剣を出した国』学生社
- 柳本照男 2000「弥生時代終末期から古墳時代前期の武器・武具の様相」『古代武器研究』1 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.44-48
- 山内紀嗣 1988「天理参考館所蔵の鉄地銀象嵌頭椎柄頭」『天理参考館報』創刊号 天理大学付属天理参考館：pp.21-25
- 山内紀嗣 1990「天理参考館所蔵の金銅装頭椎大刀」『天理参考館報』3 天理大学付属天理参考館：pp.44-47
- 山内紀嗣 1992「天理参考館所蔵の金銅装銀頭大刀」『天理参考館報』5 天理大学付属天理参考館：pp.118-122
- 山内紀嗣 1993「狐塚古墳（岐阜県笠原町）と銀頭柄頭」『天理参考館報』6 天理大学付属天理参考館：pp.23-28
- 山内紀嗣 1995a「出土木製刀剣装具について」『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団：pp.394-398
- 山内紀嗣 1995b「天理参考館所蔵単鳳の銀頭柄頭」『天理参考館報』8 天理大学付属天理参考館：pp.61-64
- 山内紀嗣 1998a「天理参考館所蔵の圭頭大刀」『天理参考館報』11 天理大学付属天理参考館：pp.85-90
- 山内紀嗣 1998b「天理参考館蔵の円頭大刀」『高崎市史研究』9 高崎市
- 山内紀嗣 2000「不審な単鳳銀頭大刀」『天理参考館報』13 天理大学付属天理参考館：pp.67-70
- 山内紀嗣 2002「双龍銀頭柄頭の真贋」『天理参考館報』15 天理大学付属天理参考館：pp.101-108
- 山内紀嗣 2003a「木製装具からみた大刀生産」『鉄器研究の方向性を探る — 刀剣研究をケーススタディとして —』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所：pp.165-176
- 山内紀嗣 2003b「古墳時代の木製楔形柄装具」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会：pp.733-746
- 山内紀嗣 2010「古墳時代前期環頭大刀の柄木端めぐって」『東大寺山古墳の研究 — 初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究 —』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学付属天理参考館：pp.361-364
- 山岸公基 2006「吉備塚古墳出土三累環頭大刀刀身象嵌文様 — 神仙図像の日本における古例 —」『吉備塚古墳の調査』奈良教育大学：pp.15-16
- 山口信義 1990「付、長野A遺跡Ⅱ区出土の木装大刀柄頭」『上清水遺跡2』九州縦貫自動車道関係文化財調査報告書22 北九州市埋蔵文化財調査報告書91：pp.54-55
- 山口典子 2001「漢画像中に見る“蘭錡”図について」『古代武器研究』2 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室：pp.126-134
- 山田琴子・肥沼隆弘 2018「小鹿野町小鹿野小学校出土の鉄鉾について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』11 埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館：pp.51-60
- 山田琴子・瀧瀬芳之・荒木臣紀・宮田将寛 2017「將軍山古墳の新発見資料について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』10 埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館：pp.43-66
- 山田俊輔 2013「東京国立博物館所蔵の鹿角製刀剣装具」『東京国立博物館所蔵 骨角器集成2 — 鹿角製刀剣装具編 —』同成社：pp.87-

- 山田俊輔 2016「鹿角製刀剣装具の系譜」『日本考古学』42 日本考古学協会：pp.21-33
- 山田卓司・小村眞理 2016「挂甲残闕と大刀に用いられた有機質」『国宝 東大寺金銅鎮壇具 保存処理調査報告書』東大寺：pp.289-298
- 山手誠司 1977「古墳より発見された鉄矛の例」『地域相研究』2 地域相研究会：pp.15-17
- 山中由紀子 2007「銀象嵌門頭大刀」『伊賀の考古資料1』三重県埋蔵文化財センター研究紀要16-3：pp.56-58
- 山中良平 2018「前期古墳の副葬品と武器」『武器からみた古墳時代の播磨』第18回播磨考古学研究集会実行委員会：pp.13-19
- 山之内志郎 2011「道後平野西部出土の鉄製武器・武具」『遺跡』45 遺跡発行会：pp.26-36
- 山本ジェームズ 2009「鉄刀」『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳 史跡整備事業報告書 第2分冊 遺物・分析・考察編』高崎市文化財調査報告書231(2)：pp.157-166

ヨ

- 横須賀倫達 2014「武者塚古墳出土品の語るもの」『武者塚古墳とその時代』上高津貝塚ふるさと歴史の広場：pp.62-64
- 横須賀倫達 2017「双葉町清戸旭8号横穴出土遺物の研究Ⅱ 象嵌装頭椎大刀、鉄斧」『福島考古』59 福島県考古学会
- 横田義章 1978「田川市セストノ古墳出土鉄製品の保存修復処置」『九州歴史資料館 研究論集』4：pp.101-105
- 横田義章 1982「5世紀代古墳出土刀装具の例」『九州歴史資料館 研究論集』8：pp.119-129
- 横田義章 1984「古墳時代の象嵌文様 — 九州の諸例紹介を中心に —」『九州歴史資料館 研究論集』10：pp.83-93
- 横田義章 1986a「圭頭と頭椎 — 柄頭の取り付けと柄作り手順 —」『九州歴史資料館 研究論集』11：pp.111-116
- 横田義章 1986b「銀象眼の柄頭について」『鬼塚古墳群』広川町文化財調査報告書5：pp.25-27
- 横田義章 1993「古墳時代の銀象嵌二例」『九州歴史資料館 研究論集』18：pp.55-60
- 横田健一 1985「上代における武器の分与について」『末永先生米壽記念獻呈論文集 乾』末永先生米寿記念会：pp.1-14
- 吉田 寛 1991a「刀装具の銀象嵌装飾文様について」『上ノ原横穴墓群Ⅱ』大分県教育委員会：pp.415-418
- 吉田 寛 1991b「51号横穴墓出土の圭頭大刀とその佩用金具について」『上ノ原横穴墓群Ⅱ』大分県教育委員会：pp.419-420
- 吉澤則男 2002a「魚佩について」『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書48：pp.154-159
- 吉澤則男 2002b「大刀について」『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書48：pp.160-167
- 吉松優希 2016「山口県域における古墳時代の港 — 装飾付大刀をもとにして —」『Archaeo-Clio』13 東京学芸大学考古学研究室：pp.45-63
- 吉松優希 2017「山口県萩市円光寺古墳の出土遺物」『Archaeo-Clio』14 東京学芸大学アーキオ・クレイオ刊行会：pp.79-89
- 吉松優希 2018a「愛媛県松山市（旧温泉郡久米村）出土単鳳頭柄頭」『國學院大學博物館研究報告』34：pp.37-43
- 吉松優希 2018b「愛媛県域における装飾付大刀の諸例」『Archaeo-Clio』15 東京学芸大学アーキオ・クレイオ刊行会：pp.61-71
- 吉松優希 2019a「西部瀬戸内・九州地域における装飾付大刀の展開 — 古墳時代後期を中心として —」『Archaeo-Clio』16 東京学芸大学アーキオ・クレイオ刊行会：pp.23-49
- 吉松優希 2019b「島根県域出土の象嵌装大刀の諸様相」『島根考古学会誌』36 島根考古学会：pp.31-48
- 吉村和昭 2012「被葬者像の検討」『「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』宮崎県えびの市教育委員会：pp.21-26
- 依田香桃美・鈴木 勉 1997「古墳時代の刀装具の金工技術から見た古代の人々の感性について — 大刀装具金工技術者の技術を支える感性 —」『精密工学会大会学術講演会講演論文集』1997(2)：pp.547
- 依田香桃美・山田 琢・伊東哲恵 2001「かわらけ谷横穴墓出土品・金銅装双龍環頭大刀の刀装具について」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書10 島根県教育委員会：pp.93-124
- 米山雲外 1986「蔵手刀について」『刀剣美術』355 日本美術刀剣保存協会：pp.2-13
- 米山雲外 1987「再び 蔵手刀について」『刀剣美術』361 日本美術刀剣保存協会

ラ

- ライアン・ジョセフ 2017「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』212 古代学研究会：pp.21-40
- ライアン・ジョセフ 2018「蕨手状装飾付鉄剣の広域分布とその意義」『待兼山考古学論集Ⅲ — 大阪大学考古学研究室30周年記念論集 —』大阪大学考古学友の会：pp.169-182
- ライアン・ジョセフ 2019「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相 — 吉備地域を中心に —」『日本考古学』49 日本考古学協会：pp.23-44
- ライアン・ジョセフ 2019「近畿・中四国における鉄製武器の普及と防衛集落」『第16回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室：pp.55-78

ワ

- 若狭 徹 2019「東国首長の地域経営と装飾付大刀の意義」『刀剣が語る古代国家誕生』第4回古代歴史文化講演会資料集 古代歴史文化協議会：pp.9-16
- 若杉竜太 2005「三輪玉」『朝日天神山古墳群』日田市埋蔵文化財発掘調査報告書60：pp.139-142
- 若林勝邦 1903「我国古代ノ直刀ニ施セル装飾及ビ彫刻」『国華』155
- 和田一之輔 2019「埴輪の大刀と剣」『考古学雑誌』102-1 日本考古学会：pp.46-76
- 和田伸哉 2009「房総地域における古墳時代後期から終末期の直刀の流通 — 千葉県印西市道作古墳群出土の直刀をめぐって —」『扶桑田村晃一先生喜寿記念論文集 — 青山考古第25・26号合併号 —』青山考古学会・田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会：pp.105-131
- 和田伸哉 2015「福島県内における板鍔付鉄刀の流通 — 八幡横穴墓群、郭内横穴墓群、跡見塚古墳出土例を起点に —」『福島県文化財センター白河館 研究紀要2014』pp.13-20
- 渡瀬健太 2018「武器からみた古墳時代中期の播磨」『武器からみた古墳時代の播磨』第18回播磨考古学研究集会実行委員会：pp.21-35
- 渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子」『古代学研究』185 古代学研究会：pp.21-37
- 渡部光太郎 2017「群馬県内古墳出土直刀に関する基礎的研究」『Archaeo-Clio』14 東京学芸大学アーキオ・クレイオ刊行会：pp.69-78
- 渡邊妙子 2006「日本刀成立過程解明の現状と課題」『北の出土刀を科学する — 最新科学と考古学からみた刀剣文化史への道程 —』pp.168-186
- 渡辺智恵美 1992「神戸市立博物館所蔵頭椎大刀の保存処理」『神戸市立博物館 研究紀要』9：pp.25-33
- 渡辺康弘 1986「古代刀子の拵について」『史観』115 早稲田大学史学会：pp.34-46

韓国語文献

- 具滋奉 1989「伝清州新鳳洞出土素環頭大刀紹介」『清州大学校博物館報』3
- 具滋奉 1994「鬼環頭大刀へ対する考察」『裊鍾茂総長退任記念史学論叢』裊鍾茂総長退任記念史学論叢刊行委員会
- 具滋奉 1995「環頭大刀の分類と名称に対する考察」『嶺南考古学』17 嶺南考古学会：pp.69-95
- 具滋奉 1998「環頭大刀の図像について」『韓国上古史学報』27 韓国上古史学会：pp.139-181
- 具滋奉 1998「三葉環頭大刀について」『科技考古研究』4 亞洲大学校博物館：pp.69-96
- 具滋奉 2001「Ⅲ-1号墳出土の方頭大刀について」『昌寧桂城新羅高塚群』慶南考古学研究所：pp.452-463
- 具滋奉 2009「北東アジアの環頭大刀と高句麗」『高句麗の登場とその周辺』東北亜歴史財団研究叢書50 東北亜歴史財団
- 国立公州博物館 2015『韓国の古代象嵌』
- 国立大邱博物館 2007『特別展 韓国の刀』
- 金古植 1994「三國時代鐵鉾の變遷 — 百濟系鐵鉾の認識 —」『百濟研究』24 忠南大学校百濟研究所：pp.51-77

- 金吉植 2006 「武寧王の環頭大刀」に対する討論『武寧王陵発掘35周年記念新報告書発刊のための武寧王陵学術大会』国立公州博物館：pp.127-130
- 金洛中 2001 「5～6世紀の榮山江流域における古墳の性格 — 羅州新村里9号墳・伏岩里3号墳を中心に —」『朝鮮学報』179 朝鮮学会：pp.181-236
- 金洛中 2006 「6世紀榮山江流域の裝飾付大刀と倭」『羅州伏岩里3号墳と榮山江流域の古墳文化』国立羅州文化財研究所：pp.57-103
- 金洛中 2007 「6世紀榮山江流域の裝飾付大刀と倭」『榮山江流域古代文化の成立と発展』学研文化社：pp.123-209
- 金洛中 2014 「加耶系環頭大刀と百濟」『百濟文化』50 公州大学校百濟文化研究所：pp.231-260
- 金跳咏 2011 「大加耶龍鳳文環頭大刀外環の製作方法と復元実験」『慶北大学校考古人類学科30周年記念 考古学論叢』慶北大学校考古人類学科30周年記念考古学論叢刊行委員会：pp.703-717
- 金跳咏 2014 「三国時代龍鳳文環頭大刀の系譜と技術伝播」『中央考古研究』14 中央文化財研究院：pp.89-127
- 金昌鎬 1990 「韓半島出土の有銘龍文環頭大刀」『伽耶通信』19・20 伽耶通信編輯部：pp.9-18
- 金宇大 2011 「製作技法を中心にみた百濟・加耶の裝飾大刀」『嶺南考古学』59 嶺南考古学会：pp.75-109
- 朴敬道 2002 「百濟の裝飾付大刀」『日本所在百濟文化財調査報告書Ⅲ — 近畿地方 —』国立公州博物館研究叢書14 国立公州博物館：pp.147-163
- 朴敬道 2007 「三国時代百濟・新羅・加耶の裝飾大刀」『特別展 韓国の刀』国立大邱博物館：pp.136-147
- 朴長植・李晟準 2003 「鷄足山城出土鉄製大刀製作に適用された技術体系研究」『百濟研究』37 忠南大学校百濟研究所：pp.81-101
- 李殷昌 1991 「武器のもつ問題」『昌寧桂城里古墳群 学術調査報告(9) — 桂南1・4号墳 —』嶺南大学校博物館：pp.260-261
- 李漢祥 1997 「裝飾大刀の下賜に反映された5～6世紀新羅の地方支配」『軍史』35 国防部軍史編纂委員会：pp.1-37
- 李漢祥 2004 「三国時代環頭大刀の製作と所有方式」『韓国古代史研究』36 韓国古代史学会：pp.257-285
- 李漢祥 2006a 「裝飾大刀からみた百濟と加耶の交流」『百濟研究』43 忠南大学校百濟研究所：pp.61-83
- 李漢祥 2006b 「漢城百濟裝飾大刀の製作技法」『4～5世紀百濟遺物特別展 漢城から熊津へ』国立公州博物館：pp.166-170
- 李漢祥 2006c 「武寧王の環頭大刀」『武寧王陵発掘35周年記念新報告書発刊のための武寧王陵学術大会』国立公州博物館：pp.116-126
- 李漢祥 2006d 「武寧王の環頭大刀」『武寧王陵出土遺物分析報告書Ⅱ』国立公州博物館：pp.10-49
- 李漢祥 2006e 「伽耶の裝飾大刀の変遷と画期」『古代武器研究』7 古代武器研究会：pp.58-69
- 李漢祥 2010 「大加耶の成長と龍鳳紋大刀文化」『新羅史学報』18 新羅史学会：pp.319-353
- 李漢祥 2012 「百濟大刀の環頭走龍文検討」『考古学探求』12 考古学探求会：pp.21-39
- 李漢祥 2013 「陝川玉田35号墳龍鳳文大刀の金工技法と文様」『考古学探究』13 考古学探求会
- 李漢祥 2014 「陝川玉田M3号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」『考古学探求』14 考古学探求会：pp.15-33
- 李熙濬 2002 「4～5世紀新羅古墳被葬者の服飾品着装定型」『韓国考古学報』47 韓国考古学会：pp.63-92
- 李賢珠 2007 「三国時代鉄製大刀に関する考察」『博物館研究論集』12 釜山博物館：pp.75-99
- 趙榮濟 1992 「新羅と加耶の武器・武具 — 龍鳳文大刀と三累環頭大刀 —」『韓国古代史論叢』3 韓国古代社会研究所：pp.137-178

中国語文献

- 耿鉄華 1993 「高句麗兵器所論」『遼海文物学刊』93年2期 《遼海文物学刊》編集部：pp.100-111

あとがき

本論の執筆にあたっては、主査である福岡大学人文学部教授 桃崎祐輔先生、副査である同 武末純一先生のご指導を賜り、審査と口頭試問にあたっては、同 西谷正浩先生にも副査の労をとっていただきました。

さらに、福岡大学名誉教授 小田富士雄先生、日頃から物心両面で支えていただいている穴沢味光先生はじめ、岡安光彦、宇野慎敏、田中晋作、宮代栄一、大谷晃二、内山敏行、鈴木一有、橋本達也、大谷宏治、金宇大、初村武寛、田中祐樹、平林大樹、神啓崇の諸氏、諸先生からも多くのご教示を受けました。

桃崎先生とは2004年8月の福大オープンキャンパスで知りあい、翌年の入学以来、基礎講読、考古学方法論、演習、博物館実習、卒業論文、修士論文、そしてこの博士論文の提出にいたるまでの15年間、一貫してご指導いただきました。ただ、私にとってはそうしたカリキュラム上の講義や単位よりもむしろ、研究室外での調査や資料見学をつうじて学んだ研究の機微や哲学、そして愉しさ—— 検出直後の馬具着装馬殉葬土坑の見学や新羅王陵の巡見、2週間連日登頂した後の中世山岳寺院での石造物実測、朽ち果てた金属製品を資料化する過程で体感した迫力—— のほうが、強烈な記憶や骨肉として残っています。

毎年度はじめに輪読する辛辣な「論文の書き方」に多くを学び、いまでは趣味となったデジタル図版の基本も、入学直後の空き時間に教わった、ハサミとペーパーボンド、定規、電卓を使ったアナログ式です。東日本の研究へたいする憧憬も、畿内中心主義への反骨も、他人への忖度や迎合は物事の衰退しか生まないという「他人の言うことは信じるな」精神も、すべては、夜なべで大量の馬具や銅鏡の実測図を切り貼りしてゆく桃崎先生の版組作業を眺めるなかで養われたものです。本論第5章のうち皇南大塚南墳の鉄鉾にかんする記述にいたっては、二人で赴いた博士課程前期修了記念慶州旅行のレポートです。本論提出前最後に受けたご指導が2019年8月のオープンキャンパスの日の夜となったことにも、深い感慨を覚えます。

もちろん、その初期には「原稿一本につき20回書き直し」など辛い思い出も多くありますが、そうして培った方法論を実践、練磨する場として、宮地嶽古墳出土巨大頭椎大刀の復元制作や九州国立博物館『馬—— アジアを駆けた二千年 ——』展示図録の編集、金鈴塚古墳、賤機山古墳、元岡G-6号墳、善一田古墳群出土品の報告、最近では古代歴史文化協議会「古墳時代の刀剣類」のオブザーバーなどにたずさわれたことは、武器や馬具を研究する者にとって無上の喜びであり、本論の執筆にあたってもこれらの経験や成果を盛りこむように努めました。次頁に記す諸氏、諸機関にも、貴重な文献や実測図をはじめとする情報収集、資料調査などにおいて格別のご高配を賜りました。お世話になった日本全国の皆さんに心よりお礼申しあげます。

私はいま、さまざまな研究不正があいつぐなか、博士論文の執筆をつうじてこれまで見逃されてきた知見を得たことを嬉しく思います。フィールドに立ち、現物の資料と向きあいながら地域の歴史を描く姿勢こそが福大考古学の理念の実践であり、かつ人文科学がなしうる究極の社会貢献の姿であると信じるからです。

2008年末に提出した卒業論文の末尾を、「古墳時代の鉄刀とは何か？」という問いに対しては、鉄刀の持つ様々な属性を総合的に分析し、副葬品組成の中に位置づけてはじめて答えが導かれる」と濁しました。あれから幾星霜。武器の研究から何がわかるのか、と問われれば、出土した遺跡の時期や所有者の階層、地域のなかでの役割、東アジア諸国や倭王権中枢部との政治的距離など、実に多くのことがわかって答えられるようになりました。その理由は、この間数千点の金属製品を観察し、そのうちおよそ千点は実測したからだと自負しますが、それでもまだまだ実測したい刀剣や馬具は数えきれません。これからも「研究なくして活用なし」の原則を肝に銘じながら、研究の旅路を歩みつづけたいと思います。ありがとうございました。

齊藤大輔

お世話になった皆さん

青木 弘 青笹基史 阿部悠理 天石夏実 網谷哲成 荒木隆宏 安藤 淳 安藤道由 飯島重一 池田 拓 池田征弘
諫早直人 石橋美和子 稲木章宏 稲葉昭智 稲村 繁 井上 賢 井 英明 今井智恵 岩橋由季 岩原 剛 岩満 聡
岩本 崇 上田 恵 上田龍児 上野祥史 内田 実 宇野慎敏 江上智恵 江上正高 遠藤啓介 大塚紀宜 大森真衣子
大谷昌良 岡田 倫 小川泰樹 尾崎源太郎 甲斐孝司 樫村拓男 樫村友延 片岡宏司 片多雅樹 河内一浩 河野一隆
川述昭人 神田高士 菊地芳朗 城戸 誠 木下博文 木村龍生 草場啓一 久住猛雄 楠本正士 熊代昌之 栗林誠治
小嶋 篤 小松 譲 齋藤糸子 阪口英毅 坂本豊治 坂本雄介 佐藤 弘 佐藤夕香 佐藤 渉 澤田秀実 重藤輝行
嶋田光一 清水邦彦 新谷武夫 神野晋作 進村真之 末継彬子 菅原雄一 杉本和江 鈴木 勉 清家 章 高田貫太
田上浩司 瀧瀬芳之 竹田宏司 田子森千子 田代健治 田村 悟 田中 暁 田中聡一 田中裕介 田中 裕 田邊朋宏
玉川剛司 谷口文隆 田村隆太郎 谷畑美帆 千葉隆司 塚本敏夫 辻 宗廣 寺前直人 利根川章彦 豊島直博
辻田淳一郎 土屋隆史 富田尚夫 友廣美和 永井孝宏 長江真和 中久保辰夫 中島直樹 長瀬治義 永田裕久 長友 信
中西 信 長安 慧 中山清隆 西垣彰博 西嶋剛広 橋本英将 畑地ひとみ 原 俊一 伴 祐子 比佐陽一郎 日高 慎
兵谷有利 平尾和久 平ノ内幸治 平ノ内武史 深澤太郎 福島日出海 福島雅儀 福永伸哉 福永清治 福本 寛
藤村 翔 古谷 毅 穂積裕昌 松浦宇哲 松尾尚哉 松尾充晶 松園菜穂 松本岩雄 松本太郎 三浦茂三郎 水野敏典
光本 順 南 時夫 美濃口紀子 村瀬 陸 村田裕一 持田大輔 森下靖士 八木健一郎 矢島敬之 安平勝利 安村俊史
山口裕平 山崎頼人 山下啓之 山中英彦 山本一伸 吉松優希 ライアン・ジョセフ 和田明弘 [敬称略・五十音順]

資料収蔵機関

福 島 | いわき市考古資料館 **茨 城** | 鹿嶋市どきどきセンター かすみがうら市歴史博物館 筑西市教育委員会
栃 木 | 足利市郷土資料展示室 **群 馬** | 高崎市観音塚考古資料館 玉村町歴史資料館
千 葉 | 市川市立市川考古博物館 木更津市郷土博物館金のすず 芝山はにわ博物館 **東 京** | 國學院大學付属博物館
神奈川 | 広沢寺（厚木市） 長福寺（南足柄市） 三浦市教育委員会 横須賀市自然・人文博物館
石 川 | 能美市博物館 **岐 阜** | 川合考古資料館 **静 岡** | 静岡市文化財資料館 静岡市埋蔵文化財センター
愛 知 | 豊橋市文化財センター **三 重** | 名張市郷土資料館 **滋 賀** | 野洲市銅鐸博物館
大 阪 | 大阪大学考古学研究室 柏原市立歴史資料館 交野市立歴史民俗資料展示室
兵 庫 | 小野市立好古館 多可町那珂ふれあい館 兵庫県立考古博物館 **奈 良** | 奈良県立橿原考古学研究所
島 根 | 出雲市弥生の森博物館 島根県立八雲立つ風土記の丘 松江市教育委員会
岡 山 | 赤磐市山陽郷土資料館 岡山大学考古学研究室 **広 島** | 福山市しんいち歴史民俗資料館
山 口 | 平生町歴史民俗資料館 **香 川** | さぬき市歴史民俗資料館 善通寺市教育委員会
愛 媛 | 愛媛県歴史文化博物館 松山市考古館
福 岡 | 甘木歴史資料館 飯塚市歴史資料館 宇美町歴史民俗資料館 大野城心のふるさと館 大野城市教育委員会
小郡市埋蔵文化財センター 粕屋町歴史資料館 嘉麻市碓井平和記念館 九州国立博物館 九州歴史資料館
鞍手町歴史博物館 久留米市埋蔵文化財センター 古賀市歴史資料館 桂川町王塚装飾古墳館
篠栗町歴史民俗資料館 新宮町立歴史資料館 須恵町歴史民俗資料館 田川市石炭・歴史博物館
筑紫野市歴史博物館 那珂川市教育委員会 直方市教育委員会 久山町教育委員会 広川町古墳公園資料館
福岡教育大学 福岡県立糸島高等学校郷土博物館 福岡市埋蔵文化財センター 福津市教育委員会
宗像市海の道むなかた館 八女市岩戸山歴史文化交流館いわいの郷 行橋市歴史民俗資料館 吉富町教育委員会
佐 賀 | 佐賀市文化財資料室 **長 崎** | 壱岐市立一支国博物館
熊 本 | あさぎり町教育委員会 熊本県立装飾古墳館 熊本市博物館 玉名市歴史博物館 多良木町埋蔵文化財等センター
大 分 | 臼杵市文化財管理センター 竹田市文化財管理センター 別府大学附属博物館 **宮 崎** | 宮崎市生目の杜遊古館